

異世界行ったら最強の  
魔術師だった。でも本  
当は……。

nya0000000n

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

橋の下で拾われ、孤児院で育つ主人公。

世界に絶望した翌日、気づけば異世界にいた。

異世界転移の理由を探す旅をして。

自分を知り、世界を救う。

そんな物語です。

<全108話>

起： 1 ～ 19話

承： 20 ～ 57話

転： 58～ 84話（物語の種明かし： 79～ 83話）

結： 85～109話

ヒロインその1登場：第30話

ヒロインその2登場：第41話

# 目次

## 旅立ち編

異世界転移

決意

ニーナとの出会い

ニーナ視点

半年間の経過と、この世界について

79

村での生活と、魔術の勉強

ニーナとの買い物

ニーナの誕生日①

ニーナの誕生日②

ニーナの誕生日③

134

125

113

102

91

58

40

21

1

告白イベント①

ニーナの初級魔術

初級魔術習得

悩み

旅行①

旅行②

決心

前夜

旅立ち

## アバロン編

ユリヤンとの出会い

アバロン到着

冒険者になる

284

269

253

244

231

225

213

199

187

174

162

149

初クエスト	293
クエスト報酬と今後の目標	302
ランクアップ祝い	308
D級クエスト	314
C級冒険者になる	325
ユリヤンとの再会	332
C級クエスト	341
クリスとの出会い	356
クリスとの食事	366
クリスの事情①	377
前哨戦	388
反省会	398
クリスの事情②	405

対キマイラ戦	418
クリスマス視点	433
祝勝会	439
魔術学院	452
入学	463
エミリーとの出会い	470
エミリーとの勉強	481
デートの誘い	490
エミリーとの狩り	501
エミリーの事情①	514
学年末試験	525
魔術についての疑問	534
飲み会①	544

飲み会②	555
中級魔術習得	566
中級魔術習得記念パーティー	576
図書館探索	591
今後の方針①	604
エミリーの実家	614
エミリーの事情②	628
エミリー視点	643
パーティー結成	657
エルフの里編	
出発	672
トリアノンへの道中	681
トリアノン	694

冒険開始	704
森の中の冒険①	714
森の中の冒険②	723
森の中の冒険③	731
森の中の冒険④	739
森の中の冒険⑤	758
森の中の冒険⑥	768
エルフの里	779
目覚め	790
長老の話	807
今後の方針②	831
エルフの村の一日	839
告白イベント②	852

告白イベント③

870

魔法都市ヴィルガイア編

帰郷

890

今後の方針③

907

小旅行

915

廃墟

923

魔法都市ヴィルガイア①

936

魔法都市ヴィルガイア②

944

魔法都市ヴィルガイア③

962

魔法都市ヴィルガイア④

970

魔法都市ヴィルガイア⑤

980

過去を知って

1001

魔族の話①

1010

魔導書

1037

エルフの里にて

1048

女子会 三角関係について

1064

訪問

1079

返事

1097

魔族の話②

1111

エミリーとのデート①

1115

エミリーとのデート②

1124

エミリーとのデート③

1138

クリスとのデート①

1148

クリスとのデート②

1157

クリスとのデート③

1167

おさげで眼鏡の女の子

1187

襲来

力

ユリヤンの懸念

魔族の話③

襲来②

戦争①

戦争②

戦争③

戦争④

戦争⑤

それから

13371327131412941267125212361230122212031193

## 旅立ち編

### 異世界転移

目覚めると、そこは異世界だった。

は？

いや……え？

どういう事？

呆然としつつ、周囲を見渡す。

見慣れた古い時計、壁にかかるカレンダー、寝心地の悪い布団。

そんな物は景色から一切なくなつて。

眼に入るのは薄汚れた瓦礫、森、空。

どういう事だ？

何なんだこれは？

極度に混乱した頭には、何故だか、自分の半生が映し出された。

思い出せる最初の記憶。

それは、孤児院で泣いてる自分。

何故泣いているのかは、思い出せない。

大抵は、少し年上の悪ガキのせいだ。

俺は昔から髪や瞳の色素が薄く、肌も白かった。

髪はほとんど茶髪に見える。

そんなことが、悪ガキ達の関心を集めた理由のようだった。

食事に虫を入れられたり。

羽交い絞めにされて殴られたり。

そんなことが、日常茶飯事だった。

初めは抵抗していた。

しかしやがて、抵抗こそが暴力を助長するのだと気がついた。

それからは、ただひたすら息を潜めて生活した。

つらく、苦しい日々だったが、なんとか耐え凌いだ。

じりじり、じりじりと時は過ぎ。

歳が10を数える頃から、少しずつ嫌がらせはなくなっていくた。

後遺症が残るようなケガがなかったことは、幸いだったと思う。

12歳になり、中学生になった。

俺は、ひたすら他人の目を避けて生きるようになっていた。

それまでの経験から、目立つとロクなことがないと感じていた。

しかし。

そんな性格を変えたいと思った。

なんで自分は、岩陰に隠れる虫のようにコソコソと生きているのか。

もつと、堂々と生きていきたかった。

もつと、自分に自信を持ちたかった。

悩んだ結果、一大決心をして。

俺はサッカー部に入った。

部活初日。

心臓がドキドキしていた。

思えば未来に対して前向きになったのは、あの時が生まれて初めてだった気がする。しかしそこでも、俺は馴染めなかった。

茶色の髪はよほど悪意ある視線を絡めとってしまいうらしい。

入部したその日から、上級生に目をつけられた。

すれ違いざまに腹を殴られて嘲笑されたり。

練習中にサッカーボールをぶつけられたり。

すぐに、そんな扱いを受けるようになった。

友達も、できなかった。

上級生に目をつけられている俺と、積極的に関わろうとする物好きはいなかった。

自分から話しかけてみても、ダメだった。

皆、当たり障りないことを言って会話を切り上げてしまった。

恐らく皆、厄介ごとに巻き込まれたくなかったのだろう。

……部活がダメならクラスで友達を作ろう。

そう思った時もあった。

しかし、それもダメだった。

部活で上級生にいじめられていることが広まっているのか。

それとも茶色の髪のせいなのか。

話しかけてみても、誰一人として、休み時間に一緒に遊ぶような存在はできなかった。結果として、昼食は一人で食べ、休み時間は外を眺めて過ごした。

学校以外の時間は、とにかくサッカーボールを蹴っていた。

まあそれでも、以前の生活よりはマシだった。

身の危険を感じるような暴力にさらされることはなくなったからだ。

そのまま時は過ぎ、2年生になり、夏の大会が終わった。

——すると、変化があった。

1つ目の変化は、俺をいじめていた先輩達が引退したことだ。

つまり、部内では俺の学年が最上級生となった。

それだけで、部内の空気が明らかに変わった。

例えば標的の代表が俺だっただけで、他の同級生も大なり小なり被害をこうむっていたのだろう。

直接的ではないにせよ、目をつけられないように振る舞うことにはストレスがあったに違いない。

上級生がいなくなったとたん、皆がいきいきとして見えた。

2つ目は、サッカーが上手くなったこと。

気づけば部内で、俺が一番上手くなっていった。

この1年半、平日も休日もひたすらボールを蹴っていたのだ。

孤児院の近くの公園で、夜も練習した。

雨の日も風の日も、常にボールを蹴っていた。

それ以外の行動はほとんどしなかった。

他にやることがなかったせいもあるが。

俺にとって、日々の楽しみは練習だけだった。

自分が少しずつ上達していることを自覚できる。

その喜びだけが日々の救いだった。

そして、ひとりでボールを蹴っている間だけは、他の全てを忘れられた。

結果として、俺は小学生からサッカーをしていたやつらもまとめ、ごぼう抜きにしていた。

すると徐々に。

俺は部内で一目置かれるようになった。

組織的なプレーは難ありだったが、個人技では他を圧倒できるようになっていた。

そんな、ある日の練習後。

帰り支度をしていると、同級生の1人が話しかけてきた。

「……田中君、最近めっちゃくちゃ上手くなったよね。」

秘密の特訓でもしてるの？」

少し茶化すように。

そいつは言った。

人に話しかけられたのはいつぶりだったか。

心臓が跳ねるように鳴り。

背中に妙な汗をかいた。

「……別に。いつも公園でボール蹴ってるだけだよ」

俺は内心の動揺を全力で隠し。

冷静に聞こえるように答えた。

声は、ややうわずって鼓膜に響いた。

「そうなんだ。すごいね。僕なんて部活だけでへとへとだよ。

……あ、知らないかもしれないから一応言っとくと、僕、佐藤ね。佐藤良太」  
名前は知っていた。

さすがに、部内の同級生の名前くらいは覚えていた。

その後、校門を出て別れるまで20分ほど、佐藤との会話は続いた。

内容はとりとめもないことで。

少しずつ寒くなってきたとか、

どのサッカー選手が好きだとか、

ウザい教師がいるとか、そんなことだ。

しかしそのやりとりは。

俺がこの世に生まれてから交わしたどの会話よりも、長かった。

佐藤と別れた後、俺はふわふわした足取りで孤児院へと帰った。

初めて、同級生と一緒に下校した。

それは大抵の人間は経験したことがある、何でもないことだろう。

だがそれが、俺にとつては、とてつもなく嬉しいことだった。

孤児院で夕食を食べるとき、手が震えて箸を持たないほどだった。

その日は興奮して眠れず、孤児院を抜け出して夜遅くまでボールを蹴った。

それから、佐藤とよく一緒に帰るようになった。

練習中も話すようになった。

佐藤と話していると他のやつらも会話に混じってきて、多人数で話すこともあった。

それは、楽しかった。

本当に楽しかった。

まるで、自分の心の材質が、まるつきり変わってしまったかのようなだった。

ずっと石のように硬く重苦しかった胸の内が、些細なことでゴム鞠のように弾んむようになつた。

自分から話すことも多くなつたし、笑うことも多くなつた。

それはプレーにも表れ、苦手だった組織的なプレーも、問題なく行えるようになっていった。

しかし、俺は。

心の片隅に、小さな違和感を感じていた。

しかし、それを無視して日々を過ごした。

「……田中の胸のところ、気になってたんだけどそれ、刺青？」

ある日の部活終わり。

着替えている時に佐藤に聞かれた。

そう。

俺の胸の真ん中には、異様な形をした痣がある。

六芒星のように見える痣だ。

よく見れば何か文字のようなものが書いてるようにも見える。

かなり正確な円と直線が肌から浮いて見え、正直自分にも刺青にしか見えない。

物心ついたときには既にある、いじめの格好の理由になった。

もしかしたら、両親のどちらかがこれを描いたのかもしれないと思っていた。

成長しても我が子だと分かるように。

「いや、わからない。俺の知る限り昔からあったんだ。」

……へえ、とやや引きながら佐藤は答えた。

心の片隅にわずかな波紋が広がった。

「もしかしたら、田中の両親が目印に描いたのかもね。

自分の息子だつてわかるように。」

いつか、ひよっこり迎えに来るかもよ？」

痣について、佐藤も同じことを考えたらしい。

俺は昔、橋の下に捨てられていたそうさ。

通行人が発見して警察に届け、親を探したが見つからず。

行く当てのない俺は孤児院に預けられた。

田中 一はじめという名前も、孤児院の院長がつけたものだ。

今考えると流石に適當すぎやしないか、院長。悪い人ではないが。

「……かもしれないな」

そう答えながら、俺は一切期待をしていなかった。

むしろ、会いたくないとさえ思っていた。

会ってしまつと、俺の中に存在するあらゆるマイナスの感情が、標的を見つけたことで溢れ出してくるかもしれない。そんな気がした。そしてそんなストレスは御免だつた。

「帰ろう」

着替えを終えた俺は言った。

佐藤は無言で頷いて、他の部員たちに目配せをして部室を後にした。

外に出ると暗くなつていて、星が出ていた。

月を探したが、見あたらなかつた。

いつしか、春になっていた。

中学生活最後の年だ。

俺はエースストライカーとして、部内で確固たる地位を築いていた。

部内で唯一、県選抜に選ばれトレセンで指導を受けた。

シュートを決めるとグラウンドの隅で黄色い声があがるようになった。

フアンクラブというのができたらしい。

二次性徴を経て、俺の容姿はシュートを決めればかつこよく見える程度には出来上がったようだ。

後輩からは教えを請われ、クラスメイトからも声をかけられるようになった。

充実した毎日だ。

充実した毎日のはずだ。

しかし日を追うごとに、違和感が大きくなっていった。

片隅にわずかに存在するだけだったそれは。

徐々にはつきりと形を成し、色や感触、立体感をもつて心の中を占有するようになった。  
た。

もう、無視できない大きさになっていた。

——そして、夏の大会が始まった。

チームは順調に勝ち進み、開校以来最高の戦績である、県ベスト4まで駒を進めた。  
全国への切符を賭けた試合。

多くの生徒、父兄が応援に来た。

相手は去年の優勝校。

実力差は明白だが、こちらにも勢いがあった。

白熱した試合は1対1の接戦になり、終盤にさしかかる。

相手のコーナーキック。高い放物線を描くボールが、俺の方に向かってきた。

マークはいるが簡単なクリアーだ。

ペナルティエリアには敵が多い。

シュートされると万一がある。

ボールは外に出そう。

とつさに、そう判断した。

俺はジャンプし、頭を振った。

額にボールが当たるとの衝撃。

その感触が――。

頭の角度と、ボールの軌道、回転が、最悪のバランスで成り立っている感触がした。そのボールは、キーパーの伸ばした手をすり抜けて、ゴールネットを揺らした。

オウンゴールだった。

――頭の中が真っ白になった。

しでかした事の重大さは、誰より理解していた。

この1点はとてつもなく重い。

喜ぶ相手チーム。

こちらサイドの観客席は通夜みたいに静まっている。

チームメイトの顔は見れない。

しかし、このまま沈んでいても敗北は明らかだ。

時間は刻一刻と過ぎていく。

何とか、何とかしなければ。

そう思い、俺は声を上げた。

「みんな、ごめん！ 本当にごめん！

でも、まだ時間はある！

取り返すから！

俺が絶対取り返すから！

だから、俺にボールを——」

顔を上げ、チームメイトの顔を見たその瞬間。

俺は絶句した。

俺に対して、皆が一樣に向けるその表情。

そこに仲間意識など、欠片も存在しなかった。

その眼が映していたものは。

嫌悪と。

排斥と。

制裁。

……ただ、それだけだった。

ずっと心の内にあつた違和感が急激に膨張し、俺の心を埋め尽くした。

そして、その感情をはつきりと自覚した。

それは、絶望だった。

本当はわかっていた。

去年の夏、3年生が抜けて戦力が落ちたチームに、俺の得点力が必要だったこと。でも俺は明らかに、周囲とコミュニケーションがとれてなかった。

状況を把握した監督が佐藤に声をかけて、俺を輪に加えるように指示したこと。皆が俺がいないところで、俺の生い立ちや境遇を馬鹿にして笑っていたこと。

俺の性格も、誰からも好かれてはいないこと。

本当は全部、わかっていた。

見えてないふりをしていただけだ。

誰も、俺を好きじゃない。

好意的な視線をくれた女子だって、俺を好きなわけじゃない。

俺の外見が気に入っただけだ。

監督も、同級生も、後輩も、プレイヤーとしての俺の能力を必要としただけ。

俺自身を好きな人間なんて、どこにもいない。

仲間が欲しかった。

心の底から信頼し合える仲間が。

もつと時間をかければ。

もつとチームに貢献すれば。

皆と分かりあえて、本当の仲間になれるんじゃないか。

どこかでそんな風に思っていた。

愚かだった。

土台が腐っているのに、その上に何かを作ろうたって、無理な話だ。

そしてその日。

目を逸らしていた現実を、まざまざと見せつけられた。

それからのことは、よく覚えていない。

道で大声で話す誰かが言うには。

俺はオウンゴールの後、ピッチに立ち尽くして動かなかったため、引きずられるようにして交代したそうだ。

試合は追加点を決められ、3対1で負けた。

翌日、引退式と記念の紅白戦があったが、俺は行かなかった。

登校すると、周囲の人がこちらを見てヒソヒソと話していた。

指をさしたり、笑ったりする人もいた。

誰も話しかけてはこなかった。

もう、何もかもがどうしてもよくなった。

俺が望むものは、一生手に入らない。

そう思った。

放課後、自販機でコーヒーを買い、公園で飲んだ。

いつも練習をしていた公園だ。

普段なら部活をしている時間だから、この時間に来るのは初めてだ。

まだ日も出ている、雑多な賑わいがある。

その日は俺の、15歳の誕生日だった。

誕生日といっても、俺が橋の下で発見された日付をそう呼んでいるだけだが。

木陰でシートを広げて団らんでいる家族が目に入った。

男の子が手の中の蝶を自慢げに見せ、両親が微笑んでいる。

——不意に、涙が出てきた。

とめどなく溢れてくる。

なんで泣いているのか、自分でも分からなかった。

しかし止めようとして歯を食いしばっても、全く効果がなかった。

近くを通る人が、こちらを見てくる。

目立たないように、俺は膝に顔をうずめて泣いた。

涙が出なくなった頃には、あたりは暗くなっていた。

俺は孤児院に帰り、夕食を食べ、シャワーを浴び、布団に入った。

いつものように、誰とも話すことはなかった。

……こんな世界、なくなってしまうばい。

そう思った。

そして。

目覚めると、俺は瓦礫の山に囲まれていた。

走馬灯というのは過去の記憶から今の自分に有用な何かを探すために出現するらしいが、俺の場合は全く役に立たなかった。

なくなってしまうばい、なんて思ったが、本当になくなるとは。

しかしまあ、おそらくこれは夢だろう。

さつきから頬をつねったり叩いたりしてみても痛いだけで、一向に目覚める気配はな

いが。

周りの砂とか石とか触ってみたら、とてもリアルだ。

石を投げたら瓦礫に当たって、カンツと乾いた音がした。

俺は長袖のTシャツにジャージという恰好で、昨日寝たときのままだ。

夢にしては芸が細かいな、と思った。

しかし体感時間にして30分ほどが経ち、そろそろ飽きてきた。

こんな夢は初めてだが、まあ、所詮は夢だ。

何か行動したほうが、面白い夢も見られるだろう。

適当にそう考え、俺は瓦礫の山を歩いてみることにした。

## 決意

歩けど歩けど、瓦礫の山だった。

尖ったものを踏まないように、気をつけて歩く。

一応なんとなく、遠くに見える森で一番高い樹を目指してみた。

瓦礫の中には、たまに興味を引く物があった。

錆びた西洋風の剣、盾、何かの生き物の骨、車輪、椅子、などなど。

人の頭蓋骨にしか見えないものもあった。

猿とかかもしれないが。

2時間ほど歩いたら。

瓦礫が終わって、道に出た。

レンガを敷き詰められた道だ。

それは、遙か遠くまで続いていた。

やや疲労を感じた。Tシャツは汗でべたついている。

「……………ふう」

一息ついて、レンガ道の横の芝生に寝転んだ。  
いい天気だ。

日差しは柔らかく、汗ばんだシャツを風が通り抜けると、熱が奪われて心地良い。  
近くに見たことのない虫が何匹か這っていた。

カナブンみたいな形だが、背中にトゲがある上に、ピンクと黒の縞模様だ。

不思議な世界観の夢だ。

自分の想像力に驚いた。

しばらく休憩した後、俺はまた歩き出した。

せつかく道があるので、その上を歩いてみる。

どこかにつながっているのかもしれない。

道はひたすら続いていた。

2時間は歩いた気がするが、一向に途絶える気配はない。

見える景色もほとんど変わらない。

周囲は森で囲まれ、少しひらけたところに道が続いている。

太陽(?)の位置が、徐々に低くなってきた。

時刻は1時か、2時くらいか。

喉が渴いた。

腹も減った。

しかし一向に、目覚める気配はない。

もしかして……夢じゃないのだろうか？

——いやいや、まさか。

浮かんだ疑念を、すぐさま振り払う。

もしも夢じゃないとすれば。

今の俺は相当に危険な状況だ。

生きるためには水と食料が不可欠なのは言うまでもない。

現状、そのどちらも手に入る見込みはないだろう。

その上、ここがどこなのかも分からない。

危険な生物がいるかもしれない。

そもそも、人間がいるのかも分からない。

仮に人間がいたって、俺に好意的だとは限らない。

俺は俺がここにいる理由を、何一つ説明できないのだ。

不審に思われて敵意を向けられる可能性の方が、よっぽど高いだろう。

さすがにこの状況、夢に決まってる。

覚めてしまえば、またあの灰色の毎日が続く。

今歩いているのは、それまでの退屈しのぎでしかないのだ。

これが現実であるわけがない。

景色を眺めながら、ぼんやりと歩いた。

ただただ、歩く。

歩き続ける。

しかし目が覚めることはなく、日が落ち続けるばかりだ。

……おかしい。

さすがにおかしい。

なぜ、目が覚めない。

もうしばらくしたら、日が沈みそうだ。

体感時間で言えば、10時間は経過している。

空腹も限界に近い。

記憶に残る夢というのは何度も見たことがある。

だが、こんなことは初めてだ。

これまでの夢なら、こんなに腹が減ったり疲れたりすることはなかった。

それに、土を踏む感触、森を抜ける風の音、日に照らされた草の匂い。

そのどれもが、すさまじくリアルだ。

もしかして、本当に、夢じゃないのだろうか。

そんな考えが、再度頭をよぎった。

——こんな状況で。

俺は少しワクワクし始めていた。

もし。

もしこれが現実なら。

あの世界とはオサラバしたということだ。

結局のところ、敵意と暴力しか得るものはなく。

失意と疎外感しか感じることでできなかつた、あの世界とは。

ここで餓死する可能性も高い。

しかし、あの世界に帰ったところで、灰色の生活を送るだけだ。

ろくでもない2択だが、なんだかこのまま歩き続ける方が、あの世界で生きる事より

もマシな選択肢に思えた。

もしも、これが現実で。

生き延びることができたなら。

……この世界で、生を謳歌してやろう。

今度こそ、誰かの役に立ちたい。

そして今度こそ、手に入れたい。

——打算なしの友情を。

——掛け値なしの愛情を。

——俺が生きている意味を。

……それまで、死んでたまるか。

ひたすらに歩いたら、日が暮れる前に小川を見つけたことができた。

川底は透き通っており、傍目には綺麗そうだ。

かがんで水に手を触れると、冷たくて心地良い。

いてもたってもいられず、水を掬って飲んだ。

——美味しい。

美味しさがヤバい。

干からびた細胞の1つ1つが潤っていくのを感じた。

寄生虫などの不安はあったが、このままでは飲まなくてもどうせ死んでしまうだろう。

俺は、満足いくまで水を飲んだ。

そして、顔を上げると。

辺りは橙色に包まれていた。

来た道の遙か向こうの山の稜線上に、日が隠れ始めている。

黄昏時というやつか。

「きれいだ……」

思わず呟いた。

夕焼けによって空は紅く染まり、向かい合う空には星が出ている。

景色は橙色の光で柔らかく満たされ、森の木々に長い陰影が宿り。

耳に入るのは小川のせせらぎと虫の声だけ。

まるでその光景は。

これまでの俺の人生にようやく与えられた、報いのような気がした。

あまりの美しさにその場で立ち尽くしてしまった。

これほど心を打つ光景に出会ったことはない。

この景色を見られただけでも、歩いた甲斐はあったと思った。

しばらくそのままぼんやりしていたら、だんだんと辺りが暗くなってきた。

——夜がくる。

そんな言葉が頭に浮かんで、ハッとした。

水にありつくことに精いっぱい、夜への対策など考えてなかった。

対策といつても、思いつくのは火をつけることくらいだが。

まだ物が見えるうちに、火を起こす努力をするべきか。

孤児院の食堂のテレビで見たとつは、板に枝をこすり合わせて火をつけていた。

それを思い出して適当に枝を拾ってみたものの、板がない。

その辺の木から作れなくはないかもしれないが、水分を含んで無理だろう。

そもそも乾いた板があつたところで、火をつけられる自信などない。

考えて虚しくなってきた。

水は飲めたが腹は相変わらずペコペコだ。

もう動くのも疲れた。

これ以上行動できる気力がない。

俺は葉っぱを集めて、即席の布団を作った。

潜るとチクチクしたが、ないよりはましだ。

その間に、周囲は完全な闇と化した。

何も見えない。

迂闊に動く川に落ちそうなくらいだ。

そして――。

空を見上げると、満天の星空だった。

空腹は耐え難かったが、その光景に俺は自由を感じた。

このまま眠って、目が覚めたら。

もしかしたら、もとの世界に戻ってしまうのかもしれない。

そう考えて、残念に思った。

この世界にいたいと思った。

もし明日になっても、この世界にいたなら。

ここが、俺の現実だ。

その覚悟を持って、瞼を閉じた。

すぐに溜まっていた疲労が襲ってきて、俺はあつという間に眠りに落ちた。

眩しさを感じて、目が覚めた。

果たして、俺は土の上で、木の枝に覆われていた。

見えるのは空と森。

——夢ではなかった。

現実だ。

これが、俺の現実。

「うおおおおおおおおおつー！」

叫んだ。

問題は山積みなのに、何故か全てが些細なことに思えた。

不思議な全能感が体中を満たしていた。

やってやる。

この世界で、全力で生きてやる。

そう、胸に誓った。

起きてから小川で顔を洗い、水を飲んだ。

少し上流まで登ってみたが、魚はいそうになかった。

空腹はひどいが、まだ動ける。

ただ現状は、非常にピンチだ。

この場での判断によって、死ぬこともあり得る。

むしろその可能性が高いくらいだ。

慎重に考えて、行動を決めることにする。

選択肢は3つ。

1つ目は、このまま道を歩くこと。

2つ目は、ここで水を確保しつつ、誰かが通るのを待つこと。

3つ目は、川を下り、水を確保できる状態を保ちつつ、移動すること。

悩んだ結果。

俺は1つ目を選んだ。

2つ目は食べ物が入らないことが確定してしまっており、ギリ貧な印象だ。

昨日、丸一日歩いて誰も見かけなかったのだ。

誰かが偶然通りかかる可能性は低いだろう。

3つ目は、川を下った先に何かがある可能性は低い気がする。

それに、俺は裸足だ。

悪路でケガをして感染症でも起こしたら、その時点で人生が終了してしまう。

ゆえに、1つ目。

こんな舗装された道があるということは、やはりどこかに繋がっている可能性が高いと思う。

この世界がなんであれ、この道は必ず、誰かがどこかへ行くために作ったものなのだ。それに勝る行動の指針はなかった。

結局方針は昨日と変わらず、俺は道を歩くことにした。

水の携帯はできなかった。

都合のいい容器は全く見当たらず、とにかくできるだけたくさん飲んで、俺はその場を離れた。

3時間ほど歩いたろうか。

空腹がひどい。

昨日の朝から、何も食べていないのだ。

体内の糖分は枯渇して、貯蔵された蛋白と脂肪からエネルギーを生み出していることを実感する。

覚悟していたが、かなりきつい。

全部投げ出して、座り込んでしまいたい。

一歩一歩、気をすり減らすように歩いていると。

——目の前に、ウサギが現れた。

何の冗談かと思った。

唐突に現れたのだ。

森からピョコピョコと道に出てきた。

のんきな顔をしている。

いやよく見ると頭に角があつて、ウサギとは呼べないのかもしれない。

そんなことはどうでもいい。

それが幻覚でないと理解した瞬間、俺はそいつに飛びついた。

サッカーで鍛えた瞬発力。

信頼するその脚は、しかし長時間の飢餓によって錆びついてしまっていた。

脚はもつれ、身体は容易くバランスを失い、俺は転倒した。

……ウサギはびくつと身を震わせ、森へ逃げて行った。

それから2時間、さらに歩いた。

悔しくて涙が出た。

しかし貴重な水分を無駄してはならない。

出た涙は舐めながら歩いた。

まあ、少なくとも、動物がいることは分かった。

しかし森に入つて探しても、この体力では捕まえられない。

そのことを学習した。

……学習したのだ。

相変わらず、空腹は危険水域にある。

そのうえ、喉も乾いてきた。

景色はあまり変わらない。森ばかりだ。

さらに道がやや登り坂になってきて、非常に苦しい。

その時、鳥の一群が頭上を横切った。

鳥はこちらに来てから何度か見たが、あんなに多いのは初めてだ。

白と黒のしましま模様、くちばしが黄色の鳥。

10羽以上いる。

目で追うと、そいつらは全員、森の中の1本の木に停まったようだった。

ピーチクパーチクと、やかましく木を揺らしている。

ここからそう遠くない。

しかしその木に向かつても、どうせ捕まえられやしない。

無駄に体力を使うのがオチだ。

ついさつき、学んだのだ。

そう思つてそのまま歩いて行こうとした。

しかし、俺は脚を踏み出せなかつた。

何か引つかかるものがあつた。

あれだけ多くの鳥が一様に同じ場所に向かうのだ。

……巢。

巢があるんじゃないか？

そして巢があるのなら、卵と、ヒナも、いるんじゃないか？

その閃きに、電流が走つた。

もつれる脚を踏ん張りながら、俺はその木へと向かつた。

たどり着いた俺は喜んだが、しかしそこに期待していた巢があつたわけではなかつた。

あつたのは、赤い実をつけた木だつた。

5本程まとまって生えている。

鳥どもはピーククパークク鳴きながら、その実を食っている。

地面にたくさん落ちているその実の中で、きれいなやつを選んでかじってみた。

(……うめえええええ！)

甘酸っぱい味が口の中に広がる。

トマトとリンゴを足して2で割ったような味だ。

めちやくちやうまい。

水分も多量に含んでいて、喉も潤う。最高だ。

少々予定とは違ったが、食べ物を手に入れることができた。

地面に落ちた綺麗なやつを食べつくしたあとは、木に登り、鳥どもを蹴散らしながら

その実を食った。

少しつつかれた。

仕返しに捕まえようとしてみたものの、残念ながらたやすく逃げられた。

満足するまで食った後。

少し休んだら、体力はかなり回復した。

Tシャツを脱いで中に実を入れ、袖を結び、襟と胴の穴を塞ぐように持つ。

そうすると10個ほど持ち運ぶことができた。

これではしばらく飢餓には耐えられそうだ。

そこからしばらく歩くと、森が途絶えた。

ずっと道の両脇にあつた森がなくなり。

前方に、膝丈くらいの草で覆われた丘が出てきた。

道はその丘の頂上へ続いている。

状況の変化を新鮮に感じながら、そのまま歩いた。

丘の頂上に着くと、一気に景色が広がった。

もともといた場所が高かったのか、気づかぬうちに登つたのか、俺は結構高い場所にいた。

来た方には森が広がっている。

そして――。

向かう先に、村が見えた。

端から端まで見渡せるくらいの小さな村だ。

人口は200人くらいだろうか。

畑と果樹園が大半を占めていて、その間に建物がぽつぽつと見える。

家畜小屋っぽい建物や、広場なんかもある。

畑で作業をしている人もいれば、広場で遊んでる子どももいる。

村の入り口には、大きな門があつた。

……ついに。

人がいるところにたどり着けた。

挫けずに歩いてきてよかつた。

今日中には着けそうだ。

2日間歩きつばなしで疲労困憊ではあるが、目的地さえあればきつと耐えられる。

なんだか急に腹が減ってきて、Tシャツに包んだ木の実を、村を眺めながら全て食べてしまった。

Tシャツを着なおして。

そのまま道を歩いていくと、分かれ道にあつた。

今まで歩いてきたレンガの道と分岐して、人が踏んでできたような、獣道のような道がある。

そこだけ草が生えていないことから道だと分かるような、レンガ道よりも整備されていない道だ。

そしてそっちの道が、村の方向へ向かっているようだった。

確かにさつき丘の上で村を見たときに、周りにレンガの道はなかった。

ここが分岐点なのだろう。

レンガの道は、どこか他の場所へ繋がっているようだ。

少し考えて、俺は獣道の方を歩くことにした。

## ニーナとの出会い

獣道は、途切れることなく続いていた。

カーブを加えることで、丘をなだらかに下ることができるようになっていく。

おかげで、足取りは実にスムーズだ。

周りには草と、ところどころに大きな岩があるだけ。

日差しは柔らかく。

腹もほどほどに膨れていて。

目的地まであと少し。

これまでの旅路で、一番コンディションがよかった。

そんな時。

「――」

突然、叫び声が聞こえた。

すぐに途切れたが、おそらく間違いない。

女の悲鳴だ。

すぐに声の聞こえた方を探すと。

遠くの草むらで、金髪の少女が男に馬乗りになされていた。

俺は反射的に駆け出した。

獣道を外れて、急斜面を走り抜ける。

サツカー部で鍛えた両脚。

それは今度こそ、その力を発揮することができた。

転ばないように踏ん張りながらも最速で脚を回転させ、とにかく急いでその場所へと向かう。

……近づくにつれ、状況が見えてきた。

男の手にはナイフがある。

少女はこのわずかな時間で、口に猿轡を噛まされ、両腕を後ろ手に縛られていた。

13—4歳くらいだろうか。

必死で両脚をばたつかせて抵抗している。

しかし男にマウントをとられ、為すすべがない。

少女の衣服の胸元を、男がナイフで裂いた。

そのまま肩を露出させ、襟口を裏返す。

少女の上半身が露わになる。

男はナイフを口に咥えた後。

はめていた手袋をはずし、少女の胸へと手を伸ばした。

——少女は顔を歪め、ぎゅつと眼をつぶった。

「やめろッ!!」

後ろから、男に体当たりした。

不意をつかれた男は攻撃をもちろに喰らい、坂を3メートルほど転がった。

啜っていたナイフは宙を舞い、近くの草葉に落ちる。

俺はそれを素早く拾い上げ、男に向けた。

「はっ、はっ、ぜっ、はっ」

息切れがひどい。

全力で走ってきたことを悟られなくなかったが、息切れは止められなかった。

どうする。

男にまだ武器があつたら。

戦闘に対して、何か訓練をしていたら。

俺は殺されて、結局少女は慰み者になる。

男が態勢を整えていない今のうちだ。

追撃してナイフで刺すんだ。早く。

……そう思ったが、俺の身体は動かなかった。

「ぜっ、ぜっ、はっ、はっ」

俺の息切れの音だけが辺りに響く。

男はすぐに立ち上がると。

こちらを見ながらじりじりと距離をとった。

よく見ると、右腕が垂れ下がって、動いていない。

もしかして、俺のタツクルで負傷したのだろうか。

俺は少女の前に立ち。

ナイフを掲げて、男を睨み続けた。

男は少しずつあとずさりし、5メートルほど離れた時。

くるりと背を向け、坂を駆け下りていった。

「はっ、はっ、逃げ、たっ?」

しばらく男を目で追ったが、かなり離れてから丘の裏側に移動したため、見えなくなつた。

どうやら本当に逃げたようだ。

「……………よかつたあ」

ほつとした脚がガクガク震えてきて、その場にへたり込んだ。

無我夢中だった。

一歩間違えれば死んでいたかもしれない。  
運が良かった。

「はあ……」

ため息がでた。

だいぶ日も落ちてきた。早めに村にいかないといけない。

脚の疲労が限界に近い。村まで持つだろうか。

風が通り過ぎ、草がざあつと音を立てた。

耳を澄ますと、虫の鳴き声も聞こえる。

そして。

それらに混じって、近くでうーうーと声が聞こえた。

……忘れてた。

「大丈夫？」

声をかけると、少女はあとずさりした。

俺を警戒しているようだ。

でも逃げないのは、俺によってひとまず自分が救われたのだということを理解しているのか。

それとも手を縛られた上に猿轡では、逃げても同じ目に合うと思ったのか。

俺は露わになっていて少女の上半身から目をそらしつつ。

猿轡と手の拘束をナイフで切って、自分のTシャツを渡した。

女の子の裸に興味はあるが、流石にこのタイミングで欲情できるほど節操がないわけではない。

……が、見えてしまうものは見えてしまう。年相応の小さな胸だった。

少女はおとなしく、されるがままにしていた。

Tシャツを渡すと不思議そうにそれを見たが、俺が着ていたのを思い出してから、Tシャツに袖を通した。

その時、少女の瞳に少し安堵の色が宿ったように見えた。

少女が、初めて言葉を発した。

短い言葉だったが、全然理解できなかつた。

俺は首をかしげる。

少女はきよんとしていた。

「さらしにしゃべりはじめたが、まるで理解できない。」

「おおよそ聞いたことのない言葉だ。」

「いめん。」

「君の言ってることは、全然分らない」

「当然、その言葉も少女には通じず、その後何度も話しかけてきた。」

「しかし俺が分からないというジエスチャーを繰り返すと、やがて諦めたように首を振り。」

「ニーナ」

「少女は自分を指さしながら言った。」

「ニー、ナ」

「赤ん坊に教えるかのように、言葉を繰り返す。」

「どうやら少女の名前のようだ。」

「俺が頷くと、今度はこちらを指さした。」

「ああ、えーと、一だ。田中 一」

「は、じ、め、と俺も繰り返した。」

「ニーナはファーストネームだろうから、一でいいだろう。きっと。」

それを聞いたニーナはパツと笑って、言った。

「ハジメー！」

それは、天真爛漫という言葉がよく似合うような、屈託のない笑顔だった。なんだかドギマギしてしまう自分が情けない。

だが仕方ないだろう。

俺は女の子とともに会話したことなどないのだ。

しかし、ニーナはどこへ行こうとしているのだろうか。

もうそろそろ日も暮れそうだし。

あんなのがいるような世界で、女の子の一人旅なんて正気の沙汰じゃない。

そんなことを考えていると。

ニーナは草むらからバッグを拾ってきた。

女物のデザインっぽい。

恐らく襲われたときに落とした、彼女の物なのだろう。

「？」

ニーナがまた、何事かを俺に向かって言った。

が、全く分からない。

すると俺の腕をつかんで。

ぐいぐいと引つ張つて歩き始めた。

「わっ、なんだ？」

ニーナは俺の疑問には答えず、ずんずん進んでいく。されるがままに歩いていくと、岩があつた。

ニーナはその上に登り、俺にも来るようにジエスチャー。

わけもわからないが、俺も登つてみる。

すると、そこからは村が見えた。

ニーナは村と自分を交互に指さし。

その後俺を指さして、首を傾げる。

その動作から察するに。

多分、ニーナの目的地はあの村なのだろう。

そこに俺も誘つてくれている……のか？

俺も自分を指さして、村を指さし、ウンウンと頷いてみた。

するとニーナもウンウンと頷いた。

どうやら当たっていたらしい。

俺とニーナは、一緒に獣道を歩くことにした。

村に着いたのは、日暮れ前だった。

もう少しで夜になるところだった。

途中からニーナが焦り始め、2人で小走りになった。

丘の上から見た大きな門。

それが夕焼けに照らされ、大きな影を作っていた。

ニーナは急ぎ足で、門をくぐって村の中へと入っていく。

俺はどうしたものかと逡巡していると、ニーナが振り返って何か言いながら手招きしていた。

少しためらったが、結局。

俺も門をくぐり、村へと足を踏み入れた。

10分ほど歩くと、建物にたどり着いた。

木でできた家。

周りの家と変わらない、この村において普通らしい家。

どうやらそこが、ニーナの家らしい。

ニーナは家の前で立ち止まると。

俺を指さしたあと、地面を指さした。

「ここにいろ」ということだろう。

俺が頷くと、ニーナは中に入っただけだった。

その後しばらく、ニーナは戻ってこなかった。

手持ち無沙汰になる。

なんだか、流されるままにここまで来てしまった。

……これでいいのだろうか？

まあトラブルなく村に入れて、俺としては僥倖だが。

とりあえず、ニーナから敵意は感じない。

言葉の通じない俺に、何度もコミュニケーションをとろうとしてくれたし、たまに笑顔も見せてくれた。

彼女がここにいろと言うなら、ここで待とう。

悪いようにはならない。

そんな気がする。

もしニーナと出会わなかったら、どうなっていたらうか。

俺ひとりでは、追ひ払われるのがオチだった気がする。

言葉の通じない怪しい奴が突然現れて、歓待してくれるとは考えにくい。

そうなたら、食い物がなくて死んでしまっていたらう。

……もとの世界ならば。

どんなことがあっても流石に、餓死するような事はなかった。

例え法を犯したとしても、刑務所で飯は食べられる。

どんな時でも、最低限の衣食住の保証があり、安全だった。

しかしあの世界に戻りたいとは、不思議なほどに思わない。

あそこに戻れば、簡単に食べ物にありつけるし、シャワーも浴びられるし、清潔な布  
団で眠ることだってできるだろう。

もう少し年を取れば、金も稼げる。

そうすればもつと、自由度は高くなる。

普通なら、何も分からない今よりも、そっちの方が断然いいのだろう。

……だが。

俺にとつては。

それらは重要じゃないのかもしれない。

俺は多分、人と心を通わせたいのだと思う。

あの世界ではできなかった。

また戻っても、きっとできない。

何故だかは分からないが、確信がある。

じゃあ、この世界でなら、可能なのか？

分からない。

ただ、こちらに来てから、なんとなく気分が晴れやかだ。

飢えて、疲れて、殺されるかとも思っただ。

大変な目にあつたが、以前ほどの絶望は感じない。

それが何故なのかは分からないが。

ここで死ぬなら本望とすら思える。

そもそもなんで俺がこの世界にやってきたのかも謎のままだが。

とにかく、この世界で頑張ってみよう。

これまでとは、何かが変わるかもしれない。

そんなことを考えていると。

玄関から、ニーナが出てきた。

ちよいちよい、と手招きされる。

俺は玄関の扉を開け、中に入った。

ニーナは服を着替えていた。

白のワンピースだ。

カンテラを右手に持っていて、左手でTシャツを渡された。

俺がTシャツを着たのを確認して、廊下を進む。

左手の扉を開けると、そこはダイニングのようだった。

料理用のスペースの手前に、大きめのテーブルと、椅子が4つ。

奥の椅子に、壮齢の女性が掛けている。

そしてテーブルの上には、3人分の食事が用意されていた。

ニーナが俺を指して、女性に向かって何かを話した。

紹介してくれているのだろうか。

女性はこちらをじつと見る。

その眼は深い青色だ。

なんとなく目をそらしてはいけないう気がして、俺も女性の眼をじつと見つめた。

そのまま静止すること3秒間。

ふう、と一つため息をついて、女性は微笑んだ。

ニーナとよく似た、かわいらしい笑顔だった。

女性は何かをしゃべった後。

ゆっくり立ち上がり、俺に向かってお辞儀をした。

同時に、ニーナも俺に向かってお辞儀をしていた。

お礼の動作なのだろうか。

少し気恥ずかしい。

そのあと、ニーナは俺の手を引っ張り、食卓の椅子へと座らせた。

目の前には、美味しそうな食事が並んでいる。

3人分の食事は、女性と、ニーナと、俺の分だったらしい。

促されるままに、俺はそれを食べた。

それは、こちらに来てから初めてのまともな食事だった。

……そして、もしかしたら。

生まれて初めての、団らん、だったかもしれない。

ニーナはとても楽しそうに話し、女性も笑顔でその話に頷いていた。

たまに話題が俺のことになるのか。

ニーナが俺の方を指さし、何事かをしゃべっていた。

何を言っているのかはさっぱりだが、不思議と悪い気はしなかった。

食事の後、俺はニーナに手を引かれて、部屋に案内された。

8畳くらいの広さで、机と椅子、ベッド、本棚がある。  
立派な部屋だ。

ニーナはカンテラから部屋のランプに火を移した。

それから俺を置き去りにして、どこかへ行ってしまった。

まさか、ここに泊めてくれるのか？

いやまさか。

女性2人の暮らしだ。

俺みたいな怪しいやつを1つ屋根の下に置くものか。

ニーナはすぐに戻ってきた。

手には桶とタオル、それに洋服を抱えている。

それらを床に置き、自分の身体を拭く真似をした後、こちらにタオルを渡してきた。  
身体を拭けということか。

わかったと頷いたら、ニーナは部屋を出て行った。

指示された通り、濡れタオルで身体を拭く。

爽快感が半端じゃなかった。

一通り身体をキレイにした後。

ニーナが置いて行った洋服を見ると、男物の洋服だった。

麻のような素材でできたシャツとパンツ。

サイズは俺にぴったりだ。

……これは着てもいい、ということだろうか。

ありがたく着させてもらった。

Tシャツとジャージは、部屋の隅にたたんで置いた。

それから、ニーナは戻ってこなかった。

……マジでこの部屋を使っているのか？

聞きたいが、女性2人の家で探しに行くのもためらわれる。

しかもニーナを見つけても、伝えられる自信はない。

もういいか。

今日もなんだかんだあつてクタクタだ。

考えるのも疲れた。

こんな清潔なベッドを前にして、我慢などできるものか。  
俺は欲望のままに、ベッドに横になった。

……気持ちいい。

自然と顔がニヤける。

眼を閉じると、昨日にも増した強烈な睡魔が襲ってきた。  
ものの数分もしないうちに、俺は眠りについたのだった。

## 二一ナ視点

〈二一ナ視点〉

今日は。

私の人生の中で、一番衝撃的な1日だった。

こんなに恐ろしかったことも、

こんなに安堵したことも、

こんなに胸が躍ったことも、これまでの私の暮らしの中にはなかった。

本当に、衝撃的としか言いようがない。

事の始まりは、3日前。

お母さんが足にケガをしてしまったことだ。

子どもが転びそうになったのを支えて、右の足首を捻ってしまったらしい。

子どもの父親がウチに謝りに来て、お母さんは「気にしないで」って言った。

でも、お母さんの仕事は機織りだ。

ウチの裏で育てたカシルスの茎を、線維にして、糸にして、機織り機で織る。

機織り機は足でペダルを踏まなきゃいけない。

他の作業だつて立ったり座ったりがつきものだ。

足が痛かったら、ままならない。

この村には治癒術師はいない。

お母さんの足を診てもらうには、隣の街までいかないといけない。

でも、足が痛いから無理だ。

「ただの捻挫よ。半月もすれば良くなる。

大丈夫。少しくらい休んでも、どうつてことないわよ」

そう、お母さんは言った。

確かに、少しずつ腫れは引いてるみたいだった。

仕事はできないけど、そのくらいの蓄えはある。

でも1つ、決定的に困ったことがあった。

「お母さん、でも、もうすぐクレタの街に服を届けなきゃいけないよね？」

ウチは月末に、作った服を隣の街へと卸しているのだ。

今月卸す分は、ケガをする前に作り終わっていた。

来月の分は、街に行つたときに受注を減らせばいい。

いつもなら、お母さんと2人で、服を抱えて歩いていく。

服を卸した後、身軽になった身体で美味しいものを食べるのが恒例だ。

でも、ケガをしたお母さんは、街との往復はできない。受注した商品を納期までに卸せない、信用に関わる。

作った服も値下げさせられるだろう。

もしかしたら次から注文をもらえなくなっちゃうかもしれない。

そしたらまた、新しく受けてもらえるお店を探さなきゃならない。

相手の希望の服を把握したり。

どんな服を作るのか見せたり。

価格設定をしたり。

それはとても、大変なことだ。

「誰か、村の人に頼みましょう」

と、お母さんは言った。

2日後には服を届けなきゃいけない。

服を全部運ぶにはもう1人必要だ。

私だけじゃ、服を運びきれないのだ。

そしてそれだけが理由ではなく。

お母さんは、私が1人で村の外を歩くことを危ないと思ってるみたいだった。

それから、村の知り合いを何人かあたった。

が、なかなか都合が合わなかった。

お母さんが庇った子どもの両親にも聞いてみたけど、申し訳なさそうに断られた。

「私が出さなきゃケガもなかったんだから、このケガは私の責任だよ。」

だから、あの人たちを責めるのは、お門違いってものさ」

そう、お母さんは言っていた。

私はあんまり納得できなかった。

けど、その子が心配そうに両親を見ていて。

なんだか心が痛くなったから、とりあえず納得した。

そんな中、街に用事がある男の人が見つかった。

私たちはホッと胸をなでおろした。

しかしその人は街に泊まるから、帰りは一緒にはいられない、ということだった。

「……お母さん、私、大丈夫だよ。」

いつも通ってる道だもん。

森から魔物が出てきたことなんてないし、悪い人なんて見たことないよ。

そもそも、全然人がいないじゃない。」

私はそう言っつて、お母さんを説得した。

今まで何十回も、お母さんと隣の街へと服を届けた。

一度も危ない目にあつたことなんてなかった。

そして私はその時、ひとりりて村の外を歩くということに、ワクワクしていた。

「ばか。

人がいない方が危ないのよ。

助けを求められないんだから」

そう言つてお母さんは、服を届けるのを諦めるべきか悩んでいた。

結果として。

お母さんは折れた。

私の言うことにも、一理あつたのだ。

少なくともここ数年、あの道で盗賊や魔物に襲われたという話は聞いたことがない。

最終的には、お母さんもその考えを採用したらしい。

出かける前に、1本のナイフを持たされた。

「いいかい、危ないと思つたら使うんだよ」

そう言われて頷いたけど、使うわけがないと思つていた。

日の出とともに村を出た。

一緒に来てくれた男の人は力持ちで、服をほとんど持つてくれた。

いつもはお母さんと半分ずつくらいだから、楽だった。

街に着いたらいくつかのお店で服を卸して、お金を受け取った。

そのお金から男の人にお礼を渡して、その人と別れた。

順調だった。

スムーズに物事が進んだおかげで、街で楽しむ時間ができた。

入ったことのないパン屋さんで、昼食を食べてみた。

そのパンはとても美味しくて、お母さんへのおみやげをちよつと買ひすぎてしまった。

さらに、ケーキ屋さんに入った。

クリームがたっぷりに乗ったケーキを、私はペロリと平らげた。

なんでケーキというものは、あんなに無くなるのが早いんだろう。

あつという間に、帰らなければいけない時間になっていた。

街の喧騒に後ろ髪をひかれつつ、私は帰り道を歩き始めた。

その後も、特に何事もなかった。

いつものように、レンガでできた街道をしばらく歩いて。途中からは、土の道を歩いた。

しかし日が落ちるにつれて、だんだんと寂しい気持ちになってきた。早くお母さんに会いたい。

心配してゐるだろうな。

おみやげのパン、喜んでくれるかな。

そんなことを考えながら、歩いていた。

——その時。

急に、後ろから突き飛ばされた。

草むらに転がり。

何事かと思つて顔を上げると。

目の前に、ナイフを持った男がいた。

聞いたこともないような叫び声が、自分の口から出た。

男はすぐに私の口を手で塞ぎ、私の上に馬乗りになった。

気が動転して、無我夢中で手足をジタバタと動かしたが、全く効果はなかった。

その間に口の中に布を詰め込まれ。

その上からさらに布をあてがわれ、頭の後ろで縛られた。声が出せなくなつた。

パニックに陥る中で、ナイフのことを思い出した。すぐにバッグに手を伸ばす。

しかし、男にその腕を掴まれた。

「何か持ってるのか？」

男が言い、乱暴に私のバッグを奪うと、草むらに放り投げた。

私の唯一の希望が、潰えた。

男は馬乗りになつたまま私を反転させ、両腕を後ろ手に縛つた。

必死にもがくけれど、男の片腕の力に両腕でも全く敵わない。

結局はされるがままになつてしまう。

男が私の服の胸元を、ナイフで裂いた。

そのまま服をまくられて、上半身を裸にされてしまった。

男はナイフを口に咥え。

はめていた手袋をはずし、私の胸へと手を伸ばしてくる。

ぞつとした。

この後、自分を何が待ち受けているのか想像できない。

ただ男の顔がおぞましく。

その手が私に触れることで。

私を私でない何かに変えてしまうような気がした。

(助けて！ 誰か助けて！)

心の中でそう叫んだが、こんなところに助けなど来るわけがないのは分かっていた。

私は目の前の光景に耐えられず、ぎゅつと眼をつぶった。

「!!」

すると突然。

男の人の叫び声と、何か重たいものがぶつかると音がした。

同時に、お腹の上の重さがなくなった。

伸ばされた手が触れる感触もない。

恐る恐る目を開けると。

そこには、見知らぬ男の子が立っていた。

15歳くらいだろうか。見たことのない服を着ている。

息も絶え絶えで、汗びっしりだ。

それはまるで、全力で走ったあとみたいだった。

……まさか、全力で走ってきたの？

私を助けるために？

その疑問に答えを得る間もなく、状況は動いていく。

男の子はすばやくナイフを拾って、男に突き付けた。

男はというと、立ち上がり、あとずさりしていった。

よくみると右腕が垂れ下がって、動いていない。

男の子にぶつかつた時に、負傷したのだろうか。

その後、少しの間にらみ合つた後。

男は背を向け、坂を駆け下りていった。

しばらくその様子を見ていた男の子は、糸が切れたようにその場に座り込み、安堵す

るように何かをつぶやいた。

(……この人も、怖かつたんだ)

私と1つ2つしか歳が違わない男の子が、ナイフを持った相手に向かっていくなんて。  
とても、恐ろしかっただろう。

私にはできない。

風が通り過ぎ、草がざあつと音を立てた。

耳を澄ますと、虫の鳴き声も聞こえる。

私はお礼を言わなきゃと思って、声を出した。  
しかし口に突っ込まれた布のせいで、声にならなかった。

「？」

男の子は何かを言いながら、こちらへとやって来た。

命の危機を救われたおかげで忘れていたけど、私は今、上半身裸だ。

そのことを急に思い出し、後ずさりしてしまった。

男の子は私の方をできるだけ見ないようにながら、口の布と、腕の縄をナイフで切ってくれた。

さらに、自分が着ていた服を脱いで、私に渡してきた。

最初は行動の意図が分からなかった。

しかしすぐにその気遣いに気づいて、服を着させてもらった。

男の子の体温で暖かかった。

なんだか、急に安心することができた。

同時に、私の胸はドキドキと鳴り響いた。

「ありがとう」

口をついて出た。

男の子は、ぼかんとして、首をかしげた。

……あれ？

「あの、私はすぐそばの村に住んでる、ニーナと言います。

助けていただき、本当にありがとうございました。

お礼をしたのですが、あなたのお名前を教えてくださいませんか？」

これだけ言っても、男の子はきよとん顔のままだった。

「、————、————」

今度は男の子が何かを言った。

でも、私には全然分からない。

その後も何度も話しかけてみたが、一向に通じる気配はない。

言葉が通じないなんて、初めてだ。

どこか遠いところからやってきたのか。

でもそれにしては軽装というか、なんとというか、男の子は何も持ってない。

……しばらく考えて、私は理解することを諦めた。

「ニーナ」

自分を指さしながら言った。

「ニー、ナ」

ゆっくりと、言葉を繰り返す。

男の子が頷いた。

どうやら理解してもらえたみたいだ。

私は気になり、今度は彼を指してみる。

「」

最初はよく聞き取れなかった。

彼はもう一度口を開き、言った。

「ハ、ジ、メ」

やっと聞き取れた。

うれしくなって、私は繰り返した。

「ハジメ！」

彼は何故だか赤面して、眼をそらした。

「」

……とにかく、名前はわかった。

あとはお礼をしたいけど、どうしたらいいだろう。

そもそも。

彼はどこから来て。

何が目的で。

これから何をしたいのか。

何一つわからない。

しかし少なくとも、何も持っていないことはわかる。見ればわかる。

あの様子では、今日食べるものもないのではないだろうか。

そして今日寝るところも、ないような気がする。

彼が泊まれるようなところは、距離的に私の村くらいだろう。

村人で彼の知り合いだと思える人はいない。

……いや、私も村の人全員を把握しているわけじゃない。

もしかしたら、誰かの知り合いで、今日泊めてもらうことになってるのかも。

いやでも、手ぶらというのはおかしい。

どこかから逃げてきたのだろうか。

必死で逃げてきて、着の身着のまま、とにかく移動してきたとか。

でも、このあたりにそんな人を捕まえてるようなところなんてない。牢屋があるのはせいぜい隣の街くらい。

言葉が通じない人が捕まってるという話も、

逃げ出したという話も、

街では一切聞かなかった。

考えれば考えるほど、分からなかった。

草むらに落ちたバッグを拾い、彼に聞いてみた。

「あなたはどこに向かっているんですか？」

彼はお得意の、首をかしげるポーズだ。

まあ、伝わるとは思ってなかった。

仕方ないので、私は実力行使にでることにした。

彼の腕を引っ張って、大きな岩に登った。

彼にも一緒に登ってもらい、私の村を見せた。

なんとか身振り手振りで意思疎通を図ると、彼は頷いた。

どうやら、彼も目的地は私の村でいいようだ。

とりあえず、それが分かれば十分。

私たちは、一緒に村に向かって歩き始めた。

村に着いたのは、日暮れ前だった。

途中からあんまり時間がないことに気づいて、急いでやってきた。

村の門を見ると、ほっとした。

同時に、すぐくお母さんに会いたくなかった。

私は小走りで門を通り、家を目指す。

途中で、近くに彼がいないことに気づいた。

振り返ると、彼は村に入ることに逡巡してる様子だった。

やっぱり、村で泊まる約束をしてる人もいなさそうだ。

私は彼を呼んで、こちらに来るように手招きした。

彼はそれに従い、一緒に来てくれた。

私の家に着いた後、彼には玄関で待ってもらった。

ちよっと申し訳ないけど、仕方ない。

一緒に入ったら、お母さんはびっくりしてしまっただろう。

玄関を開け、台所に入ると、お母さんがいた。

料理を作ってる。

私が扉を開ける音に気づいて、振り返った。

「おかえり。

心配したよ。

大丈夫だった？」

いつもの、優しい声だった。

急に涙があふれてきて、私はお母さんに抱きついた。

お母さんは心配そうに、何があつたの、と聞いてきた。

私は泣きじやくつて、何も言えなかつた。

私が話すことができるようになったのは、しばらく経つてからだつた。

少しづつ、私は今日起こつたことを話した。

街から出るまでは順調だつたこと。

村まであとちよつとのところで、男に襲われたこと。

バッグを遠くに投げられてしまい、ナイフは使えなかつたこと。

もうダメだ、と思つたら、1人の男の子が身を挺して助けてくれたこと。

その男の子は、言葉が通じなくて、出身も行き先も、何一つ分からないこと。

でも、悪い人じゃないと思うこと。

その男の子にお礼がしたいと思つたこと。

多分その男の子は、今日寝る場所もないこと。

そしてできるならこの家に、泊めてあげたいと思っ

お母さんは優しく相槌をうちながら、話を聞いてくれた。

私が話し終わると、頷いた。

「分かったわ。」

あなたを助けてくれた、恩人だもの。

泊まっ

彼が望むなら、いつまでも。

どうせ、部屋も余ってることだしね。」

お母さんにはこつと笑って言った。

この家には余ってる部屋が1つある。

お父さんの部屋だ。

お父さんは冒険者をして

隣町でパーティーを組んでいて、魔物の生息地まで出かけて狩りをする。

ひと月くらい帰らないこともあったけど、帰った時にはた

その日も、いつもと同じように出かけて行って……帰ってこ

代わりにお父さんの仲間の人が家に訪ねてきて。

お父さんが魔物に襲われて死んでしまったことを、私たちに告げた。

もう、5年以上も前のことだ。

その時は大変だったけど。

私も幼かったし、時の流れによって記憶も曖昧になってきている。

「あなたが無事で、本当によかった。

ごめんね。

やっぱり1人で行かせるべきじゃなかったね」

お母さんはそう言うのと、私のことを抱きしめた。

少し声が涙ぐんだ。

私もお母さんを抱きしめ、少しの間、そうしていた。

やがて、お母さんは立ち上がって言った。

「さて、じゃあ料理を一人分、増やさなきやね。

もう少しかかるから、あなたはお部屋の掃除をお願い。

あと、その服を着替えてきなさい」

私は言われるがまま、お父さんの部屋を掃除して、服を着替えた。

服を着ようとしたとき、彼の着替えがないことに気づいた。

お父さんの服を引っ張り出してみたらちょうどよさそうだったので、彼にはそれを着

てもらったことにした。

そして、彼を家に招き入れた。

台所に入ってもらい、お母さんに紹介する。

お母さんは彼をじつと見ていた。

その時何を考えてるのかは、分からなかった。

その後、お母さんは彼にお礼を言つて、お辞儀をした。

私もそれに倣つてお辞儀をした。

彼はちよつと気恥ずかしそうにしていた。

それから、3人で食事した。

食卓には、私を買つてきたパンも並んだ。

いつもはお母さんと2人だから、にぎやかに感じた。

彼は、ちつともしやべらないけど。

食事の時、私は改めて、お母さんに今日あったことを話して聞かせた。

なんだか、話したくて仕方がなかった。

結局のところ。

私の今日の体験は、恐怖よりも、彼に助けられた時の興奮の方が上回っていた。

彼に助けられたくだりでは、私の話にも熱が入つて、彼のことを指さして話してしまつた。

彼は全然会話に加わられてなかったけど、楽しそうに見えた。私も楽しかった。

その後は、彼をお部屋に案内して、服と桶を渡して、自分の部屋に戻った。

「……ふう」

ため息をついて、ベッドに潜る。

改めて、今日のことを思い出された。

突き飛ばされたときは、何が起こったか分からなかった。

振り向いた時の男の顔。

服をナイフで裂かれたときの恐怖。

そして、私を助けてくれた、彼の姿。

息も絶え絶え、汗びっしょりだけど、そのまなざしは鋭かった。

全力で、私を守ろうとしてくれていた。

思い出すだけで、胸がどきどきした。

まるで、おとぎ話の王子様みたいだった。

——ありがとう。

心の中でもう一度呟き、私は眠りについた。

## 半年間の経過と、この世界について

〈ハジメ視点〉

俺がこの世界に来てから、半年が経過した。

半年といっても、こちらの世界では1年が380日。

1か月が38日で、10か月で1年という計算らしい。

うるう年は存在して、5年に1度、1日多い月があるんだそうだ。

1日の長さも、だいたい同じくらいな気がする。

確かめようはないが。

そして10日に2日、休日がある。

……さて、俺はというと。

未だにニーナの家に居候させてもらっている。

最初は言葉が全く通じず苦労した。

身振り手振りで何とか意思疎通し、行くあてがないことを伝えた。

そしてもし可能なら、このまま家に置いてほしいということも。

さすがに断られると思ったが、なんと許可された。

俺は恩を返すため、仕事を手伝った。

ニーナの母親は、シータといった。

シータは足をケガしており、俺の仕事はその補助だ。

大半は家の裏の植物を切ることに。

そして茎から線維を取り出し、糸を作る作業。

ニーナに教えてもらいながら、徐々に上達していった。

作った糸をニーナに見せて、許可が下りれば機織り機に装着。

そこから先は、シータしかできない作業だ。

作った服を街に運ぶのは、俺とニーナの仕事になった。

あのレンガ道は、隣の街へとつながっていたのだ。

初めて街に行ったときは興奮した。

石造りの建物が所狭しと並び、通りには人が溢れていた。

服を卸したら、行きつけの料理店で昼ご飯を食べる。

その後、おみやげのパンを買って帰るのがいつものパターンだ。

たまにケーキも食べたりする。

日中の仕事はだいたい、そんなところだ。

そして夜になったら、ニーナに言葉を教えてもらった。

ニーナは、シータの教育により、読み書きや計算もできる賢い子だった。少しずつ、彼女とも会話ができるようになって、楽しかった。

ちなみに、ニーナを襲った男は隣街で捕まった。

あの後、街で盗みを働いたのだという。

被害届を出しに街に行くと、男が捕まっていた。

男の罪は、俺たちの証言でさらに重くなることになった。

聞くと、遠くの街でも罪を犯し、辺境に逃亡してきた犯罪者らしい。

余罪も多くあり、牢から出られることは一生ないそうだ。

こんなことはめつたにないそうなので、今回のことは本当にタチの悪い偶然だったという。

基本的には、この周辺は安全なのだそうだ。

ある程度、言葉が理解できるようになったところで。

俺がどこから来たのか。

何者なのか。

ニーナとシータに、これまでのことを包み隠さず話した。

彼女らはポカンとした顔だったが、一応信じてくれた。

「どうしたいか決まるまで、ここにいたらいき」と、シータは言ってくれた。

シータの足だが、完治するのに少し時間がかかった。

なんだかんだと仕事をしていたせいだろう。

治るのに2か月ほどかかり、その際にはちよつとしたお祝いをした。

しかし。

シータの足が治ると、俺は仕事を失ってしまった。

もともと2人だけで行っていた仕事だ。

畑にあるカシルスの本数は決まっております。

そのうち何本を服に変えるのかも決まっています。

人数が多いほいほいというものではない。

シータが糸作りもできるようになると、2人だけで作業が完了してしまう。

ニーナと服を卸しに行くことだけが俺の仕事になってしまった。

まずい。

仕事がないと、タダ飯食らいになってしまう。

これではまさに、噂に聞くニーナというやつではないか。

いやだ。ニートはいやだ。

何か仕事をしたい。

そう思った俺は、とりあえず村で仕事を募集してみた。

すると案外、ちよこちよここと求人が来た。

どの家も、この作業だけはあと1人いたらうれしい、ということがあるみたいだ。

今まで誰も、仕事の募集というのはしたことがないらしい。

スキマ産業的な需要があり、俺は割と安定してお金を貰えるようになった。

それに、多くの村人と知り合いになった。

そうして稼いだお金をシータに渡そうとすると、そんなものいらなと言われた。

「娘の恩人から、お金なんて取る気はないよ」とのことである。

いやしかし。

恩というなら、俺が受けた恩の方がはるかに大きいはずだ。

俺は命を救われた上に、生活まで世話してもらっているのだ。

俺もお金を払うと譲らず。

最終的に、稼いだ額の半分を渡すということに落ち着いた。

さて。

日々の生活が安定してくると、この世界に対する興味が湧いてきた。適当に探すと、本棚にちょうどいい本があったので、勉強してみることにした。少しとつづきづらかったが、おかげでこの世界のことがかかり分かってきた。

まずこの村の名前は、サンドラ村というらしい。隣の街は、クレタの街という。

そしてこれらは、1つの国の中に含まれていた。

国の名前は、アルバーナ。

この村はアルバーナの端の端の、ド田舎だった。

この世界の移動手段は乗合馬車が一般的らしい。

が、村には一切走っていない。

村人は嘆願書を出しているものの、放置の状態だ。

まあ馬車を通すとなると、あの獣道を整備しないとイケない。

それにはコストがかかりそうだ。

隣の街との間で他に人が住んでいる所もない。

割に合わないのだろう。

——バスも電車も走ってねえ。

サンドラ村は、そんな感じの田舎だった。

そしてアルバーナの他にも、国はたくさんある。

中にはエルフやドワーフが住む国なんていうのもあるらしい。

おとぎ話でしか聞いたことがなかった人種が、実在するのだ。

そしてそれらは全てヒトと呼ばれ、そうでない者と区別するのだという。

では、そうでない者とは何か。

ヒトはそれを、魔族と呼ぶらしい。

魔族とは、魔物が進化して高い知能を持ったもの。

二本足で歩き、言葉も話すという。

しかし根本は魔物であり、ヒトとは相いれない存在なのだそうだ。

具体的な数だとか、どんな生活をしてるとかは、一切不明だ。

なんでそんなやつらが存在するのかと言えば、その起源は遙か昔に遡る。

本によれば、もともと、この世界は2つの大陸だったらしい。

魔物が住む西の大陸と、動物が住む東の大陸。

それ以外の部分は塩水に覆われており、お互いに存在すら知らず暮らしていた。

しかしある日。

大陸間のちようど真ん中で。

大規模な海底火山の噴火が生じた。

間に島ができ、なんと大陸は狭い道でつながってしまったのだ。

その頃には、動物からヒトが。

魔物から魔族が。

それぞれ誕生しており、異なる文化を持って生活していた。

大陸がつながり、初めてヒトと魔族が出会った歴史的瞬間。

残念ながら、お互いを敵だと認識したらしい。

以降ずっと、ヒトと魔族は戦争状態にある。

大陸がつながった当初、ヒトは劣勢だった。

魔族はその圧倒的な戦闘能力を武器に、何度もヒトを滅ぼしかけたという。

しかしヒトは知恵を絞り、技術を発展させ、何とか戦線を大陸の間に戻した。

それを記念してその年を統一歴0年とし、それから戦線は変わらぬまま、2000年  
以上の月日が流れている。

最初は、大規模な作戦で攻め入ったりしていたらしい。

しかし魔族の住む西の大陸での戦闘は、ヒトにとつては非常に厳しいものだった。

魔物が跋扈する森の中での、魔族との戦闘。

侵攻した軍は敗北を重ね、多くの場合壊滅した。

逆に、大量の魔族が攻めてくることもあった。

しかしヒトは、長い年月をかけて戦線に高い城壁を築いた。

その上から魔術を雨あられのごとく撃ちこむことで、魔族を退けることが可能となっていた。

幾度かの戦闘の末に。

お互いが、攻め入る方が圧倒的に不利だと気づいた。

それから徐々に戦闘の回数は減っていき。

この1000年ほどは全く戦闘を行っていないのだという。

つまり、近年は特に攻めも攻められもせず、ヒト達は平和に暮らしている。

魔族とヒトとの関係は、とりあえずそんな感じらしい。

そして最後に。

この世界には、魔力というものが存在する。

魔力とは、この世界に満ちているエネルギーのようなものらしい。

魔族や魔物はそれをエサに生きているのだという。

そしてヒトが死ぬと、その魂が魔力になるため、魔物はヒトを襲うのだと言われている。

る。

そういった理由から、ヒトと相容れないのが魔物と魔族。共存できるのが動物、ということのようだ。

ヒトも魔力を利用している。

魔力の使い道は2つ。

武術と魔術だ。

外に存在する魔力を、自身の内部に作用させれば。

身体能力の強化が得られ、それは武術と呼ばれる。

剣術がポピュラーだが、斧、槍、弓、なんでもアリだ。

この世界の戦士はすべからく、魔力ブーストを駆使して戦うのだという。

逆に、魔力を外部に作用させると。

その影響が外界に現れ、これは魔術と呼ばれる。

魔術にはさまざまな種類があり、扱えたらとても便利らしい。

この2つの能力が、この世界における非常に大きな物差しになっている。

やはり魔物やら魔族やらがいるような世界では、強さにつながるものが評価されるのだろうか。

そしてその影響もあるのか、この世界の文明はあまり発達していない。

本を読む限りでは、電子機器は存在しないようだ。

また、石炭や石油などの化石燃料を利用した物もない。

海の魔物に襲われるため、船もない。

……とまあ、調べた結果はこんなところだ。

さて。

そのうえで。

この世界で。

自分はこれから、何をすべきなのか。

ちよつと考え始めた。

もちろん、もうしばらくこの村にお世話になるつもりだ。

しかしこの先何がどうなるのか、何もわからないのだ。

身を立てる手段くらい、あつた方がいいのではないだろうか。

そして俺自身、何かを学びたい。

今よりもつと、できることを増やしたい。

この世界で評価されるものといえば、武術か魔術。

どちらかと考えたら、俺は魔術に興味があつた。

以前はフィクションの中にしか存在しなかった魔法というものが、実在するのだ。俺にもできるなら、やってみたいに決まってる。

それに、武術は近場で教えてくれそうな人がいない。

魔術なら、本で勉強すれば何とかかなりそうな気がする。

……よし。

魔術を勉強してみよう。

……何だかこの世界に来てから、以前より前向きになれている自覚がある。

以前の世界よりも人と親交を深められる気がする。

軽口や冗談も、自然と出てくる。

笑うことも多くなった。

なぜかは分からない。

しかしここでもなら、以前よりもうまくやれる気がするのだ。

さしあたって、魔術の勉強を始めてみることにする。

## 村での生活と、魔術の勉強

まだ村の誰もが寝ている頃。

俺は朝日とともに目覚める。

顔を洗い、着替えたらランニングだ。

村の中を1周。

ひんやりとした朝の空気。

それは気分を爽やかにさせてくれる。

程よく汗をかいた後。

家から桶をとって、裏手にある井戸へ向かう。

井戸の水を汲んで、家の貯水槽に移す。

これを2〜3回繰り返し返して、貯水槽をいっぱいにするのだ。

それが終わったら、次に向かうのは鳥小屋だ。

村のはずれに、鳥を共同飼育している小屋がある。

中にいるのは100羽以上の鳥たち。

ギヤーギヤーとやかましく朝を告げている。

我が家の区画は向かって左、入り口側から8番目の網の中。

今日は幸運にも、3つの卵をゲットした。

大抵は1つか2つで、0個もありうる。

そして本当は、今日はニーナの当番である。

さらに牛小屋に行き、牛の乳を分けてもらう。

月ごとにお金を払って乳をもらっているのだ。

それらを持って、家へと帰る。

ここまでが、俺の朝のルーティーンだ。

---

台所に入ると、シータが朝食を作っていた。

「おはようハジメ。相変わらず早いね」

「おはようシータ。はいこれ」

「おや、今日は3つもあるの。ありがとう」

「……ニーナは？」

俺の質問に、シータはあきれたようにため息をついた。  
「まだ寝てるわ。」

もうすぐご飯だから、起こしてくれる？」

「……了解」

俺は2階に上がり、部屋のドアを叩く。

どんどん。

「朝だぞー。起きろー」

中からのそのそと音がして。

数十秒後。

ドアが開き、ニーナが出てきた。

「おはようニーナ」

「おはよー。ハジメ、相変わらず早いね」

ニーナは伸びをして、他人事のように言った。

「ニーナが遅いだけだろ」

「ごめん。」

顔洗ったらすぐ行くから、台所で待ってて。

先に食べないでね」

「はいはい」

台所に戻り、食事を運んだ。

今日はカシルスの葉のサラダ、ハムエッグ、パン、ミルクだ。

調味料やハムなどは、隣町から売りに来るおじさんから買っている。

ハムと呼んでいるが、魔物の肉らしい。

魔物は普通に食卓に並ぶし、なんなら動物よりもうまい。

そして我が家では、カシルスの葉は常に出てくる。

茎が線維になるが、葉も無駄にはならないのだ。

シータも席に着き。

さて食べるかというところで、ようやくニーナがやってきた。

ニーナはだいたい、こんな感じだ。

たまには、お灸をすえてやらねば。

俺は立ち上がり、ニーナに向かって敬礼をする。

「姫様、お待ちしております！」

「お食事の準備は整っておりますぞ！」

「え!？」

……って、もう、ごめんって。

悪かったから。

明日はちゃんと起きるから」

「そのセリフ、何度目かしらね」

「お母さんまで」

もうっ、と言いながら、ニーナは椅子に座った。

「ニーナ、今日は卵3つだったぞ」

「うそ、やった。」

ピー助、がんばったね。

だからハムエッグか」

「さあさあ、早く食べるわよ」

「「いただきます」」

朝食をとった後。

ニーナとシータは服作りへ。

俺は村の人達の手伝いへ。

それぞれの仕事へと向かうのが日常だ。

だが今日は、俺は仕事がない。  
自由なのだ。

なので、魔術の勉強をすることにした。  
部屋に戻って、魔術の本を開く。

これは、家の本棚に置いてあったものだ。

「魔術教本 初級編」

なんとも分かりやすいタイトルである。

さて、勉強を始めてかれこれ10日間ほど。

意気込んでいたものの、なかなか思うようにはいかなかった。

夜寝る前の3時間毎日勉強しているが、今一つ進展がない。

そもそも。

魔術なんて便利なものがあるなら、みんな使いたがるはずだ。

誰もが一度は、習得を試みるに違いない。

なのに、この村には魔術師は1人もいない。

隣の街にもそう多くはいないらしい。

つまり、習得するのが難しいということなのだろう。

……まあ、ふてくされていても仕方ない。

得た知識を整理してみる。

まず大切なのは、魔力だ。

世界は魔力で満ちている。

それを身体に取り込み、術式に通すことでエネルギーに変わり、魔術が発動するのだという。

では、術式とは何なのか。

それは脳内で構築する、回路だという。

放出する魔力が外界に与える影響を、コントロールするもの。

さながら電子回路のごとく、そこに魔力を流すと現象が生じるのだという。

テレビに電流を流すと映像が映るように。

扇風機に電流を流すと風を送るように。

時計に電流を流すと針が動くように。

術式に魔力を流すと、魔術が発生するのだ。

ふむふむ。

ここまでは、まあわかった。

では、術式とはどうやって作るのか。

その答えは……なんと、想像力を鍛えるしかないらしい。教本によると、

「取り込んだ魔力が様々な事象に変換されて、

自分の腕から、もしくは杖から、

放出され影響を与えるその過程を、

余すことなく想像しつくすことができれば、

それが術式となる」

だそうだ。

は？

なんじゃそりや。て感じだ。

入門編の総まとめとして、練習法が紹介されていた。

原文ママだと、こんな感じだ。

「果物を目の前に置き、目を閉じ、それを思い描く。

色、形、匂い、手触り、味、中身の状態、種の数、落とした時の音、などなど。

それが持つ情報全てを想像する。

事実と異なってもいい。

それが真実であると信じるのが重要だ。

思い描けただろうか。

あなたの想像するその果実は。

火であぶったら。

中に虫が入ったら。

潰してジュースにしたら。

どんな姿になるだろうか。

どんな音がするだろうか。

どんな味になるだろうか。

どんな匂いがするだろうか。

全ての疑問に、明確な答えを得られたら合格だ。

1つの果実でそれが可能になったら、他のいろいろなもので行おう。

机、椅子、ランプ、棚、なんでもよい。

同じようにそれらを1つ1つ、丁寧に想像する。

どこにいても、何をしていても、頭の中で再現できるように。

それらが可能になれば、準備の半分はできている。

火、水、風、土のいずれかを選び、手本のない想像を行えばよい。

あなたの中に真実があれば、おのずと道は開かれるだろう」

と、いうことである。

なんじゃそりゃ。

一応俺も、入門編に従ってみた。

毎日果実を目の前に置き、目をつぶって、ウンウンと唸ること一時間だ。

だが、できている気がしない。

自分の中で何も変わっている気がしない。

いたずらに時を過ごしている気分だ。

たまに火だの水だのを想像してみるが、何も起こりはしない。

だが、やるしかない。

今は分からなくても、いつか。

いつかきつと、分かるようになるはずだ。

そう信じて、今はがんばるしかない。

この日はそれからずっと部屋にこもり、本と格闘した。

日が暮れるまでがんばったが、あまり進捗はなかった。

そんなある日。

ニーナとクレタの街におでかけすることになった。

服を卸すわけではない。

たまたま休みが重なったので、リフレッシュに行くのである。

街は活気があつて楽しいし、ニーナと話すのも楽しい。

一石二鳥だ。

片道2時間かかるのがネックだが。

魔術の勉強のモヤモヤを、遊んで晴らすとしよう。

## ニーナとの買い物

「……最近、夜ずっと本読んでるよね。何の勉強してるの？」

「ああ、ちよつと魔術を使えるようになりたいと思つてさ」

クレタの街の、いつもの料理店。

昼食をとりながら、ニーナと話す。

「ハジメ、魔術師になりたいの？」

「……まあ、使えたら便利かなと思つて。」

火をつけるのに火打ち石もいらぬいし、

水だつて、井戸に汲みに行かなくていいんだぜ？」

「確かに、井戸の水は重いもんねえ。」

ハジメがやってくれるから助かつてるよ」

「女の子であの重さはキツイもんな」

「うん。ありがとう」

「どういたしまして」

俺がそう言うと、ニーナは笑った。

今日のランチは、一角ウサギのグリルだ。

ナイフをいれると、じゅわつと肉汁がでてくる。

切り分けて、口に入れて嘯む。

なんと柔らかい肉質。

それがソースの香りに引き立てられ、口の中に幸せが広がる。  
うまい。

付け合わせのスープとの相性もバツチリだ。

以前取り逃がしたアイツは、こんなうまかったのか。

「美味しいねー！」

パクパク食べながら、ニーナが言う。

彼女はいつも美味しそうに食べるが、今日は格別幸せそうだ。

肉を頬張り、リスマたいになってる。

「そんなに口に入れたら、喉に詰まらせるぞ」

「大丈夫よ。こんなにおいしいものを食べながら死ぬるなら、多分幸せだもの。もぐもぐ」

「シータになんて言えばいいんだ」

「シータ、あなたの娘は安らかに息を引き取ったよ。」

最後の言葉は、もぐもぐ、だった」

「言えるか、そんなもん」

「あはは、冗談だよー」

何がそんなにおかしいのか。

ニーナはくすくすと笑う。

「……でもさ、ホントにそんなふうに私が死んじゃったら、ハジメはどうする？」

「どうって……まあ、悲しいよ」

「どれくらい悲しい？」

「えーとそりゃ、すごく落ち込んで、飯も喉を通らないくらい悲しい」

「そっか。私にご飯をたくさん食べたせいで、ハジメにご飯を食べなくなるなんて。

おかしいね。ふふふふっ」

「笑いのツボがよくわからん」

なんだか今日は、ニーナが上機嫌だ。

服装もなんだかオシャレしている。

普段あまり着ない白のワンピースに、頭にはリボン。

そのせいで、ふとした仕草に、少しだけドキッとしてしまう。

会話しながら食べていたら、料理はあっという間になくなってしまった。

食事のあとは、服を見に行った。

「ハジメ、どっちがいいと思う？」

ニーナが赤と青のドレスを両手に持って聞いてくる。

おお。彼女とのデートみたいだ。

どっちだろう。

青はニーナのアイスブルーの瞳によく合いそうだ。

赤はニーナの活発な性格にマッチしている。

「どっちも似合うよ」

俺は答えた。

「ブルー。どっちがいいか答えましょう」

「うーん。……じゃあ、青」

「その理由は？」

以下の語句を全て用いて答えてください。

【ニーナ】【とてもかわいい】【青】【とても似合っている】【美しすぎる】【俺は心を奪われてしまった】

「それ、回答の選択肢ないだろ」

「えへへ」

結局、ニーナは青のドレスを買った。

ドレスなんて、あの村で着る機会などそうそうないだろうに。

そういえば、シータの服しか着ない主義とかじゃなかったんだな。

次に寄ったのは雑貨屋で、ニーナに口紅をプレゼントしてみた。

ニーナはとても喜び、「大切にするねー」と言ってくれた。

まあ、これも村で使う機会はあまりないだろうが。

魔術師が使う杖なんかも売っていた。

こういうのがあれば、習得も早いのだろうか。

ローブを着て杖から魔術を出すなんて、いかにも魔術師らしい。

しかし多分変わらないだろうな。

行き詰っているのは、杖を持つ持たないの以前の問題な気がする。

金も足りないし。

杖は諦め、魔術の入門書を1冊購入した。

本1冊で有り金がほぼふつとんだが、目下の最大目標だ。惜しむまい。

「今日は楽しかったねー」

帰り道でニーナが言う。

「ああ、楽しかったな」

「なぜ楽しかったのか、以下の語句を用いて答えてください。

【ニーナ】「とてもかわいい」【街を歩くと】「いつもよりかわいい」【そんなニーナと一緒にいるから楽しい】

「……それはもういいよ」

「あはははっ」

くだらないやり取りをしつつ、俺は幸せを感じていた。

帰ったらシータが料理を作って待っていてくれる。

こんな穏やかな気分は、以前の世界では感じたことがない。

この世界にやって来れて、本当によかったと思う。

何故俺がここに来たのかは、相変わらず謎のままだが。

「……ねえ、魔術の勉強さ、私も一緒にやってもいい？」

不意にニーナが言った。

「もちろんいいけど、どうした？」

「ハジメがやるなら、私も一緒に勉強してみたいなって思ってた」

「ふーん」

「実はね、私も昔、魔術の勉強してたんだよ。」

本に線とか書いてあるでしょ？

あれ、私なんだ」

「なに!？」

どれくらい勉強したんだ？」

「えーと、1年間くらいかな。」

ちよつと、魔術に憧れた時があつて。

でも結局できなくて、やめちやつた」

なんと。

ニーナは俺よりも魔術の先輩だったらしい。

「1年やつてもできないのか」

「うん。でもなんかね、できそうかなって思ったこともあつたんだよ。」

でも私が魔術の勉強していると、お母さんがちよつとさびしそうだつたから、辞め

ちゃった。

……まあ、1人より2人の方が励みになるでしょ？」

「そうだな。よろしく頼むよ」

「うん。こちらこそよろしく」

他愛ない話をしながら2人で歩いた。

ピー助の他に鳥をもう1羽飼うかどうかとか、

カシルスの葉には飽きが来ないとか、

村でも美味しい肉を食べたいとかだ。

……食べ物のことばかりだった。

レンガ道を分岐して、獣道に入る。

ちよつと街で時間を使いすぎたか。日暮れまでギリギリかもしれない。

少し急ごうとした俺に、ニーナが話しかけてきた。

「ねえ、ハジメ」

「うん？」

「あの時も、このくらいの時間だったよね」

「あの時って？」

「ハジメと、初めて会ったとき」

「ああ、あの時か。そうだな」

「ハジメ、全然言葉が通じないんだもん。びっくりしちやった」

「そうだな。あの時は全然しゃべれなかった」

「私が何言っても、きよとんとして首を傾げるだけだったもんね。ふふふっ」

「しようがないだろ。本当に分からなかったんだから」

「……そうだね」

ニーナは不意に黙ってしまった。

沈黙の中、数分歩く。

どうかしたのかと思いいーナを見ると、照れたように顔をそむけた。

そしてそのまま、ニーナは話し始めた。

「あの時、ハジメが来てくれなかったら、私どうなってただらって、今でも思うんだ。

たまに、怖い夢を見るの。

私は縛られてて、どうしようもなくて。

黒い影がナイフを持ってやってくるの。

すごく怖くて、もうダメだって思うんだけど、必ず誰かが助けてくれるの。

私と影の間に立って、追い払ってくれるの。

……なんだか眩しくて、その人の顔はよく分からないんだけど。

あの時ハジメが来てくれなかったら、全然違う結末になってるんだろうなって、その夢を見るたびに思う。

——あのね、ハジメ。

あの時、私のことを助けてくれて、本当にありがとう。

立ち向かってくれて、本当にありがとう。

今、私がここにいるのは、ハジメのおかげです」

ニーナは最初うつむいて、あさつての方を見ながら話していた。

しかし途中から顔を上げ、俺の眼を見てお礼を言った。

俺はなんだか照れくさくなって。

何か茶化す言葉を探したけれど、ニーナの真剣な表情を見て何も言葉が出てこなくなつた。

「あのときもお礼、言ったけど、通じてなかったから」

「そうか。いいんだよ。気にするな。」

俺も無我夢中で、何したかよく覚えてないんだから」

「そっか」

「そうさ。そんなことより早く帰ろうぜ。」

シータの晩飯が食べたい」

「……ふふ。そうだね。」

早く帰ろう」

夕暮れの中。

ニーナはにつこり笑うと、そのまま駆けだした。

俺もその背中を、走って追いかけた。

家に帰ると、その日は何故か、少しだけ夕食が豪華だった。

幸せな一日だった。

また明日から、がんばるとしよう。

## ニーナの誕生日①

ニーナと街に出かけてから、3か月が経過した。

魔術の勉強はいまひとつ進展を見せない。

が、ニーナと一緒にだからか、辞めたいとは思わない。

あの後、次の日から一緒に勉強することにした。

俺の部屋にニーナの椅子を持ってきて、二人で勉強する。

疑問に思ったことは、互いにぶつけ合う。

街で買った本も、家に置いていた本も、内容はあまり変わらなかった。

しかしどちらの本も、俺からすると疑問に思うところが多い。

「……なあ、ニーナ。

火、水、土、風がこの世界を構成する4大元素って書いてあるけどさ。

じゃあこの世界はそれで作られてるってことか？

なんかさ、いまいちピンと来ないんだよな」

「私もよく分かんないけど。」

でもたまに、なんとなく感じるときはあるよ。

服を作つてるときなんかは、その服に風を感じたり。

食事のとき、料理から水のイメージが浮かんだり」

「……ふーむ」

俺の中で元素と言えば、教科書に載つてるすいへーりーべーのアレだ。

だから、火だの水だのが物質を作つていと言われても全くピンとこない。

そんなわけあるか、と思つてしまう。

ただ、ニーナは感じるということという。

空想のようにも聞こえるが、割とはつきり感じているようだ。

「ニーナ。火つてなんで起こるんだ？」

「え、それは、火打ち石が火の元素を多く含んでるからでしょ。

私、火打ち石にはすごく火を感じるもん。」

こんな感じである。

俺は全く感じない。

もしかすると以前の世界の知識が、魔術の習得を邪魔しているのかもしれない。

やつかないものだ。

以前の知識を一度放棄して、こちらの世界の知識を信じてみることにするか。

さてきて、そんなことをしている間に。

気づけばこちらに来て1年が経っていた。

しかしこちらの世界は、気候の移り変わりが無い。

おそらく地軸がほとんど傾いていないのだろう。

花なんかも、年がら年中咲いては散りを繰り返している。

なんだか味気ないが、そんなものらしい。

ちなみにどうやって時の移り変わりを感ずるかと言えば、星座の動きだ。

明かりが少ないため、夜空を見れば常に満天の星空だ。

その中で、あの星がまた見えたからそろそろ1年か、なんて感じたりするのだ。

ロマンチック……と、言えなくもないだろう。

そして。

なんともうすぐ、ニーナの誕生日なのだ。

シータと話しているのを聞いてしまった。

毎年お母さんと2人だけど、今年はハジメも祝ってくれる。うれしい。

……なんて思っているはずだ。きつと。

よしよし。

素敵な誕生日プレゼントを用意してやろう。

ちなみにシータの誕生日はとづくに過ぎてしまった。

ニーナとふたりで花を贈ったところ、シータはとても喜んでくれた。

その後なぜか、泣き出してしまった。

それを見たニーナがぎよつとしていた。

シータが泣くところなんて見たことがないそうだ。

涙の理由は、教えてくれなかった。

ついでに俺の誕生日も聞かれたが、分からないと答えた。

まあ、以前の世界の誕生日に転移したから、日付を割り出そうとすれば可能だろう。

しかし俺はもう、あの世界のことには忘れない。

こちらの世界で生きていくと決めたのだ。

そもそもその誕生日も、俺が橋の下で見つかった日付というだけだしな。

……とにかく、ニーナの誕生日だ。

仕事休みに、クレタの街で買い物といこう。

さて、毎度お決まりクレタの街。

バスも電車も走ってねえ、オラの村から徒歩2時間ほど。

雑貨屋を巡って、目ぼしいものを探す。

何がいいだろう。

こないだドレスを買っていたから、シータの作った服以外も着るといふことは判明した。

あのドレスに合う靴なんかどうだろう。

青に映える白のハイヒールなんかプレゼントしたら、いいんじゃないか？

……おっとこれは、早くも正解にたどり着いてしまったかもしれない。

さっそく靴屋に走ったが、誤算があつた。

靴にはサイズというものがあるのだ。

ニーナの足を見る機会が多いが、サイズとなると分からない。

プレゼントしたものの、サイズが合わずに履けませんというのは、最もありがちでダ

さいパターンだ。

そのうえ、返品するのも片道2時間かかるのだ。やめよう。

靴は断念し、サイズの関係ない装飾品を考える。

妥当な線だと、ネックレスか、ピアスあたりか。

ただニーナはピアスなんてつけたことがなさそうな、きれいな耳をしている。

誕生日プレゼントのために耳に穴を開けさせられるのは、さすがに嫌だろう。

となると、ネックレスで決まりだ。

この世界の装飾品も、なかなか味わいがあつて美しいものが多い。

もちろん、宝石の加工技術なんかはもとの世界に及びはしない。

しかし素材の味を生かすハンドメイド的なものの魅力は、以前の世界を上回っている気がする。

きつといいものが見つかるはずだ。

そう考えて、アクセサリーショップにやってきた。

ショーウィンドウから覗く、煌びやかな装飾品たち。

ここならきつと、俺の眼鏡にかなうものもあるに違いない。

ただ、俺は人生で一度も、女性にプレゼントなど贈ったことなどない。

男の趣味と女の趣味は違うと言うし……。

凝ったデザインは服に合わせづらいらしいし……。

かといってシンプルなものも面白くないかもしれないし……。うん。ここは店員さんに聞くのが、ベストというものだろう。

なんだか、今日の俺は冴えてるな。

「あー、すみません」

「はい、なんででしょうか？」

美人の女性店員さんが、にこやかに対応してくれた。

少しだけ、目の下のクマが気になるが。

「年下の女の子にネックレスを贈ろうと思うんですけど、どんなのがいいでしょうか？」

バチンと。

頬をはたかれた。

「え？」

俺は何が起こったか分からず、目の前の店員を見つめる。

他の可能性を探したが、ありえるものがない。

どう考えても、この人にビンタを食らったとは思えない。

「甘ったれんじゃないわよっ！」

「え？」

はたかれた頬が、じんわりと痛み出す中。  
目の前の店員が叫ぶ。

「自分で贈りたいって思ったんでしようが！

あなたが一番、その子のことを考えてるんでしようが！

なら、あなたが選びなさいよ！

もつと彼女を、大切にしなさいよっ!!」

涙を浮かべながら、なおも店員は叫ぶ。

俺は頬の痛みより、その言葉に、衝撃を受けた。

確かに……確かにその通りだ。

俺はプレゼントの体裁ばかりを考えて。

当のニーナのことを考えてなかったんじゃないか？

男が女にプレゼントするものといえばコレ、と。

既成の観念にとらわれて、本質を見失っていないか？

そう、俺はニーナを喜ばせるためにプレゼントを贈るのだ。

贈ったプレゼントに自己満足するためじゃないはずだ。

……ちゃんと考えろ。

ニーナが最も喜ぶものって何だ？

関わる時間は多かったはずだ。

必ずその中に答えはある。

浮かんだのは、3か月前の帰り道。

ニーナとふたりで道を歩いた3時間。

話した話題は何だった？

——そうだ！ 食べ物だ！

ニーナはいつも、美味しそうに食べる。

どんなときも、食事をしているニーナは幸せそうだ。

俺は確信した。

これこそが正解だと。

俺はニーナの誕生日プレゼントに、料理を振舞おう。

まるで涅槃に至ったかのような心境だ。

店員さんのビンタのおかげで、ここに至れた。

礼を言わねばなるまい。

「ありがとう、店員さ——」

「ちよつ、ちよつとあんた！

なにやってるの！」

俺の言葉を遮り、女の人が割り込んできた。胸に「店長」と書かれた名札をつけている。

「どうやらこの店の店長らしい。」

「無神経な男に、愛の鞭を与えたんです」

「お客様でしようが！」

フラれてつらいのは知ってるけど、そんなことしちやダメでしょ！

クビにするわよ！」

店長はその店員を一通り叱った後。

俺と目が合うと、深々とお辞儀をした。

「お客様！」

大変申し訳ありませんでした！

店の商品を割り引かせていたいただきますので、どうかご容赦を！

この者には、しかるべき処分を行いますので」

処分、という言葉が出た瞬間。

気丈に振舞っていた店員の目が、わずかに泳いだ。

やはり彼女も、クビは怖いのか。

「——待ってください！」

「は、はい」

店長は、おびえるように俺を見つめる。

クレームをつけられると思っっているのだろう。

「その店員さんは、俺に大切なことを思い出させてくれました。

商品の割引はいりません。

なので、その店員さんに、処分を与えないでください」

俺は、毅然とした態度で言う。

「え……。」

よろしいのですか？」

店長は、目の前の事態に戸惑っていた。

頭のおかしい店員を叱ろうとしたら、その客も頭のおかしいやつだった。

そんな、のつぺらぼうに化かされたヒトみたいな表情だ。

「ええ。」

よろしくお願いします。

それでは……」

「——待って！」

立ち去ろうとしたところで、後ろから声が聞こえた。

振り返ると店員さんが、右の拳を俺に向かって突き出していった。

「あんた、彼女のこと、大切にするのよ！」

「ええ、ありがとうございました」

俺は彼女と拳を合わせ、その店を後にした。

## ニーナの誕生日②

さて、ニーナの誕生日プレゼントは、料理を振る舞うことにする。

その方針は決まったものの。

具体的な方法についてはノープランだ。

ニーナの好物といえばなんだろう。

大抵のものは美味しそうに食べてるが。

中でもひとときわ幸せそうだったものといえは……。

……あれだな。

一角ウサギのグリルだ。

ニーナときたら自分の分を早々に食べ終わって、俺の分まで物欲しそうな眼で見てたからな。

あれはめっちゃうくちやうまそうに食べていた。

よし。

あれを作ろう。

といっても、レシピが分からない。

一度食べただけで作れるような、天才的な舌は持ち合わせていない。ならば、作った人に聞くしかあるまい。

ということだ。

いつもの料理店にやって来た。

昼下がりで、客も少なくなってきた時間帯だ。

俺はひとまず席に座り、料理を注文する。

今日のランチメニューは、魚介のアクリナソースパスタだ。

俺がこの世界にやってきた時、空腹を救ってくれたあの実が、アクリナというらしい。

この辺りではよく採れるらしく、村の果樹園にも見かける。

トマトとリンゴの合いの子みたいな味の実だ。

パスタが運ばれてくる。

……美味い。

トマトと酸味とリンゴの甘さが、パスタに絶妙にマッチしている。

そのソースがうまく魚介類の生臭さを消しており、全体の調和が見事に保たれた逸品だ。

食後の飲み物も頼むことにする。

いろいろあるが、食後の飲み物の定番といえば、やっぱりこれだ。

「カシー、ください。ホットで」

「かしこまりました」

カシー。

これはほぼコーヒーだ。

もう少し南の、暖かい国で栽培される豆を引いて作るらしい。

香りも味も、ほぼコーヒーである。

牛乳を入れて提供されることもある。

眠気を覚ます効果もある。

ほぼコーヒーである。

それならコーヒーと呼べばいいじゃないかと思うかもしれないが、ここはあえて、カ

シーと呼ばせていただく。

カシーを飲んで一息つく。

周りを見ると、かなり客は少なくなつた。

そろそろか。

厨房の入り口まで歩き、シェフに会いたいことを伝えた。

ウエイトレスはすこし戸惑つた様子だったが、少しお金を渡すと、頷いて奥に引つ込

んでいった。

待つこと数分。

中から出てきたのは、熊のような大男だった。

髭が雑草のように顔から生え。

太い眉毛を眉間に寄せて。

鋭い目で、こちらを睨みつけている。

「何の用だ。坊主」

ドスの利いた声とは、このような声を言うのだろうか。

聞いただけで、背筋にぞくりと震えがくる。

まさかいつもの料理店に、こんな怪物が潜んでいたとは。

あまつさえ、その怪物が作った料理を口にしており、それがあんなにも美味しいとは。

信じられない。

こんなにも恐ろしくて、料理がうまい人間がいるなんて。

俺は恐ろしさのあまり、ここから全速力で立ち去りたくなった。

——ダメだ。

ここでビビッてどうする。

ニーナに美味しい料理を作ってやりたいんだらう？

それともこの程度の障害で諦めてしまうような思いなのか？

……否！ そんなものではない！

意を決して、俺は怪物に話しかけた！

「あ、あの、ここの料理がとても美味しくて。

その、料理のレシピを教えていただけたらなー、なんて、思ったりなんかして……」

「あんだと!？」

ひっ！

男が大きな声を出した。

マジで怖い。

「レシピなんざ教えるわけねえだろうが。寝言は寝て言え。このガキ」

「タ、タダでとは言いません！

僕の有り金を全てお渡ししますから！

銀貨2枚程度はあると思います！」

「ああん？ 金で買おうってか。ずいぶん必死じゃねえか。

何に使うんだ？

まさか店を出そうってんじやあるめえ」

「……妹の誕生日に、料理を作ってあげたいんです。

「この料理がとても好きだから」

とつきに、ニーナを妹と紹介してしまった。

いかん、居候の身だというのに凶々しいな。

まあしかし妹と言った方が印象よきそうだし、とりあえず考えないことにしよう。

「……ちなみに、どれが好きなんだ」

「3か月前に食べた、一角ウサギのグリルが」

「美味かったか？」

「はい、とても美味しかったです。」

妹は自分の分じゃ足りなくて、僕のものにまで手を出そうとしたりして」

「そうか」

怪物はそのまま顎に手を当てて、黙ってしまった。

なんか案外、いい人なのかもしれない。

粗野だけど心意気はまつすぐ、って感じで。

怪物が俺の顔をじっと見てくる。

毛むくじやらの恐ろしい顔だったが、なんとか眼をそらさずに耐えた。

「いいだろう。」

俺が凄んで逃げなかったガキは初めてだ。

その度胸と妹に免じて教えてやる。来い」

……え、いいの。

十中八九ダメだと思った。

逆転ホームランだ。

その後。

怪物は綺麗な字でレシピを書き、渡してくれた。

何か質問は。と言われ、10以上の質問をしたが、全て丁寧に答えてくれた。

注文が来たらそちらの料理が最優先だったため、時間はかなりかかったが。

後で、ウエイトレスさんが教えてくれた話によると。

店主は、お客が食べている顔をこっそり見るのが趣味なんだそうだ。

美味しそうに食べてる姿を見るのが好きなのだという。

ただ、風体で怖がられるから、こっそり見ているらしい。

特にお気に入りだったのは、月に一度必ず来る、金髪の女の子。

食べる様がとても幸せそうで、その子が来た日は店主も上機嫌だったらしい。

最近その子の同伴者が、女性から男の子に変わった、という話も厨房で少し話題になったという。

つまり俺がニーナに料理をプレゼントできるのも、ニーナのおかげということらしい。

なんとも締まらない話だ。

……いや待て。

店主は、度胸と妹に免じて、と言ったはずだ。

だから、俺の度胸のおかげも半分はある。と、思っておこう。

逃げずに立ち向かったからこそ、この結末があるのだ。うむうむ。

店主は料理に必要な調味料や、付け合わせのスープのダシなどを持たせてくれた。

ただ、ウサギはどうしようもない。

この世界では冷凍保存などできないから、料理直前まで新鮮である必要がある。

つまり、獲ってくるしかないということだ。

店主は、ウサギの獲り方から解体方法まで教えてくれた。

あのランチも、店の裏の解体場で捌いて出していたらしい。

ふつう料理人はそんなことしないだろ。

すごいなこの人。

イメージぴったりではあるが。

帰りがけにお金を払おうとしたら、断られた。

「子どもから金なんか取らん」だそうだ。

食べた料理とカシーの代金は取られた。当たり前か。

店主に深々と頭を下げ、お礼を言って別れた。

まあ、考えうる最高の結果だ。

もつと試行錯誤して料理に挑むことになると思っていた。

まさかこんなにトントン拍子に事が運ぶとは。

お金もかからなかったし。

このレシピと材料があれば、成功は約束されたようなものだろう。

時間がギリギリになったので、走って帰った。

村に着くころにはすっかり暗くなってしまった。

明日から、空いた時間でウサギ狩りだ。

## ニーナの誕生日③

ニーナの誕生日まで、両手で数えられるくらいの日数になった。

シータに当日の料理を俺が作りたいと伝えたら、OKをもらえた。

しかし考えてみれば、娘の誕生日に料理を振る舞うのは母親の楽しみのも一つかもしれない。

ちよつと悪いことをしてしまった。

まあ、今回だけ譲ってもらおう。

誕生日の前7日ほどは、できるだけ仕事を入れないようにした。

再度街へ出かけ、ウサギを捕えておくカゴと、エサを用意。

いざ、森へウサギを捕まえに行く。

店主の話では、一角ウサギはかなり鈍臭いウサギなのだそうだ。

危機察知能力が低く、逃げ足も遅い。

そして、太っているから1羽でも結構な肉が取れる。

ただ、巣穴は巧妙に隠しているらしい。

なので、一角ウサギを狩るときは、まず森でウサギを探し回り、見つけたら気づかれぬように後を追いかけて、巣穴を特定する。

無防備に巣穴から出てきたところを捕まえるのがいいらしい。

店主は、森を歩く時の注意点まで教えてくれた。

一角ウサギを探すなら、足跡を辿るのがいいそうさ。

ウサギは跳ねて移動するため、他の動物のように足跡が交互にならない。

かなり特徴的なので、見つけられたらかなりのゲットチャンスらしい。

万が一、肉食獣や魔物らしき足跡を見つけたら、回れ右して来た道に戻り、そこには近づかないこと。

他にも、毒をもつ虫が巣をつくりやすい木、

トゲに毒がある花、

危険なヘビの見分け方など、注意点は多岐にわたった。

この情報量、銀貨2枚でも安いくらいだ。

なんでそんなによくしてくれるのか。

……それは多分、店主もニーナの笑顔が好きだからだろう。

自分では見られなくても、その笑顔を増やすために、俺にいろいろ教えてくれたのだ。

あのロリコン怪物め。

森の中は、生き物に溢れていた。

虫や鳥、魚、トカゲ、ヘビ、リス、タヌキなど。

元の世界と似たような生き物が多い。

色とか細部に違いはあるが、おおまかなフォルムは一緒だ。

どこの世界も、似たような進化を遂げるものらしい。

歩き回ったが、肝心の一角ウサギは見つからず、1日目は終了した。

2日目、一角ウサギのものらしい足跡を見つけた。

後ろ足の足跡が、進行方向に対して並列している。

よし。

足跡を追ってみる。

前足の足跡がある反対側が進行方向らしい。ややこしい。

慎重に辿つてかなりの距離を歩いたが、途中で足跡が分からなくなってしまうた。

俺の追跡スキルがもつと高ければ分かっただろうが……。

その後は成果が上がらず、2日目も終了した。

3日目、昨日足跡を見かけたあたりを再度探してみる。

あの足跡はやはりウサギのもので間違いないはずだ。

森にひたすら目を凝らす。

すると。

(……いた)

ついに見つけた。

一角ウサギだ。

のほほんとした顔で草を食べている。

たまにピヨコピヨコ移動し、またその辺の草を食べる。

俺は気配を殺し、その場で立ち止まった。

ウサギに気づかれた様子はない。

じっと、ウサギを目で追い続ける。

そのまま2時間ほどが経過した。

もう走って行つてとっ捕まえられないかと何度も思ったが、ぐつとこらえた。

逃げ足が遅いといつても、野生のレベルでだ。

森で俺が追いかけてこして勝てるわけはあるまい。

ウサギは少しずつ移動し、なんと昨日足跡が消えた地点へと戻ってきた。

しばらく様子を伺うような仕草をした後。  
急にウサギが消えた。

ん!?

何が起こった!?

そこに走って行ってみたが、足跡は途切れ、ウサギは影も形もなかった。

どういふことだ。

あたりを注意深く見渡してみた。

すると、木の根の股と、草で巧妙に隠された穴を見つけた。

……これだ!

こいつが巣穴だ!

ようやく発見した。

さてどうしたものか。このチャンスは逃せない。

出てきたところを捕まえろ、と言っていたが……。

巣穴に手をつ突っ込んだら捕まえられないだろうか。

いや待て。

あの妖怪の言うことだ。

背いても、恐らくいい結果にはなるまい。

予定通りにここまで来た。

ならば、ここから先も予定通りだ。

俺は持つてきたエサを、巣穴のそばに置いた。

ある植物の種だが、一角ウサギはこれに目がないらしい。

さあ、来い。

エサを食おうとするその瞬間、お前を捕まえてやる。

獲物を捕らえる瞬間が、一番無防備になる時らしいからな。

何かの漫画に、そう描いてあった。

待ち続けること3時間。

ウサギがピヨコピヨコ巣穴から出てきた。

そしてすぐに、俺が蒔いたエサに気づいた。

そちらへ向かう。

——今だ！

俺はウサギに飛びついた。

しかし俺の手が触れる一瞬先に、ウサギは気づいた。

(まずい！ 逃げられる！)

しかしあろうことかウサギは、異変に気付いた瞬間、身を縮こまらせて固まった。

余裕をもって両手でウサギを掴む。

こいつはホントに野生動物か……。

ウサギをゲットした。

やったぜ！

家に戻り、ウサギをカゴにいれ、エサと水を与えて飼育した。

---

そしてやってきた誕生日。

俺はシータに厨房を借り、料理に取り掛かる。

シータに頼んで、ニーナには離れていてもらうようにした。

シータは機織りを教えることにしたらしい。

ニーナはこれまで機織り機には触らせてもらってなかった。

そのため、とても喜んで部屋にカンヅメになっている。

よし。

最初に最も重要な部分だ。

最初からクライマックスといっても過言じゃない。

ウサギを捌くのだ。

ウサギは裏庭に置いたカゴの中で、相変わらずのんきな顔をしていた。けっこうかわいい顔をしている。このまま飼いたいくらいに。

しかしダメだ。

お前は俺に捕まったんだ。

お前は俺に食われるしかないんだ。

首根っこを掴んで持ち上げた。

ジタバタと手足を振るウサギ。

俺は覚悟を決め、ナイフの柄でウサギの頭を殴った。

せめて苦しめないようにしてあげたかったが、うまくいかなかった。

俺の意気地がないせいで、何度か殴る羽目になってしまった。

胸が痛む。

ウサギはぐったりとして、動きがあまりなくなった。

ウサギを寝かせて、押さえつけ、下腹部からナイフを入れた。

初めて手に伝わる、生き物を裂く感触。

そのまま喉元までナイフを走らせた。

血液が流れだし、内臓がテラテラと光って見える。

ウサギはビクビクと震え、やがて動かなくなった。

喉に何かがせりあがってきたが、飲み込んだ。

見えている内臓をナイフで切って取り除く。

血液を水で洗ったあと、足を開いて縄で吊るした。

ナイフで裂いた腹の部分から、足首に向かって薄く切れ込みを入れ、皮をはがす。

足から頭に向かって皮をはがすと、すんなり一枚の毛皮になった。

残った身を、3つの部位に分けた。

前足、後ろ足、背だ。

これで解体は終了だ。

途中、やりきれるか不安だったが、なんとか完遂できた。

終わってみれば、不思議な達成感がある。

しょうがない。これは自然の摂理だ。

否定するなら、ベジタリアンになるしかない。

と、解体した肉を見た瞬間。

——不意に、頭にイメージが湧いた。

ウサギが跳ね回っていた、ねぐらにしていた森の土。

遙か昔からそこにあり、森を守ってきた大地。

そのイメージが、鮮明に頭の中に入り込んできた。

……これはもしかして、ニーナが言ってたやつか？

イメージが止んだあとも、ウサギの肉からは土を感じた。

ふーむ。

とにかく、今は料理だ。

まあここまですれば、あとは簡単だ。

レシピ通りに作るだけだ。

肉の硬さをとるために棒で叩いたり。

臭みをとるために香草に漬け置いたり。

漬けて置いてる間にスープを準備したり。

昨日買っておいたパンを引っ張り出してきたり。

レシピ通りに作ることができた。

ありがとうロリコン怪物。

残りの作業はつつがなく終了し、皿の上には美味そうな肉が乗った。

レシピ通りに作った。

きつと美味いはずだ。

きつと。

機織り部屋に、2人を呼びに行った。

シータは何やら真剣な顔で作業をしていた。

結構長い時間やってただろうに、よく集中力が続くな。

「おい。そろそろ夕食にしないか？」

俺が声をかけると、ニーナがハツとしたように顔を上げた。

「あれ、もうそんな時間？」

いけない。ねえお母さん、ご飯作らなきゃ」

「そうだねえ。じゃあ今から作るから、あなたも手伝っておくれ」

「わかった！」

今日はありがとう！

機織り、難しいけど、面白いね！」

シータはその言葉を聞いて、嬉しそうだった。

「じゃあ、台所に行くぞ」

「ハジメはいいよ。少し時間かかるから、魔術の勉強でもしててよ」  
「まあいいじゃないのさ。」

たまにはハジメも、料理を手伝いたいみたいよ」

「そうだ。俺だつてたまには、料理の手伝いくらいするよ」

そんなセリフを言いながら、台所のドアを開けた。

「つてことで、作つてみたんだ。」

……ニーナ、誕生日おめでとう！」

食卓を見たニーナの眼が見開かれている。

「え？」

あ、そつか。今日私、誕生日だ。」

何これ、え？」

うそ。ハジメが作ったの？」

「そうだ。お前を喜ばせようと思つてな」

「うそ。ハジメ、料理なんてしないじゃない。」

それにこれつて、前に食べた、一角ウサギの料理じゃない？」

こんなの、村で食べられるわけないよ」

「まあ、食べてみろつて。味は分からんけど、がんばつて作つてみたんだ」

「ええー、ホントなの？ ホントにハジメが作ったの？」

「ああ」

「……………うれしい。私。えっと、ありがとう」

ニーナは顔を真っ赤にして、涙声になっていた。

喜んでくれてよかった。

まあ、食ってみてどうなるかは分からないが。

とにかく早く食べないと冷めてしまう。

「さあ、早いところ食べようぜ。冷めたら美味しくないだろ」

「……………うん。そうだね。食べよう」

ニーナは料理を口にした瞬間、幸せそうに頬を緩めた。

ハジメ、これ、すっごくおいしいよ！ 何これ、お店のまんまだよ！ と、興奮しな

がら食べてくれた。

ニーナの皿の上の肉は、あっという間に消えてしまった。

食べ終わって少し悲しそうなニーナに、店ではできなかつた、おかわりをプレゼント

した。

そんなに食べないよ、とニーナは少し恥ずかしそうにしながらも。

そんな言葉はなかつたかのように2皿目をペロリと平らげ、満足してくれたようだった。

た。

シータからは、服のプレゼントだった。

白のシャツと赤のスカートの組み合わせ。

服のプレゼントは毎年お決まりのようだ。

しかし、ニーナは嬉しそうだった。

俺たちに着て見せたあと、大事そうに畳んで仕舞っていた。

よかった。

ニーナは喜んでくれた。

今日はいい気分で眠れそうだ。

……なんて思ってたなら、なんとシータが、俺にも服をプレゼントしてくれた。

グレーのシャツと黒のパンツだ。

俺の体型に合わせて作ってくれている。

シユツとしたシルエツトに、シツクな色合いがかっこいい。

受け取った瞬間、涙が出そうになった。

初めて人からプレゼントをもらった。

こんなに嬉しいものだったとは。

ありがとう、シータに伝えた。

今日も、とてもいい日だった。

## 告白イベント①

ニーナの誕生日から、3か月が過ぎた。

魔術の勉強は、引き続き行っている。

もはや、やらない方が違和感を感じるくらいになってきた。

教本は2冊とも、3周は読んだ。

理解が怪しい時は、何度も読むのが俺の主義だ。

あれから、物にイメージを感じるが増えてきた。

確かにニーナの言う通りだ。

フラッシュバックのように、不意に浮かんでくる。

集中すれば、色んなものからぼんやりと属性を感じる。

そして、果物を想像する訓練も、かなりリアリティを帯びてきた感じがする。

ニーナとやってる特訓のおかげかもしれない。

その様子はというと、こんな感じだ。

「ニーナ、アクリナの実、思い浮かべて」

「いいわよ。ハイ」

「弓矢が飛んできて、アクリナの実に刺まりました」

「ハイ」

「その後剣士が、アクリナの実を真つ二つにしました」

「ハイ」

「いま、どんな風になってる?」

「アクリナの実の果汁が、結構遠くまで飛んだわね。一部は剣士にかかっちゃってる。実は縦に半分キレイに切られて、片方はそのまま。もう片方は転がってる。刺さった矢まで切れて、断面には矢も見えてるわ」

「種はどこにある?」

「地面に3つ落ちてる。1つは剣士についてる。あとは全部実についてるわ。えーと、

1、2、3、、、実にくっついてるのは7つ」

「凄いな、ホントに最初からイメージできてるのか?」

「適当にでっち上げてないか?」

「違うわよ。なんだか毎日やってたら、状況が詳しく頭に浮かぶようになってきたの。

……この特訓のおかげかも」

俺が答える側になることもあるが、詳しく聞かれるとボロが出る。

あるはずのものがイメージできてなかったり。

現実味のないイメージをしてしまっていたり。

でもなんだか、魔術の世界の入り口には、立った気がする。

最近、なんとなく進歩している気がして楽しい。

さて、そんな中。

1つ、珍事件が起きた。

---

それは、唐突に起こった。

俺とニーナが、街から帰ってきて。

今日も疲れたな、久々に魔術の勉強は無しにして、シータとお茶でもして過ごそうか、なんて話していたとき。

「お、お、おっ、お前！」

急に呼び止められた。

突然後ろからお前とは。

失礼なやつめ。

と思つて振り向いたら、男の子が立っていた。

同い年くらいか。見覚えがある。

確かジャック君という、村に住む男の子だ。

しかし、呼び止められた理由は分からない。

「何か用か？」

と聞くと、ジャック君はちよつと面食らつたようだった。

しかしすぐに気を持ち直し、叫び始めた。

「お、お前、いったい何なんだよ！」

急に現れて、ニーナの家に住みやがって！

ニーナと、どういう関係なんだよ」

興奮しすぎて、ジャック君はちよつと涙目になつて叫んでいる。

これは……？

横のニーナをチラツと見ると、きよとんとしてた。

「知り合い？」

「いや、えーつと、話したことない」

その一言に、ジャック君はあからさまにショックを受けた。

ガンンという文字が顔に浮かんで見える。

「二、ニーナ、ほら、3年前、村の集会のとき。覚えてない？」

俺さ、退屈で、広場を歩いてたんだよね。

そしたらさ、お母さんと一緒にニーナとすれ違って、そのときぶつかっちゃったじゃん。

で、俺がごめんって言ったらさ、言ってくれたじゃん、ニーナも。ごめんってさ」俺とニーナに沈黙が流れる。

「他にもさ、2年前くらいかな。

カシルスの葉を近所に配ってただろ？

あの時、母さんが受け取ったけど、俺も家にいたんだよね。

ちよつと離れて、母さんの後ろでニーナを見てたんだ。

そしたら、ニーナが俺に気付いて。視線を送ってきたじゃん。

俺もその視線を受け止めて。2人で見つめ合ったじゃん」

俺とニーナは顔を見合わせた。

ジャック君の話はまだ続く。

「俺さ、ずつとニーナの事を見てた。

いつも不安だったんだ。ニーナ、人気だから。村の若い男は大抵ニーナの事を狙ってる。

いつかニーナが、悪い男に騙されるんじゃないかって、気が気じゃなかった。

そしたら、本当に変な男が現れて、ニーナに害虫みたいにくつつくようになってたんだ。調べたらその男は、ニーナの家に住んでるじゃないか。

ありえないだろ。

年頃の女の子が、同年代の男と1つ屋根の下なんて、嫌に決まってる。

でもその男は、一度獲物を捕まえたら離さないんだ。

タチの悪い寄生虫みたいに、ニーナの家から出て行こうとしない。

きつと、シータおばさんが何か弱みを握られてるんだ。

それでニーナも、仕方なく従ってるんだろう？ 俺には分かる。

……おい、誰のことを言ってるのか、分かってるか？」

ジャック君はそこで俺を指さし、叫んだ。

「お前だお前だお前だお前だお前だお前だお前だ！ この害虫っ！」

……怖っ。

なんかすごい深さの闇を感じる。

おびえる俺を、ジャック君はひたすらにらみ続けている。

まあつまり、ジャック君の言葉を要約すると。

彼はニーナに密かに想いを寄せていた。

が、言い出すこともできず、長い間こっそりとニーナを見守っていた。

そこに唐突に俺が現れた。

俺はニーナのそばにいてどころか、なんと同じ家に住んでまでいた。

そのことにシヨックを受け、なんとか俺を引き離したいと思い、声をかけた。

と、いうことらしい。

……うーむ。

俺の知ったことか、とも思うが。

同時に申し訳なさも感じる。

確かに、俺という存在は、ジャック君からしたら害虫に見えるだろう。

意中の女子と同じ家に住んで、血のつながってない若い男。

体内に仕掛けられた爆弾みたいなもんだな。

村の人とは仲良くやれてると思っていた。

しかし俺が関わるのは大半が大人だ。

言われてみれば確かに、若い男からは冷たい視線を浴びせられたこともあるような。

気のせいだと思っていたが。

とはいえ、どうしたものか。

俺としては、慣れ親しんだ今の暮らしを変えたくはない。

あの家には、俺がずっと欲していた暖かさがあるのだ。

もしもそれを理不尽に奪われてしまったとしたら。

俺は残りの人生をかけて、奪った者に復讐を行うだろう。

それくらい、大切に思っている。

だがしかし。

客観的に見ると、今の状況は良くない気がしてきた。

言われてみれば確かに、俺とニーナは年頃の男女だ。

同じ家に住んでいたら、邪推する者が出るのは仕方ないかもしれない。

あらぬ誤解が生まれては、ニーナにも迷惑がかかる。

俺のせいでニーナが割りを食うのは、絶対に避けたい。

それは俺の個人的な感情より、優先順位が遥かに高いものだ。

とはいえ、解決法が浮かぶわけではない。

俺があの家を出ていくしかないが……行くアテがない。

——そうだ！

ここはひとつ、ジャック君の家に置いてもらうのはどうだろう。

言い出しつぺが責任を取るということにしたらどうだろうか。

とりあえず、彼の目的は達成できるだろうし。

……お、悪くないアイデアじゃないか？

「ナイスなアイデアを伝えようと、俺はチラッとニーナを見て、ギョツとした。」

肩を震わせ。

口をキュツと結び。

瞳孔を開き。

眉間にシワを寄せて。

射殺すような視線で、ニーナはジャック君を睨んでいた。

その表情は、明らかに怒りに満ちていた。

ニーナとは長く一緒に暮らしてきたが、こんな表情は見たことがない。

「……ニーナ?」

俺の言葉を無視し、ニーナはジャック君のもとへツカツカと歩いていった。

その雰囲気に変化を感じたのか、ジャック君も引腰だ。

ニーナはジャック君の目の前でピタッと立ち止まった。

ジャック君が震える声で言う。

「……ニーナ?」

次の瞬間。

ニーナが右手を上げ、ジャック君の頬をはたいた。  
パチンツ！ と高い音が響く。

ジャック君は何が起こったか分からないのか、呆然とした表情で左の頬に手を当てた。

ニーナは目に涙を浮かべ、叫ぶ。

「あなたに何が分かるのよ！」

その音量に、ジャック君はおろか俺までビクツとなった。

「ハジメは……ハジメは、私のことを助けてくれたの！」

救ってくれたの！

ハジメがいなかったら、私はどうなってたかわからない！」

ニーナが叫ぶ。

「それだけじゃない。

ハジメと一緒にいてくれるから、今、とっても楽しいの。

ワクワクするの。安心するの。なんだか胸が暖かくなるの。

ハジメがいなかったら、世界がこんなに楽しいなんて、知らなかった！

それを、何なのよ、あなたは！

何の権利があつて、ハジメにそんなことを言うのよ！

今、ハジメに言ったこと、取り消して！

ハジメに謝って！」

涙を流しながら叫ぶニーナ。

それを、ジャック君は真つ青な表情で見ている。

あの、とか、そんなつもりじゃ、とか声を出している。

見てて不憫にもなる。

しかし。

俺は他の感情に忙しかった。

……俺は正直、うれしかった。

ニーナは、そんな風に思ってくれたのか。

ニーナとの関係は、俺がニーナを助けたことから始まっている。

それだけに、ニーナの俺に対する気持ちは、感謝とか、義理とか。

そういうものが大きいのだと思っていた。

まあ、それを抜きにしても慕われてるんじゃないかと。

そう思ったことがないわけではない。

しかし過去の経験のせいかな。

俺は人の感情を、自分に良いように解釈するのが苦手だ。

裏切られた時のことを、どうしても考えてしまう。

だからニーナの気持ちを含め、全ての他人の気持ちは、俺の中ではブラックボックスだった。

しかし今、その中で最も重要なもののうち一つが、開いたのだ。  
ジャック君は、結局何も言えずに。

最終的には泣き出して、顔を腕で隠しながら立ち去っていった。

それから少し経って。

「人を……叩いちゃった」

ニーナが言った。

彼女は自分の取った行動に驚いているようだ。

「すごいな、俺は人を叩いたことなんてないぞ」

俺は少し、おどけて言った。

そして、体当たりしたことはあるけどな、と付け足した。

……ダメだな。

つい、茶化してしまう。

「だって、なんだかすごく腹が立つちゃって……」。

気がついたら、叩いちやってた……」

ニーナは茫然としている。

自分の行動が余程ショックだったようだ。

「……ニーナ」

「な、何？」

ニーナが不安そうに、こちらを見る。

その揺れる瞳を見ながら、俺は言った。

「ありがとう」

果たして、茶化さず言うことができただろうか。

## ニーナの初級魔術

あの後、3人でジャック君の家に謝りに行った。

ニーナは少し不満そうだった。

しかしやはり、叩いたことに関しては反省しているらしい。

微妙な顔をしながらも謝っていた。

ジャック君のお母さんは気の良い人で、

「子どものケンカでしよう」と笑って許してくれた。

むしろ、ジャック君の俺への暴言について謝られた。

ジャック君もニーナにハタかれて目が覚めたのか。

自分の邪推を恥じたようで、殊勝な態度だった。

俺と目を合わせ、「失礼なことを言つてすみませんでした」と謝られた。

案外良いやつかも。ジャック君。

ちよっと思春期特有の感情で、周りが見えなくなっていただけで。

以上、事件はひとまず、一件落着と相成った。

そしてまた、3ヶ月ほどが過ぎた。

さて、毎度お馴染みの魔術の訓練だが。

最近、ニーナの成長が目覚ましい。

もう果実の特訓で、答えられないことはなくなった。

椅子だとか机だとか、他の物も鮮明にイメージできている。

物質を構成する元素も全て感じているようで、俺が聞くと教えてくれる。

本に描いてある入門編は、全てクリアしているように思われた。

そしてついに。

魔術のイメージ特訓に、本腰を入れて取りかかったのだった。

ちなみに俺はまだ、果実と格闘中である。

「ニーナ、調子どうだ？」

「うーん、ダメ。なかなかうまくいかない」

はあ、とため息をつきながらニーナは答えた。

ちなみにここは、家の裏のカシルス畑だ。

最近ニーナはここで魔術の訓練をしている。

万が一、火魔術でも発動して、家が燃えたら目も当てられないからな。

「何が悪いんだろ」

ニーナがぼやく。

「うーん。」

本に書いてある下準備は、全部整ってそうだけどなあ」

カシルス畑で訓練を始めてから、2か月余りが経過している。

火、水、風、土の中で好きなものを選び、と本には書いてあり、ニーナは火を選んだ。

火を見るのが好きらしい。

他の属性だったら家の中でできたらうに。

まあ、好きこそものの上手なれ、だな。

しかし、いくらイメージを作っても魔術は発動せず。

フラストレーションを抱えているようだ。

やっつてることに進歩が見えないと、イライラしてしまうよな。

「何かやり方が違ってるのかな」

ニーナが言った。

やり方なら、俺にも分かるはずだ。

本の知識は全て頭に入っているのだ。

何か力になれるかもしれない。

「どうやってるのか、教えてもらってもいいか？」

「いいよ。だっていつでも、別にそのまんまだよ。」

目を閉じると、世界に満ちてる魔力を感じるでしょ？

それを両手から取り込むの。

そのあと、起こしたい現象を頭に描く。

それを世界に放つイメージで、手をかぎすの」

「ちよつとやってみせてくれ」

「いいけど……何も起きないよ？」

「いいからいいから」

ニーナはちよつと待つてね、と一呼吸置いた後、おもむろに眼を閉じた。

すると、少しだけ何かがこの場から失われた感じがした。

何だ？

え？もしかして魔力を消費したのか？

焦る俺をよそに、ニーナが集中しているのが伝わってくる。

ニーナは目を閉じたまま、ゆっくりと両手を前にかざした。

……しかし、何も起こらなかった。

「ほらね」

ニーナは嘆息する。

「いやでも、魔力がこの場からなくなる気配があつたぞ。

魔力を取り込む事には成功してると思う」

「うん。私もそれは感じるの。」

でも取り込んだ後、術式に通そうとすると、だんだん身体から出て行っちゃうの」

「でもすごいよ。あと一歩だ」

「その一歩がずっと進めないの。もー」

ニーナは座り込んでしまった。

あと一歩、というところで全然進歩がないのは、キツいんだろうな。

しかし今のを見ていて、1つ疑問に思ったことがある。

「なあ、ニーナ」

「何?」

「詠唱って、しないのか?」

詠唱。

それは不思議な概念である。

教科書によれば。

もともと、魔術に詠唱など存在せず、それぞれの魔術師が固有の術式を組んで発動していた。

しかし不思議なことに、似通った魔術を使う者が大多数であった。

例えば、拳大の火球を飛ばす魔術であったり。

例えば、土で壁を作る魔術であったりだ。

おそらくこの世界には、発動しやすい術式の型、というものが存在するのだろうと結論づけられた。

そこで魔術師達は、それらに名前を付けた。

拳大の火球を飛ばす魔術は、ファイアボール。

土で壁を作る魔術は、ストーンウォール、という具合に。

それらは、その魔術師に可能なことを表すのに便利であった。

さらに、戦闘中に名を叫んで魔術を使うことで、味方に当たる確率を減らすことができた。

そうして徐々に、術名というものが魔術師に浸透していった。

術名を叫ぶ魔術師が増えてくると。

ある時、不思議なことが起こった。

術名を口にしなければ発動できない魔術師が出てきたのだ。

術名とセットで魔術を発動し続けた結果。

術名に術式概念が内包されてしまったのだという。

名に現象が刻まれているぶん発動が容易らしく、昨今では術名を唱えながら魔術を使用することが主流である。

ただし詠唱すると、初心者は単一の現象しか起こすことはできない。

と、教本によると、そんな感じだ。

パブロフの犬みたいな話か。

ちよつと違うか。

ちなみに教本の後ろの方には、初級魔術名の一覧が載っている。

「詠唱？」

「そう、詠唱。」

した方がやりやすいつて、書いてあったぞ？」

「確かにそうだったね。忘れてた。」

……ただ私、イメージを作る時に何か言うのと、イメージが乱れちゃって。

最初は詠唱してみたけど、どっちにしろ何も起きなかつたし、結局魔術の発動に必須じゃないでしょ？

だから最近はいメージを作る方に集中してたの」  
ニーナなりに、詠唱しない理由はあつたようだ。

しかし、試す価値はあるような気がする。

「でも、今行き詰ってるんだろ？」

ダメ元で一回、やってみせてくれないか？」

「……そうだね、わかつた。

やってみる！」

ニーナは俺をまっすぐに見つめ、頷いた。

素直な子やで。

ちよつと待ってね、と言った後。

ニーナはしばらく空を見上げた。

ふう、と呼吸を整え、目を閉じる。

意識を集中するニーナ。

この場から魔力が失われるのを感じた。  
さあ、ここからだ。

ニーナはゆつくりと両手を前にかざし、そして唱えた。

「……ファイア」

——すると。

両手の先に、火が灯った。

え？

マジで？

ニーナを見ると、驚きで目が見開かれている。

口もぼかんと開けて、呆然としている。

俺もそんな顔をしているに違いない。

時間が止まったかのように固まった俺達2人をよそに。

火はしばらく燃えた後、ふつつりと消えた。

俺達はしばらく、石像のようにその場から動けずにいた。

「………できた」

ニーナがゆつくりとこちらを向いて、言った。

「うん」

俺も返事をする。

何も考えられなかった。

みるみるうちに、ニーナの目に涙がたまり。

勢いよく俺に抱きついてきた。

「できたあああああ!!!」

「できたなああああ!!!」

俺も感極まって、ニーナを抱き返しながら叫んでいた。

すごくうれしい。感動した。

今まで散々訓練してきたけど、ホントにできるんだな、魔術。

勇気をもらえた。

ついでに、最近急成長を遂げているニーナの胸部の感触に、少しドキツとした。

「私、びっくりして。ホントにできるなんて。いやできるって信じてやってきたんだけ

ど、なんだか信じられなくて。

信じられない。今の、ホントだよな？ 私できたよね？」

「ああ、俺もすっかり見えた。間違いなくできてたよ」

「やった。うれしい……うえーん、うれしいよお……」

ニーナは俺の胸で泣き始めた。

俺もその華奢な背中を撫でながら、嬉しかった。

しばらくしてニーナが泣き止んだ後、その日は家に戻って眠った。

翌日から、ニーナの魔術の検証をした。

教本に書いてある通りの結果だった。

魔術には、使用できる回数に制限がある。

ニーナの場合は、ファイア5回が限界だった。

4回目で軽度の気分不良を感じ、5回目を使うと、歩くこともしんどいような状態になった。

このように魔術が使えなくなることを魔力切れと呼ぶらしい。

だが、魔力はその辺に溢れている。

足りなくなってるのは別の何かな気がするが。

とにかくそう呼ぶらしい。

その日は俺がおぶって運び。

一晩ぐっすり寝ると、翌日にはケロッとしていた。

起きてきたのは朝食の準備が整ってからだだったが。

それが魔力切れの影響なのか、本人の性質によるものなのかは不明である。本人は断固として、魔力切れのせいだと主張していたが。

あと、詠唱なしでやってもらうと、できなかつた。

やはり詠唱した方が発動が簡単なようだ。

また、炎を大きくしたり小さくしたり。

数を増やしたりをイメージしてもらったが、ダメだった。

詠唱した瞬間にイメージが書き変わり、最初と同じファイアが発動するのだという。

やはり詠唱すると、初心者の場合には型通りの魔術が発動するようだ。

ファイアなら、その人の一番作りやすい大きさの炎が、かざした手の前に現れる、という魔術なのだと教本にも書いてあった。

2つにしたりするなら、独自に術式を作る必要がある。

でもまだニーナもできるようになったばかりだ。

本当は詠唱でも、多少の変化はできるのかもしれない。

まだまだ先は長そうだが、とにかくニーナは最初の壁を乗り越えた。

地道に今まで頑張ってきたニーナを知ってるので、本当にうれしい。

……次は、俺の番になったらいいが。

## 初級魔術習得

さて、ニーナに遅れること約2ヶ月。

ついに俺も準備が整った。

ニーナが使うのを間近で見られたことで、かなりイメージの助けになった。

今ならできる気がする。

ニーナはその間も魔術の訓練を行い、ファイアの大きさを変えることができるようになった。

使える回数も少し伸びて、今では5回使っても少し余裕がある。

「どう？ ハジメ」

「うーん。あとちよつとな気はするんだけど……」

今日もニーナとカシルス畑で特訓中だ。

ニーナは水魔術にチャレンジしている。

俺は、魔力を取り込む段階に苦戦している。

目を閉じて集中すれば、周囲に満ちている魔力を感じることはできる。

しかし、それを両手から取り込もうとしても、何故かうまくいかない。

体が魔力の進入を拒否しているかのようだ。

教本には術式の説明は長々書いてあるのに、魔力を取り込むことについてはほとんど書かれていない。

まるで、そこでつまずくことを想定されていないかのようだった。

うーむ。

「ニーナ、魔力を取り込むのってどうやってる?」

「え、そうだなあ……」。

私はあんまり意識してないかも。

周りにある魔力を感じて、術式に集中したら勝手に入ってくる感じかなあ」

「そうか……。うーん」

ニーナもやはりつまずかなかったようだ。

どうしたものか。困った。

……いや待てよ。

あまり考えない、というのは良いアドバイスかもしれない。

これまで魔力が入ってきてないことを自覚した時点で、集中が途切れてしまっていた

からな。

魔力が入ってこなくても、イメージを続けてみるか。

「ありがとうニーナ。それでやってみる」

「うん。がんばって！」

まずは深呼吸。

目を閉じ、集中する。

自分の周囲に魔力が満ちているのを感じる。

しかしやはり、その魔力が自分に取り込まれることはない。

だが、気にしない。

そのまま、術式を起動する。

イメージはニーナのもと同様。

前方に炎をつくる。

両手をかざし、そこから魔力を放出。

それが拳大程度の炎となる様を、鮮明にに想い描き、唱える。

「ファイア」

——その瞬間。

頭の中のイメージが、強制的に変化した。

拳大の火が、その数十倍に膨れ上がる。

何だ？

分からなかったが、危険を感じた。

咄嗟に、手を上に向ける。

そしてすぐに、目を開けた。

——眩しい。

頭上には、人を丸焼きにできそうな大きさの炎が、煌々と揺らめいていた。

「ええ？」

夜なのに昼間みたいに明るい。

眩しきで目がくらむ。

それに熱い。

何だ、これ？

俺がやったのか？

空中の炎は少しずつ小さくなり、数十秒後に消えた。

ニーナが絶句してこちらを見ていた。

自分の魔術が成功した時よりも驚いた顔をしている。

啞然とした表情だ。

何だ今のは？

状況から考えると、やはり俺がやった可能性が高い。

今の通りの光景が、頭の中に確かに浮かんだ。

しかしやろうとしていたのは、拳大の炎を作ることだ。

何がどうなつて、あんなものが生まれてしまったんだ。

「ハジメ……今の……」

「……えーつと、うん。」

とりあえず……成功、つてことでいいか？」

ダメに決まってる。

危うく、カシルス畑を燃やし尽くすところだった。

コントロールできない魔術ほど、危険なものはないだろう。

「すごい！ ハジメ！」

しかしニーナは、嬉しそうにこちらに駆け寄ってきた。

興奮した表情で、俺の手を取る。

「すごいよハジメ！」

今の何？ ファイアって言ったよね？

ファイアって、私みたいな小さい火を出す魔術だつて、教本に書いてあったよ！

私はそれしかできないし。あんなの作れるなんて、すごいよ！」

ニーナの高ぶった褒め言葉に、つい頬が緩みそうになった。

いやダメだ、落ち着け。

アレは作ろうとしてやったものじゃない。

危険だ。

「違うんだ。アレは俺がコントロールして起こしたものじゃない」

「え、そうなの？」

「ああ。詠唱した瞬間に、無理やり変化させられた感じだった」

「つまり、ハジメは私とおんなじような炎を作ろうとしてたつてこと？」

「ああ。それに失敗して、あんなものができた」

「そっかー。」

……え、でも、すごいよ？

だって、あんなの作れるなんて、聞いたことないもん。

クレタの街の魔術師だって、きっとできないと思うよ」

「……うーん、とにかく、検証が必要だと思う」

そうだ。検証をするべきだ。

あれを俺がやったとして、何故そんなことが起こるのか。

コントロールできるようになるのか。  
使える回数は。

確認すべきことがいくつもある。

俺の態度に、ニーナは少し不満そうだった。

まあ、それもそうか。

せつかく喜んでくれてるのに、当の俺がこんな感じじやつまらないだろう。

……ちよつとくらい、喜んでもいいのだろうか。

「……まあ、できたってことにするか」

「できてるよー」

すごいよ、ハジメ！」

俺がそう言うと、ニーナの顔に笑顔が咲いた。

その喜びように耐えられず、ニーナの手を取って俺も笑った。

まあ、思ったのとはちよつと違ったが、恐らくは魔術を使ったのだ。

嬉しさは抑えられない。

起こったことに対する反省と対策はしっかりするとして。

ひとまず今は、魔術が使えたことを喜ぼう。

——やった。

初めて、魔術を使えた。

翌日、魔術の検証をすることにした。

カシルス畑では危ないので、カンテラ片手に村の広場へとやってきた。

「ハジメの魔術、すごかったねー」

ニーナは一晩経つてもこの調子だ。

今日も1日上機嫌で、シータに何があつたのか聞かれていた。

一応、俺が魔術に成功したとだけ伝えてくれていてもらいたい。

カシルス畑が危うく燃え尽きるところだったと聞いたら、シータはいい気はすまい。

広場を歩き回って、誰もいないことを確認した。

さて、じゃあ始めるとするか。

「ニーナ、危ないから下がっていきなさい」

「はい」

ニーナを後ろに下がらせ、深呼吸する。

目を閉じ、集中して、事象を思い描く。

イメージは、拳大の炎だ。

そして詠唱する。

「ファイア」

するとやはり、イメージが書き換わり。

炎の大きさが膨れ上がる。

……昨晚と同じ、巨大な炎が出現していた。

「すーい」

後ろでニーナがはしやいでいる。無視する。

次は、出現した炎と同じ大きさのイメージで行う。

「ファイア」

すると、イメージは書き換わることなく、そのまま炎が出現した。

ふむふむ。

次は、より大きな炎だ。出現したものよりも、さらに大きなイメージで。

「ファイア」

またイメージは書き換わり、最初と同じ大きさの炎となった。

ふーむ。

結局、出現する炎の大きさ以外は、ニーナのとくと一緒だ。

ニーナも最初、大きさを変えることができなかった。

異なるのは、炎の大きさだけ。

とりあえず俺が魔術を使えるようになったのは、間違いないようだ。

ひとまずは、安心した。

次は使用制限について検証する。

3回やってみたが、今のところ体調に変化はない。

まだまだ使えそうな感じだ。

限界までやってみよう。

「ファイア」

「ファイア」

「ファイア」

「ファイア」

「ファイア」

……

20回使ってみたが、一向に出なくなる気配がない。

これはどういうことだ？

続けてみる。

「ファイア」

「ファイア」

「ファイア」

「ファイア」

「ファイア」

……

50回だ。

飽きてきた。いや、もう少しかもしれない。がんばってみよう。

「ファイア」

「ファイア」

「ファイア」

「ファイア」

「ファイア」

……

100回に到達した。

もうダメだ。終わりが見えない。

やめにしよう。

俺が何度も魔術を使えることにはしゃいでいた二ーナも、もはや飽きて眠そうにして  
いた。

俺も眠い。

「二ーナ、帰ろう」

「いいの？」

「ああ。もう疲れた。とりあえず100回は使えることが分かったから、それでよしと  
しよう」

「100回!?!」

すごいなあ。

……ねえもしかして、ハジメって魔術の天才なんじゃない?」

「俺、すごいのかな?」

「すごいよー。普通じゃないと思う」

「そうか……」

確かに異常だと思う。

魔術の知識は教本2冊分しかないが、それでもおかしいことは分かる。

教本には、魔力切れを起こさない可能性など微塵も考慮されていなかった。

ファイアがあんな大ききになることも同様だ。  
ふーむ。

……まあいいか。

とにかく魔術が使えるようになったし、他の人よりも制約が少ないみたいだ。

いいことづくめだ。

もしも本当に才能があるなら、魔術の道を究めるのも悪くないかもしれないしな。

## 悩み

魔術が使えるようになって、しばらく時間が過ぎた。

俺が魔力切れを起こさない理屈は分からないままだ。

あんな巨大な炎を作ってしまう理由も不明。

俺が周囲の魔力を取り込まないことが関係しているのかもしれない。

とりあえずそれ以上の追究は諦めて、他の属性の魔術を練習することにした。

結果として、4属性の初級魔術を大体3つずつ、使えるようになった。

それなりの時間はかかったが、最初の一步と比べれば大したことはなかった。

ニーナも他の属性の練習をしたが、使えるのは火と水だけのようなだ。

使える属性は、生まれ持ったものも大きいらしい。

さて、魔術のおかげで変わったことがある。

魔術が使えるようになって、生活がかなり便利になった。

特に、アイスの魔術が非常に有用だった。

肉や魚を隣町で仕入れて、冷凍した状態で家に置くことができるのだ。

できるだけ断熱できそうな素材で箱を作り、それを冷蔵庫と称して、氷づけにした肉や魚を入れている。

ニーナと俺が、当番で冷蔵庫の氷を保つようにした。

俺の氷は大きすぎて、使い勝手にやや難があるが。

とにかく毎日新鮮な肉や魚が食べられて幸せだ。

そんな感じで、4大元素の魔術はある程度キリがいいところまで来た。

なので今度は、ニーナと一緒に治癒魔術の習得を目指すことにした。

教本によると、治癒魔術は一段階レベルが高いらしい。

一冊の内容全てが治癒魔術について書かれた本を、ニーナと半額ずつ出しあつて購入した。

それからは、毎日夜に治癒魔術の練習を行った。

今度は家の中でできる分、少し楽だった。

そしてなんと。

練習を始めて2か月もたたないうちに、俺は初級治癒魔術を習得してしまった。

通常は半年から1年はかかるらしい。ニーナもまだできない。

今回は、以前の世界の知識が役に立った。

治癒魔術を習得するにあたって、重要なことは2つだった。

1つは、対象の属性を正確に把握することだ。

魔術を習得してから分かったが、生き物にも属性が宿っている。

普段は意識されないが、集中すると感じるができるのだ。

たとえば、ニーナは火と水、わずかに風だ。

シータは水と風と土。

それらの属性を、詠唱前にできる限り正確に把握すること。

それが重要なポイントの1つとなる。

そして2つ目。

こちらが、俺が早くに治癒魔術を習得できた要因だ。

治癒魔術を遂行するためには、対象の構造を理解しておくことが必要だったのだ。

つまり、解剖学の知識が不可欠なのである。

実のところ治癒魔術の教本は、そのほとんどが解剖のスケッチだった。

そして俺は、小学生の時に居場所がなくて、よく図書室で時間を潰していた。

人体の構造について書かれた本を読んでいたこともあった。

関連した本を読破して、医の道を志そうかと思ったこともあったくらいだ。

もちろん所詮は小学校の図書室に置いてある程度の本。

専門書には及びもつかないお粗末な知識だが、非常に役立つた。

魔術教本のスケッチも、もちろん正確ではある。

骨や筋肉などの大きな組織は、分かりやすく描かれている。

しかし、神経や血管、微小な組織構造は把握されていない。

そのうえ、臓器ごとの役割も曖昧だ。

心臓が血液を送る装置だということ。

肺が空気を交換する部位だということ。

そんなのは書かれているが。

しかし肝臓や脾臓の働きとなると、黒液がどうの緑液がどうのと、もつともらしくは

あるものの、本質の分からない言葉が並んでいる。

まあ、これでも明確にイメージできれば、治癒は可能なのだろうか。

そんな感じで、俺は少し早めに初級治癒魔術を習得した。

俺に先を越されてしょんぼりしてたニーナにも、もとの世界の知識を教えてやった。

知識がごっちゃになるとよくないのではと思います、俺が習得するまでは黙っていたのだ。

肝臓は解毒や栄養の蓄積。

脾臓は消化酵素の分泌。

腎臓は尿を生成するところ。

などといった具合に教えてみると、なんとなくのイメージがついたようだ。やはり事実と近い知識というのは、有用なのだろう。

これで、誰かがケガをしても颯爽と現れて治してやれる。  
魔術師らしくなってきた。

さて、そんなことをしている間に、この村に来て、もうすぐ3年だ。

俺も18歳になる。

正確には分らないが。

もう街を歩いてても、子ども扱いされることはない。

今の環境は、とても居心地がいい。

シートもニーナも本当によくしてくれし、俺も彼女達を大切に思っている。手伝いで関わる村の人たちもいい人ばかりだ。

たまに街に行くのも楽しい。

しかし。

このままでいいのだろうか。

この村で、この生活をずっと続けて。

後悔しないだろうか。

本当に精一杯生きたといえるだろうか。

……最近、悩み始めた。

何故、俺はこの世界にやってきたのか。

その大きな疑問を、解決できていない。

この村にいても、解き明かすことはできないだろう。

村を出て、世界を見て回るべきだ。

そう思う自分がある。しかし。

ダメだろうか？

このまま、村にとどまって、幸せに暮らす。

いいじゃないか。

前の世界のものに比べれば、天と地ほど差がある一生だ。

あの時願ったものの1つは手に入れた。

愛情に包まれた、暖かな暮らし。

それでいいんじゃないか？

これまで願ったことなんて、1つも叶えられたことはなかった。

その最初の1つを守り抜いて何が悪いというのか。

もういいじゃないか。

村を出たところで、理由が見つかる保証なんてない。

それに見つかったところで、どうなるというんだ。

以前の世界に戻りたいわけでもないというのに。

……だが。

だがしかし。

やはりこのままでは、ダメなのだ。

こちらの世界に来てから、楽しく暮らしている。

でも、眠る時にいつも、不安に思うのだ。

明日になったら、世界が一変しているかもしれない。

あの時と同じことが、ここでも起こってしまうかもしれない。

自分という存在に、確証が持てないのだ。

早起きなのは、不安で眠れないからだ。

何をしていても、地に足がついていない気がする。いくら楽しいことがあっても、夢の中のように感じる。世界を俺だけがふわふわと漂ってるような気分だ。自分が何者なのか、分からない。でも。

村を出たところで、それが分かる保証などない。

何かに巻き込まれて、すぐ死んでしまうかもしれない。そんなことになるくらいなら……。

思考はいつも堂々巡りだ。

どうしたらいいか、分からない。

---

「ハジメ、おはよー」

「ああ、おはようニーナ」

いつものように、ニーナが一番遅く食卓に現れた。

もはや卵を取ってくるのは、俺の役目になって久しい。

そして一番遅く起きるくせに、いつも一番眠そうな顔をしている。

「ほらほら、早く食べなさい。冷めちゃうでしょ」

シータが料理を運び終えて、席に着く。

今日のメニューは、カシルスの葉のサラダ、目玉焼き、野菜スープ、パン、カシード。俺がカシーを好きだと言ったら、シータが家にインスタントを置くようにしてくれた。

牛乳と混ぜ、カシオレにして頂く。

カシオレは俺が勝手に呼んでるだけだが。

「プー助も飼ってから、毎日目玉焼きが食べられるの、うれしいね」  
「確かにな。」

やっぱり3人分は、プー助だけじゃ荷が重かったな」

少し前から、鳥小屋に1羽追加したのだ。

卵の生産量は倍になり、時には人数分より多くなることもある。

「カシー、おいしい?」

「ああ、うまい」

「ちよつと頂戴。……うえ、やっぱり苦いよ」

「まあ、飲めないなら無理することはないだろ」

家にかシーが置かれてから、ニーナは定期的に挑戦している。

今のところ、まだ苦味が口に合わないようだが。

ニーナの苦そうな顔を見て笑っていると。

ふと。

視線を感じた。

そちらを見ると、シータがこちらをじつと見ていた。

「……ねえ、ハジメ」

「うん？」

珍しく、彼女が声をかけてきた。

「あなた、近々どこかで、2日間お休みとれないかしら」

なんだろう？

何かの用事だろうか。

不思議に思いつながら、俺はスケジュールを確認する。

「えーつと、2日間となると……そうだな。次の月始めなら」

「そう。」

「じゃあ、そこ空けといってくれない？」

「いいけど、どうしたの？」

「いや、たまにはみんな旅行でもいこうかと思ってね」

「旅行!」

ニーナが反射的に声を上げた。

「ああ。あなたも手がかからなくなっただし、最近服作りも余裕があるからね。

前から考えてはいたのさ」

「えー!」

でも、旅行なんて初めてじゃない! どこに行くの?」

「まあ旅行なんていっても、この辺で行けるところはクレタの街くらいだよ。

みんなで街に行つて、街の高級宿で食事して1泊。

買い物でもして帰ってくるっていうのは、どうかしら?」

「賛成賛成! すごい! 楽しみ!」

「ハジメはどうだい?」

「俺も異論はないよ。……楽しみだ」

「なら、決まりだね」

「うわー、楽しみ!」

高級宿の食事つて、どんなのが出るんだろうね!

食べたことないのがあるかな。

ドラゴンのお肉とか、出てきたりして！」

「ほらほら、今からそんなじゃもたないよ。

休む分、今日からがんばって働くからね」

「はい！　がんばります！」

ニーナが張り切って返事をする。

こうして15日後、旅行に行くことになった。

しかしどうしたんだろう、シータは。

急に旅行なんて言い出して。

まあ、最近ニーナも機織りを覚えてきた。

そろそろ仕事をニーナに譲って、隠居を考えたりしてるのかもしれない。

動けなくなる前に一度旅行でも、という感じだろうか。

そんな歳でもないんだが。

……まあ、何でもいいか。

高級宿で食事と1泊というのは興味がある。

楽しませてもらおう。

## 旅行①

今日は、旅行に出発する日だ。

ニーナが珍しく早起きして、準備を万端に整えていた。

「ハジメ遅いよ、早く早くー」と急かしてくる。

出発する時刻は決めていたというのに。

なんとも分かりやすいテンションの上がり方だ。

俺は荷造りをして台所へ。

台所には、シータがカシーをすすりながら待っていた。

「おはよう、シータ」

「ああ、おはようハジメ」

今日は朝食はなしだ。

街で美味しそうなところを探して食べることにしている。

「ねえお母さん、準備できた？」

「早く行こーよー」

「ちよつと待ちなさい。もう少ししたら出るから」

ニーナが早く行こうよおぼけと化している。朝日が昇る2時間前には起きていたようだ。

遠足の前日は眠れないタイプだな。

俺は冷蔵庫や畑、貯水槽などを確認して回った。

2日間、いなくても問題ないようにしておく。

さらに、戸締りも確認。

万事問題なし。

シータにそのことを伝え、了解を得た。

「じゃあ、そろそろ出発しようかしら」

シータが言ったその途端。

待つてました、とばかりにニーナが自分の荷物を持って外に飛び出していった。

元気だな。

獣道を、雑談しながら歩く。

話題はとりとめもないことだ。

「そういえばジェーンちゃん、結婚したわね」

「うん。私も式にお呼ばれしたの。ジェーンさん、とつてもきれいだっただよ」

「そう。あなたは誰かいなの？」

「お休みのときにこっそり誰かと会ってたりとか」

「え!？」

「いないよー。そんなの」

「俺は、村の男たちはみんな、ニーナの事を狙ってるって聞いたことがあるけどな」

「わっ、やめてよそれ。」

「かなり前にジャック君が言ってたやつじゃん。」

「あれは多分、ジャック君の勘違いだよ。」

「別に誰かに話しかけられたりとか、全然ないもん。」

「たまにチラチラ見てる人はいるけど」

「そう。でもジャック君は、あなたのこと好きなんじゃないかしら」

「えー? うー、そうかもしれないけど……私はそういうの、わかんない」

「俺はジャック君、案外いいやつだと思っただけどな」

「ハジメまで!」

「やめてよもう。別の話しよ、別の話しよ」

ニーナが耳まで真っ赤になっている。

「……それにしても、あなたたちの魔術のおかげで家は大助かりだわ。

魔術つてすごいわねえ」

見かねたシータが、助け舟を出した。

そういうえば、彼女はニーナの魔術習得に少し消極的だったんじゃないか。

もう気にしてないのだろうか。

「でしょー。ホントに便利だよね。

がんばって練習して良かったー」

「本当に使えるようになるなんてな。

最初は絶対無理だと思ったけど」

「とか言ってるけど、フタを開けたら、ハジメは魔術の天才だったもんね」

「そんなにすごいのか?」

「うん、すごいんだよお母さん。

最初ね、私とおんなじ、ちっちゃな火を出す魔術を練習してたの。

ハジメはまだ一回も成功してなくて。

私、がんばれーって思ってたんだけど、そしたら突然おつつつきな炎が頭の上に出て

きたの!

何が起こったかわかんなくて。もう、すごかったんだよ」

「そんなにすごくないよ。多分、よくあることなんだろ」

「ないよー。絶対ない。すごいつてば」

「私も今度、見せてもらおうかしらねえ」

「それがいいよ！ あ、そういえばさ……」

雑談の話題は尽きなかった。

カシルス畑炎上未遂をバラされそうになって少しヒヤツとしたが。

ニーナも俺の知らないところで、けっこう村の人たちとの交流があるようだ。

若者達の噂話なんかも出てくる。

益体もない話で盛り上がり、気づけばレンガ道が見えてきた。

「ねえ、馬車が止まってるよ。珍しいね」

ニーナが言う。

確かに獣道との分岐点に、馬車が止まっていた。

2頭立ての、立派な馬車だ。

フフフ。

ニーナに、ちよつとしたサプライズだ。

「アレに乗って街に行くぞ」

「え？」

「アレは俺たちが乗るための馬車なんだ」

「ええー!?!」

そう。

実は俺が予約しておいた。

宿の予約のために、前もって街に行った時だ。

馬車の貸し出しの店があつたので、一緒に予約しておいたのだ。

知らなかつたのはニーナだけだ。

「だから出発がちよつと遅めだつたんだ！」

お母さんも知つてたんでしょ！ ひどい！」

「まあそう言うなよ。ちよつと驚かせたくつてさ」

「もう！」

文句を言いながらも、ニーナは嬉しそうだ。

皆で馬車に乗り込んだ。

中はフカフカのソファで、乗り心地抜群だ。

ちよつと揺れるが、全然気にならない。

ニーナは大はしやぎだった。

そんなニーナを眺めていると、俺も気分が高揚してきた。  
……旅行つてのは、いいもんだなあ。

街に着き、馬車を店に返す。

快適な道のりだった。

ちなみに帰りの馬車も予約してある。

宿に到着すると、入り口からして、高級感が漂っていた。

彫刻付きの立派な門。

それをくぐると、庭園が見えた。

腰くらいまでの高さの木々が刈り込まれて、幾何学模様仕上げられている。

真ん中には池があり、そばにテラス席がいくつか設けられている。

そこでお茶を飲んでくつろいでいる人もいる。

とても優雅だ。

庭園を横目に歩き、フロントへ。

チエツクインはまだできないが、荷物だけ預かってもらった。

「……これからどこに行く？」

ニーナが尋ねる。

疑問形でありながら、その2つの瞳は朝ごはんを食べようと訴えていた。

俺も同意だ。

「とりあえず、腹ごしらえかな」

「そうね。お腹が減ったわ」

シータも賛同してくれた。

よし、朝ごはんだ。

食べるものをあーだこーだと話し合い、パンケーキの店に入った。

ふわふわ、もちもちとした生地ของケーキの上に、クリームやフルーツが乗っているの

がメインの店だ。

俺は甘いものの気分ではなかったので、肉類や野菜が乗った塩っ辛いやつにした。

なかなか美味しい。

ニーナとシータは、甘いやつを脇目もふらず食べていた。

シータも甘いのが好きなのか。

こうして見ると、やっぱり親子だな、と思う。

そう思った時。

ほんの少しだけ、寂しさを覚えた。

朝食の後は、ニーナが乗馬をしてみたい、と言い出した。

馬車を借りた店で、馬もレンタルできる。

体験乗馬なんてものもあるらしく、インストラクターをつけることも可能と書いてあった。

それを見たのだろう。

悪くないアイデアだ。

馬車の店に戻り、乗馬をしてみることにした。

店の人に連れられて、かなり広い場所に出る。

店の人が小屋から馬を引いてきて、1人ずつ一緒に乗せてくれた。

途中、ニーナが1人で乗ってみたいと主張し、インストラクターなしの乗馬にチャレンジした。

最初は恐る恐る乗っていたニーナだが、徐々に慣れてきたのか、最終的には馬を走らせ、縦横無尽に駆けていた。

俺にはそんな勇気がなく、店の人とパカラパカラとその辺を歩いて終わった。

シータも同様だ。

しかし、なかなか楽しかった。

馬の背に乗ると、景色が予想以上に高く見えた。

その視界のまま動くことができるというのは、新鮮なものだ。加えて、生き物に乗っているという独特の心地良さがあつた。

また腹が減つたとニーナが言うので、喫茶店に入り、昼食を食べた。

食後のカシーを啜りながら、次は何するか話す。

すると今度は、シータが時計塔に登ってみたいと言いだした。

時計塔とは、この街で最も高い建造物だ。

観光スポットでもある。

てっぺんに登って街を見渡すのは気持ちがいいらしい。

といつても、高さはせいぜい30メートルくらいだが。

「さうよー。」

ニーナは二つ返事でOKだ。

もちろん俺にも断る理由はない。

時計塔まで歩くこと30分ほど。

近くで見ると、なかなか迫力があつた。

入り口でお金を払い、いざ上へ。

この世界にエレベーターなんてあるわけはなく、当然のように歩きた。

螺旋階段をひたすら上り、屋上へ出た。

屋上では、街が一望できた。

高さは以前の世界と比べものにならないが。

しかし他に高い建物がなかったため、見晴らしはとても良い。

「すごい！ 人がゴミみたい！」

ニーナもご満悦だ。

シータはというと、何やら景色を見ながら物思いにふけていた。

何だか尻のあたりがムズムズしたが、とりあえず俺も高い眺めを堪能することにした。

その後は、ショッピングに興じた。

オシャレなグラスだとか、ランプだとか、そんなものを見て回った。

シータは食器を買っていた。

普段は帰りの距離が気になって手が出ないが、今回は馬車だ。

荷が重くても問題ない。

俺も何か買おうかと思ったが、特に欲しいものもなかった。

金はそこそこ持つてるんだが……。

とりあえずあらかた満足したところで、宿に戻ることにした。ちようどチエックインの時間だ。

宿に着くと、フロントで部屋の鍵を渡された。

鍵は2つ。

予約する時に、シータたちとは部屋を分けたのだ。

流星に、同じ部屋というわけにはいくまい。

と思ったら。

「えー、ハジメ、同じ部屋じゃないの？」

などと、ニーナが言いだした。

「当たり前だろ。ジャック君に殺されちまうよ」

俺はそう返事をする。

自然に口から出た言葉だったが。

何故だか、ニーナが不機嫌になった。

「何それ。冗談？　面白くないよ。」

「いいじゃない、同じ部屋で」

「珍しく、ニーナが冷たい。」

「何だっつてんだ。」

「ダメだ。大体俺はどこで着替えりゃいいんだ。」

「それにお前が着替えてる時、どうしてりゃいいんだ」

「そんなのお風呂でもトイレでもいいし、ちよつと目をつぶってればいいじゃん。」

「それが嫌なら、着替えてる時でも別に、普通に部屋にいていいよ」

「そんなわけにいくか」

「なんで？」

「なんでって、そりゃそうだろう。」

「だっつて——。」

「……とにかくもう部屋は取ってるんだ。俺はそっちに行く」

「えー。せつかくの家族旅行なのに……」

「飯の時間になったら、ロビーに集合で」

「一方的にそう告げて。」

「俺はその場を立ち去った。」

……何を言ってるんだニーナは。

同じ部屋なんて、無理に決まってるだろ。

俺は、居候だ。

もちろん、俺は彼女達に愛情を感じている。

言つてしまえば、彼女達が大好きだ。

長々と一緒に暮らしてきたし。

彼女らが本当によくしてくれるから。

たまに勘違いしそうになるときもある。

でもダメだろう。

同じ部屋で一晩過ごすなんてのは、分不相応な行為だ。

自分の部屋の扉を開け。

荷物を投げ捨ててベッドに転がった。

部屋には洗練された調度品が置いてあり、窓から覗く景色は美しいものだった。しかし、俺はそれらを眺める気もせず、ぼんやりと天井を見つめていた。

## 旅行②

気づけば、夕食の時間になろうとしていた。

俺は結局、ずっと天井を眺めて過ごした。

そろそろ、準備をしなくては。

ベッドから起き上がり、風呂場に行くと、水が張ってあった。

この世界では基本的に、風呂は水だ。

年中暖かいから、特に冷たくて困るということもない。

ただし暖かい風呂に入る文化自体はあり、大きい街には銭湯のようなものもある。とりあえず俺はその水に浸かり、体を洗った。

風呂場を出て、着替える。

今年の誕生日にシータからもらった、シャツとパンツだ。

シータは毎年、ニーナと一緒に俺にも服を作ってくれた。

本当に、よくしてもらっていると思う。

持ってきたキレイな靴を履けば、準備OKだ。

ロビーに着くと、2人は既に到着していた。

シータは黒のドレスだった。

胸に花の形をしたブローチを着けている。

普段とそんなに印象は変わらない。

……しかし。

ニーナは、別人のようだった。

以前買った青のドレスに、白のハイヒールを合わせ。

肩まである金髪をアツプにしていた。

ほんのり化粧もしている。

唇に引いているのは、もしかしたら俺があげた口紅かもしれない。

高級宿のロビーという場所もあいまって。

普段のニーナからはかけ離れて、大人っぽく見えた。

……こんなに、変わるものなのか。

「すまん。おまたせ」

「ううん。今来たところだよ。行こー」

俺とニーナはまるでデートのような会話をして、食堂へ向かった。

食堂にはたくさんさんの丸テーブルと椅子が並んでいた。

その内の1つに案内され、席に着く。

音楽隊による優雅な演奏が、会場に響いていた。

天井にはシャンデリアのような照明が吊り下げられている。

その明かりの1つ1つは、ランプの炎なのだろう。

「すごいとこだね」

ニーナが目をキラキラさせていた。

正直俺も、こんなにすごいとは思わなかった。

キョロキョロしていたら、食前酒が運ばれてきた。

この国には、未成年の飲酒を取り締まる法律はない。

各自、自己責任で、という感じだ。

そして俺は自己責任において、今日は飲むつもりだ。

つまり初めての飲酒になる。

どんなものなのだろうか。

「ねえ、お母さん、これお酒だよね？ 私飲んでいいの？」

「いいわ。あなたももう15だしね。今日から飲んでいいことにしましょ」  
「わあ、大人の仲間入りだ！」

「もちろんハジメも、飲んでいいわよ」

「うん、飲ませてもらうよ、シータ」

「そう。……じゃあ早速いただきましょうか。乾杯！」

「乾杯！」

目の前のグラスを持ち、高らかに掲げた後。

口元につけていき、ゴクリと飲んだ。

口の中に、甘酸っぱい香りが広がる。

遅れて炭酸の泡沫が口の中で弾け、スツキリとした後味で覆われる。

柑橘系の炭酸酒のようだ。

アルコール度数がどれくらいかは分からないが、飲みにくい感じは全然しない。

美味しい。

ニーナを見ると、旨そうに二口目を飲んでいた。

「お母さん、お酒って、美味しいかも」

「そう、飲み過ぎないようにね。……ハジメはどう？」

「美味しい。もっと飲みにくいもんだと思ってた」

「ふふ、よかったわね」

会話の後は、料理が運ばれてきた。

前菜、スープ、魚料理、肉料理、パスタ、デザート。

どれも美味しかった。

しかし前菜から肉料理まで、それぞれの料理に合うお酒が付いてきた。

1つ1つは少なめに注がれていたが、残すのは勿体ないと全て飲んだ結果。俺は現在進行形で、酔っ払ってしまっている。

ニーナも同様のようで、顔を真っ赤にしてトロンとした目になっていた。

シータはいつも通りだ。

さすがは年の功と言うべきか。

「美味しかったわね」

「ああ、美味しかった」

「美味しかったー。あともう2周したいくらい」

その言葉に笑ってしまった。

シータも笑っている。

酩酊感を楽しみつつ、そのまましばらく雑談に興じた。

食事の後。

皆でそのまま部屋に戻った。

歩いていて、ちよつとフラつく。

真つ直ぐ歩いているつもりなのに、右へ左へと体が動いてしまう。

ニーナはそうでもない。

あれ、もしかして俺の方が酒に弱いのか。

なんだか悲しい。

すぐにニーナ達の部屋の前へと着いた。

——俺は、自分の部屋に戻ろう。

そう判断したにも関わらず、俺の体は動かなかった。

ひとりで寝るのは、嫌だ。

誰かと寄り添って眠りにつく。そんな暖かさに、俺は生まれてきてからずっと、憧れていた。

さつき、せつかくニーナが誘ってくれたじゃないか。

そんな感情が顔を出した。

何だこれは？

俺は酒でどこかおかしくなってるんじゃないか？

「……なあ、ふたりとも。俺もそっちで寝ていいかな？」

気がつけば、そんな言葉を口走っていた。

そして。

ニーナがこちらを見つめて、微笑みながら言った。

「そんなの、当たり前じゃん」

――

部屋に入ってから、シータが俺達に水を飲めと言った。

酒を翌日に残さないための知恵だという。

俺とニーナは言われるがまま、部屋のテーブルで水をがぶ飲みした。

確かに少しだけ、酔いが醒めた感じがする。

「今日は楽しかったね」

ベッドに腰掛けているシータが言った。

「楽しかったー！」

「ああ、楽しかった」

ニーナと俺が答える。

「今日、あなた達と一緒に旅行ができて良かった。

……幸せだったわ。ありがとう」

急に、シータが神妙な事を言い始めた。

やはりこの旅行は何か、思い出作りのような意味合いだったのだろうか。

俺の疑問をよそに、シータは続ける。

「ニーナ、いつか言おうと思ってたんだけどね。

今が一番いいと思うから、言うわね」

不穏な前置きが入る。

何だろうか。

ニーナを見ても、何のことだか分かっていない表情だ。

「……あなたにはね、お兄ちゃんがいたの。

もしかしたら覚えてるかしら。

3つ歳の離れた、お兄ちゃん」

それは予想外のカミングアウトだった。

今まで3年間一緒に住んで、そんな素振りは一切なかった。

「あの子は生まれつき身体が弱くて。

それでも、一生懸命生きてたんだけどね。

あなたが3歳のときに、病気で死んでしまったの」

シータは、目に涙を浮かべていた。

聞いてて、なんだかこっちまで泣きそうになる。

「私は悲しくてね。

ベッドで少しずつ冷たくなっていくあの子の顔を、10年経っても忘れられなかった。

あの子に何もしてあげられなかった。

こんなことなら、あの子は生まれない方が幸せだったんじゃないかって。

思い出す度につらくてね。

だからあなたにも、その話はしなかったの。

でも、いつかは話さなきゃって思ってたのよ。

じゃないと、あの子が可哀想なもの。

自分の妹にくらい、自分の存在を知っておいてほしいだろうから。

でも、話せなかった。踏ん切りがつかなくてねえ」

シートは、とつとつと話を続ける。

ニーナは何かを思い出そうとするような表情で、それを聞いていた。

「……悩んでたらね、ハジメが現れたの。」

初めて見た時に、あの子のことを思い出したわ。

あの子がもし生きていたら、これくらいの歳かしら、つて。

そしたら、なんだか面影があるような気がしちやつてねえ。

髪の色も同じなのよ。お父さん譲りの、綺麗な茶色の髪。

そんなハジメが、ニーナを救ってくれたって知って。

私には、神様がチャンスをくれたんだって思えた。

……もう一度あの子と過ごすことができる、チャンスを」

シートはバッグからハンカチを取り出し、涙をぬぐった。

「もちろん、別人だって分かってるわよ。」

同じだなんて思ったら、ふたりともに対して失礼よ。分かっているわ。

……でもね。

あの子にしてあげたかったことを、ハジメにしたり。

あの子にしてほしかったことを、ハジメがしてくれたら。

そんなことを繰り返す間に。

私の記憶は、少しずつ、淡くて、優しいものに変わっていったの。今ではもう、思い出しても、悲しみに襲われることはない。

あの子も精一杯生きた。

この世に生まれてきて、幸せだったんだって。

そう、思えるようになったの。

……あなたのおかげよ。ハジメ。

ありがとう」

シータが、俺を見つめて言う。

「私はね、ハジメ。

あなたの事を家族だと思ってる。

ニーナも同じよ。

……あなたはどうかしら？

私達のこと、どう思ってる？」

……気づけば、俺も涙を流していた。

ニーナの兄に向けられるはずだった愛情。

俺も間違いなく。

その愛情に救われていた。

「シータ、ニーナ。」

……俺、ふたりのこと、家族だって思っても、いいのかな？」

ニーナがこちらを見つめて、微笑みながら言った。

「そんなの、あたりまえじゃん」

その後、ツインのベッドをつなげて、俺達は3人で寝た。

並びはシータ、俺、ニーナの順だ。

ニーナは兄のことを覚えていないらしい。

ただ幼い頃に、すごく悲しい思いをした記憶だけが、ぼんやりと残っているという。

「それでいい。ただ、兄がいたということだけ知っておいて」と、シータは言っていた。

手を伸ばすと、ふたりの手に触れた。

するとふたりは、手を握ってくれた。

俺も握り返す。

なんだかすごく、安心する。

——今日は、ぐっすり眠れそうな気がした。

## 決心

翌朝。

目覚めると、シータとニーナは既に準備を終えていた。

時計を見ると、予定の時刻をかなり過ぎている。

どうやら寝坊してしまったようだ。

「おはようハジメ」

ニーナがニヤニヤしながら言ってきた。

「おはよう、ニーナ」

「今日はずいぶんとゆっくりお目覚めね」

「いつものニーナほどじゃないだろ」

「あら、そんなことを言うの？」

頬っぺたをつねってきた。

「いてて、悪かったよ。着替えるからちよつと待っていてくれ」

起こしてくれてもいいだろうに、とも思ったが。

多分俺を氣遣つて起こさないでいてくれたんだろう。顔を洗つて、着替えてから朝食に向かう。

朝食はバイキング形式だった。

長テーブルに、料理が所狭しと並んでいる。

ニーナが山盛りの皿を抱えて、その周りをウロウロしていた。アレにまだ足すつもりなのか……。

結局ニーナはその皿を平らげた上におかわりし、さらにデザートを食べた。

それだけ食べばさすがに満腹のようで、「もう食べられない」と天を仰いでいる。しかし、食う割にニーナはスレンダーな体系だ。

いったいあの食べ物はどこに消えているのだろうか。

残念ながら、胸でないことだけは確かだが。

食べ終わつて少し雑談した後。

荷造りをして、宿を出た。

馬車の店に荷物を預けたら、出発時刻まで少し時間が空いた。

するとシータが、少しひとりで買い物したいと言いだした。

それもあつて、とりあえず出発までは、各自で好きに過ごすことにした。

俺は思うところがあり、いくつか買い物をして過ごした。

馬車の店に戻ったら、2人はすでに待っていた。

2人も買い物をしていたようだ。

紙袋を抱えている。

シータの袋はけっこう大きい。

荷物を馬車に置き、皆で乗り込む。

それからは来た道と同じく。

馬車に揺られ。

獣道を歩き。

家へと帰った。

楽しかった。

本当に、楽しい旅行だった。

……おかげで、踏ん切りがついた。

---

帰ってから、シータが街で買った食材で夕食を作ってくれた。

相変わらず、シータの料理は美味しい。

それを食べると、ニーナは早々に寝てしまった。

この2日間、めちやくちや早起きだったからな。

疲れが溜まってたんだらう。

俺も眠い。

昨日の酒がまだ残ってるのだろうか。

もう、今日は寝てしまおうとしようか。

「ハジメ、ちよつといい？」

迷っていたら。

シータに声をかけられた。

声の方に行くと、シータはダイニングの椅子にかけていた。

もう馴染んだ光景だ。

しかし何故か今日は少し、違って見えた。

そして俺と目が合うなり、シータは言った。

「ハジメ、あなた。

村を出ようか悩んでいるんでしょう？」

ドキリとした。

凶星を突かれたからだ。

「……いつから、気づいてた？」

「あなたが魔術を覚えた頃からかしら。」

話しかけても上の空だったり、遠くを見たりしてる事が多くなつたわそんな中二病みたいなことしてただろうか。

恥ずかしい。

「……もし私達のことと悩んでるなら、気にしなくていいのよ。

あなたを家に迎えたときから、その覚悟はずっと持ってたもの。

そりや、あなたがずつといてくれるなら、その方が嬉しい。

でもね、それは、あなたを縛り付けたいってことじゃないの」

「……理由とか、聞かなくていいの？」

そう尋ねると、シータは首を振った。

「いいわ。なんとなく、分かるもの。」

私から、あなたに言いたいことは1つだけ。

私とニーナはね、あなたの家族よ。

これからどんなことがあっても、変わらない。

それだけは、覚えておいて」

「……わかった。ありがとう。シータ」

「こちらこそ、ありがとうね。ハジメ」

シータは近づいてきて、俺を抱きしめた。

俺はしばらくの間、シータのぬくもりに身を預けた。

……その日、俺は。

旅立つことを決意した。

## 前夜

旅行から帰ってきたあの日から。

俺は仕事を新しく入れることをやめた。

何度か街に出かけ、旅に必要な道具を揃えた。

本と地図を買い、旅についての知識を得た。

荷物は多くなると思ったが、案外少なくて済んだ。

俺には水も、火起こしの道具も必要ない。

魔術というのは本当に便利だ。

最近、威力を弱めることができるようになった。

もう、意図せずに馬鹿でかい火の玉を作ることはない。

杖があればもつと調整が楽になるらしいが、道具を買い揃えた残金では、値段が高く  
て手がでなかった。

旅の目的は、俺がこの世界にやってきた理由を知ることだ。

その答えがこの世界にあるのかも分からないが、とにかく俺は知りたいたい。

そのためには、行動を起こさすしかない。

発展した都市に行けば、もしかしたら人を転移させる魔術なんてものも、あるのかもしれない。

そういう手がかりを、探しに行く。

気がかりなのは、ニーナのことだ。

実はニーナには、旅に出ることを伝えられていない。

シータが伝えると言ってくれたので、それに任せている状態だ。

俺から言うのはハードルが高かった。

もし泣き顔のニーナに引き止められでもしたら、決意が揺らいでしまうかもしれない。

もう少しだけここにしよう、と先延ばしにして、結局旅立てない気がする。

それが怖かった。

彼女達には、本当に色々なものをもらった。

こんなにも暖かくて幸せな生活は、生まれて初めてだった。

旅に満足する結果が得られたら、またここに帰ってきたい。

また一緒に暮らしたい。

手前勝手な話だが。

そう思わずにはいられない。

「ねえ、ハジメ」

「うん？」

夜、広場で魔術の練習をしていたら、ニーナが話しかけてきた。

「……どこかに行っちゃおうの？」

ニーナを見ると、いつもの快活さは影をひそめ、不安げな顔をしていた。恐らくシートが話したのだろう。

「ああ。旅に出る。10日後には、出発するつもりだ」

その言葉に、ニーナは目を伏せた。

「……どうして？」

ニーナの声が震えている。

それに気づいて、心が揺れてしまう。

「俺は、自分のことが何も分からないんだ。

自分が何者なのか、なぜこの世界にやってきたのか。

理由があるのか分からないし、それが見つかるとも分からないけど、俺はそれを探したいんだ。

ニーナとシータには、本当に感謝してる。

家族だって言ってくれて、本当にうれしかった。

俺も、家族だと思ってる。

ここが、生まれて初めてできた、俺の居場所だ。

このままここにいて、3人で過ごせたら幸せだと思う。

だけど、ダメなんだ。

俺の中に、いつも不安があるんだ。

明日になったら、自分がいなくなってるんじゃないか、世界が変わってしまったてるんじゃないかって、いつも眠るときには思う。

日常の中で、そんな考えが、頭から離れないんだ。

それを解決するには、ここに来た理由を探すしかないと思うんだ」

俺は言おうと思っていたことを、矢継ぎ早にまくしたてた。

自分の心の揺れが大きくなる前に、ニーナに伝えようと思ったのだ。

ニーナは相変わらず、目を伏せていた。

「……それって、どうしてもしなきゃいけないの？」

目を伏せたままニーナが言う。

「ああ、そう思う」

「……そっか」

ニーナはそう言うと、そのまま広場を去っていった。

俺はしばらくその場に座り込んだあと、また立ち上がり、魔術の練習を再開した。

その日以降、ニーナは魔術の練習に来なくなった。

出発の前日になった。

もう準備は全て整った。

荷物は全てリュック一つに収まった。

それほど重くもない。

保存食、地図、ロープ、着替え、防寒具、雨具、サイフなんかが入っている。

靴は長時間の移動に耐えられる丈夫なものを買った。

ナイフも購入し、ケースに入れて腰に巻いた。

「よし」

準備が抜かりないことを確認したところで。

トントン、とノックの音が聞こえた。

「ハジメ、ご飯できたよ」

「わかった。今行く」

これがこの家での、最後の夕食だ。

台所に入ると、シータとニーナは席についていた。

シータは向かい側、ニーナは俺の隣。

いつも通りの食事風景。

だがテーブルの上には、普段よりかなり手の込んだ、豪華な料理がある。

「私とお母さんで作ったんだ」

ニーナが少しだけ、自慢げに言う。

「ありがとう。頂くよ」

料理を食べるうちに、この家での出来事がいろいろと思いついてきた。

懐かしさが胸にあふれてくる。

ニーナも同じだったのか、えらく昔の話をはじめた。

「ね、そういえばさ、初めてこの家にハジメが来たとき、全然しゃべらなかつたよね。

言葉が通じなくてさ。私ばかりしゃべってた」

「そうだったな。おかげさまで、今はこの通りペラペラだ」

「その後は、カシルスの糸を作ってもらってたっけ。

あの時、お母さんがケガしてたもんね」

「ああ、最近全然作ってないな。今でもできると思うけど」

「いいよ。ハジメの作った糸、線維がぼさぼさだもん」

「えっ、そうなのか。割と自信持ってたんだが……」

「うん、あんまりひどいのは、こっそり私直してたんだよ」

「そりやすまなかつたな」

「いいよ。ハジメのおかげで魔術も使えるようになったしね」

「どっちかつていうと、ニーナのおかげで俺が魔術を使えるようになった感じだけど」

「そう？　じゃあお互い様かな」

「そうかもな」

「魔術の修行も楽しかったね」

「ああ、そうだな。楽しかった」

「ハジメの魔術、ホントにすごいから」

「そんなこと……いや、そうなのかもな」

「そういえば、ハジメが来て最初の誕生日、ご飯作ってくれたよね」

「そんなこともあったな」

「アレね、ホントに美味しかったよ。こないだのコース料理に負けなくらい」

「よかったよ。でも、この料理も美味しいよ」

「作ったのはほとんどお母さんなんだけどね……」

そう言ったきり、急に。

ニーナは黙ってしまった。

無言のまま、食事を食べる。

ややあって、ニーナはぼりりとつぶやくように言った。

「ハジメがいなくなったら、寂しくなるな」

「すぐ、帰ってくるよ」

「……絶対だよ?」

「ああ」

「絶対、帰ってきてね」

「ああ、約束する」

「私達のこと、忘れないでね。」

わた、私達は、ずっと、か、家族なんだからね」

「わかってる。お前らこそ、俺のこと、忘れないでくれよ」

「忘れるわけないよ。」

……うっ、うつく、……うえーん」

ニーナは俺の服を掴んで泣き始めた。

俺はニーナの頭を撫でることしかできなかつた。

胸がちよつと当たつてることに気づいても。

いつからか、ドキッとはしなくなっていた。

---

夕食の片づけが済んだ後。

「さて、ハジメ、あなたに渡したいものがあるんだよ」

そんなことを言いながら。

シータが台所の収納をガサゴソやり始めた。

何だろう。

「ハイ、これ。」

こないだの旅行の時に、買っておいたんだけ」

両手で抱えるくらいのおおきさの、細長い木箱。

「開けてみてちょうだい」

言われるがまま、木箱を開けた。

「……杖だ」

中には、杖が入っていた。

木のできた、美しい杖だ。

先端が捻じれていてカツコイイ。

手に持ってみると、すんなりと馴染んだ。

「安物だけどね。」

魔術師には便利なものらしいから」

「……大切に使用してもらおうよ。ありがとう」

街に行つた時、杖の値段も見た。

一番安いものでも、俺には払えない額だったのだ。

安物なんて、とんでもない。

ありがたく、使用してもらおう。

「ほら、ニーナ」

「わかっているよ、ちよつと待って」

何やらニーナがソワソワしている。

「あのね、ハジメ。私からも、あげたいものがあった。

いや、気に入らなかつたら、貰わなくても全然いいんだよ。

捨てちやつてもいいから。

……一応、見るだけ見てみて？」

何だろうか。

ニーナからそんな風に渡されて、受け取らない物などあるはずがないのに。

ニーナは顔を真っ赤にして、紙でできた箱を渡してきた。

そんなに重くはない。

何だろう。

開けてみると。

中には、ローブが入っていた。

魔術師が着てそうな、フードがついたやつだ。

色はダークブラウン。

かっこいい。

「これ、どうしたんだ？」

「私が織つたの。お母さんに見てもらいながら。」

初めてだから、上手くできてないところもあるんだけど……」

「着てみていいか？」

了承を得る前に俺はローブを羽織つた。

鏡がないから似合ってるかは分からないけど、サイズはぴったりだ。

「よく似合ってる」

シータが言ってくれた。

「ホントに、気に入らなかつたら、捨てちゃっていいから」

ニーナが焦ったように言う。

「捨てるわけないだろ。こんなにカッコいいのに。」

サイズ、ちょうど良いよ。ありがとな、ニーナ」

そういつて俺はニーナを抱きしめた。

「……うん」

ニーナは恥ずかしそうに、俺の腕に顔をうずめていた。

その後、俺からもふたりにプレゼントをした。

旅行の帰りに、買っていたものだ。

シータには、織り物の染料。

消費するものだし、気に入らなくてもそう困らないだろう。

水に溶かして使うもので、中には少し奇抜な色も入れてみた。

ニーナには、赤のドレスを渡した。

青のドレスを着たニーナが印象に残ってて、他の色も着せてみたいと思ったのだ。

ふたりとも喜んでくれた。

ニーナは、ドレスを着てみせてくれた。

ハイヒールを履き、口紅をつけて。

とても綺麗だった。

最後に、いいものが見られた。

# 旅立ち

## 〈ニーナ視点〉

明日はとうとう、ハジメがこの家を出ていく日になってしまった。

ハジメが来てから楽しいことばかりだった。

誕生日を祝ってくれたり、次の年からはハジメの分も一緒に祝ったり。

やめてた魔術の勉強を始めて、魔術が使えるようになったり。

お母さんに教えてもらって、少しずつ服が作れるようになったり。

旅行に行つて、馬に乗ったり、お酒を飲んだり、家族みんなで一緒に寝たり。

少しずつ、私は変化していつて、隣にはいつもハジメがいた。

ハジメが近くにいてくれると、安心する。

ハジメと一緒に何かをすると、楽しい。

ハジメと出会ってから、私は自分の気持ちに分からなかった。

これが恋というもののかな、と思つていた。

でも、なんだか違うような気もしていた。

話に聞く恋というものより、ハジメといる時間は、ずっと優しいもののように感じた。恋というのは。

緊張したり、不安になったり。

気分が高まったり、落ち込んだりするものだという。

ハジメといっても、そんな浮き沈みとは無縁だ。

ハジメといると、安らぐのだ。

旅行をして、お母さんから話を聞いた時、その気持ちの正体に気づいた。

恐らく、私はハジメに、兄の影を見ていたのだ。

物心ついたときから、私には喪失感があった。

それが喪失感と呼ぶものだ、分かったのは最近だけど。

ひとりでいると、何か欠けているような感じがした。

お母さんとふたりでいても、それは埋まらなかった。

ハジメと過ごして、初めてそれが埋まった気がしたのだ。

だから、ハジメが出ていくとお母さんから聞いた時。

私は何も考えられなくなるくらい、シヨックだった。

お母さんには、「笑って見送ってあげな」と言われた。

無理だと思った。

ハジメがいなくなっちゃったら、不安だ。怖い。

そう思っていた。

夜の広場でハジメと話してからも、それしか考えられなかった。

……でも、違う。

もうとつくに、私の欠片は、ハジメが埋めてくれた。

ずっと考えて、ようやく、それをはつきり自覚した。

もう、私は大丈夫なんだ。

今度は、ハジメが、自分の欠片を埋めに行くんだ。

私にできるか分からないけど、笑って見送ってあげよう。

そう、決意することができた。

旅立ちのお祝いに、服を織った。

お母さんのと比べたら、出来が悪くて申し訳ないけど。

でも、どうか許してほしい。

……心だけは、こもってるから。

<ハジメ視点>

ついに、出発の日になった。

この部屋ともお別れかと思うと、名残惜しい。

そういえば最初に着ていたTシャツとジャージは、タンスの奥にしまつてあるままだ。

こちらの世界にはないものだ。

持つていったらなにか資料になるだろうか。

そう考えたが、やめた。

荷物は最小限が望ましいだろう。

最後に、村を1周見て回った。

もうお別れかと思うと、あちこちで思い出がよみがえつてくる。

いや、またきつとここに帰つてこよう。

いつものように、牛乳と卵を手に入れて家に戻ると。

シータが料理を作りながら待つていた。

「おはよう。今日の卵は3個だったよ」

「そう。ご苦勞様。じゃあ今日も、ハムエッグにしようかね」

「ニーナは？」

「まだ部屋から出てきてないよ。」

でも物音はしたから、起きてると思うけど。

最後だから、もしかしたらハジメに起こされたがってるのかもね」

シータが料理を作りながら、苦笑した。

それを聞いて、俺はニーナの部屋に向かう。

どんどん。

「朝だぞー、起きろー」

すぐにドアが開いた。

「おはようニーナ」

「おはよう、ハジメ」

ニーナは顔も洗って、着替えも済んでいた。

「今日は早起きだったみたいだな」

「さあ、何のことかしら」

ニーナがとぼけて言う。

「まあいいさ。朝ごはんにしよう」

「うん」

今日の朝食は、カシルスの葉のサラダ、ハムエッグ、パン、カシーだ。なんだか言葉が出てこずに、黙々と食べた。

片づけを済ませ、部屋に戻る。

ローブに袖を通し、リュックを背負い、杖を持った。

玄関に行くのと、ふたりが待っていた。

見送りをしてくれるという。

村の門まで、一緒に歩く。

20分ほど、他愛ないことを話しながら歩いた。

門をくぐると、ふたりは立ち止った。

門の前で立つふたり。

この光景を目に焼き付けたと思った。

少しの間、皆黙って見つめ合った。

そして。

「……気をつけてね」

ニーナが言う。

「せいっぱい、頑張りなさい」

シータが言う。

「うん。

今まで、ありがとう。

——行ってきます！」

俺はそう言って、歩き始めた。

〈シータ視点〉

ハジメは歩いて行った。

私達はその姿が見えなくなるまで、見送った。

ハジメが歩いていく姿を見ながら、ニーナは泣いていた。

私が言ったからか、今日はハジメの前では笑顔を作っていた。

優しい子に育ってくれた。

「ニーナ、あなた、ついていかなくてよかったの？」

ダメな母親だ。

ハジメが去ってからそんなことを言う。

もしもニーナがついていきたいと言うなら、反対するつもりはなかった。

しかし本当は、ニーナも一緒に行ってしまうことが、怖かった。

あの村でひとりになるのは、寂しかった。

そしてその選択肢を与えてしまえば、ニーナがそちらを選んでしまう気がして、言わなかったのだ。

そういえば、昔ニーナが魔術を覚えようとしたときもそうだった。

魔術を使えるようになったら、この子が遠くに行ってしまうような気がした。

口に出してはいないものの、もしかしたら伝わってしまったのかもしれない。  
ダメな母親だ。

「いいの」

私の考えを見すかしたかのように、ニーナは力強く言った。

「私はね、お母さん。

お母さんから教えてほしいことが、まだまだたくさんある。

それに私、お母さんのこと、大好きなの。

だからね、私は大人になるまでもう少し、お母さんと一緒に暮らしたい」

そんなことを言ってくれた。

思わず、ニーナを抱きしめた。

——ハジメ。

つらいこと、苦しいこと、たくさんあるだろうけど、挫けずに頑張れば、きっといいことがあるよ。

私達はこの村で、あなたの帰りを待ってる。

少なくとも、ニーナが大人になるまでは。

だからあなたも、必ず、帰ってきなさいね。

## アバロン編

### ユリヤンとの出会い

〈ハジメ視点〉

ついに、村を出た。

ふたりのことは気がかりではあるが、新たな一歩を踏み出したのだ。

心を強く持つていこう。

後悔だけはしないように。

サンドラ村を出て、ひとまずいつものクレタの街に向かう。

そこから乗合馬車に乗り、アルバーナの首都——アバロンを目指す。

いくつか経由する街があり、たどり着くのはひと月ほどかかる予定だ。

クレタの街へと到着した。

慣れ親しんだこの街とも、今日でお別れだ。

馬車の予約をした後、最後にあの店で食事をとることにする。

今日のランチは一角ウサギのグリルだった。  
思い出のあの味だ。

懐かしい。

一心不乱に食べた後、カシーを飲んで一服する。  
時計を見ると、ちようどいい時間になっていた。

最後に、店主にちよつと挨拶した。

旅に出ると伝えると、気をつけてな、と言ってくれた。  
相変わらず、顔に似合わず優しい人だ。

——さて、出発するでしょう。

大通りの交差点に、乗合馬車の乗り場がある。

隣の街まで、1日に3度ほどの便が出ており、乗るのは最終便だ。  
すでに待つてゐる人がいる。

俺も椅子に座つて待つ。

待つてゐるのは5人だ。

若い男が1人と、若い女性の2人連れ、老夫婦。

そして何やら、若い男が女性2人に話しかけている。

「……だからさ、次の街に着いたら一緒にご飯食べようって。奢るからさー!」

「えー、どうしよっかなあ。

どうする?」

「わかんないよー。お姉ちゃんが決めてよ」

「どうやら、男が女性2人をナンパしているようだ。

女性達は姉妹らしい。

男はなかなかイケメンだ。

ブロンドの髪をそよがせながら、にこやかに話している。

それもあってか、姉妹はまんざらでもなさそうだ。

「ね、いいじゃんいいじゃん。

「だいたい馬車の中だって退屈だろ?」

「話し相手はいた方がいいって!」

「えー、そうだねえ、でもちよつと怪しいもんなー」

「全然怪しくないよ、俺。

「実はいいところのお坊ちゃんなんだぜ。

「俺の家を2人にみせてやりたいよ。きつと驚くと思うよ」

「家ってどこにあるの？」

「アバロンにあるんだ。」

一等地で超広いから。めっちゃすごいから」

なんだか軽薄そうな男だな、と思いつつ。

聞き耳を立てていると、馬車がやって来た。

1人ずつ乗り込んでいく。

向かい合わせの席が4つずつ。

俺は最初に乗りに込んで一番端に座った。

するとその後、隣にナンパ師の男、対面に姉妹が着席してしまった。

最悪な状況だ。

老夫婦は逆側の端に向かいで座っている。

……まあしょうがない。

なに、たった5時間くらいの辛抱だ。

くそ、長いな。

「ねえ、2人ともどこに住んでんの？」

「えつとねえ、これから馬車で向かう街だよ」

「ここに何しにきたの？ ……あ、ちよつと待って、当ててみせるから。えーつとねえ、

そうだなあ、2人とも美人さんだもんなあ、それに品もあるよね。育ちもよさそうだしきつといいとこのお嬢様なんじゃないかな。それで、この町にはちよつと観光旅行つてどこじゃないかい？ ちがうかい？」

「ぶつぶー、はずれです。私たちは隣町で花屋をしてるの。この町には種の仕入れに来たんだよ。もお、全然当たってないじゃん」

と、言いつつも、女の子達は美人だの品がいいだのという言葉で嬉しそうだ。

「あれ、おかしいなあ。ちよつと2人が魅力的過ぎて、目が眩んじまったみたいだ。でも、お花屋さんもいいね。かわいらしくて、イメージぴったりだ」

よくもまあ、こんな歯が浮くような気色悪いセリフがつらつらと出てくるもんだ。

しかし、姉妹はなんだか満更でもない顔をしている。

……何だろう。

俺の中に湧いてくる、誰に向けることもできないこの苛立ちは。

「ねえ、種つて重いだろ？ 街に着いたら俺が持つよ」

「種なんて、全然重くないよ。あはは。ちよつと楽しいかも。あなた、名前なんていうの？」

「楽しんでもらえたならうれしいよ。俺はね、ユリヤン。」

ユリヤンⅡウオードつていうんだ」

「そう。ユリヤンは何しにこの街に来たの？」

「俺はねえ、探し物をしにきたんだ。見つからなかったけど。」

でも、もつと素晴らしいものが手に入ったよ。

君達と話せる、この時間ほど価値あるものはないね」

「もー、まじめに答えてよ」

「あはははは」

「あはは」

俺の眼前で飛び交うその笑い声は、なぜだか非常に癪に障った。

危うく、苛立ちが殺意に変わりそうになっている。

いかん。

こういう時は寝るのが一番だ。

本能でそう判断した。

寝よ寝よ。

……しかし、俺が目を閉じようとしたその時。

「君は、どこから来たんだい？」

ユリヤンが俺に言った。

……。

……え？

俺に話しかけてくんの？

女の子2人と会話して楽しそうだったじゃん。

やめろよ、そういうの。

この3年間、俺は村の人以外とはほぼしゃべってない。

俺の人生すべてを振り返っても、こんな男女で和気あいあいとした雰囲気の話に入ったことなんて存在しない。

勘弁してほしい。

……しかし。

このまま開いてる眼を閉じて何も言わなかったら。

俺はこのイケメンを無視したことになる。

女性2人からも、コミュ障の烙印を押されてしまうだろう。

常識的に考えても、人に問われたら、返事をせねばなるまい。

やばい、心臓がバクバクしてきた。

くそ。

俺はゆつくりと顔を上げ、イケメンの眼を見て言った。

「サンドラ村から」

ああ、言えた。

なんとか、震えずに声を出せたはずだ。

しかしなんでこんなに緊張するんだ。

女が2人もいるからか？

でもニーナとは普通に話せてたじゃないか。

目の前の2人よりニーナの方が断然美人だぞ。

家族の欲目とかじゃないはずだ。

やっぱりあれか。

妹として見ていたからか。

知らなかった。

見知らぬ女と話すことがこんなに緊張するなんて。

厳密にはまだ、男としか話していないのだが。

「サンドラ村って、あの田舎のどこだよ。馬車も走ってない」

「うそー、あそこなの。すごーい。どんな生活してるの？」

姉妹が同時に話しかけてきた。

さりげなく田舎をデイスってやがる。

しかし、もうダメだ。

女に話しかけられてさらに心拍数が増している。

この緊張の中で、デイスへの反撃を加えつつ、村の生活について女2人に語るなんて不可能だ。

どうする……??

どうする……!?!?

「名前、なんていうの?」

その時。

渡りに船を流すかの如く。

ユリヤンが言った。

俺は不覚にもその言葉に、救われてしまった。

名前なら言える!

「ハジメだ。タナカ ハジメ」

「へえ、変わった名前だな。どこか遠いところの生まれなのかな?」

「……まあ、そんなところだ」

「なるほど。俺はユリヤン。」

ユリヤン⇨ウオードだ。よろしくな、ハジメ」

「ああ」

それをきっかけに。

俺を交えて、会話が続いた。

ユリヤンは、まるで俺の緊張を全てお見通しかのように。

さりげなく会話をリードし、俺をフォローしてくれた。

できる男だ。

殺意を持ったことについては謝りたい。

徐々に俺も会話に慣れ、普通に話せるようになった。

慣れてしまえば、会話は楽しかった。

途中、妹の方が喉が渴いたと言ったので、魔術で水を作ってやったら驚かれた。

やはり魔術師はそう多くないらしい。

でも杖持つてるんだけどな。

こうして、旅立ち初日の馬車の旅が終わった。

そして隣町に着いた後、なんと、4人で酒を飲むことになった。

もちろんユリヤンの誘いだ。

姉妹は2人とも快諾。

出かけは怪しまれてたというのに。

入ったのは、シャレた店だった。

暗めの照明に、ピアノっぽい楽器のBGMが流れている。  
当然、生演奏。

この世界、演奏家の需要は多そうだ。

酒の種類など知らないの、皆と同じものを頼んだ。

飲んだことが1度だけだと言うと、純朴そうだもんね、と言われた。

せつかくだから、村の生活の良さについて語ってみた。

しかし姉妹には「街まで徒歩3時間なんてありえない！」と笑われ、なんの効果もあがらなかった。

ニーナ、シータ、ごめんよ。

俺では村の良さを伝えられなかったよ。

でも俺は、サンドラ村が大好きだよ。

しかし、なかなか新鮮で楽しい時間だった。

いい頃合いで、店を出た。

代金はユリヤンが全額払うと主張したが、さすがに俺も半分出した。

さて、これからユリヤンはどちらかを選び夜の闇へと消えていくのだろう、と思っ  
いた。

俺を巻き込んだのも、余りが出ないようにするためだろう。

しかし俺は、残った方と遊びに出かけるつもりはない。

興味が無いことはないが、そんなのはちやんと、好きな相手とがいい。

何と言つて別れようか考えながら、道を歩いていた時。

意外なことに、ユリヤンが解散を宣言した。

姉妹はどこことなく残念そうにしていたが、何も言わず家へと帰つて行つた。

……意外だ。

「よかつたのか？」

横にいるユリヤンに尋ねる。

「何が？」

「てつきり、どつちかと街に消えるもんだと思つてたよ」

「ああ、そのつもりだったんだけど、気が変わつてさ」

「どうしたんだ？」

「ハジメに、興味がでてきてね」

ユリヤンが、こちらを見ながら言う。

その言葉に、俺はぞつとした。

「ま、待つてくれ。」

俺はダメだ。

その、俺は……俺は、童貞なんだ。

初めてはせめて、女の子がいい」

「……ハジメこそ待ってくれ。お前は何を言ってるんだ？」

「何って……あれ、違うのか？」

「全然違う。気持ち悪いこと言うなよ。俺は女が好きだ」

「何だよ、驚かせやがって」

「……………」

「……なんだよ？」

「……ハジメ、童貞なのか」

「あ？ 何か文句あんのか？」

「えー、いや、別にいい？」

「ふーん？」

くそ。

こいつ、童貞を見下してやがる！

「何なんだよその興味っていうのは？」

「ハジメ、魔術を使えるんだな」

「うん？ ああ、使えるよ」

「どうやって覚えた？」

「家の本棚にあった、教本で勉強した」

「そうか。けっこう珍しいよ。」

魔術学校に通わずに魔術師になるって。

独学はきついつて聞くけどな」

「まあ、それなりに苦労はしたよ」

「どれくらい使えるんだ？」

「大したことねーよ。初級魔術だけだ」

「……そうか」

黙ってしまった。なんだ？

魔術に興味があるんだろうか？

「まあ、いいや。それは置いといてさ。」

俺、ハジメと一緒に旅をしようと思って」

「……はあ？」

「だってハジメ、目的地はアバロンなんだろう？」

俺もアバロンに帰るところなんだ。

どうせなら一緒に移動した方が楽しいじゃないか。

その上、宿も2人で1部屋なら安上がりだし、万一盗賊なんかにあつても断然有利だ」

「まあ、確かにな」

「それに俺は、ハジメが気に入った。

ハジメはどうだ？

俺のこと嫌いか？」

……なんかやつぱりちよつと、怪しい感じの会話になった。

まあ、今日でユリヤンの人となりはおおよそ分かった。

軽薄なやつだけど、周りを不快にはしない。

発言の端々に、相手への思いやりが感じられる部分がある。

俺は嫌いじゃない。

経済面でも安全面でも、2人組の方がいいのは間違いない。

……うん。まあ、いいだろう。

「わかった。アバロンまで、一緒に行こう」

「そこなくつちや。

じゃあ、さっそく宿を決めるとするか」

「ああ」

こうして、旅立ち初日にして、ユリヤンという道連れができた。  
まあ、1人旅よりはマシだろう。  
道中退屈せずに済みそうだ。

## アバロン到着

ユリヤンと出会ってから、旅は順調に進んだ。

ひと月かけて、10以上の街を経由する。

最初は街に着く度に新鮮さを感じていたが、さすがにだんだん飽きてくる。

旅の間の1日の行動も、ほとんどパターン化されてしまった。

朝起きたら宿で朝食をとり、馬車に乗る。

馬車で話しかけても大丈夫そうな人がいれば、雑談する。

毎日長距離移動なので、退屈を紛らわすには話しているのが一番いい。

最初に会ったときユリヤンをあやしいナンパ師だと思ったが、知らない人と雑談する

のは合理的な行動だった。

いやしかしまあ、あいつがナンパ師であることは間違いないが。

街に着いたら、宿を決める。

その後は、馬車で会った人と飲んだり。

ユリヤンが街で引っかけてくる女の子と飲んだりする。

ユリヤンのナンパの成功率は異常な高さだった。

そして、やつは飲んだ女の子とどこかへ消え、宿に戻らないこともしばしばあった。それは別にいいのだが。

2人組の女の子の片割れを俺に押し付けていくので、何もせずに別れるのが気まずいことが問題だった。

俺がそれに対して文句を言うと。

やつはなんと、2人とも連れて行くようになった。

女の子を2人連れて、その後どうしているのかは定かではない……。

まあ、そんなエピソードを挟みつつも。

ユリヤンとの旅は楽しかった。

まだ出会ってそう時間は経っていない。

しかし2年半一緒に過ごしたサッカー部のやつらより、遥かに親しく感じる。

思ったことをこれほど素直に口に出せる相手は、初めてだ。

俺は、ユリヤンに友情を感じていた。

それはもしかしたら、ユリヤンも同様だったのか。

ある夜、二人で飲んだ時に秘密を打ち明けられた。

なんと、ユリヤンはアルバーナの王族だった。

本名はユリヤンⅡウォードⅡアルバーナ。

まあ側室の末弟で、王室内の扱いは下の中くらいだそうだが。

とはいえユリヤンはれっきとした、アルバーナの王子様ということだ。

しかしなぜ、そんな人物がこんなところにいるのか。

それについて聞くと、こんなことを言っていた。

「もうじき俺は、魔族との戦争の最前線で指揮をとるんだ。

まあこの500年間、一度も攻められちゃいないんだが。

それでも昔からずっと、各国で代表を派遣する決まりになっているんだ。

任期は10年で、前任者はもうすぐ任期満了。

それで今回白羽の矢がたったのが、俺だった。

だから俺は、これから10年間、はるか遠くの地で暮らすことになる。

ただ、そうなる前に一度自由に旅をしたくなつてな。

戦力を地方からも探すという名目で、2年くらいフラフラ旅してたんだ」

だそうだ。

王族に生まれても、いろいろと苦労があるらしい。

ノブレスオブリージュというやつか。

普段のユリヤンからはあまり想像できないが。

そしてその時、俺のことも聞かれた。

適当に濁そうかとも思ったが、やめた。

初めての友達には、正直でいようと思ったのだ。

しかし事実を伝えると、ユリヤンは爆笑しやがった。

そうか、大変だったんだな、とヒーヒー言いながら笑っており、信じてはいなそうな  
感じだ。

……まあ、それならそれでいいだろう。

ついでに、転移魔術について尋ねてみたが、全然知らないそうさ。

魔術は専門外らしい。

女を口説くこと以外に専門があるのかと聞いてみたら。

笑いながら、それには遥かに及ばないが、と前置きして。

剣術だけは鍛えていると言っていた。

その時は、特に印象にも残らず聞き流していた。

しかし、ユリヤンの剣術の腕前は相当なものだった。

俺がそれを知ったのは、つい数日前のことだ。

その日。

いつものようにユリヤンと話しながら馬車に揺られていると、御者が叫んだ。

「魔物だー」

馬車が止まり。

すぐさま護衛が外に出て、魔物と対峙した。

俺を含めた乗客は、おっかなびっくり馬車の窓からその様子を眺める。

基本的に魔物は森に住み、街や道には寄り付かない。

しかし魔物にも個性があるのか、たまに出くわすことがある。

なので重要な街どうしをつなぐ馬車は、国から護衛が派遣されているのだ。

魔物は灰色の熊のような姿で、爪と牙がやたら長く、鋭かった。

殺傷能力抜群って感じだ。

そのうえデカく、3mはある。

乗客に聞くと、グレイベアという名前らしい。

俺も加勢するべきか、とも思ったが。

魔物を見るのも初めてな素人が手を出しても、ろくなことがない気がする。

そう思い、プロに任せることにした。

護衛の人は、襲い来る突進をうまくいなしながら、的確に剣でダメージを与えていた。

グレイベアはあちこちから血を流して苦しそうだ。

見事な剣捌きだった。

おそらく乗客の誰も、このまま倒しきるだろう、と思っていた。再度、グレイベアが突進をしかける。

何度も見た動作だ。

毎度のごとく、護衛の人がいなそうとした瞬間。

グレイベアは急に立ち止まり、腕を振るって爪で攻撃した。

行動の変化についていけず、護衛の人は態勢を崩される。

危ない！　と思つた直後。

ゴトリと音がして、グレイベアの首が地面に落ちていた。

護衛の人は何が起こったか分からないような表情をしている。

気づけば隣にいたユリヤンがいなくなっており、グレイベアの横に立っていた。

剣を振るつた姿勢で。

ゴロゴロとグレイベアの首が転がり、慣性を失って止まった後。

乗客から歓声があがった。

馬車に戻ってきたユリヤンに、声をかける。

「すごいなユリヤン」

「まあ一応、道場の免許皆伝だからな。あれくらいはできる」

さらりとそう言い、何事もなかったかのように雑談に戻った。

護衛の人から感謝され、俺の分まで馬車代がタダになった。

さらに乗客からの賞賛を受け、にぎやかな空気で旅ができた。

ユリヤンは必ず、剣の訓練は毎日行っているらしい。

雨の日も。

風の日も。

女を口説いて飲んだ日も。

本当に、剣に対してはストイックなようだ。

さて。

そんな紆余曲折を経て、ついにアバロンまでやってきた。

アバロンの街は、さすがに他とは格が違った。

見上げるほど高い城壁が、彼方まで続き。

中央の分厚い城門をくぐると、街の賑わいが耳に響いてきた。

どこまでも真っ直ぐな大通りの脇には、洗練された商店がずらり。

そしてその道の先には、天高くそびえる白亜の城、アルシユタット城。

その莊嚴な佇まいをもって、俺達を出迎えてくれた。

「よお、田舎にはこんなもんなかっただろ」

ユリヤンが自慢げに話しかけてくる。

「ああ。すごいなこれは。でもお前のものじゃないだろ」

「1000分の1くらいは俺のもんだ」

「ならドヤ顔も1000分の1にしてくれよ」

「ははっ。確かにな」

その後ユリヤンと1000分の1のドヤ顔についてどんなものか話し合った。

完成したドヤ顔は、口の端がわずかに上がっている、ほぼ真顔になった。

「その顔なら許そう」

「見たか、これがアバロンだ」

「ああ、恐れ入ったよ」

くだらない会話をしていると、降りる場所が見えてきた。

しかし考えてみれば、これでユリヤンともお別れだ。

寂しくなるな。

リュックを背負い、馬車を降りてから尋ねた。

「ユリヤンはこれからどうするんだ？」

「俺は城に戻って、しばらくダラダラするよ。」

前任者の任期はもう少しあるはずだから、それまで自由にさせてもらう。

ハジメこそ、どうするんだ？」

「俺は転移魔術について知りたいから、魔術協会を訪ねてみようと思う」

「そうか。」

……あ、忘れてた。

そういうえばハジメ、魔術学院って知ってるか？

俺が旅で唯一見つけた魔術師候補ってことで、入学金はタダにできるぞ」

「魔術学院？」

初めて聞いた。

そんなものがあるのか。

「そう。魔術って便利だからな。育成機関くらいある。

他の街にもあるけど、ここの規模は別格だ。

優秀なやつはスカウトされて、宮廷魔術師になったりするんだ」

「なるほど。」

それはいいことを聞いた。

魔術教会が空振りだったら、そっちを訪ねてみることにするよ」

ユリヤンは頷き、荷物を背負いなおした。

「……俺は城にいるから、何かあつたら来い。」

門番に俺の名前を出せば、通れるようにしとく。

ただその時は様をつけろよ。不敬罪でしよつぴかれかねないからな」

「それは困るな。」

ユリヤン様、なんて言おうとしたら、呼吸困難でしゃべれなくなるかもしれない」

「タダ券と引き換えだ。そのくらい我慢しろ」

そう言うと、ユリヤンは苦笑した。

「……いろいろありがとう、ハジメ。」

お前のおかげで旅も楽しかった」

「俺もだよ。またな、ユリヤン」

手を振りながら、ユリヤンは去っていった。

あいつのおかげで、いろいろなことを知ることができたし、旅もスムーズで楽しいものになった。

またどこかで縁があればいいが。

さて、さつそく目的の魔術協会を訪ねることにする。

停車場から歩くこと15分ほど。

あっさりど、魔術協会に到着した。

こじんまりとした建物だ。

しかしレンガ造りの壁にはツタが絡み付き、その歴史の深さを浮かばせる。

扉を開けて中に入ると。

全体的に古いが、よく言えばアンティーク調ともいえる内装だった。

正面にカウンターがあり、数名の受付嬢が立っている。

他に簡素なテーブルとイス、壁には大きな掲示板があり、紙がいくつも貼られていた。

魔術師らしき男が2人、掲示板を眺めている。

受付嬢の1人に声をかける。

「あの一」

「はい、いかがいたしましたか?」

「まず、ここの組織について、教えてほしいんですけど……」

そう尋ねた俺に、受付嬢は丁寧に説明してくれた。

簡単に要約すれば。

まず、魔術協会とは、魔術師同士の寄り合いのような組織。主な業務は業務のあつせん。

魔術師の需要は、便利屋や護衛、式典への参加など、多岐にわたるといふ。それらに対して適正な会員を派遣し、マージンを取っている。

また、会員になると会費も取られるらしい。

それらを何に使うかという、魔術研究への出資と、研究成果への褒章だそうだ。この建物の裏に研究棟があり、日夜魔術師が研究を行っているのだという。

そして研究をまとめた雑誌を、月に一度刊行しているらしい。

「……その雑誌というのを読みたいんですが、可能ですか？」

受付嬢に尋ねてみる。

……研究雑誌。

それを調べれば、転移魔術に関することが何か分かるかもしれない。

「今月の物はロビーに置いてますので、どなたでも閲覧可能です。」

しかしバックナンバーは、図書館に保管しているので、会員でないと入れません」

「会員になれば、入れるんですか？」

「恐縮ですが、図書館に入ることが可能なのは、C級会員からです。」

階級はA〜Eの5等級であり、各等級ごとに様々な条件があります」

「C級になるためには、どうしたら？」

「C級会員ですと、半年以上当会の会員であることが必須となります。

その他に、中級魔術を扱えること、一定の研究成果を認められること、魔術学校の卒業生であること、などの条件のいずれかを満たさなければなりません」

なんと。じゃあ図書館に入るのに少なくとも半年はかかるってことか。

「……けっこう厳しい条件ですね」

「図書館には、歴史的な価値のある本もありますので……」

簡単には入れないか。

どうしたものか。

俺の目的は、俺がこの世界に來た理由について調べることだ。

ずっと考えていたが、そんな荒唐無稽なことが可能そうなのは、魔術しか思い浮かばない。

やはり、ここが最も答えに近い気がする。

ならば条件を飲むしかないか。

「わかりました。」

それでは、魔術協会に入るにはどうしたらいいでしょうか？」

「いくつかの書面による手続きと、入会費が必要です。」

書面は数分で準備ができます。入会費は、銀貨5枚になります」

「銀貨5枚!？」

「はい、銀貨5枚です。」

また今後、会費として月に銀貨1枚が必要になります」

……なんと。

銀貨5枚も払ったら、俺の財布はかなり目減りする。

「……わかりました。手続きをお願いします」

「了解いたしました。ではまず、こちらの書類に——」

その後、十数分で手続きは終わった。

基本、名前と住所を書くだけだった。

住所はサンドラ村のものを書いておいた。

銀貨5枚を渡すと、少し豪華な紙でできた会員証と会員カード、それとバッジを渡され、晴れて俺は魔術協会員となった。

その後、安宿を探したが王都というだけあってなかなか見つからず。

路地裏で見つけた、あまりきれいとは言いがたい宿に泊まることにした。

安いだけあって、ボロいし汚い。

しかし、こんな宿ですら、泊まれるのはあと10日くらいだ。

何とかして金を稼がなければ。  
明日から、仕事を探すでしょう。

## 冒険者になる

普段から眠りは浅い上に、布団も固かったので、寝覚めはひどいものだった。風呂で水浴びをして、気分を切り替える。

よし、今日は仕事を探すんだ。

街に出て、散歩しながら店が開くのを待つ。

それにしても、きれいな街並みだ。

昼間の活気がある賑わいもいいが、早朝の閑散とした姿もまた趣がある。

割と早くパン屋が開いたので、焼きたてのパンを買った。

そいつをくわえて道を歩きながら考える。

仕事といっても、どうしたらいいものか。

俺にできることといえば、魔術と肉体労働くらいだ。

魔術は初級魔術のみ。

しかし、威力は上げようと思えば上げられるし、際限なく使うことができる。

アピールポイントがあるとすれば、そこだ。まあ、せっかく魔術協会にも所属したのだ。

仕事をさがすなら、やはり協会の掲示板が一番手っ取り早いだろう。とりあえず、魔術協会の建物を目指すことにした。

協会の掲示板には、様々な依頼が載っていた。

魔術の家庭教師、旅の同伴、護衛、魔術を利用した行事への参加などだ。

しかし、そのほとんどがD級以上の魔術師に向けたものだった。

E級に可能なのは、研究材料のお使いや実験助手など。

魔術が使えなくてもできるようなものばかりだ。

どれも時間がかかる割に小遣い程度の稼ぎにしかならず、これだけで生活するのは厳しい。

D級に上がる方法を受付嬢に尋ねたところ、初級魔術が使えばすぐに上がれるらしいが、また銀貨5枚が必要とのことだ。

もう俺の財布には銀貨5枚も入ってない。

少し腹が立って尋ねる。

「初級魔術が使える、E級の魔術師じゃダメなんですか？」

「当会への依頼ですので、派遣する当会には責任が生じます。

それゆえ、当会の審査基準をもって、依頼ごとに可能な会員を選別させていただいております」

その審査基準に払った金が関係するというのは、おかしな話だ。

いい依頼を受けたければ協会に金を払えと言っているようにも思える。

毎月会費も取られるし。

こんなの、E級の会員なんて暮らしていけないじゃないか。

そう考えて、ふと思った。

……あれ。もしかして、魔術協会って仕事のために入るものじゃないのだろうか。

話を聞いてると、商売よりも学術機関としての側面の方が強い気がする。

協会員になって、バリバリ魔術で稼ぐんだ！ って感じじゃない。

魔術を学ぶ貴族なんか、箔付けのために入る組織なのかも。

会員になるのは、履歴書に書けるからって感じなのか。

そう考えると少し納得できた。

だとすれば、これ一本で仕事にしようというのが間違ってる。

報酬も協会にピンハネされるようだし。

「たいていの人はすでに別で仕事があつて、副業で協会のバイトをする感じなのかもしれない。」

「だがそうなる、仕事のアテがなくなってしまう。」

「自分で探すしかないか。」

「さいわい魔術は使えるし。」

「人のいるところで売り込めば、誰か雇ってくれないだろうか。」

「そう考えていた時、受付嬢が言った。」

「もしも早急に仕事をお探したら、同じ通りに冒険者ギルドがありますので、そちらをお訪ねになるとよいかもかもしれません」

「冒険者ギルド?」

「はい。冒険者ギルドは国との関係が密な組織ですので、運営には国庫から補助がでております。かなり低い値段で登録でき、仕事も見つけやすいかと」

「ほほう。」

「本では読んだが、本当に魔物を狩って暮らす、冒険者という人たちがいるのか。」

「ニーナの父親もそうだったと、話には聞いていたが。」

「確かに冒険者パーティーと言えば、一人は魔術師がいていい気がする。」

「なるほど。教えてくれてありがとうございます」

「いえ、会員の皆様のために情報をお伝えすることが私達の仕事ですから」

「わかりました。行ってみます」

俺は魔術協会を後にし、冒険者ギルドを目指した。

通りを歩いて20分ほど。

すぐに見つけることができた。

大きな建物だ。魔術協会の5倍はある。

石造りの無骨な建物だが、端々に戦士の顔や魔物退治の様子などが刻まれている。

中に入ると、かなり人がいた。

正面に大きな掲示板があり、無数の紙が貼ってある。

その手前にはテーブルで酒を飲んだり、食事をしたりしている人もいて、かなりにぎ

やかだ。

食事や酒は左手奥のバーカウンターで注文するようだ。

右手奥に受付が見えたので、人をよけながらそちらに移動する。

「すみません」

「はい、いかがされましたか？」

「この冒険者ギルドって、どんな組織なんですか？」

「冒険者ギルドは、主に魔物の狩猟によって得られる利益を統括している組織です。」

「魔物による被害の予防や、魔物から取れる素材、食材の売買を目的としています」  
「なるほど。こちらでは、登録料が割安だと聞いたのですが」

「はい、魔物の素材は国の経済を回すうえで重要なため、冒険者育成のために国から補助があり、その分割安となっております」

「おいくらですか？」

「大銅貨1枚です」

「安い！ それならまだ払える。よし。」

「あと、登録したばかりの人ができる仕事ってどんなものでしょうか？」

「冒険者ギルドでは、冒険者の方々をA～Eの5等級にランク付けさせていただいております。」

登録したばかりですと、ランクはEです。

「可能な仕事につきましては、あちらの掲示板に主なものが載っておりますのでご参照ください」

と、掲示板へと誘導される。

見ると、魔術協会と同様に様々な求人情報が貼り付けてあった。

その中で、Eランク対象のものを探す。

虫の巢の駆除、家の掃除、畑仕事の手伝い、隣町へのお使いなど。どれも報酬は小遣い稼ぎ程度だ。

……あれ？

おかしいな。こつちの方が稼ぎがいいって聞いたけど。

隅々まで見てみると、端の方に「常時依頼」と書かれた枠があった。

そこには、スライム捕獲、薬草採取、ゴブリン討伐、などの依頼が貼つてある。

こちらは歩合制のようで、報酬は1匹につきいくら、とか1本につきいくら、と書いていた。

……なるほど。

どれくらい取れるのか分からないが、こちらの方が可能性はありそうだ。

受付に戻つて聞いてみる。

「あの、あつちのほうに常時依頼、と書かれた枠があつたんですけど、どういうことでしょうか？」

「ご説明いたします。

基本的に、ギルドは依頼主から依頼を受けて冒険者の方々へそれを発注する組織です。

しかし、需要に対して供給がいくらあつても問題ないものもあり、そちらに關しまし

ては、全ランク対象の常時依頼として、常に掲示しております。

主として、付近の安全性向上のための魔物討伐や、消耗品の補充がこれにあたります。また、依頼になくとも、魔物の素材や肉をギルドに持ち込んでいただければ、基本的にどのようなものでも買い取りをさせていただきます。

しかし商店等から依頼があり、素材や肉の獲得がクエストとして募集された場合のほうは、依頼がない時に同じものをギルドに持ち込んでいただく場合よりも、当然ながら値は高くなります」

なるほど。

つまり、常時依頼のクエストは、狩れば狩るだけお金になるということだ。

俺にとっては、これまで見てきた求人の中で、金を稼ぐ一番いい方法のように思える。なにしろ魔力が無限だからな。

俺に狩りが可能だとしたら、いくらでも狩れるぞ。

「わかりました。冒険者の登録をお願いします」

「了解いたしました。では、こちらの書類に――」

魔術協会と同じような手続きをして、バッジと証明書をもらう。

それらは魔術協会のものより少し安づくりな感じだった。

こうして、俺は冒険者になった。  
さっそく明日から、クエストを開始しよう。

## 初クエスト

冒険者登録をした後、狩場の地図を購入した。

それを見ると、魔物はエリアごとに棲み分けがあるようだ。

基本的に魔物は森を好むらしく、狩場は全て森だ。

危険な魔物がひしめいている地域もあれば、弱いやつばかりの地域もある。

混在している地域もちろんあり、概ね街や道に近いほど安全なようだ。

俺は、その中で最も初心者向けとされる、南の森の一区画に向かうことにした。

そこに主に生息しているのは、スライムとゴブリンだという。

スライムとは、体が液体でできている、何とも不思議な魔物である。

よく観察すると、液体の中に微小な器官があり、それによつて生体維持しているときれる。

器官が破壊されると活動を停止し、死骸から油が獲れる。

その油は、ランプなどの照明に広く使われているらしい。

煤が出なくて長持ちする、良質な油なのだという。

対してゴブリンは、大人の腰くらいの大きさの魔物だ。

ヒトに似た形をしていて、簡単な道具も使う。

1対1なら丸腰でも負けることはないが、2〜3匹で行動していることが多く、まれに旅行者がこいつに襲われて死ぬこともあるんだとか。

ゴブリンは倒しても特に得られるものはない。

しかし繁殖力が旺盛で、活動範囲が広い。

放っておくとすぐに増えて悪さをするため、常に駆除の依頼が貼つてあるという。

右耳をギルドにもっていけば、いつでもお金に替えてくれる。

ゴブリンのお値段、銅貨5枚である。

乗合馬車に乗り、まずは城門を目指す。

アバロンには東西南北に城門があり、来たときは東門から入った。

今度は南門から出る。

城門までは、乗合馬車で30分ほどだ。

大丈夫だとは思いますが、やはり少しドキドキする。

多くの人は、パーティーを組んでクエストにあたるらしい。

しかし俺は1人だ。

一緒に冒険者をやってくれる心あたりなどいない。

ユリヤンの顔が頭をよぎったが、あんなのでも王族だ。  
城に戻れば仕事は多いだろう。

それに、やつにとつてこの国で過ごす最後の時間なのだ。  
そつとしておくことにした。

「スライムにビビったか」とか言われても癪だしな。

馬車を降りて、城門をくぐる。

あとは徒歩だ。

いずこへと続く道を、ただ歩く。

すぐに森が見えてくるので、道から逸れて森へと入っていく。

森の浅いところには、同じ目的らしい、駆け出しっぽい冒険者が何人かウロウロしていた。

……さあ、来るなら来い。

そう思つて徘徊すること30分ほど。

ついに、記念すべき最初の討伐目標を発見した。

スライムだ。

薄い青色で、プルプルと振動している。

大きさは、ボウリングの玉くらい。後ろの景色が、やや透けて見える。

こちらに気づいていないのか、逃げたり襲って来たりする気配はない。先手必勝。

「ストーンバレット！」

俺はそいつに狙いを定め、魔術を放った。

出力はかなり抑え目だ。

小さめの石弾が、目標へ向けてまっすぐに飛んでいく。

ばあん！ と音を立ててスライムは弾けた。

避ける動作もない。

初の討伐だが、あっけないものだった。

近づいて、残骸を回収する。

液体というか、ゼリーの様な感じだ。

あんまり嫌悪感はない。生物という感じがしないからか。

買っておいた袋に、草などをよけながらできるだけ入れる。

7割くらいは回収できた。

とりあえず、1匹ゲット。

どんどんいこう。

しばらく歩くと、またスライムを見つけた。

同じように、魔術で倒す。

袋が少し重くなる。

また、歩き始める。

しかしこうして森を歩くと、一角ウサギを狩ったときのことを思い出す。

あの森は魔物などいなかった。

魔族の住む西の大陸に近づくほど、魔物の数が増えるらしい。

それなら東の方が安全で住みやすそうなものだが、実際はアバロンを含め大陸の中央付近に多く人が住んでいる。

その理由は、魔物から獲れる素材や肉の価値が、非常に高いからだ。

危険を補って余りあるほどに。

周辺に魔物が多い都市の方がむしろ、発展が早く、人も集まるといふ。

サンドラ村は、魔族の大陸から最も距離が離れた村の1つだった。

だからあの辺には全然魔物がいなかったのか。

東に少し進めば、この世界では大陸の端に行かないと見れない、海が見えたらしいが、興味がないので行ってない。

海なら見たことがあるしな。以前の世界で。

ちなみにこのアバロンから海に行こうとしたら、最低でも1か月はかかる。それにしても、ニーナやシータは元気にしてるだろうか。

まだひと月しか経っていないが、懐かしく感じる。

今度手紙をだそう。

ローブと杖を見ると、あのふたりの顔が浮かんでくる。

何事もなく過ごしているといいが。

歩いていると、遠くからゲキョゲキョと奇妙な声が聞こえてきた。

ガチョウがハードロックを歌ったら、こんな感じかもしれない。

辺りを見渡すと、左前方にゴブリンがいた。

4匹の群れだ。

聞いた通りの姿。

1匹は木の棒を持っている。

何事かを話している様子だ。

見敵必殺。

「エアスラツシユ！」

風の刃を放つ。

2匹の首を切りとばした。

残りのやつらがこちらに気付き、向かって来る。

「エアスラツシュ！」

エアスラツシュ！」

残りは1匹につき1発で、戦闘は終了した。

離れたところで発見できれば、近づかれる危険はほぼなさそうだ。

落ちているゴブリンの頭から、右耳をナイフで切り取る。

嫌な感触だが、ウサギを捌くのに比べたらマシだ。

しかし、ナイフで切るのは抵抗あるのに、魔術で切るのは無感情にできてしまうな。

自分の手に感触がないからだ。

ボタン1つで相手を殺せるような感覚。

自分が命を奪っているのだということだけは、忘れないようにしよう。

早くも耳が4つ。

スライムとは別の袋に入れる。

腹が減ったので、食事を取ることにした。

水魔術で手を洗い、リュックからパンを入れた袋を取り出す。

さらに小さな鍋を取り出し、水魔術で水を入れ、火魔術でそれを沸かす。沸いたお湯を、カップの上のバッグに注げば、ドリップカシーのできあがり。立ち上るいい香り。

ついでにパンを火魔術で軽く焼けば、昼食の完成だ。

腰掛けに良さそうな岩を探し、カシーを啜りながらパンをいただく。

いい天気だ。

これまでの経過で、特に危険は感じなかった。

魔術があれば、ゴブリンとスライムを倒すのは余裕がある。

少し寂しいが、一人も気楽で悪くないかもしれない。

誰かと一緒だと、報酬も半分だしな。

食べ終わって、また森の中をうろつく。

そういえば、森には魔物以外の生き物もたくさんいる。

ここに来てからも、鹿やリスなんかを見かけた。

魔物は動物を襲わないのだろうか。

魔物と動物だと、戦ったら魔物に軍配があがりそうだが。

襲われたら絶滅してしまいそうな動物達が、現在でも森にたくさん生息している。

ということは、魔物は動物とは争わず、共存しているのかもしれない。

本当に魔物というのは、ヒトにしかな興味がないらしい。

昔読んだ本によれば、ヒトが死んだら魔力になり、それを魔物が食ってるかららしいが。

まあ、どうでもいいか。

とにかくこちらを見ると襲ってくるやつらだ。

襲われても文句はあるまい。

その後、新たにスライムを3匹捕獲し、ゴブリンを6匹討伐した。

日が落ちてきたので、そこまで引き上げることにする。

さて、稼ぎはいくらだろうか。

## クエスト報酬と今後の目標

森から帰ると、街は夕暮れにつつまれていた。

馬車に乗って、冒険者ギルドへ向かう。

……腹が減った。

どこからともなく食べ物匂いがしてきて、空腹に拍車をかける。

ギルドに着くと、冒険者でにぎわっていた。

この時間は、多くの冒険者が今日の獲物を渡しに来るようだ。

ここに備え付けの酒場がある理由が分かった。

獲物の報酬を手に入れた人達が、すかさず一杯やるためだ。

皆楽しそうに、酒を酌み交わしている。

うらやましい。

列に並んでいると、しばらくして俺の順番になった。

「すみません、常時依頼のスライムとゴブリンを狩ってきました。確認お願いします」

「承ります。……ゴブリンは10匹ですね。」

スライムの重さを測らせていただきますので、こちらの袋に入れさせていただきます

す」

受付嬢は、慣れた手つきでスライムの袋を入れ替え、奥に引っ込んでいく。少し待つと、すぐに戻ってきた。

「鑑定いたしました。」

この量ですと、大銅貨3枚と、銅貨7枚になります。

ゴブリンと合わせまして、合計大銅貨8枚と、銅貨7枚となりますが、よろしいでしょうか？」

掲示板に貼つてあるEランク任務の、倍くらいは報酬がある。

やはりこの方法が、現時点ではベストだな。

「はい、大丈夫です。ありがとうございます」

「では、こちらが報酬となります。お疲れさまでした」

受付嬢の言葉に少しだけ癒されつつ、その場を後にした。

街を歩きながら、現状を整理する。

さしあたっての目標は、魔術協会の図書館で転移魔術について調べることだ。

そのためには、Cランクの魔術師になる必要がある。

そのためには、中級魔術の習得が必要。

つまり、目下の目標は、中級魔術を覚えること。

独学でもいいが、それよりもユリヤンが言っていた魔術学院に通った方が効率がよさそうだ。

魔術はそちらで学ぶことにしたい。

となると、とにかくお金が必要になる。

ユリヤンが入学金を免除してくれると言っていたが、学費や教科書代なんかは普通にかかるだろう。

それに、魔術を習得する期間はクエストもできまい。

その間の生活資金も必要だ。

現在の宿代が、大銅貨3枚。

これより安い宿は、アバロンにはなさそうだ。

そして食費が大銅貨1枚く2枚。

さらに馬車代が往復で銅貨6枚

これらを今日の稼ぎからさつぴくと、利益は大銅貨3く4枚と、銅貨1枚だ。

ちなみに税金は、ギルドで既に天引きされた額が渡されているので、考慮する必要はない。

さて、魔術を覚えるのに仮に半年間かかるとする。

その場合、生活費は大銅貨860枚×950枚(生活費4×5枚×190日)。銀貨にすると86枚×95枚(大銅貨10枚⇨銀貨1枚)。

さらに魔術協会への会費が月に銀貨1枚、ランクアップに銀貨5枚を2回。それに加えて、学費や教科書代がかかる。

つまり目標貯蓄額は、銀貨100枚を優に超えてしまう。

今日の稼ぎを繰り返すとしたら、250日以上かかる計算だ。できなくはないが、もつといい方法を探したい。

中級魔術が半年で習得できる保証もないのだ。

そのための貯蓄に、そんなに時間をかけられない。

3か月くらいでなんとかならないだろうか。

やはり冒険者ギルドのランクを上げて、上のランクのクエストをこなすことか。……そういえば、冒険者のランクがどうやって上がるのか、聞いてなかった。

明日確認してみることにしよう。

ひとまず、今日は疲れた。

森に入って魔物を倒すなんて、初めてのことだ。

緊張したし、変なストレスもたまった。

飯を食べて、すぐ宿に帰って寝ることにした。

翌日。

受付嬢にランクアップの方法について尋ねると、簡単に教えてくれた。

ランクは、その階級のクエストを20回こなすことで上がるらしい。

ただし、Eランクの場合は常時依頼のクエストをこなしてもいいという。

ゴブリンの場合、100匹狩ればDランクに上がれるそうだ。

つまり俺は、あと90匹のゴブリンを狩れば、Dランクになれる。

掲示板に戻ってDランクの依頼を見る。

ほとんどの依頼の報酬が、銀貨2枚以上だ。

さらにそれを何度もこなしてCランクになれば、銀貨10枚から20枚が相場のようにだ。

かなり稼げる。

うまくすれば、ひと月ふた月で目標額に届くかもしれない。

……よし。決めた。

金を稼ぐために、まずは冒険者として成り上がろう。

その後、常時依頼のなかで簡単に稼げるものが他にないか、いくつか試してみた。薬草やキノコ類の採取、ポイズントード討伐、グリーンワーム捕獲など。

しかし、どれも似たり寄つたりの稼ぎに終わった。

単価が高いものは獲得率が低く、獲得率が高いものは単価が安い。

効率はどれも同じようなものだ。

ということ、結局ゴブリン退治を100匹行うことにした。

初日と同じことを繰り返して、簡単に達成することができた。

……冒険者になってから10日ほど。

晴れて俺は、D級冒険者になった。

## ランクアップ祝い

D級になった夜。

俺はささやかなお祝いをすることにした。

自分へのご褒美だ。

プレゼントフォーミーフロムミー。

なんとも情けない響きだが、しかしひたすら金だけ稼ぎ続けるだけというのは、つらいものだ。

この10日間、休みなしで狩りをしてきたのだ。

少しくらい金を浪費しても、許されるだろう。

来たのはギルドの近くにあるバー。

おしゃれなBGMが流れ、照明は暗め。

客は皆、静かにくつろいでいる。

少し高めの店だが、今日はお祝いだからな。

よしとしよう。

カウンターに座り、マスターに声をかける。

「記念日なんですけど、何かいいのありますか？」

マスターは穏やかにこちらを一瞥し。

頷いた後、無言で酒を作り始める。

なかなかサマになる動作だ。

俺にもっと貫禄がでたら、ぜひとも真似したい。

待つ間は、楽器の演奏を聴く。

全て生演奏だ。

演奏者は2人。

バイオリンとピアノのような楽器のデュオで、綺麗なメロディを奏でている。

……うーむ。いい感じだ。

「どうぞ。フラーとキャスバルの果汁、トレノを混ぜて、炭酸で割っております。

ご賞味ください」

コトン、と俺の前にグラスが置かれた。

解説は何一つ伝わらないが、とにかく飲んでみる。

——美味い！

どうやら、甘い果実と酸味のある果実を混ぜたものようだ。

度数は高めで喉が焼け付く感じがあるのに、果実の風味と炭酸に押し流されて、後味

はすつきりしている。

クセになりそうだ。

「これはなんていうお酒ですか？」

「アバロン、です。お気に召しましたか？」

「すごくうまいです」

都市と同じ名前を持つカクテルらしい。

そういえば、作物のほとんどを周囲からの輸入に頼るアバロンだが、唯一の名産がフルーツという果実だと、ユリヤンが言っていたことを、ぼんやりと思い出した。

美味しいのでぐいぐい飲んでしまい、あつという間に次の酒に移る。

次は、辛めのものをリクエストした。

「キヤスタ麦から作ったお酒です」

目の前に、液体と氷の入ったグラスが置かれる。

氷。

そう、冷凍庫はないのに、氷が出てくる。

実は魔術協会の稼ぎの1つに、氷の提供というのがあるらしい。

協会に金を払っている店に、魔術を使って氷を常備させる仕事だ。

持ち回りで、複数の店を1人の魔術師が担当する。

俺も是非やりたかったが、安全で割がいいから人気で、めったに求人はいらないらしい。

俺は酒を一口飲み、味わう。

先ほどのアバロンよりも、さらに度数が高い。鼻の奥にツンと来る。

しかし酔っ払いたいときには、それが心地良い。

お通しの塩辛い豆を食べながらチビチビと飲み、すぐにグラスは空になった。

お通しもなくなつたので、追加でつまみを頼む。

牛乳を発酵させたもの。

チーズだ。

それに合うものを、と頼んだら、ワインっぽい酒が出てきた。

「タラトスの83年物です。まだ少し若いですが、違った顔を楽しめますよ」

解説までワインっぽい。

違った顔も何も、元の顔を知らないが。

……ちなみに、ここで言う83年とは、なんと2683年である。

魔族の侵略を許していたヒトが、国境を現在の位置に押し戻した年を起源0年とした

年号だ。

今は2685年。

前の世界と比べて、文明の発展が遅い世界だな、と思う。

いや、あくまで暦を数え始めてからの年数でしかないから、発展の早さなんて比べようはないか。

四大文明の時代から暦をつければ、あの世界だつて3000年を超えるだろう。

西暦の2685年は、どんな世界になっていることやら。

……もはや俺には縁遠い話だが。

ともかく酒を飲んでみると、つまみとの相性が抜群だった。

これまたすんなり胃袋に入ってしまうが……けっこう酔っぱらってしまった。

話をするでもなく酒を飲むと、ペースが早くてすぐに酔いが回るな。

そろそろ、お開きとするか。

しかしやつぱり少し寂しいもんだ。

次からは、ユリヤンを誘おう。

それとも他に誰か、誘う相手ができるといいが。

立ち上がると、ふと、ニーナとシータの顔が浮かんだ。

そうだ。帰ったら、ふたりに手紙を書こう。

前に書こうと思つたのに忘れてた。

無事にアバロンに着いたこと、冒険者として生きていること、道中の面白かったこと、

ユリヤンの紹介。

書きたいことは無数に出てくる。

全部書いてしまおう。

酒を飲み干し、会計をした。

大銅貨5枚と銅貨2枚。

1日の稼ぎを全て使ってしまった計算だが、いいのだ。今日は記念日だ。

千鳥足で宿に戻り、手紙を書いた。

まだ2ヶ月も経ってないが、その割に色々あった気がする。

全部書いていたら、夜が明けてしまった。

せつかくなので、手紙を出しに行く。

郵便局で手紙を渡し、大銅貨1枚を払った。

あつちに着くのは1ヶ月後だという。

眠たい。

今日はクエストは無理だな。

……宿に戻って昼寝することにしよう。

## D級クエスト

さて、ついにD級クエストに挑戦する。

しかしその前に、1つお金を節約する方法を思いついたので、先にそちらを片づけることにする。

何故今まで考えなかったのか。

冒険者は宿に泊まるものだと思い込んでいた。

宿に泊まらない方法。

そう。賃貸契約を結んで、部屋を借りればいいのだ。

賃貸アパートだ。

そう思って街をぶらつくと、普通に貸し物件の店が見つかった。

契約時に保証金として3か月分の家賃を渡せば、誰でも物件は借りられるようだ。

何事もなく契約が終われば、渡したお金は戻ってくる。

つまり敷金だな。

礼金はいらないらしい。

目星をつけた部屋の広さは8畳間くらい。

家賃はひと月（38日）銀貨5枚。

宿は1日に大銅貨3枚だから、ひと月で銀貨11枚ほど。なんと半額以下だ。

万歳、と思ったら、保証金を全く用意できなかった。

かき集めても銀貨10枚に満たない。

仕方ない。

しばらくは現状維持で、金がたまったら引越すことにしよう。荷物はリュック1つなので、貯まったその日には引越し可能だ。とりあえず、金を節約できる目処がたつてよかった。

さて、冒険者ギルドへとやってきた。

初めてのD級クエストだ。

E級よりも実践的なものが多くなっている。

どれにしたものか。

あまり、知識が必要そうなものはやめておきたい。

毒のある植物の採取などは、扱いを誤って取り返しつかないことになったりしそうだ。

毒がなくても、発見すること自体に経験が必要そうな依頼も却下。

となると、やはり討伐依頼か捕獲依頼がいい。

目的地に行つて、魔物を倒して任務達成。

そんなのが理想的だ。

まあ、依頼の大半はその類なので、選ぶのに困ることはない。

妥当なのは、このあたりだろうか。

〈キヤタピラー討伐 タゴヤ村 銀貨2枚〉

キヤタピラーとは、芋虫が巨大化したような魔物だったはずだ。

毒などは持つておらず、特殊なことといえれば口から糸を吐くこと。

その程度なら、なんとかなるだろう。

そう軽く考え、依頼を剥がし、受付へ持つて行った。

「受け付けました。こちらが資料になります。お気をつけて」

何枚かの紙を渡された。

地図や、キヤタピラーの特徴についての記事、状況のあらましなどが書かれている。

タゴヤ村へは、乗合馬車で2時間ほどかかるみたいなので、行きすがら読むことにし

よう。

アバロンの周辺には、農村が広がっている。

フラアの果実くらいしか育てていないアバロンへ、食物を運んでくれる村たちだ。しかし城壁に守られていないその村々では、やはり魔物の被害に遭うことが多い。

基本的に、魔物は森から出てこないとされるが、何事にも例外はあるようだ。

たまに人里に出てきて悪さをするやつが出現する。

そんなときに派遣されるのが冒険者というわけだ。

依頼の人氣がなく、余りにも受諾されない場合は、仕方なく王宮から騎士が派遣されるらしい。

今回の依頼は、村の倉庫にキヤタピラーが住み着いてしまったというものだ。

最初に発見した農夫は、そいつにやられて重傷を負ったという。

村人は倉庫に近づけなくなってしまう、怯える日々を送っているようだ。

なんだかゴ布林狩りと違って、求められてる感じにテンションが上がるな。

もちろん無事に退治できてこそだろうが。

ちなみにキヤタピラーの胴体には糸を作り出す臓器があり、その部分は、ギルドに

持つていけば幾ばくかの金になるらしい。

余裕があれば狙っていききたい。

村に到着した。

畑ばかりで、のどかな感じだ。

ギルドの規約にのっとり、まずは依頼人のところへ向かう。

村内の地図も載っている。村長の家には印がしてあった。

ベルを鳴らすと、村長の奥さんらしき人が出た。

「すみません。ギルドから派遣されてきた者ですけど」

「まあ、よく来てくださいました。どうぞ」

客間に案内された。

少し待たされた後、50歳くらいだろうか、白髪のおじさんが入ってきた。

「ようこそおいでくださいました。私がこの村の長です。本日はよろしく願いましたし  
ます」

「冒険者ギルドから派遣されました、はじめといたします。よろしく願います」

「では早速、ご案内してもよろしいですか？」

「はい。お願いします」

そんな会話の後。

20分くらい歩き、小屋に到着した。

万が一があるといけけないので、村長には家に戻ってもらおう。

さて。

……めちやくちや緊張してきた。

キヤタピラーを見るのは初めてだ。

大きさは2mくらいあるらしい。

村人がやられるくらいだから、素早いのだろうか。

果たしてうまく退治できるだろうか。

小屋に近づく前に、脳内作戦会議をする。

作戦は重要だ。

孫子とかいうえらい人も、戦う前に勝負は決まると言っている。

使う魔術は、エアスラッシュ。

ゴブリン退治で一番使った魔術だ。

小屋のドアをあけ、キャタピラーを視認したら、即座に詠唱する。ドアのすぐそばにいる可能性もある。

距離が近いと、やられてしまうかもしれない。

開けた瞬間に襲ってきたら、後ろに跳びながら詠唱しよう。

糸を吐いてくるかもしれない。

無視して詠唱することにする。

糸に致死性はないらしい。

避けずに、狙いを定めることを優先しよう。

1発目が外れるかもしれない。

外れても、すぐに次を撃つ。

とにかく撃つ。

自分に危険が迫らない限り、エアスラッシュでいい。

天井に張り付いている可能性もある。

芋虫っぽいやつならできてもおかしくない。

開けてパツと見でいなかったら混乱してしまうだろう。

床に居なければ壁や天井をすぐに探そう。

見つけ次第、エアスラッシュだ。

芋虫から蝶に進化してる可能性なんてのも、あるのだろうか。

万が一そんなことがあったら、エアスラッシュが当たらないかもしれない。その時はファイアを広範囲で使おう。

小屋が燃えてしまうが、小屋に気を使ってやられては元も子もない。一瞬の覚悟の差が勝敗を分けるかもしれないのだ。

……よし。こんなところだろう。

アイデアは出し尽くしたように思う。

あとは実戦あるのみだ。

小屋のドアの目の前まで来た。

「ふうー」

心臓がバクバクする。

あと3つ数えたらドアを開けよう。

「いち、にの……さんっ！」

ドアを開く。

どこだ？

……いた！ 小屋の隅で丸まっている。

「エアストラッシュュー！」

叫んだ瞬間、キヤタピラーはこちらに気づいた。

しかしその直後には、その体は真つ二つになった。

「ギイイイイ！」

断末魔が聞こえる。

嫌な音だ。

キヤタピラーは、液体を撒き散らしながらバタバタともがいた後、すぐに事切れた。

イモムシよりは、機敏そうな印象だった。

行動される前に倒せて良かった。

魔術で水をかけても、動かないことを確認。

緑色の液体にまみれた胴体を恐る恐る持ち、小屋の外に出した。

腹からナイフを入れて、糸を作る臓器とやらを探す。

これだ。白い袋状のもの。少しベタついている。

案外簡単に見つけることができた。

魔術で凍らせて、リュックに入れる。

よし。任務完了だ。

まあ、スムーズに遂行できたと言えるだろう。

その後、村長に小屋の様子を確認してもらい、依頼達成のサインをもらった。ついでに、重症を負ったという村人に治癒魔術をかけようかと思つて探したら、すでにアバロンで治療したらしい。

馬車に揺られて、アバロンへと帰る。

冒険者ギルドで、取ってきた臓器と依頼達成のサインを渡した。

「確かに承りました。では、報酬、糸造器の買い取り代金、必要経費を合わせたものです。ご確認ください」

銀貨2枚と、大銅貨8枚を受け取った。

報酬が銀貨2枚、往復の馬車代が大銅貨2枚だから、内臓の値段は大銅貨6枚か。常時依頼と違って、移動費も出してくれるのが嬉しい。

1日の稼ぎとしては、ぶつちぎりで最高記録だ。

しかしゴブリンと違って、近づかれたらどうなるか分からないというのは、少し恐ろしかった。

小屋に入る前は、正直かなりビビった。

……とはいえ。

振り返ってみれば、それほど危険はなかったといえるだろう。

万一ケガを負っても治癒魔術がある。

……うむ。

方針はそのままだ。

この調子で、Dランクのクエストをこなしていく。

## C級冒険者になる

あれから2か月ほど。

D級クエストをひたすらこなした。

周辺の村に魔物が出ることは、結構な頻度であるようだ。

まあ、アバロンの周りには100以上の村があるので、1つの村で考えればそう多くはないか。

それに、村人が魔物を何度か見かけた時点でクエストは組まれるので、被害にあった人間が多くいるわけではない。

その分、目的の魔物が見つからず日が暮れることもあったが、そのような場合は、ギルドとの取り決めで村長の家に泊まらせてもらえるようになってる。

倒した魔物は、ホーンビートル、グレイトボア、ホブゴブリン、アシッドスライム、ジャイアントバット、サンドクラブ、などなど。

最初はかなりビビりつつ退治していたが、だんだんと余裕を持てるようになってきた。

これまでのところ、ヒヤツとする場面はない。

基本的に、魔術を放てばどの魔物も一撃だった。

狙いを定めて放てば、避けられることはまずない。

ジャイアントバットだけ、少し狙いからは逸れたが。

それでも体の一部には命中し、2発目で仕留められた。

ホブゴブリンは、ゴブリンと徒党を組んでいたので、周りのゴブリンも倒さなければならなかった。

しかしあまり問題にならず、普段セーブしている魔術の規模を上げれば、まとめて倒すことができた。

ゴブリンの討伐分もまとめてギルドに報告し、金を多めにもらうことができて、一石二鳥だ。

一番苦労したのは、アシッドスライムだ。

倒すこと自体は容易だったが、体が酸でできているため、その後の回収に手間取った。捕獲依頼だったので、持ち帰らなければクエスト達成にならない。

ギルドから特殊な袋を貸与されていたが、それに入れるのも大変で、一度近くの村に戻って、スコップを借りてくる羽目になった。

スコップは少し溶けてしまい、おわびとして持ち主に少しお金を渡した。

これまでの経験を踏まえて、重要だと改めて感じたこと。

それはやはり、敵に近づかせない、ということだ。

たいていの魔物は、遠距離攻撃の手段を持っていない。

なので遠くにいれば、俺だけが攻撃可能なのだ。

負けるわけがない。

ただ、森に入ることが多いため、木々に遮られていつの間にか後ろに敵がいた、という状況は非常に恐ろしい。

なのでとにかく背後には気を付けていた。

すると、やってるうちに魔物の気配がなんとなく分かるようになってきた。

ぼんやりと、魔物が発する魔力を感じるようになったのだ。

4〜5メートルくらいまで接近しないと分からないが、少なくとも、不意打ちで殺されてしまうような心配はなくなった。

その他、森で不意に出会う魔物もできるだけ狩るようにした。

素材をギルドで買い取ってくれるからだ。

その甲斐あって、お金の貯まりが少し早まった。

そしてついに、念願のアパート暮らしを始めることができた。

冒険者ギルドから徒歩10分。

8畳くらいの広さで、浴室、トイレ、キッチン付。

お値段は月に銀貨5枚と大銅貨5枚。

ついに一国一城の主となった。

いろいろと家具も買い足し、部屋らしくしていこうと思う。

そんな日々を送っていたら。

気づけば、いつの間にかC級冒険者になる資格を得ていた。

「早いですね。もうC級に上がるんですか」

冒険者ギルドで、受付嬢に言われた。

こう何度も依頼をこなしていれば、顔なじみにもなる。

他に話す相手もないしな。

「……早いのかな？」

「ええ、多くの人は、C級になるのは1年ほどかかりますよ。

クエストの失敗がないというのも、珍しいです」

「そっか。案外俺、冒険者に向いてるのかも」

「そうですか。」

「……まあ、詳しくは詮索しません。では、大銅貨3枚いただきます」

「D級のときより、ちよつと高くなるんだな」

「ええ、世の中そんなものです」

「そんなものですか。」

……はい、じゃあこれ、お願いします」

「確かに承りました。では手続きをいたしますので、少々お待ちください」

そう言うのと、受付嬢は奥に引っ込んでいった。

俺はランクアップが早いのか。

まあ確かに、あの魔物達と魔術なしで戦おうとしたら、まったく歯が立たないだろう。

俺の魔術は、威力がおかしいうえ、回数制限なしの反則技なのだ。

なんでそんなものが俺に備わってるのかは分からないが、有効活用させてもらおう。

「おめでとうございます。これをもちまして、ハジメ様はCランク冒険者となりました。

これからもギルドへのご協力、よろしくお願いいたします」

「ありがとう。じゃあ、また」

「——あ、ハジメ様」

手続きを終え立ち去ろうとしたら、受付嬢が声をかけてきた。

珍しい。

「Cランクのクエストは危険性が増します。

さらに遠方の依頼も増えるため、Cランクになった方は、多くの方がパーティーを組

んでいます。どうぞ、ご一考ください」

「分かった。ありがとう」

俺はそう言つて、今度こそ立ち去つた。

パーティーか。

組んでもいいが、知り合いがいないしな……。

掲示板の端つこに、パーティーメンバー募集の貼り紙はたくさんあるが、どうだろうか。

あんまり知らない人に命を預けるとするのは、ためらわれる。

それに人数分、報酬も減ってしまうしな。

C級クエストは、D級の5倍から10倍の報酬があるので、たしかに多少人数が増えてもこれまでより稼げるだろう。

しかし1人でやれば、その報酬はこれまでとは比べ物にならない。

今まで特に討伐で苦労したことはない。

ヒヤリとしたことすら皆無だ。

この状況で人数を増やすのは、馬鹿らしい気がする。

もう少しソロでやってみよう。

危ないと思つたらすぐ引いて、戻ってくれば大丈夫だろう。

そう結論づけ、パーティーは組まないことにした。

## ユリヤンとの再会

晴れてC級冒険者になった。

お金も着々と貯まっている。

ということ、またお祝いの飲みに行くことにした。

しかし前回、1人で飲んで少し寂しい思いをしたので、今度はユリヤンを誘うことにする。

魔術学院の入学金無料の話も、ついでにお願いしよう。

翌日。

アバロンの中心にどっしりと鎮座する、アルシユタット城へとやってきた。

近くで見ると本当にでかい。

てっぺんの塔からは、街が一望できるのだろう。

目の前には分厚い城門。

その正面には2人の兵士が、微動だにせず直立している。

あれ、場違い感が半端じゃないけど、大丈夫かこれ？

曲者！ 出会え出会え！ みたいなことにならないだろうな。

「……あのー」

「むっ、何だ貴様は。城に用か」

話しかけた瞬間、スツと劍柄に手を置かれた。

怖い。

「えーつと、ユリヤン……様に目通りをお願いしたいのですが……」

「貴様、名前は？」

「ハジメです。ハジメニタナカ」

兵士は2人でじろじろとこちらを見て、ぼそぼそ話し合ったあと、急に相好を崩した。

「失礼いたしました。ハジメ様ですね。」

殿下よりお話を承っております。どうぞこちらへ」

急に態度を変えられても、逆に怖いわ。

俺は兵士に案内され、城門をくぐった。

絢爛豪華な部屋の数々を横目で見つつ。

長いこと歩かされてようやく目的地へとたどり着いた。

兵士は目の前の扉をノックする。

「殿下。ハジメタナカ様をお連れしました」

兵士が言うのと、中から「入れ」と聞こえた。

兵士に促されて扉を開ける。

中では、ユリヤンが本を読みながら飲み物を飲んでいた。

広い部屋だ。

ユリヤンがついている机とは別に、来客用のソファとテーブルが置いてある。

花瓶や絵画が飾られ、調度品の一つ一つにセンスの良さを感じさせる部屋だった。

「よう。ハジメ。久しいな」

ユリヤンが振り返って言った。

ブロンドの髪がサラリと流れる。

相変わらずのイケメン野郎だ。

「……お前、本当に王子様だったんだな」

「なんだよ、信じてなかったのか？」

「ああ、こんな下品な王子様が、存在するわけがないと思ってたからな」

「俺だって、こんな典型的なおのぼりさん、いるわけないって思ってたよ」

軽口を言い合うと。

一瞬にして、旅をしていた頃のが感覚が蘇った。

懐かしい。

コンコン、とノックの音。

「入れ」

ユリヤンが言うと、扉から入ってきたのはメイドさんだった。

飲み物とお菓子を運んできてくれている。

それらをいただきながら、しょうもないやり取りをしつつ、しばし思い出話に花を咲かせた。

「しかしアレは傑作だったな。どこだったか……そう、テグスの街の宿屋だ」

「俺たちの部屋に、おっさんが怒鳴り込んできたやつだろ。『お前らがヤツてる声がうるさくて眠れねえ!』って言ってな」

「それだ。扉を開けて、ハジメが『なんなら混ざりますか?』って言ったんだよ。ははっ。あの時のおっさんの顔は傑作だった」

「うるさかったのは結局、廊下挟んで反対側の部屋のやつらだったよな」

「ああ。こつちにも響いてたからな。おっさんがあんな口調じゃなきや、味方になれた

んだが」

ひとしきり笑って、ユリヤンは一息ついた。

さりげなくメイドさんが入ってきて、飲み物を注ぎたしていく。

俺はそれを口元へ運ぶ。

ふわりと甘い香りがした。

この世界における紅茶だ。

カシーよりも希少で高価なのだそうだ。

銘柄は知らないが、高いだけあって、飲むとホツとするような、優しい味がする。

ユリヤンも合わせて飲み、おもむろに時計を見ると、ハツとした表情を作った。

「……つと、そろそろ時間だ。

悪い。これから会議なんだ。

ここに来たのは、魔術学院への口利きの件でいいんだよな？」

「ああ。頼めるか？」

「当たり前だろ。もともとこつちから言い出したことだ。

ただ、入学金だけだからな？」

あとの費用は自分で何とかしてくれ」

「分かった。助かるよ」

ユリヤンは机に向かうと、高級そうな紙にサラサラと何事かを書き、印鑑を押しした後、封筒に入れて俺に寄越した。

「学院へ行って、これを見せれば通るはずだ」

「ありがとう、ユリヤン」

「礼には及ばない。」

俺も体面上は、地方に埋もれた人材を探しに行くってことになってたからな。

お前が魔術学院に入ってくれれば、少しは面目が立つ」

そうは言うものの、ユリヤンは入学を強く勧めることはしなかった。

そう思うとこの言い草も、俺に恩を感じさせないための気遣いのように感じる。

だがまあ、それを指摘するのは野暮というものだろう。

「そうか。」

それなら、お前が困ったときは相談してくれ。

何か手助けできるかもしれん」

まあ、俺にできて王子様にできないことなんて、想像もつかないが。

「分かった。またな、ハジメ。話せて楽しかったよ」

しかし俺の発言を侮る気配など微塵もなくそう言っつて、ユリヤンは部屋を出ようとした。

あ、いかん。

「待った。まだ用件が1つあるんだ」

「なんだ？」

訝しげな顔でユリヤンがこちらを見る。

「今夜、久しぶりに飲みに行かないか？」

その後、会議が終わるのを待って、ユリヤンと街に繰り出した。

ユリヤンも、なんやかんやで鬱憤が溜まっていたらしい。

ニヤリと笑い、「親父には内緒だぜ？」と一言。

王族にしか伝わっていないという抜け道を通り、城門の外へ抜け出てきた。

影武者を置いてきた、とのことだ。

そんなものまでいるのか。

落ち合った後は、浴びるほど酒を飲んだ。

せっかくなので前に行ったバーを紹介すると、ユリヤンも知っていた。

というか、アバロンでこいつが知らない店は、もしかしたら存在しないのかもしれないな

い。

途中で隣の席の女の子が声をかけてきたが、いつになくユリヤンにその気がなかった。

地元でうかつに手を出すとまずいからな、などと言っていたが、どうだろうか。

俺は正直、今日はユリヤンと2人で飲んでるのが、一番居心地がよかった。

さすがに2か月も人と話してないと、大人数での会話は疲れそうだ。

俺のそんな気配に気づいていたのかもしれない。

ユリヤンは、あと半年ほどアバロンにいるそうだ。

それからは、前にも言っていた通り、魔族との戦争の前線に行くという。

まあ、1000年間停滞中の前線だが。

C級冒険者になったと知らせたら、ワインっぽい酒のボトルを1本おごってくれた。

その酒がかつてないほど美味しく、こっそり値段を見たら銀貨1枚だった。

少し高いが、名前を覚えて家に置こうと決めた。

店を3軒ハシゴし、俺もユリヤンも完全に酔っぱらって、夜明けも近くなった頃。

どちらからともなく、お開きにすることにした。

「楽しかったぜ。ハジメ。またな」

そう言って、ユリヤンは歩いていった。

……俺も楽しかった。

アバロンに来てから、一番楽しい夜になった。

よし。気分が晴れた。

明日からまた、魔物狩りの毎日だ。

## C級クエスト

ユリヤンと飲み明かした翌日。

昼過ぎまで眠りこけ、起きたら頭痛がひどかった。

寝た時間は長いものの、眠りは浅く、頭がボーツとする。

これが二日酔いというやつか。

酒を覚えてから、初めての二日酔いだ。

うーむ、痛い。

今日は依頼をこなすのは無理だ。

とはいえ行動しないとともつたいないので、冒険者ギルドで次のクエストのあたりをつけることにした。

ベッドからなんとか這い出て、着替えを済ませて外に出る。

今日もいい天気だ。

しかしそのいい天気に責められてるような、妙な罪悪感がある。

……二日酔いで昼に起きた日は、雨の方がかえってうれしいのかもしれない。

ギルドは、珍しく閑散としていた。

馴染みの受付嬢がいたので声をかける。

「今日は人が少ないな」

「お昼は、いつもこんなものですよ。」

依頼を受ける朝と、帰ってくる夕方がいつも混んでるんです」

なるほどな。

俺も今まで、その時間しかギルドに来たことがなかった。

「何かいい依頼はあるかな？」

受付嬢がヒマそうなので、ついでに聞いてみることにした。

「そうですねえ……大抵、お昼を過ぎたらめぼしいものはとづくに取られてしまってます。ます。」

それにC級になりますと、難易度の極端な差はなくなってしまうですね。どれも相応に困難な依頼ばかりです。

まあ、私は冒険者じゃないから、あまり意見に価値はないと思いますが」

そう言いながら、カウンターを出て、掲示板の前まで来てくれた。

さらに額に手をかざし、掲示板とにらめっこしている。

「うーん。やはりなかなか、コレというものはありませんね」

「いや、十分参考になるよ。ありがとう」

昨日酒場でもらった飴のようなお菓子がポケットに入っていたので、それを渡してお礼を言った。

「な、なんですかこれは。私にくれるんですか?」

「ああ、お礼にと思つて。嫌だった?」

「いえ、嫌じゃないですけど……。ありがとうございます」

不思議そうな顔をして、受付嬢はカウンターへと戻つて行つた。

ふーむ。

受付嬢の言う通り、どれも似たような難しさのようだ。

C級クエスト入門編、みたいな簡単そうなものは見当たらない。

逆に、これは無理そうだ、と思うような難しそうなものもない気がする。

まあ、今日は依頼をみるだけのつもりだったしな。

とりあえず帰つて、明日の朝にまた見てみるか。

と思つたが、明日の朝にまたギルドに寄るのも面倒に思えてきた。

混雑の中で依頼書を剥がして、内容を確認して出発するのは、毎度繰り返してきたこ

とながら少しストレスではある。

どうせどれもあまり変わらないなら、ここにあるものから選んでも構わないのかもしれない。

そのとき、1つの依頼書が目にとまった。

〈グレイウルフ捕獲 必要物：毛皮 2匹分で依頼達成 銀貨10枚 以降1匹毎に銀貨2枚 西の森A地域〉

グレイベアなら見たことがある。

熊のような魔物で、爪と牙が発達していた。

グレイウルフもそんな感じだろう。

アバロンからも近い。

他にいいのもなさそうだし、これにするか。

俺は依頼書を剥がした。

「これで頼む」

「はい。確認いたしました。グレイウルフですか。気を付けてくださいね」

「ああ、ありがとう」

「ちなみに、メンバーは見つかったんですか?」

メンバー、というとパーティーメンバーということか。

以前考えたが、とりあえず1人でやってみるという結論になったのだ。

「いや、1人でやるつもりだ」

「そう……ですか。わかりました。くれぐれも、気を付けてください」

「ああ、了解した」

「では、こちらが資料になります」

それらを受け取り、冒険者ギルドを後にした。

夜明けとともに起きて、西の森へと向かう。

馬車で西の城門へ向かい、そこからは徒歩だ。

地図と見比べながら、グレイウルフが出現するエリアを探す。

1時間ほど街道を進み、近いところから森へと入った。

昨日予習した内容によると、グレイウルフとはその名の通り、狼っぽい魔物だそうだ。多くの場合、3匹〜5匹程度の群れで行動し、牙と爪は鋭く、身のこなしも素早いと

いう。

うーん。

群れ、牙、爪、素早い。

予習してて、ちよつと心配になった。

大丈夫だろうか。

命は1つしかないからな……。

まあでも、耐久力は普通の狼と同様のようだ。

エアスラッシュで仕留められるだろう。

詠唱には数秒もかからない。

規模を大きくすれば、少なくとも2匹は同時に倒せるはずだ。

つまり3発撃てば全滅できる。

そしていざとなれば、全方位に最大規模のファイアを撃って一掃してしまおう。

素材は手に入らないが、命の方が大事だ。

方針に変更なしだ。

狼どもを毛皮に変える。

帰ってきたら、銀貨がザックザクだ。

そのまま、森の奥へと進んでいく。

魔物の気配はなんとなく分かるのは、せいぜい半径5メートルくらいの範囲だ。

背後から獣の速度で駆けてこられたら、対応できない可能性がある。

気配に頼らず、視認することを心がける。

もうこの辺は、狼どもの住処のはずだ。

遠くで音がしたと思つたら、鹿がこちらを見ていた。

こつちの世界の鹿は、ツノが発達していて強そうだ。

しかし魔物ではなく、動物である。

ギルドは動物の肉も買い取ってはくれるが、アレを仕留めて持つて帰つてたところで割りに合わない。

運べる量には限りがある。

目的の狼を探し、歩く。

森を歩いていると、たまに同業者とも出会う。

この森に入ってから、2組のパーティーに会った。

俺が魔術師1人だと言うと、たいいてい驚かれる。

魔力切れや近接戦闘の心配をされ、たまに勧誘されるときもある。

が、適当にいなして別れる。

とりあえずは、ひとりでやってみると決めたのだ。

歩けど歩けど、グレイウルフは見つからなかった。

途中でゴブリンとジャイアントバットに出くわし、エアスラッシュで撃退した。ゴブリンの耳は頂いておく。

たかが銅貨5枚、されど銅貨5枚。

さらにジャイアントバットの牙も回収する。

翼も素材になるが、大きくて持てないので放置するしかない。

徐々に、森の深いところへと入りこんでいく。

もう昼を過ぎようとしている。

気を張っていると、疲れるのが早い。

腹も減ってきた。

昼休憩にするか。

俺は少し見通しの良い場所を探し、昼食を取ることにした。

カップにカシーを注ぎ、パンを頬張る。

もう慣れたものだ。

一息ついて、むしやむしやとパンを食べていると

遠くに獣の姿が見えた。

狼のような姿。

灰色の毛並み。

鋭い爪と牙。

——グレイウルフだ。

カツプとパンを即座に投げ捨て、木に立て掛けていた杖を掴む。

向こうも気づいたのか、俺が行動した瞬間に、こちらに向かつて走り出した。

狙いを定めて。

「エアスラッシュュー！」

風の刃がグレイウルフを襲う。

しかしそいつは、ギリギリのところまで体を捻り、避けた。

勢いは少し削いだが、なおも向かって来る。

避けられた。

これまで、一度も躲されたことがなかった、俺の魔術が。

落ち着け。

まだ距離が長い。こちらに接近するまでにあと3発は撃てる。

今の距離でギリギリだったなら、次は躲せない。

再度狙いを定めて杖を向けたその時。

俺は気づいた。

そいつの左右から、全く同様の速度で走ってくる2匹の獣に、グレイウルフだ。

3匹いたのだ。

きれいに3方向に分かれて、こちらへと向かってきている。

大丈夫だ。

想定範囲内。

魔術の規模を上げ、2匹を同時に狙う。

もう1匹分、詠唱する時間はある。

「エアスラッシュュー！」

2匹の狼を繋ぐように、1筋の風の刃を放つ。

先程とは段違いの規模。

直線上の木々を切り倒し、その奥の狼2匹に命中した。

よし！

片方はまだ死んではないが、前脚の1本を失っている。

放つておいて問題ない。

あと1匹！

「エアスラッシュュー……」

詠唱しかけた言葉が思わず止まる。

やばい。しくじった。

俺は、背後から迫っていた2匹の狼の存在に、ようやく気づいた。

……こいつらは、最初から5匹いたのだ。

前の3匹は陽動。

後ろの2匹が本命だ。

甘くみていた。

魔物がこれほど高度な連携を行うとは。

3匹が肉薄する。

とにかく時間がない。

ファイアを。

「フア」

急いで詠唱しようとしたが、それしか発声できなかつた。

後ろから来たグレイウルフの1匹が、俺の右脚に食いついたからだ。

「ぐあああああああ！」

痛みに絶叫する。

そいつは俺の右脚に食いついたまま首をブンブンと振り、俺はなす術もなく空中を振

り回される。

普通の狼ではあり得ない力だ。

脚から牙が離れたと思つたら、俺の身体は宙を飛び、近くの岩に叩きつけられた。

「がはっ！」

更に間髪入れず、目前にもう一匹が迫つて来た。

俺の首にかぶりつこうとしている。

必死に杖で頭を殴る。

あまりダメージはなく、その牙は方向を変え、俺の腹に食いついた。

服が真っ赤に染まる。

俺の血だ。

「あああああああつ!!」

食われている。

腹を食われている。

「あぐあー！」

うあああー！」

ダメだ。

詠唱なんてできない。

こんな状態で、集中力が必要な魔術なんて使えるわけがない。

痛い、痛い。

痛い。

死ぬ。

「——やめろっ！」

その場に、凜とした声が響き渡った。

同時に、俺にかぶりついていたグレイウルフの首が切り飛ばされた。

「ここは私が引き受ける！ 早く身体を治癒しろ！」

よく通る声。

朦朧とする意識でそちらを見ると、騎士風の女性が立っていた。

残る2匹の狼を相手に、こちらに来させないように牽制してくれている。

——誰？

いや、考えている場合ではない。

女性の言う通りだ。

今はとにかく治癒だ。

腹には穴が開き、腹膜を破って腸が見えている。

破れた血管からダラダラと血液が流れるが、拍動性の出血はない。どうやら大動脈は無事のようなだ。

灼熱のような痛みに、少し動くだけで意識が飛びそうになった。

「ぐうっ、うっ、はあ、はあ、はあ」

耐えろ。

ここは命の瀬戸際だ。

失敗すれば死ぬ。

一生に一度の集中力を持ってくるんだ。

痛みに耐えながら、なんとか欠損した腹部の構造をイメージし、唱える。

「ヒールー」

柔らかな光が俺の腹部を包み、痛みが引いていく。

成功だ。……よかった。

こんな状態でも、杖を離さないでいた自分を褒めたい。

杖がなかったら危なかった。

女性の方を見ると、まだグレイウルフと戦っていた。

彼女は2匹の連携を巧みにいなし、俺を守ってくれている。

奥からもう1匹、前脚を失ったやつがやってきた。

器用に3本脚で移動している。

命の恩人だ。

傷つけるにはいかない。

「エアスラッシュ」

まずはやってきた3本脚を倒した。

「エアスラッシュ」

続いて、女性から少し離れた位置にいるやつを倒す。

その魔術をきっかけに、女性が剣を振り、残る1匹を仕留めた。

状況終了だ。

狼は全て倒したはずだ。

女性は剣を布で拭いたあと鞆に収め、こちらへと近づいてきた。

## クリスとの出会い

「大丈夫か？」

女性が尋ねてくる。

俺は右脚と背中にもヒールをかけ、万全の状態になって立ち上がった。

もう痛みはないが、貧血でクラクラする。

失った血は、治癒魔術では戻らないらしい。

「助かりました。ありがとうございます。」

俺はハジメタナカです」

「クリステイナーナローレンツだ。」

危ないところだったな」

そう言いながら、女性は兜を脱いだ。

金髪金眼の、キリツとした顔立ち。

同い年くらいに見える。

長い髪をポニーテールにして、頭の後ろでなびかせていた。

加えて、それに強く興味を引かれたというわけではなく、あくまでも情報の一つとしてあえて述べるならば、巨乳だ。

「どうして、助けてくれたんですか？」

自分の身まで危険になるのに」

その胸から目を逸らしながら尋ねた。

もしかしたら、死に瀕したせいで、そういうことを強く意識してしまっているのかもしれない。

きつとそうに違いない。

つまり、そちらに目がいくのは、俺のせいじゃない。

クリスティーナは彷徨える俺の視線には気づかず、少し驚いた顔をして答えた。

「人を助けるのに、理由なんていらないだろう？」

私もこれまで、多くの人に助けられてきた。その恩を、別の形で返しているだけだ。まるで模範解答のような答えだ。

俺はこんなことを言う人間を、そのまま信用するようなおめでたい性格はしていない。

無償の献身に裏がない訳がない。

警戒しなければ。

……と、そう思うはずだった。

しかし、クリステイーナの眼を見た瞬間、そんな考えは吹き飛んでしまった。

凛々しく、純粹で、真つ直ぐな瞳。

こんな眼をしたやつは嘘をつかない。

もし嘘をついたとしたら、それは相手を思いやつてのことだ。

出会って間もない俺にそう確信させるほど、その瞳は澄んでいた。

あつという間に、疑う気が失せてしまった。

眼を見ただけでそんなバカな、と自分でも思う。

しかし何故だか、信じられると思ってしまった。

そもそも裏があろうとなかろうと、命を張って俺を助けてくれたことは、紛れもない

事実だ。

相応の礼をしなければ。

「本当にありがとう、クリステイーナさん。

あなたが来てくれなければ、間違いなく俺は死んでました。

何かお礼をさせて下さい。

俺にできることなら、何でもします」

その言葉を聞いたクリステイーナは。

急に態度を翻し、ん？ 今何でもするって言ったよね？ と迫ってきた。  
というの嘘だ。

「礼はいい。」

感謝は既に受け取った。

互いに無事だったんだ。それでいいだろう。

ところで1人で帰れるか？ 付き添った方がいいか？」

現実にはまた模範じみた言葉を重ね、俺の身まで案じてきた。

「それでは俺の気がすみません。」

少なくともあなたには、あなたが倒したグレイウルフの毛皮代と、俺のクエスト達成報酬を手にする権利があるはずです。

せめてそれだけは、受け取ってください」

俺はそう主張するが、あまり響いた様子がない。

「いいんだ。」

私は君を助けるためにやつらと戦ったんだ。

お礼を受け取るためじゃない」

なんだこの女は。

正義の味方でも目指してるのか？

ここまで頑なに拒否されるとは思わなかった。  
もういいか。

この女の言う通り、報酬は総どりしてしまおうか。  
そんな考えも浮かぶ。

……いや、さすがにダメだ。

そんなことをしたら、俺の自尊心が傷つく。  
吹けば飛ぶような、ちっぽけなやつだが。

「頼みます、クリスティーナさん。

受け取って下さい。

でないと、俺の気がすみません」

しつこいとは思うが、もう一度頼む。

すると、彼女は少し驚いた表情を見せた。

「……うーむ。

そこまで言うなら、受け取るとしようか。

それで、今から皮を剥ぐのだな？

私も手伝おう」

その後、辺りに倒れているグレイウルフの死体から皮を剥がす作業を行った。

一番最初に倒したやつは距離が遠かったが、忘れずに回収する。

肉なんかも売れるらしいが、これ以上は持てない。

なにより俺は、出来るだけ早く森を出たかった。

気を抜くと恐怖で足がすくみそうになる。

結構トラウマになってしまった。

「ケガの直後で辛いだろう。毛皮は私が持とう」

クリステイーナはそう言う俺から毛皮を奪い取り、5枚の毛皮を紐で纏めて軽々と肩に担いだ。

恩人にそこまでさせるのは申し訳なかったが、確かに貧血で運ぶのが辛かったので、厚意に甘えることにした。

「何故、一人で森を歩いていたんだ？」

仲間はずい？」

帰りがけ、クリステイーナが聞いてきた。

「俺は冒険者で、グレイウルフ討伐のために森を歩いてました。

仲間はいません。一人で活動してます」

「魔術師だろうか？」

1人で狩りなんて、無茶じゃないか？」

それは、受付嬢からも言われたことだった。

やっぱり無茶だったということか……。

受付嬢に言われたときに、その意見をもっと真剣に検討するべきだった。

俺よりも遙かに長く、色々な冒険者を見てきた人の意見だというのに。

自分を過大評価して、驕っていたのだ。

今回、クリステイナーが来てくれなければ、確実に死んでいた。

あっさり。狼どもに腹わたを食いちぎられて。

思い出すと、背筋に震えがくる。

使う魔術の威力が高くて、やはりそれだけではダメなのだ。

俺にできることは限られている。

接近されたら為す術がない。

帰ったら、パーティーを募ろう。

それとも、地道にD級クエストだけで目標額を貯めるかだ。

どちらかを選ばなければならない。

「確かに無茶だったみたいですが。これが初めてのC級クエストで、思い知らされました」

「そうか……まあ、死ぬ前に気づけて良かったじゃないか」

「そうですね」

本当にその通りで、ははは、と乾いた笑いがこぼれた。

「そういうえば、なんでそんな丁寧な喋り方なんだ？」

歳はそう変わらないと思うが」

「命の恩人ですからね」

「やめてくれ。なんだかこそばゆい。名前も長いし、クリスとも呼んでくれ」

「わかりました。クリス」

「わかった、だろう？」

「わかったよ、クリステイーナさん」

「あら」

なんとか、冗談を言う余裕くらいは出てきた。

そのまま森を歩き、ギルドへと戻った。

交通費を除いた報酬は、銀貨14枚と、大銅貨4枚。

胴体で真つ二つにしてしまったやつが2匹いて、その分の毛皮は半額になってしまった。

「はい、これ」

俺がクリスに全額渡そうとすると、拒否された。

「私が倒したのは1匹だけだ。全額なんてもらえない」とのこと。

仕方ないので、折半にした。

俺の取り分は、銀貨7枚。

1日の稼ぎとしてはダントツの最高記録だが、これに目が眩んではいけない。では、また。

次からは気をつけるようにな」

そう言つて、クリスが立ち去ろうとする。

俺は慌てて声をかけた。

「待った！」

「何だ？」

クリスが振り返り、首をかしげる。

「まだ礼をしてない」

「今、銀貨を受け取ったじゃないか」

「それは狼捕獲の分であつて、俺の恩は別だ」

「律儀なやつだな。いらぬというのに」

「それじゃ俺の気が済まない。

……せめて食事くらい、奢らせてくれないか？」

クリスは思案げな表情をした後、ふっと息を吐いて言った。

「……まあ、いいか。

ではお言葉に甘えて、ご馳走してもらおうとしようかな」

その後、待ち合わせをして、その場は一旦別れた。

その足で店の予約をして、家へと戻った。

しかし、冷静に考えると、口説き文句みたいになってしまった。

これはきつと、ユリヤンとの旅のせいだ。

あいつがよく言うセリフを無意識に頭がインプットしてしまっているのだ。

別に深い意味はない。

命の恩に対する礼だ。

安すぎると思うが、あの堅物はそれくらいしか受け取ってくれなそうだから、しよ

うがない。

俺は着替えて、待ち合わせ場所に向かった。

## クリスとの食事

約束の時間の少し前に、待ち合わせ場所へと到着した。

身だしなみを整え、クリスを待つ。

「――すまない。待たせたか？」

声が出た方を見ると、鎧を脱いだ、普段着のクリスがそこにいた。

髪は下ろし、ほんのり化粧もしている。

白のカーディガンに、紺のロングスカート。

ただでさえ長い脚がブーツによってさらに伸び、歩く姿は以前の世界のモデルのようだ。

この娘を街で見かけても、鎧姿など誰も想像すまい。

「いや、今来たところだよ」

俺はそう返して、歩き始める。

しかし右手と右足を同時に出してしまった。

なんとか平静を装い、店を目指す。

想定以上にクリスが綺麗で、内心めちやくちや動揺してしまっていた。

店は、アバロンでも上の方にランクインする、高級レストラン。かなりの値段だったが、命の礼だ。

いくら払っても高いということはあるまい。

10分ほど歩いて、店に到着し。

入ろうとしたら、袖をつままれていた。

「……どうした?」

振り返ると、クリスは顔を真っ赤にして、眉毛をハの字に寄せている。

「おい、ご馳走になるとは言ったが、こんな店とは聞いてないぞ。

もつと安い店だと思っていた。

こんな高級な所は初めてだ。この格好で大丈夫か? 変じやないか?」  
昼間の大立ち回りが嘘のように、初々しい反応を見せるクリス。

そんな彼女を見て。

卑怯にも、俺は落ち着きを取り戻した。

「大丈夫だ。全く変じやない。似合ってるよ」

「そ、そうか? 本当だな?」

「ああ。インディアン嘘つかない」

「インディアン……?」

クリスの疑問をよそに、レストランへと入る。

店員に案内されたのは、窓際で眺めのいいテーブルだった。

サンドラ村は夜になると真つ暗だったが、アバロンでは道にも街燈が設置され、建物の明かりも多い。

つまり、夜景というものが楽しめるのだ。

クリスは促されるまま、おずおずと席に着いた。

その様子を見て、1つ懸念が生まれる。

「酒は飲めるか？」

こういう店は、飲めないと楽しさが半減するからな。

せつかくの高級レストラン。

できるだけ楽しんでもらいたい。

「……バカにするな。酒くらい嗜む。

少し店の雰囲気、驚いただけだ」

「よかった。

なら遠慮せず、好きなものを頼んでくれ。

何を飲んでくれてもいいから」

「そ、そうか？」

……ま、まあ、最初はハジメと同じものにしようかな？」

クリスはメニニューを眺めながら、どれを頼んでいいのか分からない様子だ。それを取り繕う彼女を見るのは楽しいが、俺にも知識がある訳ではない。つまり、実は困った状況だ。

しかし2人揃ってまごついていると、クリスにまで恥をかかせてしまう。命の恩人だ。

丁重にもてなさねば。

村を出てから手に入れた、俺の酒知識を総動員して乗り切るのだ。

「じゃあとりあえず、食前酒でアルセッタを2つ下さい」

記憶をたどり、以前クレタの街で食前酒として出てきた酒をチョイスした。柑橘系で飲みやすかったし、コースの食前酒で出てきたのだ。

これなら外すことはあるまい。

しかしアバロンでも、食事とセットで酒を出してくれたらいいのに。

田舎とは文化が違うのだろうか。

いや、クレタの街ではお客がそう多くない。

仕入れる酒の種類を限定せざるを得なかったのだろう。

つまり料理と飲み物がセットだったのは、苦肉の策ということだ。

そう考えると、飲んだことがあるものを頼むのはもったいない気もするな。

次からはウェイターに聞いて頼んでみよう。

初めからそうすれば良かった。

ウェイターはうやうやしく礼をして、メニューを下げた。

酒を待つ間、少しぎこちない空気が流れた。

クリスはキョロキョロ、ソワソワしてるし、俺も彼女と向かい合うと、緊張してしま  
う。

「お待ちせしました。アルセッタです」

ウェイターが優雅な動作でグラスに酒が注ぐ。

満たされたグラスは、真っ白なテーブルクロスにとっても映えていた。

「さて、じゃあ頂くとしようか。」

……クリス、今日は本当にありがとう」

「あ、ああ」

グラスを合わせ、酒を飲む。

懐かしい味だ。

柑橘系の甘酸っぱい味。飲みやすい。

クリスも一口飲んで気に入ってくれたようで、すぐに二口目を飲むべくグラスを口に

運んでいた。

「……ところで、クリスは何で西の森にいたんだ？」

あんなどころ、1人で来るところじゃないだろう。

まあ、おかげで助かったけど」

「ああ。私はいつも、あの辺りで狩りをしているんだ」

「狩り……ってことはやつぱり、冒険者なのか？」

「うーむ、どうだろう。私が冒険者を名乗っていいのかは、分からないな」

クリスは、グラスをくるくると回しながら答えた。

少し頬が赤い。

「どういふことだ？」

魔物を狩ってるなら、冒険者じゃないのか？」

「確かに魔物を狩ってはいいるが、私は冒険者資格を持っていない。

依頼を受けて魔物を倒している訳ではないんだ。

ただ森に入り、その日見つけた魔物を狩り、ギルドへ売って生活している」

「……それって、何かメリットがあるのか？」

金を稼ぐためには、依頼を受けた方が割がいいと思うけど」

俺の質問に、クリスは少し黙り。

酒を一口飲んでから答えた。

「そうだな……」

私は冒険者というものの自体には、あまり興味がないんだ。

私には目的があつて、その他のことには時間を費やしたくない。

依頼で稼ごうとすると、最初は低級の任務しか受けられないだろう？

ランクを上げようとするれば、遠くの村に出かけたり、割の悪い仕事をしなければなら  
ない。

それに時間を割くのが嫌なんだ」

俺はこれまで自分がかけた時間を思い、納得した。

「なるほど。確かに。すでに魔物を一人で狩れる人間からしたらそうかもな」

「ああ」

「……目的のため、か」

「そうだ」

そのまま少し、沈黙が流れた。

運ばれてきた料理を、無言で食べる。

とりあえず、美味い。

クリスも料理をほおばり、少し目を見開いている。

グラスが空いたので、ウェイターに良さそうなのを見繕ってもらい、注文する。  
ワインっぽい酒が2人分、テーブルに乗った。

「なあ、その目的つてのが何なのか、聞いてもいいか？」

どうしても気になり、聞いてしまった。

俺の質問に、クリスはこちらを見つめ、逡巡している。

「まあもちろん、無理に聞こうとは思わないけどさ。」

ただ、俺に手伝えることがないかと思つて」

軽い口調で言う。

「……いや、これは私の個人的な問題だ。」

他人の手を煩わせるようなことではない。

気持ちはあるが、大丈夫だ」

クリスは困つたように眉根を寄せ、笑顔を取り繕つて言つた。

俺は。

その態度が、なんだか無性に腹立たしかった。

「……他人じゃない」

「え？」

「君は、俺にとって、他人なんかじゃないって言つてるんだ。」

……命の恩人だぞ？

俺がどれだけ重い借りを背負ってると思ってるんだ。

気にするな、なんて軽く言うけどな。

それを気にせず生きていけるほど、俺は凶太い神経をしてないんだよ。

だからもし食事を奢ること以外に俺にできることがあるのなら、頼むから教えてくれ。

なんだってやるから」

急にまくし立ててしまった。

言ってから、自分の発言に驚いた。

そうか、俺はこの借りを、どうしても返したいと思ってるのか。

お礼に誘った食事の場でこの物言いは、自分でもどうかと思う。

しかし俺は、自分で思っていた以上に、クリスに命を救われた恩を重く捉えていたらしい。

施されたままでは、俺は自分を許せないのだ。

クリスは驚いた顔で俺を見ていた。

俺は目を逸らさずにその瞳を見つめる。

再度、沈黙が流れたあと。

やがて、ゆっくりと彼女は話し始めた。

「……そうか。」

助けた方にも、責任は生じるということか。

今までもこんなことはあったが、誰一人そんなことを言う者はいなかったから、それでいいのだと思っていた。

そうか。言われてみれば、そうかもしれないな」

一息ついて、彼女は続けた。

「……分かった。」

ではハジメ、頼みがある。

手伝ってほしい」

俺は身を乗り出して尋ねる。

「何を手伝えばいい?」

クリスの眼は、相変わらず澄んでいる。

しかし毅然としたその表情の中に。

俺はその時初めて、影を感じた。

「……私の、復讐をだ」

音楽隊による穏やかなBGMの中で。

クリスは言った。

## クリスの事情①

「……復讐?」

予想外のワードが飛び出してきて、俺はその言葉を繰り返した。

「そう。復讐だ」

彼女は相変わらず、綺麗な眼をしている。

その瞳の中に、濁りはない。

それは復讐などという暗く殺伐とした響きとは、あまりにもミスマッチだった。

「どういうことか、詳しく聞かせてもらえるか?」

「ああ。少し長くなるけど、いいか?」

「もちろんだ」

「……わかった」

そう言うときクリスは、今しがた注がれた酒を一口に飲み干し。

おもむろに語り始めた。

「私の両親は、冒険者をしていったんだ。」

2人でCランクのパーティーを組んでいて、仲が良くてな。

両親のような冒険者になりたいと、いつも思っていた」  
過去を懐かしむように、クリスは続ける。

「私はいつも留守番だったが、父に剣を習っていた。

そして、10歳になった日から、少しずつ一緒に狩りに出かけるようになったんだ。最初はゴブリンとか、スライムなんかを狩っていた。

私の剣は割と筋が良くて、足手まといになることはなかった。

少しずつ、より手強い魔物を狩るときにも、連れて行ってもらえるようになったんだ」  
徐々に、クリスの表情が険しくなり。

グラスを持つ彼女の手が、震え始めた。

「……あの日。

12歳の時だった。

アバロンの近くの森じゃなく、初めて遠出して狩りに出かけた。

目的の魔物がなかなか見つからず、3人で探していた。

私には昔から、かなり遠くまで魔物の気配を感じる才能があった。

遠くに知らない魔物の気配を感じて、そいつが目的の魔物だと思ったんだ。

両親も私の能力は知っていたから、私の感覚を頼りに3人でそいつの元に向かった。

そいつは崖の狭間に空いたスペースにいた。

キマイラだった。

目的の魔物ではなかった。

その場所でキマイラが出現した報告なんて、ないはずだった。

両親はそいつを確認するなり、すぐに引き返そうとした。

でも、遅かった。

私達がやつを見つけたのと同時に、やつも私達を見つけていた。

足止めするため、父が迎え撃った。

母は私を連れて逃げた。

私は母に付いて走ることしかできなかった。

やがて、そいつは追ってきた。

父がどうなったのか、そのときは考える余裕もなかった。

そして今度は、母が戦った。

その直前、母は私に、逃げろと言った。

その言葉通りに、私は逃げた。

とにかく息の続く限り、走った。

頭の中は真っ白なままで、アバロンの家に戻った。

どうやって帰ったかは覚えてない。

たどり着いた家で、両親を待った。  
待つことしかできなかつた。

どれだけ待っても、両親は帰ってこなかつた。

家で餓死寸前になっていたら、伯母が訪ねてきた。

その後は、伯母の家で育てられた。

伯母は本当に良くしてくれた。

伯母の夫も、その子ども達も、いい人ばかりだった。

今の私があるのは、あの人達のおかげだ。

あの人達のおかげで、人の道を外れることなく生きてこられた。

そして、伯母は私に言った。

『両親のことは残念だったが、自分の幸せを見つけろ』と。

伯母のことは好きだった。

感謝していた。

伯母の言うことに背きたくはなかつた。

でも、ダメだった。

あの日の記憶は、常に私の心を蝕んだ。

あの時、私にできることは何もなかつた。

両親は私を守るために戦い、死んだ。

私は逃げ、今も生きている。

結末としては正しいはずだ。

しかし、どうしても。

どうしても、私はやつを許せなかった。

忘れることは、できなかった。

私は、ひたすら剣術を学んだ。

道場に通い、中級まで納めた。

だが、私が中級になったのは、15歳の時だ。

それから鍛錬に励んではいるが、最近は進歩が遅くなったように感じる。

そろそろ潮時だと思っているんだ。

身体は成熟した。

剣にはまだ成長の余地があるかもしれないが、やつがいつまであの場所に留まってい  
るかも分からない。

私は、やつを倒すことだけを考えて生きてきた。

伯母には申し訳ないと思う。

だが、結局のところ。

……復讐だけが、私の生きる寄るべだったんだ」

一気にそこまで喋って。

ふう、とクリスはため息をついた。

「すまない。」

こんな話を聞かされるとは思っていなかっただろう？

酒など滅多に飲まないものだから、つい口が滑ってしまった。

私も不安なのかもしれない。

伯母やみんなには、こんなことは話せないからな。

多分誰かに、聞いて欲しかったんだと思う。

そこに君が、手伝ってくれる、なんて言ってくれたから。

つい、甘えてしまった。

——忘れてくれ。

せつかく拾った命だ。

こんな、何も得られない他人の復讐に加担して、再び散らす危険に晒すことはない」

自嘲げに呟いたクリス。

彼女も分かっているのだろう。

その行為で、報われるものなど何も無いことを。

彼女がその身を危険に晒すことを、誰も望んでなどいないことを。キマイラなんて聞いたこともない魔物だ。

C級冒険者である彼女の両親があっけなく殺されてしまうのだから、相当に危険な魔物なのだろう。

俺は今日、そのC級の冒険者が狩る魔物に殺されかけたばかりだ。

そんな俺が手伝ったところで、何かが変わるだろうか。

2人まとめて殺されるのがオチじゃないか？

正直なところ、恐ろしい。

死にかけてた時の恐怖は、忘れるには時間が足りなすぎる。

——しかし。

救われた時の安堵もまた、忘れることなどできはしないのだ。

「3つ、聞かせてくれ」

「ああ、何でも聞いてくれ。

なんだか話してすつきりした。

洗いざらい話してしまいたい気分だ」

「1つ目に、そいつはその場所にまだいるのか？

どうやって確認したんだ？」

「先も言ったが私には、かなり遠くまで魔物の気配を感じられる能力がある。

定期的に、やつからは見つからない距離で気配を探りに行っているから、分かる。

やつはまだ、あの場所にいる」

「なるほど。じゃあ2つ目の質問だ。

ギルドに報告して、討伐依頼を組んでもらったりはしないのか？

そんなやつがのさばってたら、危険じゃないか？」

「いや。やつは人里から離れた場所において、動こうとしていない。つまり、危険とはいえない。

そんな魔物はいくらでもいる。

報酬をこちらで用意しない限り、ギルドは動かないさ。

無論、そちらの方面に行く冒険者には注意を促してもらっているが」

「金を用意して、倒してもらうんじゃないか？」

「ああ、ダメだ。

元々ひとりでやるつもりだったんだ。

6年前のあの日から、ずっとそのつもりで生きてきた。

いざとなって臆して人任せにしたら、私は一生後悔するだろう」

「……分かった。じゃあ最後の質問だ。

気分を害したらすまない。だが、聞いておきたい。

やつにしてみたら、自分の住処に他種族が入ってきて、武器を持っていたんだ。それを撃退した結果、相手が死んだ。

そのことを恨みに思うのは、果たして正しいのか？」  
その質問に、クリスは諦めたような笑みを浮かべた。

「……ああ。分かっている。

分かっているさ。

私達だって、敵わなかったから逃げただけで、もし倒せる実力があつたならやつを殺して素材をギルドに売っただろう。

そうしなかったかったのは、弱かったからだ。

そんな人間が殺されたからといって、恨むのは筋違いだ。

本当にその通りで、ぐうの音も出ない。

理屈では分かっているんだ。

……だが、ダメなんだ。

分かっているても、どうしようもない。

私の心の奥底で、やつを許すなと声がするんだ。

その声を無視して生きることが、どうしてもできないんだ」

乾いた笑みを浮かべるクリス。

その顔を見て思った。

こいつに、こんな表情は似合わない。

そんなトラウマを抱えながら、他人に優しく、正しくあり続けた。

その澄んだ綺麗な瞳には、できることなら、笑顔の中にあつてほしいと思った。

「分かった。

……それじゃ、いつにする?」

ぽかんとした表情のクリス。

「何の話だ?」

「決まってるだろう。決行の日だよ」

「何の?」

「何言ってるんだ。倒すんだろ?」

……キマイラを」

俺の言葉に、信じられないという顔。

「協力して、くれるのか?」

「ああ。

正直俺なんかで役に立つのか分からないけど、やらせてくれ。

もともと、俺から言い出したことだ」

クリスは俺を見つめたまま、茫然としていた。

少しずつその瞳に涙が溜まり、やがて溢れた。

「ありがとう」

クリスはそれだけ言うと、顔を手で覆ってしまった。

気づけばテーブルには料理が溢れかえり、その大半が冷めてしまっていた。

## 前哨戦

クリスと食事をした日から、数日が経過した。

俺はその間に、ローブの下に着る鎧を買った。

キマイラに丸腰で立ち向かうのが怖かったからだ。

しかし魔術師といえば軽装でローブと思っていたが、他の戦闘職よりも動かなくていい分、むしろ重装備の方が合理的な気がする。

グレイウルフの時もこれを着ていれば、腹を食い破られることもなかったのかもしれない。

お値段は銀貨12枚。

懐は食い破られてしまった。

キマイラについても、ギルドで調べた。

基本はライオン、頭が2つあり、双頭のもう一方はヤギ。

翼を持ち、尻尾がヘビの魔物だという。

4〜5メートルほどの大きさで、素早い上に飛ぶことができる。

ライオンの牙やヤギの角は貫通力が高く、尻尾のヘビには毒もある。

過去に討伐依頼が組まれた際には、Bランクのクエストとして依頼されたい。  
……めちやくちや強そう。

俺の気持ちとしては、B級の冒険者を雇って同行してもらいたい。

しかしそれを提案したら、クリスはひとりで事を成そうととするだろう。

俺が協力を許されるのは、恩返しという名目があることと、話してしまった手前、と  
いったところか。  
しようがない。

自分から言い出したことだ。

腹を括ろう。

ひとまず、クリスに冒険者登録をしてもらい、パーティーを組むことにした。

キマイラに挑む前の連携の確認は必須だしな。

どうせやるならクエストをこなした方が、報酬ももらえて一石二鳥だ。

ちなみにパーティーを組んだら、そのランクはメンバーの中で最もランクが高い人と  
同じになる。

つまり、俺がCランクだから、俺たちのパーティーはCランクだ。リーダーも俺。

さらにちなみに、人の入れ替えを行うときは、リーダーと元のパーティーメンバーの  
過半数が所属していることが必須らしい。

今日は、パーティーとしての初めてのクエストだ。

気合い入れていこう。

ギルドの前で待ち合わせをして、依頼をどれにするかクリスと相談する。

「私はクエストを知らないからな。依頼はハジメが決めてくれ」

クリスはそう言っつて、判断を俺に丸投げしてきた。

俺だつてC級クエストは1回しか経験がないし、その1回で死にかけたんだ。

判断に信頼がおけるとは、とうてい言えまい。

しかし、他にやってくれる人もいない。

しようがなく、俺が選ぶ。

うーむ。

対キマイラ戦を想定しているから、できれば狙いは1匹のものがないな。

水辺とか特殊な環境のものも却下。

捕獲の依頼も、できれば却下。

殺して問題ないものがない。

となると、これか。

<オーク討伐 ピオーナ村 銀貨10枚>

他のを探しても丁度いいのはなさそうだ。

その依頼書を剥がして、受付に持っていく。

受け取ったのは、馴染みの受付嬢だった。

「はい、承りました。こちらが資料です」

いつものように、数枚の紙を渡される。

「パーティー、組まれたんですね。安心しました」

「ああ。」

君が言った通り、一人では無茶だったよ。

また何かあったら、教えてくれ。」

受付嬢は、にっこりと微笑んで言った。

「はい、承りました。」

これからも、気づいたことがあったら言わせていただきますね」

—————

ギルドを後にして、ピオーナ村を目指す。

馬車で2時間の道のりだ。

その間に、資料に目を通す。

なんでも、オークが村を歩いているのが、数回目撃されたらしい。

今のところ被害はないものの、いつ村人が襲われるか分からないため、依頼したという。

オークとは、豚が進化して人型になったような魔物だ。

体長は2〜3メートルほどあり、力も強い。

よくある話のように、女を攫って拐かすということはないらしい。

とはいえ、ヒトを見たら襲ってくる。

「さて、どうやって戦おうか」

馬車の中で、クリスに問いかける。

クリスにはすでに、俺に可能なことを伝えてある。

「そうだな……私が前衛で敵と戦うから、ハジメは後ろから隙を見て魔術で攻撃してくれ」

「まあ、そんな感じになるよな」

戦士と魔術師のパーティーなら、誰でもそうするであろう戦い方だ。

初めての連携。

気をつけなければならないのは、俺の魔術がクリスに被弾することだ。

それだけは絶対に避けなければならない。

クリスには自由にやってもらう。

基本的に、魔物は目の前の人間を襲う。

クリスが魔物を引きつけている間に、俺が魔術でダメージを与える。

結局、俺がクリスの邪魔をせずに魔術を放てるかが、この連携の肝か。

まあ、パーティーを組んでる魔術師なら、誰でも通る道だろう。

ざっくりとした方針しか立てられなかったが、これ以上は実際にやってみないと分からないな。

村に到着した。

いつものように、村長の家に行き、依頼内容を確認。

オークの目撃情報があった場所へ案内してもらおう。

そばに森がある、川沿いの道だ。

あとは、ここで気長にオークが現れるのを待つしかない。

出てこなければ、また明日だ。

そうなったら、村長の家に泊めてもらおう。

「じゃあ、交代で見張りをすることにするか」

「見張り？」

「ああ。ここでオークが出てくるのを待つしかないだろ？」

俺の言葉に、クリスはきよとんとした表情だ。

「相手の位置が分かるのに、待ち伏せをする意味があるのか？」

「え？」

「オークなら、森の中を歩いてるぞ。」

他にオークはいないから、村に入ったのはこいつで間違いないだろう」

衝撃的なことを言う。

「魔物の種類までわかるのか？」

「ああ。私が見たことのある魔物に限るが」

なんとということだ。

今まで討伐依頼でひたすら待ち続けていた時間は何だったんだ。

クリスがいれば、待つ必要がなくなる。

一家に一台、クリス魔物探知機だ。

「それなら早速、倒しにいくか」

「ああ。そうしよう」

森に入り、オークを追う。

クリスの案内で20分ほど歩くと、本当にオークを見つけた。

デカイ。4メートルくらいある。

右手には棍棒を持っていた。

背後から近づいたが、攻撃を仕掛ける前に気づかれた。

こちらに向かってくる。

接敵前に一発。

「エアスラッシュュー！」

避けられそうにはない。

どうするのかと思ったら、オークは速度を緩めず、両手をクロスして突っ込んできた。

風の刃が腕にぶつかり、左の前腕を切り飛ばす。

しかし右腕は皮膚を裂いただけだった。

それを見たクリスがオークと対峙し、斬り結ぶ。

戦闘はクリスの方が上手のようで、少しずつオークの身体に朱が混じった。

……さて、ここだ。

この状況で、有効な魔術を使いたい。

それでこそその連携だ。

よく見ろ。

素早く交錯し戦う2つの身体。

魔術を差し挟む隙がない。

手を出しあぐねてしまう。

しばらくクリスとオークの戦闘が続く。

その中で、オークの一撃がクリスに入った。

盾でガードしているものの、身体は宙に浮く。

オークとの距離が離れた。

同時に叫ぶ。

「ストーンバレット！」

岩の弾丸がオークの腹に命中し、オークは身体をくの字に曲げた。

クリスは浮いた身体をそのまま木に着地させ、跳躍。

最高速でオークに迫り、その首を落とした。

---

その後、村に帰って任務達成のサインを貰い、アバロンへと戻った。

牙だけは回収した。

オークで売れるのは牙だけだ。

基本的に、人型の魔物の肉は食べないらしい。

その後、ギルドで換金した金を使って、今日の反省会を行うことにした。

## 反省会

「ぶはーっ！ うまい！」

ゴクゴクとエールを飲む。

オークを討伐した後。

俺とクリスは、俺の馴染みのバーに来ていた。

「うむ、戦闘後の酒は悪くないな」

クリスは果実のカクテルを飲んでいる。

「さて、今日のクエストだけど、何か気づいたこととかあるか？」

飲み会の本題は反省会だ。

問題点を炙り出し、キマイラとの戦いに活かす。

別に酒を飲みながら行う必要はないが、俺が飲みたいからここにした。

「概ね問題なかったと思うが、そうだな。」

やはり、戦闘中に敵だけに魔術を当てるのは難しいものか？」

「やっぱりそこになるよな。」

……正直、思ったより難しかった」

今日の戦闘。

クリスが吹つとばされるまで援護ができなかった。

敵との距離が近いと、クリスに魔術が当たってしまうのを避けるため、どうしても慎重になってしまう。

最後の魔術をエアスラッシュではなくストーンバレットにしたのも、線でなく点の攻撃が可能だからだ。

「いや、でも慣れてないという部分も大きいと思う。

もう少し繰り返し返せば、クリスの動きから次を予測して、もつと的確に援護できるようになる気がする」

「なるほど。確かに、今日が初めての連携だからな」

俺はエールを飲み干し、おかわりを頼んだ。

クリスも気づけばグラスが空いている。

「次は何を飲む?」

「うーん、おすすめは何かあるか?」

「そうだな……アバロンなんかどうだ?」

「じゃあ、それを1つ」

アバロンは、俺がここで初めて飲んだ酒だ。

ウェイターがテーブルにグラスを置く。

それを飲んだクリスの表情に、笑みがこぼれた。

「美味しいな。この酒は」

「そうだろ」

「うん、いい味だ。街の名前と同じというのもいい」

カクテルのアバロンに、クリスもご満悦だ。

割と強めだけど、問題ないらしい。

話を戻す。

「逆に俺としては、たまにわざと距離を取るようになってもらえるとありがたいが」

「距離を？ なるほど。その隙に魔術を撃ち込むわけか」

「可能か？」

「問題ない。」

むしろ、ただのバックステップが攻撃になるなら、選択肢が増えていいことづくめだ。

その作戦は、積極的に使おう」

クリスの頬は少し赤みを帯びてきた。

なんだか色っぽい。

「あとは、そうだな……。」

私が敵とやり合つてるとき、ハジメはもう少しそばに来てもいいんじゃないか？  
距離があると届くのに時間がかかるわけだろう？

その分、私が動いて被弾する危険性が高くなる。

なら、近くにいた方が良さそうじゃないか？」  
なるほど。

確かにそうかもしれない。

魔術師は後衛であるべきだろうが、相手が1匹なら、前衛を潜り抜けてこちら来ることはない。

それならば、魔術が届く速さを優先して、もつと近くにいるべきだ。

「確かにその通りだ。次はもつと近づぐことにするよ」

「ほかに、意見はあるか？」

「そうだなあ……」

そういえば、もとの世界の知識で、戦闘に役立ちそうなものはないだろうか。  
銃器とか作れたら、戦闘を有利に運べるだろうが。

……そんな物が俺に作れるわけがないな。

うーむ。

……あ、そうだ。

「クリスは魔術を使えないんだよな？」

「ああ。私は魔術についてはからつきしだ」

「だったら一応、教えておきたいことがある。」

あのな……」

俺は心肺蘇生法について、クリスに教えることにした。

つまり心臓マッサージと、人工呼吸だ。

俺がやられて、クリスが残った時とか。

もしかしたら必要な場面があるかもしれない。

まあ致死傷を前にしたら、おまじない程度の効果かもしれないが。

この世界の知識だとうさん臭く聞こえるだろう話を、クリスは興味深そうに聞いてくれた。

その後も、あれやこれやと話し合った。

しかしそのうち戦略的な部分は出尽くして、終盤は雑談になった。

クリスは伯母に引き取られてから、騎士養成学校に通い、卒業したらしい。

卒業後、騎士にならずにフラフラしてるので、伯母は心配しているそう。

しかしクリスのことを信頼しているので、放置しているという。

キマイラを狩ろうとしているなんて、夢にも思っていないらしい。

いい具合に酔っ払い、その日は解散とした。

別れ際、体が火照ったのか、服の胸元を引っ張ってあおぐクリスから目を離すのに苦  
勞した。

それから何度も、C級クエストを2人でこなした。

クリスがいれば、C級でもヒヤリとすることはない。

次第に、更に連携が取れて、安定して狩ることができるようになった。

クエストの度に反省会を行ったが、そのうち改善点は出尽くして、ただ飲むだけに  
なってしまった。

その日々は楽しかった。

このままずっと続けばいいと思った。

が、そういうわけにもいかない。

そしてついに。

その日がやってきた。

—————

「おはよう。早いな」

朝日に照らされる街の中。

こちらへと歩いてくるクリスには、何故だか、物語の一場面のような美しさがあった。

「いや、今来たところだよ」

俺はそう答え、共に馬車を待つ。

「どれくらいかかるんだ？」

「馬車で2時間走った後、徒歩で3時間といったところだ」

「そうか」

クリスの緊張が伝わってくる。

今日この日のために、クリスはこれまでの6年を過ごしてきたのだ。

願わくば勝利を得て、無事に帰ってきたい。

馬車が止まり、俺達はそれに乗り込んだ。

……さあ、決戦の時だ。

## クリスの事情②

クリスと俺を乗せた馬車は、アバロンを出発した。

彼女は言葉少なに、ゆっくりと流れる景色を見ている。

俺も特に話すべきことはなく、彼女の横顔をぼんやりと見ていた。

少しずつアバロンの街が遠ざかり、村の畑や果樹園が目に入る。

多くの村人が、農作業に勤しんでいた。

さらに馬車は進み、辺りは森に囲まれる。

長く続く森の景色は、その中にある魔物の姿を覆い隠して広がっている。

しかしクリスには、その気配が鋭敏に伝わっているのだろう。

やがて。

空が暗くなり、ポツリ、ポツリと、雨が降り始めた。

……雨か。

クリスと組んだクエストで、雨は一度もなかった。

雨は、どうだろうか。

クリスの動きに影響しないか。

「クリス、この雨は大丈夫なのか？」

彼女は景色から視線を外し、俺の方を見て言った。

「問題ない。むしろ好都合だ。」

雨だと匂いが薄れる。

やつがどうやってこちらを認識しているか分からないが、情報は少ないに越したことはないだろう」

クリスと目が合う。

相変わらず、綺麗な瞳の色だ。

とても澄んだ、カナリヤ色の瞳。

初めて出会った時に、この瞳を俺は信じた。

その判断は、間違ってたなかった。

クリスは良くも悪くも、真つ直ぐなやつだった。

雨の中、馬車はつつがなく走り、目的の村へと到着した。

「さて、ここからは徒歩だ。少し険しい道も通る。

ここで一度休ませてもらう」

村の門の下で雨宿りしつつ、持ってきた食事を取った。

クリスは弁当を用意していた。

俺はいつものパンとカシーだ。

食べた後しばらく休んでから、歩き始める。

2時間ほどの道のりだ。

ちようど、サンドラ村からクレタの街くらい距離か。

鎧を着ている分、少しばかり体力の消耗は激しいが。

黙々と歩く。

最初は道の上を歩き、途中で逸れた。

進んでいくと森にぶつかり、その中へ入っていく。

しばらく森を歩くと、湖があった。

「……この湖のそばに出るといいう、ポイズンリザードを狩りに来ていたんだ。あの時は」

湖畔を歩きながら、クリスが独り言のように言った。

6年前か。

「こんな道を、よく生きて帰ってこられたな。」

キマイラが追ってこなかったにしても、子ども一人で通るにしては険しすぎるだろう」

「私には、魔物の気配が分かったからな。」

恐らく、魔物との遭遇を避けながら歩くことができたんだろう」

「恐らく？」

「ああ。あの時のことは覚えてないんだ。」

走り出して、気づけば、アバロンの家にいた」

「……そうか」

そこで、会話は途切れた。

しばらく2人で、黙々と歩いた。

しかしふと見ると、クリスの顔に暗い影が宿っていた。

一歩踏み出すごとに、影が深みを増していく。

そして彼女はついに、これまでに見せたことがないほど暗鬱な表情になった。

……どうしたというのだろうか？

不意に、クリスが話の続きを始めた。

「帰り道のごとは、覚えていない。」

だが……それなのに。

両親を見捨てて逃げた時のことは、鮮明に覚えている。両親と共に戦うことなど考えず。

恐怖に駆られて逃げ出した、あの瞬間のことは

——ピタリと。

クリスが立ち止まる。

「……そうか。」

そうだったんだ。

確かに、母は逃げろと言っていた。

私は今まで、その言葉に従ったつもりでいた。

……だが、本当は違ったんだ。

もしも、逃げるなど言われていても、私は逃げていた。

やつに立ち向かうことなど、まるで考えていなかった。

生き残りたい。

それだけだった」

押し殺したような声だった。

「私は……そんな自分が、許せなかったんだ」

そう言って、クリスは天を仰いだ。

雨粒が、クリスの顔に落ちては弾けていく。

……ほう。

彼女が逃げたのは、母親の言葉に従ったからではなかったらしい。

彼女は自分が助かりたいがために、逃げ出したのだという。

なるほど、恐らくその事実こそが、彼女をこれまで苦しめた原因なのだろう。

もしかしたら俺を助けてくれたのも、どこまでも真つ直ぐな性格も。

無意識にその過去を覆い隠そうとしていたからなのかもしれない。

もしくは、その贖罪のためか。

……つまり、この復讐は、動機が違った。

キマイラに両親を殺されたことで、キマイラを恨んでいるんじゃない。

キマイラから逃げた自分を克服するために、キマイラを殺そうとしているのだ。

クリスが、振り返って言った。

「すまない。ハジメ。

直前になって、こんなことを。

今になって気づいた。

私は、やつを許せないんじゃない。

私が許せなかったのは、自分自身だった。

君を助けたのも、ただ自分の後ろめたさから目を背けるためだったんだ。

だから、君は恩なんて感じる必要はなかった。

それなのに、ハジメの優しさにつけ込んで。

その命を危険に晒して。

自己満足の復讐に付き合わせるなんて」

見ると、クリスの目には涙が溜まっていた。

「心底、自分が嫌になった。

……ごめんなさい。ハジメ。

今更、気づいたの。

ごめんなさい。

もう、あなたは大丈夫。

ここからは、私ひとりで行くから。

ごめんなさい」

最後には消え入りそうな声になってそれだけ言うと。

クリスは前を向き、歩き始めた。

——何？ え？

だからって、俺を置いていくつもりなのか？  
ちよつと。

「待てよ」

思つたよりも、硬い声が出た。

俺の声に、ビクツと身体を震わせ、立ち止まるクリス。

その背中が、普段の頼もしさからは想像もつかないほど弱く、儂げに見えた。  
全くコイツは、何も分かつていない。

このままでは、一生分からないのだろう。

誰かが言つてやらなければ。

……こんなことは柄じゃない。

柄じゃないが、どうやらそれを伝える役者は、俺しかないようだ。

意を決して、俺は口を開いた。

「何突然語り出して、俺を放り出そうとしてるんだ。

こつちは何一つ納得できてないってのに。

我が身可愛さに逃げ出した？

それを忘れるための、自己満足のための復讐だった？

それに俺を付き合わせてしまった？

そのことに、今頃気づいた？

——そんなの全部な、知ったこっちゃないんだよ」

クリスは背中を向けたまま、うつむいている。

「……いいか？」

俺が君に、君の復讐に協力しようと思ったのは、君の行動の結果なんだ。

例えどんな理由だろうと、俺は初めて会ったあの時に、君を信じると決めた。

それはクリスを、君が許せないと言う君自身を、俺は信じられると思ったからだ。

でなけりや、命を救われたって、もう一度その命を賭けられなんかしないよ」

雨が一段と強く降り、木々の葉を揺らした。

その音に負けないように、できるだけはつきりと伝える。

「自己満足だろうと構わない。

それでクリスが救われるんなら。

そのために命を張ると、そう決めてここまでやってきたんだよ、俺は。

つまり俺にとってはクリスの動機の違いなんて、些細な問題なんだ。

……だから、なあ、一緒に行かせてくれ。

ここまで一緒にやってきたのに。

勘違いしてた自分がちよつと恥ずかしいからって、突然放り出すなんて……あんまり

だろ？」

クリスは背中を向けたまま、動こうとしない。

よく見ると、肩が震えている。

そのまま、少し沈黙が続いた。

雨は容赦なく降り続け、俺とクリスの体を濡らす。

このまま動かないと、冷えきってしまいそうだ。

やがて小さな声で、クリスが言った。

「……本当に？」

「ん？」

「本当に、手伝ってくれるの？」

「ああ」

「こんな、自分のことしか考えてない、その自分のことすら、見たくない所から目を背けてた、馬鹿な私を？」

「ああ。そんな馬鹿なクリスをだ」

「なんで……」

「なんでってそりゃ……そうだな。」

君が、どうしようもなく、真っ直ぐだからかな。

本音の動機なんて言わなきゃ俺は分からないのに、気づいたら言わずにはいられない所とか。

目を背けてるくせに忘れられなくて、克服するために精一杯頑張つて、他人の俺を助けてくれるところとか」

初めて会った時のことを、思い出しながら言う。

「例えきつかけがどうだって、それだけずっと正しくあれるなら、それはもうクリス自身だと思う。

もし俺にそんな過去があつたら、きつとそれに囚われて何もできないままだったよ。

何もせずにボンヤリ一生を終えるか、非行にでも走つたろうと思う。

でもクリスは、そうじゃなかった。

……俺から見たクリスは、自分の過去としつかり向き合つて、他人を想いやれる、どこまでも真つ直ぐな、優しい女の子だよ」

言つてから赤面してしまう。

……キザ過ぎた。

「だ、だからさ、さつさとキマイラをぶつ殺して、いつものバーで乾杯しようぜ。やつのもんでもツマミにしてさ」

あわてて付け足すが、なんか空回りした感じだ。

クリスの反応はどうだろうか。

置いていくのは思い直してくれただろうか。

様子を伺っている、彼女はこちらを振り向いた。

その目には雨でもハッキリと分かるほどの、大粒の涙が流れていた。

「お、おい、大丈夫か？」

俺の言葉は無視して、クリスは俯きながらこちらに向かってくる。

な、なんだ？

俺が動けないでいると、クリスは両腕を広げ、俺に抱きついてきた。

「うおっ！

……え、えーつと……クリス？」

俺の言葉は全て無視し、そのままの体勢を維持するクリス。

手のやり場に困った俺は、とりあえず頭を撫でてみた。

濡れてるのに、指通りは滑らかだ。

これはきつといいシャンプーを使ってるに違いない。

しばらくそのままだった後。

「ありがとう、ハジメ」

胸の中からポツリと、そう聞こえた。

## 対キマイラ戦

雨が上がり、日差しが出てきた。

出かけにクリスが雨の方が有利とか言っていたが、まあ、誤差の範囲だろう。

その程度で勝敗が動くとは思えない。

俺は気分的に、雨よりも晴れの方がいい。

これだって立派な、有利になる理由だ。

さて、なんだか決戦の空気を失ってしまったので、いったん休むことにした。

キマイラの住処は崖のふもとにあり、その崖伝いにある洞窟で俺達は休んでいる。

もう、クリスのリーダーにはキマイラの気配が引つかかっているようだ。

いよいよ本番。

気合を入れていこう……と思うのだが、何だかそれが難しい。

クリスと目が合うと、彼女は赤面して目を逸らしてしまう。

話しかけても、目を逸らしたまま返事をする。

俺が近づくとそそくさと離れていく。

……いかん。

こんな状態で戦いを挑んでも、負けは目に見えている。  
負けとは即ち死だ。

命を懸ける戦の前に、これではダメだ。

もはや一度引くべきかもしれない。

別に急ぐわけではないのだから。

「クリス。

今日はいったん引いて、別の日にするか？」

その質問に、クリスは驚いたような顔をした。

その後すぐに苦虫を噛み潰したような表情になり、背を向けた。

そして、両の手の平で自分の頬をハタいた。

「ぼちん、と高い音がする。

「だ、大丈夫か？」

クリスは振り返って言った。

「すまない。少し取り乱してしまっていた。

もう大丈夫だ。

「連携の確認をしよう」

毅然とした表情でそう答えるクリスだが、その頬は真っ赤に腫れていた。

……ホントに大丈夫か？

しかしその後は、普段通りのクリスだった。

これまで培ってきた連携を発揮するべく、その最終確認を入念に行う。

その後、休憩し、精神統一。

張り詰めたような沈黙が、俺達を包む。

いよいよだ。

負けるわけにはいかない。

俺はしっかり集中できた。

程よい緊張感が全身を覆っている。

クリスがおもむろに口を開いた。

「行こう」

その表情に油断や動揺は一切なく、ただ覚悟だけが映っていた。

キマイラの居場所に向かって、一歩ずつ歩く。

俺達の周りには木々が茂っているが、キマイラはそれらがなくなる、開けた場所にいいという。

まだやつのは姿は見えない。

クリスは既に気配を感じており、やつが動いたら知らせてくれることになっている。可能であれば、やつが気付く前に魔術を撃ち込みたい。

そして気付かれてからも、接触する前に2、3発魔術を放つ。できれば当たるといいが。

使うのは、遠距離ではエアスラッシュ。

近づいてきたらファイアだ。

全て最大出力で行う。

素材など、燃え尽きても構わない。

クリスは例え俺が初手で倒してしまっても、文句はないと言っていた。本音では、自分でとどめを刺したいのだと思う。

しかしそんなことを気にする余裕はない。

死ぬのは、こちらかもしれないのだ。

ピタリと、前を歩くクリスが止まる。

木の影に隠れ、俺にも従うようにジエスチャー。

同じ木の影に隠れた。

クリスが指をさす。

その方向を見ると。

……いた。

あれがキマイラか。

ギルドの情報通りの外見。

ライオンとヤギの双頭で、翼がある。

尻尾は見えないが、おそらく蛇なのだろう。

こちらには気づいていない様子だ。

「はあつ、はあつ、はあつ」

クリスの息が荒い。さした指も震えている。

無理もない。

彼女は6年という歳月を、やつを殺すために費やしたのだから。

「やるぞ。いいか？」

小声で尋ねる。

「ああ。頼む」

クリスが答えた。

さあ、始まりだ。

「エアスラッシュユ！」

特大規模の、風の刃がキマイラに向かう。

詠唱した瞬間、こちらに気づいた。

跳躍され、余裕をもって避けられる。

エアスラッシュは後ろの崖に当たり、崖崩れを起こした。

着地したやつは、走ってこちらへと向かってきている。

クリスは隠れていた木から飛び出して、広い場所へと向かう。

俺も後を追う。

走りながら、魔術を唱えた。

「エアスラッシュユ！」

しかし当たらない。

余裕を持って躲かれてしまう。

やはりこの距離では厳しいか。

開けた場所に出た。

2メートル前にクリス。

キマイラまでは、あと20メートルほど。  
こちらへ走ってくる。

「クリス！俺を先に！」

「わかった！」

手筈通りの行動をとる。

クリスが下がり、目の前には迫りくるキマイラ。

めちやくちや恐ろしい。

あの牙が刺されれば、鎧など一撃で貫通するのだろう。

……だが、ここで引くわけにはいかない。

目前にキマイラが迫る。

今だ！

「ファイアオール！」

目の前に出現する巨大な炎の壁が、俺の視界を塞ぐ。

やつがあのまま進んだなら、黒コゲのはず。

しかし。

「ハジメ！ 危ない！」

間一髪、空から降ってきたキマイラの爪を、クリスが弾く。

やつは跳躍し、空を飛んで炎を避けていた。

わずかに焦げた所も見えるが、活動に支障はなさそうだ。

……くそつ。

キマイラが、今度はクリスに襲いかかる。

しかしクリスは熟達した動きで、やつの攻撃を捌いた。

きつと何百回、何千回とイメージしたのだろう。

ライオンの牙、爪、ヤギの角、蛇の毒。

その連携のいずれも、クリスに傷を負わせることはできない。

彼女の6年間の努力が、この瞬間、この動きを実現したのだ。

圧倒的なキマイラの手数を、全て紙一重で躲していく。

まるで舞のような、洗練された動き。

その動作の1つ1つが、彼女のこれまでの人生を物語っていた。

どうか、報わせてやりたい。

俺は出来る限り近づき、クリスの一挙一動に集中する。

経験は十分に積んだ。

できるはずだ。

この混戦でも、やつだけを狙うこと。

目で追うのがやつとの、クリスとキマイラの立ち合い。

爪での攻撃を避け、蛇の噛みつきを盾でいなし。

剣を振るうことでライオンの牙の軌道を変える。

そんな目まぐるしい、一連の動作の中。

クリスが、両膝を曲げた。

それはこのひと月、何度も見た動作。

ならばこの次の行動は決まっている——バックステップ。

「エアストラッシュュー！」

クリスの後退と、俺の詠唱は同時だった。

一瞬前にクリスがいた空間を、風の刃が通り抜ける。

それは攻撃のために突っ込んでいたヤギの首と、右の翼を切り落とす。

——よし！

「ガグアアアアアアッ!!」

キマイラが叫び、クリスを無視して俺の方に走ってきた。

——まずい。

詠唱を。

「フア」

そこまでで止まってしまおう。

それより先に、牙が到達してしまった。

またこれかよ。

「ぐおあああああああつ!!」

その牙は、俺の両腕を噛み砕いた。

バキリボキリと嫌な音がする。

そして腕だけでは飽き足らず、すぐさま俺の首を狙ってきた。

やばい。

その時。

「つあああああああつ!!」

クリスが大上段から剣を振り下ろす。

その一撃で、ライオンの首を斬り飛ばした。

ブシュツと血液が飛び、俺の顔にかかる。

断面から血がドクドクと流れ出し。

ライオンの首が転がり、胴体が崩れ落ちた。

「エアスラツシユー!」

即座に、尻尾の蛇の首も飛ばす。

「……はあつ、はあつ、はあつ」

その場に、クリスの荒い息づかいだけが響いた。

これまでの激しい攻防が嘘のように、景色が静止している。

ドボドボと流れるキマイラの血液だけが、時の流れを示していた。

「終わった……」

クリスが眩いた。

ついに、彼女の6年間に、終止符が打たれた。

紛うことなき、完全勝利だ。

「ハジメ！ 大丈夫!？」

我に帰ったクリスが、慌てて駆け寄ってくる。

「……ああ。こないだよりはマシだよ」

両腕があらぬ方向に曲がり、所々から骨がとび出している。

鎧の腕部分は砕け、服の袖は血で真っ赤だ。

気絶しそうなくらい痛いけど、しかし死ぬほどではない。

意識を集中する。

「ヒール」

暖かい光が両腕を包み、腕は元通りになった。

握ったり離したりして、動きを確かめる。  
問題ない。

「…………ふう。やったな」

そう言つてクリスを見ると、また泣いていた。

結構、泣き虫なんだよな。

目が合うと、俺の胸に顔をうずめてきた。

さらに背中に手が回される。

しかし鎧のせいで感触は何も伝わってこない。

道中も思ったが、やはり鎧なんか着るべきではなかったか…………。

…………いや、クリスも着てるから意味ないか。

「ありがとう。ハジメ。」

ありがとうおつ…………おつ、うえつ、ううう」

おずおずと、手を頭に乗せる。

「よくやったよ、クリス。お疲れ様」

「うっ、うう…………。」

お父さん、お母さん。

倒したよ。

私、あいつを。

倒したよ。

うつく、うつ、うわああんつ」

感極まったのか、クリスは声を上げて泣き始めた。

それから10分程。

クリスはずっと、泣き続けた。

――

しばらくして。

目を真つ赤に腫らしたクリスは、我に帰ったのか、恥ずかしそうに俺から離れた。

……さて。

「こいつをどうしたものかね」

目の前には、キマイラの死体。

ライオン、ヤギ、ヘビの首が転がり、首なしの胴体が横たわっている。

「……ハジメ。お願いがあるんだが」

「何だ？」

「このキマイラ、全て焼いてはくれないか？」

クリスは言った。

え、もつたいないな。

毛皮とか、売れば金になりそうだが。

「どうしてだ？」

「すまない、私のわがままなんだが。

ここでもこいつから素材を回収してしまつたら、今日やったことの意味が薄れてしまう気がして。

……だめか？」

そうか。

確かにこいつを使って金儲けをしたら、クリスの6年間の意味が変わってしまうかもしれない。

こいつを倒したのは、両親の仇討ち、そして、過去の弱い自分を乗り越えるためだ。

それ以外の不純物は、ない方がいい。

「いや、いいさ。」

クリスの戦いだ。

決定権はクリスにある。

焼いてしまおう」

俺はファイアを唱え、キマイラの死体を焼いた。

メラメラと炎が上がり、キマイラの死体を骨と炭に変えていく。その燃えゆく様を、クリスはただじっと見ていた。

やがて、火は燃え尽きた。

「さてと」

クリスの方を見る。

「帰ろうか」

彼女は赤い目を細めて、にっこりと笑って答えた。

「ああ。帰ろう！」

俺達はアバロンを目指し、帰路についた。

## クリス視点

<クリス視点>

私は今日、ついに目的を達成した。

6年間。

今日という日をずっと夢見て生きてきた。

学校で友人も作らずに剣の腕を磨き。

卒業後は道場に通って鍛え上げた。

全ては今日のため。

今日だけのための努力だった。

しかし、私ひとりでは、恐らく達成できなかった。

自分の愚かな心得違いに、気づくことすらなかっただろう。

ハジメがいたから。

彼がいたから、私は今、こうしていられる。

彼には感謝しても、しきれない。

最初は、何とも思わなかった。

魔物に襲われている人がいたから、助けた。

私にとっては、当然のことだった。

思えば、そうした善行を重ねることで、過去の記憶から目を背けて過ごしていたのだ。振る舞いを演じた結果、たまたま彼を救ったに過ぎない。

同じようなことは、これまでもあった。

私は遠くの魔物の気配が分かる。

それ故に、襲われている人を見つけることも多かった。

これまで出会った人は、全て同様に助けてきた。

皆、礼を言い、謝礼を渡してきた。

私が必要ないと断ると、礼だけ言って去っていく人が殆どだった。

……ハジメだけだった。

あそこまで頑なに、礼を返そうとしてくれた人は。

だから私はハジメに、話してしまった。

思えばこの6年間、誰にも自分の思いを明かさずに生きてきた。

家族には言えるわけがないし、打ち明け話ができる友人もいなかった。

あの時私は初めて、自分の思いを打ち明けたのだ。

そして話してしまえば、期待してしまう。

私はずっと、自分が不安だったのだと気がついた。

勝てるかわからない相手に挑むことへの不安。

死ぬかもしれないことへの不安。

身勝手にも、それらを分かち合ってくれる人を欲していたのだ。

そしてハジメは、手伝うと言ってくれた。

本当は、私の行動は全て私のためのもので、恩に報いる必要なんてないというのに。

それから、ハジメと長く一緒に過ごすようになった。

ハジメとの日々は、心地よかった。

ハジメといると、ワクワクした。

ハジメといると、何だか浮き足立った。

ハジメといると、心臓が高鳴った。

不思議な感覚だったが、決して嫌なものではなかった。

こんな日々が、いつまでも続いてほしいとさえ思った。

そんな時、夢を見た。

あの時の夢だ。

あの夢を見るのはいつものことなのに。

その日は何故か、自分の抱えている感情に、違和感を感じた。

今にして思えば、それは事の成り行きを初めて自分以外の人に話したからだった。

話したことで、顛末が整理されてしまったのだ。

しかし、私はそのことを深く考えずに過ごしていた。

違和感は次第に大きくなり、その矛盾を確信したのは、戦いの直前。

ハジメとの会話によってだった。

私がキマイラに挑む理由は、両親のためではなく、自分のためだった。

私の利他的な振る舞いは、他人のためではなく、自分のためだった。

そんなことに、今更になって、気づいたのだ。

取り乱した私に、ハジメは言った。

復讐の目的がなんであれ、関係ないと。

どんな理由であれ、私の行動は、私のものだ。

私のことを信じてくれると。

そう、言ってくれた。

——その言葉に、救われた。

もしハジメがそう言ってくれなかったら。

私は動揺した心でやつに挑み、あっけなく死んでいただろう。

ハジメは私の、命を救ってくれたのだ。

私が彼の命を救ったのは、私のためだ。

なのに。

彼は私のために、私の命を救ってくれた。

……本当に、感謝しても、しきれない。

やつの首を落としたとき。

それまでの葛藤が、全て吹き飛んだ。

最初に浮かんだのは、両親の顔だった。

両親は、笑顔だった。

私が我が身可愛さに逃げたことなど全く気にせず、ただ私の幸せだけを願ってくれて  
いるような。

そんな都合のいい空想を、信じることができるような。

そんな笑顔だった。

——初めて自分の事を、好きになれそうな気がした。

燃えていくキマイラを見ながら、私は過去の私と決別した。

これだから、本当のスタートだ。  
何にだってなれる。

私は自由なんだ。

そんな風に思えたのは、子どもの頃以来だった。

ひとまず、これからしたいのか、考えた。

ハジメと冒険者を続けたい。

浮かんだのは、そんなことだった。

彼という時の。

ワクワクするような、浮き足立つような、心臓が高鳴るような。

その感覚の正体は何なのか、知りたい。

そう思った。

また、毎日が始まる。

今度こそ、後悔をしないように生きていこう。

手始めにまずは、ハジメに、パーティーの継続をお願いしてみよう。

## 祝勝会

〈ハジメ視点〉

朝だ。

清々しい朝。

昨日キマイラを倒してアバロンに戻った後。

祝勝会をしようとクリスに持ちかけたが、断られてしまった。

少しひとりで考え事をしたい、とのことだ。

フラれた俺はやることなく。

家でひとり酒を飲んでいたら眠くなってきて、何の変哲もないままに就寝したのだつた。

しかし、祝勝会がなくなったわけではない。

クリスは言った。

「今日は遠慮する。また明日」と。

昨日の明日。

つまり今日である。

今日はクリスとふたりで、とことん飲もう。

キマイラを倒した時の、クリスの泣き顔は印象的だった。

苦しみから解き放たれたような、新しい人生の産声のような、そんな涙だった。

見ていて俺ももらい泣きしそうになったほどだ。

クリスの新しい人生の門出だ。

盛大に祝ってやろう。

……しかし、それまでは暇だ。

何もすることがない。

しようがないから俺もクリスにならって、今後のことでも考えてみるか。

とはいえ、当面の目標はこの街に来た時から変わっていない。

魔術協会の図書館で、転移魔術について調べることだ。

そのためにお金が必要だったから、現在冒険者をして金を稼いでいる。

そしてクリスとパーティーを組んでから、収入が5倍くらいになった。

ソロの時は1回のクエストに2日以上かかることもザラだったのに、クリスのおかげ

でそれがなくなったからだ。

どのクエストも1日で終わる。

報酬は折半しているにも関わらず、このペースでいけば目標額まで1ヶ月もかからないだろう。

まったく、クリスさまはまだ。

ただ、重大な問題がある。

クリスがパーティーを続けてくれるとは、考えにくいということだ。

彼女は自由になったのだ。

やりたいこともいろいろあるだろう。

……一応、ダメ元で頼んでみるか？

そんな誘惑に駆られるが、やめておこう。

もし俺に恩を感じたりしていたら、生真面目なクリスのことだ、俺の頼みを無下にはできない。

俺のために彼女を縛るのは、本意ではない。

せつかく、彼女が勝ち取った自由なのだ。

クリスには好きに生きていつてほしい。

とすると、D級を1人でこなすか、どこかのパーティーに入れてもらってC級でやっていくか。

そのどちらかを、選ばなければなるまい。

……どこかのパーティーに入れてもらおうかな。

クリスマスと活動してから、やっぱり話し相手がいるって大事だと思った。

1人というのは、寂しいものだ。

他人と一緒にストレスにはなるが、ひとりぼっちの方が辛い。

——よし。

その方針でいこう。

そして金が貯まったら、魔術学校に入学して、中級魔術の勉強をする。

それができればC級魔術師になれば、図書館に入れる。

そうすれば、転移の謎が解けるかもしれない。

先は長いが、気長にやっていこう。

—————

夜。

アバロンの中心街にある、なじみのバー。

俺は待ちきれず、予定のかなり前から入ってしまった。

ちびちびと酒を啜っているが、もう2杯目だ。

少し酔っぱらっている。

グラスを眺めていると、扉が開く音がした。

「すまない。待たせたか？」

見ると、クリスがいた。

以前食事をしたときと、同じような格好だ。

「いや、今きたところだよ」

条件反射でそう答えると、向かいにクリスが座った。

今日はテーブル席だ。

「何にする？」

「そうだな……以前飲んだ、アバロンをもらおうか」

マスターに頼むと、すぐに出てきた。

コトリとグラスが置かれる。

「それでは、キマイラ討伐成功を祝して……乾杯！」

「乾杯」

グラスを合わせると、小気味良い音が響いた。

俺は手に持ったグラスを、ゴクゴクと一気に飲み干す。

ああ、最高だ。

「マスター、俺にもアバロンを」

空になったグラスを掲げながら頼むと、マスターは無言で頷いた。その後しばらく、あの戦いについて、ふたりで語り合った。

「……ハジメの風魔術のタイミング、完璧だったな」

「だろ？ 何度も見たからな。」

クリスの足さばきだけで確信したよ」

「ああ、完璧な連携だった。」

おかげで首の片方を落ちて、勝機が見えた」

「クリスの最後の一太刀も、すごかったよ。」

なんていうか、鬼気迫る感じだった。積年の恨みってやつか」

「やめてくれ。」

ハジメの方に向かわせてしまった時点で、失敗だ。

私の剣が少し遅れれば、ハジメは死んでしまっていた。

申し訳なく思っている」

「何言ってるんだよ。俺が予定より近づきすぎたんだ。

あの距離で防ぐなんて、誰にもできないやしないよ」

「そう言ってくれると、助かるが……」

「それにまあ、結果的にはあれでよかったんじゃないか？

俺は全然、不満はないぞ。

クリスの泣き顔も見れたし」

「や、やめてくれ。あの時のことは、忘れてくれ」

「うっ、うう……」

お父さん、お母さん。

倒したよ。

私、あいつを。

倒したよ。

うつく、うっ、うわああんっ」

「わっ！ やめろっ！ 馬鹿っ！」

耳まで真っ赤にしているクリスを見るのが楽しくて、つい調子に乗ってしまう。

しかし、馬鹿、か。

品行方正なクリスマスから、そんなことを言われるとは。

クリスマスはキマイラを倒してから、ちよつと変わった気がする。

少しずつ、素の部分を見せてくれるようになったのかもしれない。

「なんだハジメ。ニヤニヤして」

「ん？」

クリスマスはかわいいなあと思って」

「か、かわ、かわ……？」

コラッ！

からかうのはやめろっ！」

耳どころか顔全体を真っ赤にして、茹でダコと化すクリスマス。

クリスマスは思春期の全てを鍛錬にささげて生きてきた。

そのせいで、どうやら人にかかわれるということに慣れていないらしい。

まあ俺も大概だが、俺はユリヤンとの旅で少し鍛えられたのだ。

クリスマスを相手になら、目を合わさなければからかうくらいの余裕がある。

目を合わせたら、美人すぎていまだに緊張するが。

酒を飲んで、一息ついた後。

気になっていたことを質問した。

「それで、クリス。

これからどうするんだ？

キマイラ退治は終わったことだし、これから何か、やりたいこととかあるのか？」

「そ、そうだな……」

俺の質問に、クリスは何故かもじもじとし始めた。

上目遣いで、意味ありげな視線を送ってくる。

上気した肌とあいまって、なんだか非常に色っぽい。

「あの、もしハジメがよかつたらなんだが……」

……あれ、なんだろう、この感じ。

これ告白される前のやつじゃない？

一緒にキマイラを倒したことで、好感度稼いじやった？

クリスが俺と付き合いたいと言うなら、俺は全く全然これっぽっちもやぶさかではない。  
い。

——いや。待て。

俺はクリスのことを好きだろうか。

もちろん好きか嫌いかで言ったら好きに決まってる。

しかし、愛してるといえるか？

中途半端な気持ちで応えても、クリスを傷つけるだけだろう。ダメだ。

ちよつと待ってクリス。

その先は言わないで。

もうちよつとだけ考えさせて！

「私とのパーティーを、継続してくれないか？」

……まあ、そんなこつたらろうと思いました。

「ど、どうかしたか？」

すごく悲しそうな顔をしているぞ？

やっぱり嫌だったか？」

嫌じゃないよ。

というかめちやくちやありがたい提案だ。

ただ、現実に戻ってくるのに時間がかかっただけなんだ。

ふうー、よし。

「……いいのか？」

そりゃ、俺にとっては願ったり叶ったりの提案だけど。

他にやりたいことだつて色々あるんじゃないか？

俺と冒険者なんかしてたら、もったいなくないか？」

平静を装つて、クリスに尋ねる。

「いや、いいんだ。

なんだかな、ハジメと一緒にいるのが、心地いいんだ。

こんな気持ちちは初めてでな。

考えてみれば、私は12の時から、友人というものがいなかった。

だからハジメは私の、初めての友人だ。

もう少し、このまま続けさせてくれないか」

告白と勘違いさせといての、お友達発言とは。

ひどいやつめ。

「知ってるか？」

友情っていうのは、双方がそう思つて初めて成立するんだぞ」

「えっ、それつてつまり……」。

ハ、ハジメは私のこと、嫌いなのか？」

クリスはとてども動揺して、キョドリ始めた。

わずかに涙まで浮かべている。

なんとも切ない。

クリスマス、本当に友達いないんだな……。

「ごめん、冗談だよ。」

俺としてもありがたい提案だ。

喜んで、受けさせてもらう」

クリスマスはあからさまにホツとした表情を浮かべた。

ぼっちの唯一の友人として、庇護欲がくすぐられるな。

俺もぼっちだから、上から目線にいるにはハートの強さが必要だが。

「ただ、俺の目的は魔術を調べることなんだ。」

だから、必要な金が貯まったら、狩りの頻度がかなり下がるかもしれない。

「……それでもいいか？」

「ああ、構わない。宜しく頼む」

クリスマスは嬉しそうに微笑んで言った。

こうして、これからもクリスマスとC級冒険者を続けることが決まった。

そしてその後も、宴会は続いた。

クリスマスとの会話は心地よく、些細な話で盛り上がった。

話題は尽きなかったが、しかし楽しい時間はあつという間に過ぎてしまい、閉店とと

もにお開きとした。

## 魔術学院

クリスとの祝勝会から2ヶ月が経った。

お金は順調に貯まっている。

クリスと組んでからというものは、もはやC級のクエストは無双状態だった。

クリスが索敵し、俺が先制攻撃。

それで終わらなければクリスが盾になり、俺がクリスのどちらかが止めをさす。

その勝利の方程式は、崩れることがなかった。

特筆すべきは、やはり連携の熟達だ。

クリスの戦闘中に、絶妙な距離感をもって魔術を放り込めるようになった。

1ヶ月くらいで目標額は貯まった。

しかしそのことを告げるとクリスが寂しそうな顔をしたので、もう少し稼いでおくことにした。

俺も、狩れば狩るほど金が貯まっていくのは気分が良かったし。

金なんて、いくらあっても困りはしないしな。

そして今日。

ついに目標の倍以上の金が貯まったところで。

ひとまず狩りを休んで本来の目的を進めることとした。

ただ、狩りも全くやらないわけではなく、合間を見て行う方針だ。

俺が狩りをできない時にクリスはどうするのかと聞いてみたら、伯母達と過ごすのだという。

これまで育ててくれた感謝を伝えたいとのことだ。

俺の本来の目的とは、すなわち中級魔術の習得である。

そのために、魔術学院に通う。

ようやく、王子様がくれたタダ券を使う時がきたのだ。

### 魔術学院。

それは国によって創立された、魔術師を育てる場である。

魔術師の需要は高く、その数が国力を表す一つの指標にも用いられる。

故に、優秀な魔術師を育て、抱え込むことは、国にとって重要な責務なのだ。

よって、いくつもの街に、魔術学院が設置されている。

しかし中でも、このアバロンの魔術学院は特殊だ。最古の歴史を誇ることもさることながら。

その卒業生の一部は、王に仕える宮廷魔術師となるのだ。

故に、王家の潤沢な資金援助のもとに、最高と自負する魔術教育が行われている。

アルバーナ唯一の、王立魔術学院。

それがここ、アバロン魔術学院である。

……とまあ、本で読んだ知識だとそんな感じだ。

さっそく、学院を訪ねてみた。

敷地はすごく広い。

石造りの校舎は大きく、歴史を感じさせられる。

歩いていると、ちらほらと制服を着た生徒とすれ違った。

正面入口から中に入り、受付へと進む。

「こんにちは。本日はどのような用件でしょうか？」

受付嬢が、慣れた様子で尋ねてきた。

「すみません。入学希望なんですけど」

「了解いたしました。」

では、こちらの書類に必要事項をご記入のうえ、少々お待ちください」

「あ、あと、ユリヤンⅡウオードⅡアルバーナ殿下よりお手紙をいただいております。これも確認をお願いします」

「はい、確かに承りました。では、少々お待ちください」

そう言つて、受付嬢はどこかへと行つてしまった。

とりあえず、書類を記入して待つ。

しばらくして、受付嬢が戻つてきた。

「お手紙を拝見させていただきました。間違いなく、王家の推薦状と確認いたしました。では、これから校長が面接を行いますので、こちらへいらしてください」

校長じきじきに面接するのか。

しかも俺が来てすぐにつて……ヒマなのか？

「——数日待つていただくこともあるのですが、本日はたまたまこちらにいらっしゃるので」

思考を読んだかのように、受付嬢が言った。

受付嬢に連れられて、奥にある階段を登る。

どうやらこの建物は、職員用のものらしい。

5階まで上がり、廊下を少し歩くと、「校長室」と書かれたプレートがある部屋の前に来た。

「校長先生。お連れいたしました」

「お入りください」

受付嬢がドアを開けた。

執務用の机が奥にあり、手前に来客用のソファと低いテーブルが置いてある。

ソファには、一人の老人が掛けていた。

「どうぞ、座ってください」

「失礼します。ハジメタナカと申します」

「校長のダスティンブラッドリーです」

渋い声だ。

60歳くらいだろうか。

顔には深く皺が刻まれているが、背筋は伸び、その眼には力強い光を感じる。

「楽にしてください。」

私の方針で、入学希望者は全員、私が面接をさせていただいているのです。

入学の時期は、4、5人ほど一緒にさせていただきますがね。

……さて、質問は一つだけです。

あなたはなぜ、魔術を学びたいと思ったのですか？」

柔らかな口調で尋ねてくる。

なぜ、か。

答えは決まっている。

「私には目的があります。

そのために、魔術について詳しく知る必要があるからです」

「ほほう。その目的とは？」

「自分が何者なのか、知ることです」

校長の目が、少し見開いた。

「自己の探求ですか。面白いですね。

なるほど。

それなら魔術はピッタリかもしれません」

少しニュアンスが違う受け取り方をされた感じだが、面白がつてるし、まあ、いいか。

「……いいでしょう。我が校へようこそ。タナカ君。

面接は以上です。

以後の事務的なことについては、また受付で尋ねてください」

校長は立ち上がり、執務用の机へ戻ろうとした。

おっと。

せっかく会えたんだから、聞いておこう。

「あの、1つ伺ってもいいですか？」

「なんででしょうか？」

「離れた場所を行き来する魔術について、何かご存知だったりしますか？」

「……ふむ。」

転移魔術ですか。

昔から研究は行われていますが、今でも実用には程遠い水準です。

なかなか成果が上がらないので、最近では研究する者も減ってきてるようですね。

残念ながらこの学院にも、研究している者はいません。

……転移魔術に興味か？」

「いえ……」

返事を適当に濁して、部屋を出た。

そうか。

まあ、そんな気はしていた。

俺がこちらの世界に来たのは、この最高峰の魔術教育機関のトップから見ても、おかしな現象だということだ。

とはいえ、手がかりが全くないわけではない。

校長の口から転移魔術という言葉が出た。

さらに、昔から研究されているという。

調べれば何か、分かるかもしれない。

受付に戻って合格だと告げると、いろいろと説明が始まった。

面接で不合格という人はほぼいないらしい。

まずはお金のこと。

手紙のおかげで入学金は免除になったが、通常の学費や教科書代、制服代などがかかる。

初期費用で銀貨20枚、学費が月に銀貨3枚といったところだ。

入学金まで払ったら、初期費用は銀貨50枚になるらしい。

高い気もするが、まあメインターゲットは貴族の子息令嬢だからな。

ある程度はしょうがない。

このアバロンにこれだけの敷地を持ち、建物を維持して教師や事務員などを雇うとなると、コストもかさむのだろう。

今の俺には余裕がある。

1年分まとめて払うことにした。  
続いてカリキュラムについて。

全4年間の課程らしく、

1年生で初級魔術と一般教養を。

2年生で初級治癒魔術を。

3年生で無詠唱での初級魔術を。

4年生で中級魔術を。

それぞれ習得することが目標となる。

上級魔術の習得を望む場合、卒業後、大学院での課程となる。

大学院を卒業するには、上級魔術に加えて、論文を書くことが必要らしい。

それらを達成すると、博士号がもらえ、魔術博士を名乗れるのだそうだ。

魔術博士。

そこはかとなくダサイ響きだ。

あとは年末に試験があり、進級判定をされるらしい。

出席もいくらかの点になるが、重要なのは試験。

試験に落ちてしまうと上の学年に上がれず、計4回留年すると退学。

逆に半年に1度、希望者は飛び級試験を受けることができ、これに合格すれば次の学

年になることができる。

俺は初級治愈魔術まで使えるので、2年生くらいの力があるということになる。

そのことを伝えると、編入試験に合格すれば、3年生として入学することが可能と言われた。

編入試験を希望すると、5日後に受けさせてくれるとのこと。

出題範囲は、初級の魔術教本からだそうだ。

俺が使っていたものと同じ本だが、持ってこなかったことが悔やまれる。

ほとんど覚えているとは思いますが、かなり時間が経ってしまったので怪しい。

どうにかならないか、と思ったら、学院の図書室にも教本は置いてあり、利用してもいいとのことだ。

明日からさっそく、復習に励むとしよう。

その他、細々とした説明が続き、受付嬢の話は終わった。

---

これで準備は整った。

あとは魔術の勉強を頑張るだけだ。

しかし転移魔術について、実用段階からは程遠いと校長は言っていた。

魔術協会の図書館に入れるようになったとしても、そこに答えがある可能性は低いのかもしれない。

そんな懸念も頭に浮かぶ。

だが、他に糸口もないのだ。

確かめもせずに次を探すなんてできない。

一度決めたことだ。最後までやり通そう。

さしあたって、編入試験の勉強だ。

がんばるぞ。

## 入学

編入試験は実技と座学があつたが、どちらも問題なく解くことができ、合格した。今日が初めての登校日だ。

制服に着替え、家を出る。

ちよつと緊張する。

こちらの世界に来て初めての学園生活だ。

俺の灰色の青春を、取り戻すことができるかもしれない。

友達100人できるかな！

「ハジメータナカです。よろしくお願いします」

朝、教室に行き、自己紹介をした。

3年7組が俺のクラスだ。

1学年は10クラスあり、1クラスに100人程の生徒がいる。

俺の経験してきた学校からすると、人数がかなり多い。

教室というよりも講堂といった風情だ。

クラス内だけで友達100人達成可能。

これは頑張りがあるな。

と思ったが、挨拶をしたときに気づいた。

教室の誰もが、俺より幼い。

15歳くらいじゃなかろうか。

……そりゃそうだ。

俺なんか以前の世界なら、とつくに義務教育を終わってるような年齢じゃないか。

こつちの世界でも、学校に通うような年じゃない。

おざなりな拍手が響いた後、俺は席に着いた。

担任からいくつかの連絡があり、ホームルームは終了。

皆、わいわいと親しげに会話をしながら授業開始を待っている。

遠巻きに俺に視線を送る者はいるが、話しかけては来ない。

ああ、この感覚は覚えがあるな。

随分と久しぶりに感じる。

中学1、2年の頃の教室だ。

俺はずっと、空気のような存在だった。

この世界では、裕福な家庭の子供は、6歳から12歳まで幼年学校に通うそうさ。

その後、その子の資質に合わせて、騎士養成学校か、魔術学院に通わせるのが一般的

らしい。

つまり、この魔術学院に通い始めるのは12歳。

3年生なら15歳というわけか。

皆、年下なわけだ。

俺は高校で3留くらった人みたいな居心地の悪さに耐えつつ、頑張るしかないらしい。

魔術なんて、大人になってから習いたい人も多いんじゃないかと思っただが、そうでもないんだな。

大人になったら、日々の生活に追われて向上を求める余力がなくなる。

どこの世界も、そんなものなのかもしれない。

そんなことを考えていると、担任が戻ってきて、授業が始まった。

まあいい。俺の目的は勉強だ。

友達なんていらんない。

人間強度を保つのだ。

……寂しくなんかないやい。

それから授業を聞いて、昼休みに学院を見て回り。

1人で昼飯を食べ、午後の授業を聞いて、帰宅した。

……そして、思った。

やばい。

授業が全然分かん。

なんということだ。

中途半端な時期に編入したため、授業は1年の行程の半分ほどを終了している。

その続きからの授業なため、ある程度は覚悟していた。

だが、予想以上だった。

正直ナメていた。

所詮は魔術の授業だろう。

イメージがどうか、抽象的なトレーニングをするに違いないと。

違った。

出てきたのは、見たこともない計算式だった。

訳の分からない記号と数字を黒板に羅列され、授業は終始ちんぷんかんぷん。

最後に例題を解かされたが、何を問われているのかすら分からなかった。

参った。

かなり本腰を入れて立ち向かう必要がありそうだ。

帰って教科書を最初から読破するしかない。

まさか異世界に来て、こんな勉強らしい勉強をする羽目になるとは。

ただ、今日は打ちのめされて辛いので、明日からにしようかな。

いやダメだ。

今日からするのだ。

治癒魔術までは使えるのだから、俺が分からないのは半年分の授業範囲だけのはずだ。

中級魔術の教科書を読み込めば、きっと分かるようになるはず。

家で、頑張って教科書を読むことにした。

—————

そして迎えた朝。

ちくしょう。

こんなになんばったのに、10ページくらいしか進まない。

授業では、もう300ページくらいまで終わつてるといふのに。

これじゃ、今日の授業もわけが分からないまま聞くことになる。

わけわけらんことを延々と聞かされて、延々とわけわからんのは辛いんだ。

はあ。

今日はもう休もうかな。

いったん教科書を授業のところまで読み終わつてから登校のほうがいいような気もしてきた。

そんな考えが頭をよぎる。

でもなあ。

昨日挨拶したばかりだしなあ。

編入2日目にして行かなくなったら、変な目で見られそうな気もするなあ。

出席も進級に関わるらしいしなあ。

……迷った結果、折衷案でいくことにした。

授業には出るが、内容は聴かない。

教科書を最初から読むことに専念する。

分からない授業なんて、聴いても無駄だろう。

それでいくしかない。

俺は重い脚を引きずりながら、魔術学院へと向かうのだった。

## エミリーとの出会い

魔術学院に入学してから、10日ほどが経過した。

頑張つて登校して、授業とは全く違うページを読み進めた。

たまに授業をチラツと聞いても、言ってることは意味不明だ。

しかし教科書を読んだ分は、なんとか頭に入っている。

少しずつ、前に進んでる感じはする。

家で勉強すると寝つ転がりたくなる衝動に駆られるので、勉強は図書室でやることにした。

編入試験の前に勉強していた図書室だ。

学校と同じく規模が大きい。

200人くらいは座れるスペースがある。

入学前に調べたが、転移魔術についての本は置いていなかった。  
よし。

フアイト一発。

頭に鉢巻きを巻く勢いで、今日も勉強に取り組む。

……ふう。

結構ががんばった。

ちよつと休憩。

しかし、100ページを過ぎたあたりから、やたらと複雑になってきた。

進みも遅くなるし、よく分からないまま進んでしまっている所もある。

こんなんで授業に追いつけるのだろうか。

……考えてると気が滅入ってきた。

こんな時は、散歩でもしよう。

校内の人気のない所を歩いてみる。

なんとなく、騒がしくない場所を歩きたくて、校舎の裏を歩くことにした。

校舎裏は人の気配はないが、歩いていて楽しいわけでもなかった。

校舎の壁が、延々と続くだけだ。

ぼんやり歩いていると、校舎の影から声が聞こえた。

「……よし。まあ、ここなら誰も来ないでしょ」  
若い女の声だ。

ん？ 何をする気だ？

「アイシクルエッジ！」

「うおわっ!!」

突然、無数の氷柱が足元から生えてきた。

先端はめちやくちや尖っている。

刺さったら、体に穴が1つ増えていたろう。

「ちよっ、何すんだよー！」

声のした方に叫んだ。

「あら、人がいたの」

声の主は、15歳くらいの女の子だった。

白銀の髪を、頭の両側で縛っている。

ツインテールというやつだ。

整った顔立ちだが、つり目でワガママそうな印象を受ける。

「人がいたの、じゃねーよ。」

「まず謝らんかい！」

「どうしてこの私が、あなたに謝らないといけないのよ」

少女はふんぞり返って、そんなことを言ってくる。

……この女。

人の身体に風穴開けようとして、全く反省がない。

「ふざけんな！ 当たったら死ぬかもしれないなかっただろうが！」

「うるさいわね。」

ちゃんと当たらないように調整したわよ」

「え、そうなの？」

「嘘だけど」

「嘘かよ！」

落ち着け俺。

相手は年下の女の子だ。

クールにいこう。クールに。

「なあ、危ない目にあつてその原因を起こした人がそんな悪びれない態度だと、こつちも引けなくなつちやうだろ？」

「ここは一つ、大人になつて、謝つちやくれないか？」

少女は少し、考える様子を見せた。

そしてこちらをまっすぐ見つめ、腰に手を当て、堂々と言い放った。  
「嫌よー！」

「……………」

勉強のストレスも相まって。

俺の中の殺意の波動が目覚ましそうな気配がする。

女を本気で殴りたいと思ったのは生まれて初めてだ。

震える拳を握りしめたその時。

少女が言った。

「あら、あなたどこかで見た顔だと思ったら、この間編入してきた生徒じゃない」

ああん？

何故それを。

「私も同じクラスよ。」

エミリーⅡフォンⅡグレンデル。

しようがないから、気軽にエミリーと呼んでいいわ」

確かに、俺もなんとなく見た覚えがあるかも。

……じゃなくって。

「自己紹介の前に、やることがあるだろう。」

話はそれからだ」

「ここで裸になれと言うの？」

確かにここには人は滅多にやっこないものね。

なんて下劣で低劣で、卑劣な人間なの。

……嫌よ！ そんな辱めを受けるくらいなら、死んだ方がマシだわ！」

「そんなこと一言も言つとりやせんわ！」

だんだん怒りが疲労に変わってきた。

もう諦めちやおうかな……。

「……ああ、もういいよ。分かった。じゃあな」

俺は立ち去ることにした。

「えっ？」

……ちよ、ちよつと待ちなさいよ！

分かったわよ！ 謝ればいいんでしょ！」

あれ？

どうしたんだ？

なんか急に態度を翻したな。

立ち止まって振り返ると。

エミリーと名乗った少女は、俯きながらスカートの手端を両手で握っていた。

「……………」

「……………」

そのまま5分が経過した。

「……………」

「はよ謝らんかい！」

「やっぱり嫌！」

「なんでやねん！」

もはや、自分の感情が分からなくなってきた。

「……………分かったわ。」

あなたがそれほど偏屈で狭量な人間だというのなら、妥協点を探しましょう」

「流れるように毒吐くのやめてもらっていいかな？」

エミリーは俺の言葉を無視して話を進める。

「あなた、授業についてこれてないでしょう？」

「何故それを!？」

俺は意表を突かれて焦った。

馬鹿な。何故そんなことが分かる。

授業には普通に出て、まじめに教科書読んでるのに。

ページは違うけど。

エミリーは答える。

「……なんとなくよ！」

なんとなくだった。

そんなに頭が悪そうな顔をしていたのか俺は。

「そこで慈悲深い私は、あなたに勉強を教えてあげようと思うの」

「何っ!？」

それは割とメリットがある提案だ。

今しがた穴を開けられそうになったこの魔術は、教科書にも載っている、紛うことなき中級魔術。

つまり彼女は、性格はアレだが3年生にして中級魔術を使いこなす才女ということになる。

性格はアレだが。

「あなたみたいな無能なネズミが、この私に教えを乞うことができるなんて、人生の運を全て使い果たしてもまだ足りない果報というものよ?」

いや無能なネズミって。

「私にかかれば、あなたのスライムのような頭の中を、短期間で有意義なものに入れ替えることができるわ」

ねえそれ、もとの中身どこにやったの？

「——どう？」

願つてもない提案でしょう？」

俺はツツコミを言葉にすることもできず、呆然と話を聞いていた。

エミリーは低い背丈で上から視線を保つために、首を背屈して無理やり見下ろしながら様子を窺っている。

ふーむ。

とにかくエミリーは、何がなんでも謝りたくないらしい。

かわりに俺に、勉強を教えるという。

そっちの方が100倍面倒くさいと思うんだが……。

正直、感情を抜きにすればとてもありがたい提案だ。

ただ、この娘に教えてもらうのがシャクだという感情は、理性を覆い尽くしそうなほどに大きい。

どうしようかな……。

俺が黙っていると、エミリーはきまり悪そうにソワソワし始めた。

送ってくる視線も、少し不安げな気がしないでもない。

そういえばさつき、俺が諦めて帰ろうとしたら、慌てて引き止められたな。慌てたのは演技とは思えなかった。

もしかしたら彼女の中にも、少しは罪悪感があるのかもしれない。

案外、悪いと思つてはいるのだろうか。

でも謝ることは性格上できなくて、見つけた埋め合わせの方法が、俺に勉強を教えること。

うーむ。

そうだとしたら、まあそれを受け入れてやるのはやぶさかではない。

実際俺は教えてくれる人をとでも欲している状態だ。

感情が許せる理由を探せたのだから、断る理由はないか……。

「……わかった。じゃあエミリー、勉強を教えてください」

そう言った瞬間、エミリーの顔に笑顔が咲いた。

あれ？

そんなに嬉しいの？

しかしすぐに表情を戻し、上から目線を作つて言った。

「仕方ないわね！」

そんなに言うなら、しょうがないから教えてあげるわ」

……なんか、面倒臭いやつと関わってしまった。

こうして、俺はエミリーに勉強を教えてもらうことになった。

## エミリーとの勉強

エミリーと出会ってから。

放課後は、エミリーに勉強を教えてもらうようになった。

場所は図書室。

授業が終わった後にそれぞれで図書室にやってきて、同じ机で勉強するのがルーティーンだ。

「なあ、こここのところ、なんでこうなるのか分からないんだけど」  
「どこかしら？」

ああ、そんなことも分からないのね。

あなたと比べると、ゴブリンの方がまだ優秀かもしれないわ。

彼らは同胞の言葉を、ちゃんと理解できているそうなもの。

ここはね……」

彼女は思いの外教えるのが上手かった。

質問には的確に答えてくれるし、分かりやすい。

しかし、質問すると必ずひと言罵倒される。

ボキャブラリーも豊富で、もはや持ちネタなんじゃないかと疑うレベルだ。50音揃えて罵倒されるとか作ってほしい。

最初はいちいち腹を立てていたが、もはや慣れてきた。

次はどんなのが来るかと、期待すらしてしまう。

まさかこれがドMの気持ちなのだろうか。

嫌なものに目覚めてしまった。

彼女は、アルバーナの南の方の領土を治める、グレンデル家の末娘らしい。

貴族も色々で大変だろうが、根底の部分で末っ子として甘やかされて育てられ、今に至ったのではないかと俺は疑っている。

こんな性格で学園生活は大丈夫かと思うが、そちらは案外うまくいってるみたいだ。

グレンデル家という大貴族の家柄と、端正な容姿、魔術の優秀さによつて、同級生の憧れの的らしい。

世の中、家柄と見た目と頭が良ければ、性格がアレでもなんとかなるということか。目に見えやすいものを重視する世の中やで。

「何か失礼なことを考えてないかしら？」

「いや何もっ？」

「そう。ならいいのだけど」

「ちなみに参考までに、なんでそう思ったのか聞いてもいい？」

「なんとなくよ」

彼女のなんとなくは、けっこう鋭い。

時折こんな感じで思考を読まれ、危うい目に遭う。

さて、とはいえエミリーのおかげで、少しずつ教科書が理解できてきた。

中級魔術を習得するためには、まず初級魔術を無詠唱で行えるようにならなければいけないらしい。

これまでは、起こる現象を正確にイメージし、詠唱というトリガーによって魔術を発動していた。

しかしそれで行えるのは、画一的な魔術に過ぎない。

つまり、既に世に存在する術式を、頭の中でなぞっているだけだった。

無詠唱では、術式を自分の中だけで完結させる。

それをいじることで、魔術の数を増やしたり、形を変えたり、威力を高めたりすることが可能になるらしい。

ただ、もとの魔術の総エネルギーの限界のようなものは変えられない。

例えば威力を高めるなら範囲が狭くなったり、数を増やすなら威力が低くなったり、

そんな感じだ。

口で言うのは簡単だが、無詠唱ではそれを正確に把握する必要がある。

そしてそのためには、複雑な計算式が必要なのだ。

それこそが、俺が頭を悩ませているものである。

俺は正直、この世界の文明は遅れていると思っていた。

しかしこと魔術に関する研究には、大きな情熱を感じる。

この計算に使う公式一つとっても、膨大な実験と検証のもとに編み出されたものだろう。

すごいものだ。

無から生み出す労力に比べれば、既にあるものを学ぶことなど、屁の突っ張りにもならないというもの。

頑張つて理解するでしょう。

「……ほら、手が止まつてるわよ」

「はいはい。ちよつと考えてるんだよ」

「オークの考え、休むに似たりつて言葉を知ってるかしら」

「え、なんか聞いたことあるぞそれ」

どこの世界にも同じようなことわざがあるんだなあ。

「私が今作ったわ」

「何い!？」

先人の含蓄がたつぷり詰まってそうな言葉なのに!？」

「うるさいわね。図書室では静かにしなさい」

適当な会話をしつつ、勉強を続ける。

ここは図書室だが、案外周りもおしゃべりをしている。

大声を出さなければOKなようだ。

「……なあ、ここは何でこうなるんだ?」

「どい?」

ああ、そんなこと。

少しは自分の頭で考えられないのかしら。

あなたに比べたら、ネズミの方がまだ考えが深いわね。

最初にあなたをネズミに例えたこと、謝りたくなってきたわ。ネズミに。

ここはね……」

相変わず、説明はわかりやすい。

しかし必ず罵倒は入る。

ならば今、俺を例えるなら何なんだろうか。

聞いても不快な思いをするだけなので聞かないが。

「どう？ 分かった？」

「ああ、理解したよ。ありがとう」

「そう、よかったわ。」

ちなみに今のあなたを例えるなら、ミミズといったところかしら」

「何で俺の考えが分かるんだ！

そしてやっぱり不快だったな！」

そんな感じで、勉強会は夕方まで続く。

しかしこいつも暇なヤツだな。

放課後は毎日俺と勉強してるぞ。

まあ、俺が質問しない時は自分の勉強をしてるみたいだし、そんなに時間を無駄にしてるってわけでもないのか。

でもコイツって、何の勉強をしてるんだろう。

聞いてみるか。

「お前は何の勉強をしてるんだ？」

「あなたのような人間には考えの及ばない、高尚なことよ」

「その言い方だとまるで俺が、高尚なことを理解できないみたいじゃねーか」

「大丈夫よ。あなたの低俗なことへの見識は、群を抜いていると思っっているから。誇つていいわ」

「何で高尚なことを理解できない埋め合わせが、低俗なことへの理解力なんだよ。

それだと単に俺が低俗な人間だって結論しかないじゃねーか」

「そうやって痛いところを突かれて取り乱すのが、低俗な人間の証よ。

語るに落ちるとはこのことね。

分かったわ。

今度あなたのために、証明書を作ってきてあげる。首から下げて過ごすといいわ」

「いるかそんなもん」

全然返答は得られなかった。

はぐらかされているというよりは、俺への罵倒に忙しくて返答がそっちのけになってる感じだが。

なんでこいつは、中級魔術を既に扱えるのに、まだ3年生なんかやっているのだ。

とつとつ飛び級して卒業すればいいのに。

「バカね、ハジメ。

飛び級なんかしたら、この環境から離れなくちゃならないでしょう。」

私は魔術が好きなの。

家に戻ったら、どうせつまらない相手と下らないお見合いをさせられる毎日よ。

そんなことになる前のこの有意義な時間を、できるだけ長く過ごしたいのへえ。

そんなこと考えてたのか。

「それなら、俺に教えてる時間なんて、勿体なくないか？」

「この何日かでかなり助かったし、あとは俺一人でもいける気もするけど」  
「うるさいわね。」

私は私の好きなようにしてるだけだから、気にしなくていいわ。

あなたもタダでさえ足りない頭をつまらない気回しに使ってる暇があったら、少しでもその足りない頭に知識を詰め込みなさい」

「足りないを強調し過ぎじゃないかね？」

コイツの考えはよく分からないが、ひとまずやってくれること自体はありがたいものだ。

罵倒を除けば、教え方もうまい。

素直に従うしかあるまい。

日暮れまで図書室で過ごし、解散した。

そんな日々を経て、俺は魔術についての理解を少しずつ深めていったのだった。

## デートの誘い

エミリーが勉強を見てくれるようになって、2ヶ月が過ぎた。

彼女は教室では話しかけてこないが、放課後は必ず図書室に来てくれる。

もうとつくに授業の内容には追いついて、もはや追い越してしまった。

追いついた時点でエミリーに感謝と別れを告げようとしたが、断られた。

「授業に追いついたくらいで歩みを止めるなんて、愚か者の極みね、ハジメ。

魔術の真髓のひとかけらすら、まだ分かってないっていうのに。

あなたの脳髓をひとかけらも残さずに、取り替えたいくらいだわ」

その言葉に不覚にも感銘を受け、俺は放課後の勉強を継続している。

確かにその通りだと思ってしまった。

彼女の罵倒の中には、罵倒成分をがんばって取り除けば、多くのメッセージが含まれていることに最近気づいた。

取り除いて何も残らないこともしばしばではあるのだが。

そんな努力の甲斐あって、最近魔術の調子がいい。

完全無詠唱での発動はできていないが、詠唱下でのバリエーションが増えた。

少し離れたところに発動したり、分割して数を増やしたりできるようになって、クリスへの援護はさらに精度を増した。

無詠唱で魔術を使える日も、そう遠くないかもしれない。

学院は10日に2日の休日があり、その時はクリスと狩りに出かけている。

それ以外の時間、クリスは伯母家族と穏やかに時を過ごしているようだ。

こないだ家族旅行に行つたと、嬉しそうに報告していた。

—————

そんな中で。

エミリーが突然、こんなことを言い出した。

「ハジメ、今度の休日、私とデートをしない?」

……え?

ごめん、もう一回言つて?

「おとなしく質問に答えるのと、耳を切り取られるの、どちらがいいかしら?」

「おお、相変わらずだな。安心した。」

……突然どうしたんだ?」

「うるさいわね。」

「どうするの？ 行くの？ 行かないの？」

ええー。

まあこの2ヶ月、エミリーにはかなり世話になったしな……。

吐かれた毒舌は100や200じゃきかないが。

それを補ってギリ余るくらいには世話になった。

エミリーが行きたいなら、それに付き合うのはやぶさかではない。

しかし何で突然デートなんだ？

……まあいいか。

これ以上聞いても無駄なのは分かりきってるしな。

「じゃあ、行こうかな」

「……そう。」

じゃあ、今度の休日の朝、校門前で待ち合わせよ」

エミリーはなぜか顔をそむけて言った。

「はいはい。仰せの通りに」

—————

「待ったかしら?」

デート当日。

エミリーが待ち合わせ場所に現れた。

普段の制服姿とは違い、オシヤレをしている。

まず髪型は、普段通りだ。

流れるような銀髪を、トレードマークのツインテールに仕上げている。

髪をくくっている紐が、すこし小洒落ているくらいか。

しかしその首から下を包んでいる服は、俺の想像からはかけ離れていた。

それはゴシック&ロリータ調、通称ゴスロリのドレスだった。

現実には見たことがないファツションが今、俺の目の前にある。

しかし異世界だからか、場から浮いているという感じは意外とないな。

むしろツインテールと小柄な体型とが相まって、とても似合っている。

案外こちらの世界の貴族は、こういった格好が普通なのかもしれない。

「いや、今来たところだけだ」

俺が返事をする。

しかしエミリーは不満そうだ。

「ダメじゃない。もつと早く来なきや」

「なんでだよ。お前も今来たところだが」

「デートでは、男は女を待つものなのではないか？」

「なんだその偏った知識は。」

「あれ、でもこの世界ではそうなのか？」

「デートなんてしたことないし、よく分からん。」

「まあいいか。」

「待たせたことで気を使わせないように、今来たところまで答えるもんだよ」

「……へえ、なるほど。納得したわ。」

「ハジメに教わるなんてシヤクだけど」

「得心がいった顔で頷くエミリー。」

「それで、どこに行くんだ？」

「ハジメが決めてるんじゃないの？」

「……へ？」

「デートというのは、男が女をエスコートするものと聞いてるわよ」

「あれ？」

「デートって、そういう感じ？」

「あれ？」

何か用事があって、荷物持ちが必要とかそういうのじゃないのか？」

「そんなの別にないわよ。」

言ったじゃない。デートをしない？ って」

「え、じゃあ、そういうことなの？」

「どういうことよ？」

「……お前、俺のこと好きなの？」

その瞬間、エミリーは固まった。

「な……何を言ってるのよあなたはっ！」

そのスライム以下だった頭が最近少しはマシになったかと思つたら、そんな訳の分からないことを考えてたの!？」

そんな考えは今すぐに捨てなさい！

さもなければ宿題を10倍にするから！」

顔を真っ赤にして早口でまくしたてるエミリー。

ちなみに俺は毎日、エミリーから宿題を出されている……。

「待て待て、お前の中のデートがどうなってるのか知らないが、俺の中ではお互い好きな者同士がイチャつきながら街をウロウロするのがデートだ。」

デートに誘うってことは、相手に気があるってサインだろーが」  
てつきり何かの冗談でデートという言葉を使ってるのかと思ったが。

「違うわよ！」

あなたに気なんてこれっぽっちもないんだから、勘違いしないでよね！」  
うおっ。

そのセリフは危ない。

勘違いしちやいそうだ。

「じゃあ、何でデートなんて言葉を使ったんだよ？」

俺の、その問いかけによって。

あつという間にそれまでの勢いは失速し、エミリーはきまり悪そうにもじもじと始  
めた。

「それは、その……」

クラスの子が、楽しいって言ってたのよ……」

……ほう。

なんとなく読めた気がする。

クラス内で、エミリーは家柄、容姿、頭脳が飛び抜けており、その扱いはもはや、崇  
拝の域に達している。

本人も悪い気はしないのか、それとも貴族の処世術なのか。それに見合うような振舞いをして過ごしている。

しかし、崇拜と友情は違うのだ。

エミリーとクラスメイトとの間には、良くも悪くも、距離がある。

そんな中で、おそらく誰かががデートの話題でも出したのだろう。

エミリーは知らない言葉に食いついたが、キャラを保つために深入りはしなかった。それとも、経験豊富なフリでもしたのかもしれない。

とにかく内情をよく知らないままにデートという言葉を知り。

探究心旺盛な彼女は興味を持った。

その結果がこれという訳だ。

相手が俺なのは、流れる雲のごとくクラスから浮いている俺ならば、もしも恥を晒しても後腐れがないからか。

「なるほどね」

思わずニヤニヤしてしまう。

「何よその顔は。」

不愉快よ。今すぐやめなさい」

エミリーの顔は真つ赤だ。

普段は見られない顔だ。

これが見られただけでも、今日という日に価値があったと思える。

「じゃ、エミリーは、よく知らないままにデートという言葉を使って、俺を誘ったという訳か。」

言葉の意味を考えると、普段口を酸っぱくして言ってくるくせに、自分は言葉の意味をよく調べもせず、誤った理解で言葉を口にしたということだよな？」

エミリーは悔しそうに歯軋りをしている。

むふふ。

たまにはこんな日があってもいいだろう。

「……だって」

ん？

「だって、聞ける相手もいなかったんだもの」

エミリーの顔には、一抹の寂しさが浮かんでいた。

風が通り過ぎ、その髪を揺らす。

そうか。

エミリーは15歳。

本来なら、周りのクラスメイトとキャツキャウフフしたい年頃だろう。

しかし周りには、侯爵の家柄であるエミリーに、畏まる者達ばかり。

性格は改めるべきとも思うが、家柄は彼女のせいじゃない。

だとしたら、それをあげつらうのは悪趣味かもしれないな。

「帰るわ。」

また学校で会いましょう」

エミリーが立ち去ろうとする。

「……待った。」

まあせつかくだし、街を見て回ろうぜ。

休日が集まって、このまま解散ってのはもったいないだろう?」

「でも私、あなたの事なんて、ひとかけらも好きじゃないわよ」

「ひとかけらも!?!」

軽くシヨックだ。

じゃあなんで勉強を教えてるんだコイツは。

「……まあいいだろそれで。」

別にデートじゃなくなつたって、街をぶらついたって構わないじゃないか」

「それになんの意味があるの?」

「友情は深まるんじゃないか?」

「友情……。」

そう。

いいわ。ハジメがそんなに私との仲を深めたいっていうなら、しょうがないから付き合ってあげる」

「素直じゃないんだから」

「何か言った？」

「いや何も」

こうして、少しでもテンションが上がったエミリーとともに、街をぶらつくことにした。

## エミリーとの狩り

「……見えてきたぞ。あれが冒険者ギルドだ」

「へえ、あれがそうなの」

少し離れたところに、無骨な石造りの建物が見えている。

「なんだか思ったより地味なのね」

「まあ、そうだな。」

でも彫刻とかあるし、あの像とかカッコいいじゃないか」

「ふーん」

俺は正門の両脇に置いてある、剣を掲げた騎士の像を指さして言う。

が、エミリーにはあんまり響かなかつたらしい。

「中はどうなってるのかしらね」

「入ってみるか」

「入れるの？」

「当たり前だろ？」

俺は木造りの大きな扉を開けて、中へ入った。

朝、とりあえずアバロンを散策することにしたが、特に行く宛がなかった。

エミリーに行きたいところを尋ねたら、冒険者ギルドを見たことがないと言うので、ひとまずここに来てみたのだ。

扉を開けると、いつもの冒険者ギルドだった。

掲示板の前で、冒険者達が話している。

「あそこに依頼が張り出されるのかしら」

「ああ、朝一番だともっと人が多いけどな。」

大半はもう依頼を剥がして、狩りに出かけたんだろう」

「へえ。そういう仕組みなのね」

エミリーは掲示板の前まで進み、興味深そうに依頼書を眺めていた。

「ちよつと腹減ったし、そこで食べないか？」

俺はギルドに備え付けのバーを指差す。

「いいわよ。先に席を取っておいて。」

もう少し見たら行くから」

意外と興味深々な。

俺はカウンターに行き、酒と軽食を頼んで近くの席に座った。

小柄なエミリーは人ばかりで掲示板が見えないのか、背伸びをしたり、びよんびよん跳ねたりして、頑張って依頼書を眺めていた。

ちよつと癒される。

休みはいつもクリスと狩りに出かけていたから、こんなのんびりした休日は初めてだ。

酒の味が、心に沁みる。

俺は、昼間から外で酒を飲む幸せを噛みしめた。

料理が運ばれてきたタイミングで、エミリーも戻ってきた。

飲み物を注文して、席に着く。

「どうだった?」

「なかなか面白かったわ。色んな依頼があるものね」

「特に面白いのとかあったか?」

「そうね……スライムかしら。」

実は私、見たことないのよ。不思議な生き物よね」

「スライムか。言われてみれば確かに。」

何がどうなってあんな形になったんだろうな」

ポテトフライのような料理を口に運ぶ。

うまい。

「スライム、見たことないのか」

「魔物なんて、普通は見ないわよ。」

……何よ、ハジメは見たことあるの？」

「ああ、飽きるくらいに見たよ。」

……というか俺、休みの日は冒険者やってるんだけど、言っていなかったっけ？」

エミリーが不満げな表情になった。

「何よそれ。聞いてないわよ？」

まあ確かに魔術の勉強に必死で、休みの日の話など全然してなかったな。

俺もエミリーの休みの行動など全然知らないの、おあいこだろうが。

「すまん。言っていなかったな。」

俺、冒険者稼業で生活費を稼いでるんだ。

一応、Cランクの冒険者だ」

「そう。」

だからギルドに詳しくなかったのね」

エミリーは無然とした顔でポテトフライを頬張った。

「それじゃ、パーティーを組んでるの？」

「ああ。

といつても、俺を含めて2人しかいないけどな」

「2人だけ？」

「ああ。クリスっていう、剣士と組んでる。

俺が魔物に襲われてる所を、クリスに助けられてな。

それがきつかけで組むことになったんだ」

「へえ。どんな人なの？ そのクリスさんは」

「え？……そうだな。

クリスはめっちゃくちゃいいヤツだな。

素直でまっすぐで、ちよつと融通がきかないところもあるけど、一緒にいるとそれもひつくるめて長所に見えるような、そんなヤツかな」

なんだか酒のせいかな、口が軽い。

クリスについて語り始めると、止まらなくなっちゃった。

「それに家族思いなヤツだ。

俺が学校に通い出してから、休日しか狩りに行けなくなつたんだが、平日は家族との時間を大切にして、家族と一緒に過ごしてるんだ。

クリスなら1人でも狩りはできるのに」

今日も本来なら狩りに行く予定だったが、急遽変更させてもらった。クリスは嫌な顔ひとつせず応じてくれた。

いいヤツだ。

俺は天井を見上げて、クリスの顔が思い浮かべる。

「……へえ。そうなんだ」

あれ？

なんだか、やけに冷たい声でした。

エミリーの方に顔を戻すと、視線まで冷たかった。

「……なんだよ？」

お前が聞いてきたんだろうが」

そりゃ知らない他人の話なんてつまらないだろうが。

聞いてきたのはエミリーだろうに。

「……別になんでもないけど！

いい仲間がいてよかったわね！」

フンツ、とエミリーがそっぽを向いた。

あれ？

俺、なんかしたか？

……あ。

そこで気づいた。

そうか。

エミリーには、その仲間がないのか。

へりくだって話しかけてくるクラスメイトはたくさんいるが、ケンカしたり、悩みを相談したりする相手はいないのだ。

今こうしているのもそれが発端だったというのに。

全然間も空かないうちに俺が仲間のことなんか長々と話したら、そりや不機嫌にもなるわな。

「すまん。ちょっと無神経だった」

エミリーは明後日の方を向いたまま、ノールックでポテトフライを掴んでは口に運んでいる。

器用だな。

「せっかくだから、スライム狩りにでも行くか?」

エミリーは明後日の方を向いたまま答える。

「……ハジメが行きたいんだったら、しようがないわね」

「森の中なんて、初めて入るわ」

南の森にやって来た。

酒を飲んで森に入るのはとてもよろしくないが、ここに出るのは、ゴブリンとスライムばかりだ。

泥酔してるわけでもないし、まあ大丈夫だろう。

「魔術師だけで危険ではないの？」

エミリーはキョロキョロと辺りを見回している。

ゴスロリ服で森の中を歩いているのって、なんだかおとぎ話の登場人物みたいだ。

「ああ。ここらには危険な魔物は出ないよ」

「……そう。ならいいのだけど」

冷静に見せようとしているが、エミリーは少し不安げだ。

魔術については天才的なエミリーでも、初めての森は怖いのか。

……ちよつとイタズラ心が湧いてくる。

「……わっ！」

「ひっ！」

唐突に大声を出してみたら、エミリーは両耳を押さえながら跳びのいた。予想以上のリアクションだ。

「……な、何よ」

「いや、驚かせてみようと思って……」

跳びのいた分距離が離れたエミリー。

その顔がみるみる赤くなり、こめかみには青筋がたった。

「ストーンバレット!」

「あいたつ! 何しやがる!」

「自分がちよつと慣れてるからって、調子に乗るんじゃないわよ!」

「なんだよ、俺はちよつと、緊張をほぐしてやろうと——」

「ストーンバレット!」

「あいてつ!」

「やめろつて! 悪かったから!」

エミリーはしばらく、口をきいてくれなくなっていました。

黙って森の中を2人で歩く。

うろろうろしていると、やつが現れた。

げきよげきよとうるさい声。

ゴブリンだ。

3匹の群れで行動している。

「あれがゴブリンだ。ギルドに耳を持っていくとお金に替えてくれる」

「ゴブリン……あれが、魔物」

「そうだ。」

倒すから、ちよつと待ってろ」

「いいえ。ハジメの方こそ、そこで指をくわえて見ていなさい」

俺の言葉を遮るように、エミリーが言う。

「……大丈夫か？」

「うるさいわね。見ていなさいって言ってるでしょ」

心配したが、つっぱねられた。

しようがない。

お手並み拝見といこうか。

俺達に気づいたゴブリン達が、こちらへ向かってくる。

エミリーは一瞬だけ目を閉じて、唱えた。

「荒まく風。」

その暴威を以って敵を殲滅せよ。

……トルネード！」

——突如。

俺達の前方に、巨大な竜巻が出現した。

ゴブリン達は突然の異変に逃げ出そうとするが、1匹ずつ竜巻に捕まり巻き込まれていく。

竜巻は徐々に拡大し、周囲の木も根こそぎ持っていった。

大木が小枝のように宙を舞う。

風圧で、身体が吹き飛ばされそうになる。

竜巻は木々を纏ったまま数十メートル進み、少しずつ小さくなって、やがて消えた。

ボトリボトリと、空から木が降ってくる。

竜巻が通った後。

森の中にぽっかりと、巨大な更地が生まれた。

ゴブリン達はもはやどうなったのか不明だ。

なぎ倒された木々の下にいると思うが。

「……すごいな」

初めてエミリーの本気を見た。

これは凄まじい。

魔術師が重宝されるわけだ。

銃火器のないこの世界。

これはまさしく、兵器と呼べる代物だ。

「身の程を知ったかしら？　ハジメ。

これが上級魔術よ」

なに！

今のは上級魔術なのか。

確かに威力が段違い過ぎると思った。

つーかコイツ、上級魔術まで使えるくせに学生やってるのか。

「なんていうか、凄まじいな」

「ふふん。全く、その足りない頭でも、ようやく少しは理解できたようね。力の差というもの。」

エミリーはすごくスッキリした顔をしている。

上級風魔術は、ゴブリンと木々に加えて、彼女のストレスも吹き飛ばしていったよう  
だ。

その後、無事にスライムを見つけ、エミリーがストーンバレットでやっつけた。見たがっていたスライムを見た感想は、「こんなものなのね」と淡白だった。

街に戻ると、もう夕方になっていた。

「ぼちぼち帰るか」

森に入ったのと、あんな魔術を間近で見たいので、服が砂っぽい。帰って風呂に入りたくなった。

「そうね」

エミリーも異論はなさそうで、素直に同意した。

別れ際、エミリーに声をかける。

「なかなか楽しかったよ。また機会があったら狩りに行くか」

「フン、まあ、ハジメが行きたいんだったら、行ってあげてもいいけど？」

……最後まで、ブレないやつだった。

## エミリーの事情①

さて。

エミリーと狩りに行ったら、エミリーがゴブリン相手に上級魔術をぶっ放していた。  
上級魔術。

そう、上級魔術である。

上級魔術とは、現存する魔術の最高峰。

それを使用できるものの大半は、宮廷魔術師として王宮に招かれる。  
魔術協会に所属しても引く手あまたであり、高給の仕事を選び放題。

魔術師なら誰もが一度はその習得を目指す、上級魔術。

そんなものを、学院の3年生にして既に修めているとは。

エミリーは俺の予想以上にすごいやつだった。

そして俺は気づいた。

てことはエミリーって、魔術協会でもCランク以上なんじゃないか？

つまり、協会の図書館にも入れるんじゃないか？

——エミリーに転移魔術について聞いてみよう。

そして可能なら、図書館で調べてみてもらおう。  
今更ながら、その考えに思い至った。

「なあエミリー、転移魔術って知らないか？」

いつもの放課後。

早速エミリーに聞いてみた。

「唐突ね。ハジメ。」

あなたには話の脈絡というものが無いのかしら？

「ミミズにも劣る会話のセンスだわ」

エミリーはあきれたような表情で、そんな返事をしてきた。

……まあいい。

今日は頼みごとがあるのだ。

クールにいこう。クールに。

「えーと、そうだな、どこから話したものやら。」

……実は俺って、別の世界からやって来たんだよ。

それで、自分がこの世界に來た原因を知りたくて、村から出てきたんだ。

そんなことができそうなのは魔術しか思い当たらなくてさ、学院に通つてるのもそれを調べるためなんだ。

で、エミリーは上級魔術まで使えるみたいだから、何が知らないかと思つて」

エミリーはほかんとした表情で、俺の方を見ていた。

沈黙が流れる。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………はああああ!?!」

エミリーは大声を出した後、慌てて口を押さえた。

「図書室では静かにな、エミリー」

「……………場所を変えるわよ」

人を殺せそうな視線で俺を睨みつけながら、エミリーは言った。

—————

学院の食堂に場所を移した。

俺がカシーを頼むと、エミリーも同じものを頼んだ。

その歳で飲めるんだ。苦いのに。

「……結論から言おうと、知らないわね」

「そうか」

一応、エミリーは俺の言うことを信じてくれた。

話した内容は、荒唐無稽だと思われてもしかたないと思うが。

これまで俺と過ごした時間の積み重ねが、エミリーにその話を信じさせることを成功させたようだ。

つまり日頃の行いってやつだな。

……いやでも俺の日頃の扱いはミミズだな。

ミミズの戯言だと、受け流されている可能性もなくなはない。

しかし、エミリーは俺のいた世界について、かなり興味を持ったように見えた。

もともと研究者気質っぽいし。

疑問を解決しないと気が済まないタチだ。

質問攻めに遭い、その質疑応答で1時間以上かかって、やっと俺の疑問に答えてくれた。

出た結論は知らない、と。

……時間返せ！

「一応、協会の雑誌に、確かそんな論文が載ってたわよ。

1篇だけ見たことがあるわ。

でも試作段階もいい所で、そんな大それたことができるようなものではなかったけどね。

あの研究が100年進んでも、別の世界に人を飛ばすなんて、できそうにないわ」  
そうか。

以前、校長も同じことを言っていた。

魔術の上級者2人が同じことを言うんだから、その情報は間違いないだろう。

最新の研究でも、異世界転移なんてものはあり得ない。

それが結論か。

……振り出しに戻ってしまった。

「俺は協会の図書館を調べてみようと思つて、そのために中級魔術が必要だから習得しようとしてるんだけど。

どうか、図書館を調べる価値つてあると思うか？」

「まあ、現状では手がかりゼロなもの。

このアルバーナの中で、少しでも可能性があるとしたら、魔術協会でしょうね。

その考えは、悪くないと思うわよ」

エミリーが珍しく、俺の考えを肯定してくれた。

「……じゃあさ、エミリー。」

図書館を調べてみてくれないか？

簡単にでいいから。

頼む。俺は入れないんだ」

俺の言葉に、エミリーは悲しげな顔を見せた。

「無理よ」

「頼む。礼はするから」

「そういう問題じゃないのよ。」

……だって私、魔術協会に所属していないもの」

その言葉は、俺にとってかなり意外だった。

エミリーの性格なら、絶対協会に入ってると思っていた。

上級魔術を使えるのなら、少なくともB級会員ではあるだろうと。

なんていうかエミリーはあそこで研究をしているのが、とても似合ってる気がするんだが。

「何で入らないんだ？」

「エミリーにはすごく合ってそうなんだが」

「ダメよ。私は入ることを許されないの」

「きつぱりと言う。」

「……理由を聞いても？」

「いいわよ。別に隠してるわけでもないし、グレンデル領では有名な話よ」

「そう言つて、エミリーは語り始めた。」

——80年ほど前。

アルバーナの南に位置する国が突如宣戦布告し、アルバーナに攻めてくるという事件が起こつた。

戦線となつたのは南に位置するグレンデル領。

当然アバロンに援軍を要請したが、なんと同時に北方の国とも小競り合いから戦争に発展してしまつていた。

後に、もともと折り合いの悪かつた北の国が、南の国に打診して、タイミングを合わせて攻撃を仕掛けたと判明した。

挟撃に遭い、アルバーナは国家の存亡まで危ぶまれる状況となつた。

その緊急事態下、王は魔術協会へ支援を要請した。

当時、協会が抱える魔術師は多く、アルバーナに住む全員が参戦すれば状況を覆すことが出来るはずだった。

しかし。

協会の多くは、戦線へ赴かなかつた。

国の存亡よりも自分の命を取り、他国へ亡命する者が後を経たなかつた。

それによりアルバーナは苦戦を強いられ、戦争は長期戦となつた。  
時が過ぎ。

多大な犠牲を払いながら、アルバーナはなんとか勝利を収めた。

戦争を仕掛けた両国は過酷な条約を飲んだ結果衰弱し、現在では滅んで別の国になつて  
いる。

結果的にアルバーナ全体としては、潤う形となつた戦争だつた。

しかし、長く戦線となつた北のノーデンス領と南のグレンデル領には、大きな爪痕が  
残つた。

あの時、協会の魔術師さえ戦線に加わってれば。

領に住む者達は、そんな感情を抑えることができなかった。

この世界の国は多くの場合、徴兵制を敷いていない。

それは戦闘訓練をした者とそうでない者が、戦力として差が大きすぎるためだ。ほとんどの民間人は兵士にしても、戦力にならない。

そのため、魔術協会員は宮廷魔術師と異なり、兵役はない。

しかし努力義務ではあり、自分が戦力になり得ると自覚する者は、原則参加を義務付けられている。

それに従い、同様に兵役義務のない多くの冒険者や剣術道場に通う者達が国を守ろうと参戦する中。

魔術協会員は、参加率が圧倒的に低かった。

そして国が協会員への参戦を呼びかけた途端、他国へ逃げていく始末。

戦後、そんな魔術協会への風当たりは強く。

特に戦線となった南北の領では今なお魔術協会への遺恨が残っているという。

「その時の領主の孫が、私という訳よ。

私の家は魔術協会を敵視してる。

だから私が協会に入ることは許されないの」

そう言つて、エミリーはため息をついた。

……なるほど。

そりゃ難しそうだ。

——あれ？

でも、1つ引つかかるな。

「さつき、協会の論文がどうか言ってたのは？」

エミリーは少し恥ずかしそうに答えた。

「協会誌の最新刊は、協会のロビーに置かれているでしょう？」

たまに会員のフリして、読みに行ってるの」

確かにバックナンバーは図書館だが、最新刊だけはロビーに置かれている。

しかしいいところのお嬢様なのに、趣味が立ち読みとは。

ちよつと親近感が湧いた。

「……分かった。

そんな事情じゃしようがないよな。

話してくれてありがとう。

そんじや、自分でがんばってみるよ。

もうあとちよつとでできる気がするしな」

俺は努めて明るく言った。

なんだかエミリーが、悲しそうな表情をしていたからだ。

本当は、魔術協会に入って研究をしたいのだろう。  
「そうね。せいぜい頑張りなさい」

そう言ったエミリーの横顔は、少し寂しげだった。

## 学年末試験

さて、エミリーに現状を相談してから2ヶ月が経った。

その間、特に変わらさず勉強漬けの毎日だったが、嬉しかったことが一つ。

ニーナから手紙が届いた。

内容の大半は当たり障りないことだった。

村の生活に大きな変化はなく、元気でやっているということだ。

俺がいなくなったことで朝の卵がちよつと多いとか、

俺のために家に置いたカシーだが、シータが毎日飲んでるとか、

少しずつニーナの服を御すようになったとか、

そんな、村での近況報告が続き。

最後に、俺への励ましのメッセージが書かれていた。

「がんばってね、ハジメ。」

いつでも応援してるからね」

読んだらとても元気が出た。

心機一転、がんばるとしよう。

近況を再度、手紙で送っておいた。

さて、魔術の方はというと、ついに無詠唱で初級魔術を使えるようになった。

普通に学習していたら1年かかるところを、半年もかからずに習得してしまった。

……俺って天才なのか？

と自惚れたくなるが、あのスパルタ銀髪ツインテール少女に来る日も来る日も罵倒されながら勉強したら、誰でも覚えられる気もする。

途中で心が折れなければだが。

折れなかった心だけは、誇ってもいいのかもしれない。

そしてもうすぐ、学年末試験だ。

この1年間の総まとめ。

この試験に通らないと、次の学年には上がれない。

気合を入れていこう。

とはいえ、やる事は特に変わらないが。

いつも通り、図書室でエミリーと勉強をするだけだ。

「……では、エミリーに問題です」

「へえ、あなたごときがこの私に問題を出そうというの？」

片腹痛くて涙が出るわ」

相変わらず調子にのってやがる。

俺の問題を聞いてビビるなよ。

「初級魔術において、同種の魔術をもとの半分の規模で3術併施し、1術は10ピート離れた位置に発動する場合、もとの魔術を通常施行する場合と比較して、消費魔力は何倍になるでしょうか？」

ただし、ラニグマイト係数は1、2、フオーン定数は0、4、空間は理想状態とします」

自信満々に出題した俺を。

エミリーは、ミミズを見るような目で見ていた。

「2、7倍。」

バカにしているのかしら。

ミミズでももう少しマシな問題を考えそうなものだけど。

だいたいその問題を出すなら、空間属性の規定が必須でしょう。理想状態の概念に属性は含まれてないんだから。

使用魔術と空間の属性が無干渉と考えていいなら、2.7倍が答えよ」  
もう、細かいとこまでうるさいんだから。

「あのね、正しく前提が与えられない問題なんて、解く価値もないわ。

解いてあげただけありがたいと思いなさい」

そう言つて、エミリーは自分の勉強に戻つた。

……ダメだ。

やっぱりエミリーに魔術の問題なんて出すもんじゃないな。

暗算で答えを出されて罵倒された上に、問題にまでイチャモンを付けてくる。

エミリーは前年度のテストで、学年唯一の満点だったそうだ。

この分だと、今年もそんな気がするな……。

エミリーはひとまず置いて、自分の勉強に集中することにした。

---

試験当日。

試験は座学と実技の両方が問われ、午前に座学、午後の実技の試験が行われる。教室に行くとき、さすがにクラスメイトは緊張の面持ちだった。

教科書を開いて復習している者が大多数だ。

エミリーをチラツツと見ると、彼女も本を読んでいた。

しかしそれは教科書ではなく、恐らく試験と関係のない魔術の本だ。試験など余裕ということか。

教師がやって来ると、ざわついていた教室がピタリと静かになった。

いくつかの説明の後、答案用紙が配られていく。

俺の前にも用紙がやってきた。

よし。やるぞ。

「始め」

教師の合図で、試験が始まった。

紙をめくる音。

そして一齐に、ペンで文字を書く音が響きわたる。

大丈夫。

変な計算ミスなんかさえしなければ通るはずだ。

それだけの勉強はしてきた。

俺は集中して、全100問の問題を解き続けた。

それから4時間ほどが経ち。

「やめ」

教師の声で、座学の試験が終了した。

張りつめていた教室の空気が緩む。

ざわざわと皆が話し始める中で、答案用紙が後ろから前へと集められていった。

俺はほとんどの問題を埋めることができた。

手応えありだ。

教室内は、できたとかできなかつたとかの会話や、答え合わせをするクラスメイトの  
声で騒がしくなった。

昼休憩を挟んで、次は実技試験だ。

俺は昼飯を食べべに、教室を出ることにした。

学院にはバカでかい広場があり、実技試験はそこで行われる。

普段は多くの生徒がそこで魔術の練習をしている。

広場には1つの大きな円が描かれており、魔術はその外から中に向かって行うルール

だ。

危険に配慮してのことで、円外に影響する魔術を行ったら嚴重処分となっている。そういえば出会った時のエミリーは、校舎裏で中級魔術を使っていた。

今更だがアレは、退学ものではなからうか。

……まあいいか。

広場に集まると名前を呼ばれて、約10人ずつのグループに分かれ、整列した。

1グループにつき1人の教師がつき、採点するようだ。

たまたま、エミリーと同じグループだった。

皆緊張した面持ちだが、エミリーは退屈そうで、早く終われと言わんばかりの表情だ。

見ていると目が合った。

せいぜいがんばりなさい、と口パクで言われた。

励ましてるのか馬鹿にしてるのか、判断が難しい。

前のグループが終了し、俺達の番になった。

「名前を呼ばれたものは前に出て、無詠唱で初級魔術を行うように。属性は問わない」

教師が言い、1人ずつ呼ばれて魔術を行った。

皆問題なくクリアしていく。

「エミリー＝フォン＝グレンデル」

「はい」

エミリーの番だ。

彼女も全く問題なく、無詠唱で風魔術を行った。

その後数名の生徒が呼ばれて、ついに俺の番になった。

「ハジメタナカ」

「はい」

前に出て、意識を集中する。

練習では、特に失敗したことはない。

普段通りやればできるはずだ。

勉強のおかげで、イメージのどの部分がどう作用するのか、明確に感じることができるようになった。

目を閉じて、イメージを作る。

ファイアの魔術だ。

拳大の炎。

いけ。

目を開けると、俺の前には炎が出現していた。

よし。成功だ。

回れ右して列に戻る。

エミリーと目が合ったので、親指を立ててみる。

しかし彼女は、非常に不可解そうな顔をしていた。

どうやらこちらの世界には、サムズアップの文化はないらしい。

こうして、試験は無事に終了した。

結果が出るのは2日後。

なんだか一段落した気分だ。

こここのところ試験勉強ばかりだったし、しばらくは羽を伸ばすとしよう。

## 魔術についての疑問

試験の2日後。

採点が終わり、合格者が発表された。

俺は見事合格。

エミリーは満点で、学年最優秀者として表彰されていた。すごいやつだ。

さて、あと3日ほどで、学院は10日間のお休みとなる。

教室内の空気も、普段と比べてなんだか賑やかだ。

皆、肩の荷が降りたようで、休みの予定を聞きあったりしている。

エミリーの方を見ると、すました顔で隣の席の女の子と何かを話していた。

俺はというと、相変わらず海を漂うクラゲのように浮いており、話しかける相手もない。

半年弱経ったものの、3歳の差はいかんともし難く、クラスメイト達との距離は埋まらなかった。

ま、しよーがないよな。

昼休みになり、いつものように外のベンチでパンとカシーを頂いていると、珍しく人に話しかけられた。

「ハジメ、ちよつといいかしら」

エミリーだ。

いつも昼食は取り巻きの女の子達と取ってるのに。

どうしたんだろうか。

そういえばこの2日間、勉強をサボってたから会話するのは久しぶりだ。

「ついて来なさい」

有無を言わさぬ口調だった。

俺はパンとカシーを無理やり口に突っ込み、エミリーの後を追った。

---

連れて行かれた先は、先日実技試験を行った広場。

昼休みだが、まばらに人がおり、魔術の練習をしている。

「突然どうしたんだ？」

「……ちよつと、初級魔術を使つてみて」

エミリーは俺の質問には答えず、端的に要求だけをしてきた。

しかしその表情は真剣だったので、俺は大人しく従うことにする。

「いいけど。……ファイア」

俺の杖の先に、掌サイズの炎が灯る。

炎はしばらくその場で燃えた後、ふつつりと消えた。

「これでいいか？」

エミリーを見ると、口元に手を当て何かを考えている様子だ。

「もう一度使つてみて」

言われるがまま、詠唱する。

「ファイア」

先程と同様に火が灯り、やがて消えた。

「……どうしたんだ？ 何かおかしいか？」

と、言つたそばから、俺は気づいた。

……そういえば、俺の魔術について、重要なことをエミリーに伝えていなかった。

エミリーは同じポーズでしばらく黙つた後。

こちらを見て言った。

「ハジメ、実技試験のときに近くであなたの魔術を見て感じたのだけど。

あなたの魔術は奇妙だわ。

……一体あなた、どこから魔力を持ってきているの？」

そう。

そのことだ。

すっかり忘れていた。

「すまん。もっと早く伝えておくべきだった。

魔術を覚えた時からずっとなんだけどな。

俺は周囲の魔力を使用せずに魔術を発動してるみたいなんだ。

理由はわからないけど、魔力を取り込もうとしても、俺の身体には入ってこないんだよ。

あと、俺の魔術にはもう一つおかしな点がある。

実はいつも、威力を抑えて発動してて、抑えずにやると……つてまあ、見てもらった方が早いか。

ファイア

唱えた瞬間、俺の前に巨大な火の玉が出現した。

エミリーが目を見開く。

火の玉はしばらく燃えた後、それまでの魔術と同様に消えた。

「……ありえない」

エミリーは呆然としている。

「ありえないわ。」

魔術の原理の根本が破綻してる。

「……どうということなの？」

エミリーは早口でまくしたてた。

「間違いなく、周囲の魔力は消費されてない。

なのに術式は正しく、でも異常な規模で実行されてる。

何か魔力以外のものを消費しているのかしら？

いやそれで術式が作動するのはおかしいし。どうということ？

「……ちよつと、他の魔術も見せてくれる？」

俺の魔術を見て、エミリーが焦っている。

こんなエミリーは初めて見た。

魔術の分野では、常に余裕綽々だったからな。

「わかった。……アイス」

バカでかい氷の塊が、俺の前に出現した。

その後も10回以上魔術を唱え、気づけば午後9時の授業が始まる時間になっていた。

「……分からないわ」

エミリーは悔しそうに頭を振った。

「ハジメの魔術は、根本がおかしい。」

術式は同じだから、やってみることは魔術で間違いはないはず。

でも、大前提である、魔力を消費するという部分が、完全に欠落してる。

魔力の保存則に真つ向から対立しているし、それだとハジメは無から有を作り出していることになる。

世界の理に反しているわ」

「何か、原因とか分かかったりするか?」

「……正直、お手上げね」

そうか。

エミリーに分からないなら、誰にも分からないだろう。

俺が異世界から来たことが、多分何か関係してるんだろうが……。

「ちなみに、魔術協会の研究者だかなんだかに見せて、何か分かると思うか?」

「可能性は低いでしょうね。

0ではないと思うけど。

ただ、ハジメのそれは、これまでに魔術師が作り上げてきた理論を、全て覆しかねないほどの異常事態よ。

学壇には相当な衝撃が走るでしょうね。

そのせいで、魔術の実験に協力させられたりするかも。

そうなるよ、結構な時間を取られるでしょうね。

断ったとしても、対応は面倒よ。

薄い可能性とその労力を天秤にかけて、ハジメがどちらを選ぶか、つてところかしら」

まあ、そうなるよな。

俺がこの現象を今まで黙ってたのも、それが懸念にあったからだ。

……当たり前になって忘れてたというのもあるが。

よくフィクションの世界では、そういう稀有な人間は実験動物扱いされて、人権をなくした生活を強いられたりしている。

もちろんそれは作り話の世界だが、あり得ないとも限らない。

おまけにそれに協力しても成果があるとは限らないのだ。

むしろエミリーが言うには、可能性は低いという。

俺が知りたいのは、俺がこちらの世界にやってきた理由であって、俺の魔術がヘンテコな理由ではない。

おまけみたいなことに時間をかけて、目的達成が遅くなるのは避けたい。

……よし。

このことは協会には黙っておくことに決めた。

とにかく転移魔術に集中だ。

「ありがとうエミリー。」

かなり参考になった。

やっぱり協会には頼まないことにするよ」

「……そう。いいんじゃない」

なんだか授業を受けるのが面倒くさくなってきた。

今日はサボりだ。

試験も終わったことだしな。

……そういえば、進級祝いとかしてもいいんじゃないだろうか。

久しぶりに酒を飲みたい気がしてきた。

「エミリー、学校が休みになる前に、飲まないか？」

進級祝いと、お前の最優秀賞受賞記念も兼ねて。

今まで世話になった分、おごるからさ」

エミリーは、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をした。

「……え？」

それはもしかして、デートの誘いかしら。

……ま、まあ、ハジメが行きたいなら、行ってあげてもいいけど？

つまり、ハジメは私に、気があるということね？」

「いや違うよ。普通に飲もうって話。

……確かに、2人きりだとアレか。

そうだな、じゃあクリスも誘おう。

こないだ言ってた、俺の冒険者仲間。

それならいいだろ？」

まだアバロンにいたら、ユリヤンも誘おう。

あいつの壮行会も兼ねてしまえ。

知り合いと大人数で飲むなんて、初めてだ。

楽しみになってきた。

「……あつ、そう。

いいんじゃないの」

エミリーがそっぽむいた。

声も微妙に不機嫌そうだ。

なんだ突然。

「飲み会嫌か？」

「嫌じゃないわよ！」

後で時間と場所を教えなさい！

それじゃ私は授業に出るから！　じゃあね！」

ツカツカと歩いて行ってしまった。

何だあいつ。

……まあいいか。

まずはユリヤンに都合を聞いて、次がクリスマスだな。

こういうのは、忙しそうな方からあたるのが鉄則だ。

予定を合わせて、店を予約するでしょう。

## 飲み会①

次の日、学校をサボって王城を訪ねてみることにした。

ユリヤンのやつはまだいるだろうか。

「すみません、ユリヤン殿下にお会いしたいんですが」

門番に尋ねる。

「タナカ様ですね。どうぞこちらへ」

うやうやしく案内してくれた。

どうやら顔を覚えてもらえたらしい。

例によってかなり歩いた後。

ユリヤンの部屋へ到着した。

「殿下。ハジメ〓タナカ様が参られました」

「入れ」

中から声がして、俺は部屋の中へと案内された。

ユリヤンはソファでくつろぎながら、本を読んでいた。

服もガウンのようなゆったりとしたもので、パジャマのように見える。

もしかして、朝からこの部屋を出てないんじゃないだろうか。

奥に見える扉が寝室につながっているのだろうか？

とにかく、なんだかヒマそうな感じだ。

「ハジメ、久しいな」

ユリヤンが言う。

テーブルにはワインっぽい酒が置いてあり、ユリヤンの手にはグラスがある。

ユリヤンはそれを口元へと持っていき、ゴクリと飲んだ。

「……ヒマそうだな」

素直な感想が口から出てきてしまった。

ユリヤンはハハツと笑う。

「そうなんだよ。けっこう前にこっちでやる仕事は全て片付いてな。

毎日1人で飲んだくれる日々だ。

最初は兄や妹が付き合ってくれてたんだが。

やつらも忙しくてな、なかなか相手をしてくれなくなっちゃった。

使用人達を誘うわけにもいかないしな」

ユリヤンはまたグラスを煽り、空になったグラスに酒を注ぎ足した。

「まあ、たまにはこんな過ごし方も悪くはないが、長く続くとやっぱりヒマだな。

予定を早めようかと思つてた矢先に、お前が訪ねてきたつてとこだ。

……今日はどうしたんだ？」

「まあ、前回と同じだよ」

「お？」

つてことは、飲みの誘いか？」

ユリヤンが身を乗り出した。

「ああ。

えーとまず、お前の推薦状のおかげで無事に魔術学校に入れてな。助かったよ。

それで進級試験に合格したから、祝いに飲もうと思つて。

せつかくなら大人数の方が楽しいから、お前もどうかと思つてな」

ユリヤンは酔つてるからか、愉快そうだ。

揶揄するように言つた。

「じゃあ、俺はついでか。

あと数日でアバロンを離れるこのタイミングでお前が来たから、てつきり壮行会でも

やつてくれるもんだと思つたのになあ」

「いや、すまん。

ただ、それも兼ねようと思つてはいたんだ。

思いついた順序が後だっただけで」

「……まあ本当は、飲めるならなんでもいいけどな。

俺はいつでもヒマだから、時間と場所が決まったら門番にでも伝えてくれ」

「わかった。そうするよ」

よし。ユリヤンはオーケー。

あとはクリスだな。

しばらく雑談をして、ユリヤンと別れた。

「——飲み会？」

ユリヤンと別れた後、クリスの家を訪ねて事情を話した。

「ああ、エミリーっていう同級生と、ユリヤンっていう俺の友人が来るんだけど。

せっかくだからクリスもどうかかなと思って」

クリスはちよつと考えた後、答えた。

「私が行って迷惑でなければ、ぜひ参加させてもらいたい。

大人数で飲むなんて、生まれて初めてだ。

ハジメの友人なら悪い人はいないだろう。

……楽しみだ」

よし。全員オーケー。

準備は整った。

あとは店を予約するだけだ。

当日。

俺は、かなり早めに店に着いた。

さすがに俺以外のやつが先に顔を合わせたら気まずいだろうし。

店はそれほど高級ではない、大衆居酒屋的な感じの店にした。

大人数で飲むなら、こういうところが気兼ねなく騒げるだろう。

騒がしくなるのかは分からないが。

あの3人がどんな会話をするのか、想像もつかない。

……でも、なんだか楽しみだ。

最初に来たのはエミリーだった。

「一応、私も主催の一人だしね。」

早めに来ることにしたわ」

俺の対面に座りながら言った。

彼女は今日もゴスロリ仕様だ。

居酒屋で見ると、違和感が半端ないな。

「そういえばエミリー、酒飲めるのか？」

「当たり前でしょう。」

貴族は12歳でお酒を飲むようになるのよ。

外交や舞踏会に備えてね」

「へえ」

その後少しの間、いらぬ貴族トリビアを教えられた。

待つこと20分ほど。

クリスが到着した。

「よお、クリス」

「ハジメ、今日は宜しく頼む」

「えーと、紹介しよう。

こちらがエミリー。

俺の学校の同級生だ。

エミリー、この娘がこないだ話してたクリスだ」

エミリーが立ち上がり、優雅に礼をした。

「エミリー＝フォン＝グレンデルです。」

宜しくお願いしますね」

体中に鳥肌が立つ。

こいつ、猫被ってやがる。

「ああ。クリステイーナ＝ローレンツだ。

宜しく……つて、グレンデル？

……まさか、グレンデル家のご令嬢ですか？」

「ええ。

南方のグレンデル領領主、ガドリーノ＝フォン＝グレンデルは私の父です」

その言葉を聞いて、クリスが跪いた。

えっ？

急にどうしたの？

「そうとは知らず、大変失礼いたしました！」

先程の無礼な振舞い、どうかお許し下さい！」

下を向いたままクリスが叫び、場がシンとなる。

そういうえばクリスって騎士養成学校とか出てたっけ。

騎士といえ、貴族を敬うものだよな。

……しまった。

事前にエミリーの素性を話しておくべきだった。

「クリスティーナさん、どうぞお顔を上げて下さい。

お互いの身分など、この場には関係ありません。

魔術学院の一介の生徒である我々が招き、貴方が来てくださったのですから。

どうぞハジメこのバカと同じように接してください」

ハジメと書いてこのバカと発音しやがった。

器用な。

「そうだ、クリス。

気を使う必要ないぞ。

今夜のこいつはエミリーⅡフォンⅡグレンデルじゃない。

ただのエミリーだ。

ちよつと優秀だけど、すごく口が悪い、ただの魔術学校の3年生。  
……ダメか？」

「……分かりました。」

二人がそう言うなら」

クリスは戸惑いつつも了承してくれた。

俺達は生徒同士。

上下関係などないのだ。

エミリーは先生でもあるけど、そこは置いとく。

胸をなでおろすと、視界の端にエミリーが映った。

「ただの、エミリー……」

エミリーは俺の言葉を反芻するように呟いていた。

何か、思うところでもあるのだろうか。

そして、最後の1人がやってきた。

「よお、ハジメ。来たぞ」

「はるばるすまんな、ユリヤン」

鷹揚に手を上げてみる。

「こちらのお嬢様方は？」

「ああ、紹介するよ。」

同級生のエミリーと、冒険者仲間のクリスだ。

2人とも、俺の友人のユリヤン。

変な目で見られたら、噛みついて構わない」

「失敬な。お前の友人に手を出したりはせん」

「冗談だよ」

ユリヤンが笑いながら、残った席に着こうとした時。

「……ユリヤン？」

エミリーが呟いた。

「あの、まさかとは思いますが、ユリヤンⅡウォードⅡアルバーナ殿下では、ないです

よね……？」

めちやくちやキョドツている。

エミリーもこんな声をだすのか。

ユリヤンが俺に視線を送ってくる。

どうする？ という感じだ。

さつきと同じ問題が発生してしまった。

うーむ。

俺としては、ユリヤンの素性を隠すのは避けたい。

せつかく知り合えた友人たちだ。

隠し事はなしがいい。

ちようどさつきエミリーも、自分で言ってたしな。

この場に身分など関係ないって。

発言には責任を持ってもらおう。

視線に頷きで答えた。

ユリヤンが言う。

「初めまして。エミリー、クリス。

アルバーナ第8王子、ユリヤンⅡウオーードⅡアルバーナだ。

宜しく頼む」

「……………ええええええ!?!」

## 飲み会②

「……じゃあユリヤン様は、アバロンへの道中でハジメと知り合ったのですか」

「ああ。」

あの時のコイツったら見ものでな。

町娘2人に話しかけられて、何にも答えられずに固まってやがった。

俺が間に入らなきゃまともに会話もできないし、シャイな田舎者丸出して感じだったぜ」

「ハジメにそんな時が。それは見てみたかったな」

「その方がまだ可愛げがあるわね。」

今では余計な口を叩いてばかりの、残念な人になってしまったわ」

「待って待って、そもそも馬車でお前が話しかけてこなければ、そんなことにはならず済んだんだよ

それとエミリー。あつさり人を残念認定するのはやめてもらえる？

傷つくからね？」

ユリヤンが正体をバラしてしばらく場が混乱していたが、少しずつ収束に向かいつつ

ある。

エミリーとクリスは、ユリヤンにタメ口はきけなかった。

試しに呼び捨てにさせてみたら、罪悪感で潰されそうな表情になったので、さすがに無理強いはしなかった。

平気で呼び捨てにしてる俺は、どうやらとても非常識な人間らしい。

まあ、こちらの世界の常識には疎い自信がある。

本当はダメなんだろうが、まあユリヤンが許してるのでオーケーだろう。

ただ、クリスはエミリーに対しては、親しげに話している。

歳も下だし、グレンデル領の領民という訳でもないのに、抵抗が少なかっただろうか。

エミリーにとっても、それは新鮮だったようだ。

いつものツンケンした態度はどこへやら、嬉しそうにクリスと会話している。

しかし俺に対しては相変わらず、言葉の端々に針が仕込まれている。

理不尽な。

「ユリヤン様は、もうすぐ前線へ行ってしまうられるのですね」

クリスが言った。

「ああ。王族の務めってやつだな。貧乏くじとも言うが」

「武運をお祈りします」

「ありがとう。」

ただ、こちらから攻める流れにならないければ、そんなに心配はいらないんだけどな」  
「魔族は、近年は全く攻めてきていないという話でしたね」

「ああ。だから俺の仕事は、面倒な会議に参加するだけだ。」

あとの時間は適当に、女でも口説いて過ごささ」

ユリヤンは持っていたグラスの酒を飲み干し、おかわりを頼んだ。

その隙に、エミリーが話を挟む。

「クリスは、どうやってハジメと知り合ったの？」

確かハジメは、魔物に襲われてたところを救われたとか言ってたけど」

「ああ。」

森で狩りをしていたら、たまたまグレイウルフに襲われているハジメを見つけてな。

腹を食い破られてて、ギリギリの状況だった。

間一髪で、襲ってたやつを倒せたから良かったが」

クリスは酔っ払ったのか、顔がほんのりと赤い。

「あの時は、ホントに助かったよ。」

ただ実は俺、最初はクリスのことを疑ってたんだよな。

こんな聖人みたいな人間がいるわけない、って思ってたさ。」

でも初めてクリスの目を見たとき、瞳があんまり綺麗だったもんだから。疑う気持ちが出た」

「綺麗？　そ、そうか？」

自分では分からないが」

クリスが少しどぎまぎしている。

「ホントに綺麗な瞳の色よね。宝石みたい」

「確かに。美しい」

「——あ、あんまり見ないでください」

エミリーとユリヤンにも褒められ、クリスは照れて黙ってしまった。

エミリーが話を繋げる。

「……そんなに危なかったの。

やっぱり冒険者って、危険がつきものなのね。

助かって良かったわね、ハジメ」

「ホントだな。

あの時は死ぬかと思った」

「……たしか、死ぬ目に遭うと性欲が強まるって聞いたことがあるな。

ハジメ、どうだった？

現れたクリスの美貌に、興奮したんじゃないか？」  
なっ。

「……ば、馬鹿かお前は。」

た、助けられておいてそんなもん、するわけないだろ」  
思いきりどもってしまった。

「……へえー」

エミリーが乾いた声と共に、冷たい視線を送ってきた。

くそ。なんか文句あんのか。

いやな空気の中。

クリスだけは俺の言葉を信じてくれたのか、事もなげに話し始めた。

「でもその後ハジメも、私の事情に付き合ってくれたんだ。

今度はハジメが命懸けで私を助けてくれてな。

ハジメの情の深さに救われた。

もしもハジメがいなかったら、こんなに晴れやかな気持ちには一生なれなかったろう

と思う」

クリスはグラスを口元へ運び、ひと口飲んだ。

「はあー……ハジメがそんなことをね。」

会わないうちにハジメも色々やってんだな」

ユリヤンが感心したように呟いた。

「あれから、ハジメといると気分が高揚するんだ。

些細なことでもワクワクする。

ただの作業だった狩りも、ハジメと一緒にだと楽しくてな。

友情とは、素晴らしいものだな」

上気した顔で話すクリス。

まあ、長いことぼっちだったもんな、クリスは。

「へえー、そうか。

よかったなあ、ハジメ」

ユリヤンが手に持ったグラスを振りながら言った。

何やら見透かしたような表情で、見ていると少しイラッとくる。

なんだろうかこの感情は。

「エミリーは、ハジメとはどうやって知り合ったんだ？」

今度はクリスが質問した。

「私は、同級生だったから別に。

いつも通ってた教室に、ハジメが転入してきたのよ」

エミリーが答える。

澄ました声だが、目が少し泳いでいた。

「嘘つけコラ。」

お前が適当に放った中級魔術が、俺の身体に穴を開けそうになったのがきつかけだろーが」

「うるさいわね。」

適当じゃないわ。

ちゃんと放った中級魔術よ」

「どつちでも変わらんわ」

エミリーは慥然とした表情だ。

よくそんな顔ができるな。

……いや。

とはいえ、エミリーには世話になった。

この会があるのも、エミリーのおかげともいえる。

一応フォローをいれとくか。

「まあ、その詫びに勉強を教えてもらって、そのおかげで今日、進級祝いなんてできてるんだけどな」

「そうよ。感謝しなさい。」

ハジメのスライム脳じゃ、半年で進級なんてできなかったんだから」

「スライム脳ってなんやねん」

そのとき、ハハッと笑い声が響いた。

ユリヤンだ。

「仲いいんだな、2人とも」

ユリヤンは愉快そうに笑っている。

それを見たエミリーの顔が真っ赤になった。

「ち、違います！」

ただ長く一緒に勉強してるだけです！」

その様子を見て、ユリヤンはさらにおかしそうに笑う。

「そうか。」

まあ、俺はなんでもいいんだが。

くくくつ。

ハジメは大変だな」

エミリーは、大変なのは私の方です、と言いたげな顔で俺を睨んでいる。

俺を睨んでもしょうがあるまいて。

「ハジメ、なかなか楽しそうで、うらやましいぞ」

「代わってやってもいいけど？」

「遠慮しとく。恨まれそうだからな」

「恨まれる？ 誰に？」

ユリヤンは答えず、ただ酒を飲んでいった。

その後も宴会は続いた。

クリスはエミリーと、俺に次いで2人目となる友情を結び、楽しそうに狩りの話をしていた。

一方の性格がどうであれ、美女2人が仲睦まじく話している様は、目の保養になるな。ユリヤンも楽しそうだ。

何を考えてるかはよく分からないが、終始笑っていた。

こいつの壮行会でもあるからな。

楽しんでくれているようでよかった。

そして、俺も楽しかった。

こんなに楽しい酒は、生まれて初めてだ。

……こいつらとパーティーを組んで冒険者でもしたら最高だろうな。

ふと、そんな考えが頭に浮かんだ。

魔術師2人と、剣士2人。

クリスは捌くのが得意だし、ユリヤンは攻撃がうまそうだ。

俺が大雑把に魔術を使って、足りないところをエミリーに補ってもらおう。

結構いいパーティーになるんじゃないだろうか。

エミリーに毒を吐かれながら、クリスに癒され、ユリヤンと馬鹿な話で盛り上がり、何かを目指して旅をする。

きつと楽しいだろう。

……なんてな。

まあ、無理だと分かっている。

ユリヤンは前線に行ってしまうし、エミリーは実家に戻るのだろう。

クリスもいつまでもこのままという訳にはいくまい。

そのうち騎士か何かになって、冒険者は卒業してしまう。

俺だって、図書館で何も得られなければ、また手がかりを探しに別の国へと旅に出るかもしれない。

こんな空想ができるのも、今だけだ。

だが今だけは、そんな空想に浸ることが、楽しかった。

クリスが酔い潰れて寝てしまい、エミリーが酔っ払ってクリスの頭をべしべしと叩き、ユリヤンがそれを止め、それでもクリスが起きなかつたところで。

会はお開きにした。

エミリー、クリスと別れた後、ユリヤンと少し話をした。

「生きてりやまた会えるだろ。またな。ハジメ」

最後にそう言って、ユリヤンは去っていった。

ヤツと言葉を交わすのはこれが最後かもしれない。

そう思うと無性に寂しくなって、去りゆくユリヤンの背中をずっと見ていた。

やがて、ユリヤンの姿は見えなくなった。

寂寥感が押し寄せてくる。

だが、そんな感情に捉われていてもしょうがない。

俺には俺の目的がある。

また明日から、がんばって生きていこう。

## 中級魔術習得

皆で騒いだあの飲み会から約3ヶ月。

基本的には、変わらない日々を送っている。

平日は勉強、休日は狩りの毎日だ。

しかしいくつかの変化があった。

1つ目は、たまにエミリーが狩りに参加するようになったこと。

エミリーはクリスをとても好きになったようで、勉強のときによく話題にあがるようになった。

それならばと俺が狩りに誘ってみたところ、二つ返事で参加を希望したのだ。

しかしエミリーは魔術がうまいが、冒険者としての経験はない。

高いプライドが危険を招きやしないかと注意していた。

が、杞憂に終わった。

彼女は、自分の専門外の分野については謙虚なのだ。

知らないことを知ったふりもしないし、見栄を張って余計な行動もしたりもしない。

俺の行き届かない所を堅実に補ってくれて、必要な時には大魔術まで使用可能。

ハイスペックな彼女のおかげで、俺達はC級を卒業し、B級の冒険者パーティーとなった。

俺を罵倒してくるっただけが、タマに傷だが。

はからずも、飲み会の時の俺の空想が一部叶った形となった。

狩りの中でエミリーとクリスが話しているのを見ると、つい頬が緩んでしまう。

形は違えどぼっち同士、いい友達に巡り合えて良かった。

自分のことは棚に上げて、そんなことを考えていた。

2つ目に、クリスの実家にお呼ばれたこと。

クリスの伯母さんはとてもいい人で、あれこれと世話を焼きながらもてなしてくれた。

クリスにキマイラを倒したことを聞いて、伯母さんはすぐに俺を招こうとしていたらしい。

しかし俺が学校に入学して間もなかったため、クリスが気を使って遠慮してくれていたのだという。

夕食をご馳走になりながら、クリスの伯母夫妻、従兄弟たちと談笑した。

皆、本当にいい人達だった。

最後に丁寧に礼を言われ、クリスを宜しくお願いします、と頭を下げられた。

これは、親族公認の仲ということか。

クリスマスも、これからも宜しく頼む、と言ってきた。

つまり俺は、ただの友人から、家族公認の友人になった。

そして3つ目。

これがもつとも重要な部分だ。

これまで中級魔術の習得を目指してがんばってきたが、なんだかもうすぐできそうな気がするのだ。

4年生になって授業がガラリと変わり、大部分がサンドラ村でやってたようなイメージの訓練になった。

とはいえ果実での訓練などはせず、最初から魔術のイメージ作りだ。

実技の時間が増え、発動しても危なくないように、広場に移動して授業をしている。

先生が発動して見せるのを参考に、自分達でもやってみるといふものだ。

先生は生徒の様子を見ながら、足りないところを指導してくれる。

無詠唱で初級魔術を行えるようになってから、なんだか頭の中に魔力が通る道筋のよ  
うなものが認識できるようになった。

「どうやらこれが術式らしい。」

「どこがどうなつて魔術が発動しているのか、なんとなくわかる。」

それをより強いものに変化させることで、中級魔術が発動できるのだという。

授業中、クラスメイトが詠唱しているが、今のところできた者はいない。

「エミリーはできるはずだが、彼女は授業中に本を読んでいて、一切魔術を使用する気がないようだ。」

「それはまるで、体育の時間に読書をするかのようなボイコットっぷりだ。」

「しかし先生から注意されることもない。」

「授業の邪魔さえしなければ、どうぞご自由に、という感じだ。」

「その代わり、習得できなくても責任は持ちません、というスタンスらしい。」

「まあ、エミリーが暇そうにしてるから好都合だ。」

「……なあ、何かアドバイスないか?」

「木陰で本を読むエミリーに尋ねる。」

「あなたのようなカメムシは、とにかく数をこなすしかないわね」

「俺の比喻が格下げを重ね、ついに昆虫にまで成り下がってしまった。」

「ミミズとカメムシのどちらが高級なのは、議論の余地がありそうだが。」

「まあ、そうだよな。」

でも、あとちょっとな気がするんだけどなあ」

エミリーはパタンと本を閉じて、こちらを見た。

「……あなたの場合、起こる現象の規模が大きいでしょ。それから、それを想定してイメージした方がいいかもしれないわね。」

初級魔術なら、正しく術式が組めればイメージは後から書き変わるかもしれないけど、中級魔術はイメージの精度が重要だから」

おお、なんかまともなアドバイスが。

「まあ、せいぜい頑張ることね。」

私もカメモシの頑張りを見る気持ちで、応援してるから」

そう言うとエミリーは、また読書に戻った。

彼女がまっとうなことを言った後は、必ず罵倒が入る。

もしかしたら照れ隠しだったりするのかな？

……まあいいか。

そうか、イメージね。

確かに先生のお手本のまままでイメージしていた。

俺の魔術は規模が大きくなりそうだから、それを想定して考えるべきか。

どんなもんだろう。

俺の中級魔術。

初級魔術のときは、10倍くらいの規模だった。

中級でも同じだとすると、かなりの大きさになる。

先生のお手本でも、4×5メートルくらいの火柱ができてたからな。

まあ、さすがに周りに被害が出るほどではないだろうが。

よし、せっかくだから、この広場の円を覆い尽くすくらいの魔術をイメージしてみるか。

どうせ発動しやしないだろう。

集中。

イメージ。

無詠唱で学んだ術式の書き換え。

正しく中級魔術を発動できるように、術式を変化させていく。

変化させた術式を維持して、魔力を通す。

いくぞ。

詠唱。

「フレイムピラー」

——その瞬間。

目の前が真っ赤に染まった。

広場の中心に、巨大な火柱が出現していた。

圧倒的な熱量。

高層ビルでも焼き尽くせそうな大きさ。

炎は円の中にギリギリ収まっているが、凄まじい熱風と熱気が押し寄せてくる。

視界は炎で覆われ、奥の景色は全く見えなくなつた。

叫び声があちこちから聞こえる。

生徒達は炎から散り散りに逃げ、中には泣いてる者もいる。

阿鼻叫喚。

まるで地獄からもつてきたかのような光景だ。

この世のものとは思えない。

やばい。

またやってしまったのか。

今度は確信がある。

これは俺のせいだ。

「雪よ。空より舞い降り全てを凍てつかせよ。

ブリザード！」

エミリーの声がした。

彼女にしては珍しく、少し焦ったような声だ。

円内に、雪とともに強烈な冷気が降りそそぐ。

それらは炎と打ち消し合い、大量の水蒸気を生じた。

火柱の先端では、小規模な爆発のようなものが起こっている。

逃げ惑う生徒。

近くの生徒を遠ざける先生。

その様を俺は、呆然と見ていた。

これが、俺の魔術の結果か。

炎によって生じた上昇気流が冷やされたのか、雨が降ってきた。

雨は炎の勢いを弱めるのに、わずかに貢献しているようだ。

やがて少しずつ炎は小さくなり、事態は沈静化していった。

炎と雪が消えてから、先生は慌てて生徒を集め、点呼をした。

皆混乱しており集まるのに時間はかかったが、怪我人などはいないようだ。

全員いることを確認して、教室へと戻った。

移動中、話題は炎のことで持ちきりだった。

誰がやったの？ とか、あれって上級魔術だよ？ とかそんな声が聞こえてくる。

教室に集まった後。

クラスの全員が、先生に心当たりについて質問された。

俺とエミリーが犯人だということは、バレていないようだ。

授業を混乱させてしまったことは申し訳ないが、ここは黙秘させてもらうことにした。

逆に、もしかしたら自分かもしれない、という生徒が3人名乗り出た。

火柱の出現と同じタイミングで火魔術を使ったらしい。

その3人は職員室に呼ばれていった。

彼らに対しても申し訳なく思う。

だが、まあ彼らが犯人にされることはあるまい。

とりあえず、俺が使ったときは皆魔術を詠唱していて、誰がやったのか分からなかったようだ。

またエミリーの時は混乱の最中だったため、逃げるのに必死でわからなかったらしい。

不幸中の幸いか。

午後の実技は中止になり、その日は解散となった。

別れの挨拶の後。

エミリーに視線を送ると、彼女は黙って図書館の方向を指さした。  
……了解だ。

## 中級魔術習得記念パーティー

図書館で待っていると、エミリーがやってきた。

「場所を変えるわよ」

俺にそう告げると、エミリーは図書館を出る。

どこに行くのかと思っただけで、校舎裏へとたどり着いた。

エミリーと初めて会った場所だ。

ちよつと懐かしい。

彼女は壁を背にして、ため息をついた。

「……はあ。まさかあそこまではね」

「俺もびつくりしたよ」

本当にびつくりした。

あんなものを生み出してしまふとは。

カシルス畑を全焼させかけたときの反省を、全く活かしていない結果となってしまうた。

「まあ、怪我人がいなくて本当に良かったわ。

さすがに怪我をした人がいたら、黙ってるわけにはいかないもの。

私達は名乗り出て謝罪して、ハジメの異常性が公になっていたわね」  
全くだ。

……ん？ 私達？

「俺が使った魔術だ。

責任を問われるのは、俺だけじゃないか？」

「私もあなたの異常な魔力を知っていたもの。

でもあんなことは想定してなかった。

飼ってるカメムシの失態は、飼い主の責任でしよう？」

なるほど。

エミリーは俺の魔術の先生みたいなものだ。

その自覚をエミリーは持ってくれていたらしい。

言い方はひどいものだが。

「俺はカメムシじゃないしお前に飼われてもいない。

……けど、その姿勢には感謝するよ。

ありがとう」

ふいに、エミリーは視線を逸らした。

心なしか、頬が赤い気がする。

……あれ？ 照れてる？

「とっ、とにかく、ああいう結果になった以上、もう広場での練習は禁止ね。

今後はアバロンを出て、誰もいない見晴らしのいいところでやりなさい」

まあ、そういうことになるな。

「ちなみにエミリーは、どうやって上級魔術を練習したんだ？」

「私は、夜に広場でこっさり練習したわ。

まあ私はカメモシじゃないし、すぐに規模を抑えられるようになったから、その後は普通に練習してたけど」

そうかい。

……まあもともとあの広場は、上級魔術の使用にも耐えられるように設計されているのだという。

でないと学年が上の人達が困るだろうしな。

だが俺が使うと怪しまれるので、使うわけにはいかない。

「じゃあこれからは、規模を抑えられるようになるまで街の外で練習か」

「そうね。

ただ、いきなり休むと怪しまれるかもしれないから、少しずつにしときなさい」

「なるほど。そうしよう」

こうして、俺はちよこちよこ学校を休んでは、アバロンを離れて南の方にある草原へと赴き、1人で魔術の訓練をする生活を始めた。

草原に何度も火柱が立ち、たまに近くの道を馬車で通る人達に驚かされていた。

しかし場所を毎回変えておいたおかげか、ギルドに調査依頼が来るようなことにはならなかった。

術式の理解が深いからか、規模の操作は割と早くコツが掴め、1ヶ月程で習得できた。

「……と、いう訳で」

ここは馴染みのバー。

目の前には、俺の貴重な友人2人。

「どうしたんだ？ ハジメ。急に呼び出して」

「どうしたのよ？ この私を呼び出すなんて、いい度胸ね」

クリスとエミリーが、それぞれの反応を見せる。

「本日は、中級魔術習得記念パーティーです！」

もう、好きに飲んじゃってくれ！ ひゃっほい！」

……そう！

できた時はアレなことになってしまつて。

あんまり実感が湧かなかつたが、俺はついに、ついに中級魔術を習得したのだ。

これで、はしゃがずにいられる訳がない！

「ハジメがそんなに明るいところを、初めて見たぞ。

そんな一面もあるのだな。

内省的で、奥ゆかしい人間だと思つていたのだが」

「根暗で卑屈なカメムシのくせにはしゃいじやつて、見てられないわね」

2人とも、俺をネガティブ思考人間だと思つていたらしい。

昔から暗いとか陰気とか言われてきたが、やはりこちらの世界でもそうなのか。

……だが、今夜の俺は一味違うぜ！

「普段のこゝとなんて忘れろ！」

今日の俺はマジでテンション最高だぜ！ いえーい！

今日とはとにかく飲んでくれ！ 俺の奢りだ！」

早速酒を注文し、テーブルにグラスが置かれる。

その1つを手に取り、立ち上がる。

「……おほん。」

俺は、この日のためにずっとやってきたんだ。

サンドラ村から出てきて。

冒険者をして金を稼ぎ。

死にかけてところをクリスに救われ。

稼いだ金で魔術学校に入学し。

がんばって勉強して。

ようやく、ここまでこれた」

そう言うと、これまでの日々が走馬灯のように思い出された。

アバロンに来て間もない頃は、不安なことも多かった。

涙が出そうだ。

「これでようやく魔術協会のC級会員になれる。

そしてついに、協会の図書館に入ることができるんだ。

何か得られるかは分からないけど、明日、協会に行ってみようと思う。

……今日という日を迎えられたのも、お前ら2人がいてくれたからだ。

ありがとう！ 乾杯！」

俺がグラスを掲げると、2人ともグラスを合わせてくれた。

「そうか。おめでとう、ハジメ。乾杯！」

「まあ、カメムシなりに頑張つて良かったわね。乾杯」

2人に祝福してもらい、俺は天に登るほど浮かれていた。

そして絶好調の俺はその日、かつてないほどに酒を飲んだ。

エミリーに罵倒されても嬉しく感じる。

クリスとの会話は言わずもがなだ。

2人が話してるのを聞くのもほっこりする。

酒はうまい。

それはまるで、この世の楽園のようだった。

「ハジメ、顔が赤いぞ。大丈夫か？」

とクリスが心配してくれたのは覚えている。

それに対して、

「全然大丈夫だよ〜ん！」

心配してくれるなんて、可愛いなあクリスは！」

と、死にたくなる返しをしたのも覚えている。

そして。

気づけば自宅のベッドで寝ていた。

一体何がどうなったのか。

今はもう昼過ぎだ。

とつくに学校は始まっている。

俺の格好は昨日のまま。

え？ 何これ？

怪奇現象？

昨日のことは夢だったの？

頭が割れるように痛い。

気分が死ぬほど悪い。吐きそうだ。

いや分かっている。

状況から考えて、泥酔して記憶をなくしてしまったのだろう。

自分がそんな失態をおかすなんて。

そう思う気持ちはずがある。

しかし、事態はもつと深刻だ。

俺はどうやってここに帰ってきたのだ。

これだけすっぱりと記憶がないのだ。

酔っぱらって眠りこけたのだろう。

クリスもエミリーも、俺の住所は知っている。

どちらかに運んでもらったというのか？

そう思うと、恥ずかしくて死にたくなる。

服はキレイなままなので、吐いたりはしてないと信じたい。

ああ、調子に乗って飲みまくるんじゃないやなかつた。

穴があつたら埋まりたい。

協会の図書館を調べるはずだったのに。

今日はもう、何もやる気が起きない。

水をひたすら飲んで、備え置ききの食料を食べて、何もせずに過ごそう。

そう思った俺は、起き上がって服を脱ぎ捨て、水をかぶ飲みして、再度ベッドに横になった。

トントン。

ドアを叩く音が聞こえる。

ニーナが起こしに来たかな？

いやアイツが俺を起こすなんてあり得ない。

気のせいだな。

もう少し眠ろう。

トントン。

……って、ここはサンドラ村じゃない。

アバロンの家だ。

ニーナがいるはずない。

寝ぼけていたようだ。

起きて窓を見ると、もう日が暮れかかっている。

水を飲んで眠ったおかげか、体調は少し良くなった。

トントン。

ノックの音は続く。

誰だ？

立ち上がって服を着た。

玄関まで歩く。

「はい？」

ガチャリとドアを開ける。

そこには、エミリーが立っていた。

「起き上がれるようになったのね。もっと早く出なさいよ」

彼女は大きな紙袋を抱えていた。

「はい、コレ。」

一応、食べ物と飲み物を持ってきたわ。

せつかく買ったんだから、ちゃんと食べなさいよね」

その紙袋を俺に押しつけてきた。

「用はそれだけだから。」

じゃあね」

そう言つて彼女は、扉を閉めようとする。

「待った！」

慌てて彼女を呼び止めた。

閉まろうとしていたドアが止まり、再び開いた。

「何よ？」

エミリーの顔が覗く。

「頼む。昨日何が起こったのか、教えてくれ」

エミリーは、キョトンとした顔でこちらを見ている。

「……あなた、まさか覚えてないの？」

「まったく覚えてない」

エミリーはその言葉にため息をついた。

「呆れたわ。」

大変だったんだから」

エミリーは俺の部屋に入ってきて、部屋で唯一の椅子に腰かけた。

……俺はベッドに座る。

エミリーが言うには、俺はテンション高めのウザ絡みを続けていたらしい。

エミリーが毒を吐いても、

「照れるなつてエミリー！ まったく素直じゃないんだから！」

と自己肯定感のバグった発言をし。

クリスが心配しても、

「俺はこれくらいで酔っぱらうような、ヤワな男じゃないんだぜ、ベイバー」

と骨まで凍えるような発言をしたという。

え？

これ、マジで俺の話か？

誰か他の人じゃない？

ねえ、他の人だよ？

案の定、俺は糸が切れたように酒場のテーブルに突っ伏し、動かなくなつた。

しようがないので会はお開きにして、会計はエミリーとクリスが折半したという。俺をここまで運んでくれたのは、クリスだった。

クリスは軽々と俺を肩に担いで、ベッドに寝かせてくれたらしい。

……………。

……………死にたい。

誰か。

誰か、俺を殺してくれ。

「あなた、あんな一面もあるのね。

いつも辛気臭い顔してるから、ハメをはずすことなんてないのかと思つてたわ」

……………あれ？

意外とマイルド？

「まあ、気晴らしになつたなら、いいんじゃないの？

私は別に、気にしてないわよ」

なんだか、エミリーが優しい。

過去最強の罵倒をお見舞いしてくると思ったのに。

どういうことだ？

何が変わるものでも食べたんじゃないか？

「エミリーどうしたんだ？

そんなセリフ、らしくないぞ？」

「うるさいわね。

死にかけるカメモシをいたぶる趣味はないのよ。

それとも、昨日あなたがクリスマスに言った言葉を、できた鳥肌の多かった順に聞かせて

ほしいのかしら？」

「すみません勘弁して下さい」

エミリーはため息をつき、立ち上がった。

「クリスマスも別に気にしてないと思うわよ。

むしろあなたの新しい一面を知れたって、喜んでたわ。

まあ、会ったら謝っとくことね。

……図書館を調べたら、また学校に来なさいよ」

そう言って、エミリーは帰っていった。

昨日の金を渡そうとしたら、いらなと言われてた。

彼女が置いていった袋を覗くと、食べ物と飲み物が詰め込まれていた。

その中からフルーツジュースとビーフジャーキーみたいなものを取り出して。

飲み食いしたら、少しだけ元気が出た。

……はあ。

まあ、やってしまったものは仕方がない。

切り替えていこう。

人生、切り替えが大事。

まず、クリスに会ったら謝って、お金を返そう。

そして明日こそ、魔術協会の図書館を調べに行こう。

……はあ。

## 図書館探索

……さて。

ついに、この日がやってきた。

ここは魔術協会本部。

転移魔術について調べるため、図書館に足を踏み入れる。

ここに来るのは、随分と久しぶりだ。

本当なら昨日の予定だったが、そのことについて思い出すと死にたくなるので気にならないことにする。

旅の恥はかき捨て。

過去は振り返らずに生きていこう。

まずは、ランクアップから。

D級に上がるのは、その場で初級魔術を見せたらオーケーだった。

さらにC級に上がりたいと告げると。

経歴を確かめられた後、外に連れ出された。

ついていくと、広い庭のような場所に出て、中級魔術を見せろと言う。規模を抑えたフレイルムピラーを見せ、無事合格。

お金を払い、俺は晴れてC級魔術師となった。

「では、こちらが証書とバッジです。」

図書館へは、入り口でいずれかを見せれば入れますので」

受付嬢が言った。

それらを受け取り、早速階段を上がって図書館へ向かう。

入り口には警備が立っており、言われた通りに証書を見せると入館を許可された。

目の前に、大きな扉がある。

図書館の扉だ。

ついにここまで来た。

俺は扉に両手を当て、ゆっくりと開いた。

中は特に変哲のない、小さめの図書館といった風情だった。

魔術師っぽい人が数人、本を読んでいる。

適当に、中を歩いてみる。

いくつかの項目ごとに、本は整理されていた。

- ・ 初級魔術
- ・ 中級魔術
- ・ 上級魔術
- ・ 火魔術
- ・ 水魔術
- ・ 風魔術
- ・ 土魔術
- ・ 治癒魔術
- ・ 結界魔術
- ・ 薬草学
- ・ 数学
- ・ 魔術の歴史
- ・ アルバーナの魔術
- ・ 協会誌

当然ながら、転移魔術、なんて棚はない。

司書さんがいたので、まずは聞いてみることにする。

「すみません、転移魔術についての本、とかつてありますか？」

司書さんは少し困った顔になった。

「転移魔術……ですか。」

すみません、本として纏められたものは、おそらく存在しないと思います。

しかし、関連する論文は、協会誌にいくつか掲載されているはずですよ。

お調べになるなら、そちらをお探しいただくのがよろしいかと」

やっぱり本はないのか。

まあ、予想していたことだ。

協会誌を片っ端から読んで、その論文とやらを探そう。

協会誌の棚の前に行く。

長い本棚の端から端まで、協会誌が並べられていた。

全部に目を通すのは、さすがに骨が折れそうだ。

とはいえ、やるしかない。

ようやくここまでできたのだ。

どれだけ時間がかかろうと、やってみせよう。

協会誌とは、魔術における最新の研究論文を、2ヶ月毎にまとめたものらしい。

つまり1年に5冊（1年は10ヶ月）出版されることになる。

そしてここには、1000冊を優に超える会誌がある。

まさしく、協会の歴史そのものといった風情だ。

1日かけて、過去10年分の会誌を洗ってみた。

その結果、関連がありそうなものは3つ。

「物体移動魔術仮説における、種々の変数の再定義について」

これが一番新しい、転移魔術と関連しそうな論文だ。

恐らくエミリーが言っていたのはこの論文だろう。

ヒトを移動する場合は転移魔術、物を移動する場合は物体移動魔術と呼ばれているようだ。

いずれもまだ実現してないため、仮説としてしか存在しない。

その証明のために研究者達が長年腐心しているが、成果は思わしくないようだ。

この論文も、研究が前進した感じが一切しないものだった。

他の2つも同様だ。

最近の10年分の論文を調べてこれだけということとは、この10年で研究はほとんど

進歩していないということになる。

そして新しい論文とは、その分野における、それまでの研究成果を踏まえた上で出されているものだ。

すなわち最新の論文で実現不可能なら、過去のものを見ても不可能なのは明白である。

——つまるるところ。

現状、転移魔術は仮説の域を出ず、進歩もほとんどない。

それが結論らしい。

……まあ、分かっただけのことだ。

少なくとも、一足飛びに俺に起こったことが分かるようなものは、ここにはない。しかし。

ようやくここまでできたのだ。

諦めるには、まだ早いはずだ。

協会誌はまだ山ほどある。

その中に、わずかでも手がかりがあるかもしれない。

時間をかけて、全ての協会誌を調べてみることにしよう。

そう決意して、図書館を出た。

それから10日間かけて、全ての協会誌に目を通した。

結論から言うと。

手がかりは、得られなかった。

物体移動魔術についての論文はちらほら出てくるものの。

やはりどれも同じような感じで、ただ仮説をこねくり回しているだけのものばかりだった。

それならばと、その仮説を自分で読んでみたりもしたが、俺の頭では全く理解できなかった。

可能性は低いと分かってはいたものの。

時間をかけた挙句にいざ現実を突きつけられると、結構ショックだ。

絶望感が出てきた。

どうしたらいいだろう。

目標を失ってしまった。

最後の協会誌に目を通した翌日。

俺は丸一日、家でぼんやりと過ごした。

空っぽになった頭で思いついたのは、仮説を複写して、エミリーに見せてみるというものだ。

長年かけて研究者達が証明できなかったものが、ひとりの学生にできるわけもないだろうが、彼女なら何か、有用なヒントを与えてくれないだろうか。

藁にすぎるとはな気持ちだが。

すがれるものにはすがってみよう。

俺は一日かけて、仮説を複写する作業を行った。

翌日。

魔術学院に行くと、いつものようにエミリーは授業を受けていた。

顔を見るのが久しぶりで、なんだか嬉しくなる。

じつと見ていると目が合った。

ウインクしてみた。

顔を背けられてしまった。

放課後に図書室に行くと、案の定、彼女はいた。

「……よお、久しぶりだな」

エミリーの隣に座る。

「そうね。」

それで？ 探し物は見つかったのかしら？」

「それが……全然ダメだった。手がかりゼロだ」

「そう。まあ、しょうがないわよ。」

もともとが荒唐無稽な話だもの」

エミリーはチラリとこちらを見た。

なんだか気遣わしげだ。

最近、エミリーの態度が少し柔らかい気がするな。

「それで、ちょっと見てほしいものがあるんだけど」

「あなたの局部なんて、私は見たくないわ」

「そんなもん見せようとしとらんわ！」

前言撤回。

やっぱりエミリーは平常運転だ。

「物体移動魔術の仮説を複写してきたんだ。」

お前なら、何か分からないかと思って」

「……えっ？ それって相当昔に書かれたものよね？

協会の図書館にはそんなものが置いてあるの」

エミリーが少し、興奮した口調になった。

興味がありそうだ。

「これなんだけど、見てくれるか？」

俺は鞆から、論文の複写を取り出した。

「字が汚いわね」

「悪かったな」

「冗談よ。読み終わるまで、ちょっと待ってなさい」

なんだか、エミリーは上機嫌になった。

そして待つこと30分ほど。

「ハジメ」

「あいよ」

「残念ながら、力にはなれそうにないわ」

「……そうか」

まあ、当たり前だ。

学生がパツと仮説を読んだだけで魔術を実現させてしまったら、研究者の立つ瀬がないだろう。

エミリーは天才だと思うが、さすがに不可能だ。

「何か、分かったこととかはあるか？」

「……そうね。」

この仮説は面白いわ。

私も著者の言う通り、物体移動魔術は可能だと思う。

その延長にある、転移魔術も。

ただ、その実現にはまだ足りないものが数多くあるし、それらを見つけるのには、とても大きな労力がかかるでしょうね。

まあ結局のところ、結論は変わらないわ。

転移魔術の実現は、あと100年は難しいでしょうね」

そうか。

まあ、そんなところだろう。

……でも、いつかは実現可能なものなのか。

だとしたら、とても魔術の研究が進んだどこかの誰かが、俺を転移させた可能性がないわけではない……のだろうか。

「……ちなみにさ、アルバーナよりも研究が盛んな国では、すでに転移魔術が実現してる可能性って、ないのかな」

「ない……とは言えないけど。」

でもアルバーナよりも研究が進んでいる国なんて、なかなかないわよ。

ここは世界でも有数の大国なんだから。

それに魔術協会は大半の国に設置されてるし、情報の共有もされているから、公になつていないのは間違いないわ。

あるとしたら、国家レベルで秘密裏に研究されていた場合くらいでしょうね」

アルバーナ貴族としてのプライドがあるのか、少し饒舌に話すエミリー。

そうか。

だとしたら、闇雲に他の国をあたっても、しょうがないか。

「……わかった。もう少し考えてみるよ」

「そう。まあせいぜい、がんばりなさい」

エミリーは本に目を移しながら、そう言った。

俺に対する彼女は、いつもこんな感じだ。

励ましの言葉なんて、聞いたことがない。

セリフはいつも、せいぜい頑張りなさい、だ。

ともすれば冷やかしにすら聞こえるその言葉。

しかし、不思議と。

俺に気力を与えてくれる。

何故だか分からないが。

彼女のその言葉には、彼女が素直に表せない多くの気持ちが乗っているような、そんな気がするのだ。

そう思うようになったのは最近のことだし、もしかしたら気のせいかもしれないが。

しかし今日もその言葉のおかげで、落胆していた気持ちがひっぱり上げられた。

「ああ、がんばるよ。ありがとう」

「……………」

俺がそう言うと、エミリーは顔を上げ、神妙な表情で見つめてきた。

「どうした？」

俺の顔、何かついてるか？」

手で顔を触るが、何も無い。

「……………なんでもないわ。またね」

「ああ、またな」

俺は図書室を後にして、次の手を考えることにした。

## 今後の方針①

エミリーに相談してから、俺はまた魔術協会の図書館に通い始めた。どうするか考えるため。

そして、どうするか考えるための材料を探すためだ。

俺にはこの世界の知識がない。

ニーナの家の本で学んで以降、そんな勉強などしたことがなかった。しかし今、俺に必要なのはそれだと思った。

この国では転移魔術は不可能と結論付けられた今、別の可能性を探す必要がある。そのために、この世界の歴史を学び、魔術について大局的に捉えることが必要だ。この国以外で、世界を探すならどこにするべきなのか。

最新の魔術研究ではダメだった。

ならば、過去に頼ってみる。

温故知新というやつだ。

これまでの世界の成り立ちを学び、次の目的地を決めるのだ。

魔術を隠匿してそうな国とか。

人が転移した事例とか。  
そんなのを探してみる。

そのような考えのもとに。

「魔術の歴史」の棚から分かりやすそうなのをいくつか選び、勉強した。  
ある程度は既に持っていた知識だったが、新しいことも知ることができた。

まず、この世界は2つの大陸でできている。

東の大陸にはヒトが、西の大陸には魔族が住んでおり、遙か昔から戦争状態が続いている。  
戦線は大陸を繋ぐ細い道にあり、そこに戦線が定まった年が、ヒトの世界の起源元年となった。

その後も魔族との戦闘がひっきりなしに繰り返されていたらしい。

その頃は、ヒト達は一丸となって、魔族と戦っていた。

しかし時が経ち、少しずつ戦闘の回数が減っていく。

魔族の危機が遠ざかるに従って、国という境界がヒト達に生じていった。

1000年を過ぎたあたりから、ヒト同士の争いが生じ始めた。

さらに1600年頃からは魔族の侵入が極端に少なくなり、その争いに拍車をかけたという。

そして1800年〜1900年代に、東の大陸全土を巻き込むような、大きな戦争の時代が訪れた。

その際に、国ができては消えを繰り返し、歴史資料の大半が燃えてしまったらしい。なのでそれより昔のことは資料がほとんど残っておらず、どんな国があったとか、どんな戦いがあったとか、そのほとんどが不明になってしまった。

なので現在、詳細が分かるのは、2000年代以降のことしかない。

このアルバーナは、2000年代初期に建国され、いくつかの戦争を経て、今なお存続している。

魔術協会ができたのは、2100年頃。

物体移動魔術の仮説が発表されたのは、2300年頃らしい。

それからずっと研究がなされているが、仮説の証明はできていない。そして2686年の現在。

大きな力を持った国が、アルバーナのほかに4つある。

しかしそのいずれもが2000年代に建国された国であり、魔術の歴史もアルバーナと同じようなものだと思う。

歴史書を見る限りでは、特に転移魔術を隠匿してそうな怪しい国もなく、神隠しがあつたなんて事例も見つからない。

これらの国を調べても、成果は得られなそうな気がする。

とはいえ、他の小国を探したところで意味があるとも思えない。

……考えあぐねていたとき。

目に止まった国があつた。

エルフの国。

別名、エルフの隠れ里。

エルフとは、長命で、目鼻立ちが整った者が多く、耳が長いことが特徴の種族だ。

その長老は齢1000歳を超え、賢者と呼ばれているという。

……賢者。

どうだろうか。

今まで、俺がこの世界に来た理由は、魔術によるものだと決めつけていた。

今でもその可能性が高いとは思っているが、しかし魔術の進歩を追つても、なかなか辿り着けそうにない。

それならば、この世界そのものに詳しい人に聞いてみた方が、何か新しい糸口が見つかるんじゃないだろうか。

それに1000年も生きているなら、資料が残っていない時代の魔術も知っているかもしれない。

ロステクノロジー的な感じで、その時代の方が魔術が進歩していた可能性だってある。

一度考えると、いい案のような気がしてきた。

エルフの国を訪ね、長老に俺の身にあつたことを話し、意見を聞いてみる。それを、次の目標にしてみるか。

……よし。

俺の考えはまとまった。

が、一人で物事を判断するのはよくないと、グレイウルフの時に学んだ。エミリーに相談してみよう。

彼女から見ても可能性がありそうなら、エルフの国に行くことにする。

翌日。

学院の図書室を訪ねた。

いつもの席に、いつものようにエミリーはいた。  
なんだか安心感があるな。

そんなことを感じつつ、隣の席に座る。

「……エミリー、ちよつと相談があるんだが」

「ダメよ。お金は貸さないわ」

「違うわ！」

何で俺の相談といえば金、なんてことになるんだ」

「じゃあ、何かしら？」

「……今後の方針についてだ」

エミリーは本から目を離し、こちらを見た。

「そう、どうするの？」

「考えたんだけどさ、他の国の魔術協会とかを訪ねても、結局ここの二の舞な気がするんだよ。」

だから、ちよつと考え方を変えてさ、エルフの長老を訪ねてみようと思ったんだ。

すごく長生きしてるらしいから、世界のことには詳しくそうだし、こんな事例を他にも知ってるかもしれない。

今は残ってないけど、昔の魔術では転移魔術も可能だったかもしれないし。

そんなことを聞きに行こうと思うんだけど、どうだ？

可能性、あると思うか？」

そう言った俺を、エミリーはしばらく無言で見ていた。

少し驚いているように見える。

何に驚いているのだろう。

エルフの国を訪ねるなんて案は、彼女から見れば奇天烈きてれつなものなのだろうか。

実現なんてできやしないのだろうか。

不安になる俺をよそに、ひと息ついて、彼女は話し始めた。

「悪くないと思うわ。

私も少し考えてみたけど、あまりに糸口が少なすぎるもの。

ハジメの言う通り、どこの国を探しても同じことになる可能性がある。

それなら、長く生きてるエルフに聞いてみるというのは、いい線いつてるんじゃないかしら。

他にいい案も思いつかないし、転移の解明を続けるのなら、目標としてはまずまず妥当だと思うわ」

……よし。

エミリーも同意してくれるなら、行動目標にしてもいいだろう。

俺は、エルフの国を訪ねることにする。

そう決心した俺に、エミリーが言った。

「……それじゃ、ハジメはこの街を出るのね」

「ああ。」

住み慣れてきたところで、名残惜しいけど。

目的を違えるわけにはいかないからな」

「そう……」

それつきり、エミリーは下を向いて黙ってしまった。

どうしたんだろうか？

今日はなんだか少し、エミリーが変だ。

「……ねえ、ハジメ」

「ん？」

顔を上げたエミリーは、いつになく真剣な表情だった。

「エルフの里までは、危険な道のりになると思うわ。」

馬車なんて通らない、道のない道を進むことになると思うし。

魔物にやられて、途中で命を落とすことさえあり得る。

たどり着けたとしても、長老が会ってくれるかなんて分からない。

そして仮に会ってくれたとしても、答えが手に入る確率は相当に低いのよ。

……それでも、あなたはそれを目指すの？」

俺はエミリーの目をまっすぐ見ながら、答えた。

「ああ、目指すよ」

エミリーも俺の目をまっすぐ見て、問いかけてくる。

「それは、なぜ？」

なぜ、か。

少し考えて、俺は答える。

「それが、俺の生きる意味だからだ。

同じことを、村を出る前にも悩んだ。

あるかどうかも分からないものを探すよりも、平穩に暮らした方が幸せなんじゃない

かってな。

……でも、俺は知りたい。

知らなきゃ、自分の人生が始められないと思った。

それを知るために行動しなかったら、一生悔いが残ると思ったんだ。

だから、今こうしてここにいる。

そして、次はエルフの里を目指すんだ」

エミリーは目を見開いて、呟いた。

「生きる意味、か……」

遠くの景色に視線を移した彼女は、そのまま黙ってしまった。

俺も黙って、言葉の続きを待つ。

どれくらい、そうしてただろうか。

やがてエミリーは、意を決したようにこちらを向いた。

「ハジメ」

「なんだ？」

「お願いがあるの」

「金なら貸さないぞ」

「違うわよー！」

もうっ、とエミリーはつぶやき、改めて言った。

「この街を出る前に、一度。」

……私の家に、来てほしいんだけど」

俺に初めて見せる、懇願ともとれる眼差しで。

エミリーは、俺にそう言ったのだった。

## エミリーの實家

のどかな田園風景。

馬車の窓には、そんな景色が広がっていた。

農作業をする子どもが、こちらに手を振る。

俺も、優雅な気分だけにこやかに手を振り返す。

豪華なあつらえの馬車の中。

俺はふかふかのシートの上でくつろいでいる。

車内はとても広く、脚を伸ばしても、それを邪魔するものは何もない。

我ながら、いい身分だ。

両脚を目線の高さまで上げて、それらをバタバタと動かし、エコノミークラス症候群

の予防をはかっていたら。

横から、声が聞こえた。

「ちよつと、行儀悪いわよ」

声の方を見ると、銀髪のツインテールを腰まで垂らし、ゴスロリ服に身を包んだ少女がいた。

エミリーだ。

普段の彼女なら、間近で俺がこんな行動を取れば、こちらの人格を根底から否定するような罵倒を浴びせてくるに違いない。

しかし今日はその鋭さは見る影もなく、行動を諫める言葉だけにとどまった。何故か。

それはひとえに、この馬車旅が、彼女のお願いにより行われているものだからだ。

10日前、図書館で彼女にお願いされた。

お願いだ。

あのエミリーの、お願い。

もしかしたら、一生に一度のものかもしれない。

一生のお願いってやつだ。

そんなお願いを無碍にすることなどできず。

今、こうしてエミリーとともにグレンデル領に来ている。

彼女が俺を連れてきた理由は謎だ。

そもそも、彼女が何をしに実家に帰るのかも分かっていない。

全てが謎。

自分のイエスマン気質が悔やまれる。

しかし俺だって、誰にでもそうあるわけではない。

相手がエミリーだからだ。

彼女には世話になった。

俺がアバロンを離れることが決まった今、彼女に会うのも最後かもしれない。

こんなワガママくらい、何も言わずに聞いてあげよう。

普段からエミリーの言うことに逆らえてないという説は、頭の片隅のゴミ箱に捨てる。

ちなみに、クリスには事情を話して留守にすることを伝えてある。

やらかした飲み会についても謝った。

お金も返そうとしたが、エミリーと同様に受け取ってくれなかった。

……彼女にも、俺がアバロンを離れるつもりであることを、話さなければならぬ。

「見えてきたわ」

エミリーが言った。

前を見ると、遠くに城が出現していた。

「あれがグレンデル領の中心都市、ダグラスの街よ」

アバロンよりは小さいが、立派な城だ。

城壁に阻まれて城下町は見えない。

しかし、きつと賑わっていることだろう。

街はゆつくりと近づいていき、俺達を乗せた馬車は城門をくぐった。

そのまま、大通りを進む。

街はやはり、多くの人で賑わっていた。

道ゆく人たちが、こちらに向かって頭を下げる。

何事かと思ったが、エミリーに向かって敬意を示しているらしい。

しかしなんだか俺も、お辞儀をされている気分になる。

ほほほ。くるしゆうないぞよ。

だが当のエミリーはというと、そんなことは知らん顔で、何やら考え込んでいた。どうしたのやら。

7日間の旅路の間、彼女はずっとそんな感じだった。

さすがにそろそろ、俺を連れてきた理由を教えてほしいところなのだが。

ついに、城の中までやってきた。

大きな扉の前で止まり、エミリーが馬車を降りる。

つられて、俺も馬車を降りた。

すると、扉が開いた。

メイドさんが2人がかりで、両開きの扉を片方ずつ開けている。

中には赤い絨毯が敷いてあり、左右にメイドさんが3人ずつ待機して、こちらに向かつて頭を下げていた。

すごい出迎えだ。

エミリー。

お前、なんて生活をしとるんだ。

「おかえりなさいませ。エミリー様」

メイドさんの一人が言った。

「ええ、ただいま。」

お父様は、明日帰られるのだったかしら？」

かしずかれるのには慣れっこのようで、エミリーは平然と答える。

「はい。明日の昼には戻られるとのことでした」

「そう。」

じゃあハジメを部屋に案内して。

私も着替えるわ」

「かしこまりました」

エミリーは早々にどこかへ行ってしまった。

ポツンと残った俺を、メイドさん達が見つめる。

なんか気まずい。

「——ハジメ様。どうぞでこちらに」

エミリーと話していたメイドさんが、一歩前に出た。

どうやら案内してくれるらしい。

歩いていくメイドさん。

俺は言われるがまま、その後を追った。

案内されたのは、城内の一室。

一言で表すなら、ホテルのスイートルームのような部屋だった。

キングサイズのベッドにソファが2脚、ローテーブルと机、本棚が置いてある。

だが部屋には十分なスペースが確保されており、それらによつて窮屈に感じることは全くない。

広さや調度品の数だけ見れば、王城で見たユリヤンの部屋より豪華だ。「こちらの部屋を、ご自由にお使いください。」

夕食の時間にはお呼びいたします。

何かご用があれば、ベルを鳴らしていただければ、すぐに近くのメイドが駆けつけますので」

自由にしていいらしい。

ひゃっほい。

俺はメイドさんが部屋を出ると同時に、服を脱いでベッドに寝転んだ。

ふかふかだ。

最高だなこりゃ。

ゴロゴロと寝返りをうつと、シーツの感触が肌に優しい。

馬車旅で固まった体が、ほぐれていくのを感じる。

ああ、気持ちいい。

高級なベッドを堪能していた俺の耳に、ノックの音が聞こえた。

あわてて服を着て、ドアを開ける。

そこには、エミリーが立っていた。

先程とは違うゴスロリドレスだ。

着替え早いな。

「入るわね」

有無を言わさず部屋に入ってきた。

普段から強気な彼女だが、実家だとさらに磨きがかかっている気がする。

まあ、俺にも聞きたいことはたくさんあるからいいんだが。

このタイミングでわざわざ俺の部屋に来たということは、ようやく説明してくれる気になったということなのだろう。

「……ハジメ、これから夕食だけど、母と兄も同席するわ。

でも、気にしなくていいから。

何か聞かれても、適当に流しておいて。

……そして明日、私と一緒に父に会ってほしいの」

え？

情報が多くて追いつけない。

「……待て待て。待ってくれ。

お前のお母さんとお兄さんってことは、グレンデル侯爵夫人と跡継ぎ候補ってことだろ？

ド平民の俺が同じ場所で食事って、許されるのか？

っていかそもそも、俺はなんでここに呼ばれたのか、まず聞かせろよ。

行きの道中で聞けるもんだと思ってたら、お前ずっと黙ってて、全然話さないじゃねーか」

思いの外、トゲのある口調になった。

何の説明もなしにここまでやってきて、さらに何の説明もなしに堅苦しい食事をさせられそんなことに、イラッとしたのだ。

さつきまで、与えられた部屋を満喫していたというのに。

ろくなやつじゃない俺は。

そして俺のその言葉に、エミリーは口ごもった。

俯き、その視線は定まらず。

スカートの端を握りしめながら、口をパクパクと動かして、次の言葉を探し始める。

「私は……」

私は……その……」

しかし言葉は見つからなかったようで。

もごもごと口ごもっている。

……こんなエミリーは、初めて見る。

あのエミリーが。

立板に水のごとく罵倒を繰り出すエミリーが。

古今東西の罵詈雑言を自由自在に放ってくる、あのエミリーが。

俺の前で初めて、言葉に詰まっている。

謝らせようとして黙ったことはあったが、あれとは少し毛色が違う。なんだろう。

罪悪感が芽生えてきた。

エミリーが、こんな姿を俺に晒すんだ。

やむにやまれぬ、筆舌に尽くしがたい事情があるのかもしれない。

「……分かった。

やっぱいいよ、エミリー」

エミリーが顔を上げる。

「やっぱいい、気が向いた時に話してくれたらいいや。

……それで、俺は何をすればいいんだっけ？」

エミリーは一瞬、ホツとした表情になった。

しかしすぐに表情を取り繕い、いつもの上から目線に戻って言った。

「……ハジメには明日、私と一緒に父に会ってほしいの。

私の隣で、頭を下げて黙っておくだけでいいから。

そして、私と父がどんな会話をして、そのままの姿勢で聞いてて「こりやまた変な話だ。」

耳無し芳一の怪談みたいだ。

もしかして、動いたら侯爵に食べられてしまうのだろうか。

それなら、耳にも忘れずにお経は書いてほしい。

……まあよく分からないけど、頭下げて黙つとけばいいなら別にいいか。

しかし本当に、俺を横に置く目的が見えないな。

エミリーはそれだけ言うと、部屋を出て行つた。

その後メイドさんが訪ねてきて、立派な服を渡された。

夕食にはそれを着ろとのことだ。

言われるがままに着替え。

しばらくすると、夕食へと案内された。

そこには聞いた通り、エミリーの母と兄らしき人が、エミリーと卓を囲んでいた。

俺はおずおずと残る一つの席に座る。

すると、テーブルに着く人達の注目がこちらに向いた。

ひえ。

「えーっと、俺は、ハジメニタナカと言います。

エミリー……様、とは学院で親しくさせていた দিয়েしております。

本日はエミリー様のお招きに預かり、この場に馳せ参じたものです。

えー、お目にかかれて光栄です。

どうぞ宜しく願います」

とりあえず、自己紹介してみた。

「ズ丁寧にどうも。

当主ガドリノニフォンニグレンデルの妻、エルミオーネニグレンデルです。

どうぞ寛いで下さいな」

「私は長男の、レオニードニフォンニグレンデルだ。

宜しく頼む」

エミリーファミリーも、自己紹介を返してくれた。

2人とも、綺麗な顔立ちをしている。

仕草も優雅で、まさにお貴族様、って感じた。

エミリーも並んだ食卓は、まるで映画のワンシーンのように映えていた。

しかしながら、俺への視線はキツイものがあつた。

体面上は礼儀正しいが、おざなりな感じだ。

まあ末娘が突然、家にどこの馬の骨かも分からない男を連れてきたら、こんな感じだろう。

誰だお前？　つてオーラがすごい。

「エミリー、彼とはどういう関係なんだ？」

エミリー兄が聞いた。

「さつきもお伝えしたでしょう、お兄様。学院の同級生です」

「何故、その同級生をここに連れてきたの？」

魔術学院の授業はどうしたの？」

今度はエミリー母だ。

「お父様に重要なお話があつて、その話にはハジメが必要だからです。

授業よりも大事だと考えて、こちらを優先しました」

「その重要な話というのを、聞かせてはもらえないか」

「ダメです、お兄様。

当主たるお父様に、最初にお伝えするべき案件だと判断いたしましたので」

「……………」

家族の質問は全てエミリーによって一蹴される。

しばらくすると、質問しても無駄だと悟ったのか、皆黙ってしまった。

最悪の空気の中、俺は作業的に料理を口に運ぶ。

……めちやくちやうまい。

ギクシヤクとした雰囲気、食事は進んでいった。

会話から察するに、俺を連れて実家に戻った理由は、他の家族にも分からないらしい。エミリーがこんなことをするのは結構な異常事態のようで、俺はとても警戒されている感じだ。

そのせいで、こちらから会話する気にもならない。

エミリーも自発的に喋ることはなく、針のムシロのような時間がひたすら続いた。食べてる間はまだいいが、次の料理を待つ時間が苦痛で仕方ない。

ひたすら耐えていると、ようやくデザートが来て、それを食べて食事は終了となった。……ああ、肩が凝った。

## エミリーの事情②

夕食が終わってから、気楽な時間が過ぎた。

浴場に案内され、豪華な風呂を味わう。

風呂は広いうえに、温かいお湯で張ってあった。

旅の疲れも癒されるというものだ。

明日は、エミリーの父親と会わなければならないらしい。

俺はエミリーの横で頭を下げておくだけでいいと言われたが、何の話をするつもりなのやら。

……まあ、考えてもしようがないか。

エミリーを問いつめるのはあきらめたし。

俺はエミリーのことを信頼している。

この旅行中の彼女はなんだか変だが、それだけでこれまでの日々が覆ることはない。秤にかければ、余裕で信頼の方に傾く。

きつと何か、事情があるのだろう。

翌日。

エミリーファミリーと気まずい朝食を摂った後。

与えられた部屋でダラダラと過ごしていたら、エミリーの父、グレンデル侯爵が帰ってきた。

とりあえず俺は、部屋で成り行きを見守る。

ちよこちよこメイドさんと呼んで、状況を教えてもらった。

侯爵はエミリーの在宅について、母や兄から事情を聞いたりしているようだ。

そのまま、しばらく時間が経った後。

ベッドで寝ころんでいたら、ノックの音が響いた。

起き上がって、ドアを開ける。

そこには、エミリーが立っていた。

「ハジメ、今からお父様の所に行くけど、準備はいいかしら」

彼女は、いつもの上から目線でそう言った。

「準備も何も、俺は頭を下げて黙っとくだけなんだろう？」

「……そうね。その通りよ。」

「じゃあ、行きましょう」

エミリーに連れられ、しばらく歩く。

やがて、1つの扉の前にたどり着いた。

エミリーは立ち止まり、その扉を見つめていた。

やがて大きく息を吐くと、右腕をあげて、ノックをした。

「お父様、エミリー＝フォン＝グレンデル、参りました」

「入れ」

すぐに中から声がして、エミリーが扉を開けた。

広い部屋だ。

両端にはズラリと本棚が並んでいる。

奥の窓際に机が置いてあり、そこで一人の男が執務を行っていた。

鋭い目つき。

齢50を超えているそうだが、筋骨隆々とした身体はその頑健さを主張している。

白髪と顔に刻まれた皺は、老いというよりも威厳の象徴としてそこにあつた。

彼こそが。

このグレンデル領の領主、ガドリノー＝フォン＝グレンデル侯爵なのだろう。

なんとも堅物そうで、冗談の通じなさそうな親父だ。

目元はエミリーにちよつと似てるけど。

それ以外に共通点が浮かばない。

強いてあげるなら、頑固そうなところか。

母親似だな、エミリーは。

とりあえず俺は、言われた通りに跪いて、頭を下げた。

俺はこの先ずつと、絨毯を見ながら会話を聞くことになるらしい。

しんどいな。

「さて、話を聞こうか、エミリー」

侯爵が言葉を発した。

低くて渋い声だ。

しかしその口調の中には。

一人娘に対する甘さなど、みじんも感じ取れない。

そして、エミリーが言葉を発した。

「はい。

単刀直入に申し上げます。

私は家名を捨て、この家を出ていきます」

……え？

マジで？

予想もしなかった言葉に、俺は衝撃を受けた。

エミリー、家を出ようとしたのか。

もつと早く相談してくれたらよかったのに。

しかしこんな感じが出ていくのか？

子どもの家出って、親と口喧嘩して感情的になって、つい口走って、後戻りできなくなつてやるもんじゃないの？

こんな冷静な家出宣言つてあるものなの？

……いやでも確かに。

振り返ると、思い当たる節はあるかもしれない。

彼女は魔術が大好きだ。

どこぞの貴族と結婚して優雅に平穩に暮らすのは、性に合わないのだろう。

学校を飛び級しなかったのも、つまらないお見合いをさせられるからだと言つていた。

エミリーほど魔術を好きな人間を見たことがないし、エミリーは魔術の天才と言つて過言ではない。

彼女には意志と資質が同居しているのに、境遇だけがそれを許さないのだ。

それならば、その境遇を覆してしまおうと、彼女は考えたのだろう。

……俺は。

いい選択だと思う。

エミリーは、どこかの貴族の妻で納まる器じゃない。

彼女が魔術に関わらない人生を歩むなんて、もはやこの世界にとつての損失だ。しかし。

家名を捨てるということは、家族を捨てるということ。

これまでのエミリーは、その殆どをこの城で過ごしてきたはずだ。

彼女は幼年学校には通わず、家庭教師に勉強を習っていたと聞いた。

つまり彼女は魔術学院に入学するまで12年間、この城で、家族と共に過ごしてきたのだ。

16年のうちの、12年。

その年月は、とてつもなく大きい。

そんな家族と別れるなんて、相当に重い決断だったろう。

しかしエミリーは、逃げずに人生と向き合ったのだ。

流されるままに生きていくことを良しとせず。

周囲の流れに逆らって、自分の意志を全うする道を選んだ。

誰にでもできることではない。

すごいぞ、エミリー。

「……理由を聞こうか」

侯爵が尋ねた。

間があつたことからして、侯爵も驚いたのだろう。

——さあ、言つてやれ、エミリー。

私は魔術とともに生きていくんだ、つて。

貴族の政略結婚の道具になんてならない、つて。

俺はエミリーのことを応援するために。

祈りをこめて、目を閉じた。

意を決した様子で、エミリーが答える。

「はい。」

——私は、ここにいる彼、ハジメのことを、愛しているからです。

私は、彼の側にいたい。

彼の行く末を見ていたい。

彼は目的のために、この国にとどまる事はできません。

ならば私は、その旅に寄り添いたい。

……それが、理由です」

……。

……はっ。

あ、ああ、なんだ、夢か。

びっくりした。

また異世界に飛ばされでもしたのかと思った。

恐ろしい夢だった。

なんたつて、あのエミリーが、俺のことを愛してるって言うんだぜ？

こんなに恐ろしい夢はみたことがない。

あるとしたら、彼女に浮気がばれた時くらいなものだ。H A H A H A。笑えよ。

——ああもう、とにかく、驚かせやがって。夢だよ。夢。

なあんだ。

当たり前だ。考えてもみろよ。

そんなこと、あるわけがないだろ？

顔を合わせれば必ず罵倒してくる、あのエミリーが。

俺のことを、愛してるだなんて。

その証拠にほら、俺の身体は自宅のベッドの上にあるはずだ。

さあ、目を開けてみろよ。

ほら、そこにはいつもの天井があるはず——。

意を決して。

目を開けた俺の視界に、飛び込んできたのは。

数秒前となんら変わらぬ、絨毯の綺麗な模様だった。

……え？

……マジ？

マジなの、これ？

現実なの？

嘘でしょ？

もはや、何も考えられない。

しかし混乱する俺をよそに、話は進んでいってしまふ。

俺と駆け落ちするためにエミリーが家を出ようとしていると、侯爵はそう理解したよ  
うだ。

「エミリー。」

お前がこれまで、食うに困ることもなく。

着る服に困ることもなく。

住む場所に困ることもなく。

完璧な教育を受けて育つことができたのは。

……一体誰のおかげで。何のためだと思っている」

「ひとえに、領民のおかげで、領民のためです」

「そうだ。」

お前という人間は、このグレンデル領の民が払った税によって成り立っている。

それは即ち、領民のためにその人生を全うする義務があるということだ。

そのために最も重要なお前の役目は、領にとつて良い関係を築ける相手に嫁ぐことに他ならない。

……エミリー、受けた恩も返さずに、我欲を通すというのか？」  
侯爵が強い口調で尋ねる。

しかし、エミリーは怯まず、はつきりと答えた。

「はい。」

民に顔向けのできない行為だということは、承知しています。

しかし、私は決めたのです。

私は、私の人生を生きると。

これまでにいただいた施しは、生涯をかけて必ず返します。

許してほしいとは言いません。

そして私は、許しを請いに来たものではありません。

……私はただ、お伝えしに来たのです。

エミリーⅡフォンⅡグレンデルは今日をもって、ただのエミリーとなります」

——ドンツ！

と、硬い音が響いた。

恐らく、侯爵が拳を机に打ち付けた音だ。

そして、深いため息が聞こえた。

「お前は、私の教育を全て理解した、唯一の子どもだった。

私はお前の相手に、このグレンデル領を任せようとすら考えていたのだ。

お前ならば、夫を諫め、うまく舵を取らせるだろうと信じていた。

例えそうならなくとも、お前は優秀だ。器量も良い。

嫁いでもこのグレンデル領のために、必ずや貢献するだろうと、そう思っていた」

力のこもらない、落胆した声。

本当に、エミリーへの期待は大きかったのだろう。

「……申し訳なく思っています」

エミリーの声が、かすかに震えている。

しかしその感情は、もはや俺には理解不能だ。

「もういい。分かった。

……出ていくがいい。

アバロンの邸宅までの馬車は用意してやる。

身の回りのものも、好きにしろ。

だが二度と、グレンデルの名を名乗ることは許さん」

「温情、感謝いたします……お父様」

震える声でそう言って、エミリーは踵を返した。俺も立ち上がり、追従する。

去り際に、ちらつと侯爵を見た。

侯爵はうなだれ、この部屋に入った時に感じたオーラはない。

その姿は、娘の出帆を悲しむ普通の父親に見えた。

部屋を出て、扉を閉める。

エミリーは眼に涙を浮かべ、齒を食いしばっていた。

その様子から、エミリーが一杯一杯なのは伝わってきた。

しかし、そんなとこ申し訳ないが、俺も混乱している。

混乱の極みだ。

このまま放置するのはさすがに御免被る。

頼むから説明してほしい。

「エミリー、あのさ、俺のことをどうとかっていうのは……どういふことだ？」

エミリーは涙を見られたくないのか、顔を背けて言った。

「……それは嘘よ。」

本当は、魔術協会に入りたいたいから、この家を出ていくことにしたの。

ただお父様には、それを言いたくなかった」

……ふむ。

前に聞いた話によれば。

侯爵は、魔術協会を恨んでいるはずだ。

魔術協会員の戦争不参加によって、グレンデル領は大きな痛手を被った。

侯爵はその時の領主の息子ということになる。

恨みも根深いものがあるだろう。

そんな父親に向かって、協会に入りたいとは言えなかったということか。

「……なるほどね」

一応、筋は通る。

とはいえ、その代わりの理由が変な気はするが。

貴族の令嬢が家を捨てるのは、恋に身を焼かれてと相場が決まっているのだろうか。

俺の知るエミリーだったら。

俺と生きるため、なんて突拍子もない嘘の理由をでっちあげるくらいなら、痛みがあつても本当のことを話しそうなものなんだが。

……まあ、侯爵と彼女の間には、16年という年月が横たわっているのだ。

俺の知らない部分など、山ほどあるだろう。

その上でエミリーが出した結論だ。

尊重する以外にないな。

……まあとりあえず、俺はこれでお役目御免だな。

「ハジメ、お疲れ様。

ありがとう。

ひとまず、部屋に戻っておいて」

涙声でそう言つて、エミリーは歩いていった。

## エミリー視点

<エミリー視点>

今日。

私は、人生で最も大きな決断をした。

これまでの私の生き方からは、到底考えられない決断。

もしも過去の私が見たら、私を愚かと断ずるかもしれない。

初めてお父様の期待を裏切った。

家族の気持ちも、全て無視した。

もつと良い方法があったのかもしれない。

性急過ぎたやり方については、反省している。

——しかし、後悔はしていない。

私は、ハジメのことを愛している。

世界で一番、ハジメのことが好きだ。

……いつからかといえば、出会った時からだ。

ハジメが教室で自己紹介をした時に、私の身体に稲妻が走った。綺麗な胡桃色の髪、切れ長の眼、すつと通った鼻、私より頭2つ高い背、程よく筋肉のついた身体つき、低くて優しい声、物憂げな表情、些細な仕草に至るまで。

その全てが、私の心を掴んで離さなかった。

ハジメがクラスにやってきた日は、一日中うわの空で過ごした。

こんなことは、初めてだった。

これまでどんな男性を見ても、何の興味も湧かなかつた。

その人のことを考えて物思いにふけるなんてこと、あり得なかつた。

とはいえ。

その日の夜に、聡明な私の頭脳は結論を出した。

これが思春期特有の、気の迷いというものであると。

そのような物語は、アルバーナにも数多く伝わっている。

恋というものによって、身を持ち崩す若い男女の物語。

演劇の題材としては定番で、何度も観たことがある。

悲劇もあれば喜劇もあるが、それらに対する私の感想は常に変わらなかつた。

——理解できない。

その一言に尽きた。

彼らは感情に翻弄されて、ヒトのヒトたる由縁、理性を手放してしまっているのだ。

目の前の果実の甘さに負けて、先を見ることができなくなっている。

私は違う。

私は理性というものを、ヒトの性質の中で最も尊いものだと考えている。

ゆえにどんな理由があろうと、私がそれを手放すことはない。

だから、ただ待てばいい。

感情が風化するのを、ただ待てばいいのだ。

そう思って、数日過ぎた。

しかしその火は消えるどころか、より大きくなるばかりだった。

何をしていても、ハジメのことが気になってしまう。

教室で、ふと気づくと彼を目で追っている。

魔術の勉強に集中しようとしても、身が入らない。

……これではダメだ。

学院での生活に支障が出てしまう。

おそらく中途半端にチラつくからダメなのだ、私は考えた。

ポイズントードは皿まで食べるという言葉がある。

こうなったら、彼に近づいて、話してみることにしよう。

所詮は、一時の気の迷いだ。

何度か会話をすれば、興味もなくなるだろう。

これまでの人生で、私を退屈させない人間など、そうそういなかったのだから。そう考えて。

教室で、彼に話しかけようとした。

しかしいざ行動しようとする、身体が固まって動かなかった。

彼のそばに行こうとするだけで。

心臓がドキドキと鳴り、奇妙な汗が出て、脚が前に出なくなる。

こんなことは生まれて初めてで、どうしたらいいのか分からなかった。

悩んだ挙句、私はハジメの行動を監視することにした。

話しかける口実を探すためだ。

不自然に話しかけようとするから難しいのであって、口実さえあれば、普通に話すことができるはずなのだ。

授業中、彼はいつも、教科書の最初の方のページを読んでいた。

恐らく半端な時期に編入したせいで、授業についていけないのだろう。

そのためか、放課後はいつも図書室で勉強していた。

その勤勉な姿も、私の胸を撃った。

だが、無詠唱魔術の勉強は、独学ではとっつきづらいものがある。彼の進捗状況も、思わしくはなさそうに見えた。

私が教えれば、もっと効率的に学ぶことができるに違いないのに。そう思ったとき、私は閃いた。

——これだ。

これを利用すれば、うまく彼との関係を作れるかもしれない。

かくして、私は実行に移した。

彼が図書室を出た後をつけ。

方向を読んで先回りし。

事故を装って接触した。

放った魔術は細部まで完璧に制御しており、彼に当たることはあり得なかった。

目論見通り、私は彼と話をすることができた。

——そして知った。

私という人間が。

意中の相手を前にすると、どうなってしまうのかを。

……衝撃だった。

かつてないほどの。

気持ちと正反対の言葉が口から出てくる。

そして言うべき言葉は何一つ出てこない。

こんなはずではなかった。

もつと優雅に、すんなりと、謝罪と埋め合わせをするはずだったのに。

危うく、彼は呆れて立ち去ってしまふところだった。

繰り返すが、私は、理性というものの信奉者だ。

そして身体とは、理性によって完全に制御されるものだと思っていた。

しかしハジメと話すようになって。

それが大きな誤りであると、初めて知った。

ハジメを前にすると。

私の理性は、あつという間にパニックを起こし。

私の口は、勝手に彼のことを罵倒し始める。

幼年期に、男の子は好きな女の子にいたずらをすると言ったことがあった。

男の子とは合理的でない愚かな生き物だな、と思つたことを覚えている。

……まさか自分が、15歳にして。

それと酷似した心理形態を露呈しようとは、思いもしなかった。

結局、なんとか勉強を教える関係を作ることは成功したが、その後も、私の口調は相変わらずだった。

ハジメもイライラしていた。

こんなことでは、いずれ関係を絶たれてしまう。

焦ったが、解決策はなかった。

私はやきもきしながら過ごした。

しかし、彼は根気強く耐えてくれ、関係は継続した。

話してしまえば興味もなくなると。

そう思っていたはずなのに。

その予想は見事にはずれ、私のハジメへの興味が尽きることはなかった。

彼との会話は楽しかった。

例え私の口が頻繁に、意図せぬ言葉を口走ってしまおうとも。

申し訳なく思いつつ、それすらも私は楽しんでいた。

私の言葉にハジメが見せる反応の1つ1つが、愛おしかった。

図書室での勉強の時間は、私にとって最も幸せな時となった。

そんなある日、同級生がデートという言葉を使っていた。

なんでも、異性と街を歩いて買い物をしたり、食事をしたりすることをそう呼ぶらしい。

兄とお忍びで買い物に行つたことがあつたので、私は経験済みだとその場は答えた。同級生は、「大人ですね。さすがエミリー様」と、私を持ち上げた。

どこが大人なのはよくわからなかつたが、適当に頷いておいた。

しかし……デート。

なんだか不思議な響きだつた。

ハジメとそれができたら、きっと楽しいだろうと思つた。

軽い気持ちでハジメを誘つてみたら、彼は承諾してくれた。

しかし、デートとは意中の者同士がするものだとは知らなかつた。

ハジメにやりこめられてしまい、八つ当たりのようにゴブリンに上級魔術を使った。

今は反省している。

そして、クリスとユリヤン殿下の2人と知り合つた。

クリスは、誠実で実直、とにかくまっすぐな性格で、私とも距離を取らずに会話してくれる。

ハジメとも、親密な関係のようだ。

強く、美しく、非の打ち所がない素敵な女性。

……ついにてに、胸部に蓄積する、無駄な脂肪の塊も豊富だ。

もしかしたら、この先ハジメと恋仲になることもありうるのかもしれない。

しかし。

だからといって、私がどうということはない。

選ぶのはハジメだ。

むしろ他の誰かではなくクリスを選ばれたのなら、諦めもつくだろう。

いや私とて本音では、ハジメに選ばれ、愛されたいという気持ちはある。あるのだ。

しかし私が彼に思いを告げられるのは、いつになるのか想像もつかない。

そんな私の未熟さに、彼が付き合ってくれるわけもないだろう。

だから、実際にそうなったらどうなるか分からないもの。

一応今のところは。

彼に思い人ができたなら、身を引くつもりでいる。

全く信用がおけないことが判明してしまった、はかない私の理性ではあるが。

……今のところは一応、そのつもりだ。

ユリヤン殿下は、掴みどころがない方だった。

ハジメとは親しそうだが、分かりやすいハジメと違って、考えを表面に出すことが少

ない方だ。

飄々と振舞いつつも、深く考えられているような気がした。

もしかしたら私のハジメへの恋心も、気づかれているかもしれない。

際どい話題になると、要注意だと、私の中で警鐘が鳴っていた。

殿下はそれすら気づいて、ハジメには何も言わないでくださったような印象だったが。

そして4年生になり。

ついにハジメは協会の図書館にたどり着き。

求めるものがそこにないと、知ってしまった。

落胆して、しばらくは動けないだろう。

私はそう思っていた。

ハジメが、どれだけの情熱をもって協会の図書館を目指したのか、知っていたから。

その分、希望が潰えたら痛みも大きいだろうと思っていた。

しかし。

彼は、すぐに次の行動を決めた。

エルフの国を目指すという。

転移などという不可解なものを探すなら、エルフの長老に聞くのは、確かにいい考えだと思った。

落胆して、動けなくなってもいいのに、彼はすぐに最善と思える次の手を見つけてきて、行動しようとしていた。

その強さが、不思議だった。

彼に尋ねると、それが自分の生きる意味だからと、彼はそう答えた。

……生きる意味。

その言葉は、私の心に不和を生んだ。

私が生きてるのは、グレンデル領の領民のためだ。

領を発展させ、領民の暮らしを良くすることが、私の生きる意味。

そう、納得していたはずだった。

しかし、それは間違いだと気づいてしまった。

そこには、ハジメのような強さがない。

ただ与えられた役割を全うするだけでは、生きていく意味とはいえない。

そこに私の意志が加わらなければ。

運命の操り人形に過ぎないのだと。

そう感じた。

……では。

私の意志とはなんなのか。

自分に問いかけた。

すると驚くほど簡単に、答えは出た。

ハジメと共に旅がしたい。

ハジメの行く末を、この目で見たい。

ハジメが危険に晒されるなら、守りたい。

……ハジメのことばかりだった。

結局。

私の愛情は、出会ったときからずっと膨らみ続け。

風化することは、一切なかった。

この恋の行く末が、どんな演目になるのかは、まだ分からない。

しかし結末を知らないままに終わらせることだけは、耐えられなくなってしまうていた。

気づけば私は、劇で観た通りの決断をしていた。

理解できないはずだったもの。

それはいつの間にかすんなりと、私の中に馴染んでいた。

もしかしたらハジメと出会ったことで、私は愚かになったのかもしれない。しかしきつと。

私は、この決断を後悔しない。

そう、確信していた。

意志を告げるため、父に会いに行つた。

私は父が好きだった。

これまで、その教えを忠実に守って生きてきた。

常に領民を最優先に考える父を、誇りに思っていた。

厳格さの裏に、期待と愛情を感じて育てられてきたのだ。

そんな父に、嘘はつきたくなかった。

父に会うのはこれが最後になるかもしれない。

それならば、偽りのない、本心を告げて別れたかった。

好きな人のことも、見てもらいたかった。

だから、ハジメには無理を言つて、屋敷まで来てもらった。

ハジメは不満げだったし、言いたいこともありそうだったが。

私のうろたえる様子を見て、その矛を収めてくれた。

彼は本当に、優しい人だ。

私が父に嘘をついたと思っっている彼は、結末に少し違和感を覚えているようだった。しかし、それはそのままでもいいだろう。

その違和感を残しておけば。

いつの日か、私が誰に嘘をついているのか、彼が気づく時が来るかもしれない。

ハジメがそれに気づいたなら。

もしかしたらその時は私も、素直になれるかもしれないから。

さてと。

少しだけ、感傷に浸りたくもなるが、そうもいかない。

むしろ大変なのはこれからだ。

旅は過酷なものになるだろう。

そしてこれから、ハジメの旅に同行する許可を取り付けなくてはならない。

素直に許可を求めるのは、私の性格上無理なことは承知している。

……何とか理由をつけて、彼の旅に同行するでしょう。

## パーティー結成

<ハジメ視点>

エミリーの家出宣言の後。

俺達は馬車で、アバロンへ帰ることとなった。

帰り道も、エミリーは口数少なく過ごしていた。

しかしその顔からは、どこかスツキリしたような印象を受けた。

俺としてはやや☒に落ちない所もあるのだが。

彼女のその表情を見たら、特に何も言う気にはならなかった。

彼女の中で決着が着いたなら。

俺の違和感など、余計なものではないだろう。

帰りも7日間かけて、豪華な馬車でアバロンへと向かう。

景色の流れを眺めながら。

ゆつくりと時間は過ぎていった。

3日目を過ぎたあたりで、エミリーの感傷的な表情も消えて、いつものように会話で

きるようになった。

「……でもエミリー、お前アバロンの家は使えなくなっちゃうんだろ？」

住む所はどうするんだ？」

雑談の1つとして、エミリーに尋ねてみた。

「そうね。」

生活に困らないくらいのお金はあるから、しばらくは宿暮らしになるわ」

エミリーはすまし顔で答える。

「大丈夫か？ 見るからに貴族だから、ぼったくられたりしそうで怖いんだが」

「もう貴族じゃないわ。それに余計なお世話。」

宿の手配くらい、1人で問題ないわよ」

「そうか。まあ無駄遣いはできないわけだし、そんなに高級な宿には泊まらないよな？」

ちなみに、1泊いくらの宿に泊まるつもりなんだ？」

「そ、そうね……金貨1枚くらいかしら」

「はいダウトー。」

エミリーダウトー。

全然相場分かってないじゃねーか。

そんなんじゃないやが金がなくなって、借金のカタに売り飛ばされちゃうぞ」

「うるさいわね。」

そのときは、その相手を空のカナタに吹き飛ばすことにするわ」

エミリーは軽くドヤ顔。

いやいや。

「そうやって、すぐ力に頼るのは良くないと思うぞ」

「すぐじゃないわ。」

最終手段として、いつでも撃てるようにしておく心構えを説いてるのよ。

あなたも私から魔術を教わった身なら、私の意見を尊重しなさい」

なんとという暴論だ。

その理屈だと、俺は何も言えなくなるではないか。

なんだか、こいつを野放しにするのは危険な気がしてきた。

庶民の生活に慣れるまで、少し面倒を見た方がいいかもしれない。

「……しようがないな。」

俺もついていって宿を決めてやるよ」

「……そう。」

まあ、私の役に立とうという、その姿勢は悪くないわ。

ハジメがどうしても言うなら、連れて行ってあげてもいいわよ」

「へいへい。連れて行って下さいまし、エミリー様」

「急に投げやりになるんじゃないわよ」

ゴトゴトと音を立てながら、馬車は進んでいく。

「エミリー、家族ともつと話さなくてもよかったのか？」

お兄さんもお母さんも、心配してたじゃないか」

「発つ前に話はしたわ。」

2人とも、理解してくれた。

……思えば私は、結構甘やかされて育ってきたのかもかもしれないわね。

別れ際、お母様に、いつでも頼ってきなさい、なんて言われてしまったわ。

離れるとなると、やっぱり寂しく感じる。

貴族のしがらみは嫌いだったけど、あの人達のことは好きだった。

……ただ。

誰にでも、別れの時というのはあるものでしょう。

私の場合は、それが少し早くて、唐突だっただけ。

私の人生には、それがどうしても必要だった。

逆らうと痛みがあるからといって、流されるままに生きるのは、もうやめたの」

珍しく、エミリーが自分の内面を語っている。

そういえば彼女から受ける印象が、これまでと少し変わった気がする。

これまでのエミリーは、何をしていたもどこか他人事で。

未来に対する諦念を感じさせる空気を纏っていた。

それがなりを潜め、代わりに澄んだ空のような爽快さを、今の彼女からは感じた。その変化を、好ましく思う。

「まあ、お前が納得できてるならいいんだけどさ」

「なら、問題ないわ」

きっぱりとエミリーが言い、その後はしばらくふたりで外の景色を眺めていた。

外には相変わらず、長閑な風景が広がっている。

風が吹いて、木々をそよがせる。

風が顔を撫でるのが心地良い。

エミリーのツインテールも揺れていた。

なんだか、悪くない気分だ。

何気なくエミリーの方を見ると、目が合った。

俺が目を逸らさずにいると、彼女も見つめ返してくる。

しかし改めて見ると、人形みたいに綺麗な顔だ。

ネコ科の動物のような、クリツとしたつり目に、銀色の長い睫毛が華を添えて。雪のように白い肌は、その美しさを際立たせている。

まだ成長しきっていない蕾だが、いずれ咲くその花は、人々を魅了する大輪となるかもしれない。

「——何よ？　人の顔をじろじろ見て。

気持ち悪いわね」

……思わず見惚れたが、思い出した。

綺麗な花にはトゲがある。

エミリーには毒舌がある。

「世の中、ままならんものよなあ」

「何の話？」

思わず呟いた俺の言葉に、エミリーは不可解そうな顔をしていた。

滞りなく旅は進み、アバロンに到着した。

エミリーは邸宅に戻って荷造りをするという。

引越しのためだろう。

俺はその間に、クリスに事情を話しに行くことにした。

クリスの家を訪ねると、伯母さんが出てきた。

「あらあら、いらつしやいませ。

クリスに用事かしら？

呼んでくるわね」

俺の顔を見るなりそう言うと、伯母さんは家の中にクリスを呼びに行ってくれた。

話が早くて助かる。

俺は一言も発してないのだが。

十数秒の後、クリスが出てきた。

出てくるの早っ。

「どうしたハジメ。

エミリーとの旅は終わったのか？」

そう言いながら、軽く首を傾げるクリス。

久しぶりに見た彼女も、相変わらずの美しさだった。

化粧などはなく、髪も適当に後ろで縛っているだけ。服も部屋着だ。

だというのに、その立ち姿に野暮ったさは全く感じない。

金色の眼差しは今日もまっすぐで、その眼を見ると謎の後ろめたさすら感じてしま  
う。

エミリーが温室の薔薇なら、クリスは野に咲く百合といったところか。

改めて考えると、なんでこんなに綺麗な女の子が俺なんかと関わってくれてるんだろ  
うな。

「――ハジメ？」

惚<sup>ほう</sup>けていたら、呼びかけられてしまった。

「……あ、いや、ちよつとクリスに話があつてな。

今、少しいいか？」

「ああ、構わない。

それなら居間じゃ落ち着かないだろうから、2階の私の部屋に入っていてくれ」

クリスの部屋は、2階の端にある。

机と筆筒とベッドが置かれているだけの、簡素な部屋。

机には小箱がいくつか置いてあるものの、生活感が感じられない。

なんともまあ、クリスの性格を表している部屋だ。

鎧とか剣とかは物置にでも置いているのだろうか。

「入るぞ、ハジメ」

ノックの音がして、クリスが部屋に入ってきた。

手には、ティーカップを2つ乗せたお盆を抱えている。

クリスはそれを机に置き、1つを手にとってベッドに腰かけた。

「どうぞ。安物で悪いが」

残ったカップを手に取り、俺は椅子に座らせてもらう。

「それで、今日はどうしたんだ？ ハジメ。」

「ランクをBに上げるのか？」

クリスが紅茶に口をつけながら尋ねてきた。

俺も飲んでみる。

「……うまい。」

俺は時折カップを口に運びつつ、事情を説明した。

俺の目的については、既に話してある。

今度はエルフの里を目指すという話を、簡潔に伝えた。

「すまんクリス。」

そういうことで、俺はこの街を離れようと思う。

パーティーは解散にしよう。

……今までありがとう。

クリスのおかげで楽しかったよ」

そう言つて、話を締める。

クリスは俺の話にずっと頷いていたが、そこで初めて口を開いた。

「ハジメ」

「ん？」

「……私も、連れて行つてくれないか？」

「え？」

それは予想してなかった。

しかし気持ちはありがたいが、流石にそれはリスクが高いだろう。

「いや、エルフの里つて、確かな場所は分かつてなくて。

危険な道も通るだろうし、たどり着ける保証もないんだ。

途中で死ぬ可能性すらある。

そんな旅に出て、伯母さんはどうするんだ。

ほうつて出て行くのか？

心配だろ？」

止めようとする俺の言葉に。

クリスは微笑んで答えた。

「そんな危険な旅なら、なおさらハジメを一人で行かせるわけにはいかない。

ハジメのおかげで、家族との時間はたくさん過ごせた。

そろそろ私も、独り立ちしていい頃合いだ。

それに、死の危険というなら、普段の狩りにだってそれはあるだろう。

ハジメとの連携は、私が一番うまくやれる自信がある。

それとも私の前衛では、ハジメのお眼鏡に叶わないか？」

一つ一つ、丁寧に反論してくる。

「どうやら彼女は譲る気はないらしい。

「……何でだ？」

俺なんかの訳の分からない旅に付き合うより、アバロンで騎士にでもなった方がいい

じゃないか。

安定してんだろうし、給料も出る。

「……そうじゃないか？」

俺は感じた疑問を口にする。

なおも彼女は、微笑んで答えた。

「確かに、世間一般の見方ではそうかもしれない。

ただ、私にとっては違う。

ここでハジメを一人で行かせて、後に凶報を聞いたりしようものなら。

私はまた、後悔の渦に沈んでしまうだろう。

黙って見送るには、ハジメとの友情は大きすぎる。

私はもう後悔せずに生きると決めたんだ。

そのために、ハジメを一人で行かせるわけにはいかない」

……なんと。

それほどまでにクリスが俺を想ってくれていたとは。

ならば、もう何も言うまい。

俺にとっては、本当にありがたい話だ。

「わかった。

ありがとう、クリス。

なら改めて、こちらから頼ませてくれ。

……一緒に、エルフの里を目指してくれるか？」

「ああ、もちろんだ！」

……これからも、宜しく頼む」

こうして、俺の旅にクリスがついてきてくれることになった。

---

「……おいエミリー、何してるんだ？」

クリスと話した後。

エミリーの家に戻ると、彼女は荷造りをしていた。

「何って、旅の準備よ」

「はい？」

彼女はさも当然といった雰囲気、いそいそとリュックに物を詰めていた。

「どこに行くんだ？」

「エルフの里よ」

「はい？」

彼女はそう言いながら、手を止める気配はない。

「いやいや、お前魔術協会の研究をしたくて、家を飛び出したんだろ？」

それで何で、エルフの里になるんだよ」

「その前に、調べたいことができたの。」

エルフの里に行かないと分からないことなのよ。

ずっと疑問に思ってたことだから、研究を始める前に一度訪ねてみようと思って」

「……いや、唐突過ぎるだろ。」

俺がエルフの里に行くって言った矢先にそれって……」

「うるさいわね。」

あなたがエルフの里なんて言葉を出すから、解決の糸口が閃いたのよ。

たまにはハジメの発言も役に立つことがあるのね。

よくできた偶然だわ」

エミリーは、目を逸らしながらそう言った。

わずかに頬が赤いような気もするが……。

まあ、深くは詮索しないでおくか。

こうなったエミリーに何を言っても無駄だろうし。

……おそらく、彼女もクリスと同様に、俺のことを心配してくれたのだ。

あんなにやりたがってた魔術の研究の前に、俺のために寄り道してくれるほどに。

言い方は相変わらず、素直じゃないが。

そこまで自分に味方してくれる人がいるなんて、以前の世界では考えられなかった。

少し、泣きそうになる。

こんな状況で俺が言うべきことは。

彼女の動機をほじくり返すような言葉じゃないはずだ。

「……今、クリスと話したらな。」

あいつは、俺に付き合ってくれたことになったんだ。

危険な旅になるとは思うが、偶然目的地が同じなら、せつかくだから一緒に来るか？」

エミリーは、顎を上げて上から目線で、いつもの調子でこう返事をした。

「ハジメがどうしてもって言うなら……行つてあげてもいいわよ？」

こうして。

俺達3人は、エルフの里を目指してアバロンを発つことになった。

どんな旅になるのか想像もつかないが、彼女らがいるのなら心強い。

どんな困難でも乗り越えて、きっとエルフの里にたどり着いてやろう。

## エルフの里編

### 出発

ついに、出発の日になった。

俺は今日、アバロンを発つ。

ここは、初めて旅をして、たどり着いた目的地。

冒険者になり、ランクを上げ、キマイラと戦い、魔術を学んだ。

当初の目的は果たせなかったものの、感慨深い。

こっちの世界に来てから。

できる限り、危険は避けてきた。

死にかけたこともあったが、自分から危険に飛び込んだことはなかった。

今回は、目的のためにそれを破る。

今の俺には、中級魔術がある。

だが、いかに強力な魔術を持つと、それだけでは足りない。

それは、既に学んだことだ。

もしも一人だったら。

道中であっけなく死ぬことも、大いにあり得るだろう。

それだけ魔物という存在は危ういし、俺は未熟だし、人の身体は脆い。

……しかし。

俺には、仲間ができた。

以前の世界で望んでやまず、ひたすらに欲して生きて、そしてついに叶えられなかったもの。

その存在を今、確かに感じている。

——ひとりじゃない。

それがどれだけ心強いか。

この旅は、俺のためのもの。

俺の目的を果たすための旅だ。

そんなものに連れて行く二人。

絶対に、無事にここに還す。

旅立つ前。

そんな決意をした。

—————

「変な顔してどうしたのよ、ハジメ。」

もしかして、オークに身体を乗っ取られたの？」

ガタゴトと揺れる馬車の中。

決意を噛み締めていたら、エミリーからいわれのない非難を浴びた。

「オークにそんな能力があるのか？」

「知らないわよ。でもあんまりそっくりだったから、てつきりそうかと思つて」

「人が真面目なことを考えてる顔に、そんな印象受けなくてもらつていいかな」

「そんなの、私に言つてもしょうがないでしょう。」

私は思ったことを素直に口に出してただけだもの」

「……じゃあもう少し気を遣つて発言してくれよ。」

いくら俺でも、顔がオークにそっくりなんて言われたら、傷ついたりもするんだぜ？」

「カメムシの分際で、オークに例えられて怒るなんて、思い上がりも甚だしいわよ」

フンツと鼻を鳴らすと、エミリーはそっぽ向いてしまった。

……どうしよう。

旅に出てわずか数日で、さつそく決意が揺らぎ始めた。

「ハジメは、考え事をしていたんだろう？」

何かいい案でも浮かんだか？」

クリスが、爽やかに会話を繋いでくれる。

「ささくれた心が少し癒された。」

「いや、別に建設的なことを考えてたわけじゃないんだ。

ちよつと気合いを入れてただけ」

エルフの里までの道のりの詳細は、現在では失われてしまっている。

大昔はエルフの里との交易も開かれていたそうだが、1000年ほど前から、エルフ達は歴史の表舞台に出てこなくなってしまった。

なので、過去の僅かな史料をもとにあたりをつけ、とりあえずその辺りを目指すしかないというのが結論だ。

……改めて考えてみると、やばいなこれ。

失敗しそうな匂いしかないぞ。

「やっぱり、何か他に方法があるかな？」

少し自信がなくなつて、2人に聞いてしまった。

「出発前に調べて、話し合つたでしょう。」

これしかないってことになつたんだから、考えたつてしようがないわよ」

エミリーが切つて捨てるように言う。

「私も、思いつかないな。」

エルフのことを知る人間を探す、というのも難しいだろう。

そちらの方が時間がかかってしまいそうだ。

やはり、出たとこ勝負で直接探すのが、一番手っ取り早いんじゃないか？」

クリスもそれに同意した。

まあ二人ともなんとなく、直接的な手段の方が性に合つてそうだ。

「……そうだな。」

よし。このまま、微速前進だ」

行き当たりばったりだが、頑張るしかない。

旅の前から分かつていたことだが、改めて確認した。

馬車は街道をゆつくりと進んでいる。

エルフの里は、アバロンを出て北西の方角。

北方のノーデンス領を越え。

アルバーナを出て、小国を一つ越えた先。

トリアノンという街のそばの、森の中にあるという。

それ以上の詳細は不明。

しかも本当にそこにあるのかも、実際のところ不明だ。

「……しかし、少しずつ寒くなってきたな」

クリスが息を吐きながら言う。

馬車は大陸を北上しており、クリスの言う通り少しずつ気温が下がってきている。

吐く息が白くなるほどではないが、夜は肌寒さを感じるようになってきた。

「北国だからな。文献の通りなら、年中雪が降るらしいぞ」

この世界には季節がない。

つまり、寒い地域は常に寒いということだ。

よくもまあ、そんなところで生活する気になるものだ。

俺だったら絶対、暖かい地域に移住するけどな。

「雪か。私は生まれも育ちもアバロンだからな。」

雪は一度も見たことがない。……楽しみだ！」

クリスが弾むような声で言う。

クリスは旅が始まってから、ずっとこんな感じだ。

どうやら、初めての長旅にテンションが上がっているらしい。

「私も、自然の雪は見たことがないわね。」

魔術で出したことはあるけど」

エミリーもやはり、楽しみなようだ。

表に出してはいないが、言葉の端に、まだ見ぬ雪景色への期待がこもっている。

……ちなみに、俺はといえば。

かつての世界で、雪は何度も見たことがある。

白銀の景色に、美しさを感じはした。

しかし、その頃の俺にとっては。

冬のもたらす寒さの方が、重大な事柄だった。

孤児院では月に一度、段ボールに入った古着が送られてきていた。

ボランティアの人達が、善意で集めて送ってくれているものだ。

しかし、その選択の優先権は、必然的にガキ大将とその取り巻きにある。

いじめられっ子の俺に与えられるのは、誰も選ばなかった余り物だけ。

俺はそれらを精一杯重ね着して、早く冬が過ぎればいと祈っていた。

冬の景色は綺麗だが、それを差し引いて大いに余る辛さをもたらすものだった。

「……俺は、寒いのは嫌だなあ」

そんな言葉が、口をついて出た。

「何を言ってるんだ、ハジメ。」

言い出しつpegがそんなことでどうする。

私は楽しみで、ワクワクが止まらないぞ。

寒さなど、私の情熱でかき消してやろうではないか!」

クリスが鼻息荒く、瞳を輝かせてのたまっている。

元気なのはいいことだが、もうちよつと落ち着いた方がいいんじゃないか?

「情熱もいいけど、ちゃんと寒冷用の装備は整えてきたんだらうな?」

「勿論だ!」

家のタンスをひっくり返して、最も暖かいものを持ってきた!」

……ん?

それ大丈夫か?

アバロンって年中適温だから、家のタンスに入ってる服なんて戦力になりそうにない

けど。

「さらに、行きつけの服屋でいろいろと買い込んできた!」

ぬかりはない!」

ドヤ顔のクリス。

……まあ、それだけ言うなら大丈夫なんだろう。

俺の装備も所詮アバロンの店に入れてきたものだ。

寒冷用の衣服なんて需要がないから、店が全然なくて苦労したが。エミリーは無言で本を読んでいる。

コイツのことだから、準備に手落ちはないのだろう。

外を眺めると、だだっ広い草原だ。

遠くに森が見え、そこには針葉樹系の樹木が目立つ。

寒くなると、植生も変わる。

その森の中に住む魔物達も、寒さに強い奴らが多くなるのだろうか。

そんなことを考えている間にも。

馬車はゆっくりと、目的地へと近づいていった。

## トリアノンへの道中

馬車は北方のノーデンス領を越え。

ついに、アルバーナの国を出た。

国境には関所があったが、概ねすんなりと抜けられた。

冒険者ギルドのバツジが、パスポート代わりとして役立ってくれた。

それから馬車は順調に北上しているが、約1名のみ、問題が発生している。

「……ハ、ハジメ、助けてくれ。

寒くてたまらない。

何だこれは。

これが本当に同じ世界なのか。

寒いというか、もはや痛い。

震えが止まらなくて、剣も握れない。

た、頼む、その首に巻いてる暖かそうな布を私に恵んでくれはしないだろうか？」

馬車が進むにつれて。

予想通り、気温は下がっていった。

旅が始まって20日ほど。

進んだ距離は如何ほどだろうか。

ずつとやせ我慢していたクリスだったが、徐々に増していく寒さに、ついに根をあげた。

「あれ？ 家のタンスから持ってきたから、大丈夫なんじゃなかったっけ？」

薄手のコート一枚のクリスに対して、俺の装備は万端だ。

ローブの上から、魔物の羽毛をふんだんに使用したダウンコートに身を包み、首元、手元もマフラーと手袋でガードしている。

驚いたことに、これらは以前の世界の服よりも暖かい。

技術的には、こちらの世界の方が明らかに劣るはずなのに、なぜなのか。

その理由は、魔物の素材を使用していることにある。

魔物の毛皮は、動物のそれに比べて品質が非常に優れている。

だからこの世界の服飾品は、そのほとんどが魔物の素材でできているのだ。

魔力を宿しており、それによる恩恵が大きいのだという。

確かに着ていると、魔力によって守られている感覚がある。

Cランクの魔物の素材ですらこれだ。

強力な魔物になれば、もっとすごいのだろう。

ギルドに、魔物の討伐依頼が絶えないわけだ。

そんな俺の考察をよそに、クリスは訴える。

「そんな意地悪を言うのはやめてくれ。

ああ、ほら見ろ。

吐く息が白いぞ。

こんなのは見たことがない。

これはもしかしたら、死の徴候なのかもしれない。

例えこの旅で命を失ったとしても悔いはないが、それでもこんな死に方はあんまりだ  
と思わないか？

頼むハジメ。

助けてくれ」

もはや涙声になっていた。

哀れだ。

「……バカね。クリス。

事前の準備が足りないからそんなことになるのよ。

寒さなんて、容易く予測できた事柄でしょう」

エミリーが言う。

彼女は普段のゴスロリの上から、何やら暖かそうなふわふわした白いコートを身に纏っている。

同じ素材の耳当てと手袋をつけて、気づけば優雅に紅茶を飲んでいた。

「エ、エミリー。」

それは紅茶ではないか。

いったいどこから出したんだ。

……いや、そんなことはどうでもいい。

頼む！

その紅茶を、私にも分けてくれ！」

クリスは一縷の希望を見つけたとばかりに、かのカンダダもかくやという顔でエミリーに縋り付く。

その顔を睥睨し、一息吐いた後。

エミリーは、ニヤリと微笑んだ。

「一杯、金貨一枚よ」

「なっ！」

それは高すぎるぞエミリー！」

「私も貴族じゃなくなっちゃったし、これからはお金を稼がないといけないものねえ。

価格とは、需要と供給の均衡で決まるもの。

今この場での紅茶一杯は、金貨一枚に相当する価値があると私は思うのだけれど……  
あら？

納得いかないなら飲まなくても結構よ？」

エミリーはクリスを見つめたまま。

カップにフーフーと息を吹きかけて、再度紅茶に口をつける。

「あちっ」

小声で、しかし確実にクリスに聞こえる音量で呟いた。

その瞬間。

亡者の群れに落とされたかのような絶望が、クリスの全身からほとばしるのが見えた  
気がした。

「あんまりだ！

ううう！

なんでこんなことに！

家族の皆は、このコートさえあればどんな寒さだってへっちゃらだと言っていたのに

！

どんな夜だって、このコートがあれば外に出ても寒くないって言ったのに！

行きつけの服屋でも、太鼓判を押されたのに！」  
馬車内に、クリスの絶叫がこだました。

「……それは、その人達が皆、アルバーナから出たことがないからでしょう？」

相談するなら、相手の背景も考慮しないとダメよ。

善意で発せられた言葉だからといって、正しい保証なんてどこにもないんだから」

エミリーが冷酷に言い放つ。

それを聞いたクリスの顔が歪んだ。

「あああああ！

もうダメだ！

寒い！ 寒い！ 寒い！

このままでは死んでしまう！」

再度、絶叫が響き渡る。

人生を忍耐に捧げて生きてきたような彼女だが。

その忍耐も、初めての寒さの前に、脆くも敗れ去ってしまったようだ。

……しようがない。

俺のマフラーを貸してやろう。

そう思って首からマフラーを外そうとしたとき。

エミリーがため息をついた。

「……………はあ。」

まあ、寒さを知らないあなたが、不十分な装備で旅支度を終えてやってくることも、容易く予測できた事柄ではあったのだけどね」

そう言うのと、エミリーは荷物入れから服を取り出した。

黒のコートだ。

厚手の生地できており、フード付き。

しかしエミリーには、どう見てもサイズオーバーな代物だ。

「エミリー、まさかそれは……………」

「あげるわ。」

大切に使いなさいよ?」

エミリーはコートをクリスに押し付けると、再び紅茶を飲み始めた。

クリスは渡されたコートを持ったまま、呆然と立ち尽くしていた。

「……………エミリー」

「何よ」

「お代は……………」

エミリーが吹き出す。

「いらないわよ！」

もう、バカ。

ちよつとからかったただけじゃない。

凍死する前に早く着なさいよね！」

その言葉を聞いて、クリスはホツとした表情でいそいそとコートに袖を通し始めた。

「ありがとう、エミリー！」

「どういたしまして。」

ほら、鼻水が出てるわよ」

エミリーがポケットからハンカチを取り出して、クリスの顔を拭った。

どっちが年上だかわかりやしないな。

「よかつたな、クリス。」

ほら、俺のマフラーも貸してやるから」

ついでにマフラーをクリスの首にかけてやった。

「ありがとう、ハジメ

ああ、暖かい。

あつたかいよう」

クリスはようやくよく人心地ついたようで、言葉から安堵が滲んでいる。

その様子を見ているエミリーは、心なしか少し頬が緩んで見える。

「それにしても、よく予備のコートなんて持ってきてたな」

「まあ、なんとなくね。」

本命はクリスマスだったけど、あなたも怪しかったから。

ついでに買っていただいたの。サイズも似たようなものだし」

「もし2人とも凍えてたら、どっちに渡したんだ？」

「そんなの、クリスマスに決まってるじゃない」

「そうか。不満はないけど、理由は？」

「寒がるハジメを見て、私が笑うためよ」

「最悪な理由だった！」

エミリーは魔術で再度ポットを温めた後、中身をカップに注いでクリスマスに渡した。

「ごめんねクリスマス。」

出発前に確かめることも考えたんだけど、私も寒さがどんなものなのか体験したことはなかったから、人に指図できるほどの確信は持てなかったのよ。

最悪、装備が足りなくてもトリアノンの街で買い足せばいいかな、とも思ってた」

クリスマスが紅茶をすすりながら答える。

「いや、これは完全に私の落ち度だ。」

エミリーも国を出るのは初めてだろうに、本当に助けられた。ありがとう。

この恩は、いつか必ず返す」

実直なクリスの言葉。

しかしエミリーは、不満そうな顔で答えた。

「……返さなくていいわ。」

私は、クリスが困ったら手を貸すし、私が困ったら手を借りるつもりだもの。

そんなのいちいち数えてたら、バカみたいじゃない。

仲間パーティーって、そういうものでしょう？」

クリスは、少し驚いた顔でエミリーを見る。

エミリーは、頬をほんのり赤くして、顔を背けていた。

……仲間パーティー、か。

俺も、エミリーとクリスのことを、仲間だと思っている。

しかし相手もそう思ってくれていて、それを言葉にされると、思った以上に嬉しく感じる。

「仲間……そうだな、その通りだ。」

すまない、エミリー。

何しろハジメと会うまで、ずっとひとりで生きてきたからな。

パーティーを組んだのなんて初めてなんだ。

何というか……心強いものだな。

改めて言う。ありがとうエミリー。

次は、私がエミリーを助けよう」

「……まあ私も今まで、仲間なんていたことなかったんだけどね」

エミリーは、少しはにかみながら、そう答えた。

……よし。

いい機会かもしれない。

ここはひとつ、俺も決意表明といこう。

うほん。

「俺も、お前らに会うまで、仲間なんていなかった。

俺はずっと、その存在を欲していたんだ。

お前らが一緒に来てくれて、本当にうれしく思ってる。

俺は絶対に、この絆を手放さない。

お前らが危なくなったら、命を懸けて守るよ」

言い出しつぺの責任だ。

この誓いは必ず守ろう。

と思つたら目の前で、クリスが口を尖らせていた。

「足りないぞ。ハジメ」

「へ？」

何が？

「今、私がエミリーに言われたことではないか。

ハジメが守るだけでは足りない。

ハジメが危なくなつたら、私達にもハジメを守らせてくれなければ。

私達は自分の意志で、ハジメに同行しているのだ。

ひとりで責任を負おうとするんじゃない」

「その通りよ、ハジメ。

カメムシの分際で私達を一方的に守ろうなんて、よくもまあそんな発想に至るもの  
わ。

あなたの方が欠点だらけなんだから。

むしろ、欠点ばかりでマトモなところなんて探すのに苦労するくらいなんだから。

大人しく、私達にも守られていなさい」

クリスとエミリーから、総攻撃をくらった。

……そうか。

俺も仲間<sup>パーティー</sup>なんて初めての存在で、まだ距離感がつかめてないのかもしれない。

「そうだな。」

じゃあ俺が危なくなったら助けてくれ。

必ず3人そろって、エルフの里にたどり着くぞ」

クリスとエミリーは、揃って頷いた。

馬車は変わらぬ速さで道を進み。

それから10日程で、俺達はエルフの里の最寄りの街、トリアノンへと辿り着いた。

## トリアノン

トリアノン。

その街は八方を山に囲まれており、街を繋ぐ街道にはトンネルが掘られている。恐らく、土魔術で掘られたものだろう。

組み木や支柱などはなく、のっぺりとした石板でトンネルは構成されていた。

御者は慣れた様子で、トンネルの中へ馬車を導いていく。

トンネルの中は真つ暗。

灯りは馬車に付いているカンテラと、御者が持つランプのみだ。

まさに一寸先は闇。

馬はよく、こんな道を歩いてくれるものだ。

しばらく暗闇の中を進んだ後。

小さく、出口の光が見えてきた。

その光は徐々に大きくなり、そして――。

長いトンネルを抜けると、そこは雪国だった。

そんな一節が頭に浮かんだ。

遠くに街の城壁が見える。

その城壁も、その奥の建物も、それらを囲む山々も。

全てのものが雪を纏い、美しく仕立て上げられていた。

雪化粧とは、よく言ったものだ。

トンネルに入る前は、ぱらつく程度しか雪は降っていなかったというのに。

山一つ越えただけで景色がガラリと変わってしまった。

「おおー、これはすごいなー！」

クリスが馬車から身を乗り出して、白銀の世界を堪能している。

エミリーも目を見開いて、窓にへばりついていた。

「……すごいな」

思わず口からこぼれた。

白い息が漏れる。

「ちよつとだけ馬車を降りて、走ってきてもいいだろうか？」

弾む息を抑えられずに、クリスが言った。

「追いつけるならいいんじゃないか？」

一応、剣だけは持っていけよ」

「よし！ では行ってくる！」

ふおおおお！ 雪だー！ あははははは！」

クリスは馬車を飛び降りて、雪と戯れに走っていった。

……俺も行こうかな。

俺の中の少年が、駆け回りたいと訴えてくる。

いやしかし。

あれは、クリスの体力と速さがあるからできることであつて。

俺がやったら、馬車に置いて行かれてしまう危険性がある。

街まで歩くとなると大幅に時間をロスしてしまうし、ここは馬車で大人しくしていよう。

……なに、街に着いてからはしゃげばいいのだ。

エミリーもウズウズしてる感じがするが、俺と同じ理由で踏みとどまったようだ。

「エミリー」

「何？」

「綺麗だな」

「そうね、綺麗だわ」

エミリーの横顔の奥に、雪景色が見える。

銀色の髪は、真つ白な背景にとてもよく似合っていた。  
しばらくエミリーと、窓の外を眺めて過ごした。

それから小一時間ほどで、街に着いた。

雪が積もらないように、建物全てにとんがった形の屋根が付いている。

街道は、綺麗に雪が除かれていた。

魔術によるものだろうか。

一通りはしゃいだ後、宿を決めた。

まともな宿に泊まれるのは、この街で最後だ。

ここからは、野営しながら森を歩き回ることになる。

馬車も通れないから、荷物も自分達で運ぶしかない。

この寒さでの野営は未体験ゾーンだ。

相当に過酷なものになることが予想される。

アバロンで買った装備では、それに耐えられるか怪しい。

この街に在るだけでも、すでに結構寒いのだ。  
しかし寒さに慣れたこの街なら。

俺達の物よりも、性能のいい防寒具が売っているかもしれない。

そう考えて、皆で街を探索したところ。

そんなものが、殆ど全ての店で売られていた。

このあたりの魔物の毛皮は、耐寒性が非常に高いらしい。

普通に売られている服ですら、アバロンで探しに探したコートよりも暖かい。

そのうえ、されに高級なものとして。

火の性質を持つ魔物の素材を使った服が、ラインナップされていた。

B級の魔物ファイアバードの羽毛や、同じくB級のボルケーノシープの毛皮を使用したもの。

触ってみると、それ一枚で極寒の中でも過ごせそうなほどに暖かかった。

しかし値段も、桁が一つ違う感じだ。

俺は悩んだ結果、普通の装備を買うことにした。

高級品には手を出すお金がなかった。

それに、それらは運動すると逆に暑くなってしまいそうに思ったからだ。

ちよつとさもしい選択だが、財布の中は寒くならず済んだ。

それにクリスとエミリーが、仲睦まじく服を選びあっているのを見てほっこりしたので、心は暖かかった。

買い物を済ませた後は、酒場へと向かった。

街で最も大きな酒場だ。

目的の1つは、エルフの里についての情報収集。

もう1つは、無事にここまで来られたことのお祝いだ。

この辺の地酒を楽しみつつ。

ある程度腹が満たされてから、店員に聞いてみた。

「あの、エルフの里に行きたいんですけど、何か知りませんか？」

その質問に。

「……ああ、たまにいますねえ。」

あなた達のように、エルフの里を訪ねてくる人が」

予想外に、普通に店員は答えた。

「知ってるんですか？」

「いえ、もちろん具体的な場所は知りません。」

ただ、いくつかの本にこの街から西の方に存在するという記載があるようで、皆さん

それを頼りに西に向かっていきますね」  
なるほど。

俺が調べた情報は、世界中の本に書かれているのか。

ならば、冒険者たちがこの街にたくさん来るのも分かる。

だが、今もエルフの里は見つかっていないはずだ。

「その人達は、エルフの里を見つけられなかったんですか？」

そう質問した俺に、店員は首を振る。

「それが不気味なことに、そちらへと向かって、帰ってきた人がいないんですよ。

雪山で遭難してしまっているのか。

魔物にやられてしまっているのか。

エルフの里を訪ねた後に、別の場所へ向かっているのか。

……理由は分かりませんが。

ただ、皆さんエルフの里を見つけることを目的にしてみました。

目的を果たした後、この街に戻らないのは奇妙に感じます。

……ここまで来るのは大変だったでしょうが、もしかすると、エルフの里を訪ねるのは、やめておいた方が賢明なのかもしれませんよ？」

店員の淡々とした言葉。

場の空気が、張り詰めたもの変わる。

店員は必要なことは告げたとばかりに、口をつぐんだ。

……もしかしたら、これまでの旅人に同じ話を何度かしたのかもしれない。

しかし皆、忠告を聞かず目的地へ向かったのだろう。

言っても結果が同じだと諦めていれば、こんな口調になるのも頷ける。

「……どんな人達だったんですか？」

クリスが尋ねた。

「いろんな人がいましたよ。」

人数も性別も、装備もそれぞれで。

10人以上の集団で来た人達もいましたね。

俺達がエルフの里を白日の下に晒してやる。なんて息巻いてましたけど、やはり帰ってはきませんでした」

そう言って、店員はため息をつく。

それに対し、今度はエミリーが質問した。

「でも、昔は、エルフとの間に親交があったんですよね？」

「昔というか、大昔の話ですよ、それは。」

1000年以上も前の話です。

記録は戦火に焼かれて、今ではほとんど残ってませんし。

もはやエルフなんて、本当に存在するのも怪しいですよ」

……まあ、情報が少ないことは分かっていたことだから、それについては特に思うことはない。

しかし。

向かった人が誰も戻ってこないというのは、確かに不気味だ。

この店員の言う通り、エルフの里が見つかったにせよ見つからなかったにせよ、来た道に戻ってきそうなものなのだが。

店員が、チラチラと時計を見ている。

解放しろということだろう。

「ありがとうございます。」

貴重なお話を聞きました」

大銅貨を一枚を渡すと、店員は会釈して仕事に戻っていった。

「どうするのだ？ ハジメ。」

私には、あの店員が嘘を言っているようには見えなかったが」

クリスが言った。

「そうだな。嘘を言うメリットもないだろうし。」

……どうしようか。

確かに不気味な話だ。

慎重に判断する必要があると思うけど」

とは言ったものの、いい考えがあるわけではない。

方法は結局、自分達の足で探すことしか思いつかない。

話し合っても、あまり建設的な意見は出なかった。

「……街で聞き込みをしてみよう。」

何か分かるかもしれないわ」

とりあえず、エミリーのその案を採用することにした。

確かに、あの店員の言ったことをそのまま真に受ける必要はない。

情報源を増やして、得られた情報を照らし合わせてからでも、判断は遅くないだろう。

少し、出鼻をくじかれたような気分で宿へと戻り。

俺は早々に、ベッドに潜った。

先行きに漠然とした不安を感じつつ。

トリアノンでの夜は過ぎていった。

## 冒険開始

……結局。

丸一日情報収集に費やしたが、有益な情報は得られなかった。

確かにあの店員の情報は正しいようだ。

エルフの里を目指して旅立った冒険者は、誰一人この街に帰ってきていない。

旅人を見たことがある者は、皆そう言っていた。

で、どうするか。

確率で考えれば、これまでの冒険者たちと同様に、俺達もこの街に帰ってこられないということになる。

それは困る。

引き返すべきだろうか。

悩む俺を尻目に、クリスとエミリーが強行派で結託し。

ここまで来て、何も得られずに帰るのは嫌だと主張した。

俺が悩んだのは、二人の身の安全を考えてだ。

他ならぬ二人がそう言ってくれるのなら、進むことはやぶさかでない。

慎重に、不測の事態が起こったらすぐに引き返す。

その前提で、探索を行うことに決定した。

その夜、同じ酒場でまた飲んだ。

あの店員に旅立つと告げると、「ああそうですか、お気をつけて」となおざりな言葉を返された。

こいつらもどうせ帰ってこないだろう、と思っているのだろう。

忠告はありがたかったが、なかなか素直に行動には移せないものだ。

翌日。

俺とクリスは鎧を着て。

エミリーは変わらないが、とにかく装備を全て整えて。

トリアノンの街を出た。

「西に向かうといっても、地上に目印は何もない。

日の向きと星の位置だけが頼りだな」

そう言ったのはクリスだ。

クリスは子供の頃から冒険者をしているだけあって、方角について敏感だ。

どんな状況でも、かなり正確な方角を把握できている。魔物の位置も分かるし。

この旅のMVPは、クリスになりそうだ。

森の入り口にやってきた。

森というか、山というか。

なだらかな上り坂に木が鬱蒼と茂っており、それがどこまでも続いている。雪の積もった木々が視界を塞ぐ光景は、目の前にすると圧迫感があった。

こんな所に入るのは、遭難しに行くようなものではないだろうか。

気温は日中でも氷点下だ。

夜はさらに過酷な環境になるだろう。

中には魔物が蠢いているし、挑んだ者は誰も戻って来ていないらしい。

そんなことを考え、脚が重くなるが。

「ハジメ、行くわよ」

「ハジメ、行くぞで」

しかし俺の躊躇を一刀両断するように、2人はずんずん前に進んでいった。

……俺も、腹を括るとしよう。

俺達は雪の降る森の中へと、足を踏み入れた。

森の中をしばらく進んだ後。

最初の目印を作ることにした。

いくらクリスが方向に敏感と言っても、自分達の位置まで分かるわけではない。

木よりも長い棒を土魔術で作り、地面に突き立てる。

これを帰り道の目印にする。

いやいや、そんなもの少し離れたら、木に隠れて見えなくなってしまうではないか。

目印になりようがないだろう。

エミリーにこの案を聞いた時、俺はそう反論した。

その棒が目印としての効力を発揮するとしたら、こちらの視点も遮蔽物よりも高くな  
くはならない。

木の茂る森で、そのようなことができるものか。

しかし、返ってきたエミリーの言葉は罵倒だった。

事実として、それは可能だった。

結果、屈辱にも俺は、エミリーに謝罪の言葉を述べる羽目になった。

直径2メートル、高さ20メートルほどの円柱。

それを土魔術で俺の下に発生させれば、木よりも高いところから周りを見ることができるとだ。

かなり練習したが、俺が安定して作れるのはこのサイズが限界だった。

エミリーはもつと高く作れるが、彼女が毎回作ったら魔力切れを起こしてしまうので、これを作るのは俺の仕事だ。

便宜上、この土の円柱をやぐらと呼称することにした。

森に入って数時間。

約1時間おきに目印を立てつつ、西へと進んだ。

数時間歩いて、最初のやぐらを建てて確認してみたが、行程に問題はない。

やぐらの上からはまだ街が視認でき、そこから現在地への直線上に数本の目印が立っている。

予定通り。

クリスの方向感覚の正確さには、舌を巻くばかりだ。

やぐらには簡易な階段を付けており、降りる時はそれを使って降りる。

「問題なしだ。まだ街も見えないぞ」

下で待っていた二人にそう告げ、再び歩みを進めた。

「クリスのおかげで、魔物に全然出会わないわね」

エミリーがぼつりと呟いた。

「確かにな。」

一家に一台、クリス魔物探知機だ」

「うーむ。」

その呼ばれ方は誉められている気がしないが一応、称賛と受け取っておこう。

……ただ、過信は禁物だ。

私のこの感覚は、絶対というわけではないからな」

クリスが真面目な顔で返事をする。

「今まで、心配を感じられなかった魔物って、いたりするの?」

「いや、それは基本的にない。」

しかし、私が何かに気を取られると、認識が弱くなる。

普通の目と同じようなものだな。

何か景色の一点に着目すると、他のことが目に入らなくなるだろう?」

それと同じことが、私の感覚にも起こりうる。

戦闘中もできるだけ気を配るが、切迫した状況だと取りこぼしが生じるから、2人にも気をつけていて欲しい」

なるほど。

万能と思つて甘えるのは、控えた方がよさそうだ。

「弱そうとか、強そうとかは分かるのか？」

「いや、それは分からない。」

一度出会つて強さを認識したら分かるが。

そうでなければ、分かるのは魔物がそこにいるということだけだ」

言われてみればそうか。

だから昔、クリスはキマイラの危険性を認識できず、結果として両親を殺されてしまったのだ。

少し、配慮に欠けた質問だった。

「……じき、日が暮れるわね。」

そろそろ、今日の夕食を確保した方がいいと思うのだけど、どうかしら？」

少し話題をそらすように、エミリーが言った。

荷物の中に保存食が入っている。

しかしこの旅がどれくらい続くのか分からないから、基本的に食べ物は現地調達が前

提だ。

つまり、その辺の魔物を狩って食べるといふことだ。

荷物は食べ物よりもむしろ、そのための調味料をたくさん持ってきた。

「……そうだな。

クリス、ぼちぼち魔物を狩ることにしよう。

良さそうなのはいるか？」

「ああ、ちょうど一匹、単独行動をしているやつが近くにいる。

ひとまずそいつを狩ってみるとしよう」

方向を転換し、魔物の方へと歩く。

数分で、魔物を視認できる位置にきた。

木々の間を、大きめの猪のような魔物が歩いている。

普通の猪と違う点は、全身が白いことと、牙のおまけに角まで装備していることか。

「ホワイトボアか。

D級の魔物だ。

肉は食用で問題ない、おあつらえむきだな」

2人も知っているだろうが、声に出して情報を共有しておく。

トリアノンの図書館で、この森の魔物については予習を行った。

街の近辺にはC級以下の魔物しかいないらしく、食用の魔物も多い。  
なので旅の序盤は、そう心配することはないだろう。

「私がやるわ」

エミリーが前に出た。

「トルネードはいらないぞ」

「分かってるわよ。うるさいわね。」

……アイスニードル」

ヒュンツと。

エミリーの杖から、一条の氷の矢が放たれた。

木々の隙間を縫って正確に飛び、ホワイトボアの頭部を貫く。

「おお。さすがだな、エミリー」

クリスが感心した声を出した。

「これくらい、魔術師なら誰でもできるわよ」

無理です。

……いや、仕留めること自体は可能だろうが、ピンポイントで頭を貫く精度は持つていない。

やはり、さすがと言うべきだろう。

言わないけどな。

「じゃあ、晩御飯にしましょう」

仕留めたホワイトボアの前でエミリーが言い、俺達は食事の準備に取り掛かった。

## 森の中の冒険①

雪山に入って初めての、夕食の準備にとりかかった。

仕留めたホワイトボアを解体する。

作業はクリスが慣れていて、彼女の役目としている。

ただ、俺も見ながら勉強させてもらう。

割と大変な作業だし、クリスに任せっぱなしではよくないだろう。

基本は、昔仕留めたウサギの時と変わらないようだ。

首から腹へと切れ目を入れて、血抜きをする。

雪や水で腹の中を洗い、内臓を切り捨てた後、皮を剥ぎ、部位ごとに切り分ける。

大雑把に言えば、それだけだ。

見ている、あまり忌避感はなかった。

ウサギの時に慣れたのか。

クリスの作業が、的確で素早かったからかもしれない。

彼女は服も一切汚さずに作業を終え、道具を洗っている。

上手な外科手術を見るのはこんな感じなのだろうか、と益体もないことを考えた。

クリスの解体を見学しつつ、俺は料理と食事の準備を済ませておく。

土魔術でテーブルと椅子を作り、テーブルの上に持参したカップと皿を置く。

カップも皿も、割れない金属製のものだ。

アルミのような材質で、金属の割には軽い優れもの。

値段は高かったが、長旅には重宝する。

さらに、テーブルの近くに木の枝を組んで、火魔術で焚き火を作る。

着火剤など必要ない。

ひたすらファイアで焼き続ければ、そのうち火は付く簡単なお仕事だ。

魔術でカップに水を注ぎ、準備は完了。

しかし一つ、問題があった。

パーティーの中に誰一人、料理をできる者はいなかったのだ。

しかたがないので、とりあえず今日は俺が作ってみることにした。

エミリーが採ってきた山菜を洗って鍋に入れ、調味料と水を入れて煮込む。

猪肉は塩胡椒をまぶした後、串に刺して焚き火で炙った。

それぞれ少しずつ味を調整した後、スープを深皿に注ぎ、肉を切り分けて皿に盛り付

ける。

簡単だが、まあこんなもんだらう。

テーブルには既にクリスとエミリーが着席していた。

2人とも、片手にフォークを握りしめている。

どうやら腹ペコらしい。

「はい。今日の夕食はホワイトボアのステーキと山菜のスープだ。

ボアの肉はたくさんあるから、おかわりが必要なら教えてくれ」

「いただきます」

2人が声を揃えて食事の前の挨拶をし、料理を食べ始めた。

俺も肉を食べてみる。

めちゃくちゃ美味しい。

ホワイトボアは、トリアノンの街でもメインの食肉として流通しているくらい、肉の質は高いのだ。

ただ焼いただけで、普通においしく頂けた。

「これは美味しいな。

ハジメ、おかわりを頼む」

「あいよ」

旅で分かったが、クリスはよく食べる。

男の俺よりも食べる量が多い。

塩胡椒をまぶした肉の塊から切り分けて、焚き火で焼いてクリスの皿に乗せた。

「肉については、今日獲れた分を凍らせて運べば、あと3、4日は持ちそうだな。」

森に入る前は不安だったけど、今のところはとりあえず順調ってところでいいか？

もし何か提案とかあったら、遠慮なく言ってくれ」

初日が終わりに近づいたこともあり、2人にこれまでの状況を確認してみる。

「そうねえ。」

今のところは別に。

寒さも装備のおかげでそれほど辛くはないし。

クリスがいれば魔物に全然襲われないし。

食料も困らなそうだし。

多少栄養は偏るかもしれないけど、しばらく旅をするくらいなら病気にかかったりはしないでしょう。

とりあえず、目立った問題はないと思うわ。

あとは夜を越すのが課題かしらね」

エミリーは特に意見なし。

「そうだな。」

私もエミリーとほぼ同意見だ。

もう少し進んで、魔物の生息域が変わったりすれば警戒する必要があるが。今のところは、心配ないように思う。

あとは……そうだな。

そういえば、やぐらで確認する時は全員で登った方がいいんじゃないか？

私も進む方向の目安がたてやすいし、一人よりも三人の方が、気づくことも多いだろう」

クリスの意見。

言われてみればその通りだ。

俺ひとりでやぐらに登っていたが、普通に考えて全員が景色を共有した方がいい。

特に、進む方向を決めているクリスにとっては、とても重要な情報だろう。

「確かにその通りだな。

明日からは全員で登ることにするか」

今までそうしなかったのは、俺の土魔術に人を乗せることが不安だったからだ。

しかし、今日一日でかなり慣れた。

三人で乗っても大丈夫だろう。

「本格的に日が暮れてきたわね。

今日はこの辺りで休みましようか」

エミリーが、周囲を見回しながら言った。

気づけば、辺りはかなり暗くなっていた。

あと30分もすれば、完全に日が暮れてしまいうだろう。

「ホントだな。野営の準備をしないと」

「ハジメが任せろと言っていたから、野営の装備は何も持ってきてないが、本当に大丈夫なのか？」

「ああ、任せとけ。」

こっちの方が、やぐらより簡単だ」

クリスの質問に、俺は自信満々に答えた。

食器を洗って片付けた後。

適当な場所に向けて、杖をかざす。

淡い光が辺りを覆った後。

硬い土が地面からせり上がり、俺のイメージを現実に取り上げていった。

イメージは、広さ10畳ほどの小屋。

どちらかと言えば箱に近いが。

それを2つ、数秒で完成させた。

「今日はここで寝ることにしよう。」

……ついでに風呂も作っとくか」

目の前に土魔術で穴を掘り、石板で固め、中に水魔術でお湯を流し込んだ。

その周りに、2つの小屋と同様に壁と屋根を作り、簡易の風呂を完成させる。

「体を洗う間は無防備になるから、風呂は一人ずつにしよう。」

入るのはクリスからにするか。

魔術がないと、お湯を温め直せないから」

振り返ると、クリスが固まっていた。

驚いた顔でこちらを見ている。

「いや、その、ハジメ。」

改めて見るとすごいな。ハジメの魔術は。

昼もやぐらをいくつも作っていたし……それだけの魔術を使って、魔力は大丈夫なのか?」

「ああ、全然問題ない。」

前に説明しただろ?

俺は魔力切れを起こしたことがないんだよ。

どれだけ使ったら魔力がなくなるのか、俺にも分からないくらいだ。

「少なくともこれくらいのことなら、あと10回繰り返しても無くなりはない」  
「そ、そうか。」

まあ、頼もしい限りだ」

クリスは出来上がった建物を見ながら、へえー、と少し間の抜けた声を出していた。  
「完全に暗くなると煩わしいから、手早く済ませましょう。」

小屋に荷物を置いて、クリスからお風呂に入って」

「そうだな、すまない。」

では先に入らせてもらおう。

……まさか、旅路で風呂に入れるとは思わなかった」

クリスはいそいそと小屋へと歩き、嬉しそうな顔で風呂へ向かっていった。

その後。

エミリー、俺の順で風呂に入ったら、辺りは真っ暗になってしまった。

小屋に入って横になる。

寝袋はないから、床に雑魚寝だ。

底冷えするような寒さだが、魔物の素材を使った毛布は暖かく、問題なく眠れそうだ。

魔術の灯りを消すと、完全な闇が訪れた。

ひとまず、ここまでは順調と言っていいたいだろう。

さしたる問題は起こってない。

夜に魔物に襲われる不安はあるが、接近してきた魔物の気配は俺にも分かるし、クリスレーダーは夜も作動している。

大丈夫だろう。

闇の中で思案していると。

睡魔がやってきて、いつのまにか眠りに落ちていた。

## 森の中の冒険②

朝。

小屋を出ると、すでにクリスが朝食を作っていた。

「ハジメ、おはよう」

「ああ、おはよう。早いな、クリス。」

「何を作ってるんだ？」

「朝日で目が覚めてな。」

外に出ると羽ウサギがいたから、捕まえて焼いているところだ」

クリスの背後で煙がもくもくと上がっており、その下でウサギらしき肉が焼かれていた。

「仕事が早くて助かるよ。」

でももつと休んでいいんだぞ。

旅の間、ずっと魔物の気配を探ってもらってるんだ。

「疲れるだろ？」

「いや、それほどではない。」

慣れてるし、もう感覚の一部のようなものだからな。

疲労はハジメ達と変わらないだろう。

むしろ、あれだけ魔術を使ったハジメの方が疲れているんじゃないか？」

「いや、俺も大丈夫だ。」

じゃあ、お互い問題ないってことだな。

……エミリーは？」

「私が起きた時には寝ていたし、料理をしている間も出てきてはいないようだ。

まだ寝てるんじゃないか？」

案外、一番疲れているのはエミリーかもしれないな。

ついこの間まで魔物を見たこともない貴族の令嬢だったんだ。

初めての旅がこの旅では、ハード過ぎるというものだ。

ゆっくり寝かせてやろう。

クリスがウサギの肉に調味料をかけ、炎が一段強くなった。

ジュウツツとい音にする。

その音を尻目に魔術でテーブルを作ったあと、荷物から皿とコップを取り出して並べた。

コップには水をいれる。

——さて、今日も1日が始まる。

食事の用意が完了してから、エミリーはそのそと起きてきた。険は少し腫れぼったく、無防備な顔をしている。

ふとサンドラ村のニーナを思い出し、懐かしい気持ちになった。

「おはよう、エミリー」

「ええ、おはよう。」

……その、悪かったわね。食事の準備をさせてしまつて」

「謝る必要はねーよ。」

食事はほとんどクリスが準備したし、クリスにしたつてできたからやっただけだろ。

お前が言つたんじゃないか。貸しとか借りとか、そんなものはつまらないって。

お前が無理に早起きして、疲れがたまつたんじゃ意味ないだろ。

「ごめんなさいより、ありがとうだ」

「そうだったわね。」

……ハジメに諭されるなんて、私も堕ちたものね」

「その一言は謝つてもらつてもいいぞ?」

エミリーは俺の言葉を無視して回れ右し。

「顔を洗ってくるわ」と言って、風呂の方に歩いていった。その後皆で羽ウサギの丸焼きを食べ、準備を整えて出発した。食事の中で、エミリーはクリスマスに感謝の言葉を述べていた。

旅は、順調に進んだ。

1時間おきに目印をたて、5時間おきにやぐらを作って確認する。

すでに街は見えなくなったが、目印は一直線に連なつて、帰り道を示している。

目印は着実に、西へと延びていく。

……道中、色々なことが起こつた。

雪が強く降る時は、やぐらに登つても目印が見えなくなつてしまうので、動かずに休んだ。

途中でエミリーが熱を出し、3日間看病した。

クリスが探知し損なつた魔物が襲つてきて、エミリーが魔術で仕留めたこともあつた。

俺が誤つて毒キノコを料理に入れてしまい、皆の舌が痺れたこともあつた。

起こった時は不安になるが、過ぎてしまえば大したことではなかったようにも感じる。

雪はいずれ止んだし、

エミリーは元気になったし、

魔物は食料にできたし、

舌の痺れは治癒魔術で回復した。

エミリーとクリスに対しても、さらに友情を深めることができた。

彼女達同士も、まるで昔からの親友だったかのように会話するようになった。

——気づけば、トリアノンの街を出て1ヶ月が過ぎようとしていた。

「しかし、いっつも同じ景色で飽きてくるわね」

森を歩いていると、珍しくエミリーが愚痴をこぼした。

確かに、景色はずっと変わり映えのない森の中だ。

同じ場所を通っていないはずだが、昨日と何が違うか聞かれても答えられはしない。

「確かに、どうしたって飽きてくるよな」

俺もつい愚痴っぽくなってしまおう。

本当に、エルフの里なんてあるのだろうか。

いくつかの文献に載ってはいたものの、それはあくまで、かつて存在したという記録でしかない。

今もなお存在し続けているという保証は、どこにもないのだ。

しかしまあ、そんなことは分かりきっていたことだ。

それでも、エルフの里があると信じて探すことに決めたのだ。

その信念に沿った行動を、変えるつもりはない。

俺やエミリーの心に湧いてでたのは、行動を変えるつもりもない、現状への不満。

つまり愚痴だ。

「初めてだな、2人がそんなことを言うのは。

気持ち分かる。

分かるが、しかし私は旅が始まってからというもの、楽しくて仕方ないぞ。

2人がいつもそばにいてくれるからな。

それだけで私にとっては、この旅が充分に価値のあるものになる。

一生このままでもいいくらいだ」

クリスが笑いながら言った。

俺は一生このままは嫌だ、と思いつつも、その前向きさに励まされてしまう。俺のための旅だというのに、情けない限りだ。

エミリーを見ると、彼女は目を細め、頬を少し緩めた顔でクリスを見ていた。まるで、友人の美点を改めて発見した女の子のような顔だ。

雪を投げつけてみた。

雪玉は綺麗な放物線を描き、エミリーの頭に命中した。

雪を払いながら、エミリーが振り返る。

「死にたいのかしら？ ハジメ」

その顔はまるで、屠殺される寸前の豚を見る業者の人のような顔だった。

「すみませんでした。死にたくないです」

「なんのつもりかしら？」

「いや、この旅で得られた信頼を確かめようかなと思って」

「ほう。どうなると思ったの？」

『ハジメったら、そんなやんちゃな一面もあるのね』って、笑ってもらえるかなって」

「なるほどね。それで、言い残すことはある？」

「サンドラ村の家族に、ハジメは勇敢に散ったと伝えて欲しい」

「わかったわ」

エミリーがそう発した瞬間、俺の周りに無数の雪玉が出現し、俺の顔面を目掛けて次々に飛んできた。

なんと高度な無詠唱魔術だ。

「うげげげげげげげ！」

無表情で俺の顔面に数百発の雪玉を撃ち抜いた後。

フンツと鼻を鳴らして、エミリーは進み始めた。

俺は腫れあがった顔に治癒魔術をかけ、無言で後を追った。

……死ぬかと思った。

ここまでの道程は、全く問題なかった。

エミリーや俺の愚痴も、こんな悪ふざけも。

安全を確保した上で、余力があつたから生まれたものだ。

しかし、もしかしたら。

そのようなものを、油断と呼ぶのかもしれない。

## 森の中の冒険③

それは、唐突に訪れた。

いつものように、目印を置きながら歩いていると。

先頭のクリスが立ち止まった。

「どうした?」

クリスに聞くが、返事はない。

だがその表情は、明らかに様子がおかしかった。

せわしなく周囲の様子を伺っている。

「どうしたの?」

エミリーも不審に思ったらしい。

「……これまで感じたことがない気配がする。

少しずつ、こちらに近づいてきている。

なんだか分からないが、よくないもののような気がする」

ようやくクリスが口を開いた。

「つまり、新手の魔物ってことか?」

「そうだと思うんだが、なんだか不気味だ。

普通の魔物とは違う。

「こんな気配は初めてだ」

戸惑った表情のクリス。

俺も、こんなクリスを見るのは初めてだ。

「俺たちはどうしたらいい？」

「……そうだな、とりあえず気配の方向と逆に移動してみることを提案したい。

近づくのは、危険だと思う」

「わかった。そうしよう」

クリスの言葉に従い、進む方向を変えることにした。

彼女の背中を見ながら、早足でひたすら歩く。

時々クリスは後ろを振り返った。

その表情から察するに、危険は去っていないようだ。

しかし一体、何がいるというのだろうか。

普通に考えたら魔物だろうが、クリスの様子は尋常ではない。

あのキマイラに対しても、幼き日のクリスは普通の魔物だと思って近づいたという。

ということは、原因は魔物の強さというわけではないだろう。

正体不明な存在が近くにいます。

その不気味さに脳内警報が鳴り響き、歩くのが速くなる。

このまま振り切りたい。

やがて、少し開けた場所に出た。

そばに川が流れており、上流には滝がある。

クリスは立ち止まり、こちらを振り返って言った。

「……ダメだ。」

どうやら、私達を狙っているらしい。

少しずつ、距離が詰まってきた。

遠ざかってやり過ぎることは、できそうにないらしい。

ということはつまり、覚悟を決めるしかないということだ。

正体不明の敵と、相対する覚悟を。

「ここで迎え撃とうというわけね？」

「ああ。視界を遮るものではない方がいいと思って、開けた場所を探してみた」

「悪くない環境だと思うわ」

エミリーが荷物を置き、ヒュンツと杖を振る。

彼女はとつとつにやる気のように。

「……やるしかないか」

俺も荷物を放り出し、杖を構える。

「接敵までもう少し時間はある。

できるだけ有利な位置で迎え撃とう」

クリスの言葉に従い、位置取りを決める。

前衛はクリス、俺とエミリーは後衛。

俺を背後にして、森からは出来るだけ離れた位置で待機する。

俺の落ちる音だけが、辺りに響く。

クリスの後ろ姿は微動だにせず、状況の変化に対して備えている。

エミリーの表情は、いつになく不安げに見える。

俺はエミリーに何か声を掛けようと思ったが。

「——来るぞー！」

クリスの叫びによって、行動はかき消された。

彼女が見つめる一点を、俺とエミリーも凝視する。

木々の暗がりから。

何者かが、ゆっくりと現れた。

そいつは、2本の脚で立っていた。

腕も2本で、頭は1つ。

人間に近い形だが、決定的に違う点が3つ。

1つ目は、肌が鱗に覆われていること。

2つ目は、同じく鱗に覆われた、翼があること。

3つ目は、頭に、角が生えていること。

……何だこいつは？

魔物というには、ヒトに近すぎる。

ヒトというには、魔物に近すぎる。

「何者だー！」

クリスが叫ぶ。

しかしその声を意に介さず、そいつはこちらへ近づいてくる。

「止まれ！」

それ以上近づけば、斬る！」

クリスが再度叫ぶ。

無視して近づいてくるかと思ったが、そいつはピタリと動きを止めた。

どうやら、言葉が通じるようだ。

クリスまでの距離は10メートルといったところか。

「貴様は何者だ！」

なぜ、私達に近づく!?!」

その言葉聞いて。

そいつはゆつくりと表情を変える。

血走った赤い眼を細め、鋭い牙の覗く口角を持ち上げた。

つまり——笑った。

「ナゼ近ツク?」

さらに。

言葉を発した。

まるで金属の弦をノコギリで奏でるかのような。

思わず耳を塞ぎたくなるような音。

「クツクツクツ」。

……マサカソソナコトヲ尋ネラレルトハナ。

人間トハ、ナント愚カキノダ。

ソソナコトハ、ハルカ昔カラ、決マリキツテイルトイウノニ」

……遙か昔から?

……どういふ事だ?

警戒する俺達に向かって、そいつはさらに続ける。

「——貴様ヲ人間ヲ、殺スタメダ。」

殺スタメニハ、近ヅカネバナルマイ？」

戦慄した。

その言葉を構成する全ての要素が、俺達とは相容れないことを物語っていた。そこで初めて。

俺は目の前の存在が何者なのか、思い当たった。

——魔族だ。

はるか昔からヒトと争い、殺し合ってきた存在。

本で読んだことしかないが、なぜだか確信を持てる。

こいつは、これまでに出会った全ての生き物と、明らかに違う。

殺さなければ、殺される。

俺の中の生存本能が、そう訴えかけてくる。

「エミリー、クリス！」

こいつは敵だ！ やるしかない！」

叫び、杖に魔力を集める。

「フハハハハハ！」

ソウデナクテハ、興ガ乗ラントイウモノダ。  
セイゼイアガクガイイ、脆弱ナ人間ドモヨ！  
戦いが、始まった。

## 森の中の冒険④

魔族は、クリスに向かって駆けた。

10メートルの間合いが数歩で失われ、その勢いのままに爪が振るわれる。

その先端はもはや、俺の眼には見えない速度に達していた。

ゴオン！ と鈍い音がして、クリスが吹っ飛ぶ。

なんとか盾で防いでいたが、受け身を取るのがやつとの状態。

対する魔族は態勢を崩しておらず、追撃のために膝を曲げる。

「エアスラツシュ！」

「ファイアランス！」

俺とエミリーが、同時に叫んだ。

風の刃と炎の槍が、魔族に向かって飛んでいく。

「ハッ！ 下ラヌ！」

魔族の両腕の鱗が籠手のような形に変化した。

右腕でエアスラツシュを、左腕でファイアランスを弾く。

弾かれた魔術は、魔族の後ろの木々を切り倒し、炎を上げた。

「そんなことできんの?」

「次っ! 撃つわよ!」

エミリーに急かされ、再度魔術を放つ。

しかしいずれも弾かれ、魔族はノーダメージだ。

しかしその間にクリスが態勢を立て直し、魔族に向かって切りかかる。

申し分ない速度と威力。

これまで幾度も魔物を屠ってきた、クリスの剣技。

しかし。

大上段から放たれたその一撃を、魔族は両腕を交差して防いだ。

ギイン! と鋭い音がして、剣が中空で動きを止める。

まずい——剣を折られる!

俺が懸念した通りに、交差した腕がさらに閉じ、剣の横腹に力が加わった刹那。

クリスの蹴りが、魔族の顔を捉えた。

魔族は1歩後退し、反動を利用してクリスは剣を引き抜く。

そのままバク宙をきめて、間合いをあげ。

クリスは再度、構えの態勢をとった。

蹴りを食らった魔族は、コキリと首を鳴らし、笑った。

「フハハハハハ！」

ヒトノ分際デ、ナカナカヤルデハナイカ！

ドウヤラコレマデノヤツラトハ、一味違ウヨウダナ！」

耳を塞ぎたくなるような、邪悪な笑い声。

森全体が、ザワザワと身震いしているような気さえする。

だが、それよりも。

「……これまでをやつらつて、どういうことだ？」

まさか、冒険者が誰も帰ってこなかったのは……。

「ハッ！」

貴様ラノヨウナ、森ニ入ル愚カ者ドモヲ、俺ハ残ラズ食イ尽クシテキタ。

ソレダケノコトダ。

貴様ラデ何人目カ、モハヤ分カリハセンガナ」

腑に落ちた自分が嫌だった。

誰も帰ってこなかったのは、こいつが原因だった。

数々の冒険者達が、目の前のこいつに殺されたのだ。

俺達と同じように、森の中を探索していたパーティーが。

こいつにとっては、何度も繰り返してきた、お馴染みの出来事なのだろう。

俺達がその列に加わることを、信じて疑っていない。  
そうだったら、どうなる？

反射的に頭に浮かんだのは、クリスとエミリーの無残な亡骸。  
それらを弄び、四肢を切断して食す魔族。

2人の温かさ、美しさ、人間性、その他全てが失われ。

倒れ伏す2人の虚ろな瞳が、俺に無念を訴えてくる。

——想像するだけで、吐き気がする。

「あああああー！」

激情に任せて、無詠唱魔術を連射した。

炎、氷、風、岩。

幾つもの弾丸が、魔族へと向かって飛んでいく。

しかしその全てが、避けられるか弾かれるかのどちらかに終わった。

「終ワリカ？ 下ラヌ」

奴は息ひとつ乱していない。

それどころか余裕のつもりか、その場から一步も動いていない。

クソッ！

……って、あれ？

「又?」

氣付けば、クリスがすぐ傍にいた。

「走れ! ハジメ!」

クリスに手を引かれ、訳も分からぬまま走り出す。

奴とは反対方向へ。

そして視線の先で、エミリーが杖を構えていた。

「求むるは力。

古より続く盟約を今果たせ。

——インフェルノ!」

森の中に、その声は凜と響いた。

同時に、エミリーの杖から紅く光る火球が飛ぶ。

それは着弾と同時に周囲の雪を蒸発させ。

木々を炭に変え、地面を溶解した。

そして瞬く間に、その範囲を広げ。

ありとあらゆるものを焼き尽くしていく。

クリスに引つ張られながら、俺は炎に巻かれるギリギリのところを走り抜けた。

激しい熱風が背中に浴びせられる。

蒸発した雪で景色が霞む中。

エミリーと合流し、その場から離れた。

「……はあつ、はあつ、はあつ」

息が乱れる。

なんとか炎の効果範囲から離脱し、立ち止まった。

「ナイス、エミリー」

隣で同じく息を切らしているエミリーに声をかける。

「あれだけの規模だ。避けられたとは思えない……よな？」

「そう、願いたいけど。」

「……どうなの、クリス？」

その言葉を受けてクリスを見ると。

眉間に皺を寄せ、苦々しい顔をしていた。

——ああ。

その顔が結果を如実に表してしまっている。

「……残念ながら、ダメだったようだ。

やつの気配は消えていない。

炎を迂回して、こちらに向かってきている」

「そう……」

エミリーが、明らかに落胆した声を出した。

ここまで分かりやすい感情表現は、彼女には珍しい。

とはいえ俺も、かつてないほど落胆した。

——恐ろしい。

死が、目前に迫っているのを感じる。

自分の命だけならまだいい。

何より恐ろしいのは、彼女達を失ってしまうことだ。

俺が望んだこの旅で。

こんな訳の分からない場所で。

無残にも、彼女達の命を奪ってしまふ。

それだけは、何を犠牲にしても、避けたい。

行きがけに、危険は共有すると決めた。

しかし俺には、どうしても無理なようだ。

彼女達の命と、俺の命。

天秤にかけたらどちらに傾くかなんて、決まりきっている。

「どうする？」

時間はあまりない。

やつは着実に近づいてきている」

クリスが、焦りをはらんだ声で言った。

「俺に考えがある。」

クリス、やつの位置を教えてください」

「……………どうする気だ？」

不安げな顔のクリス。

「俺達はやつ場所を把握できて。」

そして恐らく俺達だけが、遠距離攻撃の手段を持つてる。

なら、やることは1つだろ？

……………やつが近づくと前に、魔術をしこたまぶち込んでやる」

「……………なるほど。」

その案でいこう。

やつは向こうの方向からまっすぐやってきている。

「ここまで来るのに、1分はかかるだろう」

「了解。ちようどいい位置に来たら合図を頼む。」

2人は巻き添え喰らわないように、ちよつと後ろで待機しててくれ」

エミリーとクリスが、俺の後方に移動する。

「ハジメ、あと30秒ほどだ」

「方向は？」

「変わない」

「よし」

クリスが指さす方向へ、杖を構える。

「あと10秒」

意識を集中し、術式を作り上げる。

クリスが不気味な存在だと言った時点で、最初からこうすべきだった。

「3、2、1、今だ！」

「フレイムピラー」

かつて、学院の演習場で起こした火の柱。

俺の魔術はエミリーのものとは比べれば威力は劣るだろうが、効果範囲に関してはこちらが上だ。

そして――。

「フレイムピラー

フレイムピラー

フレイムピラー

フレイムピラー

フレイムピラー

……」

エミリーと違って、俺は1発だけじゃない。

闇雲に。

めくら滅法に。

やつの想定位置の前後左右にずらしながら、とにかく連射する。

目の前はすでに、炎しか見えない。

だが、とにかく撃ち続ける。

クリスの感覚が確かなら、これに被弾しないはずがない。

「――ダメだ！ 来る！」

クリスの叫び声。

聞こえたと同時に、炎の中から現れた存在を認識した。

炎に照らされた黒い影が、すさまじい速度で迫ってくる。

「ハジメ！」

エミリーとクリスが同時に叫んだ。

影はエミリーが放った風魔術を躲し、俺に肉薄する。

ゴオン！ と、衝撃音が響いた。

間一髪で、クリスが盾で受け止めてくれていた。

影は動きを止め、その姿が露わになる。

翼は焼け落ち、骨が露出していた。

全身の鱗は至る所が溶け落ちて、皮膚はただれ、その奥の組織を晒している。

—— 変わり果てた魔族の姿が、そこにはあった。

それを成したのは俺の魔術か、エミリーの魔術か。

少なくともどちらかは、功を奏したようだ。

「許サン」

クリスが俺を突き飛ばし、魔族と対峙する。

「許サンゾー！ 貴様ラー！」

一匹ズツ、八ツ裂キニシテクレル！」

その咆哮には、すさまじい憎しみが宿っていた。

鼓膜がおかしくなりそうな声。

満身創痍の姿だというのに、先ほどよりも遥かに威圧感が増している。しかし敵のそんな姿に、一切の動揺を見せることなく。

クリスは魔族と斬り結ぶ。

洗練された舞のような、美しい剣筋、立ち回り。

魔族の絶大な臂力を、巧みに躲し、逸らし、攻撃に転じる。

その姿は、かつてキマイラと戦った時と重なって見えた。

いつだってクリスは、強大な敵に怯まず、まっすぐに立ち向かっていく。

だが、魔族の攻撃は、先ほどよりも遥かに鋭くなっていた。

さつきまでは余裕を残していたのか。

それとも火事場の馬鹿力というものなのか。

即死級の一撃が次々と繰り出され、クリスを襲う。

状況は、クリスがやや押されているように見える。

俺とエミリーも魔術で援護するが、劣勢を五分にするのがせいぜいだ。

——このままではまずい。

状況を打開する策を頭に巡らせ始めた時。

状況が転じた。

悪い方に。

魔族の蹴りを、クリスが避けた後だった。

かがんだ態勢のクリスは、伸び上がる力を利用して反撃に転じる途中。

本来であれば、何でもない動作。

鍛え上げた下半身は、クリスの命令を忠実に実行するはずだった。

しかし、1ヶ月を森の中で過ごし、魔物と戦い、俺とエミリーを引っ張って全力で走つた末の、魔族との立ち合い。

その両脚には、確実に疲労が蓄積していた。

無意識にそれを補おうとした結果、クリスは地面の摩擦を過信してしまい。

炎で雪が融け、ぬかるんだ地面は、その跳躍を支えきれず。

——クリスの脚は、滑った。

逆袈裟に放たれるはずだった太刀筋は、方向が大きく逸れ。

魔族はわずかに身体を傾けるだけで、それを躲すことが可能になり。

態勢を崩したクリスは、次の一撃を避ける事はできなかつた。

「——クリス!!」

クリスはそれでもなんとか、ギリギリで盾を滑り込ませた。

しかしこれまでは必ず、斜めに逸らすように防いでいたその攻撃。

初めて、真正面から打撃を受けた。

盾はその衝撃に耐えきれず砕け、クリスは後方に吹き飛ばされる。

「がふっ！」

クリスの口から、血しぶきが飛んだ。

まずい。

食道か肺か、とにかく内臓が損傷している。

治癒をかけなければ。

しかし俺のその思考は、すぐに断ち切られた。

魔族は踵を返し、凄まじい速度でこちらへと向かってきた。

「エアスラッシュュー！」

「ファイアボール！」

すかさずエミリーと魔術で迎撃する。

しかし。

魔族は速度を落とすことなく、それらを躲し。

瞬く間に、俺達に肉薄した。

「死ネ」

ささやくような音量だった。

魔族が、エミリーに向かって爪を振り下ろす。

エミリーは顔をこわばらせ、手を突き出すことしかできない。

そのはかない防衛は、簡単に破壊されてしまうだろう。

一瞬のうちに訪れるであろう光景を想像し、絶望が心に忍び寄る。

——絶対。

絶対を守ると決めたんだ。

旅立つ前に。

こいつらが一緒に来てくれると言ってくれた日に。

タナカ ハジメ。

お前は口だけヤローの大？吐きか。

守ると決めた存在を誰一人守れずに、ここで見殺しにするのか。

今しかないんだ。

まだ失われていない、今動くしかないんだ。

エミリーを守れ。

やつを倒せ。

「——つおおおお！」

必死で手を伸ばす。

その願いが通じたのか。

魔族の爪が、エミリーに届くその刹那。

俺の手は、エミリーの肩に触れた。

その死をもたらず軌道から、彼女の身体をずらすことに成功した。

……しかし。

当然ながら、その代償に。

——俺の両腕は、宙を舞う。

「ハッ。貴様カラ死ニタイナラ、望ミ通りニシテヤロウ」

酷薄な声が聞こえ。

そして、爪が振るわれた。

横なぎの一閃。

どうあがいても、それよりも速く身体は動かせず——。

一瞬で。

俺の上半身と下半身は、切り離された。

血しぶきが舞うのが見える。

赤い水滴の一粒一粒が、鮮明に目に焼き付く。

エミリーの茫然とした顔。

勝利を確信したであろう魔族の嗤笑。

倒れていく下半身。

それらがゆっくりと、回転しながら視界に映る。

回転しているのは、俺の上半身が空中で回ってるせいだろう。

不思議と痛みは感じない。

そしてまだ、意識がある。

——孤児院。

——学校。

——サッカーボール。

——ニーナ、シータ。

——ユリヤン。

——キマイラ退治。

——魔術学院。

過去の記憶の断片が、フラッシュユバックする。

それらはとても、ゆっくりと思い出された。

不思議だ。

こんな時間などないはずなのに。

まだ、意識がある。

しかし循環血液量はあつという間に足りなくなつて、すぐに俺は死ぬのだろう。だが、不思議なことに、まだ。

まだ、生きている。

——それならまだ、できることがあるはずだ。

こんなタイミングで気付いた。  
いや。

こんなタイミングだから、気づけた。

魔術の発動というものは、とどのつまり、思考するということなのだ。

術式を思い描き。

魔力を集め。

思い描いた術式に魔力を通せば、魔術は発動する。

そこに、時間はいらない。

詠唱さえしなければ、思考と同じスピードで、魔術は発動できる。

意識を失うまで、1秒もないだろう。

しかし、それだけあれば、十分。

効果範囲を狭めて。

威力をできるだけ上げて。

やつの勝ち誇った顔をめがけて。

——フレイムピラー。

思考の中で、そう唱えると。

術式通りに魔術が発動し。

やつの全身を、焼き尽くした。

よかった。

これで、クリスとエミリーは——。

徐々に暗くなっていく景色を見ながら。

俺は満足して、微笑んだ。

## 森の中の冒険⑤

〈語り部視点〉

「ハジメツ!!」

ハジメが真っ二つになったその光景を見て、エミリーはパニックに陥った。

ハジメに突き飛ばされて尻もちをついた態勢のまま。

錯乱した思考に突き動かされて、その名を叫ぶ。

ハジメの魔術によって魔族が息絶えたことすら、エミリーはもはや認識していなかった。

目に入るのは、ハジメの無惨な姿だけ。

泣き別れになったハジメの上半身と下半身が。

おびただしい量の血液を流しながら、雪の上に横たわっている姿だけだった。

「嘘！　嘘よ！」

お願い！　ハジメ！

——ハジメ！」

ガクガクと震える脚を、なんとか立たせ。

治癒魔術をかけるべく、ハジメに縋りつく。

まずは両腕を拾い集め、それぞれ治癒した。

さらにハジメの上半身を持ち上げようとするが、鎧の重量も加わったそれは全く動か  
せなかった。

「誰か……！」

……クリス！

クリス、お願い！ こっちに来てっ！」

泣きじやくりながら、助けを呼ぶ。

そうしている間にも、ハジメの身体から血が失われ、温もりが消えていく。

「エミリー！ 大丈夫か！」

クリスは即座にかけつけた。

彼女は、エミリーの声から尋常じゃないものを感じ取り、血を吐きながらも全速力で  
走っていた。

たどり着いた先で目にしたものは。

2つに分かれたハジメと、全身を血に染めながら泣きじやくるエミリー。

「お願い、クリス！」

分か、分かれてるところを、繋げて！」

あまりの光景に、クリスの思考は一瞬空白になる。  
しかし、直ちに彼女は行動した。

惑う時間がないことは、状況を見ればありありと分かった。

無言で、最速の動きでハジメの上半身を持ち上げ、下半身と位置を合わせる。

「ううっ。」

ハジメ、ハジメ……」

エミリーは泣きながら、治癒魔術を唱えた。

中級治癒魔術。

彼女に扱える最高の魔術。

瞬く間に、切断面は修復された。

しかし。

「ハジメ！ 起きてー！

お願い！ お願い！」

ハジメは目を覚まささない。

流した血液が多すぎた。

虚血により、中枢神経の命令系統は破綻。

すでに心臓は停止し、呼吸も失われていた。

エミリーはハジメの心臓に耳を当てる。

そこには何の響きもない、空洞のような無音があるだけだった。

「ハジメ……」

嘘。嘘……」

エミリーに取れる手段は、もはや何もなかった。

ぺたりと座り込み。

感情の導くままに、ハジメの胸の上で泣き崩れそうになった、その時。

「まだだ！ エミリー！ あきらめるな！」

クリスが叫んだ。

エミリーは激昂しそうになった。

エミリーも、あきらめたいなんて、かけらも思っていない。

ただ、取れる手段が他にないのだ。

「——どいてくれ！」

そんなエミリーへの配慮などなく、クリスはエミリーの場所を奪う。

しかしその強引な姿勢を見て、エミリーの感情は期待に置き換わった。

まさか、あるというのだろうか？

この状況で、ハジメが戻ってくる可能性が。

もしほんの少しでもそんな可能性があるというのなら、自分の全てを賭けてもいいと思つた。

クリスはハジメの鎧を脱がせると、おもむろにその胸の上に手を置いた。続いて体重をかけ、ハジメの胸を何度も押し始める。

「……何をしているの？」

理解不能の動きだ。

何かの意味があるようには見えない。

ましてや、ハジメが息を吹き返すことなど、あり得るわけがないように思えた。

「エミリーも手伝ってくれ！」

私の動きをよく見て、同じようにするんだ！

押す時はためらわず、体重をかけて、しっかりと押してくれ！

最悪、骨が折れても構わない！」

しかしクリスの剣幕には、有無を言わさぬ迫力があつた。

言われるがまま、動作を覚え、クリスと交代する。

「そう！」

そのまま30回押したら教えてくれ！」

その言葉のままに、1、2、3、と数をかぞえる。

「……28、29、30。——30回！」

「止めてくれ！」

手をハジメの胸から離して見上げると、気づけばクリスは頭の方に移動していた。彼女は素早くハジメの頭を押さえ、顎を上げさせ。

——そして、ハジメに口づけをした。

「なっ！」

エミリーはもはや、感情が錯綜して頭が真っ白になった。

いったいこの非常事態に、何をしているのかという怒り。

ハジメを救うことは諦めてしまったのかという悲しみ。

クリスは最後にせめてもの思い出を作ろうしているのかという疑心。

それならば自分にもその権利があるのではないかという、さもしい期待。

その他様々な感情が、エミリーの胸の内を駆け巡る。

クリスは一度顔を離し、大きく息を吸って、再度唇を合わせる。

「——な、何をしているの!?!」

たまたらず聞くが、クリスは何も答えない。

数秒間そのままの姿勢でいた後、顔を離したクリスは言った。

「エミリーー！　またさっきのように押しつけてくれ！」

クリスは理由も言わず、ただ命令するだけだ。  
さつきからずつと、やっていることは訳が分からない。

しかしクリスの表情は真剣そのものだ。

クリスがこんな状況で、ハジメを救おうとしないわけがない。

この旅で生まれたクリスへの信頼が、エミリーを彼女の言葉に従わせた。

「……28、29、30。——30回よー！」

エミリーが動きを止めると、クリスはまた同じように2度、口づけをした。

しかしよく見ると、口づけの度にハジメの胸が上下している。

呼吸……させている？

「押してくれ！」

エミリーは同じ動作を繰り返す。

しかし徐々に腕が疲れて、押す力が弱くなってきた。

「エミリー、私の動作をよく見ておいてくれ！」

次は役割を交代しよう！」

役割を交代？

ということとはつまり——。

2人で同じ行動を繰り返した後、場所を交代した。

今度はクリスが、ハジメの胸を押し始める。

「いいかエミリー、顎を上げさせて、鼻をつまむんだ！」

そして大きく息を吸って、口から空気を送り込め！」

やはりこれは、ハジメに呼吸をさせるための所作らしい。

もしかして人は、死ぬと息をしなくなるのではなく、息をしなから死んでしまう

……ということ？

「30だ！ エミリー、頼む！」

頭に浮かんだ疑問を精査する余裕などなく、やるべきことを突き付けられる。

目の前にはハジメの顔。

言われた通り、顎を上げさせ、鼻をつまむ。

こんな状況でも、鼓動が早まる。

人生で初めての体験だ。

それを最愛の人と行えることは。

自分の素直じゃない性格を考えれば、降って湧いた幸福といっても過言ではない。

その最愛の人が、死の淵にいますという事実を除けば。

心に生じた些細な喜びは、目の前の現実によって瞬時に消えた。

純粹に、祈りを込めて、エミリーは唇を合わせる。

——お願い、ハジメ。帰ってきて。

その後、二人はずっと同じ動作を繰り返した。

森を焼く炎は徐々にその勢いを弱め。

氷点下の寒さはハジメの体温を奪っていった。

もはや人の温度とは思えないほど冷たくなったハジメの胸を。

それでも何も言わずに、二人は押し続けた。

少しでも言葉を発したら。

それが幕引きの合図になってしまう気がして、何も言えなかった。

炎によって上空に生まれた雲が、雹を降らせる。

それらは炎の熱で雨となり、服に染み入り、2人の体温が奪われていった。

歯はガチガチと鳴り。

手足の先は、ひどい凍傷を負った。

しかし二人は、ただひたすらに、同じ行動を繰り返す。

そんな時。

「……ねえ君たち、大丈夫？」

——突如。

声がした。

透き通るような、澄んだ声。

二人とも、反射的にそちらを見る。

……そこには。

緑色の長い髪。

尖った耳。

美しい顔だち。

一人のエルフが立っていた。

## 森の中の冒険⑥

「それは、その人を救おうとしてるんだよね？」

すごい発想だね。

心臓を外から手で押して動かすなんて、考えつかなかったよ」  
そのエルフは。

気付けばすぐそばにいて、興味深そうにこちらを見ていた。

「……ああ、ごめんよ。自己紹介がまだだったね。

僕はカヤレツキ。

見ての通り、しがないエルフだ」

突然現れたその存在に、あつげにとられた二人だったが。

自己紹介を聞いて、ようやく我に返った。

摩耗した頭をなんとか回転させ。

目の前の状況への対応を考える。

「……名前は分かった。

それで、何の目的でここにいる？」

一瞬の逡巡ののち。

クリスは立ち上がり、劍柄に指をかけた。

本来なら、手放しに喜んでもいいところだ。

この旅の目的はエルフの里なのだから。

エルフに会えたなら、手がかりにならないわけがない。

しかしそうするには、状況が切迫しすぎていた。

こちらに接近した理由がわからない以上、隙を見せるわけにはいかない。

クリスはそう判断した。

「驚かせてごめん。」

でも、そんなに警戒しないでくれよ。

僕がここに来たのは、君達を手助けしたいからなんだ。

詳しい事情はちよつと長くなるから、今は話せないけど。

信じてほしい。

それに……ほら、もし君たちを害する目的なら、声をかけたりはしないんじゃないかな？

声をかけるまで、君たちは全然僕に気付いてなかったんだからさ。

その優位を捨てるのは、合理的じゃないはずだよね？」

エルフは真摯な面持ちで言った。

両手を上げ、武器を持っていないことをアピールしている。

今このタイミングで、ここに来た理由は気にかかるが。

表情や振る舞いは、害意があるようには見えなかった。

さらにその動作の一つ一つから、クリスは彼の戦闘能力の低さを読み取った。

それらの考えを統合し。

クリスはひとまず、このエルフを信用することに決めた。

「……すまなかった。

非礼を許してくれ。

こちらにも余裕がないもので」

劍柄から指を離し、頭を下げる。

「いっよ、いっよ。

突然見たこともない種族が目の前に現れたら、警戒するのが当たり前さ。

……それで、そのヒトは大丈夫？」

指し示す先には、横たわるハジメと、必死で蘇生を続けるエミリーの姿。

クリスの表情に痛みが走る。

今の状況を言葉にすること。

それは今の彼女にとつて、酷な要求だった。

「さつき……戦闘があつて。

ひどい怪我を負つたんだ。

怪我自体は治癒魔術で治したんだが……。

心臓が、動かないまま、どんどん冷たくなって……」

言いながら、もうダメだと思つてしまった。

心臓が止まり、呼吸がない。

それが死以外の何だというのだ。

藁にもすがる思いで、昔ハジメに教わつた蘇生法を実行してみたが。

何も変わらぬまま、ハジメはどんどん冷たくなつていく。

……涙が溢れてくる。

もう、ハジメは戻らないのだ。

「——僕が治そうか？」

目の前のエルフ——カヤレツキは、事もなげに、そう言った。

「え？」

思わず、クリスは聞き返す。

「もしよかつたら、だけど。」

僕、治癒魔術は得意分野なんだ。

心臓が止まってからも、そうやって延命をしてくれてたなら、もしかしたら治せるかも」

その言葉に――。

「お願いします！」

エミリーが、即座に反応した。

「お願いします！」

何でもします！

何でもしますから！

ハジメを助けて下さい！

お願いします！」

ハジメの胸骨を押しながら、エミリーが叫ぶ。

頭には電が積もり。

髪も服も、血と泥で汚れ。

赤く泣き腫らした目で懇願するその姿。

それは、普段の彼女からは想像もできないほどかけ離れていた。

しかしそのまっすぐな本心に、クリスの胸中までもが震わされる。

クリスも、エミリーに習って深々と頭を下げた。

「私もお願いします。」

私も、できることなら何でもします。

彼を助けるすべをお持ちならば、何とぞお施しを賜りたく」

クリスにとつても、ハジメはかけがえのない存在だ。

もし蘇生が叶うというなら、自分の持つ全てを失つても構わないと思えるほどに。

そんな彼女らの願いに、カヤレツキは微笑んだ。

「……いいパーティーなんだね。」

倒れてる彼が、少しうらやましいよ」

彼はハジメの傍に近づき、腰を下ろす。

「えっと、お礼とかは何もいらなかな。」

さつきも言った通り、ボクは君達の手助けをするために来たんだ。

それに、申し訳ないけど、確実に治せる保証があるわけじゃない。

もし思うようにいかなかったら、ごめんね」

カヤレツキはそう言うと、懐から杖を取り出した。

「……じゃあ、はじめよ」

カヤレツキが、ハジメに向けて杖をかざす。

すると、ハジメの身体がエメラルドグリーンに包まれた。  
やわらかく、暖かい光。

その光によって。

壊死を迎えていなかった細胞達が活性化され。

少しずつ、本来の働きを取り戻していく。

「ちよつと驚くかもしれないけど、心配しないでね」

そう言つて、カヤレツキが杖を振る。

すると、空中に水の玉が出現した。

両手で抱えるくらいのおおききの水球が、ぶかぶかと浮かんでいる。

そして、突如。

その水球から棘が生え、ハジメの首を突き刺した。

「何を！」

エミリーが立ち上がりそうになるが、クリスが制止する。

放つておいても死ぬ人間を、自分達の反感を買つてまで傷つける理由がない。

そう判断したからだ。

その棘は。

首の皮膚を貫き、頸静脈へとつながっていた。

棘から血管内へ、水が流れ込む。

血液の枯渇により収縮していた血管が、徐々にその容積を取り戻していく。さらに、魔力により体中の造血細胞も活性化し。

生理的な限界を超えた速さで、血球が血管内へと供給される。瞬く間に、血管が血液を送る道路としての機能を取り戻した。

「さて、（カヤレツキ）がちよつと難しいんだけど……えいつ」

カヤレツキは杖を上げ、ハジメの胸へと振り下ろした。

トンツ、と乾いた音がした後に。

その音量に見合わない鋭さで、ハジメの身体が跳ねる。

それにより、心筋が収縮し、ごくわずかに心臓が動いた。

その運動を、魔力により活性化した洞結節が敏感に感じ取り、働きを再開する。

洞結節から送られる電気信号は、心筋へと伝わり。

それらは、収縮と弛緩を繰り返した。

——つまり。

心拍が、再開した。

「……よし。」

これでひとまずはいいかな。

ただ、呼吸は脳が回復してくれないとどうしようもないんだよね。

さつきみたいにチューしてもらってもいいけど、それだと大変だもんね。

うーん。どうしようかな」

カヤレツキは腰に持っていた革袋を取り出し、中身をドボドボと捨て、袋をハジメにくわえさせた。

口の周りに隙間ができないようにその袋を押すと、ハジメの胸が上下する。

「はい、これ、やってあげて。」

それじゃ、今から里に案内するね」

呆然とその様子を眺めていた二人は、その言葉で我に返った。

差し出された袋をクリスが受け取り、おずおずと袋をハジメの口に当てる。

エミリーには、目の前の光景が信じられなかった。

「あ、あの……」

「ん？ どうしたの？」

「……心臓、動いてるんですか？」

「うん。動いてるよ。触ってみたら？」

エミリーは恐る恐るハジメの胸に手を伸ばす。

ドクン、ドクンと。

そこには確かに、鼓動が存在した。

「動いている……」

「でしょ？」

でも頭の方がどうなってるかわからないから、回復については今の時点では何とも言えないんだ。

ごめんね。

ただ、とりあえず一命は取り留めたって感じかな。

君達の治療のおかげだよ。

放置された時間が長かったら、無理だったと思う」

エミリーはその言葉を、ほとんど聞いていなかった。

ハジメの心臓が動いている。

その事実だけで、頭の中は喜びに埋め尽くされていた。

「ありがとう……ございます」

不思議だ。

今日、あれほど涙を流したというのに、それでも枯れることなく溢れてくる。

エミリーの涙はハジメの胸に零れ落ち、その服に染みをつくった。

「さあさあ、とりあえず移動しようか。」

ここは寒すぎるよ。

彼を温めてやらないと。

それに君達だって、指先なんか寒さでやられちやいそうな感じだし。

早いとこ里に向かって、いろいろ考えるのはそれからしよう。

荷物は置いていつて、また取りにくればいいよ。

そんなに遠くないからさ」

その言葉に従って、エルフの里へと向かうことにした。

ハジメには大量の防寒具を着せて。

クリスがハジメを担ぎ、エミリーが革袋による呼吸を行いながら、カヤレツキの案内

に従って歩く。

それから小一時間ほどで。

エルフの里へと、到着した。

## エルフの里

「……お疲れ様。ここがエルフの里だよ」

これまで旅してきた森の中となんら変わらぬ景色の中で、カヤレツキは言った。

「( )……ですか？」

クリスには、ただ森が広がっているだけの場所にしか見えない。

誰一人エルフなどいないし、街並みどころか、家の一つも存在しなかった。

「ふふ、ちよつと細工がしてあるからね。」

ここで必要な手順を踏まないと、入れないようになってるのさ。

まあ、道案内がないと、ここまでもたどり着けないようになってるんだけど。」

カヤレツキは手をかざし、何事かをぼそぼそつぶやいた。

「よし。」

そしたら2人とも目をつぶってもらおうかな。

僕の肩でもつかんで、はぐれないようについてきて」

言われるがまま目をつぶり、カヤレツキの後ろに従った。

そのまま数十秒ほど歩いた後。

「目をあけていいよ」

クリスが目をあけると、それまでと全く違う景色が飛び込んできた。

そこには、牧歌的な町並みが広がっていた。

木でできた家が並び、ところどころに風車が見える。

ずっと景色を染め上げていた雪は無くなり、暖かく、爽やかな風が吹いていた。

「ようこそ。ここが真正銘、エルフの里だよ。」

君達は多分、500年ぶりくらいのお客様じゃないかな」

それじゃ僕は人を呼んでくるから、と言いつつ残り、カヤレツキは町の中へ走っていった。

しばらく待っていると馬車がやってきて、3人はそれに乗せられて町中へと運ばれた。

着いた先は、町の集会所のような場所だった。

本来話し合いなどに使われる空間なのだろうか。

机や椅子が端に寄せられ、ベッドが3つ置いてある。

「さて、まずは彼をベッドに寝かせて、治療の続きをしようか」

カヤレツキがそう言うのと、取り巻きのエルフ達がハジメをベッドに運んでくれた。

口元にはエミリーが寄り添い、ハジメの肺に空気を送り続けている。

「と言っても、そんなにできることがあるわけじゃないんだけどね。」

とにかく問題は寒さだったから、ここに来た時点で治療はほぼ完了だ。

あとはゆっくり身体を温めることだね。

ぬるま湯につけてから、少しずつお湯の温度を上げて暖めていこう」

おそらくカヤレツキが手配してくれていたのだろう。

部屋に大きな桶が運ばれてきた。

水魔術を使い、その桶にお湯を張る。

「じゃあ、彼の治療はこっちでやっつくから、その間に君達は別の部屋で治療してもらおうか」

そう言われて、二人は別室へと案内された。

ハジメと離れることに抵抗はあったが、今更彼らがハジメを害するとは思えない。

二人はそう考え、おとなしく案内に従った。

別室にも同じような桶が2つあり、そこにお湯が張っていた。

「ちよつとお身体を見せていただきますね。服を脱いでいただけますか？」

そこには女性のエルフがおり、クリスとエミリーの治療にあたってくれるようだっ

た。

言われるがまま、服を脱ぐ。

「おふたりとも、ひどい凍傷ですね。

クリスさんは、胸の骨折もあるみたいですけど」

その言葉を聞いたエミリーが、慌てて言った。

「ごめん、クリス。

忘れてたわ。あなたに治癒魔術をかけないと」

「いや、いいんだ。

状況のせいなのか、全然痛みを感じてなくてな。

私も今の今まで忘れていたくらいだ」

あまり深刻な傷ではないようだし、後回しにした方がむしろ正解だったと、クリスは

考えた。

「では、クリスさんに治癒魔術をかけますね。

そして、おふたりともその桶に身体をつけて、少しずつ身体を温めていきます。

特に指先は慎重に、ゆっくりとしますんで時間がかかりますよ。

温度が戻ったら、もう一度全身に治癒魔術をかけて、治療は完了です。

では、やっていきましょう」

テキパキと準備を進めるエルフに言われるがまま、二人は治療を受けたのだった。

しばらくして。

2人が部屋に戻ると、ハジメがベッドに寝かされていた。しかし、呼吸のための袋を押されていない。

部屋で待っていたカヤレツキが言った。

「温めてたらね、自発呼吸が出てきたよ。よかったね。

問題なさそうだから、袋ははずしといた。

とりあえず、今日はここでゆっくり休むといいよ。

いろんな話は、また明日ってことで。

ここには誰も入らないようにしとくから、心配しないでね」

そう言って、彼は部屋を出ようとする。

「あの、カヤレツキさん！」

クリスは思わず、その背中に声をかけた。

「ん？ どうかしたかい？」

カヤレツキが振り返る。

「その、今日は本当に、ありがとうございました。」

あなたが来てくれなかったら、いったいどうなっていたかわかりません。

「このご恩は、必ず返します」

そう言うのと、カヤレツキは困ったような顔になり、両手を前に出してぶんぶんと振った。

「いや、いいんだよ。」

本当に、恩なんて感じる必要はないんだ。

詳しいことはまた明日にするけど、とにかく全然気にしないで。

……それに、ハジメ君もこれからどうなるかは分からないんだ。

呼吸が戻ったのはいいことだけど、目覚めるかどうか、目覚めたとしても後遺症なく身体が動くかどうか、今の時点では分からないんだよ。

だから、今日はしっかり彼のことをみてやってね。

向かいの家に僕はあるから、何かあったらすぐ呼んで。

……それじゃあ、ゆっくり休んでね」

そう言い残し、カヤレツキは部屋を出て行った。

ボタンと扉の閉まる音。

静かになった部屋の中に、ハジメの呼吸音がかすかに響く。  
クリスはハジメのベッドに近づき、枕元に腰かける。

「本当に、息をしているな」

そう呟いて、ハジメの胸が上下するのを見ていた。

ハジメは規則正しく、空気を吸っては吐きを繰り返している。

確かめるようにその唇を指で触れると。

蘇生の際に行った行為の感触が、自分の唇によみがえってきた。

思わず自分の唇に手をやり、その残滓を味わうように目をつぶる。

ドキドキと鼓動が鳴る。

……あれは、治療行為の一環だ。

やましいことなど、何もない。

そう思うものの。

無我夢中で埋もれてしまったその感触を、必死で思い出そうとしている自分は。

明らかにやましいことがあるように思えた。

やけに心臓がうるさい。

いや違う。

これは、ああいう行為をしたのが初めてだったからだ。

相手が誰でもこんな風になるはずだ。

決して相手がハジメだったからというわけではないのだ。

「心臓も、ちゃんと動いてるわね。よかった」

その言葉に、クリスは飛び上がりそうになった。

自身の感覚の言い訳を探すうちに、エミリーの存在を忘れていた。

気付けばエミリーは、ハジメを挟んで反対側のベッドサイドに腰かけていた。

「あ、ああ、本当によかった」

動揺をできるだけ隠して、クリスは返事をする。

場を繋ぐ話題を探すと、聞いていなかった疑問を思い出した。

「そういえば、あの魔族はどうやって倒したんだ？」

魔族を二人の所に向かわせてしまった時には、もうダメだと絶望したんだが」

そう言つてエミリーを見ると。

エミリーは、きまり悪そうにもじもじしていた。

「えつと……その、覚えてないの」

「え？」

「だから、覚えてないの。」

あの時、私を庇つてハジメがやられて。

その姿を見たら、頭が真っ白になっちゃって……。

私、魔族が死んでるのに気づいたのは、カヤレツキが来てからなのよ」  
確かにあの時。

エミリーは、普段では考えられないほど取り乱していた。

「……そうか。」

では魔族の死については、私の方が早く認識したみたいだな。

私が駆け付けたときには、すでにやつは倒れていた。

身体は燃えていて、火魔術で止めを刺された様子だったが」

クリスがそう言うと、エミリーはため息をついた。

「そう……。」

じゃあ、ハジメがやったのね。

死の間際に、ギリギリで刺し違えたんだわ。

そんなことができるなら、私を庇わなければ無事に倒せたでしょうに。

……本当に、バカなんだから」

クリスもエミリーも、ハジメの顔を眺めて物思いにふける。

しばらくの間、沈黙が流れた。

やがて、今度はエミリーが疑問を口にした。

「ところで、あの蘇生法って、どこで習ったの？」

あんなの、聞いたこともないわよ」

えーっと、と考え、クリスは答える。

「あれは、ハジメに教わったんだ。」

冒険者をしているなら、使う機会があるかもしれないと。

まさか、本人に使うことになるとは思わなかったが」

クリスがそう言うのと、少しだけ笑いが生まれた。

「あなたがいなかったら、きっと私は途方に暮れてあきらめてたわ。」

……ありがとう、クリス」

「それを言うなら、エミリーがいなければ治癒魔術をかけることもできなかったんだ。」

こちらこそありがとう、エミリー」

二人で礼を言い合うと、少しばかり気恥ずかしい空気が流れる。

「……まあ、本当に礼を言つて欲しいのは、ここで寝てるこのカメモシなんだけどね。」

目覚めたら、対価に何を請求してやろうかしら」

照れ隠しのように、エミリーが言う。

クリスもそれに同調した。

「そうだな、私もそれに乗らせてもらおう。」

ツケを払わないまま目覚めないなんてことは、許さないからな、ハジメ」  
ハジメはそんな会話が頭上で飛び交っていることなど知る由もなく。  
穏やかな顔で、目を閉じている。

「たつき起こしてでも、ツケは払わせてやるんだから」  
エミリーの声は少しだけ、涙がにじんでいた。

## 目覚め

〈ハジメ視点〉

……揺れていた。

景色が揺れていた。

石造りの壁。

柱、絵画、彫刻。

豪華な絨毯。

そんなものが揺れながら、過ぎ去っていく。

しかしその中に、過ぎ去っていかないものもあった。

女性だ。

なんだか安心感を覚える顔立ちの女性。

彼女だけは、揺れる景色のなかに留まり続ける。

女性と目が合うと、微笑み返してくれた。

女性が近づいてきて、触れられる感覚。

柔らかく、幸せな感覚。

何か、大きなものに包まれているような安堵感。

しかし、それを覚えたのも束の間。

女性が離れていき、辺りが暗くなる。

暗くて、何も見えない。

ランプの灯りだけが、ぼんやりと光っている。

何かを呟く声。

男の声だ。

それが聞こえた後、地面が光り始めた。

その光で、初めて景色が見えた。

そこには、一人の男が立っていた。

その男はこちらに向かって、何かを言っていた。

やがて。

光が眩しくなって、何も見えなくなる。

何もかもが、光に包まれて消えていく……。

パチリと。

目が覚めた。

何だったんだろうか、今の夢は。

やけに鮮明な夢だった。

奇妙な感覚を覚えたものの。

しかしそんなものは、現実の疑問を前にたやすく押し流された。

……ここは、どこだろうか。

薄暗いが、なんとか景色は把握できる。

目だけを動かして、様子を確認する。

俺はベッドで寝ているようだ。

バスローブのような寝間着を着ている。

そして、両隣にもベッドがある。

右のベッドには、クリスが寝ていた。

身じろぎ一つせず、ベッドで横になっている。

左のベッドは、空いていた。

しかしシートには皺があり、布団が捲られている。

誰かがいたけれど、今はどこかに行っているという感じだ。

……ふむ。

これはどういう状況なのだろうか。

記憶が曖昧で、よく思い出せない。

なんで俺はここにいるんだ？

確か、エルフの里を探して森の中で冒険していた。

クリスが変な気配がするとか言い出して。

魔族と戦って――。

……そうだ！

魔族と戦ったんだ。

記憶がフラッシュシユバックする。

表情が抜け落ちたエミリーの顔。

魔族の嗤笑。

回転する景色。

――ぶわっと。

急に鳥肌が立った。

……そうだ。

俺は魔族にぶった切られて、真つ二つにされた。

それは間違いないはずだ。

え、じゃあ今俺は上半身だけで生きてるの？

え、怖い。

恐る恐る、下半身の所在を確認する。

そーつと。

なくても驚かないように。

大丈夫大丈夫。

脚なんか飾りですよ。

偉い人にはそれが分かんのですよ。

毛布をどけたそこには。

ちゃんと、脚がついていた。

動かしてみる。

足の指を開いて閉じて。

膝を曲げて伸ばして。

問題なく動く。

……よかった。

多分エミリーが治療してくれたんだろう。

ありがたい。

本当にありがたい。

確実に死んだと思った。

身体が半分になっても生きてるとは。

プラナリア並みの再生力だ。

エミリーにはもう、一生頭が上がらないかもしれない。

……さて。

記憶の整理が終わったところで。

どうしたものか。

俺としては、現状の確認をしたい。

結局その後、どうなったのかは知らないし。

ここがどこなのかも全くわからん。

しようがないからクリスを起こそうかと思った矢先。

ドアが開いて、見慣れた顔が入ってきた。

銀髪、猫目の美少女が。

「よお、エミリー」

声をかけると、エミリーは面白いように動きを止めた。

「ハ、ハジメ、気が、気がついたの？」

幽霊でも見たかのように目を見開き、口をあんぐりと開けている。

「ああ、さっそくで悪いんだけど、状況を——ぐえっ！」

言葉の途中で、エミリーが駆け寄ってきて、抱きつかれた。

「バカ！　心配させて！

ホントに……バカ！　バカ！」

俺の胸に顔をうずめ、エミリーが泣いている。

対応に困っていると、物音でクリスも起きたらしい。

彼女も俺を見るなり固まって。

そのあとすぐに、ベッドを飛び出して抱きついてきた。

「ハジメ！　……よかった。本当によかった」

クリスも、目に涙を浮かべてそう言ってくれた。

「どうやら俺はよほど心配をかけたらしい。」

俺自身は眠りから覚めただけ、という感じだから、感情を共有できないが。

俺が生きてたことで泣いてくれるなんて、うれしいね。

2人の柔らかい肌の感触に癒されつつ、もう死んでもいいな、なんてことを思った。

「……じゃあここは、エルフの里なのか」

2人は落ち着いてから、改めて状況を教えてくれた。

バラバラになった俺をエミリーが治癒魔術で繋いでくれたこと。

しかし心臓は止まっており、クリスが俺の教えた蘇生法を行ってくれたこと。

そこにカヤレツキなるエルフが現れ、俺を治療してくれたこと。

そのエルフの案内によって、ここにたどり着いたこと。

「ああ。

あまり実感は湧かないが、ここが我々の目的地らしい」

「いろいろあったけどなんとか、俺達は目的を達したってわけだな」

とりあえずは、喜ぶべきだろう。

この里は、エミリーすら知らないような魔術で隠されていたらしい。

当初の計画通りに闇雲に探し回っても、見つからなかった可能性が高い。

魔族と派手に争って、エルフがその様子を見に来たからこそ、この状況に持ち込めたわけだ。

俺が死にかけたのも、無駄ではなかった。

「ありがとう、クリス」

「ん？ 何がだ？」

「俺が昔教えたおまじないを覚えていてくれて」

「ああ、そのことか。」

いいんだ。というよりむしろ、教わっておいてよかった。

それがなければ、手段に窮し諦めていたところだった。

カヤレツキが口ぶりでは、一定の効果はあったようだな」

クリスは大したことはないというように、しかしどこか誇らしげに言った。

「……ねえ、結局あれって何だったのよ。」

どういう意味がある行為だったの？

わかっついてないの、私だけみたいじゃない」

エミリーがむくれて言う。

少しからかってやろうかとも思ったが、助けてもらった恩があるのでやめておくこと

にした。

簡単に、心臓マッサージの意味について説明する。

生命維持に最も重要なのは脳への血液供給であり、心臓はそのポンプとしての役割を担っている。

心臓が止まった時は胸を物理的に押すことで、脳血流を維持することができる、というようなことを。

「……ふうん。なるほどね。」

そんなこと、考えたこともなかったわ。

それはあなたの、『前の世界の知識』ってやつなの？」

「ああ。以前の世界では当たり前前の知識だった」

「……そう。」

この世界では治癒魔術が発達しすぎて、魔術を介さない治療法は衰退したのかもしれないわね」

確かにそうかもしれない。

むしろ、治癒魔術というものは凄すぎる。

真つ二つになった神経、血管、その他組織全てを寸分の狂いなく、針や糸も使わずにつなぐなんて。

以前の世界では、考えられない神業だ。

一度切断されたはずの腰髄を通して、電気信号が今も俺の下半身を動かしている。その治癒魔術で怪我を治せない状況なんて、稀も稀だろう。

「……ちなみに、その、もう一つのあの行為は、何の意味があるの?」

エミリーが急に、顔を赤らめて、うつむきながら言った。

もう一つのあの行為?

……なんの話だ?

分からないのでクリスを見ると。

クリスもなんだか顔を赤くして、うつむいていた。

急にどうしたんだ、こいつら。

……って、ああ! もしかして!

「……ま、まさかお前ら、人工呼吸とか、やってくれたのか?」

「……」

「……」

質問への返答は、沈黙だった。

しかし両者とも顔を背け、赤らめているその状況は。

何が起こったのかを、如実に表していた。

「……え、え、え、え?」

まじ？

ちよつと待って。

ちよつと。……嘘だろ？」

混乱した。

……まじかよ。

どうやら本当に、この二人が俺に人工呼吸を施してくれたらしい。

確かにクリスに蘇生法を教えた時、それについても教えた覚えがある。

……なんだ。

なんで俺は綺麗な女の子二人とキスしておきながら、全く記憶がないんだ。

くそっ！

どうして俺は意識を失ってしまったんだ！

いやしかし、意識を失わないということは、心臓が動いているということだ。

そうなる二人が人工呼吸をしてくれることもなかったわけか。

これぞまさにジレンマというもの。

くそっ。

気合で目覚めて、寝たふりをできればよかったのに……。

「すまない、ハジメ」

「……な、何がだ？」

「ほかに方法がなかったとはいえ、私のような武骨な女と接吻など、嫌だったろう」  
「嫌じゃねえよっ！バカ！」

「え？」

氣付けば立ち上がって叫んでいた。

ハッと我に返る。

いかん。

この胸を焼き尽くすような後悔のせいで、冷静さを失ってしまった。

「や、すまん。何でもない。」

クリス、気にしないでくれ。全然嫌じゃないから」

座ってから、慌てて取り繕う。

「……本当か？」

「この世のどんな存在に誓ってもいい。本当だ」

それは俺の、まごうことなき本音だ。

「そうか……よかった。」

そう言ってもらえると、心が楽になる」

「いや、むしろこっちがごめんと言いたいくらいだ。」

俺なんかとキスなんて、クリスコそ嫌だったろう？」

「そんなことはないっ！」

「え？」

クリスが急に立ち上がって、叫んだ。

そして真っ赤になり、座った。

「あ、いや、なんでもない。」

……そ、その、この話題はやめにしようか」

「そ、そうだな」

その後しばらく、会話がぎこちなかった。

一応、エミリーに人工呼吸の医学的意義についても、説明しておいた。

ようやく、まともに会話ができるようになってから。

エミリーは言った。

「カヤレッキの魔術は、明らかにアルバーナより進歩していたわ。」

もしかしたら、ここなら転移魔術についても、何か分かるかもしれないわね」

……そう。

もともと俺が旅をするのは、俺がこの世界に来た理由を知りたいからだ。

魔術の発展を追っても成果がなかった。

だからこの世界そのものに詳しい人物を探すことにした。

そのために、1000年を生きるというエルフの長老に会いに来たわけだが、たどり着いてみれば想定外。

魔術においてもここは、今までいた国よりも遥かに優れているらしい。

「夜が明けたら、いろいろと聞いてみよう。」

教えてくれるならだけど」

「昨日の対応を考えると、すんなり教えてくれそうな気もするわね」

「ふーむ……」

エミリーの言葉に、少し悩まされる。

そのカヤレツキさんとやらは、なんでそんなに俺達によくしてくれるんだろう。

死にかけて俺を治してくれたばかりでなく。

彼女達の治療も行ってかれて、こんな部屋まで用意してくれた。

普通、1000年も外界を遠ざけておいて、たまたま見つけただけの冒険者に対して、

そこまで至れり尽くせりもてなすだろうか。

「でも何か、理由がありそうな様子ではあったな」

「うん。『恩に感じる必要なんてない』って強調してたものね」

クリスとエミリーが付け加える。

ふーむ……まあ、考えてもよくわからんな。

少なくとも、俺にとつて大恩人なのは間違いないし。

事実だけを考慮して、俺達の敵であるわけがない。

全部、明日聞いてしまうことにしよう。

「……よし」。

何はともあれ、ひとまずは順調ってことでいいだろ。

紆余曲折あったが、とりあえずエルフの里にたどり着けた。

エルフ達も友好的に接してくれている。

明日になったら、俺の旅の目的は解決するかもしれない。

……旅に出る前に考えた未来予想図の中では、抜群に良い方だな！」

笑顔で言ってみると、二人がしらっとした表情を向けてきた。

「ハジメが1回死んだことを除けばな」

「本当ね。それを考慮したら、上から2番目くらいなんじゃないかしら」

「私達も凍傷になったな」

「そこまで考慮すると、20番目くらいになるかしら」

「あれ？俺が死んだことって、もしかして大したことじゃないの？」

「さあ、どうなのかしらね」

「どうなんだろうな」

「おーい……」

二人とのくだらない会話を楽しみつつ、夜を明かした。

## 長老の話

朝。

すがすがしい朝だ。

2階に上がり、窓から景色を見てみる。

朝霧の中、木でできた家々が静かに佇んでいた。

二人から聞いた通り、牧歌的な街並みだ。

なんとなく、サンドラ村を思い出す。

一通りの生活用品はそろっていたので、朝ごはんを作ってみた。

パンと目玉焼き、ミルクだ。

できあがってから二人を起こし、朝食を食べる。

その後はおのおの手持ち無沙汰に過ごしていると、カヤレツキが訪ねてきた。

「……………驚いたよ。全然問題なさそうだね」

カヤレツキは、俺を見るなりそう言った。

緑色の髪、とんがった耳。

カヤレツキは、本当にエルフだった。

「おかげさまで、この通り。」

あなたのことは、二人に聞きました。

いろいろとお世話になったようで、本当にありがとうございます」

エルフに会えた興奮はひとまず隠し。

深々と頭を下げ、礼をする。

「いや、いいんだよ。」

僕は当然のことをしたまだけだから。

しかし、無事に治ってよかったね。

正直に言うとは、何かしらの後遺症は残るかもしれないと思ってただけけど。

……もしかしたら、気温が低かったのが良かったのかなあ」

カヤレツキは、しげしげと俺を眺めながら、興味深そうに言った。

確かにそうかもしれない。

クリスやエミリーの話からは、俺の状況は致命的に思えた。

蘇生処置こそすぐに行ってもらえたものの。

通常であれば、脳細胞のほとんどは、酸素不足で死滅していたに違いない。そうならなかったのは、やはり気温のおかげだろう。

よくフィクションの話で、コールドスリープなんて言葉が出てくるが。冷却というのは、細胞を延命させる効果がある。

それは、以前の世界では証明された事実だ。

あの極寒の環境が、むしろ味方してくれた。

無論、だからといって倒れた俺をそのままにしておいたら、いかに気温が低くても後遺症が残っただろうが。

つまり今回のことは。

エミリー、クリスの努力に加えて、運が味方した奇跡的な出来事だったといえる。

しかし冷却が蘇生を助けるなんて、そんな知識をこの世界の人物が持っているとは。

やはりエルフというのは、長生きしているだけあつて博識なようだ。

「あの、カヤレツキさん。

もしよければ、色々伺わせていただきたいのですが」

気持ちちはやる。

この人ならもしかしたら、転移魔術についても知っているかもしれない。

「もちろんいいんだけどね。」

ただ、先に長老から話をさせてほしいんだ。

こうして君達を里に招いたのも、少しばかり事情があつてね」

カヤレツキは、少し困つたように言った。

「よければ、今から長老の家までご足労願いたいんだ。

服を持つてきたから、それに替えてもらつて、準備が整い次第、出発。

急に呼び立てて申し訳ないけど、どうかな？」

「全く問題ないです。

ぜひお願いします」

1000歳を超えるとというエルフの長老。

もともと、その人に会うことがこの旅の目的だったのだ。

会わせてくれるというのなら、異論などあろうはずもない。

俺達は馬車で長老の家まで案内されることとなつた。

馬車に揺られながら、エルフの町を眺める。

家と、畑と、果樹園と、牧草地。

目に映るものの大半はそのどれかだ。

この風景からは、あまり魔術の最先端という感じはしない。

むしろ田舎感がすごくて、田舎出身としては落ち着く。

とはいえ、アバロン郊外の村々や、サンドラ村と全く同じかというと、そうではない。

家々の細かい作りこみや、道の引き方、植え込みのデザインなど。

全体を通して、絶妙に美しさを感じさせるものになっている。

一見すると普通の村だが、随所にきめの細かさが宿っていて、見てて飽きない。

神は細部に宿するというが、まさにそんな感じだ。

ただの村ではない。

なんだか、期待が高まっていく。

誰も知らない世界の秘密があるとして。

それを知ってる唯一の人が、住むとしたら。

それはおそらく、こんな場所なのではないだろうか。

この村の長老ならば、転移魔術について知っていてもおかしくない。

村の様子を見て、そう感じた。

しばらくして、馬車が止まった。

どうやら目的地に着いたらしい。

馬車に乗ったのは、20分ほどか。

馬車を降りると、そこには少し大きめの家があった。

造りは他の家々と大差なく、木造の平屋だ。

家の前には庭があり、畑で何かの野菜を育てている。

「着いたよ」

カヤレツキが馬車を降りて言った。

彼の案内に従い、俺達はその家へと足を踏み入れた。

家の中も、これといって特色があるわけではなかった。

普通の家だ。

玄関から入って、応接間のようなところに通された。

ローテーブルをはさんで、座椅子が4脚ずつ置かれている。

一方に俺達が並んで座り、反対側にカヤレツキが座った。

侘びさびを感じるような、渋い作りの部屋だ。

もちろん街並みと同様、細やかな心遣いのようなものはあるし、粹な感じはする。

しかし、エルフの長が住むにはちよつと地味な気もする。

「……なんだか、普通の家だな」

思わず、口をついて出た。

「ふ、ふつ。申し訳ないね。」

エルフは清貧を好むんだ。

君達の国の王様みたいな、豪華絢爛な住み家は合わないのさ。

まあ、それを作る材料がないっていうのも大きな理由ではあるけど。

……でもここが間違いなく、エルフの里の長の家だよ」

カヤレツキが笑いながら言った。

「あ、すみません。」

疑ったわけじゃないんですけど」

あわてて取り繕うものの、失言をしてしまった感はぬぐえない。

エミリーが横目で冷ややかな視線を浴びせてきた。

ノツクの音がして、家政婦さんのような格好のエルフが入ってきた。

ワゴンの上に、ティーカップとポットが乗っている。

彼女はそれを注ぎ、俺達の前に置いた。

カップからは湯気が立ち、いい香りがした。

「おいしい」

と言ったのはエミリーだ。

飲んでみると、確かにおいしかった。

「これは、このあたりで取れるものなんですか？」

エミリーが尋ねる。

元、貴族の令嬢として、紅茶の味にはうるさいのかもしれない。

「うん。そうだよ。」

畑で茶葉を育ててね。

ちよつと特殊な処理をして、この味を出してるんだ。

気に入ってくれたならうれしいよ」

カヤレツキが、少し自慢げに語る。

「その処理に、魔術を使ったりするんですか？」

「ご名答。」

魔術の力を少し借りて、味に深みを出してるのさ。

この里では、他にもいろんなことを魔術に頼ってるよ」

へえ、と思いつつも一杯すすする。

うまい。

紅茶を飲んで少し場の空気が緩んだところで、またノックの音がした。

「……里長が入ります」

家政婦さんエルフの声がして、扉が開く。

そちらを見ると、豊かなヒゲを蓄えた老エルフが立っていた。

「失礼するよ。

初めまして。

わしは里長のランドルフという者じゃ」

身長は決して高くない。

体格も細身で、写真に撮れば取り立てて特徴のない人物だろう。

威圧感などまるでない。

しかし俺は、何か大きなものに包まれるような感覚を覚えた。

ふと、子供の頃にガキ大将から逃げて、木のうろに隠れて眠ってしまったことを思い出す。

あの時に感じた、不思議な安心感。

それと共通する何かを持っている気がする、柔らかな雰囲気の人だった。

ランドルフは、ゆっくりとカヤレツキの隣に座った。

家政婦さんエルフが、すぐに紅茶を注ぐ。

「さて、ここまでご足労いただき申し訳ない。  
よく来てくれたの」

しわがれた声で、ランドルフは言った。

「カヤレツキは、どこまで伝えたのかな？」

「いえ、まだ何も話していません」

カヤレツキは、少しだけ緊張した声だった。

「そうかそうか。」

君は昔から、順序を重んじる性格じやからのう。

それでは、私から説明させてもらおう」

老エルフはにつこりと笑い、カップに口をつけた。

「まず、君たちの名前を覚えてもらえるかな？」

そう言われ、俺たちは顔を見合わせる。

2人とも、緊張した顔をしていた。

恐らく、俺もそんな顔をしているに違いない。

「俺はハジメタナカといいます」

「エミリーと申します」

「クリステイーナローレンツです」

おのおの、礼をして名乗った。

皆この老エルフには、敬わなければならない何かを感じているようだ。

「ハジメ君に、エミリー君、クリステイーナ君か。

皆、いい名じや」

長老はまた、にっこりと笑った。

「さて、君達三人には、里長として正式に感謝をしたい。

……何に対する感謝かというとの。

あの魔族を倒してくれたことじや」

魔族を？

確かに倒すのには難儀したが。

……それがこのエルフの里と、何の関係があるのだろうか。

「君達は知るよしもないじやろうが。

あの魔族は、この里の付近の森に居座って。

同胞を殺し続けてきた、凶賊じやったのじや。

何の目的なのか、奴は500年にも及ぶ間、ずっと。

この里に近づく人間、里から出ようとするエルフを殺しておった」

「500年、ですか」

「そう、500年じゃ」

この長老は、とりあえず500年以上は生きているようだ。

長老の顔に刻まれた皺が、さらに深くなったように見えた。

「最初の数年のうちに、何百人ものエルフや人間が殺された。

そのうち、人間はほとんど訪ねて来なくなり、エルフは里から出ることをやめた。

君達も見たじやろうが、里には昔から結界を張ってあつての。

わしらは里にいる限り、奴に殺される心配はなかったのじや」

結界。

2人から話は聞いたが、やはり存在するのか。

「それから10年、20年、100年と時間が過ぎたが、奴は一向に去る様子を見せなかった。

わしらはこの里から出ることができぬまま。

たまに訪ねてくる人間は、全て奴に殺されてしまった。

初めは助けようとしておつたんじやが、助けようとしたエルフがみな殺されてのう。

いつしか、見殺しにするようになってしまった」

長老は、目を伏せて言った。

「状況は何一つ変わらぬまま。

気づけば500年の時が過ぎた。

わしらはたった一体の魔族に怯えて、膨大な時間をこの里の中で過ごしてきたのじゃ」

ふう、と、そこで長老はため息を吐いた。

「あの……」

エミリーが声を出した。

「何かな？ エミリー君」

そう言った長老の声は、穏やかだった。

「その、カヤレツキさんの魔術やこの里の結界は、私達の魔術よりも明らかに発達したものだと感じました。」

だから、状況を整えて複数人で挑めば、勝算は十分に思うのですが」

エミリーは少しおどおどして見えた。

まるで、内気な子どもが教師におっかなびつくり質問するような態度だ。

エミリーって案外、内弁慶なのかも。

「ふう、そうか。」

君にはこの里が、そのように映ったのじゃな。

自分達人間よりも、魔術を発展させていると」

長老は嬉しそうな笑顔を見せた。

しかしその言葉にはどこか、自嘲めいたものを感じさせられた。

「一部については、それも間違つてはおるまい。

治癒魔術や結界魔術は、昔からエルフの得意分野じゃからのう。

しかしの、エミリー君。

わしらには、争いごとの才覚がとんとなくてな。

あの魔族ほど素早く強い者は誰もおらぬし、頼みの魔術にしても、風の刃や氷の塊を投げつけるのが精々なんじゃ。

そしてその弱さがたたつて、かつては悪意ある人間に滅ぼされかけたことがある。

それゆえ、こうして森の奥に身を潜め、結界で身を守り、限られた人間のみと交流を持つておつたのじゃ」

なるほど。

得意魔術に偏りがあるわけか。

確かに攻撃手段がないのでは、どうしようもない。

「そんなわしらとて、西の大陸に住む魔族との戦争には、人を派遣してあつたがのう。

あの頃はまだ、ヒトは一丸となって魔族に対抗しておつた。

わしらの治癒と結界は、戦場においては重宝されたものじゃ。

しかし1000年ほど前から魔族が攻めてこなくなり。

徐々にヒト同士で争うようになった。

……それから先のことは、あの魔族のせいで何も分からん」

そう言うのと長老は、カップを手に取り口につけた。

このじいさん、500年どころか、本気で1000歳超えてる感じの語り口だな。

「話を戻そう。

とにかくわしらエルフは、あの一体の魔族によつて外に出られん生活を送つておつたのじゃ。

もともと排他的な性分じゃから、それはそれで悪くはなかつたが。

里の外を見たことがないエルフもたくさん生まれてのう。

できることなら奴を倒して、広い世界を見せてやりたいと、長年思つておつたのじゃ。

……そこに、君達が現れた」

長老は俺達の顔を見回した。

「里のそばに来た時に、君達のことも見えておつた。

結界の付近の出来事は、全て把握できるようになつておるからのう。

また、冒険者が奴に殺されてしまう。

そう思ったが、わしらはもう、同胞を失うことに耐えられんかつた。

この里を訪ねてきた冒険者は、君達で何人目か、数え切れんほどじや。その全てを、わしらは見殺しにしてきたのじや。

そして、君達のことも、見殺しにした」

うつむき、目を伏せて、長老は語った。

「責めてくれて構わん。

わしを許せないのであれば、この命を差し出そう。

しかし、できることならば、わし一人の命で勘弁願いたい。

すべて、わし一人の判断で行ったことなのじや」

長老が頭を下げる。

横を見ると、カヤレツキも頭を下げていた。

その光景に、面食らう。

「いや、二人とも、頭を上げてくださいよ。

そんなの、当たり前のことじゃないですか。

俺だって、里長の立場なら同じ行動をとりますよ。

むしろ、あなたたちのおかげで、俺は死なずに済んだんです。

感謝こそしても、恨むなんてあるわけがないですよ」

思ったことをそのまま口に出した。

クリスとエミリーも同じ考えだろうと思ひ。

横を見ると、二人も頷いてくれた。

「……そう言つてもらえると、ありがたい」

そう言つて、長老は頭を上げた。

「その後のことは、君達も知つての通り。

魔族と渡り合う君達を見て、役に立てばと思ひカヤレツキを派遣した。

遅きに失したが、なんとか手遅れにはならず済んだかのう。

ハジメ君が無事で、本当によかつた」

長老は俺に向かつて笑顔を見せた。

不思議と心が安らぐ。

「里を代表して、改めて礼を言う。

憎き魔族を打倒してくれて、誠にありがとう」

再度、長老とカヤレツキが礼をした。

「君達は、エルフの里の恩人じゃ。

図れる便宜は全て図らせてもらう。

辺鄙なところで大した物はなくて申し訳ないが、何か欲しいものもあるかのう？」

長い話が終つた。

そして気付けば、俺にとって非常に都合がいい方向に話は着地していた。

エルフの長老が頭を下げ、何でもくれると言ってきた。

こんなチャンスを、逃す手はないだろう。

「……それなら、教えて欲しいことがあります」

長老をまつすぐに見て、言った。

「転移魔術というものについて、何かご存じありませんか？」

言った瞬間、緊張が押し寄せてきた。

この3か月。

いや、サンドラ村を出てから3年以上ずっと。

ひたすらに、その手がかりを追い求めてきた。

1000年を生きるこの人物が知らないならば。

もはや、次の手が浮かばない。

地道に何十年もかけて、各国の図書館でも巡るしかなくなってしまおうだろう。

——頼む。

わずかでもいい。

何か心当たりがあってくれ。

長老は俺を見つめると、ふうむ、と顎髭を触る。

「転移魔術……」

つぶやくように発した言葉からは、何も読み取れなかった。  
どうなんだ。

知ってるのか、知らないのか。

早くしてくれ。

……いや頼む、知っていてくれ。

俺の思いをよそに。

おもむろに、長老は話し始めた。

「転移魔術とは、離れた場所を行き来するための魔術のことじゃな。

1000年前はさかんに研究されておったよ。

完成すれば、魔族の住処に奇襲をかけることが可能になるからのう。

そして、完成間近という段階まで進んだ国が1つ、あつたはずじゃ」

長老は、遠い昔を思い出すように続ける。

「その国の名は、ヴィルガイア王国。

またの名を、魔法都市ヴィルガイア。

非常に小さな国じゃったが、建国以来ひたすらに魔術の研究をしておつての。

優秀な魔術師はこぞつて、ヴィルガイアに移り住んだものじゃ。

戦線から離れた立地も、研究を大成させるには都合がよかつたのじやろう」

俺は一言も聞き漏らすまいと、長老の話に集中していた。

もはや、他の全ては頭からすつ飛んでいた。

「様々な魔術が研究されておつた。

魔術が学問として、普遍化されたのもその頃じやな。

ヴィルガイアから、天才と呼ばれる魔術師が何人も生み出され、戦地では英雄と祭り上げられた。

まさに、世界の魔術の中心だったといえるじやろう。

そこで、転移魔術も深く研究されておつた」

そこで話を区切り、長老はカッパに口をつけた。

「その国は、どうなつたんですか？」

……たまらなくなり、俺は聞いた。

「滅んだ」

長老は、抑揚のないトーンで言った。

「盛者必衰。

どんな隆盛を誇つた国でも、いずれは滅ぶ定めじや。

わしも、国が滅ぶ様を、幾度となく見てきた。

じゃが、しかしのう。

そのの中で、魔法都市ヴィルガイアだけは異質じゃった」

長老は、皆を見回して言った。

「忽然と。

一夜のうちに、王国は消え去ってしまったのじゃ。

栄華を誇った魔法都市ヴィルガイアはその日。

たった一晩で、瓦礫の山になった。

何が起こったのか、誰にも分からんままじゃった。

噂では、秘密裏に開発していた魔術が暴発したのでは、と言われておった。

真相は分からずじまい。

しかし、事実として。

ヴィルガイアという国は、全ての建物は瓦礫と化し、そこに住む全ての人は死んだ。

人々の死体には、何者かと争ったような跡があったというが、原因は不明じゃ。

そのような戦力を持つ国は周囲には存在せんかったし、周りの国が侵攻を行った事実  
は全くなかった」

それは、不思議な話だ。

もしかしたら、悪魔でも召喚したのかもしれない。

国と引き換えに、何かを願ったとか。

しかし今、重要なのは、そこではない。

ヴィルガイアが滅んだなら、滅んだでいい。

その原因がなんであれ、構わない。

重要なのは――。

「それで、転移魔術はどうなつたんですか？」

俺の質問に、長老は目を伏せた。

「わしの知る限りでは、完成しておらん。

ヴィルガイアの滅亡は、世界の魔術を3世紀は遅らせたと言われた。

さらにしばらくして、東の大陸全体を巻き込む戦禍があつたからう。

もはや、その頃の研究は引き継がれてはおるまい。

それから今に至るまでのことは、わしには分からない。

力になれなくて、申し訳ないのう」

長老は。

俺に向かつて、頭を下げた。

……なんてこった。

結局また振り出しかよ。

絶望感、徒労感が全身にからみつく。

これ以上、どうしたらいいんだ。

サンドラ村を出るときは、もう少し軽く考えていた。

大きな街に行けば、手がかりくらいは見つかるだろうと。

アバロンでダメだった時も、図書館という新たなツールを得たおかげで、次の目標を見つけた。

しかし今回は。

完全に振り出しだ。

これからいろんな国を渡り歩いて。

どこかの国で秘密裏に研究されている手がかりを、探すしかないのか。

途方もない時間がかかる。

あるかどうかも分からない。

そして仮に見つかったとしても、果たして俺の転移と関係あるのかも分からないというのに。

……いかん。

何もやる気が起こらない。

もう動きたくない。

つらい。

「……ランダルフ様。

昨日から忙しく事が運び、私達も少しばかり頭の整理が追いついていないようです。

貴方様からの感謝のお言葉、確かに賜りました。

誠に恐縮ですが、本日はこれまでとして、また日を改めて伺わせていただいてもよろしいでしょうか？」

なんだか膜を張ったように鈍感になった俺の耳に、エミリーが話すのが聞こえた。

「もちろんじゃ。

こちらこそ、急に呼び立てて申し訳なかったのう。

……この里は安全じゃ。

ゆっくりと過ごして、これからどうするか考えたらいじやろう」

長老は、いたわる様にそう言った。

## 今後の方針②

長老に話を聞いてから、10日ほど。

俺達はエルフの里でゆっくりと時を過ごした。

長老から手がかりを得られなかった時はシヨックだったが、少しずつメンタルは落ち着いてきた。

まあ、もともと期待は薄かったわけだから、落ち込む方が筋が通っていないわけだが。とりあえず、ダメだったという事実に対して、受容することができた。

とはいえ、今後の方針は何一つとして立っていない状態だ。

やっぱり、諸国を巡る流浪の旅を行うしかならないのだろうか。

それをやるとなると、もはやあと何十年かかるか分からない。

そして具体的な目標がない状況というのは、さすがに心にくるものがある。

今までなら、アバロンに行くことだったり、C級魔術師になることだったり、エルフの里にたどり着くことだったり、目標というものを見つけられた。

しかし今度という今度は、それを見失ってしまった。

何をしたらいいのか。

道筋が見えない。

そんな時は、散歩をするのがいいという。

歴史上の偉人はみんな、散歩を好んだらしい。

それに倣って、俺も散歩を日課にすることにした。

エルフの里の街並みを眺めながら歩くのは、割と楽しかった。

特に、エルフの子どもを見るのが楽しい。

男の子も女の子もかわいすぎて、いつまでも見ていられる。

一度、不審者として通報されそうになったので、最近は少し控えているが。

俺がそんな風にモラトリアムをぼんやり過ごしている間。

他の二人はどうしていたのかというと。

エミリーはカヤレツキのもとに足繁く通い、魔術を教わっていた。

エルフの魔術はやはりすごいらしい。

俺は見たことがないが。

治癒魔術と結界魔術については、世界で最高の技術だという。

夕食の時にエミリーが興奮しながら話すのを、俺とクリスは内心辟易しながら聞いている。

いや、クリスがどう思ってるかは知らんけど。

結界というものはすさまじく、この里が暖かいのも、結界に囲まれているおかげなのだそうだ。

外からは森にしか見えない上に、正しい手順を踏まないと中へは侵入できないのだという。

すごいもんだ。

しかし俺には、それを一から学ぼうという気持ちはない。

上級の4大元素魔術もできてないのに、新しいものに手を出してもいいことはないだろう。

エミリーの魔術オタクっぷりには、頭が下がるばかりだ。

クリスは何をしているかというと。

エミリーとは逆に、エルフの子ども達に剣を教えている。

日に日に習う人数は増えて、もはやちよつとした教室のような有り様だ。

中には大人のエルフも数人混じって、皆でクリスの指導のもと、剣を振っている。

ニートのような生活を謳歌している身からすると、彼女達の行動は身につまされる。

そろそろ、俺も何か建設的なことをしなければならぬだろうか。

……いや、しなくていいかな。

うん、しなくていいな。

……次の一手を思いつくまでは、このモラトリウムを満喫しよう。

そんな怠惰な日々を過ごしていたある日。

カヤレツキが、数人のエルフを連れて訪問してきた。

それぞれのエルフが大きな荷を持っていて、ドサドサと床にそれを降ろしていく。

「君達が来た翌日には回収してただけどき、いろいろ立て込んでたから遅くなっちゃった。ごめんね」

何のことやらと思つてそれらを見ると、俺達の持つてきた装備品だった。

よく忘れずに回収してくれていたものだ。

少なくとも俺は、すっかり忘れていた。

「ありがとう。助かるよ」

カヤレツキともそれなりに仲良くなった。

敬語はいらないと言われたので、最近はタメ口だ。

「まあハジメの装備は、もう使い物にならないと思うけどね。

もしも嫌なことを思い出させちゃったらゴメンよ」

そう言われて、俺のものらしき荷を見る。

「確かにこれは、もうダメだなあ」

包みの中には、腹の部分が砕かれた鎧、切断された杖や、真つ二つになったローブが出てきた。

「やられた時のこと、思い出しちゃった？」

カヤレツキが少し申し訳なさそうに聞く。

「いや全然。普通に覚えてるしな。」

見ても特段、どうってことはないよ」

素直な感想を述べると、カヤレツキは少しホツとした様子だった。

「エミリーの魔術の調子はどうだい？」

気遣い半分、興味半分で話題を振ってみた。

「とても筋がいいよ。」

彼女は理解力がとても高いね。

そして何より、魔術に対する真摯な姿勢が素晴らしい。

あれならすぐに、基礎は会得しちゃうんじゃないかな」

カヤレツキは楽しそうに言った。

エミリーに魔術を教えるのか。

あいつが生徒になるなんて、俺が教師なら考えたくもないな。

ミスを指摘されて、すぐ罵倒を浴びせてきそうだ。

魔術学院の記憶が思い出される。

「……エミリーに教える時は、あいつのことをカメモシって呼んでやってくれ」

ふと、復讐心がわいた。

「何それ？ どういうこと？」

「あいつは厳しく罵られながら勉強した方が、より早く魔術を習得できると信じているんだ」

「そうなの？」

「ああ、間違いない。保証する。」

それがあいつのためなんだ。

だからそう呼んでやってくれ。

もしくはミミズ、ネズミなんかでもいい」

力説する俺に対して、しかしカヤレツキは半信半疑な様子だった。

「うーん。」

じゃあハジメがそう言ってたって前置きをしてから、やってみることにするよ」

俺は発言を撤回した。

カヤレツキ達が帰った後。

ぼんやりと彼が持つてきてくれたものを眺めていた。

杖とロープ。

それらはどちらも、サンドラ村の家族がくれたものだ。

この世界に来て初めて得た、大切な2人の家族。

今頃何をしているだろうか。

せつかくの贈り物をダメにしてしまつて、怒るだろうか。

ニーナの膨れた顔が浮かんだ。

せつかくががんばつて織つたのに、と怒っている。

しかしその顔は、俺が出て行つた16歳の時のニーナのままだ。

今ではもつと大人になっているのだろうか。

食いしん坊な性格は、どうせ変わっていないだろうか。

シータも元気でやっているだろうか。

彼女に貰つた杖のおかげで、今日まで生きてこられた。

真つ二つにされた時も、切断された杖の片方に魔力が集まったのを覚えている。

あれがなかったら、失敗していたかもしれない。

なんだか、無性に彼女達に会いたくなかった。

転移魔術を見つけるといふ目的に沿ってはいないが、人生にはそういうことも必要ではないだろうか。

村を出てからずっと、目的のためだけに行動してきたのだ。

ちよつとだけ、休んでもいいんじゃないだろうか。

そう考えると、なんだか懐かしさが溢れてくる。

……よし。決めた。

一度、サンドラ村に顔を出してみよう。

## エルフの村の一日

とりあえずの予定は決まった。

サンドラ村に顔を出してみる。

当初の目的からは大きく逸れる行動だが、仕方ない。

転移魔術について探ることをあきらめたわけではない。

ただ、少し疲れたんだ。

充電期間というものも、人生には必要だろう。

日が少し傾き始めた昼下がりに。

俺は方針が決まったことを、エミリーとクリスに伝えに行くことにした。

ついでに、見納めになるこの里を見て回ろう。

---

俺達の借家から歩いて20分ほど。

里の真ん中に、エルフの学校がある。

学校というほど規模は大きくないが。

どちらかというと、塾や寺子屋といった風情の建物だ。

カヤレツキはそこで教師をしていて、彼の授業を受けるためにエミリーもそこに通っていた。

これまで中に入ったことはなかったので、新鮮だ。

ちらつと覗いてみる。

教室は全部で3つのようだ。

どうやら年齢や学習の進捗具合によって、受ける授業が違うらしい。

それぞれ覗いてみると、小学生、中学生、高校生くらいのエルフ達が、まじめに授業を受けていた。

エミリーは高校生の教室にいた。

教えているのはカヤレツキだ。

エミリーもまた、まじめに授業を受けている。

魔術学院にいたときの、斜に構えた感じがない。

カヤレツキの言うことに熱心に耳を傾け、ノートに何やら書き込んでいる。

授業を邪魔するのは申し訳ないな。

そう思い、ひと区切り付くまで、小学生の教室を窓から眺めて過ごした。

エルフの成長は、15歳くらいまでは人間と同じ速度らしい。

そこから成長が急激に遅くなり、100歳で大体人間の20歳くらいにあたるのだという。

つまり、この小学生くらいのエルフ達は、みんな人間と同様に小学生くらいということだ。

マジでこの年齢のエルフ達は可愛い。

眼福眼福。

バッグに詰めて家に連れて帰りたい。

はあはあ。

……ん？ 先生？

何ですか？

怪しい者じゃないです。

違うんです。

僕はただ、世界の奇跡を、この目に焼き付けたいだけなんです。

違うんですってば。

追い出された。

授業を覗くことは禁止されてしまった。  
くそつ。

最高の癒しだったのに。

ぶつくさ言いながら校庭をぶらついていると。

ちようど授業終了の鐘が鳴ったので、エミリーの教室に行ってみることにした。

彼女は席に座って、自分のノートを見返していた。

休み時間で周りのエルフ達が楽し気に会話する中、ひとり孤独な空気を醸し出して  
いる。

「調子はどうだい?」

話しかけると、エミリーはビクツと身体を震わせた。

話しかけられることに慣れていない。

完全にぼっちのやつに対応だ。

恐る恐る、といった具合にゆっくりとこちらを見て。

俺に気付いて、いつもの上から目線になった。

「誰かと思えばハジメじゃないの。」

何してるのよ、こんなところで」

「いや、ひとりで過ぐすのも飽きてきてな。

暇つぶしに会いにきたんだ」

エミリーはつまらなそうにペンを回した。

くるりとペンが一回転して、器用に元の位置に収まる。

ちなみにペンは、木でできたエルフ特製のペンだ。

「何か考えが浮かんだのかしら？」

試すような口調で、エミリーは言った。

「ああ。まあ、一応な。

俺の行動の方針は決まった。

また晩飯の時にも話そう」

そう言うのと、エミリーは少し驚いた表情を見せた。

「そう。それじゃ、夕食でね」

休み時間は10分ほどのようで、細かく話す時間はなさそうだ。

すぐに授業開始の鐘が鳴り、カヤレツキが教室に入ってきた。

しようがないので、俺は教室を出る。

次はクリスのところに行こう。

学校のすぐ近くにある、剣術道場。

そこにクリスはいた。

最初は広場でやっていたが、人数が多くなつて場所を移したらしい。「珍しいな。どうしたんだ？」

ハジメも剣術に興味が出たか？」

俺の姿を認めると、クリスは声を弾ませて言った。

……ふうむ。

確かにここらで剣術について学ぶのもありなのかもしれない。

グレイウルフに、キマイラに、こないだの魔族。

近づかれたら、俺はなすべなく致命傷を負ってしまう。

そうならない為に、剣術でも学ぶべきだろうか。

いやしかし、学ぶというのは大変だ。

生兵法は大怪我のもとということわざもある。

まともに使えるようになるにはやはり、数年の訓練が必要だろう。

そんな時間はない。

しかも木剣でたたき合うなんて、痛そうだ。

やめとこ。

「いや、ただひとりで過ごすのが退屈になって、暇つぶしに来ただけだ」

「そうか。」

そういうことなら、ゆっくりと見学していってくれ。

エルフは争いごとが苦手らしいが、中には筋がいい子もいる。

子どもの成長を見るのは、面白いぞ」

そう言って、クリスは指導へと戻っていった。

クリスが向かった先には、30人ほどのエルフ達が目を輝かせて、クリスの指導を受けている。

その大半は子どもで、ちらほらと大人がいる。

——そう、大半は子どもである。

そして、追い出されない。

つまりそこは、俺にとつて楽園だった。

それからずっと、エルフの子ども達が一生懸命木刀を振る様を見ながら過ごした。

クリスより少し早く家に戻って、食事の支度をした。

グータラした生活を過ごすうちに、食事は俺の仕事になってしまっていた。

今日の献立は、パン、サラダ、野菜スープ、オムレツだ。

エルフ達は肉を食べないらしく、タンパク源は卵と豆類くらいしかない。

物足りなくてやせ細ってしまうかと思ったが、案外そうでもなかった。

エルフの里特製の野菜だからだろうか。

不思議とこの里に来てからみんな肌つやがいい。

食事ができたタイミングで、ちょうど二人が帰ってきた。

みんなで食事を並べ、食卓につく。

「それで、どうすることにしたの？」

いただきますの挨拶のあと、すぐにエミリーが聞いてきた。

「そうだな。」

ちよつと情けない話なんだが、一度サンドラ村に帰ろうと思うんだ。

家族の顔が見たくなつてな」

少し、目をそらしながら答えた。

失望されるだろうか。

危険を冒してこんなところまでついてきてくれたのに。

何を目標をあきらめらるようなことをしてるんだと。

恐る恐る二人の顔を見ると、二人とも、微笑んでくれていた。

特に、エミリーがそんな表情を見せるのは意外で。

不覚にもドキリとしてしまった。

「いいんじゃない？」

ここまでできて空振りだったら、もう思いつく手段もないもの。

一度落ち着いて、ゆっくり考えてみるのも悪くないと思う」

そんなことまで言ってくれる。

「うむ。

ハジメは出会った時から、少し生き急いでいるような気がしていた。

その姿勢に敬意も持つが、同時に危ういとも思っていたのだ。

今のハジメには、立ち止まって休むという選択肢も必要だろう」

クリスも、優しい意見をくれた。

ずっと掲げていた目標をないがしろにしているのか。

心の片隅で思っていたそんな言葉。

それが、二人のおかげでなくなっていくのを感じた。

「そうか。ありがとう、ふたりとも」

胸の奥が暖かくなる。

二人とも本当に、いいやつらだ。

「そしたら俺は近日中に、ここを出てサンドラ村に帰ることにするよ」

すつきりとした心持ちで、そう言うことができた。

「……二人は、どうする？」

エルフの里への道のりは危険だから、二人は俺と一緒に来てくれたのだ。

サンドラ村に帰るのに、二人がくる理由はない。

限られた時間を、俺の人生の休憩に付き合ってもらわないだろうか。

「そうだな。」

それでは私も一度、アバロンに戻ろうと思う

伯母も心配しているだろうしな」

クリスが言った。

堅実な選択だ。

そして正しい選択だと思う。

彼女には伯母家族と幸せに暮らして欲しい。

エミリーを見ると、難しい顔をしていた。

眉間に皺を寄せて、口元に手を当て、何かを考えている。

やがて意を決したように顔を上げ、言った。

「私は……ここに残ることにするわ。」

魔術を全然学び足りないのよ」

確かに、もともとエミリーは、エルフの里で魔術の研究をしたいと言つてやってきたのだ。

俺の旅に同伴してくれるための建前かと思つていたが、エルフ達の一部の魔術は明らかにアバロンよりも先を行っている。

それならば魔術マニアのエミリーが、ここに残りたいと希望するのは自然なことだろう。

ウソから出たマコト、という感じか。ちよつと違うか。

「なるほど。いいと思うよ。」

この里は魔術協会なんかより、ずっと魅力的だよな」

そう言うと、エミリーは少し、複雑そうな顔をした。

何だろう。

本当は親元に帰りたいのだろうか。

俺達が家族に会いに行くことに、もしかしたら疎外感を覚えているのかもしれない。だとしたら、悪い事をしたな。

「それじゃ、もうすぐ……お別れね」

エミリーが珍しく、寂しそうに言った。

どうやら先ほどの考察は不正解のようだ。

単純に、別れが寂しいらしい。

だがその言葉は、俺の心にもくるものがあつた。

そうか。

この二人とも、もうすぐお別れなのか。

二人とも、よく俺なんかにつき合つて、こんなところまで来てくれたものだ。

エミリーは、来てみたらラッキーという感じだが、行動を起こすときにそれがわかつ

ていたわけでもないし、やはり俺の身を案じてついでに来てくれたように思う。

本当に、感謝しかない。

「ふたりがいなかったら、俺は死んでいた。間違いなく。」

ふたりとも、本当にありがとうな。

この旅はいろいろあつたけど、全部ひつくるめて、本当に楽しかつたよ」

頭を下げた。

少し泣きそうになる。

しょうがない。終わらない旅はないのだ。

顔を上げると、二人も泣きそうになっているのが分かった。

「よし、今夜は飲もうぜ。思い出話を肴にしてさ」

俺は立ち上がり、戸棚から酒のボトルを取り出す。

テーブルの上にドンと置き、栓を開けた。

それから、これまでの旅を振り返って、飲み明かすことにした。

## 告白イベント②

その宴会は、深夜になっても続いた。

テーブルの上には、空になったボトルが2本。

さらに3分の1程までに量を減らしたボトルが1本。

1人あたまた、1本弱のボトルを空けた計算になる。

エルフ秘蔵のお酒はとておいしかった。

味は白ワインに近い。

果実味が口の中を満たした後、独特のテロワールが余韻として残る。

戸棚に用意されていたが、結構高級品なんじゃないだろうか。

俺達はアバロンで売ったらいくらになるのか想像もつかないそれを、ワゴンセール品のごとくガブガブと飲み明かした。

「結局あれだな。」

俺のキノコ料理で舌がしびれたときが、一番不安だったな」

「ハジメに採取を任せたのが間違いだったわ」

エミリーも結構飲んだはずだが、その姿勢は正しく、所作はいつもと変わらない。

さすがは貴族令嬢といったところか。

「だんだん舌が動かしづらくなつたもんな。

そのまま息ができなくなつたらどうしようかと思つた」

「しかし、ハジメが採つてきたキノコは事前に確認したが、毒がありそうなものはなかつたがな」

「結局、原因は分からずじまいだな、あの事件」

「もしかしたら、何らかの条件で毒を発するものがあつたのかもしれないな」

クリスの顔は真つ赤になっている。

呂律も少し怪しげで、普段よりも身体の線がシャキツとしていない感じだ。

まあ、普段がシャキシャキしすぎている感も否めないが。

とにかく、なんだかいつもよりも、動作に蠱惑的なニュアンスが混じる。

天性の才能か、育ちの良さがなせるわざか。

昔から、クリスは酔うと色っぽくなるのだ。

俺の視線も引き寄せられるように、その胸元へと――。

「ハジメ、おかわり」

目の前にグラスが差し出され、はつと我に返つた。

いかんいかん。

仲間を変な目で見るんじゃない。

近くにあったボトルから、エミリーのグラスに注いでやる。

クリスと出会った頃は、その2つの膨らみから目が離せなくなったりしたが、今は違う。

旅を始めてからは、自分を律しているのだ。

この最高な関係が、俺の劣情なんてもののせいで崩壊してしまうのは、本当に避けたい。

旅の中でも危ない場面は幾度もあったが、見ても見てないふりをして、なんとか乗り切ってきたのだ。

忍耐強さと、ポーカーフエイスキルがともアップした旅だった。

人工呼吸云々のくだりでは、スキルを發揮できなかったが。

しかしその他の対応は、完璧だったはずだ。

誰かが評価してくれるなら、間違いなく最高評価をつけてくれることだろう。

「あ、よ」

エミリーは無言でそのグラスを取り、ひと口飲んだ。

エミリーは美人だが、まだ子供の枠を出ないな。

膨らみは確かに存在しているが、クリスと比べるとどうしてもかすんでしまう。

例えるなら……そうだな、トマトとメロンだ。

もちろんトマトがいいと言う者もいるだろう。

トマトにはトマトの味があると。

しかし大多数の人間はやはり、メロンの方がいいと言うのではないだろうか。

「ハジメ」

「な、なんだ？」

「何考えてるの？」

エミリーが、その銀色の瞳で覗くように俺の目を見る。

「……何も、考えてないよ？」

「そう。ならいいけど」

なんかさつきから、俺の思考が怪しい方向に飛ぼうとすると話しかけてくるな。

昔から、勘の鋭いやつだ。

「エミリーは、この里で何を学んでるんだ？」

クリスがお酒を片手に聞く。

「主には、結界魔術ね。」

アバロンと比べて、明らかにレベルが違うの。

この里の魔術は宝の山のようなものだわ。

結界魔術と治癒魔術については、世界中のどこを探しても、ここほど発展した国はないと思う」

エミリーが上気した顔で答えた。

まあ、新たな魔術の知識というのは、エミリーにとつては喉から手が出るくらいにほしいものだろうな。

家を飛び出したのだから、魔術協会で魔術の研究をするためなのだから。

より発展したことが学べるというのなら、ここに残るのは当然といえるだろう。

「そうか。」

エミリーは、ちゃんとやりたいことがあるのだな。

素晴らしいと思う。

私はまだ、それを見つけられていないからな」

確かに、クリスはこれからどうするのだろうか。

実家に帰ってニートになるのか。

まあ金に困ったら、冒険者として生きていけば食うには困らないだろうが。

キマイラを倒したものの、彼女はまだモラトリアムの最中といったところか。

「ハジメについていったりはしないの?」

エミリーが、クリスを見つめて言う。

気のせいかな、やけに真剣な表情に見える。

「ははっ。」

何を言っているんだエミリー。

もちろん今回のように危険な旅ならば、私はどこへだって同行するつもりだが、育った村への帰省についていくというのはまるで……。

まるで……？」

クリスがハツとした顔になる。

「いや、そんなわけではない……。」

そんな、わけは……。」

目を閉じて、ぶつぶつと独り言のように呟いた。

しかしそうしているうちに、徐々に頭の角度が下がっていき、言葉も不明瞭になっていく。

クリスの呂律が、本格的に怪しくなってきた。

こいつと何度か飲んだ経験から分かる。

そろそろ限界が近い。

「ああ……しかし、楽しい、夜だ。」

ハジメ、もう一杯、くれないか？」

グラスに水を注いで渡すと、クリスはそれをグイツと煽った。

もはや酒か水かも分かっていないかもしれない。

そして飲み終わると、パタリと机に突っ伏してしまった。

続いてスपीースピーと、寝息が聞こえて来る。

「……ありやりや。」

こりやできあがつちまつたな。

エミリー、クリスを運ぶのを手伝ってくれるか？」

俺がクリスの右腕を自分の首に巻きつけて立たせると、エミリーは無言で頷き、反対側の肩を支えた。

しかし剣を振るう威力からは想像もできないほど、軽い身体だ。

この身体のどこに、魔族と渡り合えるような力が眠っているというのだろうか。

まあ、この世界の剣士はみんな、魔力を肉体に作用させて戦うらしいから、筋力とかはあまり関係ないのかもしれないが。

「よっしっし」

半ば放り投げるように、クリスをベッドに寝かせる。

弾みでわずかに胸が腕に当たる。

考えない考えない。

「よし。」

それじゃあ俺達も寝るとするか」

伸びをしながらそう言ったが、エミリーはなおも無言だった。

「どうした？」

もう少し飲むか？」

その問いかけにも、無言。

上気した頬のまま、睨むようにこちらを見ている。

「いったいどうしたってんだ？」

大丈夫か？」

飲みすぎたか？」

心配になってそばに近づくと。

グイッと。

袖を掴まれた。

「ちよつと来て」

間髪入れず、歩き出す。

掴まれた袖に導かれるまま、俺も脚を動かす。

そのまま、外に出た。

火照った身体に夜風が気持ちいい。  
そこらで虫の音がする。

星明かりのおかげで、道を踏み外すことはなさそうだ。

エミリーは俺の袖を引つ張つたまま、ずっと無言で歩いている。

どうしたのだろうか。

急に、何かの霊に身体を乗っ取られたりしたのだろうか？

だとしたら、大人しくついていいたら、最終的には食べられてしまうのではなからうか。

昔話のお婆け達は、なんで人間を食べるやつと殺すだけのやつといるんだろうな。

どうでもいいことを考える間にも、てくてくと道を歩き続ける。

いつたどこに向かっているというのか。

聞いてみようかな。

「おい、どこに行くんだ？」

「……………」

無言である。

本当に意識を乗っ取られたのではないかと疑いたくなる。

しかし袖に感じる指先の微妙な力加減と、歩く足取りの確かさからすると、やはりエ

ミリーは自我を保っていると推察される。

つまり、彼女は俺の言葉を完全に無視しているということだ。  
無視。シカト。

よくないと思うな、そういうの。

そんなことをされれば、誰だって傷つくんだぜ？

その言葉を念じて、エミリーの背中にテレパシーを送ってみたが、何の反応もなかった。

そのまましばらく歩いて、広場に出た。

昼間はエルフの子供たちや家族でにぎわっているが、今は夜。

当然ながら、誰もいない。

虫達が音楽を奏で、月と星に照らされた広場は。

なかなか幻想的な感じがした。

広場の中央付近まで歩いたところで、ようやく手を離された。

エミリーは振り返らないまま、立ち止まる。

「……で、何をするつもりなんだ？」

背中に向かって聞いてみる。

反応なしかな、と思ったら、エミリーがこちらを振り向いた。

ツインテールがふわりと舞い、いい匂いがする。

「あのね、ハジメ……」

振り向いたその顔は、夜でも明らかに分かるほど、紅潮していた。

そしてその瞳も、いつもより潤んで見える。

しかし俺と目が合うと、すぐに視線は下がり、うつむいてしまった。

両手で部屋着のスカートの裾を、ぎゅつと握りしめている。

そしてそのまま、エミリーは黙ってしまった。

なんか既視感があるな、この光景。

どこだったか……そうだ。

アバロンで初めてこいつに出会った時だ。

あの時もこんな感じで、向かい合ったまま沈黙していた。

あの時は確か、エミリーに謝らせようとしたけど、どうしても謝罪の言葉がその口か

ら出てこなかったのだ。

エミリーの実家でも似たようなことがあった。

それらの結果から推察すると、つまりエミリーは今、何か言いにくい事を言おうとし

ているということか。

なんだろう。

何か俺に隠れて悪い事でもしていたのだろうか。

実は俺をこちらの世界に飛ばしたのは、エミリーだったとか。

なんて、そんなわけがあるか。

どうやら俺も酔っ払っているらしい。

思考が今一つまとまらない。

「あの……その……」

エミリーはうつむいたまま、視線を左右に彷徨わせる。

その度に揺れるツインテールの動きが、なんだかわいらしい。

こいつも黙っていれば、非の打ち所がない美少女なのだが。

いやしかし。

最近、罵倒されることもずいぶんと減ってきた気がするな。

そういえば、長らくカメムシだのミミズだのと言われていない。

エルフの里に来て、何か心境の変化でもあったのだろうか。

「……あのねっ」

意を決したように、エミリーが顔を上げた。

震える唇を噛んで、必死にその先の言葉を紡ごうとしている。

……さあ、何を言うのだろうか。

まあ、何でもいいさ。

どうせ魔術か何かに関することだろう。

「……私は、ハジメの事が好き」

急に、虫の声がやんだ気がした。

風も吹かなくなつた。

世界が止まったかのように感じる。

いや、本当は、止まっているのは俺の方だ。

今聞いた言葉を、脳が処理してくれない。

指一本、動かせない。

……え？

もっかい言つて？

「愛しているわ。ハジメ」

ご丁寧に繰り返し返してくだすつた。

しかもニュアンスがエスカレートしてる。

「待て。」

待ってくれ、エミリー」

エミリーは真っ赤になってうつむきながらも、視線は俺の眼を捉えていた。そしてその瞳は、不安げに揺れている。

「じよ、冗談だろ……?」

「冗談じゃ、ないわ」

俺の眼を真っ直ぐに見つめたまま、エミリーは言った。

しかし、納得がいかない。

「だつてお前は昔、俺のことなんかかけらも好きじゃない、なんて言つてたじゃないか。

それに……そう。

なんかこの感じも、既視感があるぞ。

お前の実家についていった時だ。

あの時もそんなこと言つて、それは嘘だつて言つてたじゃないか」

エミリーの告白が予想の斜め上を行き過ぎて、現実味が全くない。

まるで脊髄反射のように、状況を否定しようとする言葉が飛び出してくる。

「それは、ハジメに嘘をついていたの。

本当は、あの時お父様に話した通り。

私はあなたのことが好きだから、グレンデルの名を捨てて、あなたの旅についてきた」  
いや待て待て。

だっておかしいだろう。

エミリーは出会った時からずっと、俺に対して喧嘩腰だった。

口を開けば罵倒の嵐だったあの頃を、俺は忘れていない。

いや確かに最近は少しなりを潜めてはいるが……。

「仮に、お前の言う事が本当だとして、いつから？」

「いつから俺の事……その、好きだったの？」

「最初からよ」

「え？」

「だから、最初からよ」

エミリーは顔を真っ赤にしてうつつむいている。

しかし意味が分からない。

あれが好きな相手に対する態度だとしたら、クレイジーすぎるだろ。

「——わ、私だって驚いたわよ！」

ハジメと話すと、いっばいいいっぴあ」

「え？」

「……い、一杯一杯になって、気づけばあんな感じになっちゃってたのよ！」

もはやエミリーは、恥辱で今にも死にそうな顔になっている。

……やばい。

ちよつと信じ始めてきた。

エミリーがこんなことを言うなんて、どんな裏があつてもあり得ない気がする。

例えここでクリスが「ドッキリ大成功！」なんて書いた看板を手に物陰から飛び出てきても、ダメーჯはエミリーの方が大きい。桁外れに。

まじか。

この娘が、俺のことを好き？

まじ？

性格を除けばめちやくちやかわいいこの女の子が、俺のことを？

「な、なんでその……今になって、言ってくれる気になつたんだ？」

氣づけば俺の心臓は、早鐘のように鳴り響いていた。

「多分ずっと、言えないだろうって思つてたの。」

私はこんなだから、伝えようとしても絶対、失敗すると思つてた」

うん確かに。

それは想像に難くないな。

「でもこの旅で。」

考えを根本から覆される出来事が起こつたの。

……魔族との戦闘で、ハジメの心臓が止まった時

恐怖を思い出したような、エミリーの声。

なぜだか、ヒヤリとした。

胸に手を当てて。

この心臓は、一度動きを止めたことがあったのだと、その言葉で実感した。

「胸に耳をあてても、何も聞こえなくて。

息も、しなくなつて。

私はハジメが、死んじゃったと思つたの」

少し、鼻にかかったような声。

見ると、エミリーは泣いていた。

「クリスとつ、2人でがんばつたけど。

ハジメはどんどん、冷たくなっていつて。

胸を押しながらかつ、思つたの。

こんなことになるならつて。

こんなことになるなら、せめて、伝えておけばよかったつて」

溢れる涙をそのままに、エミリーはまっすぐに、俺を見つめていた。

「私は、あなたが好き。」

好きよ、ハジメ」

そう言って、エミリーは笑った。

顔は涙でぐしゃぐしゃだ。

しかしその笑顔は、これまでに見た彼女の表情の中で最も、美しかった。

「……今は、返事はいらない。」

ただ、伝えておきたかったの」

そう言って、エミリーは涙をぬぐった。

「私はエルフの魔術を学ぶつもりだから、どうあれハジメとは離れることになるわ。」

また会えたら、その時に返事を聞かせて」

……おやすみ、と言いついて残して。

エミリーは歩いていった。

残された俺は、その場にへなへなと座り込んだ。

虫の音が響く中。

俺は一人、ぼんやりと夜空を見上げていた。

## 告白イベント③

エミリーの衝撃の告白から、2日後。

もうこの里でやることはないの、装備を整え、旅立つことにした。

もうしばらくで、出発の時間だ。

出発は長老をはじめとして、カヤレツキやクリスの生徒たちが見送りに来てくれる手はずになっている。

あの後、エミリーとはうまく話せずにいた。

目が合うとお互いに顔が赤くなって、何も話せなくなってしまうのだ。

朝と夕の食事くらいしか顔を合わせる機会はないから、それほど支障はないが、当然違和感を感じるやつが出てくる。

「……なあハジメ。

最近エミリーと何かあったのか？」

ドキイッ!

……と音がしそうなほど、俺の心臓が跳ねた。

「いつ、いつ、いや?」

何もないけど？

何？

なんかおかしいか？」

「その態度が既におかしいが……」

朝食後、エミリーが出て行った後、クリスが聞いてきた。

はあ、と、クリスはため息を吐く。

「一体どうしたというのだ？」

2日前に飲んだ時は普通だったじゃないか。

明らかに、あの後から態度がなんだかよそよそしくなってるぞ。

私が眠った後、何かあったんだろう？」

鋭い。

しかしここで素直に白状するわけにはいかない。

「いやその、あの後ちよつとアイツと喧嘩してな。

ちよつとしたことで言い争いになっちやつて。

そのせいで少し、ギクシヤクしててな」

「……やっぱりそうか。」

そんなことだろうと思った」

すごくクオリティの低い嘘だったが、クリスは簡単に騙された。「しかしハジメ。」

もうすぐ離れ離れだというのは、このタイミングでそれでは、いささか寂しくはないか？

どういう事情かは知らないが、ハジメだってエミリーを本気で許せないわけではないんだろう？

旅立つ前に、仲直りしたらどうだ？」

「あ、ああ。」

……そうだな、その通りだ。

ちよつと、エミリーの所に行ってくるよ」

ああ、胸が痛い。

とにかくクリスとの会話を早く終わらせるために。

俺はまた嘘をついて、家を出ることにした。

---

家を出たものの行くあてもなく。

適当に一人で時間を潰すと、出発の時間になった。

クリスと一緒に荷物をまとめて、里の出入り口まで馬車で移動する。そこには既に、ギャラリーが集まっていた。

長老やカヤレッキを筆頭に。

多くのエルフ達が、俺とクリスを乗せた馬車を出迎えてくれた。

その中には当然、エミリーもいる。

馬車を降りると、長老から挨拶があつた。

内容は俺達への感謝が主で、話の最後に贈り物をくれた。

やたらと重い風呂敷だ。

何が入ってるのかわからないが、後で見るとしよう。

お世話になったエルフ達に、別れの挨拶を済ませた後。

いよいよ見送りの段になって、俺達のもとにエミリーが寄ってきた。

エミリーと目が合う。

銀色のまつ毛の奥に、大きな瞳。

先日のことがよみがえって、目を逸らしそうになってしまう。

……いかん。

これでは同じことの繰り返しだ。

脇でクリスが期待した表情で、俺とエミリーを見ている。

「エミリー、それじゃ、一足先に戻るよ。」

「……また会おうぜ」

何とか目をそらさずに、それだけの言葉を絞り出した。

「……そ、そうね。」

また、会いましょう」

エミリーも我慢したのか、赤面しつつも、俺の目を見て頷いた。

「……どうやら無事に、仲直りできたようだな。」

いろいろあったが、この旅は本当に楽しかった。

また必ず、3人で集まろう」

クリスが満足げに微笑み、エミリーと握手をする。

「私も、すごく楽しかったわ。」

絶対に、また会いましょう」

エミリーも嬉しそうに答え、しばしの会話を楽しんだ後。

俺達は馬車へと乗り込み、帰路についた。

行きと比べて、帰りは早かった。

里長が、森の抜け道を知っていたのだ。

その道を通ると、3日ほどで近くの街道に出られた。

そこから最寄りの街までさらに3日歩き、その後は馬車で移動。

計10日ほどで、トリアノンまで着いてしまった。

トリアノンでは酒場に立ち寄り、あの店員に会った。

俺達の帰還を喜んでくれたが、冒険者が返ってこなかった理由やエルフの里について話すと、半信半疑といった雰囲気だった。

からかわれていると思ったのかもしれない。

一応、エルフ達はこれから、人間とも繋がりを持とうとしているらしく、森に立てた目印はそのままいいと言われた。

そのうちエルフの使者がやってくると伝えても、やはり店員は半信半疑だった。

トリアノンで一泊した後、馬車に乗ってアバロンへと帰った。

1ヶ月ほどの道中だったが、特に問題なく過ぎていった。

一度だけ魔物が道に現れたが、クリスが即座に切つて捨てた。

昔、ユリヤンと一緒に旅をしたときも、こんなことがあったなど、懐かしく思った。ユリヤンは、今頃何をしているだろうか。

やつが話していた通りなら、今頃は戦線にいるのだろうか。

無事に過ごせているといいが。

ちなみに長老に貰った袋を開けてみると、中身は金貨だった。

かなり年代物でレリーフは摩耗してしまっているが、重さからすると純金製のようだ。

売るところに売ればかなりの額になりそうだ。

ありがたやありがたや。

特に何事もなくすんなりと、アバロンに到着した。

城壁の奥に、白亜の尖塔がのぞいている。

相変わらず、アルシユタツト城は綺麗だ。

宿を決めようとしていたら、クリスの家に誘われた。

以前一度、クリスの家で食事したことがあり、家族とも顔見知りだ。

せっかくなので、お邪魔させてもらうことにした。

クリスの家族は皆、俺を歓迎してくれた。

翌朝。

クリスの家を出た。

もう、アバロンには特に用はない。

街を歩けば懐かしくもなるだろうが、それよりも早く村に帰りた。

サンドラ村に手紙を送ろうかとも思ったが、届くのにか月以上かかる。

今から書いても俺の方が早く着いてしまうかもしれないので、辞めておくことにした。

「乗り合い馬車で帰るなら、ここからだ」と北門が近い。

最寄りの乗合所まで案内しよう」

そう言って、クリスがついて来てくれた。

乗合所に着いて、出発時間を調べる。

すると、一番早い馬車でも、小一時間ほど後だった。

「せっかくだから、喫茶店にでも入るか？」

おごつてやるよ」

ジャラリと財布を取り出しながら、少し尊大な物言いをする。

「それはありがたい。」

「お言葉に甘えるところ。」

クリスは、ややおどけた口調で同意した。

出発の時間まで、そばにあった店で時間を潰すことにした。

「……こうしていると、出会ったばかりの頃を思い出すなあ」

対面のクリスを見ながら言った。

「こいつと出会ったばかりの頃。」

狩りの後で、反省会と称して二人で酒を飲んだものだ。

「確かに。」

あの頃は、キマイラを倒すために必死だったな」

「そうそう。」

クリスは今より張り詰めた感じだったし、俺も余裕がなかった気がする」

「思えば。」

このアバロンでの日々が、俺の青春なのかもしれない。」

劇的に何かが変わったというわけではないが、なんとなくあの頃とは様々な考え方や感覚が違っている。

アバロンの景色に親しみを覚えるが、それでいて少し、色彩が薄まって感じる。

それは、この街に長く住んだことだけが理由ではあるまい。

俺も歳をとった。

大人になったということか。

「少し、寂しいな」

窓の外を見ながらぼやいてしまう。

景色は昔と変わらず、穏やかな陽気に包まれていた。

「……なあ、ハジメ」

「ん？」

「ハジメは、アバロンに戻ってくることはあるのか？」

このまま離れ離れなんてことは、ないよな？」

そう聞いたクリスは、不安そうな目をしていた。

まるで捨てられた子犬のような目だ。

珍しく、その瞳にいつもの力強さが宿っていないかった。

「……なに馬鹿言ってるんだ。」

必ず戻ってくるよ。

3人でまた会おうって、約束したろ」

クリスの頭をポンポンしてみる。

通報されかねない行為だが、この場、このタイミングならイケる、と俺の中の何者かが叫んでいた。

「ああ、そ、そうだよな……」

クリスはどぎまぎしながらも、避けたりはしなかった。

赤くなって俯いている。

しかしクリスの髪はサラサラで、最高の触り心地だ。

ほんのりいい匂いもする。

嫌がられてないことに調子に乗った俺は。

もう少しの間クリスの頭を撫でるために、適当なセリフを並べてみることにした。「俺にとつて、お前らはかけがえのない存在なんだ。

絶対に、また会いに来る。

もしそれまでの間に困ったことがあつたら、すぐに連絡してくれ。

絶対に、全速力で駆けつけるから」

キラッと歯を光らせてスマイル。

これでどうだ。

頭を撫でるといいう行為が、ギリギリ自然になったはずだ。

「——好きだ」

……ん？

今なんか聞こえた気がする。

「……なんか言ったか？」

「好きだ。ハジメ」

……あれ？

幻聴かな？

なんだかデジャヴを感じる。

つい最近、同じようなことがあった気がする。

頭から手を離してクリスを見ると、本人もびっくりしたような顔をしていた。

「そう、だったんだ。」

私は、ハジメのことが。

好き……だったんだ」

クリスは、自分の気持ちを反芻するように繰り返した。

……待て待て。

落ち着け。

落ち着け俺。

頭の中がいつぱいいつぱいになるから。

エミリーのことは、村に着いてからゆっくり考えようと思つてたんだ。

ひたすら、その出来事から目を背けつつ過ごしていた今日この頃。

ここにきてまさか、クリスマスにも同じことを言われるとは。

これはもしかして、モテ期つてやつか？

フェロモンみたいのが出てたのか？

やっぱり危険な旅を共にしたら、俺みたいなのでも魅力的に見えてきちゃうのか？

いや、そんなことを考えている場合じゃない。

どうするんだ、この状況。

どうしたらいい。

同時に2人の女の子から、告白をされてしまった。

考えてみよう。

もしも俺が転移なんてものに縁がなく、目的もなく普通にこの世界で暮らしていたなら。

大喜びで、この状況を謳歌しただろう。

じっくり考えてどちらかを選び。

ゆつくりとさらに関係を深めて、幸せな人生を送ったことだろう。

二人とも、とても魅力的な女の子だ。

どっちを選ぶかなんてものは、現時点ではまったく考えつかない。

だがそれだけを考えて生きるのであれば、いずれは選ぶこともできるはずだ。  
しかし。

俺には目的がある。

今は前向きな気持ちは沸かないが。

だからといって放り出してもいいとは、到底考えられないのだ。

自分の存在、世界の存在に対する疑念というのは。

少しずつ、精神を蝕んでくる。

最近それを思い出さずにいられたのは、原因究明のために前進していたからだ。

立ち止まってしまえば。

また自分の存在レゾンデートルの儚さに、鬱々とした感情が沸きあがってきてしまうだろう。

転移魔術について手がかりを探しながら。

どっちかを選ぶなんて器用な真似は、きつとできない。

何よりも。

自分ですら自身のことを理解できていない、こんな状況で、誰かを愛することなんて、できるわけがない。

「ハジメ……」

思考のさなか、クリスに声を掛けられてハツとした。見ると、彼女は心配そうな顔でこちらを見ていた。

……俺は今、どんな顔をしていただろうか。

クリスにしてみれば、人生で初めての告白のはずだ。

しかも、クリスの気持ちは本当にうれしい。

だというのに、マイナスな思考を表情に出してしまっていた。

なんて愚かな男なんだ俺は。

「……突然こんなことを言ってしまったてすまない。

大丈夫だ。

私も今、自分の感情に気付いたくらいだからな。

ハジメに返事を求めたりしない」

クリスは少し悲しげな笑顔を浮かべて言った。

「どうやら私は、離れてしまうことに対する不安が強かったみたいだ。

今まで、また会おうと言って死んでしまった冒険者を多く見てきた。

ハジメもそうなってしまいうんじやないかと、怖くなった。

同時に、それほど離れることを不安に思う理由がなんなのか、理解してしまつてついで、口をついて出てきてしまったんだ」

クリスはバツが悪そうに頬をかいた。

「私のようなガサツな女から、こんなことを言われても困るだろう……すまない。いつそ、忘れてくれ。」

私なんかより器量のいい娘はいくらでもいるからな」

「違う！」

思わず、テーブルを手で叩いた。

クリスは驚いた顔をしている。

「違うんだ、クリス」

「……違う、つて？」

「俺は、クリスに好きだなんて言ってもらえて、本当に嬉しいんだ。」

一切、困ってなんかいない。

クリスみたいな魅力的な女の子が、俺のことを好きになつてくれるなんて。逆立ちしてもありえないと思つてたよ」

エミリーに告白されたことは言うべきだろうか。

……いや、エミリーだって、思いを振り絞って言ってくれたんだ。むやみに話すのは、無神経だろう。

代わりにこの告白も、エミリーには伝えない。

「……ただ、俺自身の問題なんだ。

前に話した通り、俺はこの世界の人間じゃない。

そして以前の世界でだって、両親が誰なのかも知らずに育ったんだ。

自分が何者なのか分からない。

この世界に來た理由も分からない。

明日、目が覚めたら全部夢だった、なんてこともあり得ると思ってるんだ。

そんな不安定な人間が誰かを好きになっても、うまくいかないと思うんだ。

だからクリスに魅力がないとか、そんな話じゃないんだ。

むしろ、クリスはめっちゃくちや魅力的だよ」

思ってることを、包み隠さず言ってしまった。

「……そうか。

ありがとう、ハジメ。

おかげで私の自尊心は、傷つかずにすんだよ」

本心がどうなのかは分からないが、とりあえず、クリスは笑ってそう言った。

「事実しか言っていないんだから、別に礼なんていらないよ。

むしろ、俺の方こそありがとう。

俺なんかを、好きになってくれて」

自分を好きでいてくれる誰かがいるというのは、心があたたかくなる。

この世界にも自分の居場所があるのだと、少しでも思える。

クリスとエミリーには本当に、感謝しかない。

外で、馬車が来たことを告げる笛の音が鳴った。

「……そろそろ時間かな」

「そうだな、行くとするか」

立ち上がりかけたとき、クリスが言った。

「ハジメ、最後にこれだけは言わせてくれ。

長い間一緒にいて。

転移の件が、ハジメにとって非常に重要なのは承知している。

自分の存在意義が見出せないでハジメが苦しんでいることも、薄々わかっていた。

自己犠牲といえれば聞こえがいいが。

その中に自殺願望のかけらすら、感じられることがあった」

その言葉に、内心でドキリとする。

それが凶星だったからだ。

この世界でも、地球でも。

俺は、自分が異分子であるという自覚をぬぐえずにいる。

自殺願望とまではいなくても。

自身の価値を軽んじているようなところは、否めない。

魔族の攻撃に迷わず突っ込めたのも、そんな感情が無意識にあつたからなのかもしれない。

もちろんエミリーを救いたいという気持ちの方が、圧倒的に大きかったとは思うが。

「でも、ハジメ。

聞いてくれ。

私は例えハジメが何者であれ、貴方のことが好きだ。

それはハジメが、ハジメだからなんだ。

その人が誰なのかを決める、最も重要なものは、生まれでも生い立ちでもなく。

その人に関わった者なんじゃないかと、私は思うよ」

そう言って。

クリスは扉を開け、外へと歩いて行つた。

クリスが開けた扉は、閉まることなく。

俺が通るのを待っていた。

## 魔法都市ヴィルガイア編

## 帰郷

クリスと別れた後。

サンドラ村を目指して、馬車を乗り継いだ。

ひとりぼっちになってしまった。

人と旅するのに慣れ過ぎて、すごく寂しく感じる。

クリスが最後に言ってくれた言葉。

人の存在意義は、他者が決める。

なんだか刺さるものがあり、何度も反芻しているうちに。

少しずつ、そうかもしれないと思うようになってきた。

俺がエミリーやクリスを大切に思うのは。

彼女達が、彼女達だからだ。

生い立ちや過去は、彼女らを形成する一つの要素ではあるかもしれないが、俺の好意とは関係がない。

だとしたら。

もしかしたら彼女達も同様に。

俺という人格そのものを、好きでいてくれるのかもしれない。

転移だとか、以前の世界だとか、俺の身には得体のしれない事が起こっている。

そのせいで俺は、自分に自信が持てない。

それは間違いない。

しかし、それらの出来事が俺という人格を作っていることも、間違いない。

ということはむしろ、それらのおかげで。

彼女達が好きでいてくれる「俺」が生まれたと言っても、過言ではない。

そう考えれば、転移のせいで俺が感じているこの焦燥は。

彼女達の想いを受け入れてしまうことで、解決できるのかもしれない。

……いいのだろうか。

あきらめてしまっても。

眠るときには、明日には世界が変わるんじゃないかと、いつも不安になる。

この世界が、以前の世界の俺が見ている夢なんじゃないかとも思える。

俺が何者なのか、何一つ分かっていない。

そんな状況だから、俺は今まで、自分に起こったことを追い求めてきた。

だが、そんなことに人生を使って、何の意味があるだろうか。

それよりも、彼女達のどちらかを選び。

地に足をつけて生きていく方が、はるかに幸せじゃないだろうか。

俺が俺である理由は、彼女達が教えてくれるんじゃないか。

道中ずっと、そんなことを考えていたら。

いつの間にか、クレタの街に到着していた。

街に到着して、いくつかの買い物をした。

ニーナにはブレスレット、シータには高級なカシー豆。

さらにパンや干し肉、酒などを大量に買って、サンドラ村へと向かう。

相変わらず村までの乗合馬車はなく、道中は歩きた。

レンガの敷き詰められた道を、ひたすら歩く。

目に入る景色は昔と全く変わらず、懐かしさで胸がいつぱいになる。

ニーナと一緒に、いつもこの道を歩いていた。

俺の思い出の中のニーナは、あの頃のままだ。

16歳の、天真爛漫な少女。

最後に見送られたときのその姿で、止まっている。

……でも、もうすぐ。

もうすぐ、少し成長した彼女に会えるはずだ。

しばらく歩くと、レンガの道の脇に、雑草を踏み分けた獣道のような道が出てくる。

こんな道まで、全く変わっていない。

ここまで来たら、あと少し。

日が落ちてきて、そろそろ夕方にさしかかる。

穏やかな日差しのかなか、風がさわさわと音を立てる。

このあたりは、ニーナと初めて会った場所だ。

出会う方は、お世辞にもいいものではなかったが。

あれから、6年ほど。

あの時は言葉も分からず、右往左往するだけだった。

今では、言葉はペラペラだし、魔法なんてもので覚えた。

このまま、時を刻んでいけるなら。

そのうち、こちらの世界で過ごした時間の方が長くなるだろう。

……そうなるという確証がないのはやはり、苦しいが。

門が見えてきた。

日没までは、まだかなり余裕がある。

門番に手を振りながら、門をくぐる。

門番もなんとなく、俺のことを覚えていてくれたようだ。

手を振り返してくれた。

村は、何も変わっていないかった。

時間がゆっくりと流れているかのような、穏やかな気配だ。

たまに知り合いを見かけて、挨拶をする。

そのまま道を歩き、ついに家の前にたどり着いた。

——鼓動が高鳴る。

彼女達は、どうなっているだろうか。

最近連絡を取れずにいたが、無事に過ごしているだろうか。

一度深呼吸をして、ゆっくりと扉をノックした。

「はい。ちよつとお待ちくださいね」

懐かしい声でした。

少し鼻にかかった、高い声。

ガチャリと扉があく。

「はい、どちら様で……」

そこまで言つて、俺と目があつた瞬間、彼女は固まってしまった。

そして、俺も固まってしまった。

扉の奥には、ニーナがいた。

流れるようなブロンドの髪、アイズブルーの瞳、真つ白な肌。

少しだけ背が伸びて、顔立ちも大人びたが、あの頃のあどけなさはまだ残っている。

そのまま数秒間にらめっこした後。

ようやく、口を開くことができた。

「……ようニーナ、ただいま」

「うそ……ハジメ？」

「うそじゃない、俺だ。」

「ハジメだよ。……久しぶりだな」

扉が大きく開いた。

蝶番が壁に激突して、大きな音をたてる。

その音が届くよりも速く、ニーナが飛び出して、抱きついてきた。

「……もうっ！」

心配したんだからねっ！

最近手紙書いても帰ってこないし！

無事だったなら、連絡してよ！ もうっ！」

「すまんすまん。

手紙を書こうと思ったんだけどさ。

でも俺の方が速く着きそうだったから」

「もうっ！」

それなら仕方ないけどっ！

しばらく離さないからね！」

ニーナは泣きながら、俺の胸に顔をうずめて。

「……無事で、良かったあ」

はあ、とため息をつき、そのまま静止してしまった。

俺が動こうとしても、服をつかんで離さない。

服は彼女の涙で、結構濡れてしまった。

ようやく中にいれてもらえたのは、それからしばらく経ってからだった。

「……で、どうしたんだい？ ハジメ。」

あなたがこの世界に來た、その理由は分かったのかい？」

久しぶりの、3人の食事。

シータが腕によりをかけて、夕食を振舞ってくれた。

俺が買ってきた食材が、豪勢な料理になって、テーブルを埋め尽くしている。

「いや、いろいろと探したんだけどさ、今のところまだ見つかってないんだ」

トクトクトク、と、買ってきた酒をグラスに注ぐ。

ニーナが、脇目でそれを凝視していた。

こやつ、見ない間に酒の味を覚えたな。

「そうかそうか。」

まあ、一筋縄ではいかないだろうさね。

あせらず、ゆつくりでいいんじゃない？

私は、あなたがこうして帰って来てくれただけで、それだけで嬉しいよ」

シータはにっこりと笑って、そう言ってくれた。

彼女は笑うと、顔にえくぼができる。

見ない間に少しだけ、その皺が深くなったように感じた。

「私も私も！」

私も、ハジメが帰って来てくれて、本当に嬉しいよ！」

はいはいっ、とニーナが手を挙げながら、シータに同意する。

「うまい飯と酒が飲めるからか？」

「もうっ！」

ハジメに会いたかったからでしょ！

……まあ、少しはそのお酒にも興味はあるけど」

ニーナがちらちらとグラスを見る。

早く飲みたくてしようがないようだ。

まあ、正直なところ俺も、早く食べたくてしようがない。

懐かしいシータの手料理だ。

「じゃあ、冷めないうちに頂いちゃいましょうかね」

シータの号令でグラスを合わせ、食事を開始した。

スプーンでスープを口に運ぶと、懐かしい味が口に広がる。

アバロンではめつたに見かけない、カシルスの葉のスープだ。

その他の料理も、あの頃のままだった。

もはや俺の中では、故郷の味だ。

「相変わらず、シータの料理は絶品だな」

料理を手当たり次第に口に突っ込みながら言った。

「まあ、大げさなんだから。」

そんな大したものじゃないわよ。

それに最近は一ーナも、このくらいの料理は作れるようになったわよ」

「……え、マジ？」

俺は驚愕して、ニーナを見る。

「な、何よそのマジって。」

言っとくけどね、私だってやろうと思えば、料理くらい作れるんだからね。

今日はハジメがお母さんの料理を食べたいだろうから、遠慮したけど。

疑うなら、明日にでも作ってあげるわよ」

なんと。

ビッグニュースだ。

包丁なんて一度も握ってなかったあのニーナが。

やはり見えない間に、成長を重ねていたのだ。

「なんで料理なんて覚えようと思ったんだ？」

「わ、私だってもう一人前の女なんだから。」

料理のひとつくらい、できた方がいいかなって思ったの」

「へえー」

感心だな。

と思つたら、目の前のシータがなんだかニヤニヤしていた。

「この子ね、最近ジャック君と仲がいいのよ。」

たまにお弁当を作つて持つて行つたりするものね。

私は、そのために料理を習つてるんじゃないかと思つてるんだけど」

「——お母さんっ！」

パンツとニーナがテーブルをたたく。

その顔は真つ赤だ。

「へえ、ジャック君つていつたらアレだよな。」

昔俺に因縁つけてきて、ニーナがひっぱたいた彼だよな？」

懐かしい。

俺としては、あんまりいい印象はないが。

「そうそう、みんなで家に謝りに行つた、あのジャック君よ。」

でもなんだかね、その後しばらくして、ジャック君からちやんと告白されたんだつて。

『僕は君に見合う男になるから、それが叶ったら、結婚して欲しい』つて。

それはもう情熱的に言われたらしいのよ。

ジャック君も、その後本当に頑張つてね。

この子も少しずつ、惹かれていつてるみたい」

「わあーっ!! もうっ!!」

お母さん、やめて!!」

ニーナがいたたまれなくなつて、ついに机に突っ伏してしまった。

ジャック君か。

そういえば確かに、会いに行つた時にはちゃんと反省していて、そんなに悪い奴じゃないような気はしたな。

だからといって好感度は中の下くらいだったが。

ニーナにしてみればもつと低かつたんじゃないだろうか。

印象最悪なところから、お弁当を作つてもらえるまでになるとは。

やるな、ジャック君。

「今度、ジャック君と会つてみたいな」

よくも俺のニーナを、みたいな嫉妬心は、不思議なほどに湧いてこない。

ニーナには、幸せになつてほしい。

それを手助けしてくれる男がいるなら、俺はそいつの味方にしかなれないようだ。

「ええー……」

あー、でもまあ、うん。そうだね。

彼もね、ハジメに改めて謝りたいって言ってたから、今度一緒にご飯でも食べよつか」

ニーナは逡巡した後、了承してくれた。

顔を真っ赤にして、うなだれている。

ニーナが、恥ずかしい時にする仕草。

昔から変わらない光景だ。

……しかし、そうだな。

この家には男が俺しかない。

『お前なんか、娘はやらん！』と、

浮かれる青年に世間の厳しさを教えるのは、俺の役目だろうか。

……ジャック君との食事までに、とるべき態度は整理しておこう。

そのためには禿げカツラと付けヒゲを用意して――。

「ハジメ、なんか変なこと考えてない？」

「いや、何も？」

「それならいいけど……言つとくけど、普通でいいからね。

ジャック君とどうなるかなんて、私にもわかんないんだからね。

『お前なんかには、妹はやらん！』とか、先走ったこと言うのだけはやめてね」  
……こいつ。

俺の考えを完全にトレースするとは。

昔どこかで話したことでもあつただろうか。

「……言わない言わない。」

ジャック君がどう変わったか、楽しみにしとくよ」

「なんだか信用ならないなあ。」

……まあいつか。

明日会う予定だから、都合を聞いてみるね」

「ああ。」

俺はいつでも大丈夫だから」

「了解。」

……ああ、お酒無くなっちゃった。

ハジメ、もう一本あけてもいい？」

「もちろん」

ニーナはアイスペールから酒を取り出し、ふたを空けてグラスに注いだ。

「ほら、ハジメも飲むでしょ？」

「あ、ああ」

俺のグラスはまだ半分くらいしか空いてないのだが。

しかしニーナは俺のグラスにも注ぎたそうにしている。

しようがないから一口で飲み干し、新しい酒を注いでもらった。

「あ、これ美味しい。」

さっきのも美味しかったし。

ねえ、今日のお酒って結構いいやつなんじゃない？」

俺も一口飲んでみると、確かにうまかった。

「本当だ。美味しいな。」

クレタの街の酒屋で、おすすめを聞いて買ったんだ。

すごく高いってわけじゃないけど、ほどほどに値は張ったかな」

「そっかあ」

ニーナはグラスを掲げ、ランプの光にその色を透かした。

「……ね、そろそろハジメの話聞かせてよ。」

旅に出てからの、全部。

手紙では読ませてもらってたけど、どんなことをして、どんなものを見てきたのか、ハ

ジメの口から聞いてみたい」

「いいけど、長くなるぞ?」

「望むところよ。……ねえ、お母さん?」

「もちろん。」

あなたが何をしてるのか、考えない日はなかったんだから。その分を埋められるくらいに、たくさん話してちょうだい」  
シータはにつこりと笑った。

両手を前に出して、俺に話せと合図してくる。

「……わかったよ。」

えーつと、まずは村を出てアバロンに向かうところからだな。

途中の馬車で面白いやつと一緒にたてさ——」

それから俺は、これまでの旅のことを話した。

ユリヤンと出会ったこと。

アバロンで冒険者をしていたこと。

クリスと出会ったこと。

魔術学院のこと。

エミリーと出会ったこと。

エルフの里を目指す旅のこと。

ニーナは興味津々で聞いてくれて、いろいろな質問や感想をくれた。

「アバロンでは何が一番おいしかった？」とか、「エルフってホントにいるんだ！」とか。そのせいで、俺の語りにも興が乗り。

話し終える頃には、空が白んできてしまった。

## 今後の方針③

さて。

今日で、村に帰ってきて10日目になる。

帰って来てからずっと。

だからだと、ニーナのように生活している。

やったことといえば、ジャック君との食事くらいだ。

ジャック君は、なかなかの好青年に成長していた。

開口一番、「あの時は本当に申し訳ありませんでした」と、ビシッと謝られた。

ニーナに対する思いは昔から変わらないようだ。

ニーナを幸せにするために、家業を継ぎつつ資格の勉強なんかをしているそうだ。

ニーナも、その頑張っている姿に惹かれていた様子だった。

俺もその様子を見て、彼にならニーナを任せられると思った。

……のだが。

実際にジャック君と会ってみて、ニーナとの仲睦まじい様子を見せられると。

なにやら、心の中にスキマ風が吹いたような気がした。

もちろん俺はニーナに幸せになって欲しいし、それには相手が必要なのだ。

分かっちゃいるのだが、ニーナが離れていくような気がして、寂しさを感じる。

表に出さないようにはしたが。

娘を持つ父親というのは、こういう思いをしていたのか。

結婚式で、新婦の父が泣くわけだ。

そして、何よりも。

皆が人生のステージを進めているというのに、俺だけが同じところに留まってしまっている気がしてしまう。

もちろん、旅によって得られたものはたくさんあった。

しかし肝心の目的が果たせてない以上。

根本的な部分では、旅に出る前と変わっていない。

人生ゲームで例えるなら、みんなが就職、結婚なんかをしている時に、『転移の原因を探す旅にでる。100回休み』なんてコマに止まっているような感覚だ。

俺だつてもう、結婚していたつておかしくはない年だというのに。

やはり、焦ってしまう。

本当に、人生をそんなものに捧げていいのだろうか。

とはいえ、未だに俺の自分への自信のなさは健在だ。

この世界に来てもう相当な時間が経つというのに、未だに明日も自分がここにいられると、無条件に信じられない。

ベッドで寝たら、同じベッドで朝目覚める。

そんな、誰もが持っている当たり前の安心感が、俺にはないのだ。

眠った翌朝には、別の世界に飛ばされるかもしれないし、地球に戻ってしまいかもしれない。

原因が分からないのだから、他の何かが起こってもおかしくはないだろう。

そんな不安を解消するためには、やはり、原因を探るしかない。

それは間違いない。

間違いないのだ。

ここまでの話は、何度となく俺の中で議論されてきたことだ。

そしてその度に、「原因を探すしかない」という結論になり、その考えをより強固にしてきた。

しかし旅を経て。

村に帰ってきた今なら。

少し違う視点から、それについて考えられる気がする。

まず、俺の目的について考えてみる。

俺の目的。

——それは、幸せになることだ。

転移の原因を探するのは、あくまでそのための手段でしかない。

ただ、これまででは、その手段は必須なのだと思っていた。

この不安を取り除かないと、幸せになどなれないと思っていた。

しかし。

あの時クリスが言ってくれた言葉。

「自分の価値は、他者が決める」

その言葉が、別の道を示してくれた気がした。

子どもの頃から、俺が誰かに受け入れられたことなんて、一度もなかった。

そのうえに転移なんてものが身に降りかかった、奇妙な人間。

こんな自分が何者かも分からないような人間は、価値が低いと思っていた。

こんな訳の分からない存在を、好きになつてくれる人なんていないと信じていた。

昔二ーナ達と旅行をしたときに、同じ部屋で寝るのをためらったことや。

クリスに自殺願望と言われたそれと。

本質的には同じかもしれない。

俺は自分自身に、価値を見いだせていなかった。

だから女の子と付き合ったり、家庭を築いたりなんて、考えられなかった。だがそんな俺を。

あの魅力的な2人の女の子が、好きだと言ってくれるなら。

こんな俺に、価値があるのだと信じてくれるのなら。

自分から見た自分の評価なんてかなぐり捨てて。

そつちを信じれば、いいのかもしれない。

この世界に、やって来た時。

打算なしの友情を。

掛け値なしの愛情を。

生きていく意味を。

手に入れたいと、俺はそう願った。

前者2つはすでに叶った。

考えてみれば、それだけで、以前よりずっと幸せだ。

こちらに来て、出会った人達のおかげだ。

こんなに大切に思える存在があるなんて、以前の世界では考えられなかった。

「生きていく意味」なんて。

自分を見てくれる誰かが、決めてくれたらいいんじゃないか。

誰かに必要とされて、大切だと思ってもらえたなら。

それだけで、生きてることに意味がある。

いや、それこそが、生きている意味なんだと。

そんな風に、考えられるようになった。

例え、自分に自信がなくなっても。

誰かがずっとそばにいて、自分を愛してくれるというのなら。

俺は、幸せに生きていける気がする。

……だとしたら。

もう結論は出たようなものだ。

クリスとエミリーの思いを受け入れて、どちらかを選んで。

旅なんかやめて、どこかの街で一緒に生きていく。

それが俺の人生。

それが、一番幸せじゃないか。

もちろん様々な苦労はあるだろう。

理不尽な不幸に、嘆くこともあるだろう。

それでも、俺のことを想ってくれる人がそばにいるなら。

俺は幸せだと、そう信じることができる。

たまにみんなでも酒でも飲めたら、それだけで最高だ。

そんな未来が、とても輝かしく思えた。

しかしまあ、問題点はあるが。

まず、どちらを選ぶのかという問題。

そして、クリスとエミリーのどちらかを選んだら。

三人の友情に、亀裂が入るのではないかという問題。

……だが、それらは副次的なものだ。

これまでに展開した論理が正しいなら、俺はそつちを選ぶべきなのだ。

……よし、決めた。

あとひと月の間に考えが変わらなければ、そうすることにしよう。  
すなわち。

転移魔術の探索など諦めて。

アバロンで冒険者か魔術学院の講師にでもなつて。

クリスとエミリーのどちらかと、一緒に人生を歩む。

そう決めてしまえば。

かなり、気が楽になった。

正直、もはや手がかりがなくなつた転移魔術を探し続けることに、疲れていたのかも  
しれない。

このままあとひと月。

村でゆつくりと過ごしながら。

今後の人生を、決定しよう。

## 小旅行

村の生活にも、だんだん慣れてきた。

さすがに何もしないのも飽きてきたので、俺は魔術を使って村人のボランティアを始めた。

使うのは主に土魔術だ。

家の補修をしたり、村の周りの塀を強化したり、川の堤防を強化したり。

それらはとても感謝されて、色々なお礼をもらった。

お礼は全部、シータへと渡したが。

「ハジメの魔術、やっぱりするこいよね！」

ほら、前から私が言っていた通りでしょ？」

今しがた堤防を作った俺を、ドヤ顔でニーナが見つめてくる。

確かにニーナは、俺が初めてファイアを使った時からずっと、俺の魔術を褒めてくれていた。

「ああ、そうだな。

ニーナの言う通りだったよ。

俺の魔術は、少し人よりもすごいみたいだ」  
「ね、だから言ったじゃない！」

全く、ハジメは昔から、自信が足りないんだから」  
ニーナは嬉しそうに寸評してくる。

なんで俺のことなのに、俺に対してこんなに自慢気なんだ。  
彼女も、魔術の訓練は継続しているらしい。

アイスの魔術なら、かなりの回数が使えるようになったらしく、もう冷蔵庫の氷を絶やすことはない。

さらに、頼まれた時には他の村人のために魔術を使って、村で重宝されているのだという。

「やっぱり、ハジメは私よりずっとすごい魔術師だったね」

その言葉に、一切の嫌味はなく。  
嬉しさだけが伝わってきた。

なんだかこつちまで嬉しくなってしまう。

まったく、やっぱりニーナはニーナのままだな。

そんなことをしながら、のんびりと過ごしていたある日。

ふと、思い立った。

——そうだ。

海を見に行こう。

サンドラ村はこの大陸の、東の端っこに位置する村なのだ。ここから2日ほど歩けば、大陸の東端にたどり着くはず。

別に海に何の用があるわけでもない。

だが、ちよつとした旅行気分で足を伸ばしてみたくなった。

もしアバロンに戻るとしたら、一生見られないかもしれないのだ。

見えておいて損はないだろう。

その日のうちに準備を済ませ。

翌朝に出発した。

行き方は、シータが知っていた。

村に流れている川をそのまま下っていけば、2—3日で着くという。

旅は道連れと、ニーナを誘ってみたが断られた。

服の依頼がたてこんでいるらしい。

最近、シータよりも多くの服を手がけているんだそうだ。

「シータに代わってもらえば？」と言いかけたが、さすがに無責任だと思い諦めた。

そんなわけで、俺は今、森の中を歩いている。

村に流れる川を下っていたら、半日ほどで森に突き当たった。

それからはずっと森の中。

辿っている川を見失うことはないが、たまに合流してたりする。

帰り道で間違えないか、少し心配だ。

すでに、2日は歩いている。

森の中だが、魔物は全然いない。

昔はそれが当たり前だったが、今となってはむしろ違和感を感じるな。

今にもグレイウルフが襲いかかってきやしないかと、無意識に警戒してしまう。

一向に現れる気配はないが。

野営を2度行つたが、リュックの中の保存食は全然食べていない。

簡単に獲物が手に入るからだ。

ここまでの道中で、鹿を1頭と、一角ウサギを2羽頂いた。

昔は獲るのに苦労したが、今では風魔術で一発だ。

捌くのも慣れたもの。

こうして考えると、俺も成長したものだ。

さて、なけなしの自尊心を高めながら歩いていると。

少しずつ、潮の匂いが鼻をつくようになってきた。

微かだが、波の音も聞こえる。

海が近づいてきたのだ。

なんだか、足がはやる。

子どもの時に遠足で目的地が近づいてきた時の、あの感じだ。

そのまましばらく歩いたら、ついに森が途切れ、砂浜が見えた。

いても立ってもいられず、ダツシユで砂浜へと向かう。

快晴の空の下。

ザクザクザクと、砂浜特有の足音が響く。

目の前には、大きな海が広がっていた。

初めてお目にかかる、こちらの世界の海だ。

「……でかいなあ」

思わず呟いた。

やはり海は大きかった。

波が寄せては返し、その度に砂浜に濃淡を作った。

水平線の彼方には、海と混ざり合いそうな、雲一つない空。

なかなか見応えがある景色だ。

来てよかった。

しばらくそのまま、ぼんやりとながめていた。

服を脱いで泳ぎたくなるが、それは我慢する。

残念ながらこの世界の海には、魔物がうようよしているらしい。

船で海を渡ろうと、何度も試みられては失敗してきたのだという。

木製の船では、船底に噛みつかれて穴を開けられるらしい。

そして鉄の船を作る技術力はまだない。

結果として、海は魔物のものになっているのだ。

美味しい魚もたくさん泳いでいるのだろうが、残念ながら漁はできない。

だからこちらの世界で食卓に並ぶのは、川魚のみだ。

昔、一度でいいから大トロというのを食べてみたいと思っていたが、その願いは叶わ

なそうだ。

「さて、寝床でもつくるか」

せっかくなので、一泊していくことにした。

潮騒の中で眠るのは、心地良さそうだ。

土魔術でテントと椅子を作り、薪を集めて焚き火を行う。

持ってきたポットに水を入れて、焚き火にくべた後。

沸いたお湯を使って、カシーをドリップした。

椅子に座りながら、一服。

開放感がすごく、気分がいい。

これはクセになりそうだ。

カシーが空になると、少し眠気がやってきた。

まあ、この辺りに襲ってくるような魔物がいないことは確認済みだ。

このまま寝てしまっても、問題あるまい。

遅めの昼寝を決め込むでしょう。

---

目が覚めたら、日が沈みかかっていた。

しかし野営の準備は既に終わっている。

夜になる前にやることは、特にない。

しばし、オレンジ色の海と空を堪能して過ごした。  
間もなく、夜になった。

真つ暗でも見えない中に、波の音だけが響いている。

海の中には魔物がうじゃうじゃいるかと思うと、少し不気味さが出てきた。  
焚き火の明るさだけが頼りだ。

しかし。

上を見上げれば、満天の星空だ。

村でも味わえるが、背の高い建物などが視界に入る。

水平線のすぐ上に星が見えるのは、なかなかオツな光景だ。

「綺麗だなあ」

俺は、テントに入るのがバカらしくなり。

砂浜に雑魚寝して、夜を明かすことにした。

## 廃墟

朝日と共に目が覚めた。

水平線から日が出てくるのを、初めて見た。

初日の出って、こんな感じだろうか。

ザザーンザザーンという潮騒が変わらず聞こえている。

また豆を挽いて、カシーを淹れる。

……いい気分だ。

昨夜、星を見ながら今後のことについて考えたが。

結局、結論はそれまでと変わらなかった。

方針に変更なし。

とりあえず海は満喫したので、村に帰ることにした。

---

来た道を間違えないように、川沿いを登る。

行きと同様に2日かけて森を歩き。

木々のカーテンを抜けると、草原が一面に広がった。

……しかし。

そこはなぜか、行きと別の場所だった。

行きに覚えたものとは、似ても似つかない景色が広がっている。

どうやら、道を間違えたらしい。

おそらく、離合する川の分岐を、ぼんやりして読み違えたのだろう。

しようがない。

また川を下って、合流する地点を探そう。

別に急ぐわけでもない。

そう思って、また森へと入ろうとした時。

——その場所に、見覚えがある気がした。

「……なんだ？」

こんな所に、来たことはない。

どこかで見た似たような景色をダブらせているのだろうか？

「……いや」

違う。

絶対、見たことがある。

川のそばの木々の形が、強烈な既視感をもたらしている。その感覚を追って少し歩くと、道に出た。

レンガを敷き詰められた、舗装された道。

初めてこの世界に来た日、必死で歩いていたあの道。

「……なるほど、そういうことか」

ここは俺が転移して、初めて水を飲んだ、あの川だ。なんて懐かしい。

ここで飲んだ水の旨さは、今でも鮮明に思い出せる。

あの時はまだ、この世界を夢だと思っていた。

今でも、否定できたわけじゃないが。

「……となると、この道を辿ればサンドラ村に戻るわけか」  
そして。

逆方向に進むと、俺が初めてこの世界に来た場所である、廃墟があるはずだ。

……そういえば。

以前疑問に思ったことがあった。

このレンガ道は、相当なコストをかけて作られたものだ。

これだけの距離の舗装された道を作るのは、さぞ大変だったことだろう。だというのに。

クレタの街からこのレンガ道を通って行けるのが、サンドラ村しかないのだ。乗り合い馬車も通してもらえない村に、そこまでの価値がある訳がない。

しかも正確には、サンドラ村にも行けない。

村に行くためには、あの獣道を通らねばならないからだ。

だとしたらこのレンガの道は、何のためにあるのか。

あの廃墟の奥に、街があるのだろうか？

しかし、何度もあのレンガ道を通ってクレタの街へと行ったが、そちらから来たという人は見たことがない。

「……ちよつと、寄り道してみるか」

せつかくの機会だ。

一度行ってみて、道の先を見てもみるのもいいかもしれない。

あの時と違い、食料や水に困ることはないのだ。

俺は、村の逆方向へと、歩き始めた。

そのまま歩くこと、7時間ほど。

もう日が暮れようとしていた時、ようやくあの廃墟が見えてきた。暗くなってきたのでそれ以上の移動はやめて、野営を行った。

翌朝。

2時間ほど歩いて、俺は廃墟へとたどり着いた。

とはいえ、ここはゴールではない。

知りたいのはこの道の先に、何があるのかだ。

そのまま、歩き続けてみる。  
すると。

道は、そこで途切れていた。

舗装されたレンガ道は。

廃墟の中へと進むように折れ曲がったきり、途絶えてしまったのだ。

これはどういうことだろうか。

つまり、大変な労力をかけて作られたであろう、このレンガ道は。

さびれた廃墟とクレタの街を繋ぐためにあったのだ。

なんのために、そんなものを作ったのか。

……と考えると、なんてことはない。

答えは明白だ。

この廃墟だって、昔から廃墟だったわけではないのだ。

栄えていた都市との交流のために道を作ったが。

その都市が戦争か何かで滅びてしまった、ということだろう。

栄枯盛衰。

夏草や、つてやつだ。

しようもない結果に終わったが。

とりあえず、この道の先を見ると、当初の目的は果たした。

もう帰ってもいいのだが、せっかくここまで来たのだ。

俺が初めてこの世界に来た場所を、見てみるのもいい気がしてきた。

瓦礫しかなかったはずだが、あの時は混乱していた。

何か、転移にかかわる手がかかりがあつたりするかもしれない。

そう考え、その場所に向かってみることにした。

かなりおぼろ気な記憶だが、迷いながらもなんとかたどり着くことができた。

かなり時間はかかったが。

たどり着いたのは、まさにあの日、目覚めた場所。

もう7年ほど前のことだというのに、あの時のままの景色だった。さて。

7年前、孤児院で眠ったら、俺は気付けばこの場所にいた。

その原因を探るべくこの世界を旅してみたが、結局それは、空振りに終わった。

……それならば。

俺が転移した場所の調査を行うというのは、至極まっとうに思えてきた。

帰り道を間違えてよかった。

何か、手がかりはないだろうか。

パツと見た限りでは、何もない。

ただの瓦礫の山だ。

ところどころ苔むして、虫が這ったりしているだけだ。

とりあえず、辺りを手当たり次第に探してみる。

何かないだろうか。

土埃や苔を払って、瓦礫の表面を見てみる。

それから2時間ほど。

辺りの瓦礫をあさったが、特に何も手がかりはなかった。

……ダメか。

何もわからない。

いや、せつかくここまでできたのだ。

できることは全部やってみよう。

もしかしたら瓦礫の中に、何かあるかもしれない。

「ストーンバレット！」

俺が寝ていたと思われる瓦礫を、魔術で破壊してみた。

手荒いが、ほかに方法も浮かばない。

瓦礫は音を立てて砕けた。

土魔術で破片を持ち上げ、断面を見てみる。

特に何もなかった。

「……ダメか」

結局、何も手がかりは得られなかった。

まあ、行き当たりばったりにやってきただけだから、もともと期待していたわけではない。  
ない。

こんなことで見つかるなら、今までの苦労は何だったんだというところだ。

帰ろうかな、と思ったところで、ふと目に入った。

砕いた瓦礫の奥。

瓦礫を砕いたことで、新たに見えるようになった部分。

ただの地面に見えるが、微かに。

蓋のようなものが見える。

なんだあれは。

土魔術で周囲の瓦礫を取り除き、その場所を調べる。

土と苔で覆われているが、鉄製の扉があつた。

土魔術でそれをこじ開ける。

その下には。

「……階段？」

階段があつた。

地下へと続いている。

しかし、数段下から先は、瓦礫で崩落してしまっていた。

「地下室か何かだったのか？」

状況を整理しよう。

俺が転移した場所の真下に。

鉄製の扉で隠された、地下室があつた。

……これは偶然だろうか。  
ここを調べれば。

もしかしたら、何か手がかりがあつたりしないか？

「…………ふうー」

……落ち着こう。

空振りの可能性は十分にある。

地下室なんて、別に珍しくもない。

まだ、浮足立つには早い。

焦らず、慎重に進めよう。

それから、俺は瓦礫を取り除く作業を行った。

地下室の壁や床を、可能な限り保存しつつ、瓦礫を取り除いていく。

手で運べるものは手で。

重くて持てないものは、魔術で慎重に。

数時間かけて。

俺は、全ての瓦礫を取り除いた。

そしてついに。

地下室の全容が明らかになった。

それほど広くはない。

畳10畳分くらいのスぺースだ。

天井もあつたのかもしれないが、恐らく瓦礫として撤去してしまった。  
さて。

一番奥のところに。

一段高く作られた部分がある。

そこには、不思議な幾何学模様が描かれていた。

崩落による損傷で、多くの部分は失われてしまっているが。

明らかに、誰かが描いた模様だ。

円を枠組みとしたデザインに、文字や図形が書き込まれたもの。

——これを言葉にするとしたら。

「魔法陣」が、もつともしつくりくるだろう。

……興奮を抑えられない。

これは明らかに、転移魔術の手がかりではないだろうか？

俺は、自分の胸にあるアザを見た。

この模様は、それに酷似している。

細かい部分は違うが、同じルールに従って描かれている気がする。

しかし、どういふことだろうか。

このアザは、俺が物心ついた時からあったのだ。

俺はずっと、以前の世界で育ってきた。

それなのに、転移した先のこの世界に、このアザと似た模様の魔法陣が存在する。

奇妙な話ではないか。

……まあいい。

考察はあとでたつぷり行うことにして。

今は、もう少しこの部屋を調べよう。

隅から隅まで。

見落としがないように。

土や埃を払いながら、俺はひたすらに調査を続けた。

何時間経過しただろうか。

日が沈みかけ。

夜が近づいた、その時。

魔法陣の奥の壁に、奇妙な部分を見つけた。

壁の中でそこだけ独立した石でできていて。

手で押すと、押したただけ陥没していく。

「なんだ、これは？」

悩んだが、押し切ってしまうことにした。

右手の平で、その部分を押ししていく。

壁が手首を過ぎ、肘を過ぎ、肩に届きそうなところで。

一番奥に、到達した。

何かが起こるかと思いきや、特に何も起こらなかった。

しかし、辺りを見回すと。

すぐそばの足元に、さつきまではなかった石のでっぱりが出現していた。

試しにでっぱりを押ししてみると、壁の穴がもとに戻った。

……なんだこれ？

もう一度壁を押し。

出現した石を、良く調べてみることにした。

よく見ると、その石には直線状の切断面がある。

つまり、蓋があつた。

その蓋を開けると、そこには――。

一冊の、本が置かれていた。

# 魔法都市ヴィルガイア①

<語り部視点>

統一暦1515年。

大陸の東の果てに、その国は誕生した。

国と呼べるほどの広さはなく。

魔物の狩猟による発展も見込めず。

農業に適した肥沃な土地もない。

しかし。

そこに住む者達は皆、魔術への情熱を持っていた。

始まりは、小さな集団であった。

魔術の探求に人生を捧げる、8人。

様々な理由で、自分の魔術研究を奪われた者達だった。

彼らは協力して、人のいない安全な土地に住処を造り、そこで研究に没頭した。

研究の合間に、食べ物を食べ。

研究の合間に、水を飲み。

研究の合間に、息をしていた。

彼らはすべからく、魔術を愛しており。

彼らはすべからく、魔術の天才であった。

彼らが、研究を発表する度に。

その発展性、美しさに気づく者が必ず存在した。

そんな者たちが1人、また1人とそこへ加わり。

少しずつ、人が増えていった。

人が増えると、統制をとる必要が出てくる。

そこで、全住民による話し合いの結果。

最初の8人を貴族とし、中でも最も魔術の才に長けた1人を王として、王国としての体裁を取ることとなった。

8人は研究の時間が削られることを嫌がったが、周囲の強い後押しにより、渋々受諾した。

国名は王の名を取り、ヴィルガイア王国とした。

それから、200年の月日が流れる。

国の精神は、世界の魔術を少しずつ発展させていった。

上級結界魔術の発見。

魔法陣の実用化。

聖級四大魔術の発見。

転移魔術の基礎理論の構築。

彼の国が進展させた魔術研究は枚挙に暇がなく。

その影響は、魔族との戦闘にも如実に現れた。

ヴィルガイアの魔術により。

それまでとは段違いに、戦闘を有利に進められるようになったのだ。

魔族が攻めてきても、損害なく撃退できるようになった。

いっしかその小国は。

感謝と敬意を込めて、魔法都市ヴィルガイアと呼ばれるようになった。

---

統一暦1731年、ヴィルガイア王国。

その王城の一室を、一人の男がうろうろと歩き回っていた。

男の名は、エドワードⅡフォンⅡヴィルガイア。

第12代目ヴィルガイア国王、その人である。

国王でありながら、自身も魔術の研究者として数々の功績を残した。特に転移魔術についての知識は、大陸に並ぶ者がないと称されるほどである。研究を発展させ、善政を敷く。

賢王エドワードと、誰もが彼を敬った。

しかしそんな彼が、寝起きの熊のように、部屋の中を歩き回っている。

表情はすぐれず、顎髭を右手でわしゃわしゃと弄り回していた。

溜め息をつき。

マントが床につくのもはばからず、座り込む。

(……知らせは、まだ来ないのか)

座り込んだまま、もう一度溜め息をつく。

一国の王には全く相応しくない、一連の所作であった。

エドワードが3度目のため息をつこうとした、その時。

ドタバタと、廊下を走る音が聞こえてきた。

「……きたか!？」

エドワードは立ち上がり、扉の前でスタンバイする。

その直後に扉が開き、侍女が入ってきた。

「陛下! 無事お生まれになりました! 男の子です!」

「——でかした！」

知らせを聞くや否や、エドワードは部屋を飛び出した。

全速力で廊下を走り、目的地へと向かう。

「マリー！ よくやった！」

勢いよく扉を開けると、愛する妻が天蓋付きのベッドで横になっていた。

侍女達が水を運んだり、タオルを交換したりとせわしなく動いている。

妻は疲れ切った様子だが、その表情はとても幸せそうだ。

こちらに気付いて、さらに深く微笑んだ。

「あなた、男の子です」

そう言つて、腕に抱いたそれをみせてくる。

指をくわえて、スピースピーと寝息を立てる愛おしいそれは。

妻の懐妊以来ずっと楽しみでしかたなかった、わが子の姿であった。

「よくやってくれた。マリー。」

疲れただろう。ゆっくり休むといい」

感動に震えつつ、なんとか妻をねぎらう。

涙が出そうになるのを、歯を食いしばって必死でこらえていた。

そんなエドワードを見て、マリーは苦笑しつづつ言った。

「ありがとうございます。ですがその前に、教えてください」

「教える？」

「ええ。この子の名前を」

名前。

そうだ、名前を決めなくては。

出産前にいろいろと候補を考えていたが、陣痛が始まってうつちやったままになっていた。

候補はええと、何だったか……。

普段の聡明さはどこへやら。

エドワードは傍から見ても分かるほどに、平常心を失っていた。

名前、名前、とぶつぶつ呟く夫に。

さらに苦笑して、マリーは言った。

「抱いてみますか？」

はい、と。

布に包まれた我が子を、夫へと差し出す。

「お、おお」

そんな、返事と呼べるかも怪しいような声を出して。

エドワードは、手を前に出した。

妻から我が子を受け取り、両腕に抱く。

その瞬間。

体温が2、3度上昇したかと思うような温かさが、胸を満たした。

急に、視界が広がったように感じる。

「……ははっ。」

かわいいなあ。目元はマリーにそっくりだ」

そのまましばらく、エドワードは我が子を抱いていた。

赤子は相変わらず、のんきな顔でスピースピーと寝息を立てている。

「……よし、決めた。」

この子の名前は、レオナルドだ。

レオナルドⅡフォンⅡヴィルガイア。

いい名前だろうか？」

自慢気に笑ったその表情は、もう落ち着きを取り戻していた。

「ええ。とつても」

その様子を見て安心したマリーは、夫に両手を差し出す。

名残惜しい表情をしつつ、エドワードは赤子をマリーへと返した。

部屋の外には、出産の間に仕事を手につかなかったツケが押し寄せている。

苦虫を噛み潰したような顔をして。

エドワードは、部屋を後にした。

夫のいなくなつた部屋で。

マリーは赤子——レオナルドを腕に抱き、幸せだった。

「……レオナルド。」

あなたの名前は、レオナルドよ」

その名を呼ぶと、まるでこの世の全ての憂いが消え去つたかのような気がした。

暖かな昼下がり。

静かな部屋の中。

穏やかに眠り続ける、我が子の顔を。

マリーは、いつまでも見ていた。

## 魔法都市ヴィルガイア②

ヴィルガイア国王、エドワードⅡフォンⅡヴィルガイア。

彼には野望があった。

それは、魔族との戦争で命を落とす人をなくすこと。

幼い頃から、親しい者を魔族との戦争で失ってきた。

子どもの頃、何人もの友人の親が戦争で死に、友人の泣き顔を見た。

青年になり、その友人たちが、戦争で死んでいった。

初恋の人も、戦争で死んだ。

それは、この世界においては、ありふれた話だ。

全ての国は、魔族との戦争に協力する義務がある。

戦線から遠く離れたヴィルガイアの地においても、それは例外ではない。

エドワードを含め、ほぼ全ての国民は魔族を見たこともないというのに。

その得体の知れない存在によって、大切な人が消えていく。

しかしそれは、誰もが受け入れている、当然の話。

誰かが魔族と戦わなければ。

ヒトは滅んでしまうというのだから。

エドワードも、そのことは理解していた。

しかし、理性と感情は別にある。

親しい者が死ぬ度に、エドワードの心は軋み、その痛みに悲鳴を上げた。

エドワードはずっと、戦争の終結を願っていた。

そして15歳になった日。

ヴィルガイアにおいて、成人として扱われるようになった日。

エドワードは己に誓った。

この国の王となり、魔族との戦争を終結に導くことを。

ほとんどの王政の国家と同じく、ヴィルガイアの王もまた、王子の中から選ばれる。

王子たちは、その生き様によって自らの器を王に示し。

王の判断で、次の王が決まるのだ。

そして、ヴィルガイアは伊達に魔法都市と呼ばれているわけではない。

元をただせば、その王族というものの成り立ちすら、魔術の才によるものなのだ。

すなわち、このヴィルガイアにおいて。

魔術の功績は、唯一無二の価値基準である。

15歳の誕生日の翌日から。

エドワードはひたすらに、魔術の研究に没頭した。日々の生活から、一切の無駄を省き。

その才の全てを、魔術の研究に注いだ。

朝日より早く目覚め、研究をし。

誰もが寝静まった真夜中まで、研究をしていた。

研究するのは、転移魔術。

最高の頭脳を持つ、幾多の魔術師達が挑戦し。

その全てが未踏に終わった、超高難度の魔術だ。

しかし、それが完成すれば。

現在の世界の状況を、根本から変えることができる。

そのメリットを挙げれば、枚挙にいとまがない。

情報の伝達にかかる時間がなくなる。

各地から即座に戦地へと、兵を送り込むことができるようになる。

魔族の住む西の大陸に、奇襲をかけることもできるようになるだろう。

現状、魔術の発展により、少しずつヒトは魔族に対して優位に立つことが可能になってきている。

その発展に、ヴィルガイアが大きく寄与したことは言うまでもない。

特に、四大聖級魔術の発見が大きかった。

何度も魔族に滅ぼされそうになっていた、かつてとは異なり。

ようやく、ヒトは魔族と対等以上に戦えるようになってきたのだ。

しかし、まだ足りない。

戦争を終結させるには、もう一步。

もう一つ、大きな進歩が必要だった。

そしてエドワードは、転移魔術こそが、その進歩のカギとなり得るものだと思っていた。

研究に没頭した結果。

エドワードは18歳の時に、偉業を成し遂げた。

それは、転移魔術の基礎理論の構築だった。

机上の空論でしかなかった転移魔術を、実現可能性のあるものへと昇華させた。

その論文は大きく評価され。

その世紀を代表する論文の一つとなった。

実用化には遠いが、過去の天才達が挑み敗れたその魔術の、理論化に成功したのだ。

エドワードの名は、一躍世界へと知れ渡った。

そして王は。

その能力、その性格、その功績を見て。

次の王に、エドワードを選んだ。

25歳の時。

エドワードⅡフオンⅡヴィルガイアは、王となった。

しかし、まだ半分。

エドワードの目指す頂は、さらに高みにあつた。

王となり、その権限を躊躇なく利用しながら。

エドワードはさらに、転移魔術の研究を進めていった。

---

「アルバス、首尾はどうだ？」

レオナルドが生まれてから、3日が過ぎたこの日。

エドワードは、国立魔術研究所を訪ねた。

「おう、上々だぜ。陛下」

広い部屋の隅に机があり、大量の本が積まれている。

アルバスと呼ばれた男は。

そこにかじりつくように、何やら図形を描いていた。

「陛下はよせ。」

……それで？ 結果は？」

「成功だ。見てろよ？」

アルバスは、引き出しから一枚の紙を取り出した。

紙の上には、奇妙な幾何学模様が描かれている。

それを床に敷き、その上に羽ペンを置いた。

「魔力は大丈夫か？」

「心配いらねえよ」

アルバスは羽ペンに向かって手をかざす。

すると――。

「おおっ！」

紙の上にあつた羽ペンが消えた。

それと同時に、エドワードの目の前に羽ペンが現れ、落ちる。

ペン先が床に触れ、カツンと音を立てた。

「どうだ？」

「完璧だ！」

魔法陣を見せてくれ」

アルバスは床に敷いた紙を拾い、エドワードに渡した。

「ほらよ。」

やつぱりお前の言う通り、外縁に三重円を採用したのがよかった。

あそこから正解を見つけるのは、ただの作業だったよ」

「いや、それでもやり遂げられるやつは、この国に2人といないだろう。

よくやつてくれた」

アルバスⅡロレント伯爵は、エドワードの子どもの頃からの友人だ。

魔術の才に恵まれ、互いに切磋琢磨しつつ、ともに青春を過ごしてきた。

加えて。

アルバスは他人にはない、ある特殊な才能を持つ。

エドワードの悲願をより確実なものにする、唯一無二の才能を。

「……ようやく、この時がきたな」

この日。

10年以上の歳月をかけて、ついに。

——転移魔術が、完成した。

エドワードは、己の手が震えていることに気付く。

それは歓喜の発露か、武者震いか。

全身に気力が満ちていた。

「ああ。

だが、本当にやるのか？

俺の感覚なんて、怪しげなものを根拠に。

どうなってもしらねえぞ？」

頭を掻きながら、アルバスは知己を見る。

その目は、かつて王になると宣言した時と同じ、強い意志を秘めた目だった。

「15の時からずっと。

今この瞬間のために、やってきたんだ。

ここまできて、やめられるか」

「……わかってるよ。

聞いてみただけだ」

アルバスは肩をすくめ、ポケットから葉巻を取り出した。

「子ども、生まれたんだな」

「ああ」

「かわいいか？」

「……かわいい。」

この世のものとは思えんほどだ」

アルバスは葉巻を咥え、魔術で火をつける。

子どもの話題になった途端、エドワードの顔が緩んだ。

先程までとはまるで別人のようだ。

「お前がそんな顔をするようになるとはなあ」

「お前も、いつか親になれば分かる」

「いい。俺は一人で魔術をいじくってんのが性に合ってる。

結婚も子どもも、御免だね」

「……そうか」

アルバスにはかつて妻がいたが、魔族との戦争で失っていた。

彼が研究所で寝泊まりすることが多くなったのは、それからだ。

「俺はもう、魔族に殺される者がいない世界にしたいんだ。

俺の子——レオナルドにも、平和な世界を生きてほしい。」

この魔術なら、それができると信じている」

ふう、とアルバスは煙を吐き出した。

「分かってるさ、エド。」

お前は昔から、変わんねえな」

「それはお互い様だ。

……俺にも一本、もらえるか？」

「……吸うのか？ やめてただろ？」

「記念にな」

アルバスは葉巻を取り出し、エドワードに投げ渡した。

それを受け取り、口にくわえて火をつける。

しばし、二人は無言で葉巻を味わった。

---

ヴィルガイア国立魔術研究所所長、アルバスⅡロレント。

彼には、人にはない特殊な才能があった。

——それは、魔力の気配を感じる力。

誰しもが多少は持ち合わせている感覚だ。

しかしアルバスのそれは。

他者とは、比べ物にならないほど鋭敏だった。

幼少期は、それが何なのかわかっていなかった。色や音と同じように。

アルバスの世界に当たり前に存在し、世界とはそのようなものだとして認識していた。幼年学校に入り。

そばで誰かが魔術を発動したときに、初めてそれを理解する。

生まれた時から、世界から何かが減っている感覚があった。

それは誰かが魔術を発動したために。

世界の魔力が、減少していたのだ。

魔力がなくなる時は、術者の周囲に、一時的に魔力の存在しない空間ができる。

しかしそうになると、真空に接した空気のように、すぐに周囲の魔力がその空間を埋める。

そうして、またもとの均一な魔力に覆われた世界になる。

それが、この世界に住むほとんどの者が感じている共通の認識だ。

しかし、アルバスから見ると、少しだけ事実とは異なった。

もちろん、その者の周囲の魔力は使用されて消える。

そして魔術を発動する前と後では、極々わずかに、世界の魔力の総量が少なくなるのだ。

世界に満ちる魔力が、極わずかに薄くなる。

大規模な魔術になるほど、その差は大きくなる。

つまり、魔術を行使すると、世界から魔力は消えるのだ。

このままでは、魔力が枯渇してしまう。

幼少期、アルバスはそれを懸念したことがあった。

しかし実際のところは、そうはならなかった。

減つたはずの総量は、時間が経つと少しずつ回復し、元に戻るのだった。

これを疑問に思つたアルバスは、魔力が回復する源泉を探した。

そして、答えを見つけた。

魔力が回復する源泉。

それは、ヒトの死であった。

ヒトが死ぬと、世界の魔力が回復した。

他の動物では、魔力は回復しなかった。

そして、魔物は様子が異なつた。

魔物が大量に死ぬと、一時的に魔力の減少が緩やかになる。

つまりどうやら、魔物は魔力を食らつて生きていた。

——最終的に、アルバスはこう結論付けた。

ヒトが死ぬと、魔力となって世界に還元される。

あるいはそれを、魂と呼んでもいいのかもしれない。

魔力は、ヒトの魂で構成されている。

そして魔物は、その魂を食って生きている。

ヒトが本能的に魔物を嫌うのは、それが原因かもしれない。

魔物がヒトだけを襲うのも、それが原因なのかもしれない。

幼年学校の卒業時。

アルバスは、これらの考察を発表した。

しかし魔力の観測をアルバスしか行えなかったため、まともな評価は受けられず、学内で少し話題になっただけに留まった。

しかし。

そんなアルバスの論文に、強く興味を持った者がいた。

エドワードだ。

エドワードは、幼年学校入学時から、天才の名を欲しいままにしていた。

テストの成績は常に1位。

その聡明さは他の優秀な生徒からも、頭一つ抜きん出ていた。

そんなエドワードは、アルバスの卒業論文に惹かれ。

魔術学校に進学後、一番に話しかけた。

アルバスの論文に、否定できる要素はどこにもない。

そのような世界である必然性はあると、アルバスに話した。

その時アルバスは、エドワードの優秀さをすでに知っていた。

自分の考えが間違っているとは思っていなかったが、そんなエドワードが絶賛してくれたことで、自信が持てた。

アルバスはエドワードと友人になり。

魔術について語り合うようになった。

しかし、仲が深まるにつれて。

アルバスはある衝動を、抑えきれなくなっていた。

生まれた時から自分が抱えている世界の秘密を、打ち明けたくなってしまうていた。

誰に言っても、馬鹿馬鹿しいと相手にされなかったこと。

そのうち、誰にも話さなくなり、胸の内に秘めていたこと。

エドワードになら、話しても大丈夫だと思えた。

自分と一緒に、真剣に可能性を検討してくれると、信じられた。

「……なあ、エド。」

一つ、変なことを言っているか？」

いつもの食堂で、アルバスは言った。

「変な事？」

「ああ。」

——お前が俺の感覚を、信じてくれるなら」

食後のカシーをすすっていたエドワードは。

怪訝そうに、顔を上げた。

「感覚って……魔力感知の能力だろ？」

それはもう、合ってるってことで結論ついたらだろ。

もう俺の中では、世界はお前の論文の通りに動いてるよ」

——世界は、アルバスの論文通りに動いている。

エドワードのその言葉は、アルバスの心に残っていた最後の枷を外した。

「……そうか。」

じゃあ話そう。

実はな、ガキの頃からずっと感じてたことがあるんだ。

話したら馬鹿にされるのがオチだったから、いつからか人に話すのはやめちゃった  
が」

「……おっ？」

なんだか面白そうな話だな。

聞かせろよ」

エドワードは興味を惹かれたのか、身を乗り出した。

「あのな……」

しかしアルバスはそこから、言葉を紡げなかった。

冷静に考えて、荒唐無稽な話だ。

エドワードに話しても、笑い飛ばされるのではないか。

そんな予感が、逡巡をもたらした。

「なんだよ、早く言えよ。」

エドワードが茶化すように言う。

「うるせえ、ちよつと待て」

一生自分の中に留めておこうと思っていた。

しかし、話して信じてくれる者がいたなら、どれだけ自分は楽になるだろうか。

そんな葛藤を抱えて生きてきた。

そんな者は現れないと思っていた。

そのことに絶望していた。

そして、目の前にはそんな存在がいる。

……ならば今。

天秤が傾く方は、明らかだ。

アルバスは一息ついて、言った。

「あゝ、実は。

俺たちの住んでる、この世界の他にも。

——もう一つ、世界があるんだ。」

アルバスは、音が世界から消え去ってしまったかのように感じた。

……言った。

言ってしまった。

もう、後戻りはできない。

昔話した友人には、奇妙なことを言うやつだと吹聴され、疎遠になった。

家族には頭の疾患を心配され、治療術師のもとへと連れていかれそうになった。

今度ももしかしたら、同じことが起こってしまうかもしれない。

アルバスは心臓を掴まれたような心持ちで、エドワードの顔を覗く。

そこには――。

「やっぱり面白そうな話じゃないか。

続きを聞かせてくれ」

目を輝かせ、興味津々の、エドワードの顔があった。

## 魔法都市ヴィルガイア③

幼少期、自分の感じているものが魔力なのだとはじめて知った時。

アルバスは思った。

だとしたら、あのはるか遠くに存在する膨大な魔力はなんなのだろうと。

その存在は、遥か遠い。

通常、魔力は距離が離れるほどに感知しづらくなる。

しかしその膨大な量の魔力ゆえに。

どれほど離れていても、アルバスには感じられてしまうのだ。

……あれは、一体何なのだろうか。

ずっと、アルバスは疑問に思い続けていた。

天国か。地獄か。

あるいは生命の根源か。

アルバスには、何一つ分からなかった。

アルバスが幼年学校に入学し、卒業するまでの間も。

その存在は、変わらず在り続けた。

それどころか少しづつ、その魔力を増やし続けていた。

そして、幼年学校の卒業論文の作成過程で。

アルバスは、魔力がヒトの死によって生じるものだとということを知った。

魔術の行使や魔物の存在によって、消失するということも。

……だとしたら。

その時アルバスは、一つの考えに思い当たった。

——あそこにはもしかしたら、魔術や魔物のない、ヒトだけが住む世界があるのかも  
しれない。

思いついた時、アルバスは、きっとそうに違いないと思った。

少なくとも天国や地獄なんてものよりは、理解できる。

こうして、この世界に自分達が生きてるのであれば。

それがもう一つあっても、おかしくはないだろう。

アルバスは、そんな風に考えるようになった。

しかし、その考えは、長く明かせずにいた。

最初に両親や友人に話して、一笑に付されたからだ。

話したことで、アルバス自身の信用も目減りしてしまった。

もう、そんな愚行は犯すまい。

アルバスはそう決めていた。  
だがその魔力の塊は。

依然として、アルバスの感覚にその存在を訴え続ける。

誰にも言えない、圧倒的なエネルギーを持つ存在。

アルバスは幼少期からずっと、自分一人でその存在に悩まされてきた。

そんな状況に、ずっとストレスを感じていた。

そして――。

「あのな、実は俺たちの住んでるこの世界の他にも、もう一つ世界があるんだ」  
その日。

打ち明けた。

誰にも話さなかった、その秘密を。

エドワードは確かに、自分の論文を認めてくれた。

しかしそれは、この世界で経験できる事柄の範疇だ。

その在り方についてなら。

矛盾を指摘できない以上、自分の説を推してくれることもあるだろう。

しかし、この話は全く別だ。

自分の感覚以外に、その存在を示すものなど何も無い。

まさしく、妄想と変わらない類のものなのだ。

打ち明けた直後、アルバスは不安に思った。

エドワードからも、かつての友人たちのように、距離を置かれるのではと。

しかし、その心配は杞憂だった。

エドワードは、あっさりと信じた。

アルバスの卒業論文を認めた時と同じように。

面白そうなものを見つけたという顔をして。

アルバスが、抱え込んだものを全て吐き出したあと。

エドワードが、ふと思いついたように言った。

「……なあ、その世界ってのはさ、魔力を必要としてないんだよな？」

「ああ。俺の感覚が正しければな」

「お前の感覚は正しい。」

それはもう前提として扱おう」

「……じゃあ、そうだ。」

ヒトは存在するが、魔力が使用されない世界だ」

その言葉に、エドワードはニヤリと笑う。

「だとしたら——」

エドワードは、天を指さして言った。

「その魔力、こっちに持つてこられないか？」

その言葉から、全てが始まった。

統一歴1731年。

レオナルドが生まれてからひと月後。

エドワードは城の地下室に、完成したばかりの転移魔術の魔法陣を描いた。

この部屋はもともとは王の避難用に作られたもので、入り口は隠し扉になっている。

実験はこの場所で、秘密裏に行うことにした。

完成した転移魔術を公開するには、まだ時期尚早だと考えたからだ。

公開することで生じる諸問題に対応する時間をもつたいたない。

遠い世界の膨大な魔力を、こちらの世界で利用する。

それが成功すれば、魔族との戦争を終結させうる力になるはずだ。

そのために、とにかく最短距離を進む。

そして、そのための下準備が、昨日完了した。

もはや転移魔術だけがあっても、エドワードの目的は果たされない。

目的とは、別の世界の魔力を、こちらで利用すること。

難航するかと思ったが、意外にもあっさりど方法は見つかった。

この世界の魔力にも、濃淡が存在する。

魔力を濃い場所から薄い場所へと移動させる研究は、すでに存在していたのだ。

ある魔法陣を物体に描き。

それを魔力の濃い場所にしばらく置いた後、薄い場所へと移動させる。

それだけで、魔法陣が導管としての役割を持つようになり、濃い場所の魔力を利用でき  
きる。

そのことが、過去にすでに証明されていた。

こちらの世界では魔力濃度の差は大きくないため、それほど有用ではなかった研究  
だ。

しかし、今回の実験に関しては非常に大きな役割を持つ。

つまり。

あちらの世界に、魔法陣を描いた何かを送り込み。

しばらくしてから、こちらの世界にそれを戻す。

そんな簡単な方法で、膨大な魔力をこちらで利用できるようになるのだ。

準備は、全て整った。

「……いよいよ、今夜だ」

城の一室で、エドワードはつぶやいた。

時刻は夜。

今日の仕事を全て終わらせ、あとは決行を待つのみとなった。

もう少ししたら、アルバスが訪ねてくることになっている。

「……………ふう」

少量の酒を煽り、一息つく。

研究一辺倒だったエドワードの人生に。

最近は、嬉しいことが続いている。

レオナルドは無事に生まれた。

親の欲目かもしれないが、マリーに似てとても愛らしい容姿をしている。

きつと成長したら美形になるに違いない。

生まれて数日で髪も生えてきて、その可愛さをさらに押し上げていた。

髪の色はダークブラウン。自分と同じ色だ。

日々変化する我が子が、いとおしくて仕方がない。

そして。

今日はずいぶん、10年以上の歳月を捧げた研究の集大成だ。

成功すれば、これまでよりも遥かに効率よく、より強力な魔術を使えるようになるはずだ。

それによつて、魔族との戦争に終止符を打つことができる。

再度、酒をグラスに注いだ。

気はやる。

酒で気を紛らわせなければ、一人で今すぐに決行してしまいそうだ。

それではアルバスに申し訳が立たない。

これほどに幸せな時間は、これまでの人生で味わったことがなかった気がした。

そしてあとわずかの時間で。

今を超える、人生最高の瞬間が待っている。

淡く光る、酒の波紋を眺めながら。

エドワードはこの時、そう信じて疑わなかった。

## 魔法都市ヴィルガイア④

エドワードが、城で一人で酒を味わっている時。

アルバスは自宅で一人、目を覚ました。

アルバスは、研究に没頭して昼夜を忘れることが多かった。

徹夜で研究を行うことも頻繁にあり、その分眠るときは長時間眠る。

そんな生活を送っていたため、起きる時間は不規則になりがちだった。

寝起きが一番頭が冴える。

そう考える彼の信条も、その要因の一つである。

そしてその信条に従い、約束の時間の少し前に彼は目を覚ましたのだった。

……今日はずいぶん、彼方への転移の実験だ。

アルバスが常に感じている、圧倒的な魔力。

それを探るときが、ついに来たのだ。

全身に、活力がみなぎる。

しかし。

その感覚を確かめた時。

初めて、アルバスは異変に気付いた。

「……なんだ、こりゃあ」

アルバスの表情が凍りつく。

水を飲もうと手に持ったコップを床に落とし。

ガラスが砕ける音が部屋に響いた。

しかしそんなものは、アルバスの耳には全く入らなかった。

「まじかよ、なんだよ、これ」

——ヴィルガイアが、魔物に包围されていた。

都市と呼ばれる広さしか持たない国だが、それでも都市だ。

包围するには、何千もの頭数が必要だ。

そんなとてつもなく信じがたいことが、今まさに、間違いなく行われている。

しかもそれからは。

ただの魔物とは思えないような、不吉な気配を感じる。

外に出てみたが、街は普段のままだ。

明かりの灯った家々。酒場で陽気に飲む人達。

夜なので人は少ないが、その様子は普段と何も変わらない。

魔物に取り囲まれていることに気付いているのは、自分だけ。

「こうしちゃいらんねえ……!」

知らせなければ。

……誰に?

その辺の官憲か。

周囲の人に、大声で叫んで回るべきか。

どちらも頭がおかしいと思われるのがオチな気がした。

そんな時間の余裕が、あるわけがない。

「……あいつしかいねえな」

アルバスは寝間着のまま、走り出した。

知己であり、この国の最上位に位置する者であり。

そして最も信頼する、友人のところへ。

---

トントン、とノックの音がする。

その音を聞いて、エドワードはグラスを置いた。

「なんだ?」

「陛下。アルバスⅡロレント伯爵がお見えます。」

応接室でお待ちいただいておりますが、なにぶんお急ぎの様子で」

「……わかった。すぐに向かう。」

衛兵は扉を閉めて去っていった。

——お急ぎの様子？

ついに決行するとあつて、アルバスも気が急いているということだろうか。

……それともまさか、計画に狂いが生じたのか？

一抹の不安を抱えながら、エドワードは部屋へと向かう。

扉を開けると、寝間着のままのアルバスが待っていた。

髪も整えず、無精ヒゲは剃られず、おまけに汗をだらだらと流している。

「ア——」

「聞け！ エド！」

この国が、魔物に包围されてる！」

エドワードの言葉を遮り。

汗だくのアルバスの口から飛び出てきたのは、思いもよらぬ言葉だった。

エドワードはそれまでの思考を放棄し、瞬時に頭を切り替える。

「どついつい（と）だっ？」

「経緯は分からねえ。

ただ昨日の夕方に眠って、ついさつき起きたら、街の外を取り囲むように魔物の気配がした。

……今はもう、街の中に入りこんできてやがる！」

「確かか？」

「間違いない！」

即座にエドワードは思考する。

何をするべきか。

信じがたいことだが、こいつがそう言う以上。

魔物に包囲されているのは、事実なのだろう。

しかし魔物が秩序だつて一つの国を襲うなど、聞いたこともない。

何が起こつているのか。

「衛兵つ!!」

エドワードが叫ぶと、数秒後に兵士が2人駆けつけてきた。

「街が、魔物の群れに攻撃を仕掛けられている！」

住民を城下を集めるよう伝えろ！

兵は総員戦闘配備！ 隔壁に防衛陣形を敷け！

火急だ！」

「はっ！」

兵士達は慌てて去っていく。

「俺も加勢に行く！」

指揮はまかせたぞ、エド！」

アルバスもそう言い残し、急いで部屋を出ていった。

この城に、王族用の脱出路などはない。

この城が墜ちるときは、王が死ぬとき。

なぜこの国が魔物に狙われるのかは、全く分からない。

しかし。

「――所詮は魔物の群れだろう。」

ヴィルガイアの誇る魔装兵団。

その力を見せてくれる」

一人残った部屋で。

窓の外の暗闇を睨みつけるように、エドワードは言った。

その男は、一人で酒を飲んでいるところだった。

妻と子どもは夕食後にすぐに寝てしまうので、自室で一人、本を読みながらちびちびと酒を飲む。

この時間は、男にとつて最も幸福な時間だ。

自分の仕事をよりよくする方法や、娘の将来などについて、ぼんやりと考える。別に真剣に考えているわけではない。

「真剣に本を読むわけでもない。

そんな時間は、男の人生に潤いを与えていた。

いい具合に酔っ払い、そろそろ寝ようかと思つた時。

窓の外がやけに明るいことに気がついた。

夜中だというのに、煌々と照らされている。

部屋のランプよりも、外の方が光が強いくらいだ。

(……火事だろうか)

男は外に出てみた。

男の予想は当たっていた。

目に飛び込んできたのは、渦巻く炎。

しかしその規模は、想像よりも遥かに大きかった。

周囲の家のほとんどが、焼けている。

火の粉が舞い、男の顔に熱風が吹きつけた。

「なんだこれは!？」

男は慌てて家に入り、寝室へと向かう。

早く妻と娘を起こして、避難させなければ。

何が起こってるのかは分からないが、とにかく避難だ。

どこへ向かうべきか。

とりあえずは、王城へを目指そう。

根拠はないが、最も安全そうだ。

そんなことを考えて、急いで寝室に向かうと。

悲鳴が鼓膜を貫いた。

娘の名を叫んでいる。

聞こえたのは、目の前のドアからだ。

急いで開けると、そこには――。

血走った眼。

角の生えた頭。

蝙蝠のような羽。

鱗に覆われた肌。

——見たこともない邪悪な存在が、その爪で妻の胸を貫いて、嗤っていた。

赤く染まつたベッドには、首のない娘が寝ている。

妻はゲホツと口から血を吐いて、自分に向かつて何かを呟いた。

そんな妻を、まるでゴミでも捨てるようにベッドに放り、そいつは男の方を向く。

男は、逃げた。

振り返ることなく。

「はあつ、はあつ、はあつ！」

こんなことはありえない。

今日も普段と変わらない一日だった。

仕事をして、家に帰って、夕食を食べた。

妻は仕事の疲れを心配してくれた。

娘は寝る前に、お休みのキスをしてくれた。

それらがまるで、別の世界の出来事のようにだ。

何だこれは。

何なんだ、これは！

混乱する頭で玄関へと走り、扉を開けた時。

男の意識は消失した。

外にいた何者かが、男の首を切断したためだ。それは男の家にも火を放ち、去っていった。

## 魔法都市ヴィルガイア⑤

エドワードが報告を受けたのは、号令を発してから1時間ほど経ってからだった。

その内容は、最悪の一言に尽きた。

街を囲んでいたのは、魔族だった。

魔族は一体でも、手練れの冒険者が数で囲んでようやく倒せるような相手だ。

それが数千体。

絶望的な数だ。

確かにヴィルガイアの魔術によって、魔族に対して優位を取れるようになった。

しかしそれは、あくまで戦場での話だ。

遠距離から戦闘が始まり。

かつ、人類の粋を結集した戦力があつてこそそのもの。

対して今は、そのいづれの優位もない。

完全に奇襲にはまった状態だ。

住民の避難もできていない。

大規模な魔術を使えば、避難する者達をも攻撃することになる。

避難が完了するまで魔族を押し止められる戦士団など、この魔法都市にあるはずもない。

——盤面は、完全に詰んでいた。

「国王陛下！」

既に敵の一部は城の隔壁まで侵入しております！

魔装兵団が奮戦しておりますが、状況は不利と！

御身のご心配を！」

報告をした兵士が言う。

逼迫した声から、状況の劣勢さが伝わってくる。

しかしどこにも、逃げる場所などありはしないのだ。

やるとしたら、街を突っ切って逃げることに。

魔族に取り囲まれて、なぶり殺しにされるだけだろう。

「報告、ご苦労だった。

下がってよい」

兵士は一礼し、足早に去っていった。

エドワードはしばらくの間、目を閉じて打開策を検討した後。

ゆつくりと目を開け、歩き出した。

向かうのは、妻と子の待つ一室。

扉を開けると、今朝と変わらない2人がいた。

ベッドの上で、マリーがレオナルドを抱いている。

「今夜はなんだか、みな慌ただしく動いてるようですね。どうしたのですか？」

マリーが尋ねた。

エドワードに報告が来たのがつい先刻だ。

場内の非戦闘員は、誰一人、事情を把握していない。

それは王妃とて、例外ではなかった。

「いや、大したことじゃない。

少しね、魔物が街に入ってきているらしいんだ。

今、兵団を派遣して対処にあたらせているところだ。

大丈夫。

じきに騒ぎは収まるだろう」

「そうですね……」

エドワードは、自分の台詞に驚いた。

隠したところで、何の意味もないというのに。

しかしマリーに事実を知らせるのは、ほんの僅かでも遅らせたかった。絶望に染まる時間は、少しでも短くしてやりたかった。

「……マリー、愛しているよ」

「なんですか、急に。」

ふふっ。でも嬉しいです。

私も、愛してますよ」

たまらなくなり、エドワードはマリーを抱きしめた。

隣に寝ているレオナルドが視界に入る。

いつもの通り、穏やかな寝顔。

少しの間そうしていると。

ぼんぼん、と。

マリーがエドワードの背中に優しく触れた。

「……大丈夫ですよ。あなた。」

私達は、大丈夫ですから」

私達とは、マリーとレオナルドのことだろうか。

マリーは昔から、察しが良かった。

エドワードの必要としているものを、それとなく、気づかれぬように置いておいてく

れる。

そんなところがあつた。

土壇場での自分の三文役者ぶりに呆れてしまう。

自分の様子から、先程の言葉が嘘だと分かつたのだろう。

……しかしおかげで、ふんぎりがついた。

「マリー、万が一魔物が入ってくるといけないから、隠し部屋に移動しよう」

エドワードがそう言うと、マリーは何も聞かずに従つてくれた。

産後で体力の戻っていないマリーに代わり、エドワードがレオナルドを抱いて。

地下室へと、歩き始める。

エドワードの頭の中には、ひとつだけ策があつた。

成功の確率は低いが、ゼロではない。

そんな策が。

産後間もないマリーを慮りつつも、小走りで移動する。

地下室までの距離はそう遠くない。

問題なくどり着けるはずだ。

……そう考えた、矢先の出来事だつた。

ガシャアン！ と。

大きな音を立てて、窓ガラスが割れる。

「馬鹿な……」

そこから入ってきたのは、魔族だった。

おかしい。

いくら何でも早すぎる。

もう防衛線が突破されたというのか。

「ナント脆弱ナ国ヨ。」

玉座マデアトワズカデハナイカ」

クツクツと、魔族は高く笑う。

黒板を爪で掻くような、不快な音だ。

「……オヤ？」

ソコニイルノハ——」

魔族がこちらに気付く。

一瞬の思考。

逃げるか、迎え撃つか。

どうする。

「逃げろ！ エドー！」

大声が響くのと同時に、魔族に向かって炎の矢が飛んできた。不意をつかれた魔族は被弾し、爆炎と煙で視界から消える。

「アルバス！」

お前、どうしてここに!？」

矢を放ったのは、アルバスだった。

魔装兵团と共に、防衛線を張ってもらっていたはずだ。

あるいは、逃げてくれていても構わなかった。

アルバスの能力を使えば、彼一人ならこの国から脱出できる目もあるだろう。

「防衛線は崩れた！」

だが、こつちに入ってきたのはそいつだけだ！

それが感覚で分かったから、追ってきた！」

「お前だけなら、逃げられるんじゃないか!？」

「馬鹿言うな！」

俺一人生き残ったって、何の意味もありやしねえよ！

どうせ無意味な命なら、せめてその子を守るために使わせろ！

アレを、やる気なんだろう!？」

腕の中のレオナルドは、いつの間にか目を覚ましていた。

安心しきったような顔で、ぼんやりと虚空を見つめている。

「すまん！ 恩に着る！」

「あっちでしつかり取り取り立てるからな！」

それが嫌なら、生き延びろ！」

会話の間も、アルバスは炎の矢を放ち続けていた。

「アルバス様！ 感謝を！」

「光栄です！ マリー様！」

その姿に背を向けて、エドワードは走った。

階段を下り、廊下を駆ける。

そしてついに。

隠し扉のある大広間にやってきた。

しかし――。

「貴様、国王エドワードダナ。

見ツケタゾ。

サテ、ソノ命、モライウケヨウカ」

大広間には、既に数体の魔族が入り込んでいた。

「ブリザード！」

即座に、エドワードが叫ぶ。

上級魔術の詠唱破棄。

タイムラグなしで行える、エドワードの最高の魔術。

絶対零度の奔流が、魔族達に襲い掛かる。

「引ケー！」

魔族達は蜘蛛の子を散らすように、大広間から脱出した。

脱出口を、氷の壁が塞いでいく。

凍り付いた大広間を、滑らない様に急いで走る。

「がっー！」

しかし数歩も走らぬうちに、エドワードは背中に衝撃を受けた。

前に向かって飛ばされる。

自身の肋骨が砕ける音を聞きながら、レオナルドだけは落とさぬように、両腕で優しく包んで受け身を取った。

「あなたっー！」

マリーが叫び、エドワードに駆け寄る。

背後はすでに、魔族達に回り込まれていた。

「ほっ、がっっ」

エドワードは地面に倒れ込み、口から血を吐いた。マリーがすぐに治癒魔術をかける。

その間に、魔族に完全に包囲されてしまった。

その中から、一体の魔族が前に出る。

それは、他に比べて一際大きな個体だった。

「さて、国王エドワードⅡフォンⅡヴィルガイア。

何か言い残すことはあるか？」

その魔族が発した言葉に、エドワードは驚いた。

あまりにも、他の魔族と異なる発声。

その魔族は、完全に言葉を使いこなしていた。

「……一体何なのだ、貴様らは！」

どこから現れた！

何が目的だ！」

凍り付いた大広間に、エドワードの声が響く。

その言葉を揶揄するように、周囲の魔族が嗤う。

「……ふっ。」

いいだろう。答えてやる。

目的は、この国を破壊することだ。

貴様らの魔術によって、戦況がずいぶんと劣勢になってしまったのでな。

こうしてわざわざ、遠出してきてやったというわけだ」

「遠出とはどういうことだ。」

「一体どうやって、ここへ来た!?!」

「それを貴様が知る必要はあるまい。」

人間どもの姑息さには何度も煮え湯を飲まされたからな。

情報漏洩は敗北を招く」

エドワードには、目の前の魔族が恐ろしく映った。

外見の醜悪さや、流麗な言葉のせいではない。

理性的なのだ。

物事を考えるプロセスが、ヒトと変わらない。

かつてはそうではなかったはずだ。

魔族とは、強力な魔物とそう変わらない存在だった。

言葉も操れず、おぞましい声で叫ぶだけの意思疎通だったというのに。

ヒトの言葉を学び、考え方まで、ヒトと変わらなくなっている。

ヒトが魔族との戦争で文明を発展させてきたように。

魔族もまた、ヒトから学んでしまったというのか。

動揺を隠しつつ、背後のマリーに視線を向けた。

彼女は小声で、何かをつぶやいている。

それを聞きつつ、エドワードはさらに言葉をつないだ。

「その姑息な人間の言葉に頼らなければ、同胞との会話すらできぬとは。

滑稽な存在だな、魔族とは」

「ふっ。

死を前にして、なかなか勇敢ではないか。

泣いて命乞いでもすれば、私の気が変わるかもしれないというのに」

「そのような真似、死んでも御免だ」

「そうか。

言葉を得たのは、確かに幸이었다。

貴様の泣き叫ぶその意味を、しっかりと理解できるからな」

気付けば、じりじりと魔族達が近づいてきていた。

「俺が死んでも必ず。

必ず、ヒトは貴様らに勝利する。

貴様らを倒すものが、いつか目の前に現れる。

その時を覚悟しておくがいい！」  
「世迷言を。」

問答は終いだ。

どれ、まずは右腕でもいただくとするか」

凄まじい速度で、魔族が接近し。

鋭い爪が、エドワードに振り下ろされる。

もはやなすすべはないと、諦めかけたその時。

「……バリア」

エドワードと魔族の間に、障壁が生じた。

「ヌツ!?!」

魔族の爪が弾かれ、その身体も吹き飛ばされる。

更に障壁は広がり、他の魔族を弾き飛ばしながら、エドワード達を中心に半球の形をとる。

エドワード達は、白く光る壁によって、完全に魔族と隔絶された。

「ありがとう、マリー」

「間に合ってよかった……」

エドワードに治癒魔術をかけた後。

マリーはすぐに、結界魔術の詠唱を始めていた。

間一髪のタイミングだったが、なんとか発動することができた。

「しかし、長くはもちません。」

私の魔力が切れたらまた、絶望的な状況へと戻ってしまいます。

ただ何かやれることが、あるのでしょうか？」

やはり、マリーは何もかもお見通しだ。

「アルバス様が、いえ、この国の全ての人が、命を懸けて下さった機会です。

どうか、活用して下さい」

「……ありがとう、マリー。」

すぐに戻ってくる」

マリーは魔術に集中するため、その場から動けない。

エドワードは地下室への扉に向かおうとしたが、ふと足を止めた。

「……結界を張ったまま、レオナルドを抱けるかい？」

「大丈夫だと、思います」

「抱いてやってくれ。」

君と俺の……生きた証だ」

マリーにレオナルドを手渡すと、レオナルドは笑顔になった。

母親に抱かれて安心したのか、家族がそろって嬉しくなったのか。理由は分からないが、レオナルドは笑った。

エドワードはレオナルドを抱いて、地下室への隠し扉を開け、階段を降りた。ランプに火をつけ、明かりを確保する。

その部屋の奥には、大きな転移魔方陣がある。

レオナルドをそこに寝かせ、エドワードは自らの指の先を切った。流れ出した血で、レオナルドの胸に魔法陣を刻む。

魔力を通すと、魔法陣は肌に定着した。

この魔法陣は、導管の役割だ。

そして、この場所への帰還の術式も、組み込んである。

この場が安全になってから。

レオナルドが一人でも生きられるようになってから、帰ってくるように。

「すまない、レオナルド。

こんなことしかできない、父を許してくれ」

巨大な魔法陣に魔力を込める。

魔法陣は徐々に光り始め、地下室をまばゆく照らした。

(頼む、成功してくれ)

全ては賭けだ。

転移魔術が成功するかも分からない。

あちらの世界に、レオナルドが生存できる環境があるのかも分からない。

しかし、他に方法がないのだ。

この世界の他の場所に転移させるには、魔力が足りない。

あちらの世界の魔力を利用できなければ、一人の魔力では転移魔術を行使できない。

(頼む……！)

魔法陣はもはや直視できないほどに輝いている。

中央にいるレオナルドは、異変に気付いて泣き始めた。

……そして。

音もなく、レオナルドは消えた。

エドワードの願いとともに。

賭けに勝利したのは、分からない。

魔法陣も輝きを失った。

頼りないランプの明かりだけが、その場を照らしていた。

(感傷に浸る暇はない)

エドワードは奥の壁際に移動した。

壁の一部を、右手で押す。

壁は凹み、代わりに床から石箱が出現した。

蓋を開けると、一冊の本が入っている。

この本は、ヴィルガイアの魔術研究の全てを記録したものだ。

国が滅んでもその進歩だけは失わせぬように、代々の王が書き連ねてきたもの。

そのための劣化防止の魔術が付与されている。

そこに、現状を書き記す。

いかにして、この国が滅んだのか。

突如として現れた魔族。

その事実を後世に伝えれば、何かのヒントになるかもしれない。

他に、転移魔術のこと、もう一つの世界のこと、転移させた息子のことを書いておく。

自分の代のその他の魔術的進歩についても書くべきだろうが、省く。

時間がないのだ。

早足で書きなぐったそれを石箱に入れ、壁を元の状態に戻した。

これで、国王としてやるべきことはやったはずだ。

あとともう、一人の夫としての責務だけ。

ランプを消し、急いで階段を登る。

そこには、やや疲れた様子の妻がいた。

「……終わったんですか？」

「ああ、終わったよ。」

君のおかげだ」

その肩を抱きながら、答える。

「レオナルドは、どうしたんですか？」

「転移魔術を使って、安全なところに送った。」

無事成功だ。

あの子はもう、大丈夫」

人生最後の、三文芝居。

「そう。」

あなたがそう言うのなら、間違いないですね。

ありがとう、エドワード

……よかったあ」

ほっと息を吐くマリーは、安心しきった表情だった。

「珍しく、俺の言うことを素直に信じたな」  
「信じてますよ。」

あなたは賭けに、必ず勝ちますからね」  
いたずらっぽく、マリーは言う。

芝居はやはり、見抜かれていたらしい。

ただレオナルドの安全は、疑ってないようだ。

「……まったく君には、敵わないな」

「私も、あなたには敵いません」

「……そうか？」

「そうですよ」

にっこりと笑うマリーは、とても美しかった。

「こんなに素敵な夫と一緒に過ごさせて、私は幸せでした」

「……それは、俺の台詞だ。」

俺の方こそ、こんなに素敵な妻と一緒に過ごさせて、幸せだったよ」

「ありがとう、エドワード」

「こちらこそありがとう、マリー」

二人はしばらく、無言で抱き合っていた。

「……エドワード」

「ん？」

「少し、疲れちゃいました」

「……分かった。」

「じゃあ、もう少しだけ、頼む」

「了解です」

エドワードは、マリィと抱き合ったまま、右手を高く上げた。

「……原初の火。暗がりを照らすもの。」

三つ時の呼び声。彼方より響く」

転移魔術を行使したことで、エドワードの魔力は限界に近い。

「方角は東。虚空より歩みし時の番人。」

その城壁は高く、高く」

生命そのものを、魔力に代えて、唱える。

「頂きを目指す王。」

その翼は燃え炭になろうとも。

その志は遠く、遠く。

約束の地にて再び見えん」

エドワードの右手に、魔力が凝縮していく。

マリーはエドワードに身体をあずけ、言った。

「レオナルド、どうか幸せに」

「——エインシエント・ノヴァ」

同時に結界が解け、その残滓が地下室だけを覆う。

結界を囲んでいた魔族が見たものは、圧倒的な魔力の奔流であった。

詠唱されたのは、火聖級魔術。

右手より放たれたその魔術は、周囲の全てを焼き尽くした。

その日、幾百の魔族を道連れに。

ヴィルガイア王国は、滅亡した。

## 過去を知って

〈ハジメ視点〉

気付けば、日が沈みかけていた。

俺は廃墟から手に入れたその本を、ひたすらに読みふけていた。

日の出からずっと、この場でこの姿勢のまま読んで、読み終わった。

分かった。

分かってしまった。

この俺が何者なのか。

こんなにも突然に。

こんなにも劇的に。

それを知る機会が訪れるとは、予想だにしていなかった。

俺は、1000年前に、この場所で生まれ。

魔族に襲われ、父の転移魔術で地球へと飛ばされた。

俺の名は、レオナルドⅡフォンⅡヴィルガイア。

ヴィルガイア王家の末裔だったのだ！

……と、言ってみても。

実感は全然湧かない。

とりあえず、得た情報を整理してみよう。

国王の手記によるとこうだ。

1000年前に存在した、ヴェルガイア王国。

魔術がとでも発展した国だったが、滅んでしまった。

滅んだのは、魔族の襲撃を受けたからだ。

国王は死の間際に転移魔術を使い、赤子を別の世界へと送った。

その赤子には、地球の魔力を利用する術式と、しばらくしたらこちらに戻ってくる術式の、二つの効果を持つ魔法陣が刻まれている。

これらの情報から、転移した赤子が俺で。

別の世界というのは、地球だと考えられる。

なんとこの世界は、地球と同じ宇宙に存在したのだ。

地球の科学力をもってしても発見できていない、遙か遠くの宇宙の彼方に、この星は存在する。

いつの日か、宇宙船に乗って地球人がやってくることもあるかもしれない。

しかし、疑問はある。

この本は、約1000年も前のものということになる。

時代考証はエルフの長老の話と照らし合わせても、矛盾ない。

おそらく事実だろう。

しかし、俺が地球で過ごした年月は15年だ。

全く計算が合わないではないか。

……少し考えて。

一応、筋が通らなくもない理論をでっち上げることはできた。

子どもの頃に何かで知って、結局よく分からなかったアレ。

相対性理論というやつだ。

光ほどの速さで進む物体は、周りの世界と比べて時間が極端にゆっくりになる。

転移魔術も高速移動の一つと考えれば。

往復で1000年くらい時が進んでも、一応の辻褄は合う……んじやないか？

……まあ、どうであれ。

俺の記憶と胸の魔法陣、この状況を照らし合わせれば。

俺がレオナルドなのは、もはや間違いないだろう。

……どうりで、地球では仲間外れにされ続けたわけだ。

なんたつて、一人だけ宇宙人だったんだから。

外見に違いはないが、子ども達はどこかに異質なものを感じ取っていたのかもしれない。

——ずっと間違っていたのだ。

なんだかんだ言つても、俺のホームは地球だと思つていた。

生まれも育ちも、地球の孤児院だと。

しかしそれが間違いだつた。

俺が本来いるべきなのは、こっちの方だつた。

むしろ地球にお邪魔していたのだ。

こっちの世界に来てからの方が、なんとなく気分が晴れていたのは。

在るべき場所に、帰ってきたからなのだろう。

そして、俺の魔術の規模が馬鹿でかい理由も分かつた。

俺はどうやら、地球から魔力をいただいで使つていたらしい。

地球の魔力は、こちらに比べて非常に濃密という話だ。

魔術を使う人間と、魔力を食べる魔物がいないからだと書かれていた。

俺が魔力切れを起こさないのも、そこら辺が原因なのだろう。

色々なことが一気に分かつて、すごく気分がスッキリした。

……そして、状況を整理したら。

少しずつ、勇気が湧いてきた。

胸のあたりが暖かい。

ずっと欠けていた身体の一部を、ようやく取り戻したような。

そんな感覚。

俺はもう、眠るときにおびえなくていいんだ。

明日俺がいなくなることは、あり得ない。

地球に戻ってしまうことも、絶対にならないんだ。

……俺はこの世界で、生きていくことができるんだ。

「よっしゃあああああああ!!」

思わず、叫んだ。

叫び声は、夕焼けの空へと吸い込まれていった。

両手を握り、喜びを噛み締める。

たまらなく嬉しかった。

「よしっ……よしっ。」

よかつた……うぐつ……うつつ……」

涙が零れてきた。

人生で初めて流す、うれし涙だった。  
涙でぼやけた視界に、夕日が滲んでいた。

泣き止んだ後。

残った疑問について考えた。

魔族はどうやってヴィルガイアにやって来て、それからどうしたのか。

これが全く分からない。

エルフの長老の話では、魔族がやった、なんて話は一切なかったようだ。

数千体いたらしい魔族達は突如現れて、煙のように消えた。

奇妙な話だ。

そういえば、エルフの森にいた魔族。

あいつももしかしたら、ヴィルガイアを滅ぼしたやつらのうちの一体だったのかもしれない。

あいつに聞いとけばよかったかな。

答えてくれやしないだろうが。

……まあいいか。

1000年も前のことを、今を生きる俺が考えたって仕方ない。なんたつて、俺はこれからずっと、この世界で生きていくんだ。もつと有意義なことに時間を使おう。

例えば、なんだろうな。

例えば……。

そういえば、俺の名前はどうしようかな。

これまで通り、田中 一でいくか。

レオナルドⅡフォンⅡヴィルガイアでいくか。

ヴィルガイアの両親は、俺のことを想ってくれていたようだ。

命を賭して、俺を守ってくれた両親。

その想いを想像すると、これまでに感じたことがないような温かさを胸に感じる。二人がつけてくれた名前を、大切にしたい気持ちはある。

とはいえ。

レオナルド、なんて呼びかけられて、振り向ける気がしない。

これまでずっと、俺は田中 一だったのだ。

俺が関わってきた人達は、俺をハジメと呼んでくれている。

そこには親愛の気持ちを乗せてくれているだろう。

それを変えるというのもなかなか抵抗がある。

うーむ。

……よし、決めた。

折衷案として、ファーストネームだけはハジメにしよう。

こっちの世界風に呼ぶなら、ハジメレオナルドヴィルガイア。

違和感はある。

違和感はあるが、他に思いつかないので、これに決めた。

最後に、この本をどうするか。

本来なら、すぐにでも魔術協会に提出して、その情報を共有するべきだろう。

しかし、この本は俺の家族が残してくれた、唯一のものだ。

しばらく手元に置かせてもらって、感傷に浸りつつ。

この本に載っている魔術を会得させてもらっても、バチは当たらないのではないだろうか。

……よし。

これを公表するのは後にする。

しばらく、この本で勉強することにしよう。

## 魔族の話①

&lt;語り部視点&gt;

——遙か昔。

西の大陸は魔物の楽園だった。

魔物は森に住み、縄張り争いを行っていた。

縄張りを広げるため、他の魔物と争う。

食ったり食われたり。

殺したり殺されたり。

ひたすらに同じような日々を繰り返し、長い年月が過ぎた。

その、悠久の時の中で。

魔物達の造形はより環境に適したものと、徐々にその姿を変えていく。

ある魔物は牙をより鋭く。

ある魔物は脚をより素早く。

ある魔物は鱗をより頑丈に。

それぞれの魔物が、その縄張りを広げるために、よりよい姿へと形を変えていった。

そんな中。

他とは一線を画す進化を遂げた魔物が現れた。

その魔物は、全てを持っていったのだ。

鋭利な爪と牙。

俊敏な脚。

頑強な鱗。

空を飛ぶ翼に至るまで。

他の魔物の長所を一身に集めたかのような魔物が誕生した。

その魔物は少しずつ、勢力を拡大していく。

しかし個体の圧倒的な能力に比して、縄張りの拡大は緩やかだった。

なぜ拡大が遅いのか。

それはひとえに、繁殖能力の低さによるものだった。

一般的に、強力な魔物ほど子を産む数が少ない。

とりわけその魔物は、他の優位点を相殺するかのようになり、その一点でハンデを背負った。

50年から100年に1度しか、その魔物は子を産まない。

さらに一度に生まれるのは1子のみで、成長にも10年ほどの時間がかかった。

それ故に、圧倒的な力を持ちながらも、長い年月をかけて少しずつ勢力を伸ばしていき他なかった。

そんな時、大陸間の海底で火山が噴火し、冷えた溶岩によって、東の大陸と陸でつながった。

一頭の魔物が新たな陸路を歩くと。

そこには、奇妙な生き物がいた。

鱗も、牙も、爪もない。

戦うことを放棄したかのようなそのフォルム。

魔物は、その存在に対して異常な嫌悪感を抱いた。

本能に刻まれているかのような殺戮衝動。

それを呼び起こされた多くの魔物は、東の大陸に侵攻した。

蹂躪するのは簡単だった。

ほんの少し爪や牙を振るえば、いともたやすく死んでいく。

考えられないほど脆弱な存在だ。

しかし。

ヒトは、数が多かった。

縄張り争いによって常に個体数が減っていた魔物と異なり。

ヒトはずっと、共存共栄の道を歩んでいたのだ。

さらに言葉や文字という連絡手段で連携し。

武器を使って、集団で攻撃してくる。

やがて魔術という奇妙な遠距離攻撃も加わり、侵攻した魔物は少しずつ数を減らしていった。

もちろん、ヒトの被害はその何百倍もの数にのぼったが。

最終的に、侵攻した魔物の多くは東の大陸の森に居つくようになった。

森を出てヒトを襲うことは稀だが、縄張りに入った者は殺す。

そのような存在になった。

魔物は森を好む。

西の大陸では激戦区だった森が、東では争うことなく手に入る。

それは多くの魔物にとっては、悪い話ではなかった。

少しずつ、ヒトと魔物の棲み分けがなされていった。

しかし。

ヒトを獲物として、一際強く意識した魔物がいた。

西の大陸での勝利が約束された、圧倒的な最強種。

彼らだけは、それらの穏健な結末を許さなかった。

彼らは、ひたすらにヒトを殺し続けた。

その力は圧倒的で、1体を殺すのに騎士団の1個師団が必要だった。

彼らはヒトに大きな恐怖を与え、ヒトは他の魔物と一線を画す彼らを「魔族」と呼称した。

とはいえ、絶対数の少なさはいかんともし難かった。

魔物全体でも、ヒトより遥かに数が少ない。

彼らだけでは、ヒトの数千分の一にも満たなかった。

数十年の年月をかけて。

彼らはゆっくりとヒトによつて駆逐され、東の大陸から姿を消した。

しかし、ヒトにも西の大陸に攻め入る余力があるはずもなく。

お互いが大陸間に防衛線を張る形に落ち着いた。

ヒトはその年を統一暦0年と定め、魔族に打ち勝った喜びを分かち合つたのだった。

しかし、それはあくまで仮の勝利に過ぎない。

ヒトは知らなかった。

魔族に宿命づけられた、ヒトへの殺戮衝動の根深さを。

彼らは西の大陸の森での縄張り争いをやめ。

魔物の居つかない荒野へと、拠点を移した。

数さえ揃えば、ヒトを皆殺しにできる。

魔族はそう考え、戦力の拡大に専念したのだ。

それはその時点では、間違いなく事実だった。

しかし魔族の数が増えるのは、非常に時間がかかる。

魔族が1体の子を産む間に、ヒトは何世代も交代し、文明の進歩に努めた。

そして、1000年以上の月日が流れた。

---

統一歴1600年、西の大陸の某所。

一体の魔族が、星を見ながら思索にふけていた。

どうもこの所、戦果が悪い。

彼の中の議題はそれだった。

昔から、ヒトとの戦は魔族の恒例行事のようなものだ。

娯楽とさえ言っている。

なにせあの虫唾が走る下等な生物どもを、思うまま虐殺できるのだ。

これが娯楽でなくて何なのだ。

やつらの頭を踏み潰すときの感触がたまらない。

もつたいぶつて命乞いをさせた後に首を切るのも悪くない。

手足をちぎってそいつの目の前で食べるのも一興だ。

そんな本能の導きに従って、これまで奴らを殺し続けてきた。

どうやらこの感情は、魔族に共通したものらしい。

皆一様に、ヒトを見ると殺したくなり、殺すと快感を感じるのだ。

ヒトとは、自分達に殺されるためだけに存在する雑魚。

それが、魔族の共通認識だ。

……そのはずだった。

しかし近頃は。

ヒトとの争いで、こちら側の被害が増えている。

やつらが奇妙な術を進化させ始めたためだ。

やつらはそれを、魔術と呼んでいる。

それこそ1000年以上前から、ヒトどもはそれを使用していた。

確かにこちらの届かない遠くから攻撃されるのは少しやつかいだった。

しかし、近づくまでの間に精々数体の同胞がやられる程度。

その多くは鱗の頑強さで防ぐことができた。

そして近づくことができれば、思うままに蹂躪するだけだ。

しかし最近になって、その魔術の威力が増大してきた。

前衛に近づく前に、魔術によって多くの者が死に。

接近戦になっても、数の不利で敗北することが生じ始めた。

それは耐えがたい屈辱であると同時に、脅威だ。

魔族が十分な数をそろえるには、まだ時間がかかる。

それよりもヒトの魔術の進歩の方が早いとなると、非常にまずい。

どうにかして奴らの進歩を止めなければ、滅びるのはこちらの方かもしれない。

彼は、少しだけ焦っていた。

恐らく彼以外の魔族には、そのような考えの者はいないだろう。

そもそも、他の魔族が何を考えているかなど、知る由もない。

魔族には、言葉など存在しないのだ。

魔族の意思疎通は、極めて原始的なものしかない。

他の魔物と同じように、声帯を使って音を出すだけだ。

危険ならば警戒するような音を。

戦いの合図なら勇ましい音を。

いたわる時にはか細い音を。

その程度のやり取りしかできないのだ。

故に多くの魔族は、物事を深く考えられない。

戦のやり方にしてもそうだ。

生活に退屈を感じた誰かが声をあげ。

憂さ晴らしをした者達がそれに乗っかって、攻めていただけだ。

作戦も何も、あつたものではない。

別に、それでもよかつた。

これまでは、個体の圧倒的な戦力差によって、大半の戦闘には勝利できていたのだ。血気にはやつた若い魔族が、大陸に乗り込んでいこうとすることだけを防げばよかつた。

しかし、時代が変わりつつある。

魔術の進歩により、敗北することが増えてきた。

敗北すると、死者が増える。

大陸に攻め入るための頭数が減ってしまう。

補うために時間を必要とする。

そうなることさらに、魔術の進歩によってヒトが優位に立ってしまう。

そんな悪循環を前に、彼はため息を吐く。

その仕草はどこか、ヒトに近いものがあつた。

言葉を有しないとは思えない、複雑な感情を表す仕草。

——そう。

魔族の中で、彼だけは別格だつた。

驚くべきことに、彼はこれまでの思考を、言葉という手段なしに行うことができた。

観念<sup>イデア</sup>とも呼ぶべき、抽象的な感覚のみで、彼はそれだけの思考を完遂したのだ。

それは過去全ての魔族を集めても、到底あり得なかつた所業だ。

その誕生から、彼は異質だつた。

魔族には滅多に生じない、双生児の兄として彼は誕生した。

そして、彼が誕生した時には、弟は死んでいた。

まるで、与えられるべき栄養を全て彼に献上したかのように、胎内で器官を全く発達させずに。

そこに因果があるのかは知る由もないが。

彼は他の魔族よりも、全ての能力が高かつた。

戦闘において、他の全ての魔物を凌駕する魔族。

その中にいてさらに、彼の能力は頭一つ抜けたものだつたのだ。

そして頭脳に関しては、もはや異種と呼べるほどに、彼は秀でていた。

必然、彼の指示に従う魔族が増えた。数をそろえてヒトを滅ぼすという方針も、彼が統制すればこそ、魔族全体に反映できる。

彼は事実上、魔族のトップに立っていた。

ヒトが彼を見たなら、「魔王」と。

そう呼称するであろう存在だった。

そんな彼が、星降る丘で悩んでいた。

自分は、ヒトの進歩を甘く見ていた。

このままでは、魔族の勝利は危うい。

このままでは、敗ける。

この100年で、急激に魔術を進歩させたヒト。

それに対して、魔族は少し数を増やしただけだ。

その差が、致命的になりつつある。

これまでのやり方ではだめだ。

個体の膂力によつて勝利できる時代は終わってしまった。

このまま数を増やすだけでは、ヒトに勝てない。

抜本的な方針変更が必要だ。

彼は考え、そう結論づけた。

では、何を行うべきか。

課題は2つ。

1つ目は、ヒトの進歩のスピードを削ぐこと。

それは必須項目だ。

その技術を失わせることができればなおよい。

しかし、具体的な方法は思いつかない。

東の大陸に潜入して、主要な都市を破壊すればいいのだろうが、難しい。

大陸間をつなぐ陸地は、当然ヒトが守っている。

防衛線を突破するには多くの犠牲が出るだろうし、突破しても敵地の中では、数の力

でいずればやられてしまうだろう。

空を飛んで渡ることも、不可能だ。

確かに魔族には翼がある。

しかし、それで飛翔することはできないのだ。

翼の役割は、跳躍をより高くすることと、最高点まで到達したあとの滑空を可能にする  
ること。

それは結局、落下に過ぎない。

大陸間を渡るには、力不足だ。

次に考えられるのは、泳いで渡ること。

不可能ではないが、海岸の多くの部分には探知魔術とやらがあるようだ。

長距離を泳いで疲弊したところでそれに引つかかれば、魔術の格好の的になる。

更に言えば、魔族の身体は重く、泳ぎに適していない。

以上の理由から、現状では、潜入は困難だ。

だが、何か打開策を考えなければならぬ。

やらなければ、遠からず、魔族は滅ぶ。

そして2つ目は、戦力の増強。

魔族の個々の能力については申し分ない。

だがそれだけでは、通用しなくなってきた。

個でなく群れとして戦う場合には。

個の能力よりも大事なものがあると、皮肉にもヒトとの戦で学ばされた。

戦闘時、ヒトはそれぞれが集団の一部としての役割を全うする。

索敵、伝令、遠距離斉射、近接戦闘、治療。

陣形を取り、それぞれが器官として働くその様は、全体で一つの生物のようにさえ見える。

個々の戦力の足し算ではこちらが勝つはずの戦闘でも、その技術差によつて、敗北を喫してしまう。

——つまり、連携だ。

魔族にもそれが必要なのだ。

その為に必要なのは、意志の伝達。

「言葉」を、覚える必要がある。

これについては、すぐに取り掛かれるだろう。

戦闘の際に、適当なヒトを拉致すればいい。

やつらを生かしてこちらに運ぶなど、考えただけで虫唾が走るが。

あまつさえ、やつらから学ぶなど、自害したくなるほどの屈辱だが。

しかし、やらねばなるまい。

魔族の勝利の為。

最後にやつらを根絶やしにするためだ。

その日、彼は決断した。

計画通り、やつらの一人を拉致し、言葉を学んだ。

彼の賢さゆえか。

思つたよりも簡単に、覚えることができた。

それを他の魔族に教える。

魔族の多くは反発した。

しかし彼は根気強くそれを教え。

最初は、彼を信奉していた魔族だけがそれを学んだ。

そしていざ使用すると、彼らはその便利さに驚いた。

それを見て、教えを乞うものが少しずつ増え。

言葉は徐々に、魔族に浸透していった。

言葉が扱えるようになったら、次は、作戦行動。

全体が同一の目的に向かつて行動するには、まずは頭が必要だ。

しかしすでに、彼は魔族のトップとして君臨していた。

彼の命令に従わない者はいない。

彼は作戦を考え、それを実行させた。

といつても、積極的に攻勢に出る作戦ではない。

むしろ、これまで通りに振舞っている振りをしながら、味方の被害を抑える作戦だ。

違和感がないように、少しずつ戦闘の回数を減らしていった。

敗北の可能性がある戦闘を、わざわざ行う必要はない。

ヒトどもにこちらの変化を気取られなければ、それでいい。

魔族の欲求不満は高まったが、彼のカリスマがそれを抑えた。  
プラスチック

まれに、ヒトが攻めてくることもある。

しかし、それに関しては問題ない。

こちらから攻めると敗北を喫するが、防衛であれば話は別だ。

大陸をつなぐ地峡。

やつらがそれを超えれば深い森だ。

他の魔物もひしめく森の中で、数の優位をもって戦う分には、問題なく勝てる。

今はまだ、だが。

さて、行動を開始してから数百年。

魔族全体が言葉を覚え、戦略的消極策を徹底することができるようになった。

そして、その間も彼ははずつと、考えていた。

ヒトの進歩を遅らせる方法について。

幾多の方法を考え、試したが、うまくいかなかった。

一つ例を挙げるなら、船を造るといふものだ。

それができれば、簡単に事は済む。

やつらの探知にかからない沖から東の大陸の奥へと進み、警戒されていない場所から侵入すればいいのだ。

ヒトが海に船を浮かべたら魔物に襲われるらしいが、海の魔物は自分達には敵対しない。

船さえできれば、海は魔族のものだ。

しかし魔族の手足は、ものを作るといふことに向いていなかった。

木を切り倒すのは容易だが、それらを加工してつなぎ合わせるのは不可能だった。

長い時間をかけて。

できたのは、船と呼べるようなものではなかった。

それはイカダであった。

何本かの木を切り倒し、枝を削ぎ、丈夫な蔦つたで縛ったもの。

しかし、彼は満足だった。

格好などどうでもいい。

魔族を乗せて海に浮きさえすればいいのだ。

イカダは見事、海に浮かんだ。

魔族を数体乗せ、オールを漕がせれば前に進む。

これがあれば、ヒトどもの進歩を止められる。

彼は喜び、作戦を実行した。

魔族を乗せた数十基のイカダが、東の大陸へと出発した。彼は成功を信じて見送った。

しかし、作戦は失敗した。

海には、海流というものがあつた。

それは大部分が、東から西に向かう方向に流れていた。

魔族の腕力をもつてオールを漕いでも。

ある場所から先へは、進むことができなくなつてしまつたのだ。

船を造る計画は、失敗に終わった。

他にも、様々な案を検討した。

背中に魔族を何人も乗せ、空中で順に背中を蹴つて跳躍することで、防衛線を飛び越える案。

ヒトを拉致し、その者達に高性能の船を造らせる案。

翼に巨大な葉を装着し、飛翔する案。

鳥型の魔物を捕まえ、その背に乗って飛ぶ案。

例をあげればきりが無いが、その全てが失敗に終わった。

背中を蹴って跳躍しても、得られる高度には限界があった。

拉致したヒト共は、船に詳しくない上に、ほとんどが自害した。

翼に葉をつけても何の意味もなかった。

鳥型の魔物は、命令に従わなかった。

しかし彼は何度でも。

星を見上げ、考えを巡らせる。

彼は規則的に動く星々が好きだった。

その動きの正確さに惹かれていた。

人間の寿命を優に超える時間、彼は星を見上げてきた。

しかし最近になって、その好意すら、無下に打ち砕かれた。

規則的に周回する星などごく一部だった。

戯れに記録をつけてみたところ。

多くの星は、逆行したり旋回したり、不規則なふるまいをしていることに気付いたのだ。

それ以来、彼は星を見ることをやめていた。

ただ、何百回目かの作戦に失敗したその日。

久しぶりに眺めてみることにした。

大きな岩の上で寝ころびながら、夜空を見上げる。

そして、ふと思った。

……もしかしたら動いているのは、星ではなく。

——この世界なのではないか？

不意に浮かんだ、そんな考え。

だとしたら、星の動きに辻褄が合う可能性がある。

自分達が動き、動いている中で星々の運動を観測しているのならば。

その軌道が歪なものに見えるのも、納得できる。

馬鹿らしい思い付きだ。

例えそれが正しかったところで、何にもならない。

そんなことよりも、東の大陸に潜入する方法をもっと考えるべきだ。

そう分かっているても、思考は止められなかった。

だとしたら、世界はどのように動いているのか。

彼はそれから数年。

星を観測し、検証を行い、自分たちの世界の運動について考えた。

そしてその探求は、思わぬところに結実した。

この世界は、球体だ。

星の動きの観察を続けた結果、彼はその結論に行きついた。

世界は球であり、自らが回転すると同時に、空の光の周りを周回している。

そんな形をしていると、彼は確信した。

そして。

それはすなわち。

海流に逆らわずに、西から東への移動が可能であることを示唆していた。

「ククッ。

……クハハハハハ」

思わず、笑みがこぼれた。

それはヒトから見れば、これ以上ないほどに、邪悪なものに見えたに違いない。

それから数年後。

作戦は決行された。

西の大陸の西端にイカダを百基浮かべ、西に向かって出発した。

彼の考えが正しければ、東の大陸の東端へとたどり着くはずだ。

彼自らもイカダに乗り、星を見て方向を指示した。

多くの魔族を動員した作戦。

無事にたどり着けるのかは、分の悪い賭けになる。

しかしもはや、残された手段はこれしかなかった。

自分達は、ヒトの進歩を侮っていたのだ。

時が経つほどに魔族は追い詰められ、既に状況は劣勢だ。

勝つためには、賭けに出るしかない。

目的地は決まっている。

かつて、ヒトの兵士から地図を奪ったときに、目星はつけておいた。

やつらはこちらには読める者もないだろうと、油断していたのだろう。

事実、その時には読めた者はいなかったが。

——魔法都市ヴィルガイア。

そこが、ヒトどもの魔術の供給源らしい。

好都合なことに、たどり着くはずの場所から非常に近い。

そこは、確実に潰す。

そしてもう一つは、エルフの国。

奴らの結界と治癒には、戦場で何度も煮え湯を飲まされた。

可能であれば、潰したい。

さしあたつての目的地はその2か所だ。

それらの発展を奪いさえすれば、戦局を変える大きな一手になるはずだ。

あとの行動はその後で考えるところ。

楽しみだ。

無事にたどり着けたならば。

これまでの戦場での恨みを、余すところなく晴らさせてもらう。

魔族の強大な力で漕がれるイカダは、海流を味方につけて、かなりの速さで進んだ。海に出てからたった10日ほどで。

魔族たちは、東の大陸へとたどり着いた。

そして着いたその夜に、作戦を決行することとした。

すなわちその夜、ヴィルガイアを襲撃した。

作戦は、おおむね成功した。

しかし最後の最後に手痛いしつぺ返しを食らい、半数以上の同胞を失ってしまった。

一国の王でありながら、あれほどの魔術を秘めているとは。

彼もその場において、複数の魔族が盾になったおかげで生き延びたが、大きな怪我を負った。

他にも、ヒトとの戦闘で負傷、死亡した者も少なくはない。

……さて、どうするべきか。

傷は時間をかければ治る。

しかし自分たちの存在が露見するのは良くない。

大陸のこちら側まで警戒されると、同じ作戦は使えなくなってしまう。

ヴィルガイアを墮とした時点で、作戦は成功と言つていい。

これでヒトどもの魔術の発展は止まり、世代を交代すればその練度も下がるだろう。

その間に、こちらは力を蓄える。

そのためには、彼が必ず生きて帰って、その方針を伝えることこそが肝要だ。

少しの逡巡の後、彼は撤退を決めた。

イカダに乗り、闇に紛れて沖へと漕ぐ。

海流に逆らうと全く進めないのです、逆らわずに故郷を目指す。

つまり東から西へと、世界を一周することにした。

100日を超える船旅になるだろうが、陸地を見ながら移動できるので、道に迷うことはない。

こうして、魔族達は東の大陸から去った。

しかし。

例外が一体だけ残っていた。

王の魔術にやられ、かろうじて一命をとりとめたものの、瓦礫に埋もれて動けなくなっていた者だ。

彼は日が出る前になんとか抜けだし、付近の森に身を潜めて身体を癒した。

魔族の傷は、時間経過で少しずつ回復する。

腕や脚が欠損しても、長い月日をかければ再生するのだ。

彼もまた、百年以上の年月をかけて、その身体を再生した。

そして、自分がどうすべきなのかを考えた。

乗ってきたイカダはすでにない。

証拠を残さぬように、余ったイカダは同胞が全て壊してしまったからだ。

残っていたとしても、数十年の劣化に耐えられるわけもない。

しかし新たにイカダを作るのも難しい。

木はなんともなるだろうが、蔦つたは試行錯誤の上で選んだものだ。

丈夫でほどけにくいものでなければ、長い航海に耐えられない。

途中でほどけてしまったら、水よりも遥かに重い体は、海底に沈んでしまう。

海を渡って帰るのは不可能。

となれば。

やることは一つだ。

作戦目標のもう半分。

魔族全体のことを考え、彼はエルフの里を襲うことにした。

存在が露見しても、彼一人ならば問題はあまい。

それにエルフの里は、ここから非常に距離が離れている。

大陸の東端から上陸したなど、想像もつかないだろう。

長い旅路の末。

彼は、エルフの里へとたどり着いた。

孤立したヒトを拉致して場所を聞き出し、殺す。

これを繰り返せば、たどり着くのは難しくはなかった。

しかし、里の中へは入れなかった。

こざかしいことに、破れない結界が張ってあったのだ。

仕方がないので、その付近の森に居つき、里を訪ねるもの、里から出るものを全て殺した。

そのうち、里から出るものは誰もいなくなつたが、訪ねて来る者はちらほらといる。

それらを殺す生活を、ひたすらに続けた。

エルフの里が、深い森の中にあつたのは僥倖だつた。

自分を見たものを全て殺せば、自分の存在は外に漏れない。

ヒトが大勢で自分を狙うこともない。

更に幸いなことに、魔族がヒトに戦争を仕掛けなくなつたことで、余裕が生まれたヒトは互いに殺し合うようになった。

東の大陸は戦火に焼かれ、エルフの里は孤立。

その存在すら知る者はほとんどいなくなつた。

それでも、彼は森に潜んだ。

里のエルフを、外に出さないために。

彼はひたすらに、里を訪ねてくる者を殺し続けた。

いつの日か、魔族が東の大陸に攻め入つて、自分と合流するその時を待ちながら。

## 魔導書

〈ハジメ視点〉

村に帰ると、ニーナとシータが出迎えてくれた。

2人とも、帰りの遅い俺を心配してくれていた。

村で捜索隊を出すように要請するか、悩んでくれていたらしい。

帰りが遅くなったことについて謝った後。

俺は自分の過去が分かったことについて報告した。

俺は1000年前に滅亡した国の末裔だと。

別の世界からやってきたのと同じくらいにぶっ飛んだ話だが、2人はすんなりと信じ  
てくれた。

実はこの二人、俺の正体とか、あんまり気にしてないのかもしれない。

「なんだかハジメ、すごくすつきりした顔してる」

とは、ニーナの言である。

自分でもなんだか、気分が冴えてるのを自覚している。

まあ、それも自然なことかもしれない。

この世界に来てからずっと、心の片隅にあつた悩みが消えたのだ。心のリソースを、全て目の前のことに使えるようになった感覚。

楽しい時に、心の底から笑える。

それがこんなにも、爽快なことだとは。

もう俺は、眠るときに不安になることはない。

俺が突然地球に戻ることは、起こりえない。

俺はこの世界で生まれ、この世界で生きていく。

そう確信できることが、本当にうれしい。

村に戻ってからは。

俺はひたすらに本を読み、魔術の訓練をした。

本というのは、廃墟で発見したあの本だ。

本には、様々な魔術について詳しく書かれていた。

結界魔術や、転移魔術、聖級四大魔術など。

いずれも現在では失われ<sup>ロス</sup>た技術<sup>テク</sup>となつている、すさまじい魔術ばかりだ。

あまりすごいので、敬意を表してこの本を魔導書と呼ぶことにした。

せつかく手に入れたので、この本に載っている魔術は全てマスターしたいと思つた。

それが、これを残してくれた両親に対する、けじめのような気もした。

本の内容は非常に分かりやすい。

ヴィルガイアの血筋のなせる業なのか、これまで読んだどんな教本よりもすんなりと頭に入ってくる。

この分なら、目的の達成はそう遠くなさそうに思えた。

「……………ふう」

勉強に区切りをつけ、一息つく。

夕食を終えて勉強を始めたが、気づけば深夜になっていた。

「俺、こんなに集中力あったっけ」

アバロンでエミリーに尻を叩かれていた時よりも、かなり集中して学習できている気がする。

自分に自信を持てたことによる副産物かもしれない。

以前は、自分が明日にでも消えてしまうのでは、という不安が常に存在した。

そのせいで、勉強したって全部無駄になるんじゃないか、という思いを捨てきれなかった気がする。

勉強に100%集中できてはいなかった。

それが今は、目の前のことに完全に没頭できる。

それにもともと、俺には魔術の才能があったのかもしれない。

自惚れかもしれないが。

両親の魔術は、ヴィルガイアでも群を抜いていたらしいからな。

「カシーでも飲もうかな」

もうひと頑張り。

夜明け前まで勉強しよう。

そう思っただち上がると、ドアを叩く音がした。

「はっ？」

ドアを開けると、ニーナが立っていた。

カシーを入れたカップを2つ、お盆に乗せている。

「ごめんね、邪魔しちゃって。」

ちよつと息抜きしないかなって」

ニーナは少しはにかみながら言った。

「おお、ありがとう。」

ちようど飲みたかったところだ」

ニーナからカップを1つ受け取り、口をつける。

うむ。味は可もなく不可もなし。

俺が淹れるのとどっこいどっこいだな。

一番うまいのは、やはりシータだ。

「ずつと本を読んでるみたいだけど、それ何の本なの？」

ニーナはベッドに腰掛けながら言う。

「ふふ、聞いて驚け。」

これは1000年前に滅びた王国に伝わる、伝説の魔導書だ」

「へー、すごいねえ」

全然驚かれなかった。

触ってもいい？ とニーナが聞くので、本を渡してやる。

「でも1000年も前のものなのに、フツーに読めるんだね」

「ああ、なんか劣化防止の魔術がかかっているらしい」

「そんなのあるんだ」

ニーナはパラパラと、適当にページをめくっている。

「分かるか？」

「……全然分かんないなあ。」

ハジメ、本当にこれを理解できてるの？」  
「ああ。」

「少しずつだけど、じっくり読めば分かる」  
「ほー。さすがだねー」

ニーナははいっ、と本を返してきた。  
俺はそれを受け取り、カシーをすすする。

「……で、どうしたんだ？」

「こんな夜中に」

わざわざ俺の部屋を訪ねるくらいだ。

何か用事があるのではなからうか。

そう思っつて尋ねると、ニーナは少しうつつむいて言った。

「……ハジメ、ちよつと変わったよね。」

「なんだか、前より明るくなった」

「ニーナはもじもじと、両手の指を絡ませている。」

「ああ、俺もそんな気がする。」

「過去がわかってから、なんだか調子がいいんだ」

「だよね。」

昔は……っていうかこないだ帰って来てからもだけどもっと自信なきげだったもん。

私がすごいすごいって言っても、謙遜ばかり返ってくる感じで「確かにそうだった。」

何かにつけて、あまり自信を持てなかったからな。

「それが、海に行つて帰つて来てから、なんだか雰囲気が変わっちゃつて。……血のつながった家族のことが分かったから、なんだよね？」

「ああ、そうだ」

ふーむ。

いまいちニーナの言いたいことが読めないな。

昔の俺の方が好きだったとか、そんな感じだろうか。

「私ね、ハジメの過去が分かったって聞いて。

すごく嬉しかったんだ。

ずっと悩んでたの、知ってるから。

ハジメの悩みが解決したのは、すごくうれしい」

ニーナは視線を床に彷徨わせながら言う。

「ハジメがなんだか明るいのも、すごくいいと思う。」

ただね、ハジメがすごく変わったから。  
なんだか怖くなっちゃって……」

「怖いって、何が？」

その質問に、しばらくの沈黙が流れた。

ニーナはシートを握りしめ、俺の足元あたりを見ている。

そういえば、持ってきたカシーに口もつけてないな。

意を決して、ニーナが口を開く。

「……ハジメが私たちのことなんか忘れて、どこか遠くに行っちゃうんじゃないかって  
ぼつりと。」

呟くように、ニーナは言った。

「ハジメが実は昔の国の人で、血のつながった家族がいて。」

それが分かったのは、とっともうれしいの。

ようやく、ハジメの欠片が埋まったんだなって。

すごくうれしい。

……でもね。

私だって、ハジメの家族でいたい。

図々しいかもしれないけど、ハジメとつながっていたい。

だからお願い。

私とお母さんのこと、忘れてりしないで」

ニーナの視線は、俺の顔へと移った。

目が合う。

本気で心配している表情だ。

その顔に俺は思わず――。

「ぶっ」

「？」

「ぶあはっはっははははっ！

何言ってるんだよニーナ！

ははあっはははっ、はっ、は、腹痛え」

笑い転げた。

「な、何よ！

真剣な話をしてるのに！」

ニーナが顔を真っ赤にしている。

しかしこれはこいつが悪いだろう。

「そりゃ血のつながった家族が誰なのか分かったけど。

1000年も前の話なんだぞ。

そりや大切に思うよ。

思うけどさ。

どっちが大切って言われたら、俺は迷わずお前とシータを選ぶよ」

そう言うのと、ニーナはあからさまにホツとした表情になった。

「杞憂にもほどがある。

むしろ俺のことを忘れていたら許さんからな。

お前の結婚式には、死んでも行くから覚悟しとけよ」

「ふふっ。そっか……うん。

まあハジメならそう答えてくれるだろうなーって、思っただけだね」

ニーナは笑顔になり、ようやくカシーに口をつけた。

「そういえば、飲めるようになったんだな」

昔は苦くてダメだったはずなのに。

「そうよ。

私もね、少しは成長してるんだから」

「そうか」

それは少し、感慨深いものがあるな。

その後しばらく雑談を交わし、ニーナは部屋に戻っていった。

一人になった部屋で天井を見上げる。

……うん。

ニーナに言った言葉に嘘はない。

どちらかと問われれば、間違いなく彼女達の方が大切だ。

それは間違いない。

ただ。

それとは別のところで。

俺の中に、これまでは存在しなかった感情が芽生えていた。

## エルフの里にて

〈語り部視点〉

降り注ぐ陽光が、万物を優しく照らし。

森に住む鳥や動物たちも、一日の始まりを感じ、その眠りから覚める。

風が通り抜け、花びらが舞い、すがすがしい空気が家々を包む。

そんな、エルフの里の朝。

「ふぁ……」

エミリーは窓から注ぐ日差しを浴びながら、ベッドの上で伸びをした。

それは以前の彼女からは考えられないような、無防備な仕草だ。

しかしどちらかというと、こちらがエミリーの本当の姿だった。

貴族らしく振る舞うことは、彼女にとつては枷だった。

起き抜けのあくびの1つくらい、抵抗なく行える。

エミリーはそんな今を満喫していた。

顔を洗って、パンを頬張る。

彼女は料理ができないので、食事は常に出来合いのものだ。

それは、元貴族だから仕方がない。

旅の間は、ハジメに文句を言われたが。

都合の悪いときは、貴族を言い訳に使うことに抵抗はないのだ。

カシーを飲み、着替えを終えたら、1日が始まる。

「うん、かなり分かってきたみたいだね。」

これならもう、僕から教えることはあんまりないよ」

今日は、試験の日だった。

中級結界魔術についての試験。

エミリーの魔術を見たカヤレツキは、笑いながらそう言った。

ここに来てから、半年が経った。

結界魔術と治癒魔術。

エルフの里は、その2つの分野において、圧倒的に進んでいた。

アバロンの結界魔術など、比べれば「星と鈍亀」だ。

里では初級と呼んでいる技術すら、アバロンでは完成していない。

治癒魔術はまだマシだが、それでも足りないものが多すぎる。  
「ありがとうございます、先生」

カヤレツキに褒められたエミリーは、すまし顔でそう言った。  
内心では嬉しさにガッツポーズを決めている。

しかし、そんなことを表に出すわけにはいかない。

何故なら、彼女は元貴族だからだ。

自分一人の時ならまだしも、人前でそんな姿を見せるわけにはいかないのだ。  
カヤレツキも、段々とエミリーの性格がわかってきた。

その唇の端がピクピクと震えてるのを見て、彼女の内心をなんとなく察した。

その上で、彼は言う。

「そろそろ、いいかもしれないよ?」

何のことだろうか。

エミリーは思い当たる考えが浮かばなかった。

なので、素直に聞いた。

「何のことでしょうか?」

「この里を出て、独学でもいいかもしれないってこと」

その言葉に、エミリーは驚き、すぐに反論した。

「いえ、しかし上級の結界魔術はまだ教わってません！」

ていよく厄介払いをしようとしているのではないか。

そんな考えすら頭に浮かんだ。

「うん。確かにそうだね。」

ただ上級の魔術って、結局のところ中級までの応用なんだよね。

四大魔術を上級まで修めてる君に、僕が偉そうに言うことでもないけど」

そう言つて、カヤレツキは苦笑いを浮かべた。

「治癒も結界も同じだよ。」

乱暴に言えば、詠唱を長くすることで効果と範囲を高めたものだ。

重要なのは詠唱の文言に乗ってる意味を、感覚として理解すること。

そのために必要なのは、反復だけだ。

だから、ここじゃなくても、僕がいなくても、君なら手に入れることができると思う

よっ。」

エミリーは、その言葉を内心では理解していた。

確かにその通りだ。

自分が上級に至る道筋に、指導は必要ない。

……ただ、受け入れられない理由があつた。

「いえ、私はまだまだだ、先生から教わるべきことを多く残しています。どうか今しばらく、ご指導お願いします」

エミリーは懇願するように言った。

それは、おおよそ彼女らしくない仕草だった。

カヤレツキは、意外そうにその様子を見つめ。

「あれ？」

君は喜ぶか、表情も変えずに受け入れて去っていくものだと思つてたよ。

……どうしたの？」

少しでも口元を緩めて尋ねた。

エミリーは、内心で数十回の舌打ちをする。

「そんな、理由なんてありませんわ。

ただ、私には先生が必要なだけです。

どうか、分かってください」

エミリーは首を曲げ、上目遣いで言った。

その仕草には、大抵の人間を恋とせる魔性が秘められていた。

しかしカヤレツキはエルフである。

生きてきた年月は人間の比ではない。

全く動じずに言う。

「はいはい。」

「そうゆうことにしてもいいけど」

溜め息を一つ。

「僕らは君達にとても感謝してるし、いつまで居てくれてもいいんだよ。」

……ただね。

行動は早い方がいいと思うなあ。

今頃誰かが、言い寄ってるかもしれないよ?」

その言葉を聞いた瞬間。

ピシツと。

エミリーの表情が固まった。

「……な、何のことだか、ぜ、全然分かりませんね」

無理やり、絞り出すように言う。

その様子を見て、カヤレッキはまた溜め息をついた。

「君がそう言うならそれでいいけどさ。」

まあ……後悔しないようにね」

カヤレッキはそう言うのと、くるりと背を向けて歩いて行ってしまった。

その最後のセリフに、エミリーは背筋が寒くなった。分かつてる。

分かつてるのだ。

ぐずぐずしていると全てが終わってしまうかもしれない。

しかし、どうしても。

行動に移せないのだ。

ハジメと顔を合わせるのが気まずい。

ただそれだけの理由で、エミリーはここに留まろうとしていた。

「ああ……もうっ！」

こんな自分は、ありえない。

エミリーが信奉しているのは理性。

すなわち、合理性だ。

それに基づいて考えるなら。

魔術の研鑽が一人でも可能なら、この里に用はない。

とつとつとハジメのもとに趣き、返事を聞くべきなのだ。

その内容次第で、次の行動を決定できるだろう。

そう頭では分かっているのに。

彼女はグズグズと、それを先延ばしにしようとしていた。  
理由は……怖いから。

彼女にとって、告白も初めてなら、その返事を待つのも初めてだった。

返事がOKならいい。

嬉しさをこらえるのが大変だろうが、それはおそらく幸せなことだろう。

問題は、NOの場合だ。

ハジメの返事は、正直想像がつかないのだ。

きちんと恋愛対象としての天秤に掛けられた上で、そこから落とされるならまだいい。

しかしハジメには、恋愛以前の理由で断られる可能性がある。

転移の真相が掴めるまで、自分にそんな資格はない。

なんて、いかにも奴が言いそうな言葉だ。

そんな返事を聞いた時。

自分が内心を抑えて取り繕うことができるのか。

エミリーには自信がなかった。

いつそ誰かに、返事を聞いてきてほしい。

ハジメの見えない所のなら、取り乱してもまだ許されるというのに。

そんな女子中学生のような思考に絡め取られ、エミリーは身動きを取れなくなっていた。

そんなある日。

エミリーが自宅で、貰い物の料理を食べようとしていた時。

玄関から、チャイムの音が聞こえた。

来客など珍しい。

まあどうせ、カヤレツキあたりだろうが。

そんな予想をしながら、玄関を開ける。

すると。

「やあエミリー、久しぶりだな。

元気にしていたか？」

「……クリスマス!？」

扉を開けた先には、クリスマスが立っていた。

「突然どうしたの!？」

何かあった!？」

「ちよつと、エミリーに伝えたいことができて。

アバロンから駆けつけたんだ」

屈託なく笑いながら、クリスは言った。

その笑顔は、以前の彼女とは少し違っていた。

以前よりも、物腰が柔らかくなつたような気がする。

洗練された剣のような立ち振る舞いに、どこか艶やかさが加わつたような。

そんな印象を持たせるような笑みだった。

「……まあ、とにかく入って。

紅茶でも出すから」

「ありがとう。」

失礼する」

クリスをテーブルへと案内し、自分はキッチンへと向かう。

火魔術でお湯を沸かした後。

最近覚えた紅茶の淹れ方を活用して、エミリーは紅茶を淹れた。

ポットから紅茶を注ぎ分け、盆にのせて、クリスの前に置く。

「どうついで」

「ありがとう。」

「エミリー、紅茶を淹れられるようになったんだな」

「ええ、最近覚えたの」

「クリスがティーカップに口をつける。」

「……うん。普通に美味しい」

「普通について何よ。失礼な」

「そう言いつつ、エミリーもテーブルに着いた。」

「自分の分の紅茶に口をつける。」

「うん、まあ、普通に美味しい。」

「それで、伝えたいことって？」

「……ああ。早速だが、これを読んでほしいんだ」

「クリスは荷物の中から、封筒を取り出した。」

「これは？」

「ひと月前に、ハジメから届いたんだ。」

「こつちにはさすがに送れなかったみたいだから、持ってきた」

「っ見せて！」

「ハジメの手紙と聞いた途端、告白の返事である可能性が頭をよぎり。」

エミリーはひったくるように封筒を受け取った。

封を開け、手紙を取り出す。

「悪いが、私はすでに読ませてもらった。

それで、嬉しくなってしまうな。

これは絶対に、エミリーにも知らせなければと思ったんだ」

クリスのその言葉は、エミリーには届かなかった。

手紙を読むのに夢中で、他のことなど頭に入る余地がなかったからだ。

エミリーは、むさぼるようにその手紙を読んだ。

そこには、以下のようなことが書かれていた。

拝啓、クリステイーナローレンツ殿。

最近、いかがお過ごしでしょうか。

私は故郷であるサンドラ村で、家族とともにのんびりと生活しています。

ここは何もない村ですが、心を落ち着けるには良い所です。

旅をしていた時の慌ただしい日々が、懐かしく思い出されます。

私は、あなたと出会う前からずっと、この身に起こったことの謎を探るべく過ごして

いました。

それが、私の人生の目的だったといっても過言ではありません。

試行錯誤を繰り返す中で、あなたと、そしてエミリーと出会いました。

あなたたちのおかげで、エルフの里という遥か遠い場所まで、旅をすることができました。

本当に感謝しています。

——さて、私が筆をしたためた理由をお伝えしたいと思います。

この度、私の身にある変化が起きました。

それをお知らせするための手紙です。

ようやく、私の身に起こった全ての事柄の原因がわかりました。

どうやら私は、1000年前に滅んだヴィルガイア王国の人間だったようです。

エルフの長老が以前お話し下さった、あの王国です。

ヴィルガイアはともて魔術が発達しており、転移魔術を発明していたのです。

しかし、発明した矢先に魔族に攻め入れられて滅んでしまいました。

滅ぶ直前に、別の世界（私は地球と呼びます）へと逃がしたのが私だったらしいです。

ほとぼりが冷めた頃に戻ってくるようになっていたらしく、それが私がこの世界に転

移した理由でした。

……書いてて、改めて現実味のない話だと思いました。

しかし私は事実だと考えています。

どうか、クリスが信じてくれることを願います。

エミリーにもこのことを伝えたいのですが、エルフの里へは手紙が届きません。もしも彼女がアバロンに戻ったら、この手紙を渡していただけないでしょうか。身勝手なお願いとでは存じますが、どうか聞き届けていただけると幸いです。

では、怪我や病気には気をつけて過ごしてください。

また近いうちに、酒でも飲みましょう。

敬具

「……………」

「……………」

長い沈黙が、2人を包んだ。

エミリーは、手紙の内容に衝撃を受け、放心状態になっていた。

一度読み、もう一度読み、さらにもう一度読み返して、天を仰いだ。

「そういうことらしい。

ハジメは異世界人ではなくなったが、古代人ということになったな」  
クリスがため息をつきながら言う。

「……そうね。

ちよつとまだ、頭が混乱してるけど。

……とりあえず、届けてくれてありがとう」

エミリーもため息をつき、手紙を封筒にしまった。

その封筒を数十秒ぼんやりと眺めた後、クリスにそれを返し、言った。

「……今日はここに泊まるでしょう？」

カヤレツキからもらった秘蔵の一本があるの。

今夜空けちやいましょう」

「それは嬉しい。

では私は、料理担当ということにしよう。

食料を調達してくる」

「ふふつ。誰かとお酒を飲むなんて久しぶりよ。

楽しみだわ」

「私もだ」

そう言って、クリスは買い物へと出かけて行った。

## 女子会 三角関係について

夜。

テーブルには、豪華な料理。

そして、赤紫の液体が入ったグラスが2つ。

それらがランプの明かりに照らされ、蠱惑的な波紋を作っていた。

「じゃあ、乾杯」

「乾杯！」

エミリーとクリスは、同時にグラスに口をつける。

「これは美味しいな！」

以前ここで飲んだものよりも渋みが強いが、それがまたいい。

……さすがはカヤレツキの秘蔵のお酒だな」

クリスが興奮して言った。

エミリーも同感だ。

様々な香りを内包した渋みが、喉を通る瞬間に鼻孔をくすぐる。

後味はすつきりしてとても飲みやすい。

「これは、美味しいわね」

そう言いながら、目の前のマッシュポテトを自分の皿に取り分け、一口分すくって口に入れた。

クリスが作ったものだが、こちらもとても美味しい。

舌に残った酒の後味が、料理と調和して更に旨味を引き出している。

こういうのを、なんと言うのだったか。

……エミリーは思い出そうとしたが、料理の美味しさに思考が押し流され、疑問は消え去ってしまった。

「しかし、よく一人で来られたわね。

道中、大変だったでしょう？」

代わりに、浮かんだ疑問を口にする。

「いや、そうでもないさ。

以前の帰り道に使った道に、目印をつけておいたからな。

そちらの道を使えば、街道から森を5日ほど歩けばここまで来られる。

初めて来た時よりも、ずいぶんと楽な道のりだった」

なるほど。

初めて来た時は、かなり遠回りをしていたのか。

情報が他になかったからしょうがないけれど。

クリスのグラスは、早くも空になっている。

エミリーはボトルを取り、そのグラスに酒を注いだ。

「ありがとう」

そう言つて、彼女はまたそのグラスに口をつける。

今日の彼女は、少しペースが早い気がする。

酔っぱらうと酩酊してしまう体質だというのに。

「そんなに飲んでると、すぐ酔っぱらっちゃわよ。

あなた、そんなに強くないんだから」

エミリーは心配して言う。

「ああ、分かつてる。

ただちよつと。

勢いをつけたくてな」

……勢い？

どういふことだろうか。

何か言いづらい事でもあるのだろうか。

「どういふこと？」

「この後何かするの?」

「……ま、まあ、その話は置いておこう。」

それよりも、エミリーの半年間の出来事を聞かせてくれ」

「うーん。」

まあいいけど」

慌てるクリスは怪しかったが、とりあえずは聞き流すことにした。

それから、二人はお互いのことを話した。

エミリーはカヤレッキに師事し、魔術を学んでいること。

研鑽を重ね、今では中級の結界魔術まで使えるようになったこと。

里でも認知されて、エルフの友人も数名できたことなど。

クリスはアバロンで、冒険者をやりながら家族と過ごしていること。

気が付くと以前よりも剣技に冴えが出ていたこと。

剣術道場で、師匠に皆伝の認可をもらったことなど。

話している間に、いつのまにか料理は全てなくなり。

カヤレッキ秘蔵の酒も、あとわずかというところまで減ってしまった。

「それにしても、ハジメは何をやってるのかしらね。」

過去が分かったなら、ようやく自信を持って、人生を歩めるようになると思うけど。

ずっとサンドラ村にいるのかしら」

エミリーは、酔いのまわった頭で考える。

過去が分かったということは、彼はその目的を達成したということだ。だとしたら彼は、ようやく次の舞台に進めるはずだ。

次の舞台とは、何なのだろうか。

もしかしたら彼は、それを考えている最中なのかもしれない。

魔術学校を卒業した、才能ある若い魔術師。

魔力量は膨大。体力もある。

ルックスもいい（エミリー視点）。

そんな人間が、のちの人生を考えて選ぶ選択肢。

アバロンの宮廷魔術師になるか、冒険者として名を上げるか。

そんなところだろうか。

他に考えられるとしたら……。

思考の中で唐突に、先ほど思い出せなかった言葉が頭に浮かんだ。

……そうだ、マリアージュだ。

以前ハジメが語っていた。

料理とお酒の相性がいいことを、地球ではそう呼ぶのだと。

マリアージュ  
結婚。

その言葉は、エミリーの心に暗雲を立ち上らせる。

大いにありうることだ。

ハジメが結婚相手を探すことだって。

さすがに自分の告白を無視したまま、結婚してしまうような人間ではないだろう。

しかし、どこぞの娘と恋に落ちて、話が進んでから自分に伝えるという可能性は否定できない。

こんなに離れた場所に自分はいるのだし。

恋心というのは、制御不能なのだ。

身をもって経験したから、よくわかる。

——このままでは、まずいかもしれない。

そんな疑念に思考を絡めとられ、エミリーは黙ってしまった。

グラスを見ながら、つい、その対策の検討を始めてしまう。

「エミリー、一つだけ、話しておきたいことがあるんだ」

その言葉で、エミリーは思考の海から現実に戻った。

ハツとして、クリスの方を見る。

するとクリスはいっぴになく、神妙な顔をしていた。

酔っぱらっているはずなのに、酩酊した感じがない。

何を言おうとしているのかは分からない。

しかし。

その顔を見て、思い出した。

自分にも、クリスに言わなければならないことがあることを。

……そうだった。

自分は抜け駆けのように、ハジメに告白をしたのだ。

クリスはそれを知らない。

もしも自分の思いが成就したとしても、それではクリスは疎外感を感じるだろう。

クリスは大切な仲間だ。

あの旅を共に過ごし、命を預け合った仲間なのだ。

そんな彼女に、隠し事はしたくない。

「実は——」

「待って、クリス」

出鼻をくじかれたクリスは、少し不満げにこちらを見た。

「……なんだ？」

申し訳ない。

しかしなぜか、一刻も早く伝えるべきだという気がした。

「私も、あなたに言うべきことがあるの」

急に、鼓動が早くなる。

エミリーにとって、恋心を他人に伝えるというのも、初めての経験だ。

「私ね。」

前にここで3人でお酒を飲んだ時にね。

あなたが酔いつぶれて寝た後、ハジメに告白したの。

好きだって。

言うのが遅くなって、ごめんなさい」

頭を下げる。

これまで3人で旅してきたのだ。

自分が口にしたのは、その関係に亀裂を作るかもしれない行為だ。

クリスにとって愉快な話ではないだろう。

言ってから、急にエミリーは怖くなった。

自分はおそらくしたら、大きな過ちを犯してしまったのかもしれない。

旅の間、3人の関係はとも居心地がよかった。

クリスは、旅がいつまでも続けばいいと言っていた。

過酷な旅だったのに、不思議と楽しかった。

その関係性はかけがえのないものだった。

純粹な仲間意識。

もしかしたら、それはこの世にあるどんな関係よりも、尊いものなのかもしれない。

それを、自分の行動によって壊してしまった。

もう、二度と元の形には戻らない気がする。

だが、それはすでに起こったことなのだ。

過去に戻ることはできない。

エミリーは恐る恐る、クリスの顔を見た。

そこには、ポツポ鳥がストーンバレットをくらったような表情があった。

驚くのは予想していたが、なんとというか、予想の斜め上をいく驚き方だ。

無言のまま、二人で見つめ合った後。

「エツ、エミリーも!?!」

クリスは立ち上がり、のけぞりながら叫んだ。

「………もっ」

も、とはどういうことだろうか。

も、というのは、誰かが同じことをした、ということ。

パーティーは3人。

エミリーが告白した。

そして、エミリーは告白されてはいない。

だとしたら、起こった事象は特定される。

すなわち――。

「……ええ？」

クリスもハジメに告白したの？」

しばしの沈黙の後、クリスは小さく頷いた。

……信じられない。

エルフの里で別れるまでは、そんなそぶりはなかった。

だとしたら、その後、彼女らが2人で旅をした1か月の間ということか。

「ごめんなさいエミリー！」

実は私、ハジメとの別れ際に、ぼろっと言っちゃったの！

好きだった！」

聞いたことのない口調でクリスがしゃべっている。

動揺するところなのだろうか。

「ええ……」

まさか自分が告白した矢先に、クリスも同じことをしているとは。

自分が告白したことに気づいて、というのなら分かるが、クリスの反応を見る限りそうではないようだ。

全くの偶然に、同じタイミングで告白したらしい。

「いめんなさいー！」

エミリーもだなんて、想像もしてなくて！

その、こんなの私初めてで、どうしたらいいか……」

クリスは相変わらぬ口調で、あわあわと右往左往している。

その様子は余りにも、普段の彼女からかけ離れていて。

「…………ふっ」

エミリーは思わず、吹き出してしまった。

「ふふっ、ふ、あははははっ！」

こらえきれず、エミリーは笑いだした。

クリスは呆気にと取られた様子でそれを見ていたが。

しかし、やがてこらえきれなくなり。

「ふっ、ふふふ、あははははー！」

彼女も笑った。

二人はしばらくの間、笑い続けた。

ようやく笑い声がおさまった頃。

グラスに残った酒をあおりながら。

「……エミリーはいつから、その、ハジメのことが好きだったんだ？」

クリスが聞いた。

「私はね、最初からなの。」

初めて見た時にはもう、好きだって思った」

「それはすごいな。」

一 目惚れ、というものだな」

「クリスはどうなの？」

「私は本当に、告白する直前なんだ。」

不意に自分の気持ちに気付いたせいで、つい口からこぼれてしまった」

「そっちの方がすごいわよ。」

思ったら即行動、なんてね。」

クリスマスらしいけど」

「いやなんだか、つい、ぼろつと言ってしまったんだ」

クリスマスが恥ずかしそうにうつむく。

通常こんな関係になってしまった二人ではあり得ないほど和やかに、2人は話し続けた。

ハジメの好きなどころ。

ハジメの過去についての見解。

一緒に旅をしていた時の心情。

両者とも、生まれて初めての恋愛話だった。

それは甘酸っぱく、背筋をくすぐるようなむずがゆさを伴うものだったが、決して不快ではなかった。

むしろ、とても楽しかった。

お互いの対象が同じ人物ということが難点ではあるが。

しかし同じ人物を好きだからこそ、共感の密度は大きかった。

しかしこの時点で、エミリーは確信していた。

もう、あの旅の関係には戻れないのだと。

エミリーが選ばれたらクリスマスが。

クリスを選ばれたらエミリーが。

3人で過ごすことを苦痛に感じるに違いない。

どちらにしても、あの頃には戻れないのだ。

そのことに、郷愁のような感情を覚える。

しかし、それをどこか嬉しく思うエミリーがいた。

元に戻れないということは、前に進んでいるということだ。

例えクリスを選ばれたとしても。

自分は違う方向へと、新たな一歩を踏み出せるはずだ。

時が巻き戻ることはない。

この世界において、不変の真理だ。

ならば、前に進むことが唯一の正解だろう。

どんな結果になるにせよ。

エミリーは、この半年間、ずっと持てずにいる覚悟を、今ようやく手に入れた気がした。

その夜、話は尽きなかった。

空が白み始め、鳥が鳴き始めた頃。

ようやく会をお開きにして。  
二人は泥のように眠った。

## 訪問

〈ハジメ視点〉

「……終わった」

真夜中の海辺で一人、俺は呟いた。

横にはテントが張っており、その前でたき火が燃えている。

魔導書の勉強を始めて半年余り。

ずっと勉強していた。

その努力がついに、終わりを告げた。

魔導書を、解読し終わったのだ。

いくつかの興味のない分野については飛ばしたが、かなりの部分を会得した。

……長かった。

魔導書は、魔術ごとに項目が分かれている。

その中で興味があるものを選び、ひたすら本を読んだ。

だいたいどの魔術も、理論を頭で理解するのに10日ほど。

それを実践するのにさらに10日ほどかかった。

練習は海辺で行った。

理論を学んだら海へ移動し、沖へ向かって魔術をぶっ放す。

そんなことを、昼夜を忘れてひたすらに繰り返した。

つらかったかという、そうでもない。

正直、楽しかった。

自分の行えることが、一足飛びで増えていく感覚。

その虜になっていて、気づいたら半年が経っていたような感じだ。

さらにその副産物として、この半年で本に書いてない新たな魔術も身に付けた。

魔術と言っているのか微妙なところだが。

とにかく、更に魔術行使の能力が高まった。

まだ理解できていない部分もあるが、それはもういいだろう。

俺は別に魔術研究者になりたいわけじゃない。

これ以上の研鑽は不要だ。

もう満足した。

……あとは、得た力をどう使うのか、だ。

過去を知ってから、少しずつ俺の中に育っている思いがある。

それは時が経っても消えず、大きくなるばかりだ。

勉強に時間を費やして、それを真正面から見つめる事は避けてきた。  
しかし勉強が一段落した。

これから自分の内面としつかりと向き合って、今後の方針を決めよう。  
星を見ながら、その夜は眠った。

---

翌日。

村に戻ると、なんだか騒がしかった。

若い男たちが声を荒げている。

何人かは顔見知りだ。

「俺、初めてあんな美人を見たぜ！」

「あれが都会の美女っていうんだな！」

「俺なんか、道を聞かれたもんね！」

「うるせえ馬鹿ども！ ニーナちゃんの方がかわいいだろ！」

「でももうニーナちゃんもジャックが……」

「……俺はまだあきらめてねえからな！」

なんだろうか。

聞き耳をたてた限りでは、すごい美女が村を訪ねたようだ。

それで盛り上がっているのか。

一部ニーナ派閥も存在するみたいだが。

「なあニツケス、その美女って何？」

近づいて聞いてみた。

男たちが一齐にこちらを向く。

「あ、ハジメじゃねえか！ 死ね！」

「ハジメ、いい天気だな。死ね」

「お前、ニーナちゃんと暮らして行くせに、あんな美女まで！ 死ね！」

「なあ、俺の事、ニーナちゃんに取り次いでくれねえか？ 金は払う」

罵詈雑言を浴びせられた。

ひどい言葉ようだ。

昨日までは普通に仲良くしていたのに、この変わりよう。

全く身に覚えがない。

一部違うやつも混じっているが。

「ちよつと待てよ、何の話だ？」

お前らになじられる理由が分からないんだが」

「あ？」

ネタは上がってんだよ。このクソが。

ついさつき、絶世の美女が二人、お前を訪ねて村にやってきたんだつつーの。

俺達で案内して、今はお前の家にいる。死ね」

美女が二人？

俺を訪ねてきた？

「……もしかしてその二人って、銀髪のツインテールと、金髪の背が高い女の子か？」  
「ああそだよ。」

やっぱりお前の知り合いなんじゃねえか。クソが。

死ね……あいや待って。

今まで悪口は嘘だ。すまん。

後で紹介してくれよ。一人は余るんだろ？

俺は金髪の子が好みだが、どっちでもいいから。

頼む。一生のお願いだ」

ニツケス……こいつ、こんなにゲスだったのか。

こいつだけは絶対に紹介しないと心に決めて、歩き始める。

「おい頼んだぞ！ ハジメ！」

後ろから声が聞こえるが、無視して歩き続けた。

というか、ニツケスに構っている余裕などなかった。

——やばい。

完全に忘れてた。

彼女たちの告白のことを。

あれだけ衝撃的だったことなのに。

過去のがわかってから、一切考えてなかった。

まずは魔導書の解析だ！ と。

それに明け暮れていたら、いつの間にか頭から霧散していた。

しかし勉強は終わったのだ。

これからゆつくりと考える事ができたはずだったのに。

まさか、二人で村にやってくるとは。

……いや待て。落ち着け。

二人の目的はまだ分からない。

もしかしたら、何か全く関係のない重要なことを俺に伝えに来たのかもしれない。

とにかく、今は様子見だ。

軽はずみな言動は、死に直結する。

最も大切なのは、今の今まで告白の事を忘れていたと、彼女たちに悟られないということだ。

「……………ふう」

玄関の前で、一息つく。

中がどうなっているのか、想像もつかない。

この先は魔境だ。

心の準備なしでは、渡りきることはできない。

俺は精神統一をたっぷり行つて、中に入る。

「ただいまー」

玄関を開けると、奥から声が聞こえた。

「わー、二人ともすつごい美人ですね！

なんだか、物語の中の人みたい！

ウチにこんな綺麗な人達が訪ねてくるなんて、びっくりしちやいました！」

はしゃぐニーナの声が聞こえた。

やはり、いるのか。

急いで声のする方へと向かう。

ダイニングの扉を開けると、恐ろしい光景が広がっていた。見慣れた木製の椅子に、クリスとエミリーが掛けている。

テーブルを挟んで対面にニーナが座っていて。

シータはキッチンで料理を作っていた。

「あ、ハジメ！」

やっと帰ってきた！

お客様がお待ちだよ！」

ニーナがあっけらかんと言う。

その対面の二人は、無言でこちらを見つめていた。

「……クリス、エミリー、久しぶりだな」

俺はなんとか、そんな言葉を絞り出した。

「ハジメ！ 久しぶりだな！ 元気にしてたか？」

「久しぶりね、ハジメ」

挨拶を返す両者。

クリスは変わらず元気そうだ。

エミリーは照れたように、顔を少し背けている。

少なくとも二人のその言葉に、トゲのようなものは感じなかった。  
よかった。

二人とも、俺の返事が遅い事に怒ってやってきたわけではなさそうだ。

「ここはのどかで、良い所だな。

住む人もいい人ばかりだし。

来る途中で道を聞いたら、わざわざ皆さんで案内してくれたぞ」

クリスが笑顔で言う。

その「いい人」達に、来る途中で死ぬと連呼されたが。

そこで、シータがお菓子とカシーをテーブルに並べ始めた。

「お二人とも、遠路はるばるよく来てくださいました。

お二人のことは、ハジメから聞いてます。

何も無い所ですけど、ゆっくりしていただくさいなね。

今日は泊つていかれるでしょう？」

「あ、ありがとうございます。

その、大変恐縮ですが、ご厄介になりたく存じます」

エミリーがめちやくちやくしこまってる。

シータがテーブルに着き、俺も別の部屋から椅子を引っ張り出してきて座った。

4人用のテーブルに5人だから、俺はお誕生日席だ。

「それで、何しに来たんだ？」

カシーをすすりながら尋ねた。

エミリーとクリスは目を合わせ、代表してクリスが答えた。

「無論、ハジメの様子を見にきたのだ。

過去が分かったという事は、目的を達成したということだろうか？

その為の旅に同行した者として、祝いに来るのが筋ではないか」

なるほど、まあその通りか。

俺は少し、邪推しすぎていたようだ。

「そうか。ありがとう。

すげーうれしいよ。

まさかここまで会いに来てくれるなんて、思ってもみなかった」

「私達にとつて、ハジメの存在はそれだけ大きいということだ。

何かあれば、駆けつけもするさ。

……なあエミリー」

クリスがエミリーの方を見ると、彼女は無言でコクンとうなずいた。

——ぞくり。

今のアイコンタクトには、なぜか背筋が寒くなるものを感じた。

……あれ？

もしかして、二人ともお互いの出来事を知ってる？

「あ、あー、とにかく、ありがとう。」

手紙に書いたとおり、俺の過去がようやく分かった。

二人のおかげだよ」

「……どうやって分かったの？」

エミリーが、テーブルの角を見ながら言う。

いや、照れ過ぎだろ。

そんなに意識されるとこっちもやりづらいわ。

「……俺が初めてこの世界に来た場所が、この村から歩いて2日くらいの廃墟だな。

そこを調べてみたら、手がかりが見つかったんだ」

「手がかりって？」

エミリーの質問に「ちよつと待ってる」と告げて、部屋に置いてある魔導書を取ってきた。

「これだ」

俺は魔導書を掲げた。

「なんだ？ それは」

クリスが不思議そうに見つめる。

「これこそが、俺の過去を覚えてくれたものなんだ。

廃墟を調べて、地下の隠し部屋みたいなどころで見つけた。

読んでみたら、その国の王に代々伝わる、研究結果をまとめた本だったんだ。

得た結論は、手紙に書いた通りだけど。

その国は魔法都市ヴィルガイアで、オレはその末裔だった」

「研究結果をまとめたってことは、魔術について書いてあるの？」

エミリーが顔を上げ、俺の眼を見て聞いてきた。

「ああ。

ヴィルガイアの魔術について、詳細に書いてある」

「っ！ 見せて！」

凄いい勢いで魔導書をひったくられた。

エミリーは食い入るようにそれをめくり始める。

そうか。

魔術オタクのエミリーにとっては、めっちゃくちや興味があるものだろうな。

手紙に書いていってやればよかったかな。

いやでもあの時はエミリーも読むなんて思ってたし。

「すごいわこれは。」

信じられないくらい発達した魔術体系。

こんな理論があるなんて、発想の外だった。

何よこれ。すごすぎるわよ、これ」

エミリーはブツブツと早口でつぶやいている。

まるで、お気に入りの同人誌を手にしたオタクのようだ。

「あー、エミリー？」

後でそれ貸してあげるから、今は一人の世界から戻ってきて？」

エミリーはハツとして顔を上げた。

皆の視線に気づくとみるみる顔が赤くなり、無言で俺に本を渡してきた。

「……でもなんでその本で、ハジメがヴィルガイアの人間だと分かったんだ？」

クリスが菓子を頬張りながら質問する。

「えーと……」

俺は、本の内容ついて説明した。

末代の王が、その本に手記を残してあったこと。

それによると、転移魔術を発明したその時に、国が魔族に襲われたこと。

王は生まれたばかりの息子だけは、遠い星に転移させることができたこと。

その子には魔法陣を刻み、それにより時が経てばこちらへと戻ってくるようにしてあるということ。

「俺の胸にも魔法陣が描いてあるし、解説したらそういう効果を持つてるものだった。

しかも俺が転移した場所は、まさにその魔術が行われた場所だ。

髪の色や瞳の色の記述も、俺に合致している。

何より、こっちの世界にやってきた、なんてやつが他にいるとは思えない。

それらから、俺は俺がヴィルガイアの末裔だと判断した。

間違いないと思ってる」

俺がそう言うと、クリスは小さく頷いた。

「なるほど。

それならば確かに、その逃がされた子どもは、ハジメで間違いないのだろう」

クリスが納得したように頷いた。

続けて、疑問を口にする。

「……ん？」

ということとは、ハジメはヴィルガイアの王子様ということか？」

「まあ、そういうことになるんだろうな。

もう1000年前に滅んだ王国だけだ」

「あー、私はもつと敬意を払った方がいいだろうか？」

「何言ってるんだ。」

「ヴィルガイアなんて、今は存在すらしないんだ。」

頼むから、今まで通りでいてくれ」

「ハジメがそう言うなら、そうするほかないな」

そう言うのと、クリスは目を細めて笑った。

少し照れる。

「……まあ、そんな訳だ。」

一応、ヴィルガイアの両親に敬意を表して、名前を変えることにした。

俺の名前は、ハジメⅡレオナルドⅡヴィルガイア。

呼び方はこれまで通りでいい。

まあそういうことで、よろしく」

俺がそう宣言すると、パチパチパチとまばらな拍手が起きた。

……なんか、馬鹿にされてる気分になった。

「……それでこの半年間、お前らは何やってたんだ？」

とりあえず椅子に座って、聞いてみる。

「私はアバロンで、家族と過ごしていた。」

その間に剣術の免許皆伝を得たりしたな」

クリスがサラツと言った。

「え、道場の免許皆伝ってすごいんじゃないのか？」

たしかユリヤンも皆伝だとか言ってた気がする。

かなり昔の話だが、あの時のユリヤンの動きは凄まじいものがあつた。

俺はあれ以上の剣技を見たことはない。

クリスはその域に達したのか。

「大したことはない。」

……だがまあ、これまで伸び悩んでいた壁を、破れたような気がする。

あの魔族との戦いのおかげだ。

自分に足りないものが何なのか、明確に気付かされた。

今度は同じ状況になっても、ハジメの身を危険にさらすような無様は見せないつもりだ」

決意をあらわにするクリスの向かいで。

ニーナがきよとんとした顔でこちらを見た。

「え？ ハジメ、そんなに危ないことがあつたの？」

「ああ、実は魔族に真つ二つにされたことがあつてな」

「え!? ……な、何かの冗談だよな?」

「エミリーが治癒魔術をかけてくれなかったら即死だったな」

まあ、かけてもらつてもほぼ死んでたけど、と繋げると、場の空気が凍った。

「……冗談だよ。」

身体を真つ二つにされて生きてる人間なんて、いるわけないだろう?」

「だ、だよな! よかった。」

もう、びつくりさせないでよ」

ニーナが安堵する横で、エミリーとクリスが苦い顔をしていた。

「……お二人とも、ハジメを守ってくださつて、本当にありがとうございました」

エミリーとクリスが、ハツと顔を上げる。

そこには、とてもにこやかな顔をしたシータがいた。

もしかしたら、今の会話が冗談ではないことを見抜いたのかもしれない。

「これからもハジメを、よろしくお願いします」

そう言つて、シータは頭を下げた。

「い、いえ。そんな、お顔をお上げください」

「……過分なお言葉、感謝いたします」

二人は照れたようにうつむいて返事をしている。しかし、なんとなく嬉しそうだ。

それからしばらく雑談して、その場はお開きとなった。

その後は、クリスとエミリーに村を案内した（若い男達からすごい目で見られた）。何もない田舎だが、逆に都会育ちの彼女達からすると新鮮なようだ。

牛の乳を搾ったり、鳥の卵を採取したりするのを、二人は楽しそうに見ていた。みんなで夕食を食べて、順に風呂に入り。

部屋に戻ってさて寝ようかとベッドに潜った時。

コンコンと。

ノックの音が聞こえた。

「あゝ？」

ドアを開けるとそこには。

クリスとエミリーが立っていた。

## 返事

「どうした二人して？ こんな夜中に」

ドアの前には、クリスとエミリーが無言で立っている。

「えっと、俺、今から寝るところなんだけど……」

二人は相変わらず無言。

怖い。

「……………」

「……………」

「……………」

しばし、三人で顔を見合わせた後。

エミリーが口を開いた。

「ハジメ」

「はい！」

その声に込められた異様な迫力に、つい畏まってしまった。

「私達の告白の返事は、どうなってるのかしら？」

——ドキイッ!

俺の心臓が、早鐘を打ち始める。

「私とクリスが、あなたに告白したわよね？」

半年も前に。

その返事って、どうなってるのかしら?」

ドキドキ。

「まさかとは思うけど、忘れてたりしないわよね？」

私達の、一世一代の告白を」

ドキドキドキドキ。

「エミリー、そんなはずはない。

ハジメが私達の、人生初めての告白を忘れるなんて。

そんなはずはないだろう……なあ、ハジメ?」

ドキドキドキドキドキドキドキ。

「……………」

「……………」

「……………」

針のムシロのような沈黙が流れる。

エミリーとクリスは、ねめつけるように俺を見ている。

「……………ごめん、忘れてた」

両手を床につき、膝を曲げ。

床に這いつくばって木目を眺める。

つまり、土下座。

その姿勢で、俺は謝罪の言葉を告げた。

彼女達は何も言わず、立ち尽くしていた。

「本当にごめん。」

過去が分かったら、魔導書を読むことで頭がいつぱいになって。

——返事を考えてませんでした！ ごめんなさい！」

静寂が場を包む。

苦しい。息が詰まりそうだ。

彼女達の顔は、恐ろしくて見れない。

ただただ、木目を眺めながら時間を過ごす。

蛇に睨まれた蛙のように、微動だにできなかつた。

「……………顔を上げてくれ、ハジメ。」

ハジメが大変だったことは、私達だって分かっている。

忘れていたというのは少し悲しいが、そんな風に謝られるほどのものではない」  
頭上から、クリスの声がする。

恐る恐る見上げると、彼女達はしやがんで、俺の土下座を眺めていた。

スカートだったら下着が見えていただろう。

今はパジャマだから、ズボンしか見えない。

こんな時でも、そんなことを考えてしまう自分が恨めしい。

「私もまあ、いいわ。」

魔導書は、肉親の残した唯一のものなんでしょう。

そっちを優先するのは、理解できるもの」

意図的に優先したというわけでもないんだが……。

でもそれはそれで角が立つ気がするから何も言うまい。

「ただ、もう魔導書の解読は終わったのでしょう？」

過去も分かった。

……目下、やるべきことは特にないはずよね？」

「あ、ああ。そうだ」

「だとしたら、返事が聞きたいな。」

我々にとっても、こういう経験は初めてなのだ。

先延ばしのままでと、身動きが取れない。

宙に浮いたような、この状況を変えたいんだ」

二人が真剣な表情でこちらを見ている。

「分かった。

……ただ、ちよつと待つてくれないか。

そんなに簡単に決められない。

1ヶ月だけ、時間をくれ」

俺もまつすぐに、二人の目を見つめ返して言った。

「……分かったわ」

「了解した」

二人はこくりと頷いた。

「すまない、ハジメ。

急かすようなことを言って。

なにぶん、こういう状況に不慣れでな。

何をしててもこのことが頭から離れなくなってしまうて。

物事が手につかないんだ」

クリスが申し訳なさそうに言う。

「けど、免許皆伝の認可をとったんだろ？」

「ああ、剣を振ってる時だけは、少しだけ気を逸らせることに気づいてな。

それで、剣を振ってばかりいたから。

認可が取れたのは、そのおかげかもしれない」

「そうか。

……待たせてごめん。

必ず、返事はするから」

クリスとエミリーのどちらかを選ぶ、か。

改めて、二人を見てみる。

クリスは少し、ほっとしたような顔をしている。

告白はしたけど返事がない、という状況が、結構こたえてたのかもしれない。

よく見ると、半年前と比べると少し変化したような気もする。

相変わらず端正な顔立ちだが、以前はもう少し、キリツとした隙のない表情だった。

今はそこに、女性らしいやわらかさがブレンドされて、艶が増した感じだ。

エミリーは、ちよつと不安げだ。

その心中は計り知れないが、状況から考えれば、自分が選ばれるか心配しているのだろうか。

選ぶのが俺という所が、奇妙でならないが。

エミリーはクリスよりも明らかに、半年前とは容貌が変わった。成長期だからか。

少女のものだった顔だちは、少しずつ大人の女性のものに変化してきている。

銀色の睫毛は以前よりさらに伸びて、瞬きの度に音が鳴りそうだ。

不安げな表情すら、絵になる。

しかし、彼女らにこんな表情をさせるのが俺だというのは、なんだかドキドキするな。

男冥利に尽きるってやつか。

以前なら、畏れ多いと逃げ出したかもしれないが。

「じゃあ、これからどうする？

アバロンに戻るか？

結論が出たら会いに行くってことにして」

「嫌よ。

ただ待ってるのはもうたくさん。

「この村にいるわ」

「ああ。

私もそうしたい」

二人は口をそろえて答えた。  
そんなもんか。

「ただ、この家に長居するのは迷惑がかかるから。」

村の端に家を作つて、そこにクリスと2人で住むことにするわ」

「なるほど……つてそれでいいのか？」

「何が？」

「えつと、ほら、気まずかったりしない？」

「——馬鹿にしないで」

エミリーが立ち上がる。

「こんなこと初めてだから、結論が出た後にどうなるかは分からないわ。」

多分、元の関係には戻れないでしょう。

でもだからこそ、今だけは、あの時のままでいられるの。

それはとても、私にとって貴重な時間だわ」

凜とした声で言い放った。

俺は茫然と、その様子を見ていた。

するとクリスも立ち上がり、厳しめの目つきで俺を見る。

「私も、エミリーと一緒にいたい。」

一人よりも、その方が遥かに楽しく過ごせる。

それだけの友情を、私はエミリーに感じている。

だから軽はずみにそんなことを言うのは、やめてくれ」

俺は立ち上がって、頭を下げた。

「……すまん。考えの足りない発言だった。

俺にとつても、あの旅は大切な思い出だ。

ないがしろにするようなことを言つて、悪かった」

そうか。

友情も、彼女達にとつても大切なものらしい。

こんな関係になつてしまつてもなお。

今、彼女達の友情に亀裂がないというなら、それはとても尊いことだと思う。

「じゃあ、そういうことで。

1か月後の返事、楽しみにしてるわね」

エミリーとクリスが部屋を出ようとする。

「……あ、ちよつと待つてくれ」

「何？」

彼女らが振り返り、こちらを見る。

「二人には、言っておいた方がいいかと思って。

……これから、俺がどうするか」

「私達への返事を考えるんじゃないの？」

「それはそうなんだけど、その後の話。

魔導書を読んでるうちに、一つ。

やりたいことが、できちまったんだ」

俺は、魔導書を机の上から手に取った。

「……知っての通り、これは俺の両親が残してくれたものだ。

両親については、ごくわずかなことしか分からない。

ヴィルガイアが、魔族に滅ぼされたからだ。

生き残った人は、一人もいなかった。

——俺を除いて」

話しているうちに。

だんだん、自分の表情が険しくなるのが分かった。

「魔族に殺される時、両親は何を思ったんだろう。

これを読みながら、そんなことを考えてた。

王つてのは、国を守るための存在だろ。

民を皆殺しにされて。領土を焼かれて。

きつと、無念だっただろうと思う」

エミリーとクリスが、気遣わしげにこちらを見ている。

自分が今、どんな顔をしてるのかは分からない。

「俺が地球で、家族のいない15年間を過ごしたのも、それが原因だ。

もちろん、おかげで二人と出会えたし、家族もできた。

今の状況には満足してるよ。

……でも。

やっぱり考えてしまうんだ。

魔族が攻めてこなくて、平和に過ごしていたら、俺はどうなっていたんだろうって。

両親に囲まれて、幸せな時間を過ごせたんじゃないかって。

転移の謎を探すなんてことに、人生を費やさずに、済んだんじゃないかって」

気付けば、魔導書を痛いほど握りしめていた。

「これを読んで、そんな感情が出てきたんだ。

どんどん大きくなって、風化はしそうにない。

まあ、つまりは……憎しみだ」

そう。俺は——。

「俺は、魔族が憎い。」

やつらは俺の両親を殺し、国を焼いて、のうのうと隣の大陸で生きてやがるんだ。やつらに、報いを与えたい。

俺は、魔族を滅ぼしたいんだ」

言い終わった後。

気付けば、涙がこぼれていた。

慌てて服の裾でぬぐう。

「……まあ、そんなわけだ。」

別に今すぐにとってわけじゃない。

俺は少しずつ、奴らを滅ぼす計画を練っていきたいと思ってる。

そんな人間を選んで大丈夫かって、伝えときたくてな。

ほら、復讐は何も生まないとか、そういう意見もあるだろ？」

顔を上げると、二人は顔を見合わせた。

そして、改めて俺の方を見て、言った。

「何を言う、ハジメ。」

初めて出会った時。

ハジメが手助けしてくれたのが、他ならぬ私の復讐ではないか。

両親を魔物に殺された時の喪失感は、今でも覚えている。

私は、ハジメの行動を否定することは、絶対にない」

クリスが金色のまつすぐな瞳で言う。

この瞳だけは、出会った頃から全く変わらないな。

「私は、軽はずみに気持ちに分かるなんて言えないけど。

ただ、森で戦った魔族。

あんな邪悪な生き物を見たことがないわ。

絶対に分かり合えるような存在じゃないと思う。

あれを滅ぼすことには、賛成よ。」

エミリーも言葉を選びながら、魔族を滅ぼすことに同意してくれた。

彼女らしい、ロジカルな答えで。

二人の言葉に、胸が温かくなる。

やっぱり仲間というのは、かけがえのなく、ありがたい存在だ。

さつき二人が言った通り。

あの旅を経て得た絆。

こういう状況になった以上、それはもう戻らぬものになってしまうのだろう。

だが、今だけは。

俺がそれを壊してしまうその瞬間までは。

あの時のままでいたいと、俺も思った。

「ありがとな、二人とも」

万感を込めてそう言うと、二人は照れたように微笑んだ。

## 魔族の話②

——ついに、この日が来た。

気の遠くなるような年月をかけて。

ようやく、準備が整った。

ここは西の大陸の西端。

魔王は部隊から離れ、星を眺める。

ヴィルガイアを滅ぼしてから、1000年以上。

ひたすら、この時を待続けた。

彼の国が滅んでからは。

ヒトとの交戦をさらに減らし、こちらから攻めることは、全くしなくなつた。

王の最期の魔術で、戦力を消耗したためだ。

さらに、ヴィルガイアを滅ぼしたことにより、時間が魔族に有利に働くと考えていたため。

その作戦は、望外の利益をもたらした。

愚かなヒト共は、こちらが攻めずにいると、同士討ちを始めたのだ。

偵察部隊を通して観察していると、明らかに防衛の練度が下がっていった。特に魔術に関しては、明らかに衰退した。

習得が難しいものも多いのだろう。

魔術の多くは、少しずつ伝承が途切れ、使える者がいなくなっていくたようだ。攻め入るには、明らかかな好機であった。

しかし、彼は慎重を喫した。

まだ、同胞の数が十分ではない。

そう判断した。

魔族の数が増えるのは、膨大な時間がかかる。

ひと組のつがいから、子が生まれるのに50年。

戦力として育つのに10年はかかる。

育たない子は、魔物に襲われて死ぬこともある。

求める数を揃えるには、まだ時間が必要だった。

1000年経ち、2000年経ち、5000年経ち。

少しずつ、少しずつ、魔族はその数を増やしていった。

……そしてついに。

ヴィルガイアが滅んで、10000年経った今。

彼が目標とした頭数が、揃った。

その数——100万。

100万の軍勢をもって、ヒト共を全て殺し尽くす。

それは全ての魔族にとって、これ以上ない愉悦であった。

「クッククック……」

作戦を検討した結果。

かつて森で魔物と争っていた際に、最も有効だった方法をとることにした。

それは、挟撃。

戦力を2つに割り、半分を以前ヴィルガイアへ侵攻したルートで東の大陸へと向かわせる。

つまり、西の大陸の西端から、イカダで東の大陸の東端に送り込むのだ。

予期しない方向から50万もの魔族が攻めてくれば、ヒト共は大混乱だろう。

そちらの部隊で、ある程度の戦果を挙げたのち。

背後を脅かされた前線に、残りの半数で侵攻する。

今の戦力差なら、真正面から攻めても滅ぼせる自信はあった。

しかし彼は、ヒト共をもつと混乱させたかった。

襲来を予期していないヒトを狩るのは、魔族にとって極上の遊びだ。

ヴィルガイアと同じことを、大陸中で起こす。

今まで我慢させた分、部下たちを大いに楽しませてやろう。

これが、最後なのだから。

さあ、楽しい宴の始まりだ。

魔王は、部隊の前へと歩み出て。

命令を下した。

星の瞬くその夜。

50万の魔族の軍勢が、東の大陸へ向けて出発した。

## エミリーとのデート①

エミリーとクリスが村の端に住むようになってから、10日ほどが過ぎた。村の雰囲気も少しずつ落ち着きを取り戻している。

彼女らの家を訪ねて玉碎する男は後を絶たないが。

ちなみに家は俺が土魔術で作ったものだ。

枠組みと壁を最初に作り、窓ガラスや扉などはクレタの街で仕入れてきた。ややちぐはぐな外観だが。

まあ即席にしては悪くないだろう。

エミリーは、俺が渡した魔導書を読んで過ごしているようだ。

クリスは退屈だったのか、森で狩りをしていることが多い。

よく大量の獲物を村の人達に分けている。

たまにエミリーと一緒に狩りにいくこともあるようだ。

「ハジメ、モテモテなんだねえ。

どっちが本命なのかなあ？」

テーブルでカシーを飲んでいると、ニーナが話しかけてきた。

ニヤニヤした笑みが顔に張り付いている。

「うるさい。ニーナには関係ないだろ」

「えー、関係あるよ。

だってもしかしたら、お義姉さんになるかもしれないんですよ？」

「ほっといてくれ」

「あー、またそんなこと言って。

ほら、自分の考えって案外分からないかもよ？

かわいい妹に相談してみたら？」

「うるさいな、もう」

なんでコイツが、事情を正確に把握しているのか。

それは、クリスとエミリーが話したからだ。

この家から移るときに、二人があらましを全て、ニーナとシータにも話した。

俺はそんな必要はないと反対したが、二人は譲らなかつた。

俺の家族に事情を説明するのは当然だと。

適当な言葉でごまかしたりしたくないとのことだ。

しかしそのせいでここ最近、俺はずっとニーナにからかわれている。どうやら、ジャック君との関係をつついていた恨みを晴らしているらしい。

身から出たサビというやつだ。  
くそう。

「まあ二人ともいい人だし、すごい美人さんだもんねー。

そりゃ悩むよねー。

私だったら選べないなー」

ニーナが軽口をたたきながら、対面の椅子に座る。

その手にはカップがあつたので、ポットからカシーを注いでやった。

「……俺だつて選べねーつての」

ぼそりと呟く。

なんでこんなことになったのだろうか。

まあ、先延ばしにしていた問題で、いつかは決めなければいけないことだったが、ある側面から見れば、俺は世界最高の幸せ者に思える。

あんな美女二人から言い寄られ、選ぶ権利があるというのだから。

しかし別の側面を見ると、とてつもなく不幸な人間だ。

あの二人のどちらかを、切り捨てなければいけないのだから。

俺がどちらかを選べば、その瞬間に今の関係は崩れる。

元のままのパーティでいられはしないだろう。

三人の旅は、本当に楽しかった。

正直、俺はそのままの関係でいたかった。

恐らく、二人もいくらかはそう思っていただろう。

関係が崩れることも分かっていたはずだ。

しかし、それでも踏み出した。

停滞に身を置くことを、よしとしなかった。

そんな二人の思い。

正面から答えなければならぬだろう。

自分がどちらの方が好きなのか。

だが正直なところ、俺は恋愛感情というものがよく分からない。

二人のことを魅力的だとは思いますが、それは仲間としてという側面が強いように思う。

もしかしたら、どちらにも恋愛感情など抱いていないという可能性もある。

恋愛対象として、好きか否か。

そんなことを考えるには、経験値が少なすぎる気がする。

なにせついこの前まで、頭の片隅にもなかった命題だ。  
どうしたものか……。

「ハジメ、顔がすごいことになってるよ？」

「……うるさい」

とりあえず、カシーをもう一口すすった。

その日の午後。

エミリーが家に訪ねてきた。

「おう、どうした？」

エミリーはいつものゴスロリ姿だ。

村ではめちやくちや浮いてるが、本人はまるで気にしていないらしい。

「あの、ハジメ。」

私と街に出かけない？」

エミリーが言った。

用意したセリフを、そのまま言葉にしたような感じだ。

「別にいいけど、どうしたんだ？」

何か買いたいものでもあるのか？」

「そういうわけじゃないんだけど……」

「？」

なら何で街に？」

俺の質問に、エミリーは言葉を詰まらせる。

少し間をおいて深呼吸した後、真つ赤な顔で言った。

「……昨日の夜、クリスと話し合ったの。」

このままだと、ハジメはどっちも選ばないかもしれないと思つて。

それでその、ひとりずつハジメとデ、デートしてみるのはどうかなってことになって

……」

視線をさまよわせ、もじもじしながらエミリーは続ける。

「3日後の朝に門の前で待ち合わせ。……どう？」

「……了解した」

返事を聞くとすぐに回れ右して、小走りでエミリーは帰っていった。

その後ろ姿を見ながら思う。

……俺の性格は、どうやらかなり深く読まれているらしい。

このまま一人で考えるだけで、一か月を過ごした場合。確かに、どちらも選ばなかった可能性はある気がする。

その前に、先手を打たれた。

もしかしたら彼女達は、俺以上に俺自身について把握しているのかもしれない。

3日後。

ベルの音がして、ニーナに煽られながら玄関に向かう。

「お、おはようハジメ。

……今日はいい天気ね」

そこには、普段よりもめかしこんだエミリーが立っていた。

ほんのり化粧をして、真っ白な頬に赤みがさしている。

ゴスロリ服は普段の暗めの単色ではなく、淡いパステルカラーに。

耳にはシルバーのイヤリング。

ツインテールの髪留めも、かわいいリボンになっていた。

「……………」

「何よ……ど、どこか変かしら？」

正直、見入ってしまった。

まるで絵画から出てきたかのような。

現実味が薄れるほどの美しさだった。

「い、いや、なんでもない。」

えーと、服、似合ってると思うぞ」

「ホ、ホント？」

クリスに見立ててもらったの。

私はもう少し地味なのにしようと思ってたんだけど」

「多分、今着てるやつの方がいいと思う」

「……よかった。」

ハ、ハジメも、似合ってるわよ」

俺も一応、普段よりは洒落た服を着ている。

こちらに帰って来てから、シータが作ってくれたものだ。

このエミリーと並んで歩いたら、どうあがいても不釣り合いになりそうだが。

服ではなく、それ以外の差で。

「じゃ、じゃあ、行くわよ」

「お、おう」

動揺が冷めない中、ぎくしゃくと歩き始めた。

ふと振り返ると、玄関の隙間からニーナがニヤニヤした目で見ていた。

……お前はとつとつと、服作りの仕事でもせんかい。

## エミリーとのデート②

空は快晴。

ガタゴトと揺れる馬車の中。

俺とエミリーは、クレタの街を目指して進んでいる。

馬車は昨日のうちに予約しておいた。

いちいち街に行かないといけないので面倒だが。

……村の皆にもお世話になったし、エルフの金貨を換金して、馬車を村にプレゼントするのもいいかもしれない。

隣のエミリーをチラリと見ると、外の景色を眺めていた。

思えばエミリーと雑談するのは、告白されて以降初めてだ。

そのせいかどうも調子が出ない。

意識してしまっているのだ。

それは向こうも同じらしく、なかなか会話が続かない。

それでもまだマシになった方だ。

デート開始直後は、顔もなかなか見られなかった。

今は、見ることもくらは普通には普通に見えるようになった。

しかしそうになると、新たな問題も生まれる。

エミリーの仕草が、すぐ上品で美しいのだ。

学院で一緒に過ごしている時や、旅をしている時は全然意識しなかった。

学院では、事あるごとに罵倒されるばかりだったし。

旅の間は、そんなことを考える余裕もなかった。

しかしこののんびりとした馬車の中。

こと恋愛対象の候補として彼女を見ると、その一挙一動の繊細さに心を奪われそうになる。

あれ、エミリーってこんなに綺麗だったっけ。

なんで、いままで気づかないでいられたのだろうか。

そんなことすら考えてしまう。

これはもう、すでに彼女の術中なのかもしれない。

「ハジメ」

「はい！」

急に話しかけられて、驚いてしまった。

「な、何よその反応」

エミリーがパチクリと瞬きをする。

クリツとした猫目の瞳孔が少し広がる。

銀色の睫毛は、化粧のためか普段より少しカールしていた。

「い、いや、何でもない。」

それで、要件はなんだ？」

できるだけ動揺を悟られぬように答える。

成功したかは分からないが。

「あの、魔導書のこことなただけど。

少し分からないところがあつて。

聞こうと思ったんだけど……」

「どっだ？」

エミリーが、バッグから分厚い魔導書を取り出す。

……持ってきてるの？

「どこなただけど……」

「ああ、そこは——」

実は、魔導書の内容と魔術学院の授業では、少し解釈が異なる部分があつたりする。

矛盾してるとまでは言わないものの、割と大きな違いもある。

俺は魔導書の考え方に、すんなり順応できた。

むしろそっちの方が分かりやすかったくらいだ。

しかし、エミリーにとってはそうでないだろう。

現代の魔術体系を長く学んできた分、俺よりも発想の転換が難しくなっている。

それを斟酌して軽く説明したら、簡単に理解してくれた。

「なるほどね。」

ありがとう、ハジメ」

エミリーが少し微笑んで言った。

ドキリとする。

エミリーと魔術の勉強をしたら、大抵は俺が罵倒される筋書きだったというのに。

その相手に教えられて、こうも素直に礼が言えるのか。

いや元々、エミリーは素直だった。

初めてクリスと3人で狩りをしたときも、俺達の意見をすんなりと聞き入れていた。

彼女が素直じゃなかったのは、俺と接する時だけだ。

それが愛情の裏返しだとは、今となってすら、にわかには信じ難いが。

「ハジメは、魔族を滅ぼしたいって言ってたわよね。」

だとしたら、この本はとても重要なものになると思うわ。

今、戦況がどうなってるかは知らないけど、これが世界に浸透したら、今よりも戦力が上がることは間違いないもの」

エミリーが言う。

その通りだ。

俺もそう考えていた。

「そうなんだよ。」

だから俺は、それをアバロンの魔術協会に寄付しようと思うんだ。

そうすることで、ヒトの魔術全体の底上げを期待したい」

これを協会に渡せば、魔術の世界に非常に大きな衝撃が走るだろう。

俺もなんやかんやと拘束される時間が多くなるかもしれない。

だが、それでいい。

「そして、魔導書の写本をいくつか用意しておく。」

万が一にも、アルバーナだけで独占されないように」

魔術協会は各国にまたがって存在し、国の思惑とは別に運営されている。

しかし、これだけのものが国の中で見つかったとなると、どうなるか分からない。

情報統制を敷き、逆らう者は殺したりして、アルバーナで独占してしまう危険性がある。

ウチの領土で発見されたんだからウチのもんだ、みたいな理屈で。

なので計画としては、事前に写本をたくさん用意して、同時に周辺諸国や前線にも渡し、一気に広めてしまおうと考えている。

「……そう。じゃあ私がこれを読めるのも、あとわずかね」

エミリーは残念そうに言った。

「そんなことはないさ。」

どうせ、いくつも写本しなきゃいけないんだ。

一冊やるよ」

この世界にも活版印刷の技術はある。

しかしこの本を、他人に預けるのは不安だ。

なので何冊か手書きで写本を作ってから、それをもとに増刷する流れにするつもりだ。

そのうちの1冊をエミリーに渡すことくらい、なんでもない。

「本当？」

エミリーは嬉しそうに確認した後。

「ありがとう」

誰もが恋に落ちてしまいそうな微笑みを浮かべ、エミリーは言った。

「これからどこに行くんだ？」

「とりあえず、ご飯にしましょう」

今回のデートプラン、俺はノータツチだ。

彼女達がもてなす側。

俺は流れに従うだけでいいらしい。

馬車から降りて、街のメインストリートを歩く。

行きかう男どもの視線が、次々とエミリーに吸い寄せられる。

その後必ず俺の方に視線を移し、舌打ちをするまでがワンセットだ。

俺はげんなりするが、しかしエミリーはそんなものは気にならないらしい。

迷いのない足取りで道を進んでいく。

「お、お、お」

エミリーが立ち止まった場所は、シャレた店構えの喫茶店だった。

中に入り、テーブルへと案内される。

内装は、黒を基調としたゴシック調のデザインだ。

客席同士の距離が広く取られていて、テーブルには高級感のある白いクロスが敷かれている。

床は丹念に磨かれており、塵一つなく艶めいていた。

一目で高級な店だと分かる。

行きかう店員達も優雅。

店員は全て女性で、非常に丁寧な接客を行っている。

歩き方は洗練され、お辞儀の角度は45度。

言葉遣いも完璧だ。

とても素晴らしい。

……しかしひとつだけ、どうしても気になる事がある。

彼女達は皆、同じ格好をしていた。

黒のボールガウンドレスに、フリルのついた白いエプロン。

膝まで隠れるソックス、靴はアイボリーブラックのローファー。

そして極めつけに、頭上に燦然と輝く白きカチューシャ。

「……これ、メイド喫茶？」

間違いない。

彼女達の格好は、まごうことなきメイドさんだ。

右を見てもメイドさん。

左を見てもメイドさん。

メイドさんが給仕してくれる喫茶店。

この店は誰がどう考えても、メイド喫茶と呼ぶ他ないはずだ。

他の呼び方はない。

だというのに、強烈な違和感に悩まされる。

これこそが、正当なメイド喫茶の在り方のはずなのに。

それは間違いないはずなのに。

1枚500円のチエキをメイドさんと撮っている客。

オムライスにハートマークを描いてもらっている客。

効能不明なビームを撃たれて狂喜する客。

ここには、誰一人としていないのだ。

誰もが静かに食事を楽しんでいるし、店員は真摯に給仕を行っている。

果たしてこれを、メイド喫茶と呼んでいいものなのだろうか。

「どうしたの？ ハジメ。

座らないの？」

見ると、エミリーはとっくに席に着いていた。

「……あ、ああ。悪い」

俺は脳裏に浮かんだ難問を無視することに決め、席に着いた。

「具合でも悪いの?」

「いや、気にしないでくれ。」

俺の地元と、ちよつと文化が違ったもんで」

「そう」

メイドさんが、水が入ったグラスを持ってくる。

「ご注文がお決まりになりましたら、ベルでお呼びください」

メイドさんはそう言うのと、優雅に礼をして去っていった。

メニューを見ながら食事内容を考える。

なんだか無性にオムライスが食べたくなつたので、それに近いものにする。

エミリーは、肉類を使ったパスタに決め、注文した。

「なんでこの店にしたんだ?」

「落ち着くからよ。」

椅子もテーブルもそれなりにいいものを使ってるし。

店員も教育が行き届いてるじゃない?」

確かにその通りだ。

彼女達の仕草は、まったくもって非の打ち所がないものだ。

エミリーは、生まれた時からメイドさんと高級品に囲まれて育っている。

こいつには、この雰囲気は落ち着くのもかもしれない。

確かにメイドさんにお世話をされるエミリーは、あきれるくらい様になっている。

俺はなんだかソワソワしてしまうが。

しばらくすると、料理が運ばれてきた。

「うまい」

口にした味は、美味しかった。

想像通りの味だ。

想像以上にうまいわけではない。

しかしこの場の高級感に沿った、繊細な味付けだ。

二口目を頬張ったところで、エミリーが口を開いた。

「ねえ、そんなに美味しいの？」

「ああ、かなり美味いぞこれ」

「そう……なら、ひ、一口ちょうだい」

顔を真っ赤にしてもりながら、そんなことを言った。

「ああ、いいぞ。ほら」

食べ物 シェアなんて、旅の間に何度もやって慣れたもんだ。

俺が皿ごと渡そうとする。

しかしエミリーはそれを無視。

目を閉じて、口をあけて待っていた。

「え？」

こいつ、何やってるんだ？

「ほら、は、早くちようだい」

相変わらず、餌を待つ魚のように口をあけている。

その頬は、いまにも燃え上がりそうな赤い色をしていた。

……まじか。

こんな発想は、エミリーのものじゃない。

こいつ絶対、どこかの恋愛指南書か何かの情報に踊らされてるぞ。

どこの世界でも、トチ狂った若い男女は、同じようなことを考えるのだろうか。

「……」

「……」

そのまま結構な時間、沈黙が続いた。

しかしエミリーはテコでもその姿勢を崩そうとしない。  
しようがない……。

「……あーん」

そう言つて、エミリーの口にオムライスもどきを運ぶ。

なんか知らんが。

すぐドキドキする。

エミリーの形のいい上下の唇の間へと、スプーンを通す。

震える手。

なんとか舌の上に着陸させると、ふわりとした感触が手に伝わった。

続けて、スプーンの柄に歯が当たる。

カチツという音と、脊髄をくすぐる様な振動。

続いてスプーンの表面を唇が這う。

湿った唇とスプーンの間を生じる絶妙な摩擦。

スプーンの裏には、まだエミリーの舌がある。

舌と唇に挟まれたスプーンから、口腔の柔らかさが伝わってくる。

先程よりもさらに、背筋がゾクゾクするような感覚が俺を襲う。

「やめっ！」

それに耐えかねて、あわててスプーンを引き抜いた。

しかしそこにはすでに、積載していた具材はない。

わずかに残るエミリーの唾液で妖しく光る、銀色のスプーンがあるだけだ。

こうしてオムライスもどきは無事、エミリーの口の中へと輸送された。

「……………」

沈黙の中、エミリーが咀嚼する。

「……………う、うまいか？」

「……………まあまあね」

さつきよりもさらに赤くなった顔を背けながら、エミリーは答えた。

とはいえ俺も、そんな顔をしているに違いない。

……………ひとつ学んだことがあるとすれば。

とち狂ったカップルが考えだす行為というのは、侮れないということか。

## エミリーとのデート③

メイド喫茶を出て、街を散策する。

デートプラン的には、適当に見てまわる時間なのだそうだ。

「どこに行くんだ？」

「別に決めてないわ。」

全部決めちゃうとつまらないと思って。

行きたいところとか、ある？」

そう聞かれて、少し考える。

「いや、特にはないな」

「そう、じゃあ適当に歩きましょう」

街並みを、エミリーとブラブラ歩く。

街を流れる大きな河を船で渡ったり。

野良猫を触ろうとして引っ掻かれたり。

小腹が空いてケーキを食べたり。

落ちてきた日差しに指で影絵を作ったり。

そんな、他愛もない時間を過ごした。

「お、この辺は……」

「どうかしたの？」

うろうろと歩き回って、気づけば懐かしい場所に来ていた。

俺が辺りを見回すと、エミリーが首をかしげて尋ねた。

「昔このあたりで、ニーナへの誕生日プレゼントを買おうとしてたんだ」

周りには、高級な装飾品の店が並んでいる。

昔、このあたりでアクセサリーを買おうとしたことがあった。

俺にビンタをかましたあの人は、まだクビにならずに仕事ができているだろうか。

「そうなんだ。」

「何を買ったの？」

「いや、結局アクセサリーはやめて、プレゼントは食べ物にした」

「食べ物？」

「ああ、行きつけの料理店でレシピを教わってさ。」

それを誕生日に振る舞ってやった」

「ニーナさん、美味しそうに食べるもんね。」

「そっちが正解だわ」

ふふつとエミリーが笑い、手を後ろに組んで歩きだす。

「でも少しうらやましいわね。」

私は、誕生日に何かをもらったことなんてないもの」

「そうなのか？」

仮にも領主の家で育ったんなら、いろいろプレゼントされそうじゃないか」

エミリーはショーウインドウに映るペンダントを見ながら、首を振る。

「誕生日にプレゼントを贈ることがあるなんて、魔術学院に入ってから知ったわ。」

私達のもとに集うお金は基本的に、領民のためのお金という考え方なの。」

プレゼントととして贈られた進物は全て、換金して領の金庫に入れられていたみた

い」

「そうか……」

確かにあの親父さんならありえそうだ。

昔、エミリーはデートなんて言葉も知らなかったし。

庶民の感覚とは縁遠い生活を送ってたのだろう。

とはいえ、一度もプレゼントというものをされたことがないというのはかわいそう

だ。

俺はシータに服を初めてもらった時、うれしくてたまらなかったのだから。

「……じゃあ、俺がプレゼントしてやるよ。

好きなやつを選べ。

お前と出会ってから、もう2年以上は経ってるけど。

過去の誕生日をまとめたプレゼントってことにしてくれ」

「……本当？」

エミリーがこちらを振り向く。

すごく期待している顔だ。

「ああ、あんまり高いのは無理だけど」

「……わかった！」

そう言うと、エミリーは嬉しそうに周囲の店を探し始めた。

なんだか、すごく幸せそうだ。

こんな顔が見られるなら、どれだけ財布が軽くなっても惜しくないという気がしてくる。

3軒ほど回って、エミリーは貝殻に真珠の装飾が付いたペンダントに決めた。

俺が会計を済ませると、箱の入った袋を片手に、飛び跳ねるような仕草で店を出る。

それはまるで、年相応の、普通の女の子のようだった。

「ハジメー！ 着けてくれる？」

路上でエミリーがペンダントを箱から取り出し、俺に渡してくる。

それを受け取り、チエーンの両端を持った。

「じゃあ、後ろを……」

言う前から、エミリーは後ろを向いていた。

少し下を向き、右手で髪をかき上げて、無防備にうなじを晒している。

「……どうかした？」

「い、いや、なんでもない。」

「じゃあ、着けるぞ」

エミリーの右手の下を、チエーンの端を持った俺の右腕がくぐる。

それを反対側から伸ばした左手に渡した時、エミリーを後ろから抱き寄せるような形になった。

「……………」

「……………」

白磁の陶器のような、細く滑らかな首。

透き通るような銀色の髪。

髪をかき上げることで露わになる、うなじ、耳。

服からわずかに覗く胸の谷間。

それらが一辺に視界に入ってくる。

途端、心臓が狂ったように動き始めた。

旅をしていた頃は、エミリーを恋愛対象だなんて考えてなかった。

そもそも、自分の存在自体があいまいで。

転移の謎が解明されるまで、恋愛なんて考えられなかった。

その上、3つも年下の少女だとしたら、尚更だ。

だから、エミリーに告白されるまでは本当に、そんな対象としてエミリーを見たことはなかったのだ。

もちろん別に、自分のルーツが分かっただけからと言って、意図的に考え方を変えたわけじゃない。

多少前向きになった気はするが、根本が変わった訳じゃない。

しかし今、初めて。

肉体を伴った人間として。

手を伸ばせば触れられる存在として。

俺はエミリーを認識した。

震える指で、チエーンの片端を右手から左手に渡す。

チエーンがこすれる感触に、エミリーが少し動く。

香水と汗がほんのりと混じった甘い香りが鼻孔をくすぐり、頭がクラクラした。なんとか、両手を後ろに持ってきてチェーンをつなぐ。

「……できたぞ」

俺は振り絞るようにそう言った。

「ありがとう、ハジメ」

ふふっと。

エミリーは屈託なく笑い、数歩前に出てから、こちらを振り返った。

ふわりと、銀色のツインテールが宙を舞う。

そんな些細な光景から、目が離せない。

「……どうっ？」

「似合うかしら？」

少し照れた様子で、エミリーが尋ねる。

オリオンブルーのゴスロリドレスに、選んだペンダントはピッタリだった。

「……ああ、すごく似合ってるよ」

「よかった」

そう言って、エミリーは嬉しそうに笑った。

その表情に、あどけなさや、幼さはなく。

それはただ、恋する女が、その相手にだけ見せる微笑みだった。本当はずっと前から。

出会った頃から。

こんな微笑みを俺に見せてくれたのかもしれない。

出会った頃の、あの態度が照れ隠しであつたならば。

彼女は心の中ではずっと、今と同じ感情を俺に向けてくれていたのだ。彼女に助けられたことは数知れない。

命を救ってくれたり、魔術の知識を与えてくれたことじゃない。

魔術の勉強で、挫折しかけた時。

図書館に転移魔術の手がかりがなくて、絶望した時。

いつだって、俺は彼女の言葉のおかげで。

立ち直って、前を向くことができた。

彼女がいなかったら、俺は今ここにはいない。

きつと未だに、辿ってきた道のどこかをうろろしてることだろう。

今の俺があるのは、彼女のおかげ。

彼女の献身のおかげだ。

そんな彼女が。

二度も好きだと言ってくれたのだ。

一度目はグレンデル領の館の一室で。

二度目はエルフの里の星降る公園で。

エミリーの性格を思えば、それがどれほど勇気のいる行為か、想像に難くない。

エミリーは俺のことをずっと好きでいてくれて。

ずっと見守っていてくれていて。

勇気を振り絞って、俺に思いを伝えてくれた。

そして俺も、彼女のことを大好きだ。

それは間違いない。

そのことを、再確認した。

そして今、彼女の姿かたち目に目を奪われ、視線を話せなくなっている。

心臓がドキドキとうるさい。

これはまさか、恋なのだろうか。

俺はエミリーに、恋をしているのだろうか。

「……日も落ちてきたし、そろそろ帰らなきゃね」

エミリーがつぶやく。

少し残念そうだ。

俺も同じ気持ちだ。

なんだか、すごく名残惜しい。

「ああ、そうだな」

しかし無理やりに平静を装って、俺はそう言った。

夕日の中で踊るように歩くエミリーは、これまでに見たどんなものよりも、美しく見えた。

## クリスマスとのデート①

「ハジメー、朝だよー。」

起きなさいーい」

ドンドンと、俺の部屋のドアをノックする音。

「わかったよ。」

今起きるって」

あくびをしながらドアを開ける。

そこには、怒った顔のニーナが立っていた。

「今日はクリスマスさんと街に出かけるんでしょう？」

早く準備しなさい」

「はいはい。」

起こしてくれてありがとうよ」

ドアを閉めて、パジャマを脱いだ。

---

この3日間。

俺は悶々とした夜を過ごし、寝不足だった。

原因は、エミリーとのデートのせいだ。

多分あの時、初めて俺はエミリーをそういう対象として認識した。  
途端に。

見慣れたはずのエミリーが、何だか女性としての魅力を伴って見えたのだ。

「はあ……」

正直俺は、この感情を持って余っていた。

この感情がなんなのか、判断ができないのだ。

寝るときには、デートの記憶がフラッシュユバツクする。

ネックレスを着けようとした時の、細い首筋。

華奢な肩。

襟から覗いた、胸の谷間。

夕暮れの中を歩く後ろ姿。

そんな映像が、ずっと俺の頭をグルグル回っている。

まさに、デートというものの魔力にやられてしまったのだ。

もうそんな年でもないというのに。

情けないことだ。でも仕方ないんだ。

童貞だもの。

ハジメ。

俺はエミリーのことを好きだし、大切に思っている。

これはもはや、恋と呼んでもいいのかもしれない。

魔術学院で罵詈雑言を吐かれていた記憶ですら、なんだか美しく思えてくるのだ。

——そう、俺はエミリーに、恋をしているのだ。

でなければ、女の子とちよつと距離を詰めただけで意識して、あらぬ妄想をする、童

貞丸出しのイタイやつということになってしまわないか。

だとしたら、今日のデートは浮気になってしまふのか？

……いや、これは俺のこの気持ちか果たして本物なのか、確かめるいい機会になる。

エミリーへの気持ちか本物ならば。

今日クリスと街を練り歩いたところで、何も感じないはずだ。

よし。

やっつてやろう。

俺は、童貞丸出しのイタイやつなんかじゃない。

自分の純情を、証明して見せるぞ！

「……どうだろうか、ハジメ。

へ、変じゃないか？」

クリスが、家の前に立っていた。

「うわー、クリスさん、キレー」

隣のニーナが、感嘆の声を上げる。

クリスの普段着は、何度か見たことがあった。

だからある程度の、想像はついているはずだった。

だというのに、これはおかしい。

心臓の音がうるさくて、何も聞こえない。

……いや、落ち着け。

落ち着くんだ、俺。

まずは冷静に、状況を整理しよう。

落ち着いて、相手をよく見るんだ。

決して、勝てない敵じゃないはずだ。

まずは一番上。頭からだ。

今日のクリスは、普段後ろで結んでいる髪を下ろしている。

それだけで、雰囲気さがらりと変わって。

女性的な雰囲気が前面に押し出されている。

それを後押しするかのようには、頭の上には、白くふわふわした帽子。

オーケーオーケー。

このくらいは、想定内の範囲だ。

クリスが兜を脱いで、髪を下ろせばかわいいことは、昔から知っている。

さあ、次に行こう。

少し視線を落とせば、白のニットが目に入る。

高級な素材で編みこまれたであろうそれは。

クリスの首から肩に吸い付くように、その身体の起伏を露わにしまっている。

脳内に、アラートが鳴り響く。

それ以上、視線を下げてはいけない。

それ以上見たら、戻ってこれなくなる。

……だが。

その圧倒的な存在感。

それがそこにあると知ってしまったら。

もう、見ないではいられない。

そこには。

大きな山が2つ、そびえたっていた。

かつての世界で例えるなら、エベレストか、ゴドウィンオーズチンか。

その巨大さに圧倒されて、何も考えられなくなってしまう。

しかし、それだけなら。

それだけなら、まだよかった。

最も重大な問題は、その先にあった。

山同士の間には、境界線があるのだ。

シオルダーバッグのひもによって形成される、黒いライン。

それはまるで、ボディビルダーの身体に塗るタンニングローションのようだった。

それによって、二つの山の存在感は、さらに増し。

クリスが動くたびに、山同士がぶつかるその様は。

さながら巨大な氷山が海でぶつかり、自壊するような。

そんな壮大さを、感じさせずにはいられない。

そのすぐ下には、ヒラヒラと舞うスカートだ。

膝までしっかりと覆われているため、色気が強いわけではない。

だが、それに覆われている脚。

無駄な脂肪が一切ない、カモシカのような長い脚。

しかもこの脚は、長くて綺麗なだけではない。

いざとなれば、野生の獣も相手にならないほどの速度を出せる、凄まじい機能を備えているのだ。

まるでレーシングカーのような、機能美と造形美の融合。

足元はピンヒールだというのに、重心を全くブラさずに立っている。

地球のトップモデルだって、こんな美しい立ち方はできない。

上から下まで、クリスを眺め終わった俺は。

何も言えなかった。

以前、アバロンで飲んでいた時の私服とは、比べ物にならない魅力が、そこにはあった。

「おい、ハジメ？」

固まってないで、何か言ってくれ

や、やっぱり変だろうか？」

クリスが不安そうな声を出す。

「いい、いい、いい。」

すすすげー、似合ってるよ?」

「ハジメ、どもりすぎ」

ニーナが横から口を挟む。

いや、これはやばい。

まじでやばい。

なんだかんだ言っても、エミリーはいつもゴスロリ衣装だった。

こないだの時も、雰囲気は変わったが、その枠組みからは外れていなかったのだ。

しかし、今回はやばい。

普段の武骨な鎧姿とは、180度方向が違う。

服や化粧がおしゃれなのは言うに及ばず。

なにより鎧に隠れて見えていなかったボディラインが、めっちゃくちや見える。

しかもそのボディラインときたら、モデルとグラビアアイドルをいいとこどりしたかのようなスタイルだ。

エミリーの胸チラ程度で悶々としていた俺には、これは刺激が強すぎる。

「ほら、クリスさん困ってるじゃない。」

早く行きなさい」

あきれたニーナが、背中を押してきた。

つまずきそうになって、よろめいた先には、クリスの顔。

「……よ、よろしく頼む」

「……あ、ああ。よろしく」

またもなんともぎこちなく、一日が始まった。

## クリスとのデート②

さて、1時間ほど馬車に揺られて。

おなじみのクレタの街に到着した。

馬車の時間のおかげで、なんとかクリスの姿にも慣れてきた。

まあ、姿は変わっても、話せばクリスだ。

少しずつ、普通に会話ができるようになった。

「これからどこに行くんだ？」

今回も、俺はノープランだ。

「そうだな、まずはあの、展望台というのに行ってみよう」

クリスが、遠くの建物を指さしながら言った。

展望台は、クレタの街唯一の観光名所だ。

30メートルくらいの高さの建物で、いつも人でぎわっている。

「ああ、いいぞ。

それじゃ、行こうか」

俺はクリスと一緒に、展望台を目指して歩き始める。

歩いていると、やはりクリスは注目を浴びた。

道行く男達は、クリスに目を奪われた後、俺に向かって舌打ちをして通り過ぎていく。中には、明らかにクリスの胸に視線を浴びせる者もいた。

俺は勝手に腹立たしさを覚え、そいつを睨みつけた。

そいつも俺の視線に気づき、すれ違いざまに睨み返してきた。

そんな、しょうもないバトルを繰り広げつつ。

20分ほど歩いて、展望台へと到着した。

「おおー。」

近くで見ると、割と迫力があるな」

クリスがてっぺんを見上げながら言う。

「じゃあ、登るとするか。」

「そーいや今更だけど、その靴で大丈夫か？」

クリスはハイヒールを履いている。

だが、エレベーターなんてものは当然ない。

がんばって階段を歩くしかないが、そんな動きづらい靴で大丈夫だろうか。

「ははっ。」

「ありがとう、ハジメ。」

だが全く問題ない。

私にとってはこの程度、運動のうちにも入らないさ」  
そう言って、クリスは階段を上り始めた。

彼女の運動能力の前には、余計な心配だったようだ。

俺も後を追う。

カツカツと、クリスが一步進む度に、ヒールが音を立てた。

階段は、かなり傾斜が急だった。

クリスの後ろを歩いていると、常にクリスの腰が俺の目線の高さになる。

鼻先をかすめるスカート裾の裾。

ふわりと舞うその奥には、美しい二本の脚。

それらが順序よく、軽快に踏み出されていく。

カツカツカツ。

ああ、いい脚だなあ。

カツカツカツ。

うおっ。膝裏まで見えた。

カツカツカツカツ。

ちよっ。今。パンツ。パンツ見えなかった？

「ハジメ？」

大丈夫か？

さつきからずっと黙っているが」

クリスがこちらを振り返る。

俺は視線をそらし、壁の石目を眺めながら答えた。

「大丈夫だ。問題ない。」

「……あー、その、もつと激しく、2段飛ばしくらいでも構わないぞ」  
「そうなのか？」

ハジメに遠慮して少しペースを落としていたのだが。

いらぬ心配だったようだな。

「……では、遠慮なく」

クリスはそう言うと、本当に2段飛ばしで登り始めた。

スカートが、大きく翻る。

期待を込めたまなざしで、俺は一心にそれを見つめる。

まるでスローモーションのようにスカートが波打つ。

あと、あと少しだ。

もう少しだけ、大きくはためいてくれ。

俺はさらに力強く、視線を送り。

そして――。

ふわりと膨らんだスカートは。

次なる跳躍によって、すぐに脚へと張り付いてしまった。

一瞬にして、クリスは階段を駆け上がり、見えなくなった。

「見えなかった……」

クリスがいなくなつて、登るのはただの修行と化してしまった。

「ハジメ、遅いじゃないか！

見ろ、すごく眺めがいいぞ！」

俺がやつとの思いでてっぺんにたどり着くと、クリスがはしやぎ倒していた。

「そんなにはしやぐと転ぶぞ？」

「心配無用だ！」

クリスは笑いながら展望台を駆け回り、景色を堪能している。

トリアノンの雪景色といい、クリスは綺麗な景色にはしやぐ体質らしい。

その様子を見ながら、俺はベンチに掛けて一息つく。

ぼんやりと街を眺めていると、以前ここに来た時のことが思い出された。

あれはニーナ、シータと旅行に来た時だ。

ちょうど今のクリスのように、ニーナがはしゃいでいた。

あの旅行を機に、俺は村を離れる決意をしたのだ。

あれから数年か。

思えばずいぶんと、遠くまで旅をしたもんだ。

あの時、迷っていたが一步踏み出してよかった。

おかげで、本当にいろいろなものを手に入れることができた。

もしもあの時、決断できなければ。

今でも俺は、明日にでも自分が消えるんじゃないかとビクビクしていたことだろう。

ユリヤンにも出会うことはなかった。

魔術を深く学ぶこともなかった。

過去を知ることでもなかった。

エミリーに、クリスに、好きだと言ってもらうことなんて、ありえなかった。

そう考えると、今の自分は本当に恵まれている。

青い空と、眼下の街並みを眺めながら。

しみじみと思った。

その景色の中に、すつと。

女性の腕とマグカップが割り込んできた。

空と街の境界上で、マグカップが揺れる。

「ハジメ、そこでカシーを売ってたぞ。ほら」

カップの持ち主は、クリスだった。

ホットのカシーを渡される。

「ありがとう」

「どういたしまして。」

カップは後で店に返すんだそうだ」

「了解」

クリスもベンチに座り。

しばし、二人でカシーをすすった。

なんだかすごく、穏やかな時間だった。

「……なあ、クリス」

「なんだ？」

自然に。

こんな疑問を口にしていた。

「なんで、俺なんかを好きになつてくれたんだ？」

俺は、俺の目的の為にクリスを危険な旅に同行させた。

その前のキマイラの件だって、元を正せばクリスに命を救われたのが先だ。彼女が俺を好きになつてくれる理由なんて、ありそうもないのだが。

「なんで、と言われても……難しいな」

俺の問いに、クリスは戸惑うように言った。

「キマイラと一緒に戦つてくれたり。

共にした旅が楽しかったり。

魔術の腕がすごかったり。

そういうことが、無関係とは思わないが。

だから好きなのかと言うと、そうではない気がする」

ポツリポツリと、自分の中の答えを探すように、クリスは続ける。

「……私自身、恋心に気づいたのは、ハジメと話したあの喫茶店だったんだ。

その時までは、特別親しい友人、という感覚だった。

旅の終わりに、ハジメと別れる段になつたあの時。

離れたくないと思つたんだ。

ずっとこのまま、一緒に過ごしていたいと、そう思つて。

気づいたら、好きだ、なんて口にしていた」

クリスは顔を赤らめて、手に持つカップが少し揺れた。

「だから、これが理由で、とか。

あれがあつたから、とか。

そういう因果関係を探すことはできない。

しいて言うなら、そうだな。

ハジメが、ハジメだから、だろうか。

わ、私だつて今まで、言い寄ってくる男がいなかったわけじゃないんだぞ？

だが、ハジメ以外の誰にも、こんな感情を抱いたことはなかったんだ。

……答えになつて、いるだろうか？」

クリスはずいぶん、顔を背けてしまった。

恥ずかしさに耐えられなかったのだろう。

確かに「俺のどこが好きなのか教えてくれ」なんて。

答える側からしたら、迷惑極まる質問だな。

反省。

「すまないクリス、ありがとう。

少し、自信が持てたよ」

「まあ、それならよかった」

俺が俺だから、か。

なんともうれしい言葉を言ってくれろ。

エミリーが俺に、勇気をくれるとしたら。

クリスは俺に、自信をくれる。

今もその言葉のおかげでなんだか、心が穏やかになった。

「いい、天気だな」

空を見上げれば、ペンキで塗ったかのような青空だ。

「本当だな」

クリスもそれを眺めて。

カシーを飲み干すまで、2人でぼんやりと景色を見ていた。

## クリスとのデート③

展望台から降りて。

伸びをしているクリスに尋ねる。

「次は、どこに行くんだ？」

「そうだな。」

そろそろお昼にしようと思うのだが、どうだろうか？」

「……大賛成だ」

久々の運動のせいか。

俺の腹ペコムシが、さつきからぐーぐーと鳴いているのだ。

それを、耳ざとく聞いたらしいクリスは。

苦笑してから、歩き出した。

「……だ」

そう言つて、クリスマスは店の中へと入つていく。

「( )つて……」

そこはとても懐かしい、あの店だった。

妖怪のような店主が経営する、あの店。

「いらつしやいませー！

お二人様ですね？

そちらのお席へどうぞ」

愛想のいい女性店員に促され、席についた。

クリスマスと目が合つて、店内を眺めながら言う。

「ここ、昔のちよつとした行きつけなんだ。

いやー、全然変わつてないなあ」

なんとなく、通ぶつてみた。

「ああ、聞いている。

ニーナさんの誕生日に、ここの料理を振る舞つたのだろうか？」

知つてたんかい。

「……ああ。

あの時は苦勞した。

こここの店主、めちやくちや恐ろしいんだ。

魔族だって、裸足で逃げ出すレベルだからな」

「ふふっ。

それはぜひ見てみたいな」

カラカラと笑うクリス。

あの妖怪を最後に見たのは、サンドラ村を旅立つ時か。

これまた懐かしいな。

店員が注文を取りに来たので、2人で一角ウサギのソテーを頼んだ。

店員はそれをメモに書き込み、厨房へと伝えに行く。

「どうしてこの店にしたんだ？」

気になって聞いてみた。

偶然ではなさそうだが。

「……ずっと、ハジメの思い出の場所を見てみたいと思ってたんだ。

そのうち訪ねてみようと思っていた矢先に、このデートの話があがってな。

もしもハジメと一緒に訪ねられたら、きっと楽しいだろうと思っただ」

クリスが少し、照れたように言う。

なるほどな。

「だから朝、展望台を見に行ったのか。」

あの場所は、ニーナにでも聞いたのか？」

「ああ、家族で旅行をした時に寄ったと、楽しそうに話してくれたぞ」

「へえ」

確かにあの時のニーナは楽しそうだった。

まあ、今日のクリスも負けてはいないが。

「つてことは、午後は乗馬でもするのか？」

「いや、少しだけ、私が行ってみたい店があつてな。」

午後はそっちに付き合つてほしい」

「ああ、いいよ。」

どんな店なんだ？」

「あ、その。」

そ、それはだな……。

……そ、そう！

行つてからの楽しみということにしておこう」

クリスはゴクゴクと水を飲み干して、店員におかわりを要求した。

あからさまに怪しい態度だが。

まあ、気にしないことにするか。

午後には分かるのだろうし。

しばらくして、料理が到着した。

あの頃と変わらない、思い出の味だ。

クリスマスも美味しい美味しいと、パクパク食べていた。

食後のカシーを飲んで、一服する。

ちようど客が空いたので、会計で料金を多めに払い、店主を呼んでもらった。

店主は相変わらず、熊のような人だった。

もしかしたら、人のような熊なのかもしれない。

出てきた瞬間、クリスマスが息を呑むのが伝わってきた。

店主に料理が美味かった旨を伝えると、「またレシピが必要なら、教えてやるから来

い」と、ぶっきらぼうに言われた。

なんと店主は、俺のことを覚えていてくれたのだ。

その節について丁寧に礼を言って、店を出た。

「——本当に、熊のような人だったな」

「な？ 言った通りだったろ？」

道を歩きながら、店主の話題で盛り上がった。

「あの人が、あの繊細な味付けを作り上げていると思うと、なんだか不思議な感じがするな」

「だよなあ。」

初めて会った時は、絶対嘘だと思ったよ。

でもあの人の、あの風体で実は子ども好きなんだぜ？

ニーナが子どもの頃から、こっそり見守ってたらしいからな」

「もはや、意外性の塊だな」

クリスがくすくすと笑う。

たわいない会話をしながら歩いていると、右手に広場が見えた。

そこには、ボールのようなものを蹴り合う子どもたちがいた。

よく見ると、二つのチームに分かれている。

「……あれ、サッカーか？」

「ん？」

ああ、あれは昔からある、子どもの遊びだな。

獣の皮で作った玉を、手を使わずに敵陣の輪の中に入れるんだ」

言われてみると確かに、サッカーで言うゴールの位置に、木の枝で作られた輪っかが置かれている。

的が小さい代わりに、ゴールキーパーはいないルールのようなのだ。

その他細かいところは違ったが、しかしほとんどサッカーの動きをしている。

「こんな遊びがあつたなんて、知らなかったな」

「そうなのか？」

アルバーナの子どもの遊びとしては、割と人気だが。

私も子どもの頃は、たまにやっていた」

「へえ」

興味を引かれて少し見ていると。

弾かれたボールが、こちらへと転がってきた。

「すみませーん！」

ボールを追いかけて、一人の男の子が駆け寄ってくる。

足元に転がってきたボール。

俺はそれを右足の甲に乗せて、真上に蹴り上げた。

落ちてきたボールを、ヘディングで数回宙に浮かせ。

胸でワンクツションさせた後、右足でふわりと浮かせて男の子に返す。  
……どや。

ボールを受け取った男の子は、ぽかんとした顔でボールを見た後。

「……すつげえ！」

目をキラキラさせて、俺の方に駆け寄ってきた。

「兄ちゃん、めちやくちや上手！」

こんな大人、見たことねえよ！

こつち来て、一緒にやろーよ！」

ぐいぐいと袖を引っ張られる。

どうしたもんかとクリスを見ると。

彼女は笑って、行ってきた、とジェスチャーした。

「しょうがねえなあ。

少しだけだぞ」

その後少しだけ、子どもたちに混じってサッカーもどきに興じた。

ボールやルールはかなり違うが、結局のところ身体の使い方は一緒だ。

子ども達に花を持たせつつ、久しぶりのプレーを楽しんだ。

「すごいな、ハジメ。

あの遊び、あんなに上手な人を見たことがないぞ」

「地球にも同じようなのがあつてさ。

昔そればかりしてた時期があつたんだ」

あの頃。

嫌なことがほとんどだったけど、サッカーだけは楽しかった。

サッカーのおかげで、努力の意味を知ることができた。

孤立した人間関係以外にも、人生の要素はたくさんあると教えてくれた。

孤独でも大丈夫だと思えた。

あの経験があつたからこそ、俺は今まで、忍耐強く行動できたのだという気がする。

「……まあ、クリスが本気出したら全然敵わないだろうけどな」

ちよつとだけふてくされて言う。

残念ながら、それが事実なのだ。

クリスは、俺の10倍は早く走れる。

10倍強いシュートが撃てる。

長い間努力して身に着ける技術が、フィジカルに圧倒されてしまうのだ。

この世界でスポーツが盛んじゃないのは、そういう部分もあるのかもしれないな。  
「いや、私はあんなに上手に玉を扱えない。」

ハジメのその技術は、国で一番かもしれないぞ」

「またまた、おだてちゃって」

そんなやりとりをしていると、だんだんと、日が傾いてきた。

ぼちぼち、このデートも終わりにさしかかろうとしている。

恐らく次が、最後の目的地となるだろう。

「……で、今俺達はどこへ向かってるんだ？」

「時間がかかってしまつてすまない。」

えーと、この辺だったはずなんだが……」

クリスはキョロキョロと、辺りを見回す。

広場を離れて少し歩き、街の中心部に近いところへとやってきていた。

「……あ、あつた。」

ハジメ……ここ、この店だ」

クリスが指さすその店のショーウィンドウには。

可愛らしいぬいぐるみが、所狭しと並んでいた。

「え……(ハハハ)？」

俺は戸惑いながら尋ねる。

「あ、ああ。ここにだ」

クリスは顔を真っ赤にしながらも。

この店に入りたいのだと認めた。

入口には、ピンクの丸っこい文字で書かれた看板。

そして、巨大な熊のぬいぐるみがかざっていた。

「クリス、こういうの好きだったの？」

「その、そ……そうだ。」

実は私、可愛らしいものが好きなんだ。

家族に知られるとかわかれるから、今まで買ったことはなかった。

旅の間も、不要な物は持ち歩けないしな。

だが、今初めて、家族から離れて暮らしているから。

この機会に、一度こういう店に入ってみたいと思って……。

でも、一人では入りづらくて……」

恥ずかしそうに、クリスが言う。

「そうだったのか」

「……やっぱり、私のような女が、こんなものを買うなんて変だろうか？」  
クリスが不安げにこちらを見てくる。

「全然変じゃない。」

むしろ、似合ってるくらいだ」

俺は素直に感想を述べた。

確かに普段の鎧姿と、きつぱりとした物言いからすると少しギャップを感じる。  
しかし。

今日の前にいるクリスは、髪を下ろしたスカート姿。

正直、ぬいぐるみみのCMが舞い込んできてもおかしくないくらい、似合ってる。

「そ、そうか？」

……よかった。

では、中に入ろう」

ぎくしやくと、しかし興奮した足取りで、クリスは店の中へと入っていった。

俺も一緒に、中へ入る。

店の中も、ぬいぐるみであふれかえっていた。

女性の2人組か、男女のカップルの客が多い。

なにやら、ふんわりと甘い匂いもする。

クリスが気後れするのも分かるな。

俺なんか特に、居づらい空気だ。

クリスも居づらいんじゃないだろうか。

そう思つて、そちらを見ると。

彼女は目を輝かせて、店内を見回していた。

「か……かわいい……」

それはまるで、この世の樂園に来たかのような表情だった。

それからというもの。

クリスは、あつちに行ったりこつちに行ったり。

棚の上のぬいぐるみを手に取ったかと思えば、すぐさま下のものにも手を出したり。

両手にぬいぐるみを抱えて、交互に見て悩まし気な顔を試みたり。

俺のことなど忘れてしまったかのように。

ぬいぐるみの世界に没頭してしまった。

それから、1時間ほどが経過した。

「——なあハジメ。」

この子とこの子は、どっちがかわいいだろうか？」

笑顔のブタと眉間に皺の寄ったブタ。

クリスは左右の手に持ちながら、にこにこ嬉しそうに尋ねてくる。

「……右の、笑ってる方じゃないか？」

「なるほど。確かにこの子もかわいいんだけど……。」

しかし左のこの子の表情にも、なんとも言えないかわいさがあると思わないか？

なんとというか、子どもの可愛らしい反抗期を見た時のような。

この眉間の皺に、奇妙な愛くるしさを覚えてしまうだろうか？」

「……それなら左にしたらいんじゃないか？」

「そんな！」

それではこの素敵な笑顔を、見捨てるというのか!？」

「……じゃあ両方買え！ 両方！」

「それがすでに5つも買ってしまったているから、あと1つが予算の限界なんだ！」

「——そんなら両方やめちまえっ!!」

ガーン。

そんな音が聞こえてきそうな表情で、クリスはこちらを見る。

しかしさつきから、ひたすらぬいぐるみを比べさせられたあげく、俺の意見はほぼ取り入れられないのだ。

こんな状態が続いたら、さすがに声を荒げるといものだろう。

クリスは、がつくりと肩を落とし。

トボトボと、ブタ達を柵へと戻し始めた。

その落胆した様子は、なんだかあまりに憐れに見えた。

後ろ姿の哀愁がすごい。

「クリス……」

ああ、くそっ。

思わず声をかけてしまった。

「なんだ？」

まるで幽霊のように、ゆっくりとクリスがこちらを振り向く。

その顔はなんだか、普段とかけ離れすぎて。

普段の凜とした表情は、みる影もなかった。

「あー、もう！

そんな顔すんなよ！

わかったよ、俺が買ってやるから！」  
クリスの顔が、ぱあつと輝く。

「本当!?!」

嬉しさを抑えきれない犬のような速さで、こちらに近づいてくる。

そして――。

「ハジメ、ありがとう！」

ぎゅつと。

抱きつかれた。

ちよつ。

やばいやばい!

今日一日ずっと過ごして、ようやく意識しないようになれたっていうのに。

ああ胸が、胸がやばい。

なんかいい匂いもする。

髪がさらさら。

あんなに強いのに、触れる所全てが柔らかい。

そのうえ、体重をかけられてはすなのに、羽のように軽い。

なにこれ？

ねえ、なにこれ？

放心する俺。

しかしそんな俺を放置して。

クリスはいそいそとブタ達を取りに戻っていった。

……もてあそばれた。

もしかしたら俺こそが、真のブタなのかもしれない。

「……はああ。

最高だなあ、あのぬいぐるみ達は」

馬車に乗るための帰り道。

クリスが、ヤクを一発決めたジャンキーみたいに言った。

「まあ、よかつたな。

そんなにたくさん買えて」

クリスの腕には、巨大な紙袋が抱えられていた。

その中には当然、犬やら鳥やら豚やらのぬいぐるみが入っている。

「ああ。

これで欲しかった子は全て手に入れた。

ハジメのおかげだ。

ありがとう」

そう言つて、クリスは幸せそうに笑つた。

その顔を見ながら思う。

クリスにこんな一面があるなんて、意外だった。

共に死線を超えてきた仲だというのに。

単純な好悪でさえ、まだまだ知らない部分があるものだ。

ヒトは誰しも。

本人しか知らない領域を、氷山のように隠し持っているということか。

クリスにも、エミリーにも、ユリヤンにも。

そんな部分があるに違いない。

むしろ、そんな部分が大半を占めているのかもしれない。

……そう思うと。

少しだけ、救われる自分に気づく。

自分にも、表に出したくないものがあつて。

それが自分の、何より嫌いな部分だからだ。

俺は、幼少期を地球で過ごした。

その時の記憶は、ろくでもないことばかりだ。

そのせいで、俺は他人を心から信じきれないようになったと思う。

しかしそんな一面は、極力見せないように振る舞っている。

そんな自分が嫌だった。

しかし、もしも人間みんなが、そういう一面を持つてるのだとしたら。

今よりもう少し、自分を認めることができるかもしれない。

「クリス」

往来で呼び止めて。

振り返る彼女は、やっぱり綺麗だった。

「どうした、ハジメ？」

キョトンとした顔で、クリスが尋ねる。

別にどうもしていない。

ただ、言わなきゃいけないことがある気がした。

「……ありがとう」

そう言うときクリスはキョトンとした。

何のことだかって顔だ。

しかしすぐに頬を緩めて。

「どういたしまして！」

そう、返事をしてくれた。

## おさげで眼鏡の女の子

エミリー、クリスとのデートが終わって、数日が過ぎた。  
そろそろ、返事の期限が迫ってきている。

家族と何気ない毎日を過ごしながら。

俺は、自問自答を繰り返していた。

俺はもともと、自分が嫌いだった。

そうなった原因は、地球で過ごした15年間にある。

子どものころからずっと、誰かに優しくされた記憶がない。

会う人全てが、自分を嫌っているように感じた。

他人が怖かった。

小学生の頃。

俺とは別に、いじめられていた子がいた。

女の子で、牛乳瓶の底みたいな眼鏡に、三つ編みの子。

内気でおとなしい感じの子だった。

家が貧乏で、よく同じ服を着ていて。

そんなことを理由に、いじめの標的にされていた。

臭いとか、汚いとか、ブスとか、死ねとか。

よく、いじめっこ達に口汚くののしられていた。

俺と違って女の子だからか、殴られたりはなかったようだが。

その時、俺はできるだけ、その子を助けようとしていた。

隠された眼鏡や上履きを、一緒に探したり。

給食が捨てられたら、自分の分を分けたり。

悪口を言ういじめっ子に、立ち向かったりもした。

俺の中では、仲間意識が生まれていたのだ。

いじめられている者同士。

助け合っていきたいと思っていた。

そして、ある時。

俺は校舎裏で、いじめっ子達に羽交い絞めにされて、殴られていた。

いじめっ子のボスは、その日は特に不機嫌だった。

子どもは本当に、加減というものを知らない。

吐くほど殴られた後に。

落ちていたゴキブリの死骸を、口に入れられそうになった。必死で抵抗しても、複数人の力には抗えなかった。鼻をつままれて。

無理やり口を開けさせられようとしていた、その時。

そこに、その子が通りかかったのだ。

その一瞬。

はつきりと目が合った。

しかし。

その子は顔を背け、そそくさと歩き去っていった。

……あの時の感情は、言い表すのが難しい。

もちろん、その子がいじめっ子と戦って勝てるとは思わなかった。

それまでのことを、恩に着せるつもりもなかった。

だから彼女の行動は、間違ってる。

誰だって、他人のために痛い思いをするのは嫌だろう。

だが、その時の彼女の行動は、俺の心に傷として残った。

結局、俺はゴキブリを食うことだけはなんとか避けたものの。

それにイラだったガキ大将に、手ひどく痛めつけられた。

あの子が先生でも呼んでくれていれば、もう少しマシな結果だっただろう。だが、そうはならなかった。

彼女は密告者として目をつけられることを恐れて、何もしなかった。

俺に、仲間なんてものはいなかった。

中学に上がってサッカー部に入り。

仲間ができたと思ったら、それも嘘っぱちだった。

——そんな過去が、俺の原風景だ。

だから自信なんて持てなかったし。

誰かを心から信じることもできなかった。

しかし、こっちの世界に来てから。

関わった人達がくれた言葉や。

自分の過去が分かったことで。

最近は少し、自分に自信が持てるようになってきた気はする。

しかし、相手を信じる、ということに関しては。

やはり心の奥底には、壁がある。

誰かを信じようとすると。

おさげの眼鏡の女の子が見せた表情が、フラッシュバックする。

もちろん、エミリーやクリスのことを信じていないわけじゃない。

むしろ、他に比べれば誰よりも、二人を信頼している。

しかし、喉の奥に刺さった小骨のように、過去の体験がその信頼を貶める。

また裏切られるぞ、と。

心の底に潜む何者かが、俺にささやいてくる。

自分の出自が分かって、自信は取り戻せた。

地球では俺が異分子だったのだから、虐げられたのも理解できる。

しかしだからと言って、俺に暴力を振るったやつらを許せるわけじゃない。

トラウマが消えるわけじゃない。

そして、それに見て見ぬふりをしたままで。

彼女達のどちらかを選ぶなんてことが、できそうにないのだ。

返事を待ってる、と。

二人に言われてから、もうじき1か月だ。

二人とのデートで。

改めて、二人のことが好きだと思った。

好きだと言ってくる相手を、俺も好きなのだから。

少なくともどちらかを選ぶなんて、簡単だと思っていた。

しかし現実には、そんなに単純ではないらしい。  
揺れるランプの炎を眺めながら。

俺はずっと、一人でぼんやりと考えていた。

## 襲来

——それは、いつも通りの朝だった。

返事の期限が迫りつつも。

まだ数日の猶予があるので、散歩でもして過ごそうと思っていた。  
ベッドから出て、朝のルーティーンをこなして。

たわいない事を話しながら。

ニーナとシータと、朝食を食べていた時。

突如、玄関の呼び鈴がけたたましく鳴った。

「わっ、誰だろ、こんな時間に」

ニーナが驚いて席を立とうとする。

「俺が行くよ」

それを遮って、自分で行くことにした。

なぜそうしたのかと言えば、特に理由はない。

しかしなんとなく、自分が出た方がいい気がした。

玄関を開けると、クリスがいた。

「どうしたんだ、クリス？」

「そんなに慌てて」

「恐らく全速力で走ってきたのだろう。」

「クリスはうつむき、膝に手をつき、肩で息をしている。」

「ハジメ、聞いてくれ！」

「なんだ？」

「クリスが顔を上げて、言った。」

「魔族が、攻めてきている！」

「その言葉を、今一つ理解ができなかった。」

「耳には入るが、頭には入ってこない。」

「魔族が？ どこから？ どうやって？」

「……どういふことだ？」

「私にも、詳しくは分からない。」

「朝起きたら、魔族の気配がしたんだ。」

「こちらに向かつてきている」

「息をきらしながら、クリスが必死に説明する。」

「ここに、攻めてきているのか？」

「そうだと思う。とにかく、こちらへと接近している」

「数は？」

「……数えきれないほど、多い。」

「おそらく、10万以上」

「……………はっ？」

——馬鹿な。

なんだってそんな数の魔族がいきなり。

こんな大陸の東の端に。

「どういふことだ？」

防衛線が、ずいぶん前に突破されたってことか？」

だとしたら。

状況は、絶望的だ。

西からやってきた魔族が、東の端に大挙してやってきている。

ということは、大陸の大半が、魔族の手に堕ちたということだ。

「いや、恐らく違う」

「なぜ？」

「魔族が向かってきているのが、東からだからだ」

「……は？」

待て待て。

ここが、大陸の東端なんだ。

それより東つてことは……つまり、海を渡つて来てるつてことか？」

「気配からすると、そういうことになる」

魔族が海を渡つてくる？

そんな馬鹿な……。

——いや。

そうか。

そういうことだったのか。

1000年前に突如として現れ、ヴィルガイアを滅ぼした魔族。

そのからくりは、そこにあつたのだ。

ここは二次元の異世界なんかじゃない。

地球と同様に、宇宙に存在する星の一つなんだ。

思考の中で前提として当然になつていて、失念していた。

星は丸い。

丸いのなら、西に進めば東にたどり着く。

思った以上に、大陸同士は近かったのか。

「……クリス、すぐに戦闘の準備だ。」

魔族を迎え撃つぞ」

「分かった！」

クリスと別れ。

急いで部屋に戻り、ローブを着込み、杖を持つ。

「——あれ？」

ハジメ、どこか行くの？」

ニーナがダイニングから顔を出した。

「ああ、ちよつと用事ができてな。」

ちよつと遅くなるかもしれない」

「そう。いつてらつしやい」

「いつてきます」

手を振るニーナを見ながら。

焦りを表に出さないように答える。

数えきれないほどの魔族。

そんなものがここに来たら。

脳裏に浮かんだのは、魔族の大群に襲われる村。逃げ惑う人。

焼ける家。

殺した人間をむさぼる魔族。

——そんなことになって、たまるか。

ここは俺の故郷だ。

何が何でも、守り抜く。

「——ハジメー！ 待たせたー！」

クリスがエミリーを背負って、猛スピードで駆けつけた。

クリスは鎧。

エミリーはローブ。

それぞれ剣と杖を持って、臨戦態勢だ。

「クリス、今やつらの位置はどうなってる?」

「さつきから、少しずつ進んでいる。」

「まだ、陸に到達してはないと思うが……」

よし。

やつらも、海上ではそう素早く動けるわけではないらしい。

飛んできているわけではなく、泳いでいるのかもしれない。

俺は、杖の先端を地面につけ、溝を掘る。

「……でも、どうやって迎え撃つの？」

戦力差は絶望的よ。

私達だけで、食い止められるわけではないわ。

それなら、近隣の街に避難を促した方がいいんじゃないの？」

エミリーは冷静だ。

冷静に、これが絶望的な状況だと認識している。

エルフの里で、たった一体の魔族を倒すことすら、俺達にはギリギリだったんだ。

そんなのが大勢で攻めてきたってんじや、なす術ないと思うのが普通だろう。

「いや、避難を促したところで、逃げ場なんてないんだ。

過去1000年以上存在しない、大規模な侵攻だ。

やつら、ヒトを根絶やしにする気で攻めてきてるんだろう。

遅かれ早かれ、見つかって食われるのがオチだ」

エミリーの案は却下だ。

俺はガリガリと、地面の溝を掘り続ける。

「じゃあ、クレタの街に、応援を呼びに行くとかか？」

自警団とか、憲兵とかといっしょに戦うのか？」  
今度はクリスが言う。

確かに、逃げないなら次はその案だろう。

圧倒的な数に対して、数をそろえずに勝てるわけがない。  
だが。

「それもダメだろう。

事情を説明してる間に食いつかれる。

それに、仮に街の戦力が集められても、魔族に歯が立たない。  
死ぬのが少し早まるだけだ」

——完成した。

土の上に描いたのは、魔方阵。

「……じゃあ、どうするの？」

顔を上げると、不安そうな二人がいた。

「実はな、二人とも。

俺は今の状況を、チャンスだと思ってる。

それも千載一遇の、ビッグチャンスだ」

声ははつきりと。

口元には笑みを浮かべて。

できるだけ、自信満々に聞こえるように、二人に言う。

「……今、この瞬間なら。

海の上にいるやつらを、一網打尽にできるかもしれない」

二人はあつけにとられた顔で、俺を見ていた。

「……だから頼む。

時間がない。

二人とも、俺に命を預けてくれないか？」

杖に、魔力を込める。

地面に描いた魔法陣が、淡く光り始めた。

「……ハジメが、何を考えてるのか分からないわ」

「……私も、ハジメの言っていることは理解できない」

二人が言う。

「でも、いいわ。私はハジメを信じる。

あなたに私の命をあげる。

好きに使いなさい！」

「私もだ。」

もとより、ハジメに救われた命。

ハジメのために使う事に、ためらいなどない！」

二人は、決然とした口調で、そう言ってくれた。

「ありがとう、二人とも」

二人のその言葉を聞いて、さらに魔力を込める。

光は徐々に強まり、視界が白く染まる。

「——え？ 何よこれ」

「——ちよつと待って。ハジメ」

二人がわめくが、聞く耳は持たない。

——光を放つ魔法陣は、俺達を海岸へと転移させた。

# 力

視界の光が消えると。

眼下には、海が広がっていた。

「え？ え？ 何よこれ」

「ど、どういふこと？」

クリスとエミリーがへたりこんでいる。

「説明は後だ」

ここは海岸付近の高台。

森の奥に、海を一望できる。

普段なら、青々とした海がどこまでも広がる光景が見えるはずだが。

「嘘、でしょ」

「……これほどの数とは」

海は、黒く染まっていた。

蟻の群れのようなその一粒一粒。

それら全てが、圧倒的な力を秘めた魔族なのだ。

何十万もの魔族が、木でできたイカダに乗って、こちらに向かってきている。魔族がオールを漕ぐ姿。

余裕があれば滑稽にも映るだろうが、今はそんな感情は1ミリも湧かない。ただただ、戦慄する。

それらは全て、俺達を滅ぼすために行われているのだ。

おおよそ似つかわしくないその行動も。

大量に作られたイカダも。

これだけの数を統制する労力も。

全ては、ヒトを滅ぼすという目的に繋がっている。

「クリス、できるだけ遠くまで、気配の探知を頼む。

エミリー、俺の打ち漏れを見つけたら、魔術をよろしく」

だがこれは。

間違いなく、好機だ。

千載一遇、空前絶後の、大チャンスだ。

なぜなら――。

「原初の火。暗がりを照らすもの。

三つ時の呼び声。彼方より響く」

俺は、杖に魔力を込めていく。  
遙か遠くの星の、膨大な魔力。

それを、惜しみなく引きずり出す。

「方角は東。虚空より歩みし時の番人。

その城壁は高く、高く」

今の様子なら、魔族が海岸に着くまでまだ時間はかかるだろう。

魔族はどうやら、空を飛んでこちらに来ることはできないようだ。

「頂きを目指す王。

その翼は燃え炭になろうとも」

……だとすれば、殺せる。

今、このタイミングなら。

奴らを全て、滅ぼすことができる。

「その志は遠く、遠く。

約束の地にて再び見えん」

——俺はそのために、『力』を手にしたのだから。

「——エインシエント・ノヴァ」

唱えた瞬間。

俺の杖から、一条の光芒が魔族へと向かって走った。

眼下の海を切り裂くように、一直線に飛んでいく。

その光は、1秒もしないうちに、魔族の群れに着弾した。

——そこから。

網膜を焼くような、閃光が咲いた。

「うっ！」

「きゃっ！」

エミリーとクリスが反射的に目を閉じる。

直後。

発光する火球が生じ、瞬く間に。

それは街を一つ包める程の大きさに成長した。

視界が紅に染まる。

魔族が、朱色に溶けて飲み込まれていく。

数瞬遅れて、爆音が響いた。

花火のように、音が遅れてやってきた。

鼓膜が破れそうな、その音が去った後。

次は叩きつけるような熱風が、こちらに向かってきた。

「つかまれー！」

クリスが伸ばした手をつかむ。

吹き飛ばされぬように、固まって熱風をやり過ぐす。

熱風が過ぎたら、今度は津波だ。

その凄まじいエネルギーに、海岸に生える木々がなぎ倒されていく。

俺達は高台にいるから影響はないが、海岸のかなりの部分が水に浸かってしまった。

それらが過ぎ去って。

ようやく魔族の方を見る。

俺が魔術を放った一帯は、大量の水蒸気で何も見えなくなっていた。

霧のなかに、魔族達の声だけが響いている。

焦ったような声。

声が混ざって内容は判別できないが、相変わらず不快な響きだ。

「クリス、魔族の気配は？」

「え？ え？」

えつと……あ、ああ！

い、今のでかなりの数を減らせたようだ。

だが、まだ数万体は残っている」

「陸に近いやつはいないか？」

「だ、大丈夫だ」

思わず、笑みがこぼれる。

想定範囲内。

むしろ、状況は最高に近い。

……お前らに滅ぼされた、ヴィルガイアの魔術。

とくと味わうがいい。

「悠久の時を刻む理。其の根源は静止。

方角は北。

果てなき空をも覆いつくし。

白き山脈の巨人のもとへ」

さらに唱えるのは、水聖級魔術。

水の名がつくが、その本質は冷却。

大量の水蒸気や海水が、その伝達を早めてくれるはずだ。

この状況なら、水に触れていないやつはいないだろう。

「遙かに刻む文言は朽ち。

遙かに交わす契りは絶えようと。

頂はなお、我が元に」

最後の一小節。

万感を込めて唱える。

「——フリージング・エア」

キンツと。

空間が隔たる音がした。

魔術を放った領域と、それ以外に。

杖から発した冷気が、前方に急速に広がっていく。

分子の振動を即座に静止し、体積さえも奪いながら。

窒素、酸素、水蒸気、その他。

空気中に含まれる全てが、瞬時に凝固して固体へと変わる。

一拍置いて、周囲の空気が真空の空間へと流れ込む。

それは激しい風を引き起こした。

さつきとは逆に、吸い込まれるような風。

再度、クリスに捕まってやり過ぎす。

その烈風が過ぎ去った後。

波立つ海は、その形のままに氷塊と化していた。

木も、砂も、水も、空気さえも。

あらゆるものが凍りついた、灰白の世界。

そこに、動く者はなくなった。

「クリス、どうだ？」

「……………」

「……クリス？」

クリスを見ると、ようやく我に返ったように答えた。

「……………あ、ああつ！」

魔族だな。

先程まで感じていた気配は、全てなくなった。

全滅した、と見ていいと思う」

……よし。

ホツと息を吐いた。

ギリギリで間に合った。

もしも陸で戦ったら、詠唱する暇などなかっただろう。

万どころか、百体の魔族ですら絶望的だ。

そうなれば、俺達に——ヒトに、勝ち目はなかったかもしれない。

大陸の東側の国々は、魔族の奇襲で壊滅的な被害を受けただろう。海は彼方まで凍りつき。

木は風でなぎ倒され。

氷から木が生える景色になってしまったが。

目的は果たせた。

「間に合ってよかった。

クリスが気づいてくれたお陰だ。

助かったよ」

そう言つてクリスを見ると、なんとも言えない表情をしていた。

「エミリーもありがとう。

俺に、命を預けてくれて。

エミリーがいてくれたから、冷静でいられた」

エミリーを見ると、なんとも言えない表情をしていた。

「……………」

「……………」

二人はその表情のまま、固まってしまった。

「……………どうかしたか？」

たまらず、聞いてしまった。

それが失敗だったのだろうか。

二人の顔が、みるみる感情を取り戻していく。

一瞬の静寂ののち。

——左右から、けたたましい声が俺の耳を貫いた。

「……『どうかしたか?』じゃ、ないわよこのバカ!!」

「ハジメのオタンコナス! 無口! 陰キャラ!」

「そんな魔術が使えるなら、言つときなさいよ!」

「そうだ! 私達がどれだけ絶望したと思ってるんだ!」

「私、死ぬのは確定だと思つたわよ!」

どれだけの魔族を道連れにできるか、そんなことしか考えてなかつたわよ!」

「私も、二人が死ぬのを一秒でも遅らせることしか考えてなかつた!」

選べるのは、死ぬ順番だけだと思つていたぞ!」

「バカ! 根暗! カメモムシ!」

「鈍感! 朴念仁!」

「——やかましいっ!」

……なんだこいつら。

なんでこんなに言われなきやならんのだ。

だって、説明する暇はなかっただろ。

魔族が陸に上がったらアウトな状況だったんだから。

むしろ、俺の迅速な作戦行動を褒めてほしい。

「いいじゃねーか、魔族は全部倒せたんだから」

「よくない！」

二人が声をそろえて言う。

まだ不満らしい。

やれやれだ。

嘆息しながら、自分の発言の違和感に気付いた。

——全部？

果たして侵攻してきた魔族は、今ので全部なのだろうか。

確かに圧倒的な数だった。

だが、海を越えての侵攻に、戦力の全てを割くなんてことがあるだろうか。

仮にこの襲撃が成功したとしたら、ヒトは西に逃げるだろう。

その結果、仮に防衛線をヒトが突破したなら、逆に魔族の領土を占領できることになる。

それでは本末転倒だ。

つまり、西の大陸には、まだ相当数の魔族がいるはずだ。そして、もし俺が敵の指揮官なら。

海越えの侵略に、ヒトが混乱した矢先を狙うだろう。

防衛線で後ろを気にしたら、それは大きな不利になる。

そこを突いて、防衛線に攻めこみ、突破すれば。

完全な挟撃となつて、魔族の勝利が濃厚になる。

「——まずい」

一応すでに、挟撃を阻止することには成功した。

だが、仮に今のと同じ戦力が西にいたとしたら。

……あれだけの数だ。

防衛線を突破されてもおかしくない。

そうなれば、相当な数の犠牲者が出る。

「クリス、エミリー！」

「はい！」

その返事に、ちよつと面食らつた。

二人を見ると、やや硬い表情でこつちを見ている。

蛇に睨まれたカエルを、少しだけ思わせる表情だ。

なんか、ビビってる？

……まあいいか。

そっちの方がやりやすい。

「俺は今から、大陸間の防衛線に向かう！」

「えっ!?!」

「しばらくしたら、魔族がそっちからも攻めてくる可能性が高い。

それを迎え撃つ！」

「ええっ!?!」

……なんか、二人の返事がすごいシンクロしてる。

「だから、ここで別れよう。」

あれだけ戦力を削いだんだ。

さすがに正面から戦えば、最終的にはヒトが勝つだろう。

ここは戦端から最も離れてるし、安全だ。

わざわざ危険な場所に赴くことはない」

できるだけ冷静に、見解を伝える。

妙なテンションだった二人も少し落ち着いて、考える仕草を見せ始めた。

「俺は魔族を許せないし、俺の目的は奴等を滅ぼすことだ。

だから、この機会に全てを終わらせようと思ってる。

付け加えるなら、友達を一人、援護をしてやろうってとこか。

つまり、俺には目的がある。

だから、自分の命を危険に晒す」

……そう。

ここで全てを終わらせる。

「でもそれは、二人には関係のないことだ。

あの魔族の大群と陸で戦えば、相当な苦戦を強いられるだろう。

死者も多く出るはずだ。

自分の命がなくなっても、全然おかしくない」

恐らく、かつてない規模の侵攻になるはずだ。

それに参戦するのは、エルフの里を目指す旅より遥かに危険だ。

「だから、俺一人で向かう。

……いいいな？」

散々巻き込んでおいてなんだが。

二人には、できれば安全なところについてほしい。

今回は仕方なかった。

転移するまで状況が分からなかったし、他に戦力がいなかったし、とにかく時間がなかった。

だが、次は違う。

戦線には、手練れの剣士や魔術師が山程いるはずだ。

それなら二人くらい、いてもいなくても変わらないだろう。

「ダメよ」

「ダメだな」

え？

聞き間違いかな？

「まるでダメね、ハジメ。

不正解よ」

たしなめるような口調で、エミリーは言った。

まるで、魔術学院に戻ったかのようだ。

さつきビビってるように見えたのは、見間違えだったのか？

「何が、二人には関係ないこと、よ。

関係あるに決まってるじゃない」

いや、そんなことないだろ。

少なくとも俺には、思いつかない。

「ハジメ」

クリスもまた、とがめるような口調で俺の名を呼んだ。

「私達だって、守りたい人がいるんだ。」

私にとっては、アルバーナに住む家族がそうだ。

ハジメはヒトが勝つと予想しているみたいだが、それは所詮推測でしかないだろう？

例え微力でも、私は大切な人を守るために戦いたい」

真っ直ぐな眼差しで言う。

確かにそう言われると、関係なくもないか。

「それに友達ってユリヤン殿下のことでしょうか？」

私達だって、一緒にお酒を飲んだ仲よ。

私は、殿下を友人だと思っている。

友人を助けたいと思うのは、当たり前でしょう」

今度はエミリーが、また一つ理由を付け加える。

まあ、その通りだ。

「……そして、一番間違っていること」

エミリーが言う。

俺への不満が、ありありと浮かんだ顔をしている。

クリスも同じような表情で、その言葉を引き継いだ。

「それは、私達がどれだけハジメのことを大切に思っているか、全く理解していないことだ」

二人して、俺をにらみつけてくる。

「ここでハジメ一人で行かせて、ハジメが帰ってこなかったら。

私達は一生、その後悔を背負って生きることになる。

そんなことは断じて、受け入れられない」

「あなたが私達をどう思ってるのか知らないけどね。

もう私達にとってあなたは、世界で一番大切な存在なの。

それをもっと自覚して、私達に心配をかけないように振る舞いなさい」

二人が真面目な顔で、そんなことを言ってくる。

その言葉は、すごく嬉しい。

本当に嬉しい。

嬉しいが。

「でも、俺にとってもお前らは、世界で一番大切な存在なんだ。

もしも魔族に殺されたりしたら、俺は耐えられない。  
頼むから、おとなしくここで待っててくれないか？」

「いやだ」

「いやよ」

即答かい。

「ハジメが心配してくれるのは嬉しい。

だが、ここで指を咥えて待っていることはできない」

「そんなに心配してくれるなら、あなたが私達を守って。

私達も、あなたを守るから。

それが仲間パーティー、でしょ？」

しばし、二人とにらみ合う。

しかしどつちに目を向けても、全く目を逸らさずにらみ返してくる。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………はあ」

ため息が出た。

この二人、テコでも意見を変えそうにない。  
「分かったよ。」

……3人で向かうことにしよう」

結局、俺が根負けする形で。

3人で、戦線へと向かうことにした。

## ユリヤンの懸念

大陸の西端。

戦線という、どの国の領土でもない土地。

魔族との戦いのためだけに存在する、広大な都市、巨大な城塞。

一つの国家として成立する大きさの都市の西側に、高い二重の城壁を備えた要塞が構えている。

その要塞の中には、兵士のための部屋が何千と存在する。

そのうちの、高級な部類の一室。

そのソファに座って、ユリヤンはため息を吐いた。

——何かが、おかしい。

ここに来た当初、ユリヤンはのんびりと生活していた。

魔族はこの500年、一度も攻めてきたことはない。

侵攻のない砦でやることなど、暇つぶしの他にないだろう。

そんな考えのもと、酒と女に興じる日々を送っていた。

しかし実際には。

聞いた話と、少しだけ違っていた。

魔族は、やってくるのだ。

2年に1度ほどの頻度で。

ただそれが、十体にも満たない数で、こちらが攻撃するとすぐに逃げていく、戦闘とも呼べない小規模なやりとりであったために、その事実はあまり広まっていなかった。

初めてそれを聞いた時は、気にも止めなかった。

魔族にも、好奇心旺盛なやつがいるんだろう。

知らない世界があつたら、覗いてみたくなるんだろう。

そんな解釈をしていた。

しかし先月。

その戦闘に、ユリヤンは初めて参加した。

どうせすぐに逃げていくと、周囲の者が揶揄する中で。

その日ユリヤンは生まれて初めて、魔族という存在と邂逅した。

それは筆舌しがたい、邪悪さを放つ存在だった。

遠目からでも、生理的な嫌悪感が沸き立った。

魔術師達も同様なのか。

壁上から、過剰とも言える魔術が放たれた。

事実、魔族はすぐに退却した。

城壁の上にはずらりと並んだ魔術師たちが、それぞれ数発の魔術を放つただけで、戦闘は終わった。

いつも通りだったなど。

魔族など恐るるに足らんと。

周囲の者は笑っていた。

そんな中。

ユリヤンの心には、強烈な疑念が生まれていた。

おかしい。

各国の精鋭の魔術師が、一斉に放つ魔術。

それらはユリヤンの見てきた中でも最高のものだった。

上級魔術。

間違いなく、ヒトの最高峰であるはずだ。

その魔術を。

その魔術を、奴らは避けていた。

土煙の中で、かすかに見えた魔族の動き。

それは明らかに、こちらの戦士の平均値よりも上だった。

恐らく、魔術に被弾して死んだ者はいないだろう。

もちろん、かなりの遠距離なので、着弾までの猶予は長い。

しかしそれを差し引いても、その素早さは脅威に映った。

なぜ、定期的に少数で攻めてくるのか。

なぜ、それだけの能力を持ちながら、すぐに撤退していくのか。

……こいつらはもしかして、大規模な侵攻の機会を窺っているんじゃないか？

定期的に攻めてくるのは、魔術の威力を測るためなんじゃないか？

そんな懸念が、ユリヤンの頭に生まれた。

遙か昔、ヒトは魔族に滅ぼされかけた。

しかしギリギリのところまで踏みとどまり、なんとか現在の形に持ち込んだ。

時間が経ちすぎて、正確な記録は残っていないが。

ヒトが盛り返せた理由は、魔族の数が少なかったからだと言われている。

魔族が、ヒトを駆逐するよりも速く。

ヒトは魔術を進歩させ、魔族と渡り合えるようになった。

しかし、魔族が大規模な侵攻をやめて1000年。

ヒトが、ヒト同士で争っていたその期間に。

息をひそめていた魔族が、その数を増やすことに専念していたとしたら。

そして。

ヒトを滅亡させる機会を、今も虎視眈々と狙っているとしたら。

——戦場での魔族の行動にも、説明がついてしまう。

「……………」

ユリヤンは再度ため息を吐き、グラスに酒を注ぐ。

ここでは月に一度、会議が行われている。

各国の代表が方針を話し合う、重要な場。

ユリヤンも、アルバーナの代表として出席している。

初めての魔族との戦闘を終えた、次の会議。

ユリヤンは訴えた。

戦闘での動きを見る限り。

やつらの一個一個に、相当な戦闘力がある。

もしも大規模な侵攻を受けた場合、防衛線を守れないかもしれない。

戦線の軍事力は、緩やかな右肩下りをたどっている。

当初は各国の戦力の半分を、戦線に回すことが義務だった。

しかしその基準は年々低下して、今では4分の1にも満たない。

それではまずい。

いつか魔族が攻めてきた時に、防衛できない、と。

ユリヤンは真摯に訴えた。

しかしそれに対する参加者の反応は、散々なものであった。

大半の者は、その意見を取るに足らぬものと侮った。

戦力は十分あり、攻め込まれても問題なく勝てる。

事実、奴らは我々の魔術に対抗できず、逃げることしかできない。

新参加者が口を挟むな。

臆病風に吹かれたなら、荷物をまとめて祖国へ帰れ。

そんな、ユリヤンを否定する主張で、会議は溢れかえった。

……皆、経験からくる思い込みに支配されている。

ユリヤンはそう感じた。

ヒトの一生は短い。

10年、20年続いてきた出来事なら、永劫続くと思うには十分だ。

ましてやそれが、1000年。

長く戦線にいる者ほど、魔族が攻めてくることを絵空事と考えるようになっていた。

そしてそのような者ほど、この場での発言力は高い。

地位を利用して安寧を得る事に慣れきってしまって、ひたすらに保守的。

ユリヤンにとっては、不都合極まりない。とはいえ彼らとて、悪人というわけではない。

年月というのは、ヒトの考え方を支配してしまうものなのだろう。

一応、ユリヤンの意見に耳を傾ける者も、少なからず存在した。

しかしその者達も、具体的な戦力増強の話には口を閉ざす。

金がかかるからだ。

それは、自国の防衛力を下げる事に繋がってしまう。

結果として、ユリヤンの意見に賛同する者は、ゼロだった。

グラスを口に運びながら、ユリヤンは思う。

確かに、この1000年変わらなかつたことだ。

魔族とは相容れないが、干渉しない。

それが正しいという空気が流れている。

だが。

それはこつちが勝手に思っていることだ。

やつらがどう思っているかなんて、分かりはしない。

有史以来、西の大陸に足を踏み入れて、生きて戻つたヒトはいない。

やつらのことなど、自分達は何一つわかっていないのだ。

それならば、せめて備えておく必要があるだろうに。

——慣れと馴れ。

それらは本当に、思考を鈍らせてしまう。

だがユリヤンでさえ、10年後はどう考えているか分かりはしない。

そんなヒトの愚かさに、諦念を覚える。

だがそれこそが、ヒトなのだろう。

「……まあ、どうにもならんな」

ゴクリと酒を飲み、ユリヤンは一人、目を閉じた。

## 魔族の話③

夜。

西の大陸の某所。

星明りに照らされて、巨大な建物が、その輪郭を晒している。

岩山をくり抜き、中を居住空間としたもの。

城と呼ぶには、あまりにも拙く。

建物と呼ぶことすら、抵抗を感じる者もいるだろう。

しかしそれが。

長い年月をかけて造られた、魔王の城であった。

魔族は、何かを作るといふことに向いていない。

強大な力の制御は難しく。

鋭利な爪は、繊細な作業ができない。

イカダを作れたことが、奇跡と言つていいほどに。

絶望的に、不器用だった。

せめてもの救いは、火を扱えること。

全ての魔族が、口から火を吹くことができる。

それは恐らく、進化の過程で攻撃手段として備わったもの。

しかし今、魔族の多くがそれを木の枝に移し、光源として活用している。

その発想によって、魔族の社会は格段に便利になった。

魔王は城の屋上で寝転び、星を見上げる。

扱うようになった火の灯りによって、少しばかり見える星は少なくなってしまったが。

星はいつもと変わらず、美しい輝きで彼を迎えてくれた。

星を眺めながら。

彼は、ヴィルガイアを滅ぼした時のことを思い出した。

あの時、彼は初めてヒトの街というものを見た。

城壁を超えて、その街並みを目にした時。

美しいと。

そう思った。

城も。

家も。

道も。

目に入る全ての物が美しく映った。  
洗練された造形。

魔族が幾星霜をかけようと、作り出すことができない景色。

それらは衝撃をもって、彼の心を揺さぶった。

星の動きに規則性を見出した時と同様の。

もしくはそれ以上の。

愛情といつて差し支えない感情が、彼の胸中に溢れた。

しかし。

その景色の中に。

視界に入れることすら、許し難い生物がいた。

それは、美しい景勝を飛び回る虫のように。

美しい街並みを、うぞうぞと這い回っていた。

——許せない。

彼は、その感情に支配された。

これほどまでに、胸を打つ景色。

それを作り出したのが、見るだけで虫唾が走るような生物だということ。

その景色を魔族が作り出すことは、永久に叶わないだろうということ。

そのいずれもが、彼の神経を逆撫でした。

手に入らぬ物ならいつそ、跡形もなく消し去る。

それが、その時彼が下した結論だった。

その結果、ヴィルガイアの街並みは徹底的に破壊され。

最期には、エドワードの魔術によって、その城も消え去った。  
だが今。

ヒトを真似て作り出した、城と呼ぶことすら滑稽な岩の上で。

星を見上げながら。

彼は嗤う。

あの景色は、じきに自分のものになる。

過程など、どうでもいい。

作ったのが誰かなど、どうでもいい。

最終的な所有者が自分であれば、それでいいのだ。

すでに、先遣隊を放つてからひと月以上が経過した。

今頃、大陸の東側は大混乱だろう。

来るはずのない方向から、魔族の大群が攻めてきたのだから。

全ての部隊に、建物は壊さぬよう厳命している。

殆どの魔族は、ヒトの文化になど興味はない。

壊すなど言われればそれを守るだろう。

起こっているであろう虐殺を目に浮かべ、魔王は嗤う。

ただ、ひとつ懸念があるとすれば。

来るはずの伝令が来ないこと。

先遣隊の魔族の一部に、作戦の首尾をこちらに伝える任を負わせたのだが。

未だに、彼の元にはやってこない。

しかし、彼に動揺はなかった。

航海の予行演習は、何度となく行つた。

そのいずれもが、問題なく遂行できた。

今回と異なるのは、実際にヒトを虐殺するか否かだけだ。

所詮、彼以外の魔族は、魔物とそう変わらない。

魔族が、初めてヒトを殺したら。

その感触に夢中になって、任務が疎かになつても不思議ではない。

(奴が生きていれば、任せられたろうが……)

昔、一体だけ彼の基準に見合う者がいた。

他の魔族よりも賢く、命令に忠実で、忍耐強く遂行できる部下が。

しかしその者は、ヴェルガイア侵攻の際に失ってしまった。

(仕方がない)

このまま伝令を待っていては、ヒトを滅ぼす絶好の機会を失ってしまうかもしれない。

戦線のヒト共が、後ろを気にする好機。

これを利用しない手はない。

戦線で、偵察を繰り返した結果に照らせば。

仮に援軍がまだでも、問題なく勝てる戦だ。

全てを加味して、彼は結論を下した。

——明日。

ヒトに全面攻撃を仕掛ける。

数の問題でしぶしぶ海を渡らず、こちらに残った者もいる。

皆、鬱憤が溜まっているだろう。

思う存分、暴れさせてやるとしよう。

闇の中で、かがり火が揺らめく。

星々だけが、彼の決定を見守っていた。

## 襲来②

——パチリと。

宵闇の中、ユリヤンは目を覚ました。

「あれ？　まだ朝じゃないよな？」

手を伸ばしてカーテンを開けても、目に映るのは暗がりだけ。

ユリヤンは手探りでランプをつけ、時刻を確認する。

時計は、予定した起床時間よりもかなり早い時刻を示していた。

「なんだ、無駄に早起きしちゃったな」

愚痴るように呟きながら、両手を上げて伸びを一つ。

隣で寝てる女を起こさないように、そつとベッドから降りた。

寝室を出て、顔を洗う。

「……………ふう」

顔を水にひたすと、頭がすつきりした。

昨日までの出来事。

今日の予定。

短期的な目標。

長期的な目標。

脳内に、様々な情報が巡る。

「……そうか、今日はダルケル伯爵との会談だ」

ユリヤンは、戦線の軍備増強をあきらめてはいなかった。

先日の会議で、意見を一笑に付されてから。

すぐに、根回しを開始していた。

四大国家の一角、アルバーナ。

その王子ともなれば、交渉材料は多く持っている。

ユリヤンは持てるカードを駆使して、味方を増やそうとしていた。

まずは、ユリヤンの意見に否定的でない者。

次点で、否定的であつても取引に応じそうな者。

それらを標的に、懐柔していく方針だ。

「今のままじゃまずい。」

魔族はいずれ、攻めてくる」

ユリヤンはこの考えを確信していた。

具体的な証拠はない。

魔族の行動原理など、自分が知る由もない。

自分の意見を否定する者達を、理解さえできる。

——しかし、確信していた。

剣士の勘。

そう言うしかない。

先日の魔族の動きは、絶対に策謀を持つものの動きだった。

「……まあ、今日明日に攻めてくるわけでもないだろうが」

顔を布で拭きながら、ふっと息を吐く。

計画は、年単位だ。

少しずつ、地道に会議の意見を掌握していくしかない。

1000年も攻めてこなかったのだ。

あと数年くらい、もつだろう。

「よっ」

朝日が昇るのを眺めながら、自分を鼓舞するように呟いた。

寝坊がちなユリヤンは、朝日を見るとすつきりと一日を始められる。

いつもと同じく美しい、茜色の空。

しかしなぜか。

その日は、妙な胸騒ぎがした。

午後。

ユリヤンはダルケル伯爵との会談を終え、一息ついた。

交渉の感触は良好だ。

伯爵の出身国であるラーガ王国は、アルバーナの南に位置する。

ラーガ王国は病害で穀物が不作だという話を、以前に寝た女から仕入れた。

そこを材料に交渉し、ほぼ狙い通りに話は着地した。

優先的に穀物の取引を行うと約束すると、伯爵は軍備について前向きな姿勢を見せてくれた。

「……はあ。」

過半数まで、あと何十人だ？」

紅茶を飲みながら、ため息をつく。

まだまだ先は長い。

ラーガなど、小国もいいところだ。

意見を牛耳っている派閥に、入れてもいない。  
これから先。

今日の交渉などより、遙かに困難な説得をしていくことになるだろう。  
場合によっては、武力による脅しも必要になる。

相手は各国の貴族階級。

腹芸はお手の物の、海千山千の権力の亡者達だ。

戦線せんせんにいるのは、もしかしたら左遷人事なのかかもしれないが。

それでも駆け引きの経験は、自分より遙かに豊富だろう。

だが、やるしかない。

じっくりと、時間をかけて、相手の弱みを探っていく。

見つけた弱みに付け込んで、派閥に取り込む。

まだるっこしいが、これが続けていくしかない。

ユリヤンは紅茶に口をつけて、さらに思考を巡らせ。

カップをソーサーに置いた時。

その耳に、聞きなれない音が響いた。

ゴーン、ゴーン、ゴーン。

ゴーン、ゴーン、ゴーン。

ゴーン、ゴーン、ゴーン。

3回1組の鐘の音。

それが何度も何度も、街中に鳴り響く。

ここにいる誰一人として、これまで聞いたことがなかった音。

この500年間、響いたことがなかった音。

響くはずがない音。

——緊急戦闘配備の、合図だった。

「——何があった!?!」

「——状況は!?!」

「——馬鹿な! そんな訳があるか!

もう一度確認しろ!」

ユリヤンが会議室に移動すると、中は騒然としていた。

軍を指揮する立場の貴族たちが皆、真っ赤な顔をして、大声で叫んでいる。

緊急戦闘配備が発令した場合。

兵は直ちに防衛線を敷き、各国の代表はこの場に集まり戦術を論議する。1000年前から、そのように定められていた。

この場合は、この広い要塞都市で最高の意思決定機関。戦線の命運は全て、この会議にかかっている。

その至高の議事堂に。

怒号、叫声が飛び交っていた。

「皆様、静粛に！」

たまらず、議長が声を上げる。

議長は、四大国家の一つ、シャンパーニ王国の王族である。

この男は、議長という地位を利用して、議決を巧みに誘導し続けてきた。

しかしその男も、ついさっきまで慌てふためいて叫んでいたのだ。

むしろ、その議長の態度が混乱を助長したとすら言える。

言葉の重みは、ゼロに等しかった。

変わらぬ喧噪で、各国の代表は騒ぎ続ける。

代表たちは皆、お抱えの偵察員に怒号を飛ばしていた。

偵察部隊は軍属の機関であり、本来なら代表個人に情報を伝えるものではない。

しかし1000年の間に、軍としての機能は腐敗していた。

自国から派遣した偵察員に、各自が自分を優先して情報を回すよう命じた結果が、この騒ぎだ。

「皆様、静粛に！」

静粛に！」

二度目の議長の檄。

あまり効果はない。

しかし大半の者が情報を受け取ったことで、少しずつ場は静まり始めた。

「皆様、お気持ちはわかります！」

しかし、我々には時間がありません！

目の前の危機を、いかにして乗り越えるか！

建設的な話をしましょう！」

お抱えの偵察員達が少しずつ退室していき、徐々に、混乱が収束していく。

喧噪は去り。

今度は、通夜のような沈黙がやってきた。

各国の代表たちは、一様に絶望した顔をしている。

警報が鳴った時から、ユリヤンは何が起こったのか、うつすらと勘づいていた。

そして今、彼らの表情を見て、その考えは確信に変わる。

「……改めて、状況をお話します。

魔族が、攻めてきました。

数は、50万。

もう間もなく、この砦へと到来します」

やはりか、とユリヤンはため息を吐く。

誰もが苦悶の表情を浮かべて、押し黙っている。

「対するわが軍は、30万です。

魔術師が10万、戦士が20万。

各々、部隊を指揮していただくことになります。

総指揮は、バルロワ卿が適任かと……」

「う、うむ……」

齢50のロロ＝バルロワは、この場で最も身分が高く、戦線の滞在期間も最も長い。

魔族の偵察部隊の相手も、この10年以上バルロワが指揮している。

戦線の代表と言って差し支えない。

総指揮に任命されるのは、彼以外ないだろう。

しかし、本人は自身なさげに、口ごもって頷くだけだ。

かつてない規模の、魔族の侵攻。

そんなものに対処できる自信がある者など、この場にいるはずがない。

そして、対処できなかつた場合。

それはすなわち、自分達の死を意味する。

「すでに、兵の配備は完了しています。」

普段と同様の布陣に、この都市の全ての戦力を配置しています。

それでは、何か策のある方は拳手をお願いします」

議長は場を見渡すが、誰一人として手を挙げる者はいなかつた。

ひたすらに沈黙が続く。

ユリヤンも考えをしぼってみるが、何一つ妙案は出てきはしない。

(……ま、そりやそうだ)

ユリヤンは心の中でため息を吐く。

兵数何十万という規模の戦だ。

そこで有効な策など、それこそ何年という単位で準備をしておかなければ、機能する

はずもない。

魔族との戦争など、絵空事であるかのように。

目をそらし続けていた報いが今、やってきたのだ。

「(いんな)となら……」

誰かがぼそりつつぶやいた。

こんなことなら。

こんなことなら、もつと国の予算を戦線に回すべきだった。

もつと、兵の練度を底上げするべきだった。

もつと、備えを講じておくべきだった。

そんな心中の後悔が、皆の顔に浮かぶ。

しかし、今更何を思っても、過去は変えられない。

すでに賽は投げられてしまった。

迫りくる恐怖に、皆が押し黙っている中で。

スツと。

一人の男が手を挙げた。

ユリヤンだ。

「……お、おお。

アルバーナではないか。

貴殿は軍備の必要性を説いておつたな！

先見の明があると認めざるをえまい。

して、何か策があるのか!？」

バルロワが、期待に満ちた声で聞く。

うつむいていたその他の面子も顔を上げ、ユリヤンを見る。

「いえ、ありません。バルロワ卿」

しかし、ユリヤンの返事は期待したものとは違った。

皆がその返事に落胆し。

それなら何故挙手などしたのかと、非難の視線を向ける。

「しかしです、ね皆さん。」

なぜ、そんなに落ち込んでらっしゃるのか。

私には分かりかねます」

ユリヤンが、よく通るはつきりとした声で言った。

「所詮魔族など、取るに足りない下等な生き物だと。

普段から仰っていたではありませんか。

……いえ、私は本心から述べているのです。

数で負けている。

何故その程度のこと、こちらが劣勢だと決めつけているのですか」

聞く者は皆、怪訝そうな顔をユリヤンに向ける。

ユリヤンはなお、堂々と主張を続けた。

「私は今、過去の自分を恥じています。

軍備の増強など、必要なかった。

最近皆様とお話させていただいて、自分の考えの誤りに気付いたのです。

前回の会議で皆様が仰っていたことこそが、まさに正論だったと。

会議で私が言ったことは、的を得ない愚かな意見だったと、考えるようになったので  
す。」

そこで一拍おき、ゆつくりと周囲を見渡す。

そして、皆の意識が完全に自分に向くのを確認し、言った。

「皆様、たかが魔族です。

歴史上、ヒトの英知の結晶たる魔術に、奴らが抗えた試しはありません。

いつものことではありませんか。

やつらは魔術の威力に恐れをなし、なすすべもなく逃げていく。

……まあ、今回は数が多い。

たしかに打ち漏れは出るでしょう。

しかしそこで奴らを待ち受けるのは、各国の粹を結集した屈強なる戦士達です。

あのような下等生物など、一刀のもとに叩き伏せることに疑いの余地はないでし  
う」

ユリヤンの、毅然とした物言いに。

ほんのわずかに、皆の眼に光がともる。

「具体的なお話をしましょう。」

50万の魔族のうち、30万は魔術の弾幕を躲せずに死ぬでしょう。

近づけるのは、20万。

例え数が同じでもこちらが勝つというのに、20万対30万の勝負です。

負ける要素がないではありませんか」

ユリヤンは両手の平を見せ、笑いながら言った。

そんなに、うまくいくわけがない。

多くの者がそう思った。

しかしその反面、気づいた。

そのようにならないという根拠もまた、ないことに。

この場の誰もが、魔族との戦争の経験などないのだ。

しかし普段の戦闘の様子を考えると、こちらが有利に思えなくもない。

皆の腰が引けている最も大きな理由は、「経験したことがない」ということなのだ。

「確かに、かつてない規模の戦闘が予想されます。」

しかしそのことで皆様、浮き足立っておられるようだ。

長く戦線にいと、前例のないことがそれほど恐ろしく映るのでしょうか。私のような新参者には、分かりかねますね。

これから始まるのは、いつもと何の変りもない、ただの狩りですよ。

それとも、まさか本当に、魔族に怯える臆病者しか、この場にはいないということですか？」

ユリヤンは、相変わらず笑みを浮かべたまま。

会議の場ではありえないような暴言を吐いた。

「ふざけるな！」

「若輩が！ 調子に乗るな！」

「我らがどれだけの時間、奴らと相對してきたと思っている！」

押し黙っていた面々が、急に騒ぎ出す。

その目には、先程まではなかった闘争心が宿っていた。

「……いいだろう。」

いや、貴卿の言う通りだ。

……皆の者。

我らの力、調子に乗った魔族に知らしめてやろうではないか！」

バルロワが叫ぶ。

その顔には、先程までの動揺はなく。

覚悟を決めた表情に変わっていた。

「――魔族を滅ぼすぞ！」

バルロワの雄たけびに。

その場の全員が、大音量の返事で応えた。

## 戦争①

大陸西端の城壁。

それは、ヒトのつくった最大の建造物である。

他の都市とは比べ物にならないほどの堅牢さ。

端まで一度に視界に収めることが難しいほどの大きさ。

いかな達人であつても、独力で登ることができない高さ。

その全ては、魔族からヒトを守るために存在する。

その壁上に、都市中から集めた魔術師達はずらりと並んでいた。

魔術師達は皆緊張した面持ちで、彼方に上がる土埃を見つめている。

城壁の端には海が。

城壁の内には街が。

城壁の外には荒涼とした大地が広がっている。

その大地を、幾多の靴裏が踏みならしていた。

城壁の前に、20万の兵が並んでいた。

各師団は1万ほど。

それが正方形の形をとり、整列している。

そのうちの一つは、アルバーナの兵。

ユリヤンのものである。

ユリヤンは師団の後方で、騎兵が引く神輿に乗っている。

熟練した戦士なら、馬に乗るよりも走ったほうが速い。

なので、馬を育てるよりも戦士を育てたほうが、コストパフォーマンスがいい。

そのため騎兵はほとんどいないが、このように何かを運ぶときには重宝される。

ユリヤンが乗る神輿は、高さ3メートル以上あり。

兵の頭を追い越して、奥の大地と海が見えた。

そこにかすかに、黒い粒のようなものが動くのが見える。

あれが、魔族の大群なのだろう。

(……さて、どうしたもんか)

ユリヤンはため息を吐いた。

ヒトの存亡を賭けた戦い。

その英雄願望ヒロイズムをかきたてる響きによるものか。

兵の士気は、予想よりも高かった。

さらに会議での発破が効いて、指揮官達のやる気も上々だ。

迎え撃つ態勢としては、いい状態といえる。

しかしユリヤンは、冷静に戦力差を分析していた。

(恐らく遠方からの魔術で倒せるのは、1割程度だろう。)

そして近接戦闘では、一対一で魔族に勝てない者が大半だ。

戦力で不利、数でも不利となると……)

状況は、絶望的だった。

会議室で言ったことは、殆どが嘘だ。

せめて、士気だけでも上げなければと吐いた方便。

魔族の偵察部隊との戦闘で、魔族の力を見極められたのはユリヤンだけだった。

指揮官は皆、ユリヤンほどに剣技をおさめていない。

自分以外に魔族の戦力を分析できる人間がいなかったから、通った嘘だ。

実際のユリヤンの読みは、伝えたものよりも遥かに厳しい。

奇跡でも起きない限り、負け戦だ。

しかしヒトの負け戦と違い、白旗に意味はない。

魔族に負けるといふことは、すなわち滅ぼされるといふことだ。

「……あんまり、未練とかはないな」

周囲に聞こえないよう小声で、ぼそりと呟く。

ユリヤンは、ここが己の死地だと確信した。

徐々に近づいてくる魔族の姿は、そうさせるだけの圧倒的な力を迸らせている。

こちらの戦略は、とにかく接近される前に、魔術を打ち込むことだ。

魔族には、遠距離攻撃の手段がない。

つまり、やつらが近づいてくる際には必ず。

こちらの攻撃だけが通るタイミングがある、ということだ。

当然ながら、その時間が長いほど、こちらに有利に働く。

なので、兵は壁の近くに固まって布陣している。

こちらに近づかれる前に、魔術でできるだけ数を減らす。

ヒトに残されたのは、ただそれだけの、シンプルな作戦のみだった。

魔族が、遠方で整列を始めた。

魔術が届かない、ギリギリの位置だ。

それを見て、ユリヤンは舌打ちをする。

完全に、こちらの射程距離を把握されている。

あの偵察部隊は、しっかりと仕事をこなしていたらしい。

遠くから、声が聞こえる。

先ほど会議に参加していた師団長達が、大声を上げていた。

兵の士気を高めるためのものだろう。

地鳴りのような足音に負けずに、ユリヤンの耳まで届いてくる。

その声を聞き、ユリヤンもゆっくりと剣を抜き、天に掲げ、叫んだ。

「各自！」

これは歴史に残る聖戦！

勝利すれば、全ての者が英雄だ！

敗北すれば家族、友人を含め、全てのヒトの命はないものと思え！」

「オオオオオオオオオッ!!」

兵達も一斉に剣を掲げ、叫んだ。

腹の底に響くようなすさまじい音量が、大地をも震わせる。

平時では絶対に見る事のない、命を刈り取るために存在する巨大なヒトのうねり。

「願わくば、我らに武運があらんことを」

ユリヤンは湧きたつ部隊を見下ろしながら、ぼそりつつぶやいた。

気付けば、魔族が整列を終えていた。

奴らもおぞましい声で、何かを叫んでいる。

しばらくして、相対する両陣営から声がなくなつたとき。

ついに、先頭の魔族が駆けだした。

戦が、始まった。

魔族は、部隊を無数に分け。

小隊を、一つずつ接近させていく作戦を取っていた。

一度に近づいてくるのは、1000程度。

それらが順次、すさまじい速さで駆けてくる。

魔術は、数に限りがある。

効果範囲にいる敵が少数では、コストパフォーマンスが悪い。

それは完全に、魔術の特性を見切った攻め方だった。

「魔術部隊第一陣の一、てえー！」

壁上で、バルロワが叫ぶ。

バルロワにしてみれば、魔族がそんな策を弄してくるなど、前代未聞だった。

魔族が整列をしている様子にすら驚いたのだ。

魔族の戦法など、一斉に駆けてくるだけだと思っていた。

しかし、彼のこれまでの戦の経験が、状況に対して的確な判断を下した。

敵に倣って魔術部隊を小分けにし、一度に使用する魔力を抑えることにしたのだ。本来の第4陣までの構成を、それぞれ10個に分割して40個という数にした。これで、想定の10倍の時間、魔術を行使できる。ただ。

その分、接敵までに減らせる魔族は少なくなってしまう。

しかし、例えば1000体全てが近づいたところで、こちらの戦士は20万だ。大で小を討つのが、戦の基本。

20万対10000で戦うなら、こちらの被害はやつらよりも少ないはずだ。

「皆、耐えてくれ」

まもなく、敵の先陣がこちらの先頭にぶつかる。

断続的にやってくる1000体の魔族に魔術を浴びせながら、バルロワは祈るように呟いた。

---

戦闘開始から、1時間ほどが経過した。

城壁の前に、ずらりと並んだヒトの兵達。

その隊列の先頭から約20メートルほどの領域。

そこが、近接戦闘の舞台になっていた。

魔族の接近を目視すると同時に。

その5倍の人数が隊列から抜け出し、迎え撃つ。

これは、ユリヤンが考案した作戦だった。

その目的は、魔族に対して数的優位をとって戦闘を行うこと。

敵の正面にいる者は受けに徹し、攻撃は背後から行う。

意外なことに、その作戦がハマっていた。

今のところ、かなり少ない被害で対処することができている。

場合によっては、一人の犠牲者も出さずに魔族を一体狩ることもあった。

魔族との接近戦は、ユリヤンの想定よりもはるかにマシな状況で進行していた。

このまま、しのぎ切れるのでは。

ユリヤンが淡い期待を抱いた時。

魔族が、想定外の行動に出た。

接近して囲まれるやいなや。

跳んだのだ。

魔族の跳躍は、高さ10メートルを超える。

包围する前衛を躲し、整列した部隊の中央付近まで一気にやってきた。

それは通常であれば、落下地点に剣を置いておくだけで対処できる行動だ。

しかし、魔族には翼があつた。

飛翔することはできなくても、跳躍の軌道を変えることはできる。

魔族達は、巧みに剣の茨をかいぐり。

師団の中央付近まで、跳んできた。

だが、その行動に意味はあるのか。

魔族にしてみれば、さらに敵が多い陣地に、単身乗り込んできたようなものだ。

ほどなく倒されてしまうのが関の山。

そう思われたが、違った。

魔術の効果範囲を広げるため、部隊は密集せざるを得なかった。

前衛を飛び越して来られると、剣を振るうスペースがない。

隊列の中央では。

同士討ちを避けると、満足に攻撃ができない状況だった。

対して、魔族にしてみれば、周りには敵しかいない。

手当たり次第に爪と牙を振るい、火を吐くだけで。

多くの戦力を削ぐことができた。

跳んできた魔族は、いずれは兵に包囲され倒れる。

しかし、魔族一体に対してヒトはその5倍以上の兵を失っていく。

自分の命を顧みず、どんどん跳んでくる魔族。

それにより確実に、兵の数が減っていく。

たまらず、ユリヤンは号令を出した。

「全軍に告ぐ！」

前100列目までの者は、100から列の数を引いた歩数だけ前進せよ！」

対応としては、兵の間隔を空けること。

その分魔術の効果範囲は減ることになるが、現状よりはマシだと判断した。

各師団長も、その作戦に乗ったようだ。

軍全体に指示が伝わり、ゆっくりと戦線が押し上げられる。

魔族が跳躍できる最大距離以上に部隊を引き伸ばすと、魔族は跳躍を控えたようだった。

「よし、これで——」

これで、もとの状況に戻った。

ユリヤンはそう言おうとした。

しかし、言葉は出てこなかった。

明らかに、最初とは状況が異なっていた。

戦線の魔族の数が、明らかに増えていた。

無論ヒトの方が多いが、5人で一体を包囲しようとするれば、空間が足りない。

魔族を包囲したはずが、そのうちの一人が後ろから別の魔族にやられるような状況が増えている。

戦闘可能な空間に敵味方が入り乱れ、乱戦という他ない状況だ。

「くそっ！」

跳躍に対応している間に、多くの魔族の接近を許してしまっていた。

いずれこの状況になることは分かっていた。

しかしその前にもう少し、魔族の数を減らしておきたかった。

包囲できないことで、魔族を倒す速度が落ちる。

しかし戦線へと到着する魔族の数は変わらない。

結果、戦線の魔族の密度が増える。

それによってさらに、魔族を倒す速度が落ちてしまう。

魔術に被弾して倒れる魔族は、1割もない。

小隊に分けて突入してくることが効いている。

しかしそれにより、接近戦では有利になるはずだった。

だというのに、前線に魔族が増えたことで、ヒトは接近戦でも優位をとれなくなってしまうた。

前線で倒れていく割合は、魔族1体に対してヒト5人といったところだ。

魔族50万に対して、ヒトの兵士は20万。

どう考えても、魔族よりも先にこちらが力尽きる計算になる。

もちろん、局地的には勝っている所もある。

練度の非常に高い兵士達や、各流派の皆伝級の剣術家達は、次々と魔族を屠っている。

中には、一人で50体以上の魔族を狩る猛者もいる。

しかし、それはあくまで局地的なものだ。

戦の全体の流れは、確実に魔族へと傾きつつあった。

隊列の厚みが減り、前線はジリジリと城壁へと近づいていく。

すでに、兵の3分の1ほどが失われてしまった。

「くそっ！」

ユリヤンはたまらず、御輿から跳躍した。

向かう先は戦線。

指揮は副官に任せる。

指揮官として出せる命令は、もはやない。

ならば最前線こそが、ユリヤンのいるべき場所だった。

50メートル以上の距離を一足で駆け、ユリヤンは戦線へと降り立った。着地したその脚で踏み込みを行い。

居合で、一体の魔族の首と胴を切り離した。

続いて、背後からの一撃をかわしてその腕を斬る。

魔族はおぞましい声をあげて、出血する両腕を見ていた。

そいつにとどめを刺した後、周囲を確認する。

そこには、地獄のような光景が広がっていた。

至る所に、ヒトの腕や、脚や、首や、はらわたが散っている。

全ての地面は、血液で赤黒く染まり。

至る所から死臭がする。

その中で、死体を踏み潰しながら、皆戦っていた。

ここで敗北すれば、この光景が大陸の全ての国で引き起こされる。

そう考えると、ぞつとした。

ユリヤンはこの戦いに対して、半ば投げやりな感情を持っていた。

戦力で明らかに負けており、それを覆す作戦も用意できない。

そんな状況で、勝てるわけがないのだと。

それは今に至っても、事実だったといえる。

事実として、現状は絶望的で、勝利の目はないに等しい。

……しかし。

しかし、どうあつても、この侵略を許すわけにはいかない。

そう、強く思つた。

これまでの人生、物事にあまり執着せず、飄々と生きてきた。

いつ死んでも、それほど悔いはないと思つていた。

この戦が死地なら、それも仕方ないと思つていた。

だが、この光景だけは、許すことができない。

祖国であるアルバーナ。

生まれ育つたアバロンの街。

あの美しい街並みや白亜の城が。

こんな景色に変貌するなど、絶対に許せない。

飄々と生きてきた自分に。

これほど祖国への愛着があるとは、意外だった。

「らあああああつー！」

その感情に突き動かされるままに。

ユリヤンはひたすら、剣を振るつた。

## 戦争②

どれだけの時間、戦っただろうか。

鎧は返り血で赤く染まり。

剣を握る手の感覚はもはやない。

膝は疲労でガクガクと笑い。

目の前の光景の非現実感に、頭の芯が痺れている。

しかしそれでも、ユリヤンは魔族を屠り続ける。

倒した魔族は、100を優に超えている。

これほど長く戦い続けられたのは、この広い戦場においてユリヤンただ一人だった。

どんな達人も。

次々と迫る魔族に一人、また一人と倒れていった。

もはや、身体を動かす感覚はない。

剣を振るうことすら、考えていない。

刻一刻と変化する目の前の状況に、ただ反応しているだけだ。

アルバーナを護りたい。

ユリヤンに初めて訪れた、喉の奥を焼き焦がすような渴望。それがなければ、とうに倒れていた。

その感情のみが、ユリヤンをいまだに立たせている。

だが無意識の奥底で、ユリヤンは確信していた。

——今こそが、自己の剣技の到達点だと。

ユリヤンの半生は、剣とともにあった。

神童と呼ばれ、その力に期待されて育った。

剣は、考えれば考えるほど、良くなった。

何度も何度も繰り返ししながら。

完璧な動作を探し続けた。

10歳で道場の免許皆伝を得た後も、その探求は続いた。

しかし、ある時。

自分の成長が全くないことに、気づいてしまった。

理想と自分の間には。

どうしても埋めることのできない、ズレが存在した。どれだけ考えても。

何百万回と素振りを繰り返しても。

どうしてもそのズレを埋めることはできなかった。

少しだけ、ユリヤンは剣から遠ざかった。

鍛錬を怠ったことはない。

旅の最中であつても、女を抱いた日も、一日も欠かさずに素振りをした。

しかし、その目的は変わってしまった。

高みを目指すことから、現状を維持することへと。

そこが、自分の限界なのだと考えていた。

気の遠くなるような時間を費やしてもダメだったのだ。

理想は、届かないからこそ理想なのだろう。

いつしか、そんな風に考えるようになっていた。

どれだけの鍛錬を行なつても、これ以上の技は会得しえないと。

——しかし、今。

理想と現実が、一致していた。

思い描く理想と、寸分たがわぬ動作で剣が振れる。

これまでならとうに力尽きているはずなのに、まだ戦うことができる。思考と試行。

それを重ねるほど、剣は良くなるものだと思っていた。

これまでの半生は、ずっとそうやって鍛錬していた。

それによつて、剣の頂まで上り詰めた。

しかし皮肉なことに、それこそが足枷になつていたので。

戦いの中で、思考は刹那の時間を身体から奪つてしまう。

完璧な動作とは、思考しないことで初めて成り立つものだったのだ。

無論、常人であれば、戦いの中で思考を放棄することは愚の骨頂。

右に避ける、左に避ける。

上から斬る、下から斬る。

右足を出す、左足を出す。

いつ、どこで、どのように身体を動かすのか。

戦いとは判断の連続。

思考というプロセスがなければ、ただの的になるだけのはずだ。

だが、天賦の才と捧げてきた膨大な年月が、それを可能にした。

完全に思考を放棄し、身体の反応に身をゆだねる。

ひたすらに繰り返した動作は、脊髓反射で行うことが可能になっていた。身体は目の前の状況に的確に反応し。

敵を倒すための最適な動作を取り続ける。

まさに今。

武の極致ともいえる領域に、ユリヤンはいた。

——まだ負けない。

——まだ戦える。

自分一人でも残っていれば、ヒトは負けない。

そんな思いを胸に、鋼の意志で戦い続けるユリヤンの耳に。

突如、奇妙な声が聞こえた。

「——ほう、やるではないか。ヒトの分際で」

底冷えするような、不吉な声。

完全な反射で、ユリヤンはその発生源から距離を置いた。

魔族の声は、ひたすらに不快だ。

鼓膜の振動を止めたくような。

嫌悪感をかきたてる声を、魔族は出す。

しかし。

今ユリヤンの耳に届くその声は、それとは全く違った。

「矮小な存在でありながら、我が同胞をこれほどに圧倒するとは。興に乗った。」

私が直々に、相手をしてやろう」

その響きに、不快感はない。

すんなりと、耳の奥へと侵入する。

しかしその音が向かうのは、脳ではなく腹の底。

身体が芯から凍り付くような寒気に、全身が粟立つ。

——恐怖。

それはまさに、恐怖を具現化したかのような声だった。

「何者だ、貴様は……?」

思わずユリヤンは問いかける。

気づけば、ユリヤンに襲い掛かっていた魔族は退いていた。

その存在の背後に回り、膝を折っている。

まるで、騎士が王に頭を下げるような動作。

そのしぐさは、明らかに上位の存在に対するそれだった。

「私は、魔族を統べるもの。」

そして、貴様らヒトを滅ぼすもの。

魔王と、そう呼ぶがいい」

そう言つて、魔王と名乗る存在は嗤つた。

それは、この世界の全ての不吉をはらんだような音。

他の魔族よりも遥かに大きな体躯。

歴戦を思わせる、厚い鱗。

灰白色の鋭い爪。

その全身から、圧倒的な負のエネルギーがほとばしっていた。

——即座に。

ユリヤンは駆けた。

その存在を殺すために。

それは、かつてないほどに研ぎ澄まされた踏み込み。

それはこの戦いの中において、最高のパフォーマンスだった。

まさに完璧な動作で。

ユリヤンは魔王に迫り、その首に切っ先が吸い込まれる。

速度は、すでに音を超えていた。

しかし。

魔王は事もなげに、爪でその剣を受けた。

ギーン！ と鋭い音が響き、衝撃波で土が舞う。

「悪くはない。」

で、次はどうする？」

問いに対する答えなど、ユリヤンは考えもしない。

ただ、反応に身を任せるだけだ。

鋭利な刃のぶつかり合い。

聴覚を引き裂くような音が、絶え間なく響く。

常に攻めているのはユリヤンで、受けているのが魔王。

ユリヤンの猛攻を、魔王は防ぐことで手一杯。

そんな風にも見える。

……だが、事実はそれと異なった。

「ほら、そんなものか？」

魔王はその不吉な声に、揶揄するかのような調子をにじませて言う。

魔王の言葉は全て無視して。

ユリヤンは冷徹に、最適な動作を繰り返し返していた。

瞬きの間に、刃と爪が何度も交差し、そのたびに火花が散る。

そんな壮絶な打ち合いの中においてなお、魔王はユリヤンを<sup>からか</sup>擲<sup>か</sup>搦う余裕があった。対して、ユリヤンの表情は悪い。

技の精度は落ちていない。

かつてない、自己最高の剣技を繰り出し続けている。

だというのに、その全てが防がれる。

腕を、脚を、胴を、首を。

斬ったと確信した一太刀が、その刹那、鋭利な爪に阻まれている。

少しずつ、吞まれそうになる。

打ち合うたびに生まれる、胸の内の黒い感情に。

敗北の二文字に。

「うおおおおおっ！」

振り払うように、ユリヤンは叫んだ。

矢のような跳躍。

大上段から、魔王の肩を目掛けて、剣閃が走る。

「……もういい。終いだ」

ギインツ！ と、一際高い音が鳴り響いた後。

魔王は言った。

ユリヤンの自己最速の一撃は、軽々と防がれた。

打ち込みの反動で止まったユリヤンの右腕が、魔王に掴まれる。

ユリヤンはとっさに剣を左手に持ち替え、魔王の首を狙う。

しかし、その刃を走らせる前に。

ユリヤンの身体が宙に浮いた。

景色が回る。

魔王は、つかんだ右腕を支点にして。

ユリヤンを宙で振り回していた。

そしてそのまま、地面にたたきつける。

「ぐあっー」

ユリヤンはすさまじい速度で地面と激突し、思わず声を漏らした。

鎧の一部は砕け、肋骨が何本か折れた音がした。

……しかし、まだ終わりではなかった。

それから何度も。

魔王は同じ動作を繰り返した。

つかんだ右腕を鞭のように振り回し。

ひたすらに、ユリヤンを地面にたたきつける。

一度、二度、三度、四度。

十度以上繰り返して。

魔王はふと、飽きたように動きを止めた。

それは、一瞬の出来事だった。

「ほう、まだ剣を手放さないか」

その一瞬のうちに。

鎧は全て砕け散り。

ユリヤンの体中の骨は折れ。

そのいくつかは内臓に突き刺さった。

目、耳、鼻、口から多量の血が流れ、ブロンドの髪は泥と血で赤茶色に染まった。

ヒトとしての機能の多くが失われてしまった、ぼろ雑巾のような風体。

それでもユリヤンは、左手の剣を離してはいなかった。

「ハハハ、面白いぞ。」

それならば、こうしてくれよう」

魔王は愉快そうに嗤い、ユリヤンの左腕を掴む。

脚でユリヤンの胴体を踏みつけ、左腕を引っ張った。

左腕はピンと引き延ばされ、関節がミシミシと悲鳴を上げる。

魔王はさらに力を加え、皮膚が裂けるように出血した。それでも魔王は、力を緩めなかった。

「ぐおあああつー！」

ついには、ユリヤンの左腕が、ブチブチと音を立てて千切れた。おびただしい量の出血が溢れる。

魔王は、ゴミを放るように、その腕を投げ捨てた。

「ファ、ファイア……ぐうっ！」

とっさに、ユリヤンは傷口を燃やし、出血を止める。

激的な痛みが、傷口から体の芯に駆け抜けた。

「……フツ。」

貴様、まだ、生き延びる気にいるのか。

ここまでくると、滑稽を通り越して哀れに見えるな。

諦めなければ勝てる、とでも思っているのか？」

魔王は、ゆっくりとユリヤンに近づいた。

もはや立つことすらできないユリヤンの頭を、乱暴に持ち上げる。

「見ろ。」

「これがお前の、戦いの結末だ」

ユリヤンの網膜に飛び込んできた景色。

それは、絶望と呼ぶ他になかった。

城壁に無数の魔族が取り付き。

壁上の魔術師へと、襲い掛かっている。

じりじりと。

戦線を押上げてきた魔族。

そしてついに、城壁が跳躍で届く距離に来てしまっていた。

魔族が次々と、城壁へと跳びついていく。

魔術師達は、接近戦において無力に近い。

100に満たない魔族ですら、壁上の魔術師を皆殺しにできるだろう。

一応、護衛の戦士はいるが、あの状況で守り切れるわけではない。

魔術師がやられ、魔術の牽制がなくなれば、控えている魔族が一斉に押し寄せてくるだろう。

そうなったら、何もかもが終わる。

命を賭して、それぞれの守るべきもののために戦っていた兵達。

周囲の者が次々と死んでいく現実を前にして、それでも必死で戦っていた。

ほとんどの者は、魔族の残数など分かってはいない。

目の前の魔族は次々とやってくる。

あとどれだけ戦えば、魔族に勝てるのか。

終わりの見えない戦いに摩耗した心。

それをへし折るには、その光景は十分だった。

兵の士気は、落ちるところまで落ちていた。

「やめてくれ！」

「殺さないで！」

「いてえー！ いてえよおー！」

そんな悲鳴が、辺りから響いている。

それはユリヤンの心にも、絶望をもたらした。

これまで、限界を超えて戦ってきた。

大局で不利なことは理解していた。

だからこそ、自分を奮い立たせて戦った。

数で不利なら、自分一人で魔族を皆滅ぼしてしまえばいい。

そんな信念を自分の背骨にして、なんとかこれまで戦ってきた。

だが、ユリヤンは魔王に敗北した。

左腕も失い、身体も満足に動かさず、もはやできることは何もない。

せめて残る者達に望みを託そうと、最期に見た光景がこれだった。

「くっ、くっ……」

瞳から、涙が零れた。

自分は無力だった。

まもなく城壁は突破され、大勢の人が死ぬ。

そして遠からず、アバロンの街並みも、戦火に焼かれてしまう。

自分は何一つ、守れなかった。

「理解したか？」

……では、死ね」

魔王が、ゆっくりとその爪を振り上げる。

これまでの人生が、走馬灯のように駆け巡る。

両親のこと。

兄弟のこと。

抱いた女のこと。

最期に頭に浮かんだのは。

一人の、友達のことだった。

もしかしたら、ユリヤンの人生で唯一の、友達。

何の気も使わずに一緒にいられるのは、あいつだけだった。

あいつだけは、王族である自分に、等身大で接してきた。

単に常識がないだけなのかもしれない。

だが、うれしかった。

あいつとの旅は、楽しかった。

あいつはまだ、アバロンにいるのだろう。

こんなことになって、申し訳ない。

できることなら、魔族の手を逃れてほしい。

そう、最期に祈った。

——その時。

全てを諦めて、空を見上げたユリヤンの目に。

一筋の光が、走るのが見えた。

「ぬ？」

その光に、魔王も気づく。

晴天の青い空を切り裂いて。

流星のような光芒が、駆け抜けていた。

まるで、時が止まったかのように。

戦場の誰もが、それを見上げた。

城壁から伸びたその光は、まっすぐに進み。

一瞬の後に。

魔王軍の本陣に、落ちた。

最初に生じたのは、閃光。

網膜を焼くような強い光が、戦場の全てを照らした。

続いて地響きのような轟音がうねり、腹の底まで響き渡ると同時に。

すさまじい突風が吹き、ユリヤンはなす術なくゴロゴロと転がった。

何事かと。

それらがもたらされた方向を見る。

そこには。

キノコのような形をした巨大な雲が、見える景色全てを覆っていた。

「馬鹿な！」

あの魔術は、エドワードの!?

いや、あれよりも遥かに強力な……」

ユリヤンは初めて、魔王が焦った声を出すのを聞いた。

どうやらこの現象は、やつらにとっても予想外らしい。

とういうことは。

この、見たままの情報も、信じていいのなら。

あの光は。

——魔族の本陣を、壊滅させたに違いない。

「一体、誰が……」

血を吐きながら、ユリヤンは歓喜する。

あれが魔族の作戦でないのなら、形勢は逆転したといっている。

今の状況なら、生き残った魔族の数よりも、ヒトの方が圧倒的に多いはずだ。

戦場に立つものが皆、茫然としている。

魔族も、ヒトも。

今はまだ、気づいていない者が大半かもしれない。

しかし時間が経てば、理解するはずだ。

戦局が、どちらに有利に動いたのかを。

しかし、一体誰が、どうやったのだろうか。

自分が知っている最高の魔術よりも、はるかに強力なものだった。

魔術というよりも、神の鉄槌とでも呼ぶ方がまだしっくりくる。

あれをヒトが起こしたという仮定に、現実味がない。

まさか神が、ヒトを憐れんで味方したとでもいうのだろうか。

「まあ、俺が考えても仕方ないか……ふっ」

ユリヤンの口から、多量の血液が吐き出される。

折れた肋骨が、肺に突き刺さっている。

気胸と肺胞出血の併発で、呼吸機能はほとんど残っていない。

まさに、虫の息といったところだ。

さつきは奇跡的に死を免れたが、いずれにせよもう永くない。

……まあいい。

一切の希望なく、絶望だけに染まった死に際のはずだったのだ。

それが最後の最後に、一縷の望みをつなぐことができた。

十分、マシなほうだろう――。

それ以上の思考を放棄するように。

ユリヤンは、そつと目を閉じた。

……身体が暖かい。

全身を覆っていた痛みや息苦しさが、徐々に薄れていくのを感じる。

これが、死というものなのだろうか。

だとしたら、そう悪いものではない。

意識はある。

思考することはできている。

ということは、死後の世界というものも、存在するのか。

これから自分はどうなるのだろうか。

戦場で散った魂は、天からの使いが導いてくれるという。

目を開ければ、天使がお迎えに来てるかもしれない。

こんな時だけ信心深くなる、自分の考えに苦笑しつつ。

そつと、ユリヤンは目を開ける。

——そこに、天使がいた。

白銀の髪を二つに結んだ、少女のような見た目をしている。

天使は美しい顔立ちを、心配そうに曇らせて。

なにやら自分に手をかざしていた。

こんな美しい天使に導いてももらえるなら、死ぬのも悪くはないな。

そんなことを思いながら。

ユリヤンはまじまじと、天使の顔を見つめる。

……ん？

この顔、なんか見覚えがあるような。

以前に見た時より成長してるけど、アバロンの酒場で一緒に飲んだ気がする。

あれ……？

「……エミリー？」

天使はハツとした顔で、こちらを見た。

「ユリヤン殿下！ 気が付かれましたか!？」

心配そうに、自分に声をかけてくる。

やはり、エミリーで間違いないようだ。

……おかしいぞ。

そう思い、改めて周りを見る。

天国だとは絶対に思えない、死体の山。

その中で、魔族とヒトが争いあっている。

目を閉じる直前に見た光景と、何も変わっていない。

「俺は、もしかして。」

……生きている、のか？」

痛みも、息苦しきも、疲労すらも、完全に消えている。むくりと起き上がって、両手を見る。

魔王に引きちぎられたはずの左腕が、そこにあつた。

「これは……?」

「殿下の左腕は、私が治しました。」

欠損部が見当たらなかったので、聖級治癒魔術を使用しました」

「聖級!」

そんなもの、あるはずがない。

魔術は、全て上級までだ。

聖級魔術など、伝説にしか存在しないし、ましてやそれを使える者などいるわけがない。

「……殿下、目を覚まして早々に申し訳ないのですが。」

まだ戦いは終わってません。

どうか、お力をお貸しください」

ユリヤンの戸惑いをよそに。

天使……もといエミリーが、切迫した様子で言う。

確かにその通りだ。

とにかく、左腕はある。

過ぎたことを考えても仕方ない。

今なすべきことをしなければ。

「すまない、もう大丈夫だ。

礼を言う」

ユリヤンはすぐさま、戦場に舞い戻ろうとした。

が、エミリーに止められた。

「先程の爆発。アレを成したのはハジメです」

「何?!」

その言葉に、ユリヤンは驚愕する。

あの爆発がもたらしたのは、ヒトへの巨大な戦果だ。

ならば確かに、その遂行者もヒトであると考えるのが自然だろう。

だが、軍の者ではない。

軍に属する者ならば、開戦と同時に放っているはずだ。

軍属でなく、突如戦場に現れたエミリー。

腕を再生するほどの治癒魔術を扱えることから、発言の信憑性は高い。

もともと他の可能性など、神の鉄槌などという夢想しか浮かばなかったのだ。

なにより、エミリーは、一度杯を交わした友人だ。その言葉を疑う余地はない。

だとしたら、アレはやはり、ハジメがやったことなのだろう。

「この場を凌ぎ、のちに魔族をせん滅するうえで。

彼は、ヒトの希望と言える存在です。

どうか、殿下の剣でお守りください」

真剣な表情で、エミリーが言う。

「わかった。

それで、ハジメはどこに？」

「殿下のすぐ後ろです」

言われて、ユリヤンは振り返る。

なんとすぐ近くに、ハジメがいた。

クリスと思われる剣士もそばにおり、あの魔王と対峙している。

「っ！

なぜ俺は気づかなかった！」

これほど近くにあの魔王がいれば。

本来ならすぐに、その気配を感じるはずだ。

だがその存在を視認した今になっても、気配を感じ取れない。これは戦場において、致命的だ。

「殿下、それは魔術によるものです。」

今この場合は、私の結界により隠蔽されています。

こちらから働きかけない限り、周囲の者には気づかれません。

同時に、こちらからも気配を感じとれなくなります」

ユリヤンの焦りは、エミリーの言葉で解決した。

「……わかった。」

では今から、結界を出てハジメに加勢する。

俺を治してくれた君の望みは、それでいいか？」

「はい。」

……ただ、最後に一つだけ」

エミリーはそう言って、ユリヤンに向けて杖をかざした。

「古の羅針盤。その正体を我は知りたり。」

其は生命の螺旋。力の結晶。

守護の英霊をその身に宿せ。

——エンチャント」

エメラルドグリーンの光がユリヤンを包む。

「なんだ、これは!？」

その光を浴びてから。

明らかに、身体感覚が鋭くなった。

胸の芯から湧き出るような、活力が全身にみなぎる。

全能感が意識を覆う。

「この1000年の間に、エルフの里で発見された魔術です。

一時的に、身に宿る魔力を活性化して、身体能力を強化します」

エミリーが、少し疲れた様子で言う。

この日、強化魔術をかけるのは、自分、クリス、ハジメに次いで、ユリヤンで4人目だ。

そのうえ治癒、結界魔術まで使用している。

それらによって、彼女の魔力は危険水域まで減少していた。

「ははっ。

……これならば、あの魔王とも渡り合えそうだ。

エミリー、礼を言う」

「武運を。殿下」

ユリヤンは、放たれた矢のように結界から飛び出し、  
ハジメのもとに向かった。

自分の命を、そして世界を救ってくれた、無二の親友のもとへ。

## 戦争③

〈ハジメ視点〉

むせかえるような血の匂い。

見渡せば、赤黒い大地と死体の山。

目を覆いたくなるような、悲惨な光景に。

悲鳴と雄たけび、剣戟の音だけが響き渡っている。

そして。

目の前には、巨躯を湛えた一体の魔族。

他の魔族とは比べ物にならない、圧倒的な威圧感をたたえた存在が、俺に問う。

「……貴様、何者だ？」

……今、この瞬間のために。

きつと俺は、生まれてきたのだ。

「俺の名は、ハジメ。レオナルド。ヴィルガイア。」

お前らに滅ぼされた、ヴィルガイア王家の末裔だ」

俺はこの日。

生涯の敵と向かい合った。

2か月前。

エミリー、クリスと共に戦線へと向かうことを決めた後。

転移魔術でアバロンへと移動した。

転移魔術は、認識できる範囲内か、行ったことがある場所までしか使用できない。なのでアバロンへ転移した後は、普通に馬車で移動した。

アバロンから、ひたすらに西を目指し。

3つの国を超えて、ようやく戦線へとたどり着いた。

俺達がたどり着いた時には、すでに戦いが始まっていた。

エミリーに、強化の魔術をかけてもらった後。

避難する住民をかき分けて、戦場へと急いだ。

この戦場において、敵か味方かを見分ける術は、ヒトか魔族かで十分だ。

ヒトである以上、俺たちは味方と認識される。

誰にとがめられることもなく、城壁の上へとたどり着けた。

そして、俺達が壁上にたどり着いた時。

すでに戦況は、圧倒的に不利だった。

壁の上からは、全体を俯瞰できる。

魔術の届かない場所に、蟻の大群のように魔族がひしめいている。

対して、地上で戦うヒトはその10分の1にも満たない。

壁上の魔術師を加えても、圧倒的に数で負けている。

そのうえ。

魔族が城壁へと、次々と跳んできていた。

周りの魔術師達は、その対応に慌てふためいている。

思った以上に、やばい状況だった。

ヒトの敗北寸前といった様相だ。

急いで駆けつけてよかった。

この防衛線が決壊したら、東の大陸に魔族がなだれ込む。

そうなれば、空前の大量虐殺だ。

ニーナやシータにも危険が及ぶかもしれない。

そんなことには、絶対にさせない。

「クリス、魔族が近づいたら、防衛を頼む」

「了解した」

その言葉だけで、クリスは俺が何をやる気か分かったようだ。

まあ、当然か。

大陸の東端で行ったことを、今度は西端で行うだけだ。

聖級魔術の射程は、上級のそれより遥かに長い。

効果範囲もより広いうえに、俺の魔術には地球の魔力ブーストが乗っている。

城壁の上からでも、魔族の本陣に問題なく届く。

「原初の火。暗がりを照らすもの。」

三つ時の呼び声。彼方より響く。

方角は東。虚空より——」

「……君たち！

何をしている！

ここは危険だ！ 早く逃げなさい！」

俺が詠唱を開始すると、兵士の一人が俺達に気づき、近づいてきた。

俺達は、正規の装備じゃない。

それが目についたのだろうか。

兵士は俺達をここから逃がそうとしているようだ。

俺は構わず、詠唱を続ける。

「心配には及びません！」

我々は助太刀に参つた者です！」

「助太刀!？」

この状況が分からないのか！

もはや一人二人増えたところで、どうこうできる段階じゃないんだ！

少しでも生き残つて、他の国々に伝えることが大事だ！

軍属でないのなら、早く逃げろ！」

クリスの言葉を、兵士は聞く耳も持たない。

さらに、俺の詠唱を止めようと、手を伸ばしてきた。

「お待ちください！」

その手を、クリスが掴む。

振りほどこうとするが、離せないようだ。

兵士はクリスの力に驚き、目を見開いた。

「もう少しです。」

我々の身を案じてくださったことには感謝します。

ですがどうか、ご覧ください！」

クリスがそう言ったタイミングで、ちょうど詠唱が終わった。

「——エインシエント・ノヴァ」

音もなく放たれた火球。

それはまっすぐに、魔族の群れへと飛んでいき。

意図した通りに着弾。

以前と同様の爆発を、引き起こした。

兵士は、あんぐりと口をあけ。

その光景に、言葉を失っていた。

「……ハジメ、あちらを見ろ！」

ユリヤン殿下だ！」

皆が爆発に気を取られている中で。

クリスが叫ぶ。

そちらを見ると、一際大きい魔族と、その前で倒れている男が見えた。

「……俺には遠くてよくわからんが」

「間違いない！ 殿下の気配だ。」

捕まれ！ 跳ぶぞ！」

クリスは俺とエミリーを両脇に抱え、跳躍する。

城壁の上からのジャンプ。

俺は飛び降り自殺なみの自由落下にめちやくちやビビったが、クリスは難なく着地した。

着地の瞬間に、俺とエミリーを上放つてくれたらしい。

俺達には何の衝撃もなかった。

クリスはそのまま、何事もなかったかのように兵の間を駆け抜ける。

「ユリヤン殿下！」

クリスが叫ぶ。

見ると、確かにユリヤンが倒れていた。

クリスに放してもらい、駆け寄った。

「……ひどい」

エミリーが、思わず声を漏らす。

間近で見ると、その姿は凄惨の一言だった。

着ていたであろう鎧は、残骸が身体に張り付いているだけ。

手足は全て、奇妙な方向に折れ曲がり。

左腕は存在すらしなかった。

生きているのが不思議なくらいだ。

「エミリー、ユリヤンを頼む」

「わかったわ」

エミリーは真剣な顔で頷き、結界魔術を唱えて姿を消した。それを確認し、クリスと辺りを見回す。

まだ、爆発に気を取られている者が大半のようだ。さつき、俯瞰で見た光景を思い出す。

城壁の上から見た、他の魔族よりも大きな個体。

あれはもしかしたら――。

「――ハジメー」

突如、黒い影が目の前に迫った。

それを認識すると同時に、金属音が鼓膜を震わせる。

「ほう、止めるとはな」

声のする方を見ると、魔族がいた。

まさに先ほど見た、一際体の大きな個体だ。

それが、爪を振り下ろした形で静止している。

その爪の暴威を封じているのは、クリス。

俺の目の前に立ち、爪を盾で受けてくれていた。

「——っお前は！」

俺がそいつを認識した直後には、すでに戦いは始まっていた。すさまじい速度で、クリスと魔族が打ち合う。

普段の俺なら見えるはずがない領域だ。

だが、強化魔術のおかげで身体能力が向上している。

そこには、動体視力も含まれる。

おかげで俺にも、ギリギリで何が起こっているのかは把握できた。

状況は、クリスが劣勢だった。

その魔族は、巨体からは考えられないようなスピードで動く。

さらにその攻撃は、一撃必殺の威力を持っている。

間一髪で躲したクリスを、衝撃波で吹き飛ばすような威力だ。

以前エルフの森で、魔族と対峙した。

あの時から研鑽を重ねたクリスの剣。

そこにエミリーの強化魔術が加わっているというのに、それでもこの魔族には歯が立たない。

だが、俺達はパーティーだ。

クリス一人で戦う必要はない。

あの時の経験から、得た力がある。

……今こそ、それを使う時だろう。

「クロックアップ」

そう唱えると。

世界の時が、止まった。

先ほどまでの喧騒は、その一切が聞こえなくなる。

目に映る全てのものは、彫像のように動かない。

目で追うのがギリギリだったクリスと魔族の戦闘も、視界の中で静止している。これが。

あの時の経験から、手に入れた力。

魔族と初めて相対したあの時。

俺は意識を失う直前に、魔術の発動時間を極限まで短縮することに成功した。死の淵で体験したあの感覚。

試行錯誤の末、魔力の補助を使って、あれを再現できるようになったのだ。

ヴィルガイアのものではない、俺のオリジナルの魔術。

当然、俺の身体も動かせない。

指一本、眼球すらも動かせない。

だからこの魔術の肝は、発動した瞬間に敵を視界に収めておくこと。今、敵の姿ははつきりと映っている。

右腕を振り上げ、クリスを爪で貫こうとしている。

対してクリスは、それを見越して盾を前に押し出そうとしている所。くらえ、魔族。

魔族の頭部を目掛けて、中級の火魔術を発動する。

この状態では声も出せないの、発動できるのは無詠唱のみ。

俺が無詠唱で発動できるのは中級までだ。

だが、タイムラグなしで魔術を発動できるのだから、その威力は絶大。魔術を発生させられる位置に敵がいれば、必中なのだから。

クロックアップを解除する。

騒音が鼓膜に響く。

はじかれたように、世界の全てが動きだす。

俺の放った魔術は、意図した通りの位置で発動した。

火柱が上がリ、魔族の姿は見えなくなる。

これを避けられるはずはない。

ズキリと、目の奥に痛みが走る。

クロックアップの反動だ。

魔術が脳を酷使しているのだろう。

何度も使うと、立ってられないほどの痛みが襲ってくる。

「ハジメツ！ 伏せろ！」

痛みを気を取られた俺の耳に、クリスの声が響く。

訳も分からず、その場に伏せた。

その瞬間。

俺の頭上から、激しい風切り音がした。

襲ってきた衝撃波で、俺は轢かれたカエルのように地面に張り付く。

「死ね」

声をした方をかろうじて見ると、魔族が爪を振り上げていた。

やばい。

クロックアップは集中しないと発動できない。

発動できても恐らく防げない。

死ぬ。

ガアン！ と、鈍い音。

クリスが跳躍して、魔族の一撃を盾で受け止めてくれていた。

その間に、俺はその場を離脱して、魔族と距離を取る。

頭の中は疑問符でいっぱいだ。

なぜ、こいつは生きてるんだ。

俺の魔術は、確かにこいつの頭を捉えたはずだ。

冷静に魔族を見ると、確かに被弾した痕跡はあった。

頭部や左上半身に一部、鱗が溶けた部分がある。

だが、それだけだった。

「馬鹿な……」

止まった時の中で発動した魔術。

それが被弾したことは間違いない。

だが、魔術が発動して、その規模を広げる刹那の時間に。

こいつは被弾したことを認識して、驚異的な速さで回避行動をとったのだ。

ズキズキと頭が痛む。

大丈夫だ。落ち着け。

さつきのはわずかに油断があった。

炎と頭痛に気を取られて、やつの視認を怠った。

もう、クリスのそばから俺は離れない。

クリスはきつと、攻撃を凌ぎきる。

こいつが回避不可能な態勢の時に、同じことを行えば、今度は倒せる。

「……………」

戦場に訪れた、一瞬の静寂。

それまで激しく動き回って優位を取ろうとしていたお互いが、相手の出方をうかがって動きを止める。

台風の入ったかのような、静けさが辺りを包んだ。

「……………先刻の爆発。やったのは貴様か？」

不意に、魔族が口を開いた。

それはヒトが発したのかと間違えそうになるほど、流暢な声だった。

しかし、気づけば死の淵にいざなわれているような。

いつの間にか、首にナイフを突きつけられたかのような。

そんな不吉さはらんだ声だ。

「……………」

質問に対して、俺は黙る。

言う必要はない。

あれを使える者が隠れている。

そう思わせるだけで、こいつらに相当な心理的な負荷をかけられるはずだ。答えないことが正解なのは、間違いない。

……だが。

俺にもこいつに、聞かなければならないことがあるのだ。どうしても。

一つだけ、聞かなければならないことが。

しばしの沈黙の後。

俺は意を決して、口を開いた。

「俺の質問に答えろ、魔族。」

そうすればお前の質問にも、答えてやる」

俺がそう言うのと、魔族は口の端をゆがめて嗤った。

「ほう、交換条件というやつか。

いいだろう。

こういうのは、何と呼ぶのだったか。

……そう、冥途の土産に、答えてやろうではないか」

聞けば聞くほど、背筋が凍り付いていくような声だ。

できるだけ心を乱さぬように。

俺は質問を口にした。

「1000年前。

魔法都市ヴィルガイアを滅ぼしたのは。

国王エドワード、王妃マリーを殺したのは。

……お前か？」

魔導書に書いてあった。

魔族の中に、明らかに他とは違う個体がいたと。

その者は他の魔族よりも大きく。

圧倒的な力と速さで、他の魔族を率いていたと。

魔導書の記載ではその魔族を魔の王と呼び、その存在を警戒していた。

そいつが中心となり、いつかヒトを滅ぼそうと攻めてくる可能性も。

魔族の寿命がどれほどかなんて知らない。

だが、1000年生きてるエルフがいるんだ。

同じだけ生きる魔族がいてもおかしくはないだろう。

周りの魔族は、こいつに従っているような仕草を見せている。

前情報がなかったとしても、こいつが他と違うのは見て取れる。

もしこの考えが正しいのなら、今。

両親の仇が。

打ち倒すべき存在が。

俺の目の前に、姿を現していることになる。

固唾を飲んで、返答を待つ。

「ほう。

人間は短命と聞くが、その名を知る者がいようとはな。

……いかにも。

私がヴィルガイアを滅ぼした、魔族の王だ」

それを聞いた瞬間。

ほんの一瞬だけ、何も見えなくなる。

景色が。頭が。胸の内が。

真っ黒に塗りつぶされる。

——こいつが。

こいつが俺の両親を殺した。

こいつが両親の国を滅ぼした。

こいつが俺から、15年間の全てを奪った。

「そうか。

「お前は必ず、俺が殺してやる」

自然と口から言葉が出た。

激情が過ぎ去った後、急に頭が冷えた。

冷静に、目の前の存在を殺すためだけに思考を開始する。

「交換条件だ。」

質問に答えてやる。

ああ、さっきの爆発は、俺がやった。

お前が用意した駒の9割は、消し飛ばしてやった。

ずいぶんと不利になつたな、魔王。

……だが、それができるのは、俺だけだ。

俺を殺すことができれば、まだ勝ち目があるかもな」

こいつはここで殺す。

逃げることも許さない。

俺に、殺意を向けさせる。

「……ほう、それはありがたい。

嘘を言っている様子はないな。

では、望み通りに殺してやろう」

魔王は愉快そうに口角を上げ、牙を見せる。

俺の魔術で戦況が不利になったというのに、まだ余裕があるかのような振る舞い。

……気に入らない。

「何、余裕ぶってるんだ。

お前、俺が言っていることが理解できてないんじゃないか？

俺は用意した駒の9割は消し飛ばしたと言った」

魔王は少しだけ黙り、そして、目を見開く。

「貴様、もしかや……」

「愚鈍なお前にも、分かるように言ってるよ。

援軍は来ないと、言ってるんだ。

連絡がなかったらどう？

おかしいと思わなかったのか？

それは大陸の反対側にやってきていた連中を、俺がまとめて殺してやったからだ」

その場の温度が10度下がったかのような。

心臓に冷水を流し込まれたかのような。

急激な悪寒。

全身が粟立ち、手先が震え、歯が鳴る。

魔王が、その全身から怒りを放っていた。  
修羅の形相で俺を見つめる。

「……貴様、何者だ？」

それが、何を期待しての問いなのかは分からない。  
だが、俺の答えは決まっている。

「俺の名は、ハジメ||レオナルド||ヴィルガイア。

お前らに滅ぼされた、ヴィルガイア王家の末裔だ」

——戦いが、始まる。

## 戦争④

「ガアアアアアアアアアアッ!!」

俺の言葉が逆鱗に触れたのか。

魔王が、身の毛がよだつような叫び声をあげた。

圧倒的な、怒気をはらんだ音。

それに反応したのか、周囲の魔族も全て、魔王と共に襲い掛かってきた。

「クロックアップ」

前方はクリスに任せ。

後ろを振り返り、唱える。

止まった時の中で、状況を確認する。

背後から来ていた者の中で、至近距離で襲ってくる魔族は2体。

そいつらを結んだ直線に沿って、巨大な風の刃を用意しておく。

時は動き出し、突如現れた魔術に対応できず、狙った魔族が死んでいく。

しかしすぐさま、次のやつがやってくる。

クリスも前方への対応で手一杯のようだ。

魔族の数が多い。

ワンミスが命取りになる。

「クロックアップ」

頭痛がひどいが、使わないと打ち漏れが出る危険がある。

だがもう、あまり多くは発動できない。

頭痛が限界を超えるとどうなるか、俺にも分からない。

再度、向かってきているやつらに対して魔術で対応する。

フレイムピラーを、最大出力で設置しておく。

向かってきているやつらを含め、多くの魔族を狩れるはずだ。

クロックアップ中も、背後の様子は分からない。

止まった世界では、振り向くことはおろか、眼球を動かすことすらできないからだ。

クロックアップの効果は切れ。

状況確認のため、クリスの方を振り向いた。

後方から、設置した魔術フレイムピラーによる爆音が聞こえる。

そして振り向いた俺の視界に、魔王が映った。

こちらに向かってくる。

馬鹿な。

「クロックアップ！」

再度、世界が止まる。

俺は近づかれたらおしまいだ。

どうしても、使用頻度が多くなる。

止まった時の中、クリスを探す。

……いた！

視界の端で、倒れている。

そこには赤い色が混じっている。

まさか、魔王にやられたのか。

治癒魔術をかけなければ。

しかし、すぐそこに魔王が迫ってきている。

他の魔族も俺に向かってきている。

クロックアップ中に撃てる魔術は一つだけだ。

そして治癒魔術は、近づかないと発動できない。

——くそ、どうする。

とにかく魔王だ。

クリスなしで近づかれたら、勝算はゼロだ。

他の魔族なら、後でもまだ何とかなる可能性がある。

魔王に向けて、フレイムピラーを放つ。

しかし今度は直接当てずに、魔王の少しだけ前に設置する。

魔王とて、慣性からは逃げられないはずだ。

今の体勢からは、前に進むことは間違いない。

さつきは当たった瞬間に認識されて避けられた。

これならどうだ。

時が動きだす。

俺の目の前で、大きな火柱が上がる。

魔王はそれに飲み込まれ、見えなくなる。

「ぐうっー」

ひどい頭痛がして、鼻から血が出てきた。

それを袖で乱暴にぬぐい、視界を確保しようと一歩下がった。

その時。

爆炎の中から、魔王が現れた。

両腕を交差して。

眼球や鼻、口を守っている。

一切のタイムロスがない。

完全な直撃だけを避け、もろい部分を守りながら、ほぼ一直線に俺の方へ向かってきたようだ。

多くの鱗が溶け落ちているが、活動に支障はないらしい。

くそっ！

切れる手札がない。

魔術を撃つても躲されるだろう。

クロックアツプも唱える暇がない。

クリスは倒れている。

何か打開策はないのか。

目前に魔王が迫る。

畜生、ここまでなのか。

俺の復讐は。

俺の人生は。

結局、こんなもんなのか。

顔をゆがめる俺の横を、何者かが走り抜けた。

雷光のような速さで俺の目の前に立ちはだかり、魔王の凶爪を剣で受ける。

爪を白刃に滑らせ、懐に潜り込み。

移動してきた速度をそのままに、そいつは魔王に当て身を食らわせた。体格で3倍は差があるかという魔王が、衝撃で後ろへ飛ぶ。

しかし魔王はすぐに体勢を立て直し、そいつを睨んだ。

「貴様っ……!」

「久しぶりだな、ハジメ」

そいつは、ユリヤンだった。

ユリヤンが、俺の目の前に立っていた。

親友が、助けに来てくれた。

その頼もしさに、不覚にも口元が緩んだ。

「ユリヤン! 助かった」

「俺が生きてるのはお前らのおかげだ。

お互い様だ」

魔王を睨み返しながら、ユリヤンが言う。

その間に、またも多数の魔族がこちらへと向かってきた。

しかし。

「——皆の者! 聞け!

先刻の爆発は、このハジメが起こしたものだ！

この男は、ヒトの希望だ！

命に代えても守れ！」

ユリヤンが叫ぶと。

「オオオオオオオオオ！」

周囲から、腹の底まで震わせるような雄たけびが木霊した。気づけば、辺りに味方が増えていた。

俺を守ってくれている。

たくさんの兵士が、周囲の魔族と戦ってくれている。

「ここは引き受ける！」

クリスを治せ！」

「がってん！」

「させぬ！」

クリスの元へと走る俺を。

魔王が阻もうと、右腕を振り上げる。

が、その腕は振り下ろせない。

背後から襲ってきた一太刀を躲すため、引いたからだ。

「さっきの借りを返すぞ、魔王。

10倍にしてな」

「この死にぞこないが……!」

すぐに、背後からすさまじい剣戟の音が聞こえてきた。

振り返りそうになるが、こらえてクリスのもとへと走る。

倒れているクリスの肩から、ドクドクと血が流れているのが見えた。

「クリス! 大丈夫か!」

返事がない。

まさか、と焦ったが、呼吸と脈は確認できた。

だが、右の肩口から胸郭付近まで至る、かなり深い傷がある。

盾にも、同じところに破損がある。

おそらく袈裟切りの軌道の攻撃を盾で防いだものの、威力を殺せずに負傷してしまっただろう。

「ハイヒール」

中級治癒魔術。

俺が使える治癒魔術は、中級までだ。

まあ、この場はそれで十分だろう。

エメラルドグリーンに光に包まれ、クリスの傷が修復される。肩をゆすりながら、呼びかける。

「クリスッ！ クリスッ！ 起きてくれ！」

「……ん、んう。私は……ハッ！」

ガバッと、クリスが起き上がった。

「ハジメ、今は!？」

私はどれくらい気を失っていた!？」

「よかった。無事そうだな。」

大丈夫だ。

まだ、ほんの少ししか経ってない」

クリスは辺りを素早く見回し、状況を確認した。

「私はどうしたらいい?？」

「魔王を倒そう。協力してくれ」

「わかった」

クリスは素早く剣と盾を拾って、走り出した。

俺も後を追う。

「……少しだけ、夢を見ていた」

「夢？」

走りながら、クリスがしゃべり始めた。

「キマイラを倒した時の夢だ。

あの時は、本当にハジメに助けられた。

——ようやく、私が助ける番だな！」

そう言つて、クリスは速度を上げ、魔王へと向かつていった。

その後ろ姿を見て、不意に。

脳裏に、地球で過ごした15年間が去来する。

ガキ大将にいじめられていた時。

孤児院の皆から、仲間外れにされていた時。

サッカー部のやつらとの友情が、嘘っぱちだと知った時。

それらが走馬灯のように、胸の内に巡る。

そして気づいた。

……そうか。

俺はいつも、誰かに助けてほしかったんだ。

誰かにそばにいてほしかった。

自分だけは味方だと、そう言つてほしかったんだ。

そんなものは甘えだと、強がっていた。

誰も助けてくれないのは、自分に価値がないからだと思っていた。クリスとエミリーに出会って。

彼女達が、俺の味方だと言ってくれても。

どれだけ俺のために、動いてくれても。

好きだと言ってくれてさえ、なお。

俺の心の芯には、かたくなに、それを拒絶するやつがいた。

今、その正体がわかった。

そいつは、過去の自分だ。

いじめられて、仲間外れにされて、裏切られたあの時の自分。

つまり、俺は彼女達に対して、こう思っていたんだ。

「でもお前たちは、あの時俺を助けてくれなかったじゃないか」と。

なんて馬鹿馬鹿しい。

なんて幼稚で、愚かで、独りよがりな感情。

でも俺はそんなくだらしない思いを、ずっと抱えていた。

頭では間違っていると分かってても、心はそれを主張し続けていた。

だが、今。

クリスの言葉で、行動で。

かたくなだった部分が消え去っていくのを感じる。  
いじめられた。

仲間外れにされた。

裏切られた。

その原因が、目の前にいる。

そいつは凶悪で、強くて、恐ろしくて、一人じゃ勝てそうにない。

でも、そいつを倒せたら、あの時の自分も報われる気がする。

そんな俺の、独りよがりな復讐のために。

そいつの恐ろしさを目の当たりにしてもなお。

身体に深い傷を負ってもなお。

クリスは立ち向かってくれた。

挑んでくれた。

勝てる保証などない戦いに、その身を晒してくれた。

戦場に来る前、彼女は家族を守るためだと言っていた。

もしかしたら、そのための行動なのかもしれない。

だが、俺は俺のために彼女が行動していると、そう信じられた。

また裏切られるぞと。

心の奥で警鐘を鳴らす存在が、いなくなつた。

クリスも、エミリーも。

あの眼鏡の女の子とは、違うのだと。

ようやく、心の底から信じられた。

今、俺は俺の全てで、彼女達を信じられる。

いつになく、身体を軽く感じた。

今なら、なんだってできそうな気がする。

「倒す」

決意を込めて口にする。

世界のヒト達を守る。

ヴィルガイアの無念を晴らす。

両親の仇を討つ。

そして、俺の15年間を、取り戻す。

そうすることで、初めて。

俺は、俺の人生を始められる。

## 戦争⑤

俺が覚悟を決めて、クリスの背を追って走ると。

ユリヤンと魔王が戦っていた。

目まぐるしく位置が入れ替わる、激しい攻防。

どちらかがその武器を振るう度に、衝撃波が周囲の砂を散らす。

互角に渡り合っているように見えるが、押しているのは魔王の方だ。

よくよく見ると、ユリヤンにはいくつかの傷がある。

魔王が3回攻撃するのを防いで、ようやく1度剣を振れるというバランス。

「殿下！」

しかしそこに、クリスが加わった。

ユリヤンの攻撃が空を切った後。

魔王が攻勢に出るそのタイミングで、クリスが攻撃を仕掛ける。

魔王はクリスへの対処を迫られ、ユリヤンへの攻撃はできなくなる。

そしてそこに、俺の魔術も加わる。

残念ながら、目の前の攻防のスピードに対して、俺の魔術は遅い。

たしかにクロックアップを使えば、ノータイムで魔術を発生できる。しかしそんな距離まで近づけば、二人の邪魔をしてしまうだろう。

このレベルの戦闘にはついていけない。

今は自分の近くに魔術を発生させ、それを飛ばすという方法をとるしかない。

魔術師というのは、小回りの利かない大砲みたいなものだ。

対個体ではなく、対軍勢に対して運用するのが正しい。

城壁の上に並べるのは、理にかなってると思う。

戦闘を目で追うのが精いっぱい。

エミリーの魔術で身体能力を強化してもなお、その程度だ。

しかし、そう悲観することはないはずだ。

やりようはある。

どんなに速い攻防だろうと、力と力がぶつかり合えば、お互いの動きが止まる。

魔王が躲した時ではなく、受けた時。

そこを狙って、範囲制御した中級魔術を放つ。

被弾はしないものの。

魔術を躲すために、魔王は体勢を変えた。

効果が目に見えてあるわけではないが、ないよりはマシなはずだ。

ボクサーのボディブローのように。

ひたすら続けければ、何かのチャンスを生み出すかもしれない。

ジリジリとした時間が流れる。

二人が攻撃を受ける度にハラハラするが、紙一重で全て対応できている。

逆に魔王も、二人の攻撃を躲すのは紙一重だ。

パワーバランスは拮抗していた。

しかし。

少しずつ、状況が変化し始めた。

ユリヤンとクリスの動きが、ほんのわずかずつ、よくなってきた。

おそらく、連携に慣れてきたことが原因だろう。

この二人で初めての共闘だ。

もしかしたら二人とも、他人と戦うという経験自体、少なかったかもしれない。

もちろん、ユリヤンもクリスも、達人と言つていいレベルの剣士だ。

自分の攻撃で、味方を傷つけるようなへまはしない。

しかし味方の行動がわからないと、どうしてもワンテンポ遅れてしまう。

そのズレが。

戦闘が長引くにつれ、少しずつ解消されていった。

お互いのクセを理解し始め、阿吽の呼吸を形成しつつある。

「クリス！」

「了解！」

二人は、アイコンタクトで意思疎通して。

左右から同時に、魔王を攻撃した。

魔王は左右の爪で、それぞれの剣撃を受ける。

俺はすかさず魔術を発動。

ユリヤンとクリスは散開。

魔王はかがんでそれを避ける。

「——羽虫どもが！」

魔王が叫び、下がったクリスへと詰め寄る。

あつという間に距離が縮まり、魔王がクリスを襲う。

クリスは盾で受け流すが、やや体勢を崩した。

すかさず魔王が追撃。

しかしその振り上げた爪は、ユリヤンの剣によって防がれる。

ユリヤンは、攻撃を剣で受け流し、反撃に転じる。

魔王はそれを、かがんで躲す。

しかしそこには、クリスの攻撃が待ち構えていた。

魔王は体勢が崩れている。

「もらった!」

横一文字に難いだクリスの攻撃は、しかし虚しく空を切った。

「何?」

目の前の光景に、俺は思わず声を上げた。

「ゴミどもが。私に逆らったことを、後悔させてやろう」

魔王は、遙か上空に跳躍していた。

翼を広げ、ホバリングするように宙に浮いている。

……いや!

これはチャンスだ。

予想外の展開に驚いたが。

冷静に考えれば、こちらに有利な行動のはずだ。

こいつらは跳躍はできても、飛翔はできない。

現に魔王も、少しづつ高度が落ちてきている。

いくら翼で軌道を変えられるとはいえ、空中での自由度は高くないはずだ。

それならば。

ユリヤンとクリスの剣が届く所までやつが落ちてきたら、仕留められる。二人を見ると、油断なく剣を構えている。

彼らも同じ考えのようだ。

だが、あの魔王の態度はなんなのか。

やつだつて、空中が不利なことくらいは分かっているはず。

なのに、なぜあんなに余裕がある。

「――魔の根源。

其は暗黒。

靉黀たる亡者の御手」

魔王が両手を広げ、何かをつぶやき始めた。

同時に膨大な魔力が、この場から消えるのを感じる。

「まさか、これは！」

ユリヤンが叫ぶ。

「星の輝き。

彼の者のそばで誓いたもう」

「――クロックアップ！」

時が止まる。

だが、魔王の位置は射程範囲の外だ。

あそこにタイムラグなしで魔術を置くことはできない。  
風魔術を設置。

時が動き出す。

発動した風魔術は魔王に向かって飛んでいく。

しかし、容易に避けられてしまった。

これではダメだ。

あそこまで届く攻撃手段は、一つしかない。

聖級魔術しか。

「原初の火。暗がりを照らすもの。

三つ時の——」

「——其の怒りを以て、ここに顕現せよ」

圧倒的なエネルギーが、魔王の周囲に満ちるのを感じる。

俺より早く、魔王が詠唱を終えてしまった。

ダメだ。間に合わない。

いや、信じる。

俺は信じる。

過去を払拭した今なら、信じられる。  
たった一つの可能性。

それを信じて、俺は詠唱を続けるだけだ。

「その翼は燃え炭になろうとも——」

「シヤドウスパーク」

魔王が唱えた瞬間。

暗雲が空に現れ、幾多の雷が地上に向かって降り注いだ。

視界が真っ白になる。

だが、痛みはない。

苦しきもない。

そして見渡せばそこに、ユリヤンも、クリスもいる。

……これはやはり。

「なんとか、間に合ったわね」

「エミリー！」

気づけば、エミリーがすぐ後ろに立っていた。

杖を掲げながら、疲れた顔をして。

クリスが駆け寄る。

「これは、どういうことなんだ？」

やつが魔術を放ってきて、わたしはもうダメかと……」

「私が結界魔術を使ったの。」

もう、魔力はすっからかんよ」

俺たちの周囲には、白く光る、大きなドーム状のヴェールが張られていた。

「もう維持もできないから、しつかり決めてね、ハジメ」

詠唱しながら、エミリーに向かって頷く。

「その志は遠く、遠く。」

約束の地にて再び見えん」

最後の一小節。

それを口にした瞬間、ヴェールが弾ける。

土煙が晴れて、魔王の姿が現れる。

「馬鹿な！」

あれを受けて、生きているはずが……！」

「エインシエント・ノヴァ」

静かに、杖から光球を放つ。

それは、土煙と雷雲を切り裂きながら。

上空の魔王へと、吸い込まれるように飛んでいく。  
多少翼で軌道を変えても関係ない。

威力も範囲も、今までのものとは別次元だ。

俺は人生で初めて、勝ち誇って。

両親の仇に、告げる。

「1000年越しの仇討ちだ。

……滅べ、魔王」

「この私がっ！」

こんな、虫けらどもにい！」

光球は魔王の付近で炸裂し。

戦場を覆う、炎の花が咲いた。

それを見上げた誰もが。

戦いの終わりを、悟ったのだった。

## それから

あれから、しばらくの時が流れた。

魔族との戦いは、勝利に終わった。

もともと、俺の魔術で本陣を吹き飛ばした後は、数的有利な状況だった。

加えて、魔王が倒されたのを見た魔族の士気は落ち。

まもなく逃亡を始めた。

城壁を登って西の大陸に入り込んだ魔族も少数いたが、その全てが掃討された。死者32万人超という、途方もない犠牲の上だが。

なんとか、ヒトの領土を守ることができた。

情報が各国に共有されると、大陸全土に激震が走った。

知らぬ間に、ヒトは滅亡の危機を迎えていたのだ。

それを退けた戦線の者達は、英雄として扱われ。

遺族には、手厚い特別年金が配布された。

戦後の処理が一段落した後。

大陸全土の首脳を集めた国際会議が、アバロンで行われた。なぜ戦線から遠いアバロンなのか。

それは、俺達のせいだ。

俺とユリヤン、クリス、エミリーは、魔王を倒した大英雄として扱われた。

俺達の出身がアルバーナだったので、会議はその首都アバロンで開催されたのだ。

会議の場で、論功行賞が行われた。

中でも俺の功績は群を抜いて高く評価され、勲章だの褒章だのを数えきれないほどもらった。

売れば一生遊んでくらせるほどの量だ。

さらにアルバーナ王から、爵位と領地を与えられと言われたので。

思うところがあり、俺はサンドラ村近辺を希望し、その領主となった。

階級は子爵。

一応俺も、貴族の仲間入りだ。

地位に興味があつたわけではない。

ヴィルガイアの跡地を綺麗にしたいと思つたのだ。

できればあそこに、またかつてのような街並みを作り上げたい。

それが俺の、今後の当面の目標になった。

……さて、他のやつらについても話しておこう。

まずは、ユリヤン。

戦での功績が認められ、王室内での地位がうなぎ登りらしい。

他の王子よりも他国への名の通りが圧倒的にいいので、次期国王にユリヤンを、という声も挙がっているという。

本人は今一つやる気はないようだが、とりあえず戦線からは離れ、アバロンで王族としての暮らしに戻っている。

次は、クリス。

クリスはアバロンの近衛騎士団に、副団長待遇で迎えられることになった。

王室からの強い勧誘に、根負けしたような形だ。

それでいいのか？ と聞いたら。

「まあ、やりたいことは全て終わったからな」と、笑っていた。

最後に、エミリー。

エミリーは、勘当されたグレンデル家に、再度迎えられる形となった。

エミリーの名は、魔王を倒した者として大陸全土に知られており、置いておくだけで領の益となる。

そのように、領主が判断した結果だという。

しかし当然ながら、エミリーは条件を出した。

一つは、結婚相手を自分で決めること。

もう一つが、魔術協会との確執を埋める努力をすることだ。

少し悶着があつたが、それらは受け入れられ。

エミリーはまた、エミリーⅡフォンⅡグレンデルとして生きていくことになつた。

まあガドリノ伯爵は出帆した愛娘が気になつて、呼び戻す口実を探していたらしいが。

いいところに収まつたのではないだろうか。

……とまあ、そんな感じだ。

いろいろなことが、少し落ち着いて。

俺は今、ヴィルガイアの跡地にいる。

これまでのことを、両親に報告しにきたのだ。

土魔術で作つた墓標に、膝をつき、手を合わせる。

(父さん、母さん。

あなたたちを殺した魔族を、討ち果たすことができました。

俺はこれから、このヴィルガイアの街を再建するつもりです。

——どうか、安らかに眠ってください)

瞼の裏に、両親の笑顔が浮かんだような気がした。

人生の中の、大きな扉が閉じていくのを感じる。

ここに来るまでに、本当にいろいろあった。

つらいことや、悲しいこと。

楽しかったこと。うれしかったこと。

その全てが、一つの物語として、今終わりを迎えたのだ。

しばらく両親に祈った後、立ち上がる。

「……さて、と」

俺は、土に転移魔法陣を描いた。

「よし」

跳び乗ると、魔法陣が輝き始める。

景色が、瞬時に変化した。

目に飛び込んできたのは、一面の花々。

ここは、アルバーナのはずれにある、花畑だ。

「……ふう」

ドキドキと、心臓が高鳴る。

ここに、俺が選んだ人が待っている。

彼女に似合うだろうと思ひ、ここを待ち合わせ場所にした。

ポケットの中には、指輪が入っている。

彼女は、なんと言うだろうか。

喜んでくれるだろうか。

俺は、彼女の姿を見つけて、駆けだした。

——さあ。

ここからまた、新たな物語を始めよう。

了